

二日目提督がハードモード鎮守府に着任しました

ベリーナイスメル/靴下香

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モニタに吸い込まれる式異世界転移したら艦これ世界でした。

ゲームと違ってハードモードな鎮守府で提督として頑張るお話。

俺tuee系ハーレム物書こうとしたらカップ麺出来るまでに飽きたので少年漫画風味にしてみました。

艦これ戦記小説()として頑張りたい、頑張りがくない？

目次

プロローグ

艦これ世界に着任しました

1

これくしよんは出来ないのでハーレム目指します

8

鎮守府正面海域攻略編

ワケあり初期艦が着任したようです

14

提督ですが鎮守府の環境が最悪です

20

艦娘と体育会系してたら危ない雰囲気です

27

援軍はありませんが出撃するそうです

33

思い通りには中々いかないようです

40

提督ですが出撃するようです

48

ひゃっはー！戦場は地獄のようです

55

丸く収まったけどまだまだ大変なようです

62

相変わらず着任する艦娘はワケありのようです

70

相変わらずの夕立に龍田はタジタジのようです

79

天龍様は何か思うところがあるようです

87

天龍様は訓練に参加するようです

94

提督は龍田の事を煽るようです

103

龍田が提督にストレス発散するようです

113

正面海域突破のため出撃するようです

120

やっぱり戦場は地獄のようです

127

海域突破に大破は付き物のようです

137

やっぱりまだまだ問題は山積みของようです

145

一章之閑話

夕立のぽいぽいdays

①

151

天龍様は使われない ① あらあら龍田さん ①

時雨日記 ①

鎮守府海域突破編

提督は現状を少し把握したようです

提督が怒り心頭ようです

他の鎮守府提督はひどい有様のようです

提督が見学に来たようです

提督が遂に我慢できなくなったようです

時雨と古鷹が想いをぶつけ合うようです

おっさんはやっぱり見苦しいようです

ケジメは不格好なりについたようです

騒動は収束したようです

那珂ちゃんは忙しいようです

提督は鎮守府内演習をするようです

提督は演習評価をするようです

大淀が出撃するようです

緊急事態が発生したようです

それぞれの戦いがあるようです

艦隊が帰投したようです

大淀が提督とお話するようです

戦闘を振り返るようです

司令長官も大変なようです

二章之閑話

夕立のぽいぽい days ②

鳳翔さんの花嫁修業 ①

158

165

172

179

188

196

203

213

222

230

240

250

262

270

282

290

301

314

323

332

341

349

360

六駆の午後 ①

天龍様は使われたい ②

大淀のある一日 ① 古鷹さんは伝えたい ①

あらあら龍田さん ②

加古に乾杯 ① 那珂ちゃん頑張りますっ ①

時雨日記 ②

南一号作戦編

鎮守府が形作られてきたようです

鎮守府に金剛姉妹が来たようです

金剛姉妹と演習するようです

提督は応えないようです

演習映像が大本営に届いたようです

金剛姉妹が墓場鎮守府で過ごすようです

提督が大佐と会ったようです

作戦内容を知ったようです

作戦決行前日のようです ①

作戦決行前日のようです ②

作戦決行前日のようです ③

南一号作戦が始まったようです

空母棲鬼と戦うようです ①

第三艦隊が出撃するようです

沈まぬ意思があるようです

空母棲鬼と戦うようです ②

提督が戦うようです

金剛が戦うようです

370

378

385

396

404

414

425

436

447

458

467

474

487

498

507

517

531

541

550

561

571

582

593

604

南一号作戦が終わったようです

618

閑章

約束していた一戦のようです

627

長官が語るようです

640

鎮守府近海対潜哨戒のようです

648

提督は忙しいようです

656

第一艦隊が派遣されたようです

665

夕立のぽいぽいdays ③

674

元横須賀艦娘がアップし始めたようです

683

提督とようやく挨拶出来たようです

693

六駆の午後 ②

703

提督が鎮守府に帰ってきたようです

712

那珂ちゃん頑張りますっ ② 大淀のある一日 ②

721

鳳翔さんの花嫁修業 ②

732

加古に乾杯 ②

742

教導任務が終わったようです

753

第一艦隊の任務が終わったようです

764

第一艦隊が帰投したようです

773

選抜演習が始まったようです

782

天覧演習初日のようです

794

天覧演習二日目のようです

804

天覧演習最終日のようです

820

最後之閑話

夕立

829

天龍

838

龍田

時雨

大規模作戦編

大規模作戦発令のようです

無明と光明のようです

作戦通達のようです

拉致された提督のようです

提督が決断するようです

AL作戦第一段階のようです

霞が突撃するようです

AL作戦第二段階のようです

提督奪還のようです

各人が抱える思いのようです

提督が目覚めたようです

不思議な艦このようです

とある一本勝負のようです

MI作戦は極めて順調なようです

終わらない戦いのようです

家族を知るようです

決着の時はもうすぐのようです

提督が選択したようです

二周目提督がハードモード鎮守府に着任しました

ハーレムはじまるよ

エピソード

あなただけの艦隊これくしょん

848

857

866

875

885

898

909

919

931

940

949

960

969

979

989

998

1007

1016

1024

1034

1043

1056

1068

プロローグ

艦これ世界に着任しました

「はえー……でっかい」

車の窓から遠目に見えるのはえらくでかい建物。

なんつーか、大学みたいな所だな、行ったことねえけど。

「なあ、運転手さん。あそこに行くのか？」

「はっ！ その通りです！ もうすぐに到着いたしますので、もうしばしお待ち下さい！」

まって、運転しながら敬礼しないで。安全運転で頼む。

つか、乗った時もそうだけどき。何でこんなに畏まられてんの？

俺、神なの？

いやいやいや、神じゃねえけどき。

そう、あれだよあれ。

『提督』ってこんなに偉いもんなの？

正直戸惑っていた。

軍つてのがどういうもんなのか現代っ子バリバリの俺にはよくわからん。だけどどこまでされるようなもんじゃないってのはわかる。

そもそもここ何処さ。

家から大体一時間位車に乗ってるけどき、車で一時間の場所にあんなバカでかい建物なんて見たことねえぞ。

もしかして俺が絶賛ヒキニートしてる間に開発が？

んなわけあるか。あつてもここまで変わんねえよ。

だけど間違いなく俺は俺の家からここまで連れられたし……念の為つつつ俺の隣にやったら緊張して座ってる女の人。

俺が生涯をかけて愛した艦隊これくしょん、大淀のコスプレをしてる女の人に聞いた住所は間違いなく知ってるもんだったしな。

てかこのレイヤーさんすげえな。大淀にそっくり。画面の向こうから来ましたって言われても思わず頷いてしまいそうなレベル。いいじゃない。

……見惚れてる場合じゃない。

そう、提督だ、提督。

一体何の提督だよ。つか提督って何だよ哲学かよ。

俺は暁の水平線に勝利を刻んだ余韻に浸っていたはずだ。

不動のランキング一位は伊達じゃない。遂に実装されたというか
されてしまったと言うか。最終海域、そして最終イベント。それをク
リアしたはずだ。

思い出せ、クリアした時。

——新しい水平線に勝利を刻みますか？

うん、そんなメッセージがデスクトップ画面に出たんだ。隠しイベ
ントを感じさせる選択肢に迷うこと無くはいをクリックして……そ
れから。

そうだ、そうしたらモニターからめちやくちや眩しい光が溢れて。
収まったと思っただらやっぱ俺は相変わらずパソコンの目の前に居
て。

なんだパソコンぶつ壊れたか？　なんて思ってるところに家の
チャイムが鳴ったんだ。

「ど、どうされましたか？」

「ん？　ああ、いや。何でも無いんだけど……えつと、お姉さん？」

「お、おねえ……。い、いえ！　私のことは大淀とお呼びくださいっ
！」

ええ……。？　なりきりレイヤーか。

数々の艦これ同人に手を出し続けた俺だが、レイヤー文化は全くわ
からん。これが普通なのか？

まあ、そういうルールがあるにせよないにせよ、そう名乗られた以
上合わせるほうが無難か。

そう、チャイムに対応した先にこの人がいた。

「ああ、うん。大淀さん」

「はっー！」

いや、敬礼はいいから。俺、それにどうかえしたらいいかわかん
ねえから。

「俺を拉致……もとい、連れてきたのは提督の素質があるからって
言ってたけど。提督って、俺なにをするの？」

「はっ！ 講習、授与式をまだ終えておりませんので、正確にはまだ提
督では無いのですが、歴代最高の提督適性値を叩き出されましたあな
たには、我々艦娘を率いて海を守る提督として鎮守府に着任頂きま
す。申し訳ありませんが、これに拒否権はありません。本来であれば
違うのですが……優秀であろう人材を放っておく余裕は軍には……
いえ、人類にはないのです」

……は？

いやいや、何いつてんのさ大淀カッコカリさん。冗談はよしこちや
んだぜ？ ははーん実は大淀カッコカリさんはよしこちゃんか。

「あー、うん。わかるよ、わかる。そうだよな、現実になれば素敵だよ
な？ でもさ、悲しいけど戦わなくちゃ、現実と」

「あ、あの……何故私の頭を撫でながら憐れみの籠もった目を……？」
俺だって、俺だって艦娘がいつモニターの向こう側からやってこ
ねえかなんて何度も思ったださ。俺が行くでも可。

ぱりーん！ テートク！ バアアアニング、ラアアアブ！

みたいなもんでさ、艦娘ハーレム作りたい。作りたくない？ 偉い
人は言いました。一人を選べないのなら、皆選べばいいじゃない。

まあ俺のハーレム願望はともあれほら、そんな顔赤くしてないで
さ。認めよう？ 辛いのはわかる。俺も辛かった。認めること、それ
が大人への第一歩だ。

「間もなく到着致します」

「あ、はい。では、提督……」

「え、あ、うん」

車が音もなく停止した。それと同時に大淀カッコカリさんはすば
やく車から降りて、俺が座っている側のドアを開けてくれた。

車を降りると。

「お待ちしておりましたっ！」

大きな門、その両端にこれぞ軍人と言わんばかりの綺麗な姿勢で敬
礼を向けてくる人。そして。

「大、本営……う？」

近くで見ればよりでかい建物。その入口に大本営と威嚇するように達筆で書かれた看板が俺を迎えてくれた。

リノリウム床に二人分の足音を響かせて数分。

前を歩く大淀カツコカリさんは姿勢正しく、キビキビと俺を先導してくれている。

時折すれ違う軍服姿の人達に敬礼をされたが、相変わらずどうかえしたらいいのかわからないからとりあえず頭を下げておいた。

いやまあここまでされたら流石にわかるよ。

ドツキリってことくらいは。

そもそも俺みたいなのヒキニートにドツキリ仕掛ける意味やら理由なんて無いのは置いておくにしても、だ。

じゃあ何だつて話で。

映画の撮影とか？ いや、エキストラ出演依頼なんて受けたことねえ。

逮捕されたとか？ いやいや、法に触れることなんてしてねえし、ここまであんなVIP待遇受けるのなんておかしいだろう。

答えの出ない、思いあたりの無いことをぐるぐると頭で巡らせている間に、気づけば一室の前に辿り着いた。

「お疲れ様でした。こちらが司令長官室です」

「……大淀さん」

「はい？ どうかありませんでしたか？」

「ドツキリ？」

「はい？」

そんな事を言ってみれば頭の上にクエスチョンマークを浮かべながら首を傾げる大淀カツコカリさん。いや、ただの最終確認だ。

「何でも無い。それで、俺はなんでここに連れてこられたのかな？」

「はい。それは中におられる司令長官よりお話頂けるかと思えます……では、どうぞ」

司令長官？

困惑する俺をよそに、ガチャリと音を立ててドアノブが回される。「やあ、足労かけたね。どうか、そこに座って楽にしてほしい」

逆光でよく見えなかったが、中に居た中年のおっさんは微かに笑った気がした。

目が慣れてきてみれば、そのおっさんは至極真面目な顔をしながら、ソファアームに座るよう促してくる。

未だになんだかよくわからんが、とりあえず座るところ。

「緊張しなくていいよ。何も取って食おうと……いや、そうだね。僕は今から君を国の為に捧げようとしている、なら食べようとしているという表現はあながち間違いないのかも知れない」

何やら急に顎に手をあててブツブツとつぶやき始めるおっさん。実に不気味だ。

ここは司令長官室って言うてたか。てことはこのおっさんが司令長官とかいう肩書の人なんだろうな。

ぶっちゃけそれがどれくらい偉い人なのかさっぱりだが。

「司令長官殿」

「ん？ ああ、大淀君。すまないね、ありがとう」

大淀カツコカリさんに声をかけられてようやく我に返った様子のおっさん。うむ、呼んでおきながら放置は勘弁してほしいぞ。

「それで……君は何処まで知っているのかな？」

ギシリとソファアームを軋ませながら座り、俺に水を向けて来る。何処までつつつても何もわからんのだがそこんことどうよ。

「ええと、なんでも俺は提督になるとかなんとか？」

とりあえず、それだけはわかる。わかると言うかそれしか言われてないし、何を聞けば良いかわからなかった。

「うん、そうだね。君に提督素養が認められた、だからここにこうして呼ばれた。平たく言えば徴用だね」

徴用……。

え？ なにそれ怖い。徴用って無理やり働かされることだろ？ 働きたくないでゴザル。ドツキリ大成功看板マダー？

「君も知ってるの通り、我が国……いや、この世界は深海棲艦によって大

きな危機を迎えている。数多の提督達は志半ばに倒れ、海へと、大地へと散った。そして今や提督の素質を持つものは貴重な存在となつてしまった。故に遺憾ながらもこうして徴用という手段で君をここに呼び寄せてしまったことは申し訳なく思う」

シンカイセイカン……え？ 深海棲艦？ 艦これの？ ほっぽちゃん？

つか大地に散ったつておい。え、何？ 提督死んじやったの？ しかも貴重な存在なの？

「できる限りの援助……をしたい所だがもはやそれも厳しい。だが、歴代最高の提督適性値を持つ君なら……現状を打破してくれると期待している。重ねて申し訳ないが、拒否権は無い」

キョヒケンオイテケ！ じゃなくて。いやまて、待ってくれ。

おれは、こんらん、している。

適性値だけで現状打破を期待とかバカなの？ 切羽詰まってるの

？

「そ、それでも……拒否する、と言つたら？」

混乱しながらも、ノーと言つてみた場合が気になってついつい聞いてしまう。

「……大淀」

「はっ！」

司令長官の隣一步後ろに控えていた大淀カッコカリさんが、一瞬淡い光を発し……。

「この14cm単装砲がここで火を吹くことになる」

は……？

いや、なんかおっさんがキメ顔で言ってるけどそんな事はどうでもいい。いい。

これつてよ。

「艦装……」

「ほう？ 流石最高適性値、よく知ってるね。……僕としてもここを血の海に沈めたくはない。どうかな？ 引き受けて、くれないかい？」

うるさい、気が散る。一瞬の油断が命取り。

艦装が出せるってことは、艦装が出せるってことだよな？ ああ違う、要するに。

「大淀カツコカリさんじゃなくて……大淀カツコガチさん……？」

「は、はい？」

ドツキリじゃない？

うっそまじかよ。

「うっそまじかよ」

二回言ってしまった。大事なことだ、仕方ない。

大淀、艦娘、艦装、提督。

それらが意味するものは一つ。

「俺、提督になれるんだ……」

パソコンのモニター越しじゃない。手にマウスを持つ必要もない。俺は。

どうやら新しい水平線に勝利を刻みに来たようだ。

これくしよんは出来ないのでハーレム目指します

流石に銃と言うか、兵器を突きつけられてノーとは言えない日本人。それが俺。

つかそんな状況で誰が断れるんだよ。バカなの？ 家族でも人質に取られてるの？ 俺に家族は居ねえから無駄だな！ はっはっは！

……。

あーまあそんな風に無理矢理テンション上げてごまかすのもやめようか。

あの場で領いた後は早かった。

すぐに軍服が手渡され、着替える。その間に用意されていたのか一室に連れて行かれ今は提督講習とやらを受けている。

未だに半信半疑ではあるものの、艦これの提督になれる。なんて思ったら後で大成功看板出されても、悔しい！ でもっ！ できる位には割り切れた。

「本来であれば……いえ、少し前までは一年の養成期間を設けられていたのですが。……申し訳ありません、現在は一日だけとなっております」

だそうな。

意味分かんないよ、一年がどうしたら一日に短縮されるんだよ。まじでどんだけ切羽詰まってるんだ。

そんな風に白目を剥きながら講習を受けていた。

そして色々とわかったことがある。

まず基本的にはブラゲー艦これと変わらない。

艦隊を揃えて出撃して海域を開放する。

それだけだ。

出撃して、傷ついた艦娘を入渠させて回復したらまた出撃して。その繰り返しだ。

そんな中でもびっくりしたのが、そうだな、言ってしまうえば任務が無い。

出撃セヨと言う任務を受けて、達成して報奨を得る。そんなやり取りがまず無いのだ。

大指針として、海域開放を掲げているだけでそれに向かうためにあれこれしろという物が無い。

要するに、ここ大本営から資源を貰えることは無い様だ。

ありえん。ほぼ完全自給自足じゃねえか。

デイリー任務全て達成するだけでどんだけの資源が手に入ったと思うんだ。クソが、狂ってる。

そんな俺の視線を柳に風と受け流して、大淀は続ける。

「艦娘は基本的に建造ドックにて生まれますが、それ以外に鎮守府へと艦娘を着任する方法があります。おわかりになりますか？」

「海域で深海棲艦を倒した時に発見できる……とか？」

「自信なさげに言ってしまったが、常識だろう。何年艦これしてたと思ってるんだ。」

「……いいえ。そのような事例は確認されていません。他鎮守府より異動という形で着任させることが出来ます。これは鎮守府同士の交渉や大本営が発する辞令により行われます」

「は？」

「え、まじ？ ドロップしないの？ 建造だけ？ まじかよ……。」

「異動が打診された際には拒否権が認められています、が。数少ない艦娘ですので、可能な限りご協力いただければと思います」

「え？ 数が少ないって？」

「いやいや、おかしいだろう。」

「それこそ言い方は悪いが、同じ艦娘なんて沢山居たぞ？ 色々な理由で。」

「そのままの意味です。艦娘は現在確認されている種類だけで百隻を超えています、既存の鎮守府に着任している艦娘は三十を超えていません」

「三十を超えていない!? って、いや、それも驚きなんだけどさ、そうじゃなくて……! 例えば大淀さん！ 君は他にどれくらい居るんだ？」

入手機会は限られているが、俺は大淀を二隻持っていた。友人メガネスキー提督は何を思ったのか十隻集めて日替わり大淀秘書艦回しとか意味不明なことをしてたぞ。

「さん付けは必要ありませんよ。ああ、そういう意味ですね。確かに同じ艦娘は存在しています……ですがそうですね、大淀がこうしてここに居るのならば、ここに大淀は現れない。同じ鎮守府に同じ艦娘は現れないのです」

「なる、ほど……」

何処ら辺がこれくしょんなんだ……。

ていうか、他の鎮守府で着任している艦娘が三十を超えていない？ 同じ艦娘が着任しないってルールがあるにせよ少なすぎるだろう。

「どうされましたか？ わ、私の説明が何かおかしかったでしょうか？」

「い、いや……大丈夫、よく、わかった。ありがとう」

わたわたと慌てる大淀になんとかそれだけ言った後、深呼吸を一つ。

……まあ、確かに。

ゲームだからあり得た光景だ。つてのはわかる。

少し想像してもみるが。自分の鎮守府に同じ顔が二人も三人も居るほうが不気味だし不自然だ。そう思う。

だとするならば、現実^{リアル}だからこそ、こうなっただと思えばまあ納得も出来る。無理やり納得した。

「轟沈した艦娘は轟沈する前に所属していた鎮守府には二度と帰ってこない。建造しようとしても着任しない。ですので、くれぐれも貴重な戦力である事を留意し必要な轟沈を避けるようお願いします」
「………わかった」

俺はしなかったが、置き換えてみれば、バイト艦や牧場なんて呼ばれる行為が出来なくなっただとも言えるだろう。

「では次に――」

大淀が手元の資料を捲る音と言葉を続ける中、考える。

そりゃ、深海棲艦によつて大きな危機も迎えるし、多くの提督は散

るだろうよ。一つの鎮守府に三十隻？ 少なすぎる。仮に艦隊制限が無いとしても六隻編成を五隊だ。遠征に向かい兵站の維持に務めなければならぬ隊もいるだろう。それらを差し引いても実戦部隊は二つか三つ。

その隊だって、入渠時間、交代を考えれば必ず間が空く。

ドロップしない、同じ艦娘が現れない。

つまり、それは艦これではあり得なかった建造失敗が起こり得ると言うことのようなだ。装備開発と同じ様に。

確かに、大型建造は言うに及ばずだが通常の建造であっても戦艦、空母の開発をする時の資源使用量は少ないとは言えない。加えて艦隊司令部からの任務達成報奨が無いならば、建造とは二の足を踏む行為だろう。

あくまでも予想でしか無いが、だというのならば着任艦娘が少ないというのも頷ける話なのかも知れない。

だが、改めてもう一度言おう。少なすぎると。

思った以上に……いや、思ってもみななかった。制限があるだけで、こんなにも厳しい状態になるのだと。

予想以上のショックから立ち直ろうと、耳に入って来なかった大淀の声に耳を向ける。

今は、艦隊への指揮について話しているようだ。

同航戦、反航戦。T字有利に不利。

単縦陣に複縦陣。

モニターで何度も見て、選んでとした言葉。

それぞれを改めてそういう意味があるのか。なんてもっともらしく頷いてみる。

俺の理解が進んでいると思ったのか、大淀は一つのDVDを取り出した。

「それは？」

「これは演習光景の映像を収めたDVDです。先程説明しました事、これをご覧になればよりよくご理解出来るかと思えます」

なるほどな。確かに説明だけじゃぱつとしない。

艦これをやっているうちになんとなく実際の陣形や戦闘態勢なんかも調べてイメージは出来ているけど、百聞は一見に如かずとも言う。

そうして映し出されたのはまさに演習風景。

演習風景ですと言われなければ、艦これのアニメか映画だなんて思ってたかも知れない。

そんな事を思いながら、思わず食い入る様に観てしまう。迫力があつた。生唾を飲み込んだ事も気づかないほどに。

映像に映っている艦娘達は皆真剣で。演習用のペイント弾にも関わらず、必死で回避運動を試みたり、旗艦をかばったり。

反航戦のすれ違いざま、高速で動く相手に狙いをつけようと集中力が高まっている事が手に取るようにわかるし、T字不利な状況に陥ってしまった時の「しまった!」という表情は本気で悔やんでいる事もわかる。

これだけ艦これとは違うという事を突きつけられても、俺は頭の中でやっぱり金剛がバーニングラブ! なんて叫びながら砲撃したり、阿武隈がやめてよお〜! 艦首直したばかりなのにいく! なん

て声と共に、和気藹々とした風景を思い描いていた。

そしてそれを尽く裏切られた。
——ああ、戦争をしているんだ。
そう理解した。

巫山戯てなんかいない、ゲームなんかじゃない。
わかった。理解した。

何よりも、演習に臨んでいる艦娘達の、あの目。
鬼気迫る。とはこういう事を言うんだろう。

護国、深海棲艦の打倒。国の平和を護るため。強い決意と……追いつめられたような悲壮感。

よく、知っている。あの目を俺はよく知っている。

かつて、何度も見たことがある。あれは、そう……俺が——。

「……決めた」

「はい？ どうされました？」

——こんなの艦これじゃねえ。

和気藹々と可愛い女の子達が沢山居て、てーとくー！ と呼び慕って。ある艦からはクソ提督！ なんて言われながらも支えられて。そしてそんな子達を侍らせて。

それが艦これってやつだろ？ 自分のお気に入りの艦娘を愛でるのが艦これだろう？

俺は、とことんこれをゲームにしよう。とことん艦これにしてやろう。

もしこれが、艦これの世界だというのなら。俺の望む艦これに生まれ変わらせてやる。

半信半疑でもいい。夢オチが待っていないと構わない。

俺は、全力で可愛い艦娘達との艦これライフを送ってやる。

「大淀」

「は、はい」

「俺、なるよ。提督に。俺が思い描く最高の提督に」

そう、なってやるさ。

艦娘全員俺の嫁っ！ 皆幸せ、ハーレム大提督にっ！！

鎮守府正面海域攻略編

ワケあり初期艦が着任したようです

「ねえ時雨。今度の提督さんはどんな人かなあ？」

「さあ？ 僕にはわからないよ」

大本営応接室。

ここで待機を命じられた。ここで自分達の新しい提督と会おうらしい。

「今度は……今度こそは活躍するっばい！」

「……うん、そうだね。頑張ろうね夕立」

活躍、活躍か……。

そんな事、しなくていい。活躍なんてしたくない。

ふふっ、そんな事を思ってるからこうして転属を言い渡されたんだってわかってるのにな。

夕立だってわかってるんだろうに。自分が活躍出来なかったのは誰のせいなのかって。

それでもこうして言ってくれるのは、ありがたい。と、思うべきなんだろうけど。

でもどうしても、戦場に、海に出たいと思えない。

僕は一体何隻目の時雨だろう？

隣りにいる夕立は？

あの時、この時。見送ったあの子、あの人達は一体何隻目？

何度。何度僕は見送れば良いんだろう。この身体を持つ前から持った幸運が沈まないことだというのなら、沈んでいった者達は不幸だからだというのだろうか。

もしも僕が一人なら、ただの一隻だというのなら。僕が沈んで僕が生まれなくなつて、もしもそうだというのなら。

あとを託して沈む事が出来る事こそが幸運なんじゃないかって。

沈んでも何処かで僕が、違う何かが艦娘として生まれて同じ様に沈む。それはきつと終わることのない連鎖の輪で。

沈んで浮かんで見送って見送られて。それを紛れもない地獄の輪廻だと思ってしまう。

なら、一刻も早く深海棲艦達をこの海から追い出そう。そんな風に前向きになれるほど、状況は優しくなくて。

こんな今の思いを僕は僕にさせたくない。だから、沈まない。それだけだ。

新しい提督がどんな人か。そんなのわからない。

だけど、言おう。僕を海に出さないでって。もしも叶うのなら誰も沈ませないでって。

「……そんなの、無理な話だよね」

「うん？ 時雨、どうしたの？」

「ううん、なんでもないよ。それより、ほら。来たみたいだよ」

部屋に響くドアをノックする音。

その音に自然と身体が姿勢を正す。

「え？ 夕立に……時雨？」

え、あれ？ 新任の提督って聞いてたけど僕たちの事知ってる？

「こんにちは！ 白露型駆逐艦夕立よ。よろしくね！」

「え、あ、あの。ぼ、僕は白露型駆逐艦二番艦の時雨だよ」

慌てて夕立に続いて敬礼しながら自己紹介をした。

僕たちの挨拶にぎこちなく答礼してくれる提督。真新しい軍服ながらも彼が新任であることが伺える。

それなのに、僕たちの名前を知っているのはどうしてだろう。

「つと、俺……じゃねえ、ええと？ こほん。私が君達の提督となる。まさか初期艦として二隻……しかも、名高い艦娘である君達と出会えるなんて思わなくてな。期待しているぞ。これからよろしく頼む」

「夕立の事しってるっぽい!? わあ！ うれしいっぽい！ 任せてほしいっぽい！」

夕立はこれまで期待を受けたことがなかった。

この提督が言ったように、武勲をあげ、ソロモンの悪夢とまで呼ばれた有名な艦であるにも関わらず、こういったスキンシップと言うか人懐っこさを見せる為なのか揃って今までの提督達は頭を項垂れる。

それがどうだろう。感極まったように提督に飛びついた夕立の頭を撫でながらうんうんと目元を緩ませて頷いてる。いや、夕立は久しぶりに会えた孫じゃないんだからさ。

「あ、あの。夕立は孫じゃないし、提督はおじいちゃんでもないんだからさ」

「あ、っと。すまない。つい画面の向こうからこんにちはに感動してしまっとな」

画面の向こう？

よくわからないけど、今までと違う反応が嬉しいのか、胸に頭をぐりぐりと押し付ける夕立を優しく身体から離す提督。

「ほら」

「え、えっど？」

何で僕に向かって腕を広げているのかな？

……。

え？ 僕もしなくちやいけないの？

「ふむ、違ったか」

「ぼ、僕もしたほうが、よ、良かったのかな？」

「いや、私の勘違いだ。して欲しいのかと思った」

……正直に言えば、少し。

って、いやいやいや！ そうじゃなくて！

「初対面の人に抱きつきたいなんて思う女の人は居ないと思う……：夕立は別として」

「あ！ 時雨ひどいっばい！」

「そうか。いや、すまなかった。気をつけよう。私はお察しの通りかわからんが、新任の提督だ。これからも間違いを犯してしまうだろう。その時は遠慮なく諫めて欲しい。今のようにな」

そう言っって少し頭を下げる提督。

……頭を下げる、か。

僕たちの名前を知っていたことと言い、夕立への対応といい。わけがわからないよ、こんなの初めてだ。

今までの提督はこうじゃなかった。挨拶をしても答礼なんてして

くれなかつたし、何よりここまで僕の、僕達の目を真つ直ぐ見てくれなかつた。

あの人達の目はいつも戦艦や正規空母に注がれていた。ろくに戦果もあげられない駆逐艦よりも目に見えて戦果をあげる人たちばかりに向けられていた。

ただ、轟沈してしまえば二度と手に入らないから。

ただ、遠征に行き資源を回収するだけの存在だから。

いや、それならまだ良い方だし、僕も海に出ないで済むならそれによかつた。会敵する可能性の低い、沈む可能性の低い遠征ならそれによかつた。

何の装備も持たせず、戦艦や空母達の弾除けに使われた駆逐艦を知っている。

かの神風特攻を彷彿とさせるような運用をされた駆逐艦を知っている。

——そして、それを咎めない大本営を知っている。

だと言うのに。この人は、目の前の提督は。

「私はこの世界のことを何も知らない。情けない話だが、君達の力を借りなければ何も出来ない矮小な人間だ。それでもよければ……共に征こう、この海を」

「はいっ！ 夕立にお任せっばい！」

……やめてよ、信じたくないんだ。海に出たくないんだ。雨は止まない、止まないんだよ。

そんなこと言わないで、征きたいなんて思わせないで。

「……提督」

「何かね？」

だから、言おう。そうすれば、きっと、諦めてくれる。

僕がやる気のない艦娘で、役に立たない存在なんだって。

「僕は……提督と海を征くなんて、出来ない」

「……」

「沈みたくない、沈ませたくない。もう見送るのは嫌なんだ、見送られるのも嫌なんだ」

頭に視線を感じる。そっか、僕俯いているんだ。だってそうだ、この人の瞳は優しすぎる。

目を合わせたら、きつと頷いてしまう。征きたいと思ってしまう。それは、嫌だ。

「残されるのも、残るのも嫌だ！ 僕は！ もう海に出たくないんだ！ だから、だから……！」
「なるほど」

続く言葉を遮るように、頭になにかの感触を感じる。

これは、提督の手……？

「ならば話は簡単だ。約束しよう、時雨。俺は誰も沈ませない。誰一人としての轟沈も許さない。だから」

目の前にある影が形を変える。人の気配が、さつきよりも近くに感じる。

「力を貸してくれ。その約束を守るためには、時雨の力が必要だ」

「あ……」

ああ、本当に今日は初めてだらけだ。

今まで、こんな言葉を、僕は聞いたことが無いし。

「うん……うん……っ！」

見ちゃった。見たら頷いてしまうって思ったのは間違いじゃなかった。

こんな優しすぎる目も、約束を守ってくれるって信じたくなる目も初めてだ。

「……ふふっ。やっぱり私だけじゃないっぽい！」

「え……？」

夕立が嬉しそうに言う。

「抱き付くの！ 夕立だけじゃないっぽい！ 私も混ぜて混ぜてー！」

「わっ！」

夕立が同じ腕に抱かれてる。

そっか、僕、提督に抱きついてたんだ。どうりで……。

「ああ……改めて、よろしく頼むぞ」

提督ですが鎮守府の環境が最悪です

薄い本を読み漁り妄想逞しくなった俺の提督像は間違いじゃなかった！ 偉大なる艦娘ハーレム計画の第一歩は確実に進んだのだっ！

やっぱさー三次元って良いよねー。ちよつと前の俺ならこんな事間違っても口にしなかっただろうけどさー、やっぱ触れられる感触あつてこそだよ。なあ？

轟沈を出さない等っ！ 艦これサービス開始から最終イベント達成までっ！ 俺は一隻も出していないっ！ そんな俺に不可能はないのだっ！ きつと！

しっかし、初期艦が二隻か。

あの部屋に案内されるまで、電に癒やされながら提督するか、叢雲におかんされながら提督するか。はたまたオタ万歳漣しちゃうかと頭を悩ませていたが誤算だった。

別鎮守府からの異動ということで、大本営が呼び寄せた艦娘。それが時雨と夕立だった。

理由は特に聞かされていないからわからない。まあ知る必要もないだろう。

Need to know。

そんな言葉がある。知る必要がある時に知ればいい、そんな言葉。

ここは、鎮守府で俺はその提督。

提督とは軍属である。故に、そういった軍ならではの常識は確かに存在するのだろう。

知らされていないなら、それは知る必要がないことなんだ。……なんて無理やり納得する。正直掘り葉掘り聞きたい気持ちはあるが。どんな理由であれ、俺は艦娘を俺に出来る限りを持って大切にする。それさえブレなきやそれでいい。

ともあれまあ、なんだ。

夕立はなんと言うか思ったまんまつて感じだった。思わず妄想まんまの姿と仕草に頷いてしまうほど。けど、時雨はちよつと違った

な。

飄々としながらも素直に思いを口にしてつてイメージだったけど……いや、病まない雨は置いておけ。

ああ言った風に感情を爆発させるイメージって無かった。

これも現実リアルつてやつなんだろうか。正直、よくわからない。

ただ、これからもああ言った艦娘の悩みつてやつはきつと出てくるんだろう。俺が艦隊これくしょんをする限り。

「まあ……望む所、だ」

「なにか言ったかい？」

どうやら口に出してしまっていたらしい、隣に立っていた時雨が柔らかない微笑みを携えながら反応を返してきた。

あー可愛いなあ……全く！ 駆逐艦は最高だぜっ！

「いや、このみかん箱を見ると、な。やってやるつて気持ち湧き上がってきたんだ」

「ふうん？ そうなんだ。変わってるね？」

変わってるかな？

まあそうなのかも知れないな。艦これサービス開始の時も思ったもんだ。あん時は家具コイン百でも嬉しかったし、これを貯めていけばこんな家具が……なんて期待ややる気に満ち溢れたもんだが、普通ならなんでやねんとツツコミを入れても良い光景だ。

「とりあえず執務……は、何もないな。私は大本営から渡された、この鎮守府近海の資料に目を通すでしょう。時雨は夕立の手伝いに行つても良いんだぞ？」

夕立は今、割り当てられた私室と言うか寮と言うか。居住スペースの確認だったり、資材貯蔵庫にどれだけの資材があるか等鎮守府内を奔走してくれている。

「あはは。夕立にも似たこと言われたよ。こっちはいいから提督さんの手伝いをしてきてつて」

「そうか。なら、一緒に見ようか」

資料を手を取れば、時雨がそれを横から身を寄せて覗き込んでくる。

……なんと言うか、女の子ってこんな良い匂いするんだな。
ど、どどど、童貞ちやうわっ！

「どうしたの？ 早く読んでみようよ」

「あ、ああ」

くう、せつかちさんめ！ もうちよつと浸らせてくれや！

まあいい。これからいくらでも機会はあるだろう。

資料とともに鎮守府近海の海図を広げる。

もう何度も見た鎮守府正面海域、艦これで言えば1-1か。確か、最初に駆逐艦2隻程度と、水雷戦隊崩れみたいな深海棲艦隊と会敵する海域。

よく低練度艦を練度十位まであげるのにお世話になったな。あとキラ付け。

「そう言えば、時雨と夕立は実戦経験はあるのか？」

異動して来たって位だ。ある程度はあるのだろう、新任へのボーナス的な。

「……僕は何度か。と言っても両手の指には収まる程度だよ。でももう前回の出撃からだいぶ経ってる、正直前みたいに動ける自信はないかな。夕立は二回出撃経験があるよ。僕と同じく、前回からだいぶ間があるけどね」

うーん、ボーナスでは無いな、間違いなく。

ほぼ練度は一桁。よくても二桁にギリギリ届くかかってところか。

「そうか。まあ、問題ない」

「え、そ、そうなの？」

「うむ」

弱いなら強くなればいいだけの話だからな。焦らなくても良いだろう。

ブラッくなレベリングは……出来ないだろうなあ、するつもりもないが。

最新の出撃から間が空いているという部分が気になるけど、笑顔で話していた時雨の顔が若干曇ってる。あんまり触れないほうがいいのかも知れないな。

ともあれ鎮守府正面、一戦目で撤退を繰り返せばなんとかなるだろう。俺も指揮やなんやらを学ばないといけない。焦ってもいいことは無いんだ。

「で、でも……」

「ん？」

そう言つてすつと横に開いていた資料を指差す時雨。そこには。

「正面海域で、戦艦ル級を認めるって……」

「はあ!? ……まじ、かあ」

うつそだろお前! とか叫びたい気持ちをぐつとこらえてそれだけ呟く。

確かに、時雨や夕立でも戦えないことは無いだろう。改二にまで至ってれば、の話だが。

流星にフラグシップ級……フルだなんてことは無いだろうけど、それでも流星に低練度の駆逐艦が相手取るのは不可能。主砲一発大破間違いなしだ。

「いや、大丈夫だ。建造で戦力を増強すれば……」

「ていとくさーん! 資材の確認終わったっばい!」

ただだつと足音が執務室に飛び込んで来ると同時にそんな声。

確か鎮守府着任時、初期備蓄はそれぞれ千程度はあつたはず、なら戦艦とは言わなくても重巡洋艦位は……。

「えつと! 燃料、弾薬、鋼材、ボーキサイト……それぞれ三百程度の備蓄があるっばい!」

「さん、びやく……?」

「うん! 何回も数えたから間違いないっばい!」

キラキラとした目を向けて来る夕立。言わずともがな、褒めて褒めてーってなもんだ。

「あ、ああ。ありがとう夕立。よくやってくれたな」

「んふふ! お任せっばい! じゃ、夕立、お部屋の掃除に行つてくるっばい!」

「うむ、行ってらっしゃい」

走り去る夕立をなんとか笑顔で見送る。

「提督」

「……何だ？」

「大丈夫？」

……詰んでるかもしれん。

そうしてあらかた大本営からの資料に目を通して頭に叩きつける。わかったことは、鎮守府近海にして深海棲艦が全力過ぎるという事。正直、そんな場所によく鎮守府建てられたなとも言える。

はつきり言つて、新任が着任するような場所じゃない。ある程度戦力の整った中堅、もしくはそれ以上クラスの提督、艦隊がいて然るべき場所だろう。

仮にこの鎮守府正面海域を突破できたとしても、その先には更に強い深海棲艦が待ち受けていることは想像に難しくない。

加えて、鎮守府正面海域の制海権を保持していないという事は、遠征も難しいと言うことだ。

何処へ向かうにしても正面海域は絶対に通る。それこそ空路を行くでもない限り。

その海路の安全が約束されていない。つまり遠征へと向かうことが出来ないということ。

資源は各三百。

ギャンブルして突っ込むにしても重巡洋艦にも至らない資材数。ならばと最低レシピで駆逐艦建造を行えば今度は出撃後の補給すら出来ない。

つまり、時雨と夕立。

現在保有している戦力で突破しなければならない。それも、資材が尽きる前に。

練度向上と言えば演習だが、他鎮守府との演習を打診してみれば鎮守府近海で演習は行われる為、まずは近海の安全を確保せよとの事。

……うん、詰んでるな。

「どうしたものか……」

鎮守府の見回りをしてくると時雨に言つて、歩きながら頭を悩ませ

る。

艦これゲームにおいて、1―1しか出撃を行わず、そのまま練度最大まで向上させケツコンカッコカリを行う提督がいたとかなんとか。だが、それすらも出来ないこの現状はどうしたものだろうか。

「ケツコンカッコカリ、か」

練度九十九の艦娘に指輪を渡して限界突破。

システムの言えばそれだけの事だが、やはりケツコンという言葉。それに夢と妄想を滾らせた提督は多い、もちろん俺だってそう

だ。ただ、少しだけ疑問もあつた。

多くの提督が妄想という名前の考察を行っていたが、俺もその一人で。

艦としての練度を高めきり、指輪を渡すことで人との絆を紡ぎ、今度は人としての練度を高める。

それが俺の出した結論だった。

友人にそれを話してみれば、指輪を渡さないと人として強くなれないのは変じゃね？　なんて言われて否定されてしまった考え。確かにその通りだと思う。

「指輪を渡さないと人として強くなれない、か」

人としての強さってなんだろうか。

心の強さとか言葉にしてしまえば陳腐に聞こえるそのことだろうか。

それとももつと単純に、身体の強さ、だろうか。

「わからん……」

足は止まらず、艦娘が出撃するだろう波止場まで着いてしまった。

春になったにも関わらず、まだ頬に感じる潮風は冷たい。目の前に広がる海は太陽を反射させてキラキラと光っている。

この海で、彼女たちは戦っているのだ。今も、きっと他の鎮守府から出撃して守っているのだろうこの国を。

こうして、生身で艦これを感じることで、初めて理解した。

——提督って、役に立たねえ。

彼女たちの心の支えにはなったりするんだろう、薄い本よろしく。だけど、それでも自身は海を征く事は出来ない。

確かに俺は艦これでランキング不動の一位を誇ったさ。甲勲章を取りこぼしたことはない。

ジユウコンカッコカリだっしてさ。練度が低い艦娘なんていなかった。

それでも、今。

俺には何も出来ない。

「認めねえ……」

それを、俺は認めない。

約束だっしてさ、決意だっしてさ。

だったらそれは裏切れない。

「試してみる、か」

長年思っていた疑問。それを解決することが現状を打破する事が出来る、そう信じて。

問題は。

「久しぶり、だな。……身体、ちゃんと動くかね？」

随分とご無沙汰なこの身体が言うことを聞いてくれるかどうか、だ。

艦娘と体育会系してたら危ない雰囲気です

「え？ 何これ？ 竹刀？」

「初めて触ったっぽい！」

時雨が作ってくれた夕食を三人で食べた後、俺は二人を連れ立って鎮守府内に建設されていた小さな道場にやってきた。

隣続きに弓道場があるのがわかるが、そこは空母達が使ったりする事を想定されているのだろうか。

「ああ。二人にはこれから、身体を動かす訓練をしよう」

「身体を動かす、訓練？」

長年思っていた疑問。練度の内訳。艦としての強さと人としての強さ。

それが合わさった物が練度だとするのなら。

俺にも出来ることがある。

「ああ、疑問があつたんだ。何故お行儀よく砲雷撃戦をするのかと」

「お行儀、よく？」

時雨が首を傾げながら聞いてくる。

あの大淀に見せられた演習映像でもそうだった。

何故、行儀よく隊列を組んで反航戦、同航戦をして、射程に入れば砲撃をするのか。

この子達は、艦でも人でもあるのだ。

別に深海棲艦と格闘戦をしろと言っているんじゃない。

ただそれでも。

「例えば、だ。夕立」

「はいっ！」

呼んでみれば元気の良い返事と共に片手を大きく挙げてくれる。

「12cm単装砲の有効射程は百五十メートル。それを止まっている相手に十発撃ったとして、どれくらい当てられる？」

「えっと、多分八発は当てられるっぽい！」

「時雨は？」

「僕も、同じくらいかな？ 動いていたら半分位になると思うけど」

まあ大体そんなもんか。

「仮に私が艦装を展開出来て、海上を走る事が出来たとしよう。それならどれくらい当てられると思う?」

「え? いや、そんなの一発でも当たったらいいほうなんじゃ……」

「結構難しいっぽい!」

「いやいや、お嬢さん方。俺を舐めてもらっちゃ困るな。」

「外れだ。正解は……」

ふっと足を踏み出し、時雨に肉薄する。

驚いたように竹刀を俺に振るう時雨だが、それを軽くいなして剣先を腹に突きつけた。

「全弾命中だ」

「……え?」

時雨から少し離れて二人を見る。

呆気にとられたような夕立と、驚いたままの時雨。

「簡単な話だ。こうして至近距離から撃てば外しようがない」

「そ、それはそうだけど……」

難しそうな顔をしながら反論しようとする時雨を遮り、続けて言う。

「出来ないと思うか? 私はそう思わない。お前たちは艦でも人でも無い……無いが、艦にも人にもなれる」

黙り込む二人。

練度、その内約。

画面越しに見た彼女たちの戦い様はわからない。

カッティンが発生する理由は数値。飛んでいく艦載機、放たれる砲撃。

それが、どういう状況で生まれるのかなんてわからない。

だが、その状況を作ることは出来る。

何もきちんと隊列を組んで、お手本のように射程範囲ギリギリから砲撃を狙わずともいい。

クリティカルは何もたまたま運良く発生するというわけでもないはずだ。

それが、艦としての練度であり、人としての練度だと、俺は思う。
「信じられないか？」

「そ、それは……」

時雨が何か言おうとした時、隣の夕立が。

「信じるっばい」

俺に竹刀を向けた。

「夕立、難しいことはわからないけど。どうすれば強くなれるなんか
わからないけど……提督さんを信じることは出来るっばい！」

そうして型も何もなく、ただ俺に向けてがむしやりに竹刀を振るっ
てきた。

その刃を持っていた竹刀で軽く打ち払い、体勢が崩れた夕立の足を
払う。

「きゃっ!？」

「ならば、打ってこい。強くなってくれ」

「……提督さん、もしかして強いっばい？」

強くなつて無いさ。二人に比べれば、全く強くない。

俺は海で戦う事も出来なければ、その度胸だつて無い。言われるが
まま、自分の意志を伝える事もできず逃げ出した弱々しい男だ。

それでも、強くさせることは出来る。

「さてな。それは夕立が強くなればわかることだ」

「なら強くなるっばい！」

その言葉を皮切りに俺たちは激しく竹刀を打ち合わせた。

「どうした？ 息があがつているぞ？ そんなものか？」

「ま、まだまだっばい！」

「僕だつて……!」

始まつてすぐは悩んでいた時雨も、やがて迷いを打ち払ったかのよ
うに混ざり、今は二対一。

振るわれる竹刀を避け、時に打ち払い。訓練を行う。

型なんて無い、正しい打ち込み方だつて無い。そしてそれを教える
つもりもない。

そんなものを覚えたところで深海棲艦との戦いでは何の役にも立たないだろう。

ただただ、彼女たちにヒトの身体の動かし方を教える。ヒトの身体を導く。

今も尚、これが無駄にしかならないかも知れないという思いはある。

それを支えるのは、これしか無いという思い。そして何より、彼女たちの人としての強さを信じた。

事実、始まつて一時間程度にも関わらず、その動きは始まつた時よりも輝きを放っている。

汗が一つ床に落ちる度、竹刀が合わさり乾いた音が一つ響く度。

間違いなく、彼女たちは一段、また一段と練度の階段を昇っている。

……二度と握るはずのなかったこの竹刀。握りたくなかった竹刀。今だって、何処か暗い気持ちいが俺の胸を過る。

それでも、彼女たちを沈めないと約束した。

何よりも、ハーレムの主になるつて決めたもんなつ！ ちつとくらいかつこいいとこ見せてもいいだろうっ！

情けない提督にはなりたくなかった。彼女たちから信頼され、尊敬される提督になりたかった。

唯一出来ること。

自信なんて無い、これが正しいと自分に言い切ることも出来ない。だけど、それでも。

「何もしないで終わるなんて出来ねえからなつ！」

「!!？」

夕立の竹刀を打ち上げ、下ろす竹刀で時雨の竹刀を叩き落とした。

「……今日は、これまで」

「ありがとうございますっ！」

二人揃って頭を下げてきた。

弾む息をそのままに、ザ・青春と言った感じの汗を拭うこともせず

に。
(あー……やっぱ柄じゃねえなあ)

そんな二人の姿を見て、俺は自分の恥ずかしいと思う気持ちを頬を掻くことでごまかした。

それからの日々は訓練漬けだった。

食事と、近海の状況確認をするための近距離航海と警戒。それ以外の時間はずっと。

艦隊司令部からの指令は鎮守府近海の制海権を取れ。ずっとそのまま。

みかん箱の上に不釣り合いなノートパソコンを設置し、二人が近海警戒へ繰り出している間に資料をデータ化し打ち込んだ。

同時に、他鎮守府の演習光景の映像を大本営に申請し、手に入れた映像を食い入る様に三人で観て研究した。

この時にこうすれば近づける。

この砲撃は避けることが出来る。

二人は貪欲だった。

時雨は沈まない、沈ませないため。

夕立は強くなるため。

それぞれが胸の思いを元に必死で研究した。

そしてその研究と共に実際に俺と共に身体を動かす。

波止場から見える範囲の狭い海で、実際に演習弾を使って夕立と時雨が相対したりもした。

俺も必死だった。

ゲームで華やかな戦歴を持っていたとしても、こうして目の当たりにすれば指揮の「し」の字も知らない俺だ。

勉強した。戦術書を腐るほど読んだ。わからない事があれば、大淀宛に電文を送った。この間なんて私用電話で一時間以上拘束したくらいだ。

そうして各々が練度向上に努めた。

時折、無駄なんじゃないかという思いに負けそうになりながらも。

お互いを励まし合って、奮励努力した。

「提督」

「ん？ 時雨、どうした？」

道場でいつも通り汗を流し終わった後、時雨が俺に言う。

「やっぱり、その話し方似合ってるよ」

「あ、夕立も思ってたっぽい！ 提督さん、俺っていうときと私って言うときの喋り方がタガタっぽい！」

う、うぐ……俺の提督像が変と申すか。よく言った、明日の稽古は倍にしてやる。

「……あー、まあ、な。でも、やっぱ提督って威厳があつたほうがいいだろ？」

「あはは、確かにそうなのかもね。でも、僕はどっちの提督も好きだよ」

「似合っていないって言ったじゃねえか」

「夕立も！ どっちも好きっぽい！」

ぬぬぬ……ならば俺に一体どうしろってんだ。教えてハニー！

「どっちも提督だからね。好きにしたらいいと思うよ。でも、楽に話せる方が僕は嬉しいな」

「うんうん。時雨の言う通り！ 気を使わないでほしいっぽい！」

「そ、そうか」

そうかーでもなー俺もなーどうしたもんかなー。

そんな話をしている時だった。

「!!」

鎮守府内に大きく響き渡る警報。

これは。

「……来た、か」

着任から一週間。今まで鳴ったことの無かったこの音は。

深海棲艦がやってきた事を知らせる物だ。

援軍はありませんが出撃するそうです

「援軍が出せないってどういう事ですか!？」

電話口から聞こえる驚きを多く含んだ怒声に顔をしかめながら少し受話器を遠ざける大淀。

時雨と夕立を出撃準備に向かわせた後、急ぎ執務室の電話を手に取り大本営へと援軍を要請した提督だったが、大淀は静かに間を置いた後援軍は出せないと答えた。

理由は幾つかある。

大本営は基本的に大きな武力を持っていない。無論ある程度の戦力は保持しているが、鎮守府に所属している艦娘達とは比べるまでもない。そのため、援軍に出撃させた所で戦力として見込めないという事。

そして何より。

「……」

電話応対をしている大淀の背後には腕を組んで立ちながら、無表情にその様子を監視している司令長官の姿があったからだ。

「大淀、キミにもわかってるはずだ。この場所は近海に深海戦艦が出るような場所だと。そして駆逐艦二隻なんかじゃ到底相手に出来ないうってことも」

大淀ももちろん把握している。把握しているからこそ、そこへと着任させた。いや、させられたのだと言うことまで。

そう、大淀は理解していた。電話口でなんとか援軍をと口にする提督以上に幾つもの理由を理解していた。

「っ……繰り返します。あなたの鎮守府現戦力のみで襲撃してきた深海棲艦を撃破して下さい」

だからこそそうとしか言えない。

言葉を詰まらせそうになりながらも、そうとしか伝えることが出来ない。

大淀自身は提督の言葉に頷きたい、全力で支援艦隊の発艦を命じた。その思いはある。

そんな思いがあった。そしてその思いがあったからこそ禁じられていたにも関わらず、深海棲艦発見の報を報せたのだ。

あの提督、鎮守府の戦力は僅か駆逐艦二隻のみ。

発見した艦影は軽巡洋艦を旗艦とした5隻の水雷戦隊。

どう考えても、到底勝てる相手ではない。

それでも、援軍は出せないのだ。

「あなたと、あなたの艦隊の武運を祈ります。それでは」

「ちよっ……」

後ろ髪引かれる思いを振り切り、受話器を落とす大淀。その肩は少し震えている。

「これで、よろしかったのでしょうか？ 司令長官殿」

「うん」

振り返らずそう言う大淀の様子に満足したのか、再びソファに座る司令長官。その顔は満足気に歪んでいる。

あの提督と対面した時に見せた顔の中にこんな表情があることは、大淀しか知らない。

「やはり、私には納得できません。せめて後方からでも支援を……！」

「時間稼ぎの防波堤でしか無いあの鎮守府に？ 使えない艦娘を沈ませる為の場所にわざわざ貴重な戦力を？ 冗談はよしてくれ。時間と資源の無駄でしか無い」

彼が。あの提督が着任した理由。

それはこの言葉の通りだった。

民間人から提督の素質を持つ人間を発見。

その報は軍を大きく揺さぶった。

それまでの提督というものは軍学校での修練によりその才を磨き、素質を得、磨かれた者がなるものだった。

戦略を、戦術を学び、指揮を学び。そうして時間をかけて提督素質測定器に向かい、一定の数値が認められれば提督となる。

ところがどうだろうか。今回発見されたのは、軍とは無縁の一般人。それも誰よりもずば抜けて高い素質を持っていた。

それを救いとは思わなかった、思えなかったのだ。軍の人間達、と

りわけ提督に任命されるような者はある種の選民思考に毒されていた。

学校で優秀な成績を修めたものこそが優れた提督素質値を持つ。

その認識は間違いではなく、優秀なものが多かった。

故に提督となった者は皆思った。

自分は国を護るに値する力を持った提督である、と。

必死に努力をして出された適性値を遥かに上回る数値を出した
ぽつと出。そんな者が役に立てるわけがない。

周囲の提督は皆そう思った。何かの間違いであるとも。

そして司令長官自身も凡そそういった考えを持っていた。

だからこそ。最前線とも深海棲艦第一次侵攻ラインとも言える場
所に鎮守府を強行建設し、彼を着任させた。

適性値が本物であり、優秀な提督達が戦力を整えるまでの時間稼ぎ
ができれば良し。よしんばあの適性値が何かの間違いであつたとし
ても、不必要と判断された艦娘の良い処理場所となる、と。

半ば人柱とも言える。

必要最低限ではない。本当の意味で最低限の資材しか送らず、設備
もまた突貫で作らせた物。

轟沈や解体された艦娘はその鎮守府に二度と現れない。だが、異動
で追いやってしまったえば再び現れる。

故に、送られた艦娘は何かの問題を起こした者か、不要と判断され
た者。要するに使えなくなった者だ。

ある提督は言った。次の同じ艦娘は上手くやるでしょう。と。

適性値が本物であれば、これでもやれると思っていた。そう言うの
だ。防衛失敗を前提として。

大淀の肩は震えたまま。

それは何も出来ない自分への情けなさからか、司令長官への憤りか
らか。

それとも。

あの人を失ってはいけない。

何の理由もなく胸に宿ったその思いのせいからか。

彼と初めて対面した時の衝撃を今でも大淀は鮮明に覚えている。

——この人と働きたい、海を人を国を守りたい。

それはまるで一目惚れとも言えるような物で。だが確かに思ったのだ。

今まで自分の事を優秀な提督と評した数多の者達、今この場に居る司令長官。相對してそんな事を一切思わなかったのにも関わらず、彼にはそう強く思ったのだ。

「さて、どう転んでくれるかな……？」

くつくつ、と喉を鳴らす司令長官。その姿を視界に収めないまま、大淀は静かに祈った。

「……どうか、武運を……」

艦娘が出撃する為の波止場。そこに三人の人影があった。

一人は未だ着慣れない真新しい軍服に、二人は提督に初めて見せる艤装を身に纏いながら。

「作戦概要を説明する。鎮守府領海ギリギリに深海棲艦の姿を認めた。編成は軽巡洋艦を旗艦とした水雷戦隊5隻編隊だ。我が鎮守府の目的は敵艦隊の撃滅にある。だが、こちらの戦力は駆逐艦二隻のみ……そこで、大本営に援軍依頼をしたが……これは却下された」

「そ、そんなあ……」

「……そっか」

うろたえる夕立と、何処か納得したような表情を浮かべる時雨。

夕立はともかく、時雨は何処かこうなることがわかっていた。

危険海域に建てられた鎮守府。そこに着任する新任提督。さらに、不必要とされた駆逐艦二隻。

体だけ見れば、完全な厄介払いと扱われたその後に期待されている事が丸わかりなのかも知れない。

それに気づいていたからこそ、時雨は驚かなかった。

ただ、予想が事実であっただけ。それだけだ。

「うろたえるな。確かに戦う前から敗戦濃厚とも思えるかも知れない……だが、濃厚であって確定ではない」

「で、でもー流石に無理っぽい」

「うん……僕も、そう思うよ」

敗北を認めないと瞳に浮かべる提督を余所に、諦めを浮かべる二隻。

だが、それを一笑した後、提督は口を開いた。

「作戦を説明する。現時刻はヒトナサンマル。順調に行けばおよそ一時間で会敵出来るだろう。更にそこから三十分もすれば、周囲は完全な闇、夜になる」

「夜戦するっぽい？ 確かに被害を大きく与える事は出来るけど……それは夕立達だつて一緒よ？」

「ああ、だから可能な限り被害を出さないようにする。まずは時雨が単艦出撃。そしてその後夕立は少し間を置いて出撃、戦闘予想海域を迂回し背後から強襲してもらおう」

その言葉を理解した時。

夕立は艀装の砲をピタリと提督に向けた。

「……それは、時雨を囮にするって意味？」

「その通りだ」

「そんなのダメ！ ダメに決まってるっぽい！ 時雨を捨てて戦うなんてー！」

「やめなよ夕立」

それを落ち着くよう声をかけたのは時雨だった。

夕立が突きつけた砲の先を手で静かに下ろした後、すっかり色の抜けた顔で時雨は提督に向き合う。

「それしか、無理なのかな？」

「ああ、無理だろうな。仲良く二隻揃って昼戦、夜戦をした所で絶対に勝てない。むしろこの作戦通り事が運んでも勝率は三割あれば良いつて所だ」

毅然として提督は言う。

もしかしたら。彼が歴戦の勇士と言えるくらいに経験を積んでいたのなら、あるいは違った作戦があったのかも知れない。

だが、彼は新任で。指揮なんて取ったことの無い素人で。ただ多少

剣の腕が立つ一般人に変わりはない。

「わかった提督。それに従うよ。……でも、僕を犠牲にするんだ。三割じゃなくて十割にしてよね」

「時雨!？」

「仕方ないさ。僕はそれを求められてここに着任させられたんだから」

すっかり諦めた。光を宿さない瞳を夕立に向けて力なく笑う時雨。あの時交わした約束は、状況一つで簡単に破られてしまう程軽いものだったのだと。

その様子を見て夕立は青ざめる。

——ああ、夕立は、また……。

「何を言っている？ 俺は犠牲の一つも出さないつもりだぞ」

「え……う？」

きよとんとした様子で提督は二人に言った。

「何だ時雨、約束しただろう？ 誰も沈めないって。一週間で破れる約束なんて俺ははじめからしないぞ」

「で、でも！ 僕は囧で……!」

「そうだ。だが、時雨なら出来る……ってまあ俺の変な精神論と押しつけ信頼はともかくだな。時雨は出撃し会敵した後、砲撃を命中させることも考えなくていい。目標に対し、反航戦を徹底。ただひたすらに回避を意識してくれ。夕立が位置につくまでもたない、危険だと判断したなら撤退だ」

「反航戦……は、ともかく。撤退って……」

死力を尽くして敵を殲滅せよ。

その言葉を頭に思い描いていた時雨は、撤退という言葉が出たことに驚いた。

「そ、そんな事したら提督、ここにいらなくなるよ？ 敵前逃亡は重罪だよ？」

「ああ、知ってるよ。そうっぽいな。けどな、時雨。俺は提督として軍属とされたわけだが——軍人になったつもりはない」

——ただただ艦娘が好きで、守りたいだけの一般人のままだ。

後に続いた言葉に時雨も夕立も絶句した。抜け落ちた時雨の表情は戻り、夕立の顔に張り付いていた表情は抜け落ちた。

「……いいの？　ここにいられなくなるんだよ？　提督も、僕も。夕立だって」

「そうだな。なら漁でもするか。夕立と時雨に守ってもらいながら」

「……えー！　夕立、魚よりお肉の方がいいっぱい！」

「なら、牧場だ！　牛育てるぞ牛！」

「ふふっ……僕は魚の方が好きかなあ」

先程までの雰囲気は消え去り、警報が鳴り響く前の空気が一人と二隻を包み込む。

少しの談笑。

出撃前の空気とは思えないそれ。

まだ見えぬ先に怯える事無く、どうなつても夢があると思うことが出来た。

やがて、その声も潜まり。ふいに言葉が途切れ、二隻の目に戦闘への意欲が宿った時。

「……よし。時雨、夕立」

「うん」「っぼい！」

「出撃せよー！」

「了解っ!!」

二人は大きな返事をした後、海上に着水し、抜錨した。未だかつて感じたことのない力を感じながら。

思い通りには中々いかないようです

「見つけたよ」

遠くに見えるのは深海棲艦。

軽巡ホ級フラグシップが旗艦。引き連れているのは駆逐イ級エリート二隻に、ロ級が二隻。

こんな鎮守府近海で見られる編成では無い。もしも、時雨が今の鎮守府に来る前に会敵したのであれば柄にもなく取り乱していただろう。

そんな事を考え、それを笑った。

勝たなくてもいい、逃げてもいい。

その言葉は軍人としてあるまじき言葉なのはわかっている。ただ、だからこそこの時雨の胸に響いた。

生きてくれ。

そう言われたと、時雨は思っている。

戦いだけに必要とされている訳じゃない。時雨は自分が必要だと思われていると実感できた。

だから戦う。この海から帰る為に戦う。必要とされる場所に戻る為に。

「ここは譲れない」

沈むな、沈ませないと言われた。

ならそれを信じよう。約束を守ろうとしてくれる人を自分から裏切るなんてあつてはならないことだ。

信頼に応える。だから信頼する。

必ず、あの鎮守府に帰る。

その思いと共に、時雨は静かに海上を深海棲艦に向けて走るスピードを上げた。

時雨がスピードをあげると同時に、相手も時雨を認識した。

距離はどちらもまだ射程圏外。相手の軽巡ホ級の射程範囲ギリギリの位置と思われる距離を時雨は見定めようとする。

傍から見ればかなりの速度。

時雨は全速で走り、相手との距離が縮まるにつれて集中力を高めていく。

あとどれ位で射程範囲だろうか。極まった集中力は全速の世界に居る時雨の目に見える景色を酷くゆっくりに感じさせた。

だから、軽巡の射程距離に入った時。相手の砲撃が来ると感じた時。

時雨は急制動。

反航戦。

目の前を砲弾が通り過ぎる。

それを確認した後、一気に駆け抜ける時雨。

相手の隊列を見流しながら通り抜け、反転。相手艦隊は隊列を組んでいるため大きく半円を描くように時雨に向かい直す。

反航戦を徹底して回避に専念。

確かにすれ違いざまの砲撃戦は極めて命中率が落ちる。

遠くで見れば大して速度を感じないが、間近でのやり取りとなればまた変わる。34ノットのすれ違いは想像しているより遥かに早い。そんな中行われた急制動。

当然相手のタイミングは狂い、走っていたであろう時雨の目の前を通り過ぎる。軽巡に続き駆逐艦が止まっている時雨に砲撃を放とうとすれば急発進。

この繰り返しで、時雨は被弾すること無く戦闘を続行できている。時に一速から全速へ、全速から三速へ。

自身の速度に緩急をつけることで、時雨は一発の砲撃もすること無く自身の動作制御のみで相手深海棲艦を手玉に取っていた。

一週間の提督との訓練。

夕立とは対象的に、時雨は結局ただの一太刀も提督にあてることが出来なかった。

パシンパシンと竹刀をぶつけ合う夕立の様に、時雨は一度も提督の竹刀に自らあてに行くことが出来なかったのだ。

あたるときは提督の竹刀が自分の竹刀を巻き上げる時だけ。

時雨は考えた。

どうすれば打ち合えるかを。だが、そんな悩んでいる時雨に提督は言った。

「別に交える必要はないんだ。相手の身体に届かせる技術と、竹刀をぶつけ合う技術は違うんだぞ」

その言葉で気づいた。

提督が竹刀を空振った後は必ず隙が出来る。ならそこを打てばいいと。どうすれば提督の竹刀を空振らせればいいのかに注力すればいいと。

そうして出た結論が、急制動、急発進だ。

あえて隙を作りそこを狙わせる為に急制動し、空振らせた後急発進、竹刀を振るう。

毎日訓練した。そして、ようやく昨日提督は時雨の振るった竹刀を、自分の竹刀で受け止めた。

身体にあてることは出来なかった。だが、それでも確実に成長した。

そしてそれは、海上での動きにこうして活かされた。相手が狙うタイミングを自分で作り、そこを狙わせる。

敵の攻撃を自分がコントロールする。誘導する。それにより、こうして反航戦ですれ違うのは遂に五回目になった。

「君達には失望したよ」

辛辣な言葉。

こんなに簡単だったのか。こうまで簡単に誘導できるのか。

これならば、提督と竹刀を交えていたほうが遥かに困難だったと時雨は感じている。

同時に失望の言葉は自分に対しても感じていた。

沈まされる相手だと怯えていた相手は、心の持ちようと技術でこうにまでなるのかと。

簡単だと感じた相手に怯えていた自分に失望した。

だが、それは緩みでもあった。

——これなら、自分も攻撃をしても。

そんな思いが胸に過った。

手にある砲を一撫ですると、その砲の冷たさが俺を使えと囁いてるかのようを感じる。

撃つか、撃つまいか。

それははじめて相手の砲撃を回避することだけを考えていた思考に混じったノイズだった。

「!? 当たった……っ?」

すれ違いざま、駆逐口級の砲撃が自身の肩を掠める。

損傷は極めて軽微。小破にすらならない程度のかすり傷。

だが、その痛みと事実は時雨の混乱を強く招いた。

回避に専念しろって言われていたのに。

砲撃を考えなくていいと言われたのに。

僕はバカだ。しなくていい傷を負った。

こんな事を考えてしまったから……。

自身を叱責するという、戦場に置いては更に余計なノイズを思考に宿らせ。

「くうっ!」

さらなる砲撃を浴びた。

五度目の反航戦。

そこで、時雨は中破にまで陥った。

被弾箇所は何れも臍装。

主に、脚部の損傷が目立ち、思うように速度が出ない。

相手艦隊が折り返して来るのが時雨の目で確認できた。

——危険だと判断したなら撤退。

提督の指示を思い出す。

だがそれも、この損傷した脚部では……不可能に近い。

「……僕は、ほんとにバカだなあ……」
俯き、呟く。

確かに提督の言う通り、遂行できるはずだった。それでも、自分の愚かさでそれも無理になってしまった。

「この僕を……まで追い詰めるとはね。まあいいや」
ならば後はやることは一つしか無い。

轟沈覚悟の上での突撃。

その覚悟を決めて、力の入らない足を無理やり動かそうとした時。

「おまたせっばーいっ!!」

大きな砲撃音と共に、駆逐口級一隻の轟沈を時雨は確認した。

「まず何から撃とうかしら?」

落ちきっていない陽が照らす海上。

余裕ぶった言葉とは裏腹に、獰猛な笑顔を浮かべながら夕立は全速で文字通り敵艦隊に突っ込んだ。

その動きは時雨のような洗練されたものではなく、ただ力任せ、考えなしのそれ。

だが、敵艦隊は急な砲撃による動揺、加えて目標が二隻に増えどちらを狙うべきかという思考に邪魔され向かってくる夕立に対して有効な行動を取ることが出来なかった。

単縦陣の最後尾にいた駆逐口級に続いていたもう一隻の口級に夕立の照準があわされ、間もなく撃破。その距離僅か三十メートル。

「あはっ! 提督さんの言った通りっばい!」

これならあたる、あてられる。

先に撃破した口級に砲撃をあてられたのはまぐれだと夕立は自覚していた。だからこそ、距離を詰めた。あてるために。

何よりも、中破している時雨の下に一刻も早く合流するために。

駆逐口級が二隻撃破されたことでもようやく敵艦隊は迫る驚異を撃破する為に意識を傾けることが出来た。

二隻轟沈させられた事は確かに痛手ではあるが、もしこの深海棲艦に表情を浮かべる事が出来たなら確かに笑っていただろう。

夕立は単縦陣を取っているこちらに向かっできてきている。ならば反転様にはT字有利の状態で向かえ撃てる。その事を理解していたからだ。

夕立に対して砲撃を行うため、艦列反転を試み……浮かべていたかも知れない笑みを凍らせた。

三十メートル先で砲をこちらに向けているはずだったそれは。何

の恐れもなく、駆逐イ級エリートの後方に張り付いていた夕立の姿を見た故に。

「どうしたの？ 撃ってこないっぽい？ 私の装填、終わっちゃおうよ？」

撃てるわけがない、よしんば撃てたとしても駆逐イ級は必ず巻き込まれる。

イ級を盾にするかの如くピッタリと張り付いている夕立は、変わらぬ笑顔で続けた。

「次発、装填出来たっぽい」

そして、何の躊躇いもなく……イ級にゼロ距離射撃を行った。

砲撃音と言葉にならないイ級の断末魔、爆音が重なり響く。

瞬間間違いなく、全ての色をこそぎ落とし、敵艦隊は呆気に取られた。

自らの砲撃でも無く、敵は自ら自爆に近い形でイ級を落としたのだ。

その事を理解した時、軽巡ホ級は人為らざる声で笑った。

これが喜劇でなくて何だというのか。中破しているとは言え大人しく時雨と共に挟撃を行えば良かったはずだ。それを警戒したからこそ夕立を先に排除すべき敵と認識したのだ。

それがどうだ。確かにこちらの被害は大きくなった。僅かこの数瞬の間に駆逐艦とは言え三隻を落とした。驚愕、そして称賛されるべき事だ。だが、その代償に自らと仲間の艦を救えなくなったのだ。

何が救援か、作戦か。

まるでカミカゼ。バカバカしいにも程がある。

「夕立っ!!」

遠くで時雨が名前を叫ぶ。

爆煙でその姿は見えないが、自分と同じ様に呆気に取られた後泣いているのだろうか。それとも救われたと思った瞬間やってきた喜劇に絶望しているのだろうか。

早く爆煙が収まらないだろうか。そうすればきっとより愉快な光景が待っているはずだ。

そう期待し、時雨の方へ向かうわけでもなくその場で静かに待っていた。

待っていて、しまった。

「時雨、大丈夫？」

「それはこっちの台詞だよ！ あんな無茶して……！」

煙の向こうに見えたのは、中破した時雨を庇うかのように前に立つ艤装の所々を軽微な損傷が確認できる——小破した夕立の姿。

——アリエナイ。

ホ級は目の前の光景を理解できない。

笑うはずだった口元は開かれたまま、発するはずだった声は一向に音にならない。

「時雨。時雨は撤退するっぽい」

「なっ?! 何を馬鹿な事言ってるのさ！ 今なら二人で撤退出来るよ！」

「それじゃあだめっぽい」

夕立はすつと時雨の破損した脚部艤装に目を向け、時雨の提案を潰した。

「そんなの！ やってみなくちゃ……！」

「時雨、自分でもわかっているっぽい。無理だと思ってるのに出来るって言うなんて時雨らしくないっぽい」

夕立の冷静な言葉に、下唇を噛み俯く時雨。

そう、わかっている。

この状況で撤退を敢行しても、まず間違いなく自分は追いつかれぬ。撤退できたとしてもそれは夕立だけだということ。

「ねえ、時雨」

「……なんだい？」

「もし、ここで時雨を守れたら……白露は許してくれるかしら？」

白露型一番艦、白露の名前を口にする。

かつて一緒に居た、白露の名前を口にする。

自分が沈めてしまった、白露の名前を口にした。

「!! 夕立……まさか……！」

「わからないけど……そうだったらいいな」

願いが叶いますようにと夕立は瞑目し祈る。しかしその祈りは一瞬で終わり。

——夕立、突撃するっぽい！

その言葉を時雨に残し、未だ呆然としている敵艦隊に向かって、夕立は再度突撃^{カミカゼ}を敢行した。

提督ですが出撃するようです

二人が見えなくなる。かつてブラウザ上でこんな光景は見たことが無かったからかなんだか不思議な感覚だ。

それと同時にわけもなく不安な気持ちが入り込んでくる。

秘策……なんて言うほどのものじゃないけど、もしも艦これならばきつと二人は無事に帰ってこられるとは思っているが。それでも不安を感じるのはいつぱり俺が未だこの世界を何処か理解できていないからだろう。

鎮守府近海に戦艦を見ゆ。

正直ありえない話だ。この世界にいる鎮守府、いや提督達は皆これを当たり前だと思っているのだろうか。

深海棲艦の勢力が拡大し、回せる資源に限りがある。建造は失敗のリスクがある。任務達成の報酬はない。

そんな中で数少ない……いや、絶無と言ってもいいかも知れないチャンスモノにしてこの海を護ってるのだろうか。

だというのなら、俺のちよつとした自信なんてものはなんて頼りないことか。

それなりに艦これについては色々調べたさ。

Wikiだって読み漁ったし、SNSを利用して情報交換に精を出した。

その結果が常に戦果ランキング一位という結果を出せるほどには。

だけどここに着任して、二人を見送るまでのこの一週間。

そんな知識や経験はまるで役にたっていない。たっていないように思えた。

唯一役にたったかも知れない事なんて、逃げた剣道の腕だけだ。それも、本当に役に立ったのか、立っているのか未だわからない。だからこそ、僅かな期間だって自覚しているが必死で勉強したつもりだ。

それで全てを理解出来たなんてとても言えないが……。

「ていとくー」

「ん？」

ふと声が聞こえた。

その声に顔を上げて振り返ると。

「げんきだせー」「そうだーげんきだせー」「わたしたちはおうえんするぞー」

「え……妖、精？」

俺の方へ向かってふよふよと飛んでくる。何か。

覚えがある。こいつらは……。

「ら、羅針盤の邪神……!!」

「じゃしんー?」「じゃしんつてなんだ?」「じゃしんじゃしん!」

俺を含む数多の提督に悲鳴を上げさせ涙を流させた羅針盤にひつついていた妖精じゃねえか!

まわれー! じゃねえぞ! この野郎! ちゃんとボスにたどり

着かせろ! えー回すのー? じゃない! やる気出せ! くおお

おおお!!

ま、まあいい。

と言うか、こつちに来てから始めてみたなそう言えば。

建造、入渠ドックでも見なかったしてつきり居ないもんだって思ってたんだが。

つて、入渠?

「そうだ、二人が帰投したら入渠出来るように準備しないと」

そうだよ、クリックポチポチーじゃねえんだ。準備しなくちやな。でもどうすりやいいんだろ。

「まかせてー」「にゆうきよはまかせろー」「ばりばりー」

やめて!

じゃなくて。

「ん? わかるのか? ……じゃあすまんが頼んでいいか? 二隻分だ」

そう言う可可愛らしく敬礼してくれたのでなんとか様になってきたと信じた回答礼で見送った。

信じていいのかわからんが、妖精に裏切られるのは羅針盤だけで十

分だ。信じたい。

「ていとく」

「ん？ お前は行かなくていいのか？」

一匹だけその場に残ってた。

その妖精はうんうんと頷きながら俺の肩に腰を下ろす。

「こわい？」

「……お前たち妖精がか？ それならそんな事ねえよ。可愛いさ」

「ちがう。このせかい」

怖いか、か。

どうなんだろう。よくわからない。

俺の知ってる世界とは違う場所に今居るってことはわかっている。そしてここには艦これのキャラクター達が存在していて深海棲艦と戦争してるってのも。

ただ、そう。

あまりにも艦これで。ゲームで。現実感を何処か置き去りにして。いて。

今でも目をつぶれば、パソコンの前でマウスクリックしている場面に移り変わるような気がして。

「ああ。怖いな」

でも確かに目の前に命が存在していた。

よく知っている艦娘の格好で、よく知っている口調で。僅か一週間だけど一緒に過ごして。

人じゃないのかも知れない。兵器でもないのかも知れない。

ただ、命が存在していた。

「やっぱ関わっちゃったら……情だっけ移るさ。ヒキニートの俺でもな、失いたくないって思うさ」

ましてや大好きな艦これ。効率度外視で一隻も轟沈させ無かったのは単純に失いたくないってのより、手に入れたモノを何かに奪われたくなかったからだ。

それがシステムである敵であろうと、リアルであろうと。奪われたくないんだ。

「でも、あのふたり……あぶないよ」

「どういう事だ？」

声色を変えず、淡々と事実を述べるように肩に乗った妖精はそう告げた。

「わかってるんじゃない？」

……わかってる。いや、わかりたくなかったんだろう。

それでも強くなれば先を見てくれると思った。出来ないことが出来るようになれば、見据える先にも希望を感じてくれると思ったんだ。

時雨は、大丈夫だと思う。あの時確かに沈みたがっていた時雨は、前を向いてくれたと思うから。

だけど夕立。

夕立は……。

「ぎゅとしずむよ」

どくと自分の心臓が跳ねた。

あいつは少しだけ目の色が違った。

俺と鍛錬していた時も、ただただ攻撃を当てることのみ注力していた。自分に何度竹刀を打たれようとも。

間違いなく、夕立は自分の身を顧みていない。

自分がどれだけボロボロになろうとも、攻撃を止めない。俺がどれだけあしらっても、竹刀を振り払おうとも手で足で、噛み付いて来ても俺を打倒しようとしてきた。

それはまるで、相手さえ倒すことが出来れば沈んでも構わないと言っているようで。

俺は最後までそれを諫める事が出来なかった。

「まもりたい？」

守りたいさ。あいつら艦娘を守るのが提督で、守りたいと思うのが俺だ。そんな事は当たり前だ。

だけど海を征く力もなく、深海棲艦を撃破出来るわけでもない俺に何が出来るっていうんだ。

指揮だって出来ない、出撃の際に言い渡した作戦なんて作戦と呼べ

るものですらないだろう。

わかってる。わかってるけど何も出来ないんだ。

言い訳だっけしたい。

時間があれば、資源があれば。

でもそれを言っただうなるんだ。

深海棲艦は襲ってこないのか？ 準備が出来るまで待つてくれるとでも？

これは——ここはゲームじゃない。そんなのわかっていたはずなのに。こちらが出撃しなければ襲ってこないなんてこと、あるはずがないのに。

「わかった。なら、ついてきて」

「え？ あ、おい！」

そう言うやいなや、妖精は俺の肩から飛び立った。

「はやく。そんなにじかかんない」

訳わかんねえ。

でも、何だろう。他に出来ることも無い、なら言うとおりにする……か？

「何だこれ？」

「ふね」

波止場から妖精の後を走って追うこと少し。

そこには漁師が海で使うような船が一隻。

「のって」

「え、あ、おい！ これうちのなのか!? 漁師の人のじゃねえのか!？」

「このかいいきでりようなんてするひといないから」

そう言っただヨフヨと船に入っただいく妖精。

ったく、怒られても知らねえぞ。俺は言うからな、おまわりさんコイツですって。

乗り込むとユラユラと不安定な足元。そーいや船なんてはじめて乗ったな。なんだか変な感じだ。

んで、あの妖精は何処行っただ？

「こつちこつち」

「んー？ 何処だよ……って、これ……！」

声の方へ進んでいけば、そこは操舵室と思われる所。ただ、舵は無く。そのかわりにあったのが。

「羅針盤……？ もしかして、これ、お前か？」

「そうだよ」

羅針盤が喋る。いや、なんでもありだなまじで。妖精が羅針盤に姿を変えるなんて。

そつと羅針盤に触れてみる。

「……えつち」

「うおい！ 神秘だなあって思ってたな!? 俺は女体の神秘に触ったつもりは無くてだな!?!」

「じようだん。それより……いくよー！」

言葉の終わりと共に船のエンジンがかかる。身体に響く振動に少し慌ててしまう。

「行かつて……何処に？」

「せんじように」

戦場？ まさかあの二人が戦つてるところに行くつてのか!?

いやいや、俺が行つた所で何になるつて……!?

「うそなの？」

「何が!？」

「まもりたいの」

……。

「嘘じゃない」

「なら、いこう。まもるなんてくちならんたん。そのいのちくらい、かけて」

……簡単に命を賭けさせてくれる。

無事に二人の所までたどり着けるのか？ 辿り着いた所で邪魔になるだけじゃないのか？

そんな思いはある。でも。

「あー!! もう!! わかつたよ！ 命でもなんでも賭けてやらあ！

羅針盤！ ちやんと仕事しろよ!!」

わかった、わかったさ！ よかろう本懐だ！ 好きなものに命を賭けるなんざオタク業界では当たり前前の事だ！ それがリアルになっただけ！ それだけだ！

その思いで、羅針盤を勢いよく回す。

勢いよく回された羅針盤が不自然にピタリと止まり方位を示す。

そしてその方角へ勢いよく船は発進した。

「だいいじょうぶ。こんどはうらぎらないから！」

ひやつはー！戦場は地獄のようです

夕立は諦めていた。

自分が無傷で相手を打倒することを。そしてこの場では自分の命を。

代わりに決意していた。

必ず敵艦隊を撃滅させるということ。

あの提督との訓練で得たモノ。それは間違いなく相手に食らいつく力という部分に尽きる。

夕立は諦めなかった。なんとしてでも一太刀、一撃を提督に浴びせる事を。

「別に交える必要はないんだ。相手の身体に届かせる技術と、竹刀をぶつけ合う技術は違うんだぞ」

その言葉で思いついた。何も竹刀だけで攻撃する必要は無いんだと。

極端に言えば竹刀を投げつけてもいい、それで相手の気を取り、その間に自分の拳でも足でも振るえばいいと。

そうして臨み気づいた。攻撃と防御は同時には行えないという事に。

ならばあえてダメージを受けつつ攻撃すればいい。

防御を捨てて攻撃することで、ずっと攻撃することが出来る。

それが夕立の出した結論だった。

相手の攻撃を避ける技術を磨く時雨とは対象的に、夕立は攻撃を受ける技術を磨いた。

訓練を行う度に身体には傷がつく。

だが夕立はその傷が日々軽傷になっていくことに喜びを感じていた。

確実に上手く攻撃を受ける技術を身に着け始めていたそのことに。

そして前日。

ついに夕立は提督と相打ちするに至った。

時雨の夕立を呼ぶ声を振り切り、自身を厭わず突撃する姿はまさに

カミカゼ。

我に返った敵の砲撃を躲しながら海上を滑るその光景は、まるで氷上を舞うフィギュアスケート選手の様。

時にステップを踏み、時に海上を跳び、確実に開いた深海棲艦との距離を縮めた。

もしもこれが演習で。傷つく恐れのない一種の演舞の様なものであれば、この光景を見て思わず立ち上がり万雷の拍手と共に称賛の言葉を贈っていたであろう。

そう確信できるほどの懸命さがあった。

その懸命さを美しいと感じるのは何故だろうか？

それは自身の命を燃やした煌めきであったからに相違ない。

この場に飛び交うのはまさしく実弾。相手を破壊し、沈めるためのもの。

相手の砲撃が夕立の直ぐ側で水面を叩く度に、頬を、身体を掠める度に。夕立の損傷は確実に増えていった。

夕立はまだ砲撃を行っていない。

何処までも言われた通り、超至近距離からの砲撃を狙い、愚直に距離を詰める。

全速で距離を詰める夕立に決定打を浴びせる事が出来ず苛立つ軽巡水級。

距離があると思いい狙いを付けるために低速に落としていたその距離は気づけば僅かなものとなり、ついに残る二隻のうち一隻。イ級に夕立は肉薄した。

「あはっ……いー！ 捕まえたっばいー！」

既に夕立の姿からは中破以上の損傷を確認できている。

後一撃。間違いなく後一撃とともに砲撃があたれば沈むだろう。

それでも夕立は獰猛な笑顔のまま。イ級に砲口を突きつけて発射した。

その瞬間を軽巡水級はチャンスと感じた。

先程のゼロ距離射撃を行ったのにも関わらず、夕立の損傷が軽微であつた理由。

夕立は砲撃すると同時にイ級の頭を両足で蹴り、後方にバック宙し着水していたのだ。

そして、その着水地点に、雷撃をあわせる事が出来たなら――。

「!!」

イ級撃破を手応えで感じながら宙を舞う夕立の目に、水中を走る魚雷の姿が見えた。

絶体絶命。

夕立自身、これに当たってしまったえば沈む。そう確信できた。

だが、それでもなお。

顔に浮かべた口元の歪みを深ませた。

夕立の着水と同時に、大きな爆発音と水しぶきが舞う。

――トツタ。

軽巡ホ級はその確信に胸を撫で下ろした。

沈ませた、撃破した。すなわち生き残った。残るは中破して身動きが取れない駆逐艦が一隻。損傷の無い自分が負けるはずがない。

よしんば負ける危険があるにせよ、撤退は無理なく行えるだろう。

悪夢は終わったのだ。艦娘の駆逐艦一隻に深海棲艦の駆逐艦4隻を沈められる等という、信じられないような悪夢は。

そう、思っていた。

「ソロモンの悪夢、見せてあげる……っ!」

爆風と水しぶきが舞う中、宙を舞って――その爆風を利用し、ピンボールの様に自ら跳ね飛ばされてきた夕立の姿。その手に持つ三本の魚雷を見るまでは。

水しぶきが一瞬、綺麗なエメラルドを思わせる色の様な瞳を、紅く映した。

いつの間にか沈んだ太陽の灯り無く、爆風で照らされたせいとか、それとも別の理由かはわからない。

ただ、軽巡ホ級フラグシップは。

その瞳に動きを、心を奪われたまま。

夕立の手に持つ魚雷を叩き込まれて撃沈した。

「夕立っ!!」

時雨は破損し思うように動かない脚部に苛立ちを隠すこともせず、必死に夕立の下に走る。

放心したかのように立ちすくむ夕立の足が、少しずつ水面に埋まっていく光景を認められないように、ただただ必死に走る。

「夕立っ……夕立っ!」

これを認めてしまえば自分が見送ったのは何度目になるのか。

変な欲に囚われなければ。提督の言った通り回避に徹していたならば。

どうすることも出来ないという事は無かったはずだ。今まさに沈んでゆく夕立の姿なんて見なくてすんだはずだ。

後悔。

その思いが時雨の頭、胸に溢れ、それは目から零れ落ちる。

今自分がどんな顔をしているのか、水面は暗く、時雨の顔を映さない。

そんな中、未だ遠く、顔だけ見える夕立がふと時雨を見た気がした。

——ごめん。

夕立の口元が動く。

何故か、遠くに見えてなんと言ったかなんてわかりようもないはずなのに。

時雨は理解できた。

もう、どうすることも出来ないことを。夕立が海に完全に沈んでしまった事を。

「う、あ……うああ……」

だから、そこで膝を折った。心が折られた。

自分のせいで。

他ならぬ、自分のせいで味方を、姉妹を失ってしまうことを。

「時雨っ!! こっちに乗れ!!」

「えっ……!?!」

認めてしまいそうになったその時。

自分の腕が無理やり引つ張り上げられた感覚に驚いた。

その力の感触に目を向ければ、約束を交わした相手。ここに居るはずのない相手。

必死な顔をした、提督がいた。

「て、提督!？」

「そこに居ろっ! すぐに戻る!!」

言うやいなや、提督は上着を脱ぎ去り、口に懐中電灯を咥えて躊躇なく海に飛び込んだ。

(ああ、夕立……沈んでるんだ)

海が自分を包んでいく感覚。冷たい水のコト覚。

それらが徐々に消え去っていく感覚。

(ごめんね、時雨。でも……無事っぽいよね。これなら、白露も……許してくれるっぽい?)

頭に浮かんだのは自分が沈ませてしまった姉の事。

かつて、自分が敵艦隊に向けて暴走とも言えるような突撃をし、危険な状況に陥った。

そこから、身を挺して救ってくれた、姉の事を。

(夕立も、同じことが出来たっぽい。時雨を守ることが出来たっぽい。だったら許してくれるかしら。ちゃんと謝るから許してね、白露)

今、自分が目を瞑っているのか、開いているのか。

陽の落ちた海ではそれすらもわからない。それとも、轟沈したことでもう視界が機能していないのか。

(ごめんね提督さん。夕立も、出来ればもつと提督さんと一緒に居たかったっぽい)

失われていく感覚。

それと共に、提督の事が頭に浮かんだ。

僅かな時間だった。それでも、今までの提督よりもずっと一緒に居たと思える。一緒に戦ったと思える。

出来ることならば、もつともつと一緒に居てみたかった。共に海を征きたかった。

(あとは、時雨と頑張るっぽい……)

僅かな後悔。

その後悔を意識ごと手放そうとした時。

(……あれ、は……?)

ふと、視界に白い何か映った。

(ふふ、お迎えってやつっぽい？ 天使さんかな？ それとも……夕

立はやっぱり地獄に落ちちゃうっぽい?)

そんな考えに、笑みが浮かぶ。

悪くない。

最後に笑えるなら、悪くない。

だから、それに向かって手を伸ばした。

迎えられるだけじゃダメだと思ったから。自分でも、行かないとな

らないと思っただから。

(え……?)

だからその手を掴まれた感触に驚いた。

失ったはずの感覚が急に身体に宿った。

その感覚は身体の浮上。海面に向かってドンドン昇っていく。

そしてその感覚は。

「ぶはあっ！ げほっ！ ぐほっ!!」

「ぐほっ……!」

海面から顔を覗かせ、空気を感じることで開放された。

「提督っ！ 夕立っ!」

近くから聞こえるのは聞こえるはずの無い時雨の声。

その事に疑問を覚える前に、自分の腕を掴んでいた感触が身体に回

された事に気づいた。

「無事で、良かった」

「あ……え……? て、ていとく、さん?」

ずぶ濡れながら、笑顔を自分に向けていた提督の存在を知った。

その笑顔は、怒っているような安心したような、良くわからない笑

顔。

だが、そんなあやふやな笑顔に。

「夕立……生きてる、っぽい?」

「ああ、当たり前だ。約束しただろう？ 沈めない」とその言葉に。

夕立は自分が生きていることを理解したのだった。そして理解と共にやってきた安心感に。冷たい海水と裏腹な温かい気持ちに。

「お、おい夕立？ ちよ、ちよつと待て」

「も、だめっぽい……おやすみなさいっぽい」
静かに意識を手放した。

その意識が完全に消える前。

「……旗艦は絶対轟沈しないはずなんだけどなあ。大破撤退するだろ……」

なんて、意味のわからない事が耳に入った気がした。

丸く収まったけどまだまだ大変なようです

「もう！　なんであんな無茶したのさ！　途中で深海棲艦に襲われるって思わなかったのかい！」

「あ、はい。すいません」

鎮守府に帰ってきて夕立と時雨を妖精さんが準備しておいてくれた入渠ドックにぶちこんで少し。

大破状態、轟沈一步手前だった夕立はまだ少し時間がかかるそうで、時雨はドックからでてくるやいなや執務室に怒鳴り込んできた。

なお、その勢いに負けて床に正座している提督が居る模様。俺です。

しっかし改めて見ると不思議なもんだ。

あれだけボロボロの姿になっても風呂入れば全て元通りなんてな。

あの時は無我夢中だったから意識してなかったけど、時雨も夕立もひどい有様だった。

時雨は右足の艤装はもちろん、骨だって曲がっちゃいけない方向に曲がっていたし、夕立に至ってはこれで動けてたのが信じられないくらい全身傷だらけの骨折し放題だった。

情けない事に、その姿を直視した後、海に向かって盛大にお魚のおやつを撒き散らしてしまったくらいだ。

流石にそんな状態だったから、服が破れていて見ちゃいけない所が見えてラツキースケベに喜んだりする余裕はなかった。

……今度はもう少し余裕がある時に堪能したいと思う。色々な意味で。

「聞いているのかい!？」

「お、おう。聞いているよ」

ぷりぷりと怒る時雨に苦笑いを浮かべてしまう。

夕立が意識を失った時半狂乱になって駆け寄った時雨だったが、夕立の心音が確認できて安心出来たのかその瞬間に時雨も倒れてしまった。

あんな姿を見るよりは、こうやって怒られている方がずいぶんマ

シってもんだ。

「でもまあ、さ。無事で良かったよ」

「あ……う……」

そう言ってみれば、顔を赤くして何も言えなくなる時雨。可愛いなあ。

もう正座も良いだろう、やることやらねえとならんし。

「提督」

「うん？」

声に振り返ってみれば、時雨が何処か言いにくそうにもじもじと歩いて。

「あの、さ……ありが、とう。約束、守ってくれて」

約束……ああ、沈めない云々の話な。

お礼を言われるほどの事じゃねえんだがな、いわば当たり前だ。それに。

「まだ安心するには早いさ」

「え？」

「約束つてのは最後まで守り通してこそ、だからな。これから覚悟しろよ？」 時雨。俺に約束破りの烙印を捺してくれるな」

楽にはさせねえよ？ そんな意味を込めて笑いかける。

時雨を……いや、艦娘を一隻も沈めない。

俺はこれからもそうするし、今までもそうしてきた。

今回、その難しさを肌で実感した今でもその気持だけは胸に宿っている。

実感した。そう、実感したからこそ守り通したいと思う。

「……うん！ 任せてよー」

「おう」

時雨の笑顔が眩しい。そしてやっぱり可愛い。

多分、俺が想像しているよりも遥かにずっと難しいんだろう。今俺にはそんなあやふやな予測しか立てられない。

まだまだこれからだ、俺たちはようやく初出撃を終えたばかりの新米なのだから。

つつても時雨も夕立もここに来る前に出撃経験はあるって言うって、新米なのは俺だけなのかもしれないが。

「さて、時雨。疲れている所悪いんだが、今回の深海棲艦の動きについてどう思うか聞きたい」

「あ、そうだね。うん、なんでも聞いてよ」

姿勢を正して俺の方へ向かい直す時雨。

はつきり言っただけで軍事行動の意味なんてさっぱりわからない。

戦術に関してはこの一週間で無理矢理詰め込んだおかげでまあなんとなくではあるが理解出来る。

問題は戦略。

一部の戦闘活動がどういう意味を持っているのかとか。そういった事はまるで考えが及ばない。

「戦闘内容の詳細に関しては後で良いんだ。今回防衛ラインを割ってきた深海棲艦。その目的について何かわかることはあるか？」

「うーん。多分、偵察……強行偵察だったんだとは思ってよ？ 本格的な侵攻作戦にしては戦力不十分だと思うし、こっちの戦力を確認しに来たんじゃないかな？」

なるほど。

聞く限りここは新設の鎮守府。その戦力を図りに来るのは当たり前と言えそうなのかも知れない。

戦艦が確認されているような所だ。時雨の言う通り攻め落とすぞとやってきたのならそれが居なかったのは不自然だ。

最も、あれだけの戦力で——といっても十分鬼畜な構成だったが、この鎮守府を陥落させることが出来ると判断した可能性もあるが。まあ偵察だと思うほうが自然か。

「今後、また偵察や侵攻作戦が取られる可能性についてどう思う？」

「そうだね、半々……かな？ 偵察目的とは言えそれなりの戦力を揃えてたのにも関わらずたかが駆逐艦二隻に壊滅させられた。相手からすれば不気味だと思うよ、一二の足を踏む可能性はあると思う」

うん。確かにな。

はつきり言っただけで被害を考えなくて戦果だけ見れば出来過ぎどころ

かありえないと言っていていいだろう。

相手から見れば駆逐艦二隻でこれなら本隊は一体どれほどの戦力が……と、考えてしまうだろう。

「でもやっぱり戦艦が相手にいる事を考えれば間をあげず無理やり攻めてくる可能性も捨てがたい……どっちが濃厚かはわからないよ」

「そうか……わかった」

まあ攻められる、攻める。どちらにしても近い内に事は動かさないといけない。

ゲームの様にこちらが攻めない限り攻めてこないみたいな展開はありえないってことがわかったし、放置するのはありえないだろう。それに加えて資源の問題もある。

今日の出撃ではじめて弾薬を消費し、修復で鋼材を使用した。そして今日に至るまでの警備活動で燃料は少しずつではあるが消費している。

残っている資材は燃料が200。残りは少し消費しただけ。

燃料をどうにかして手に入れなければギリ貧だろう。消費量から考えれば、一ヶ月は持たないだろうな。侵攻されるかされないかによつては弾薬や鋼材もまた違うだろうし。

今回は上手くいったが次もこうとは限らない。時雨が言ったように戦艦が出てくれば敗北の可能性は極めて高くなるだろう。

やはり急ぐべきは戦力の拡大と補給ラインの整備、か。

「ていとくー」

「わあ!?!」

「ん? 妖精さん。どうしたよ? あと時雨、何驚いてるんだ?」

ふよふよと執務室に入ってきたのは入渠ドックを準備してくれていた妖精。

「え!?! これ何!?!」

「何って……妖精だぞ」

「ようせいだよー」

どっかの失敗した着ぐるみみたいな言い方はヤメロ。

「え? てか、時雨妖精見たこと無いの?」

「は、はじめて見たよ……これが、妖精」

恐る恐るといった具合に妖精に人差し指で触れる時雨。くすぐったそうに笑う妖精。絵になるなあ。

じゃなくて初めて見たってどういう事さ。

羅針盤は言うに及ばず、修復、建造で見る機会はあっただろうに。

「それよりていとく。ゆうだち、しゅうふくおわったよ」

「お、そうか。今どうしてる?」

「そこにいる」

ぴつと小さな指を執務室ドアの方へ向ける妖精さん。

そこにはドアに隠れるように、自分の顔だけ出してこっちの様子を伺ってる夕立がいた。

「何してるんだ? 夕立。入ってこい」

「ひゃー! ひゃい!」

声をかけて招き入れてみれば、ギクシヤクとロボットの様な動きで入室してくる夕立。

なんだなんだ? てつきり提督さーんダイブでもしてくるかと思っただのに。

「た、ただいま修復完了したっぽい!」

「うん。おつかれさん。身体におかしい所とかないか?」

「へ、へーきっぽい!」

びしつと敬礼なんてしちやってまあ。目線をあわせてくれないの? 寂しいぞ?」

「くすぐす……夕立? 大丈夫だよ。提督、何も怒ってないから」

「へ? そ、そうなの?」

「うん? 何を怒る事があるんだ? むしろ良くやってくれた、よく沈まなかった。この戦闘でのMVPに褒める以外何を言えбайいんだ?」

ピクリと肩を震わせた後、恐る恐る俺の目を見てくる夕立。

いや、ほんと。なんでそんなに怯えてんのさ。むしろまじで感謝したいくらいだよ。

「て、提督さーん! 褒めて褒めてー!」

「ぐふうっ!?!」

な、なるほど……これは高度なフェイントだったか。
褒めて褒めてダイブ、略して褒めダイ。つまるところ褒め死^{DIE}。
やってくれおる。

だが舐めるな! 身体を無駄に鍛えたのにふるわれる事叶わな
かった二ート魂見せてやる!!

「ゆ、夕立……よくやってくれたな。ありがとう」

「んふふー! 夕立にお任せっぽい!」

まさか俺が撫でポさせることが出来るとはな……感慨深い。
抱きついたままちよつと頬を赤らめながら俺に笑顔に向けてくる
夕立の頭を撫でる。

あーくっそいい香りすんなー! 入渠ドックはお風呂。やっぱり
そうだった。じやなきやこんながいい匂いな訳がない!

「提督?」

「何だ時雨……って」

怒ってらっしやる!? すっごい笑顔だけどそれ怒ってますよね!

雨が! 病むのです!

「ぼ、僕だって頑張ったんだけどな……。そりゃあ、敵を撃沈させた訳
じゃないけどさ……」

「あ、ああ。もちろんだ時雨。お前もよく頑張ってくれた」

手を時雨に向かって伸ばそうとすると、スススッと近寄ってくる時
雨。愛い奴よ。

そんなこんなで二人は元通り。

改めて二人に聞いてみたが、やっぱり現存戦力だけで今後の戦闘は
厳しいとの意見だった。

翌朝、戦闘内容の詳細が書かれた報告書に目を通しながら考える。

「戦力の拡大、か」

資源に余裕は無い。艦娘を建造せよという任務が無い以上、最低レ
シピで回そうがどうしようが必ず資源はマイナスになる。

遠征しようにも、鎮守府正面海域の安全を確保できていない以上資

源が眠っていると思われる場所に向かうには極めて高いリスクを負う。

艦娘の練度を高めようにも、遠征も同様に正面海域の安全を確保し
てから。

ただ報告書を読むに、俺が二人に施した訓練も無駄では無いように
思える。

時雨の急制動、急発進という体捌き。夕立の攻撃に攻撃を被せる戦
闘方法、ダメージトレード技術。

これらは間違いなくあの訓練で培われた物だろう。

ヒトとしての練度は僅か一週間とはいえ、間違いなく向上してい
る。その兆しが見えている。

引き続き訓練は行うにしても。

やはり先の作戦でも痛いほどに理解できた数の差。それは練度だ
けでは覆せないものだ。

よしんば今回の様に覆すことが出来ても、毎回これだけの被害を被
るのであれば命が幾つあっても足りないというものだ。

数。

戦争は数だよ兄貴。

「やっぱ……これしかねえか」

——他鎮守府より異動という形で着任させることが出来ます。

大淀が言っていたその方法。それに頼らざるを得ない。

他鎮守府と交渉できるほどの材料も無ければ、手段もない。なら
ば、大本営に頼るしか無い。

正直、援軍を出さなかった大本営に期待するのは少し気が引ける。
というか、なんだかキナ臭いというか。

大本営はわかっていたはずだ。この鎮守府が守る海に強い深海棲
艦、それも戦艦すら確認できている事を。

最初は初期艦が二隻という事に喜んでいたが、実態を知ってから思
えばそれは少なすぎる。

何を甘えた事と思うかも知れないが、バックアップが得られな
かったあの時。間違いなく、普通の扱いをされていないと感じた。

まるで、潰れる事が見越されているような……。

「いや、よそう。この世界ではこれが普通だという可能性だってあるさ」

マイナスな考えに頭を振る。

そうさ、俺は新米だ。戦争の「せ」の字だって知らない平和な世界に生きていた人間だ。

やれることをやろう。

漁師になるのはそれからでも遅くない。

そう思い。大本営に向けて電文の準備をはじめた。

相変わらず着任する艦娘はワケありのようです

大本営に艦娘着任依頼を出して少し。意外にもそれはすぐに受理された。

轟沈艦が居ないことに対して随分驚いていたみたいで、戦闘内容の詳細を提出する事のみを条件とされた程度。

正直拍子抜けしたとも言える。それがより一層援軍を寄越さなかつた事への疑問を深める事になるのだが、まあ良い。

「良かったね。それで、誰が来てくれるんだい？」

「ああ。天龍型軽巡洋艦、天龍と龍田だ」

執務補佐をしてきている時雨。いわゆる秘書艦ってやつだな。と言つてもやるべき執務なんて殆どないのが悲しいが……俺は形から入る主義なんだよっ！

夕立は近海の警備に行ってくれている。帰ってきたら3人で昼ごはんの予定だ。ニートなめんな、チャーハン位なら作れるんだぞ。味は知らん。

その後昼過ぎ……ヒトサンマルマルに二人が来てくれる予定になっている。

しかし、天龍と龍田か。

「時雨は二人と面識はあるか？」

「うーん。前の鎮守府でちらつと見かけたことはあるけど話したことは無いかな？ あの二人はいつも他の駆逐艦を率いて遠征に行っていたし。それに僕達が所属していた所とは別のところから来るみたいだから資格好を知ってる位でしか無いよ」

やっぱりそれはここでも変わらないのか。燃費良いからなあ。

うちは近海を攻略するまで遠征できないし、しばらくは水雷戦隊旗艦をどちらかに務めてもらうことになるだろう。

スペック的な部分は気になるけど……戦いは数だよ、なあ？

「そうか。これで近海攻略に乗り出せる……とは言い切れないが、目指すことは出来るだろう。当面の間は天龍と夕立、龍田と時雨でコンビを組んでもらうぞ」

「うん、わかったよ。提督の言う通りにする」

そう言つてにつこり笑つてくる時雨。

……厚い信頼を感じる。

あの作戦が終わつてから。

夕立もそうなんだが、ものつすごい信頼というか好意というか。そういうプラスな感情を向けられているのがわかる。

悪い気どころか心地いいんだけどな。でもまあ人間の妄想力は豊かなもんでつい病まない雨というフレーズが頭を過つてしまう。

まあそんな兆候は見られてないし、どちらかと言えばしつぽをぶんぶん振られてるというか。

忠犬？

そんな感じ。これは夕立が顕著だったりするんだが、行動を表に出すか出さないかの差で多分二人とも同じ感じ。

凡そなんでも頼めばすぐに領いてくれそうな雰囲気がある。夜戦もオツケー？ いやいやせめて改二……。げふん。

「近海攻略に向けて、第一艦隊旗艦を天龍、以下夕立。第二艦隊旗艦を龍田、以下時雨。そういうった形を取つて二艦隊同時出撃を考えているから。しっかり相互理解に努めてくれな」

「うん。……でも、同じ艦隊に組み込まないのは何故だい？ 軽巡洋艦一隻を旗艦にする水雷戦隊にこだわってるの？」

「いや、そういうわけでもない」

確かに四隻編成で取れる陣形を増やし作戦行動にあたるというのももちろん考えた。

「現在戦力を纏めて連携を深めるといふ時間が不足していると思う。だったら相手だけの事を考えればいい二隻編成を二つの方がいいと判断した。時雨は夕立の考えていることとか、なんとなくわかるだろう？ 天龍と龍田も同じだと思う」

「でもそれだったら、姉妹艦同士で組んだほうがいいんじゃないかな？」

もちろんそれも考えている。

戦隊なんて言うほどの数じゃないが、バランスを考えてのことだ。

「そうすることで、第一艦隊と第二艦隊で大きく力量差が出てしまつてはいけないからな。二艦隊同時出撃した所で片方が極端に強かったり弱かったりすれば、穴となる艦隊への一点突破で済んでしまう」
「なるほど。バランス次第ってことだね」

「ああ。まああくまでも予定つてだけの話だよ。時雨の言つた通り一つの艦隊に全員纏める可能性だつて十分にある」

時雨が顎に手をあててうんうんと頷く。

流石に軽巡洋艦二隻編成が駆逐艦二隻編成に劣るとは思えないが……まあ机上の空論に精を出しても仕方がない。実際に会つて実力を見て、それからだ。

「天龍型一番艦、天龍だ。……フッフ、怖いか？」

「龍田だよ」

これだよ。これ。

あーなんか安心するわ、フフ怖頂きました！ 内心ちよつと怖かつたんだよなあ。天龍が、じゃなくてだな。なんかこう、艦これでよく見た事やってくれると安心するわ。

「私がこの鎮守府の提督だ。異動要請に伝えてくれて感謝する。我が鎮守府はまだ戦力も整っていない弱小鎮守府ではあるが、どうかこれからよろしく頼む」

「提督さん、やっぱりその喋り方変っばい」

「しっ！ やりたいようにやらせてあげようよ。自己満足って大事だよ」

時雨さん？ 夕立さん？ 聞こえておりますことよ？

あーつたくしまらねえなあ……。

「まあ、なんだ……。二人の着任、心からうれしく思ってる。これからよろし……」

そう言いながら天龍に握手を求めようとした俺に。

「あら〜提督？ それ以上近づかないでくださいね〜？」

龍田が艤装を展開し、その槍っぽい穂先を突きつけてきた。

……まじかよ。よっぽどこつちのが怖いよ。

「!! やめなよ!」

「提督さんに何する気っぽい?」

俺の背後に控えていた二人もまた艤装を展開し、殺気と警戒を身に纏った感觸。

あーここ海じゃねえんだけどなあ……。

「時雨、夕立」

「つつ……わかったよ」

「っぽい……」

俺の声にその雰囲気を収めて艤装を解く二人。

んで? これは一体どういうことなんですかねえ。薄い本よろしく、天龍ちゃんに近づくと全てぶつ殺祭り開催中かな?

「さて、俺は握手を求めただけだが……ああ、一応二人に会う前に手は洗っているぞ?」

「あらそうなの。でもそういう事じゃないわあ……ねえ? 天龍ちゃん」

「あ、いや……。まあ何だ。オレ達みたいなの呼んでよ、一体何させようってんだ?」

天龍が頭を掻きながら聞いてくる。相変わらず龍田は俺に穂先を向けたまま。

警戒されてる?

「この鎮守府近海では戦艦ル級の存在が確認されている。今うちには俺の後ろにいる二人しか居ない。単純に現状を打破するために戦力を求めた結果、君達が来た。そう、俺は二人に出撃してもらおうと思っている」

「ほんとかよ! オレを出撃させてくれるのか!」

その言葉に喜びを露わにしたのは天龍。バトルジャンキーかな?

やっぱあれかね。遠征ばかりで出撃に飢えていたとかそんな感じ……。

「……なるほどねえ。そうやって私達を破棄するのね」

はい? 破棄?

何言ってるんだ龍田は。そんなつもり欠片もないが。

龍田は手に持った槍に力を込めたようで、ぎりつという音が聞こえた。

あらやだ、殺意満々ね。

「おかしいと思っただの。私達みたいな役立たずが異動なんて。……弱小鎮守府に危険な海域。よくわかったわ」

俺は全く理解できてないんだが？

いやいや、龍田つてまあよくわからんキャラだつてのはよくわかってるけど、これは流石に意味不明すぎるぞ。

「どうせ沈まされるなら……いつその事……。天龍ちゃんはやらせないんだからっ!!」

「提督!!」 「提督さん!!」

瞬間、龍田は槍を自分の手元に引き、俺に向かって突き出そうとして……その穂先を時雨が叩き落とし、夕立が龍田に襲いかかった。

「何をするのかしら、あなた達？ 二人だつて、そう望まれてるんでしよう？ 無理しなくていいのよ。私と一緒に……逃げちゃおうよ」

「ちよつと意味がわからないっばい!!」

「そうだよ！ 僕の提督はそんな事望んでない！」

ごろごろと夕立と龍田がもつれ合い、ドアの所で止まる。組み敷かれているのは龍田、その目は変わらず穏やかな形をしているが、俺に向かって殺意をしっかりと飛ばしてくる。

いやいや、呆気にとられている場合じゃねえな。おいフフ怖さん。お前もだ。

「やめろ、夕立。時雨も臙装をしまつてくれ」

「そ、そうだ！ 龍田もしまつてくれよ！」

睨み合っていた三人だが、俺達の言葉が聞こえた少し後、しぶしぶと言った様子で臙装をしまった。

「龍田」

「……何かしら」

何を勘違いしてるのかわからないけど。これだけは言っておかねえとな。

「俺はお前たち二人が沈む事なんて望んでいないし、沈めたいとも思っていない。それは夕立、時雨にも同じく、だ」

「……信用出来ないわ」

まあそりゃそうだな。

言つて信じられるなら最初つからこんな真似しねえわ。

「んじゃあこうしようか。龍田と夕立で演習をしよう」

「はい？ そんな事して、何になるの？」

「もしお前が勝つたら……そうだな、俺を殺していいぞ」

「提督!」「提督さん!」「はあ!」「……へえ?」

四人とも驚いてら。まあ一番驚いてるのは俺だけ。

なんでこんな事言つてんだか。

あの船で二人を助けに行つた事もそうだけど、どうも自分の命を安く扱つてしまふな。

でもなんだろ。

それが当たり前だと思つてる自分が居る。

あの時、羅針盤の妖精は言つた。命くらい賭けろつて。

多分。

命つてのは安い。

艦娘の命つてのは、多分この世界では限りなく安い。

艦これでもそう。

一隻轟沈しようが、新たに手に入る。そしてどれも同じ様に自分に對して接してくる。損失つてのはその艦娘にかけた時間と労力だけだ。それに対してショックを覚えてるだけで、再び手に入れることが出来る命なら、命を損失したという事にショックを受けた訳じゃない。

なら、その一隻にこだわる理由もない。だから効率の良い捨て艦だつたり、バイト艦だつたりそんな考えが浮かぶ。

俺も含めて、そういつたプレイを嫌う人間だつて多いけど。感情論を抜きにした、それは事実だ。

そうやって命を扱ってきた俺の命もまた、安い。だつたら賭けるべきだ。

命が安いんだ。言葉なんて、態度なんてもっと安い。

「無論、それですぐお前達が捕まるなんてしないようにしよう。せめて安全に逃げる事が出来る位にはな」

「じゃあ私達が負けたら？ 大人しく礎にでもなったらいいの？」

ああ、あれだな。

意外と龍田って短絡的なんだな。それもまた良しだけど。

「別に何もしてなくていいさ。俺の命令に従えども、沈めとも言わない。……ああ、そうだなとりあえず俺を殺そうとしないでくれたらいいか」

「はい？」

引き換えに言うことを聞かせたって仕方ないだろう。ニートで学んだ意地汚さへの理解力舐めんな。

「じゃ、そういうわけで。えーと、今がヒトヨンマルマル……じゃ、ヒトゴーマルマルにすぐその近海でやろう。時雨と天龍はすまないが、演習を行っている間その付近の警備を頼む」

「……わかったよ。提督の言う通りにする」

「お、おい！ いいのかよ！」

すんなりと……では無いけど頷いてくれた時雨に天龍が驚く。まあ驚くか。

「うん。……夕立、わかってると思うけど……」

「任せるっばい！ ……これでも夕立、とっても怒ってるんだから！」

慌てる天龍を尻目に、ギラギラと戦意に満ちた瞳を龍田に向けている夕立。

「つつ……あらく旧式とは言え、駆逐艦如きに負ける私じゃないわよ？？」

その戦意に一瞬息を飲む龍田だが、負けじと戦意を宿し夕立を煽るように言う。

だが夕立はそんな龍田にふっと一笑み向けた後、執務室を後にし、それに時雨が続いた。

「……提督？ ちゃんと首は洗っておいてね？」

「ああ。じゃあ風呂にでも入っておくよ」

そう返すと、面白くなさそうに鼻を鳴らした後執務室を出ていった。

「ふう……」

やれやれ、困ったもんだ。

とりあえずそうだな。

「風呂にでも入るか」

「ちよつと待て！」

ツツコミを入れてくれた。うんうん、いいぞそのツツコミ。天龍、キミをツツコミ大臣に任命しようじゃないか。

「いいのか提督！ あんなこと言つて！ 知らねえぞオレは！」

「なんだ。あれ以外に場を収める方法があるのか？ よしんば収めたとしてもお前たちがすんなりここに馴染めるとでも？」

何かを胸に宿しているやつは、それが叶わない限り絶対に引かない。そういうもんだ。

俺だつてそんな気持ちになけりや甲勲章全部取つてねえよ。

「そ、それはそうだけどよ！ 駆逐艦が軽巡洋艦に勝てるわけがねえだろ！ お前、死んだも同然なんだぞ！」

「何だ？ 心配してくれるのか？ 優しいな、天龍ちゃんは」

「ぶつ殺すぞ！」

まあまあ落ち着きなさいな。

何々出来るわけがないつてのは、言い訳に過ぎないんだよ。保険とも言う。

俺もそのフレーズはよく使つてたからな、痛いくらいに理解してる。

「……あんなヤツに勝てるわけがない。そう言えば、深海棲艦は攻めてこないのか？」

「っ！」

んなわけないわな。

白旗を上げて引いてくれる相手なんかじゃないつてのは、艦娘のお前たちが一番よくわかつてるはずだ。

打倒する。撃沈する。

そうしないと引かないんだ。守れないんだ。

「だったらやらなきゃ。その結果俺が沈むなら、それはその程度に過ぎないんだ」

「……つく！ オレは知らねえからな！」

何に怒ってるやら。天龍もまた執務室から出ていく。

ほんとにさ。

もうちよつと簡単に事を運べないもんかね。あんまりハード過ぎると俺諦めなくなっちゃうぞ？

まあいいさ。

なんでも始めたては苦労するもんだわな。早く落ち着いてハーレムライフを満喫したいよ。

相変わらずの夕立に龍田はタジタジのようです

——使えない。

それはそうなのかも知れないわ。

出撃はともかく、損害を遠征で受ける艦娘なんて聞いたこともない。

天龍ちゃんは遠征から帰ってきた時、大破していた。

出撃は私も天龍ちゃんも毎回、見事に大破して鎮守府に帰投した。それを見てまずあの鎮守府の提督は戦力としての私達を諦めた。

だから遠征部隊として起用した。

それはわかるわ。

海に蔓延る深海棲艦にも、艦娘の軽巡洋艦にも。旧式の私達がスベックで敵う事はない。だからこれは仕方のないことだ。

逆にだからこそその燃費の良さがあった。僅かではあるけれど、少しでも貢献出来る道があるのなら嬉しい限り。

その私達が必要とされる遠征で、大破した。

運が悪かった。まさしくそう。

もう何度も繰り返し返した事のある遠征。エキスパートと言ってもいい遠征任務だった。

深海棲艦に遭遇しないように索敵に余念は無かったし、ルートを外してしまっただけでもなかった。

ただただ随伴艦が初めての顔ぶれで、初めての遠征任務だっただけだ。

いつものように。ううん、いつも以上に警戒はしていた。同時刻、別遠征任務に向かっていて私は、資材回収ポイントが近かったこともあり、無線で密に連絡を取り合っていたからよくわかっている。

「オラオラ！ 駆逐艦ども！ へばってねえか！」

「だ、だいじょうぶなのです！」

「一人前のレディなら……この位余裕よっ！」

随伴艦の皆を天龍ちゃんらしく鼓舞しながら、警戒は念入りに。天龍ちゃんは私と何度も連絡を交わしあった。

だけでも、それでも。

「ちいっ！ 敵艦載機見ゆ！ 全艦、対空射撃を行いながらこの海域から一旦離れるぞっ!!」

「天龍ちゃん!？」

私達の警戒網を掻い潜ったのか、それとも見落としていたのか。

深海棲艦は現れた。

通じたままの無線から砲撃音が鳴り響く中、私は何もすることが出来ず、ただただ祈った。

何度も繰り返し返した任務。何度も遭遇した状況。何度もした祈り。

だったら今回も大丈夫。心配することはない、天龍ちゃんは遠征のエキスパートだ。

そのはずだったのに。

「きゃあ!？」

「雷っ!? く、くそつたれええええええ!!」

その声を境に無線から聞こえる音は途絶えた。

「龍田、さん?」

「……」

手が、足が、身体が震えた。

何か、いつもと同じとは言えない事が起こった。それが理解できなかった。

「龍田さん!!」

「……っ！ 全艦反転っ！ 天龍率いる遠征部隊の応援に向かうわよっ！」

随伴艦の子に呼びかけられて我に返った私は、そう命じ、皆はそれに頷いてくれた。

どれだけ焦っても、どれだけ心配でも。

スピードの出ない旧式の身体がこれほど恨めしいと思ったことはなかった。

それでもようやく合流できた時に、目にした光景は。

「あ、ああ……」

随伴艦を庇って敵の砲撃にさらされている天龍ちゃんの姿だった。

「龍田さん！ しつかり！ 早く助けましょう！」

「う、うん！ そうね！ 行くわよっ！ 皆っ！」

「了解っ!!」

幸い、轟沈艦は居なかった。私が率いて居た艦隊の損傷は軽微。

ただ天龍ちゃんが率いていた子達は何れも中破以上、一人での海上走行が出来ない状態で。

同隻艦隊だったことが幸いして、なんとか無事に全員帰投できた。

運が良かった。全員無事だったのは運が良かった。

だけど。

「遠征で大破だと……？ 馬鹿者が！ 出撃で足を引つ張るしかでき

ん奴が遠征でも足を引つ張ってどうするっ！ 使えんっ！ 全く使えんやつだな貴様はっ!!」

運が悪かった。無事を喜んでくれるわけでもなく、遠征を失敗してしまったことを慰めるわけでもなく。

ただ叱責。罵声を飛ばしてきただけの提督の下に着任したのは……運が悪かった。そう思いたかったのに。

口汚く罵る提督が大破したままの天龍ちゃんの頬を張った時。

「あら……死にたい子は、ここに居たのねえ……？」

無意識に艦装を展開し、提督に襲いかかっていた。

「……あれから、どうなったのかしらねえ……」

怯えて腰が抜けたあの提督の姿は覚えている。その後すぐに取り押さえられた事も覚えている。

営倉に入れられて、解体を言い渡された事も覚えている。

だけど、どうして私が今新たな鎮守府に着任しているのかはわからなかった。

でもそれもすぐに理解できた。

この鎮守府は、墓場。

きつとあの駆逐艦も、今日の前で演習開始を待つ駆逐艦も。きつと何か問題を起こした艦娘で。

ここに沈まされる為にやってきたはずだ。

ならばここは問題児……いや、あの提督の言葉を借りるなら、「使えない」艦娘の行き着く所。

鎮守府近海に戦艦ル級？ そんなの聞いたこともない、どれだけ無理やり前線を押し上げて鎮守府を建築したんだろう。

……どれだけその戦線を押し上げるために、「使えない」艦娘を「使った」んだろう。

考えるだけで、虫唾が走るわ。

「間もなく、開始一〇分前だ。双方、最終艦装確認の後、定位置へ」

「問題ないっばい！」

「……問題ないわ〜」

艦装に込められた弾薬はペイント弾。問題はない。

旧式とは言え、駆逐艦を相手にする事も、問題ない。

「今なら止めてあげてもいいのよ〜？ あの提督には死んでもらうけど〜」

「……それ以上言うのは止めたほうがいいっばい。夕立、実弾に変えたくなっちゃうっばい」

睨まれちゃった。

その一瞬、目が紅く見えた気がするけど……うん、気の所為ね。緑だ。

でも、なにをそこまで怒る事があるのかしら？

「……あの提督のため？」

「わからないっばい。でも、夕立は提督さんのおかげで、時雨を悲しませないですんだっばい。これからも皆を守ることが出来るっばい。提督さんのおかげなの……だから、その提督さんに危害を加えるのは」

——許さないっばい。

ぞくり……と、背中に悪寒が走った。

出撃の時も、ましてや遠征なんかでは感じたことのない、悪寒。

怒ってる……んだと思う。わかるわ。わかるのに。

この子は笑っている。それが、恐怖として、悪寒として背中を這い

登った。

恐怖？ 私が？

「ふふふく……退屈しないで、よさそうねえ」
「なら良かったっぽい！」

そう言つて夕立ちちゃんは私に背を向けて規定位置へ向かった。

私も向かおう。

そして見せてあげよう。

「天龍ちゃんの同型艦と言われ侮られた私の力。」

「私を本気にさせるとは、悪い子ね。死にたいの？ うふふ」

ドンツ！ つと開始の砲がなる。

さあ、お互いに単艦。陣形も何も無いわ。好きなだけ、好きなように暴れられる。

確か白露型駆逐艦夕立。最大速力は三十四ノット。私は三十三ノット。

大きく速力差があればスピードで振り回されてしまう可能性だつてあつたけど、この程度の差じゃそれもさせないわ。

「さあ！ 死にたい船はどこかしらあ〜!？」

言つてから気づいた。

どこも何も無い。

「夕立っ！ 突撃するっぽい!!」

まっすぐ私に向かって突っ込んできている……っ!？」

「ば、馬鹿なのかしら〜?」

動揺しそうになった気持ちを落ち着けて、照準を合わせる。

そんな全速で突っ込んで来ているなら、緊急回避運動だつて取れないでしょうに……!？」

引き金を引く。

真っ直ぐに、砲撃は飛んでいって……。

「っ!？」

「あははっ！ 無駄っぽい!」

『夕立、小破。戦闘続行に支障なし』

無機質な声であの提督のアナウンスが入った通り、直撃ではなさそうだけど小破。

なのにもかかわらず、あの子は笑って私に進む足を止めない。

「じ、次発装填!!」

焦っちゃだめ。まだ距離はある。

多分装填が終われば、あの子の射程圏内だろうけど。駆逐艦の一発とのダメージトレードなら、私の方が優位に立てる。

落ち着いて、よく狙って……!

『夕立、脚部艤装損傷、速力低下。攻撃艤装損傷、砲撃行動に支障あり中破』

当たった、はず……!

でも、でも。

「うまいっばい! 夕立、次はもらわないつもりだったっばい!」

何で、砲撃が飛んでこないの!? 何でまだ距離を詰めてくるの!?

「つく!?!」

「ありや? 失敗したっばい」

そ、そうだ、当たり前よっ! あの子は中破! それもその12cm

m砲の筒に損傷判定! 撃てるわけない!

距離……そう、距離を取ってしまえばもう後は私が一方的に撃てる

!

「あれ? 鬼ごっこっばい? 夕立、ちょっと上手く動けないから

嫌っばい」

ペイントは脚部艤装にだってついていている! そうだ、だったら安全

じゃない。

ほら、どんどん距離が開いて。

「は、はは……そうよ。そんな考えなしに突っ込んで来てちゃ、そうなるわ〜」

同航戦の形で走る私達だけど、その距離はぐんぐんと開いていく。

これなら、私の再装填が終わった頃にはちょうどいい頃合いだ。

「これで、終わりよ……!」

再び照準を合わせる。

これで終わりだ。それはつまりあの提督を殺していいってこと。私達は開放されるってこと。

——チクリ。

不意に、胸が痛んだ。

なんだろう。私が胸を痛める理由なんてなにもないのに。

照準越しにあの子を見る。

相変わらず、獰猛な笑顔を浮かべているけど。その様にはどこか必死が見て取れた。

ああ、そつか。

あれは、昔の私だ。

こんな私だけど、ああやって必死になっていた時があった。

それを演習とは言え、大破。無くそうとしているんだ。それがわかった。

「だったら……私は過去の私と決別してやるわっ！」

引き金を引いた。照準はバツチリ。数瞬の後にはあの無機質な声があの子に大破、疑似轟沈判定を告げるだろう。

「もう！ これ、邪魔っばい!!」

そう、思っていた。

そう思っていた所で、あの子は。

自分の艀装、12cm砲を私の発射した砲弾に投げた。

「は、い？」

「ふっ！ 狙いバツチりっばい！」

まって。そんなの、聞いたことがない。

何よ、それ。ありえない。

そして、呆然と自分の砲弾から広がるペイントを眺めてしまっている。

「いい夢、見られたっばい？」

「……あ、はは」

いつの間にか零距离に詰められ、私の身体に三本の魚雷が突きつけられていた。

『龍田、魚雷直撃。戦闘続行不可能。大破。夕立、魚雷爆破に巻き込まれ大破。——戦闘行動に重大な支障認められるも、続行可能判定。夕立の勝利』

天龍様は何か思うところがあるようです

あの日は快晴。海の見通しも良くて波も穏やかでいい日になりそうなの予感があった。

確かに新米どもを率いて遠征に出るにはいい日だった。

それでも慢心はしない。

「ふふっ！ こんなにたくさん資源が取れるなんてっ！ 司令官、もつと私を頼ってくれるかしら？」

「そうだね。遠征はどんな物かと思っていたけど……これなら私達でもいけそうだ」

「はんっ！ ひよっこが何言ってやがる！ 帰るまでが遠征だ！

……帰ったら甘味でも奢ってやるから、最後まで気を抜くんじゃねえぞ！」

そう、資材を取得するまで。

龍田とのルート選定、今も近くの海に在るだろう龍田と無線での情報共有の甲斐あつてか、極めてスムーズに任務を行っていた。

現時点ではいつもより燃料、弾薬の消費も少なく資材回収量も多い。大成功。そう言える出来だった。

だが、帰り道。

ふとした違和感を感じた。

それが何かわからなかった。

それでもオレの何かが警鐘を鳴らしている。

危険だ、と。

だから急がせた。

燃料の消費が少なかったから、帰り道を全速で行くとしても当初見込まれていた消費量と同程度。

新米にはきついかも知れないが、危険と感じた事を見無視は出来なかった。

「オラオラ！ 駆逐艦ども！ へばってねえか！」

「だ、だいたいどうぶなのです！」

「一人前のレディなら……この位余裕よっ！」

オレは口下手だ。

こんな時、ちゃんと説明できていたならなんて今でも思う。

そうすれば、警戒ももつと促せたはずだし……被害だつてもつと抑えられたはずだ。

危険と感じていた予感が、確信に変わった。

空は相変わらずの快晴だったが、違和感は波から感じる事が出来た。

——敵部隊が急速で向かってくる。

「ちいつ！ 敵艦載機見ゆ！ 全艦、対空射撃を行いながらこの海域から離れるぞっ!!」

「え!？」

最悪だった。

安全なルートだと思っていた、何度も確認したはずだ。だと言うのに、何故。

駆逐艦どもは俺の一声に驚き、周囲をキョロキョロと確認している。

気づかないのか。

なんて言えない。こいつらは新米だ。

深海棲艦なんてまだ見たことがない、こういう時の対処方法は何度も教えた。だが、教えただけで出来るなら苦労はしないわけで。

「くそつたれ！ 全艦、輪形陣を取れ！ 敵艦載機の爆雷撃が来るぞ!!」

「あわわ……!？」

駄目だ、完全にテンパってやがる……つ!! 訓練で何度もやった動きが出来てねえ……!! 間に、合わ……

「きやあ!？」

「雷っ!？ く、くそつたれええええええ!!」

艦上攻撃機の雷撃が纏まり損ねた雷にあたっちゃまった！ 他の奴らは……!!

「くっ……」

「ふああ!？」

「きゃあつー！」

雷、大破。他はギリギリ中破よりの小破……つて所か。奇跡的に俺は無事……嘘みてえだな。

無事だけど……畜生、無線はイカレちまったか。

「……良いか、よく聞け。これよりオレは、深海棲艦との戦いに入る。お前らは俺を置いて先に帰れ」

「そ、そんなっ!？」

「旗艦命令だっ!! このままじゃやられるっ! お前らはさっさと帰れっ!!」

ちい! 問答する暇なんてねえのにつ!! もう肉眼で敵艦隊が見えてるっつーの!

「い、嫌だよ! 私だつてまだ小破だつ! 戦えるっ!」

「私だつて! もう一人前の大人のレディなんだからっ! と、当然戦えるわ!」

こいつらは馬鹿か! 強がっちゃあいるが、完全に恐慌状態じゃねえか!

「ひっ……!」

「くそがあああああ!!」

飛び出た二人の前に身体を曝け出し、敵砲撃を食らう。くっそいてえ。

「あ……あ……!」

「てめえら新米が逆立ちしたつて勝てねえよ!! 良いから下がれ!!」

あーあー。遂にオレも中破しちゃったか。余波でこいつらまで損傷してんじゃねえか。つたくよお……。

わりい、龍田。これじゃ前にも先にも進めやしねえ……先に、逝くぜ。

許してくれよな? こいつらをこんな所で、こんな任務で沈めるわけにはいかねえし。

「心配すんな、大破には慣れてんだ……。こんなの、屁でもねえ」

そこから、オレは何度こいつらを庇ったか覚えていない。

ただ、痛みという感覚すら感じなくなってきた頃。遠くから必死な

顔をした龍田の姿が見えた瞬間……意識を手放した。

気がついたのは龍田がオレを引っ張って来てくれたらしい鎮守府に帰投した時だった。

「遠征で大破だと……？ 馬鹿者が！ 出撃で足を引っ張るしかできん奴が遠征でも足を引っ張ってどうするっ！ 使えんっ！ 全く使えんやつだな貴様はっ!!」

執務室で出迎えた提督は開口一番にそういった。

ああ、オレでもそう思う。

被害が出ない……いや、被害が出る可能性が極めて低い資材回収任務。そんな任務で被害を出してしまうなんてそう言われても仕方がない。

あわや撃沈寸前だった初出撃。そして汚名返上の次回出撃も大破。

出撃すれば中破する俺と龍田。そんな俺達は他の軽巡洋艦より少ない資材で行動できる分、僅かでも資材黒字を生むことが出来る。

だから遠征専用艦として運用されていた。

手前味噌にはなるが、安定して資材を回収しあの鎮守府を支えているという自負があった。

出撃する機会が無くなったのはやっぱり毎回のように大きな損傷をこさえて帰投するオレ。そんなオレに役割を与えてくれた。

期待されている。

そう思っていた。

だから必死だった。

龍田と遠征が無事に終われば今回のルートはどうだったか。より危険度の低いルートは無いか。効率的に資材を回収する術は無いか。遠征完了の見込み時刻を減らせることは出来ないか。

そんな事を考えて、毎度龍田と顔を突き合わせた。

全ては出撃で足を引っ張るオレを、遠征任務の要として信頼してくれているであろう提督の期待に応えるため。

でもどうやら、オレはただ単に、遠征くらいしかやる事が無いと遠征に追いやられていたんだなって。

叱責する提督の声で頭の中が埋め尽くされる。

それらは全て、オレが何も出来ない役立たずであると言うことを教えてくれた。

——オレは、何をすりゃいいんだろうな。

そんな事を思った、その時。

「あら〜……死にたい子は、ここに居たのねえ〜?」

龍田が提督に襲いかかった。

「なん、だよ……ありゃあ……」

訳がわからねえまま始まった、あの駆逐艦……夕立だったか。と龍田の一对一の演習。

その決着を見て、思わず呆然としてしまう。

龍田は、間違いなく本気だった。見たのは大分昔、初出撃を大失敗に終えたオレ達が必死だった頃によく見た顔付きだった。

それを嬉しく思う暇はなかった。

カミカゼ。

夕立の攻め方はまさにその言葉が連想された。

まっすぐ、一直線に龍田に向かっていくその姿。

帰り道の事なんて考えていない、ただただ目の前の標的を我が身賭して撃破せんと向かうその姿。

「ありえねえ」

認められない。

こんなの演習だからこそ出来る。実際に損傷が生まれないからこそ出来る戦法だ。まともな演習じゃない。

あの提督は、こうやって駆逐艦を『使ってる』のだろうか。

だとするなら……。

「そうじゃないよ」

「!? ……時雨、だったか?」

「うん」

いつの間にか同じく警備についていた時雨が近寄ってきていた。

時雨はオレの考えていたことを見通したような目で言葉を続ける。

「ついこの前出撃があったんだけどね。その時も夕立、あんな攻め方

……ううん、あれ以上に突撃してたよ」

「はあ?」

夕立はバカなのか!? あんな攻め方してたら……。

「うん。沈みそうになったよ。いや、間違いなく沈んだ。だけど提督がその瞬間海に飛び込んでね、夕立を救ってくれたんだ」

「……」

あーいや。なんだ。

驚きで開いた口が塞がらないとはこの事か。つか、驚きが限界を超えると声すら出ねえもんなんだな。

ああ。

つまりなんだ。

「あの提督、海に出たのか」

「うん。バカだよな? あの時はもう陽も落ちてて、深海棲艦に見つかったら一発アウトだったのにな」

いやいや時雨。くすくす笑って済まされることじゃねえぞ。

「この鎮守府には、バカしかいねえのか?」

「失礼だね。そこに異動してきたキミに言われたくないよ」

むっとした顔を向けてくるがよお……そう思われても仕方ないって、お前もわかってるだろう。

海に出る提督なんて聞いたこともねえ。

海に出る必要が無いからだ。戦力的にも、危険的にも。

それを、ただ一隻の駆逐艦の為に鎮守府からでてくなんてよ。

バカじゃねえのか?

「そう。だから夕立も考えたみたいだよ? もし、前と同じならこの勝負は引き分けになっていた。最後の決着は同時に撃沈判定だったよ。あの時と同じ様に」

「……」

あの時ってのは、提督に救われた日の事か? それともまた違う日のことだろうか。

「僕も夕立も……きつとキミ達二人も。何か問題を起こして、ここに追いやられたんだよね?」

「も……ってこたあ、お前らも？」

「うん。僕は沈みたくない、沈む光景を見たくなくて出撃拒否。夕立は……昂ぶつてくると突っ込んでんじやう癖があつてね。それを庇った同型艦の白露を沈めちやつたんだ」

そう、か。

やっぱり龍田が言っていたのは、当たっていたのか。

この鎮守府が厄介者を押し付けて潰す場所だつてこと。

「でも、さ。もう大丈夫なんだ」

「大丈夫？」

そう言つて時雨は笑つた。本当に嬉しそうに。

「約束して、守ってくれたから」

「……ふうん」

約束、か。

内容は良いだろ。この笑顔を見りや、それによつて……いや、あの提督に心身共に救われたつてのがよく分かる。

なら……。

「信頼してるんだな」

「もちろん。提督だもの」

オレも、強くなれるだろうか。自分の価値を信じられる位に。

龍田も、強くなれるだろうか。相手を、提督を信じられる位に。

「さ、撤回しようよ」

「……ああ」

——またこの海を征けるだろうか。龍田と……仲間と共に。

海は何も答えてくれない。ただ、水面の顔は……何かを期待しているような瞳を映し出していた。

天龍様は訓練に参加するようです

「演習結果に不満は？」

「……ないわあ〜」

そうかそうか。なら良かった。

しっかしすげえな、龍田。

あんな勢いで突っ込んで来た夕立に全弾当てるとは。普通ビビる、むしろ俺ならビビってる。

やっぱ昼行灯つつーか、影の実力者つつうか。

そんなイメージは間違いじゃなかったか。

最後の一発は惜しかったな。

夕立の艦装を投げるって発想がやばかった。あんなん誰も思いつかねえよ。

まあともあれ。

「じゃ、最初に言った通り俺を殺すのはやめてくれな」

「ほんとに、それだけでいいの〜？」

あん？ 何だよ、最初に言っただろうに。

それとも何か？ ナニしてもいいってか？

……あ、そんな事言ったら息子切り落とされる未来しか見えねえわ。

「ああ。構わない。出撃させるつもりもねえよ」

「……別に構わないわよ〜？」

「生憎貧乏鎮守府でね。燃料、弾薬も艦娘も無駄に捨てる気はないんだ」

真面目な話。

もし無理やり龍田を出撃させたとして。

間違いなく、失敗するだろう。

いや、沈むと断言してもいい。

盲目的に何かに必死になってるやつとか。悲壮な覚悟を胸に秘めているやつとか。……目的を見失ってしまったやつとか。

そういうやつは限りなく確実に近い確率で失敗する。

平たく言えば余裕が無いやつは失敗する。

ほれ、よく言うだろ？ 死亡フラグって。ありやあマジだよマジ。俺はよく知ってるんだ。そういうやつを何度も見たことがあるからな。鏡越しに。

ともあれ、龍田はそんな顔をしてる。この顔が変わらない限り言われても出撃させるつもりはねえな。

「……別に死にたがってる訳じゃないけど。それにそう言うならあの子なんてもっと危ないんじゃないの？」

「私の事っぽい？」

話を振られたと気づいた夕立が首を傾げながら俺に聞いてくる。

うん、お前のことだよ。

「夕立はなあ……まあ色々言いたいことはあるけど。上手くなったな」

「褒められたっぽい！ わあい！ 提督さん！ もっと褒めて褒めて〜！」

きやつほいと俺に抱きついてくる夕立。

うむ、改造前にもかかわらず中々のボディ……。

「だけど夕立。あんまり心配をかけるなよ？ 時雨に怒られるのは俺なんだからな？」

「うんっ！ 夕立、提督さんの為ならどんどん強くなれるっぽい！」
とのこと。

龍田の方を見ると、何か言いたげな表情をしている。

「ロリコンなの〜？」

「違います」

イエスロリーターノータッチ。

だが、向こうから来る分には勘弁なっ！

「まあいい。とりあえず二人共風呂入ってペイントしっかり落としてこい」

「はあいー！」

「……わかったわ〜」

二人を追いやれば、執務室に残るのは時雨と天龍。

「さて、天龍はどうする?」

「どうするって何だよ?」

なんか睨んでる? フッフ、怖いよ。

「出撃に関してだよ。うちとしてはお前に旗艦を任せて出撃したいんだがな」

「オレが……出撃艦隊の旗艦?」

おかしいかね? 軽巡洋艦を旗艦にして水雷戦隊。普通だよな?

「ああ、仮に龍田が出撃してくれるとしても。旗艦は天龍にするつもりだ」

「……何でだ? 形だけの水雷戦隊に意味なんて無いだろ?」

何いってんだコイツ。形だけの意味がわからん。

「オレの大破率は知ってるだろ? そんなのが旗艦だなんておかしいだろ!」

「あー、なるほどな」

そうだな、確かに旗艦が大破したら航海続行不能になっちゃうしな。

旗艦絶対轟沈しないルールはどうやら無いみたいだし? 仕方ないね。

艦これでも天龍はよく大破していた。

ぶっちゃけた話、任務で天龍、龍田を使わなきゃならないというのが無かったら、ずっと遠征に改造もせず使ってただろう。

任務で使うから育てた。

割とレベリング中はマジで不思議に思ってた。なんでこんなに大破するんだよって。

んで、だ。

大破する理由を脳内妄想で補完することで解決させた。

「なあ、天龍。お前の左目は見えるのか?」

「ああ? 眼帯の方か? ……いや、見えねえけど」

それがこれだ。

元ネタは探照灯が片方割れたからの話があったけど、まあ詳しくは知らん。

だけどそう。

片目だから遠近感が狂い、左側の死角に対応出来ないんじゃないやねえかって妄想した。

その感覚を調整していつてるんじゃないやねえか。それで練度が上がってるんじゃないやねえか。そんな風に。

そして見えないなら……活路はある。

「時雨、今日もいつもどおりに訓練をするぞ」

「うん、もちろんだよ」

「天龍、夕食後のフタマルマルマル。鎮守府内の道場に集合だ」

「あ？ 道場？ んな所で何を……」

「返事は？」

「つち。フタマルマルマル。天龍、道場に向かう」

「よろしい」

にっこり笑って返事をしてくれる時雨とは対象的に、訝しげな表情のままとりあえず返事をしてくれた。なら来るだろう。

「ああ、時雨？」

「うん？ 何だい？ 何でも言っつてよ」

ああ、なんつーかあれだな。ほんとに何でも言っつて良いって感じだ。

ナニでも……。

んっんっ！ イエスロリータノータッチ！

「龍田にも伝言頼む。その時間、皆ここに居るってな」

「来いとは言わないんだね」

「ああ。後、事前に言っていた組み合わせは却下だ。気が済むまで、考えが済むまで好きにさせてやれ」

「うん、わかったよ」

察しましたと頷く時雨。

いや、ほんとに優秀だね。

多分、龍田は今なら命令に従ってはくれる。けど、従いたい、こなしたいと思っつてはいない、くれないだろう。

俺というヒキニートとはまた違うが、通ずる物がある。

強制されると、余計に反発したくなるもんだ。

なら気が済むまで好きにさせたら良い。

……余裕は全く無いけどな。

鎮守府が潰れるのが先か、龍田がやる気になってくれるのが先か。

今俺に出来ることは、その時が来た時にすぐ動けるように天龍を鍛えるだけだ。

さて、道場についた。

そこには龍田を除く全ての艦娘が揃っている。

「さて、今日も始めよう。夕立、演習の疲れは無いか？」

「全然大丈夫っほい！」

「よし……なら夕立は時雨と組み手だ。時雨は回避に専念。夕立はその状態の時雨にどうすれば攻撃が当たるかしっかりと考えながら行うように」

「わかったよ」「はい！」

そう言つて少し離れた所で早速組み手を始める二人。

夕立はともダメージトレードで優位に立つつてのを意識しているようだが、それだけじゃ駄目だ。

それは言い換えれば、自分がダメージを受けなければ相手にダメージを与えられないという事。

出撃して一回だけの戦闘ならそれで良いかもしれないが、やっぱりそう上手くは行かないだろう。

二戦目、三戦目があつて然るべきだ。艦これでは1-1攻略はどうやっても二戦で終わるが、それでも二戦だ。ここではそれ以上戦う可能性だつてある。

一戦目で大破して進むなんて出来ない。大きいのは大破進軍への抵抗感だが、夕立の気質だつてある。

回避する相手にダメージを与える技術はそういった部分を補ってくれるだろう。夕立に回避しろ、それでいて相手にダメージを与えろと言うのはまだ早いと思う。

「で？・提督。オレはなにすりや良いんだ？」

「ああ。今から説明する」

さて、天龍だ。

天龍の可能性。それは隻眼であるという事。

健常者にはわからない感覚かもしれないが、五感の一つが機能しない人は機能している感覚が鋭敏になるという話がある。

例えば、全盲の人間は道を歩く時、白い杖の先から伝わる感覚、足の裏に感じる道の感覚。点字を指で感じる感覚。

要するに触感がかなり鋭敏になる。

無論それだけじゃない、聴覚だって鋭敏になるし嗅覚だってそう
だ。

閉じられた機能を補うためにより他の機能が進化するのだ。

「天龍。これから行う訓練は慣れるまでは痛い。もしかしたら慣れる事無く何も得られないかも知れない。それでも、出来るか？」

「……よくわからねえけど。それが出来るようになれば、オレは強くなれるのか？ 出撃出来るくらいに」

「ああ」

「なら、やる。強くなってみせる」

実際わからん。

時雨も夕立も。

今は徒手空拳であったりするが、やっぱりこれが力になっているのかどうかはわからない。

ただそれでも、あの二人はやっている。

無駄ではないと思っている、くれているからだろう。そう信じているのだ。

だったら俺も信じるべきだ。

「じゃあこれを眼帯をしていない方に」

「え……う？ これって眼帯？ これじゃあ何も見えなくなるぞ？」

「ああ。その状態で俺がこれを振るから避けてくれ」

「はあ!？」

天龍は隻眼だ。

それによって距離感や空間把握能力が健常な者よりも劣っている。

それは間違いない。

そして、それでも片目での情報に頼ってしまっている。だから、自分の他の感覚の訴えに素直になれない。ここで避けるべきだ。いや、まだ砲は遠いはずだ。

身体が訴えても、視覚はそう言っていない。だから、砲撃を雷撃を食らってしまう。

だったらいつそ閉じてしまえばいい。

視覚情報を身体に反映するんじゃない、正確に感じることを出来る感覚を視覚に反映させるんだ。

もちろん、実際に出撃する時に両方眼帯をさせるつもりはない。ただ、自分の他の感覚をもっと信じるべき、耳を傾けるべきだ。

「自分の勘と感覚の違い。それに悩まされたことは無いか？ 危ないと思っけていてもすぐに行動出来ない、もしくは行動したはずなのに手遅れだったとか」

「そ、それは……」

思い当たるフシがあるのか、二の句が継げない様子。

「これはそれを調整……矯正とも言うか。そうするための訓練だ。

……どうだ？ やれるか？」

「……これをすれば、強くなれるんだな？」

「ああ」

手に持った眼帯をじつと見つめる天龍。

そして意を決したのか。もう片目に着けた。

「ならやるさ。提督、オレを強くしてくれ」

「よし。それでこそ、だ。最初は打つ方向を口にしてからゆつくりと打つ。だが、いつ打つかは言わない。危ないと思ったら回避するか防衛するんだ」

「わかった」

ぐつと構える天龍に向かって、左から打つと言ってからゆつくりと振る。

そしてそれを。

「……………か？」

「お？ 出来るじゃないか」

当たる寸前で俺の竹刀を手で取った。

「フフ、なんだ結構簡単だな」

「よし、じゃあ少しづつ早くしていくぞ？」

「うっし！ ドンドン来い！」

そして早くなつていく竹刀をキャッチ、時に躲していく天龍。

正直、驚いた。

まるで見えているかのように難なくこなす天龍。

「すごいな、天龍」

「フフフ、オレの才能が怖いか？」

「ああ、流石世界水準を超えた軽巡洋艦だ」

「フフフ、まあな！」

なんか調子に乗ってるな。

よし、ここは一つ。どっちから打つか言わないで……。

「あいたつ!？」

「……調子に乗らなければ、な」

「ず、ずるいぞ提督！ 言わないで打つなんて言わなかったじゃねえか！」

諦める、俺は天龍をいじめたい欲を持ち合わせているゲスだ。

正直真面目なシーンをこなすよりも自信満々なお前をいじりたくて仕方がないんだよ。

「ちゃんと感覚を信じろ。今だって一瞬ちゃんと避けようとしたのに躊躇しただろう？」

「う、うぐっ！」

「改めてここからは言わないぞ？ しっかり意識を張り巡らせろ」

そう言うとき大きく深呼吸をする天龍。

吐き終わって顔を上げた天龍の目は。

「よしっ！ 来やがれ！」

「おうっ！」

眼帯で見えないのにも関わらず、前に進もうと言う意気に溢れているように感じられた。

道場の入り口でこっそりと、迷いの晴れない目をこちらに向けている龍田とは対象的に。

提督は龍田の事を煽るようです

あれから少し経った。

幸いというべきか。深海棲艦の攻勢は見られなかった。

ただ一度攻められた、偵察艦隊が帰投しなかったという結果だ。あの程度の戦力がここにあるというのはわかっていないはず。

ならば、相手方も相応の準備をしているのは間違いないだろうな。

「そうだね。鎮守府近海は静かだけど、警戒ライン付近でやってる間引き作戦もそんなに大きな戦果はあげられてないし……そろそろ、こっちからも攻勢をかけないと危ないと思うよ」

「わかってる……んだけどなあ」

日々の哨戒任務。それに加えてうちの艦娘同士の演習や防衛ライン付近で深海棲艦の間引き作戦を行うようになって、資材の減りが少し加速した。

特に燃料がやばい。今では残り100を切ってしまった。

……ゲーム開始当初を思い出さなくもないけど。ここまでかつかつじゃ無かったよなあ。

まあこれも任務達成報奨が無いことや、遠征で資材回収を出来ないからだけだ。

燃料とか弾薬とか。

それ以外の補給物資。言ってしまうえば食料とかそういうのは送られてくるんだけども、な。

遠征経験が豊富な天龍にも聞いてみたけど、やっぱり鎮守府近海で資材が手に入ることとはあまり無いらしい。

一度時雨と天龍で哨戒ついでに鎮守府近海のマッピング、資材回収出来そうなポイントの探索を頼んだがやっぱり資材は見当たらないかったみたいで。

マッピングはしっかり行えた。

面白いことに艦これの1-1……鎮守府正面海域と同じ海図が出来上がった。もしかしたら敵出現ポイントなんか同じだったりしないかね。

どちらにしてもこちらの態勢が整えば確認出来るんだろうけど。来る正面海域開放に向けて、天龍を旗艦とし、夕立、時雨によって行われる間引き作戦もあまり効果的とは言えない。

戦力上の問題であり深海棲艦を釣り上げて撃破するって行動が取れないからだ。半ばただの哨戒に近い。ゲーム的に言ってしまうと1―1―1周回してるようなもんだ。

「ジリ貧なんだよな……態勢が整えばなんて言っていたらキリがないし」

「うん……僕もあの資材量を見るとやっぱり怖くなってきちやうよ」
だよなあ。

そろそろ腹を括るべきなんだってのはわかっている。出撃して、鎮守府正面海域を開放しないとどうにもならないのはもうずいぶん前からわかってる。

正面海域のボス……要するに戦艦ル級を撃破し、制海権を奪取。その後には戦力、資材の補強を行いつつ掃討戦。

まさに言うは易し。

あれから、さらなる戦力補充の打診、建造を行うための資材の融通等はやれるだけやってみたがどれも却下。

近い鎮守府への交渉つつつても相手にすらしてもらえない。マジで大本営も近海鎮守府も、ここ守る気あるのかよ。

龍田が言った、破棄って言葉。それが頭を過る。

「天龍と龍田の様子は？」

「天龍さんはそうだね。間引き作戦出撃はもちろん、演習や訓練に積極的に精を出してるよ、僕も見習わないとって思うくらいに。龍田さんは……ちよつとわからないかな」

龍田、なあ。

毎日何やってんだらうかね。

時折姿を見つけては、俺の方をじっと見つめた後何事も無かったかのように立ち去る。

ほんと、よくわかんねえ。

天龍に関しては驚きの積極性というか才能の開花と言うか。

あの訓練を続けていく中、あいつは目隠ししたままで夕立とやりあうレベルまで辿り着いた。

これが俺や時雨相手ならまだまだ一方的にやられる天龍だけど、夕立の様な攻撃する意思つてのがハッキリしてるヤツ相手とは五分の立ち合いが出来るようになった。

五分のやりあいが出るようになって、夕立もまた少し変わった。素直過ぎる攻撃に工夫を凝らすようになった。回避に優れる時雨に対してもどこか動きを誘導させ自分の思う壺にはめようとしたりする努力が伺える。

体捌き自体は誰よりも優れている。正直、俺でももう追いつけない。知識や経験で相手出来ているに過ぎないって断言できた。

間違いなく、夕立はエースと呼ばれる存在になるだろうな。そんな確信がある。

「む……僕だつて頑張つてるんだよ？」

「……わかつてるよ」

時雨さんちよつと怖いっす。

ともあれこんな察しが無駄に良い時雨。

天龍は自分の直感と言うかそういうのに従つて相手の攻撃を避けたり返したりするのに対して時雨は相手をコントロールしようとしているように見える。

自分の挙動で相手の攻撃を誘発して後の先を取る形。平たく言つてしまえば計算高い戦闘方法だった。

時雨と夕立が訓練している光景は大体決まって完封か完敗のどちらか。最後まで夕立をコントロール出来れば時雨の勝ち、その思惑を超えることが出来れば夕立の勝ち。

天龍に対しては、やや時雨が一方的に勝つ。相性的な問題が大きいけどこうしたらこうするでしょ？ という時雨の思惑にすっかり天龍がハマってしまう形だ。

天龍は。

「いや、自信なくすぜ……？」

なんて落ち込んでいたっけな。夕立との訓練でいい結果を出して

きているから余計にだろう。

「時雨がすごいのは言うまでもないさ。ただ、あんまりやりすぎるなよ?。」

「よ、喜んで良いのか省みるべきなのかわからないよ?。」

それはお好きなように。

「あ、提督さーん! 何してるっばい?。」

「夕立か。ちよつと資材の確認にな」

執務室で時雨と今後の事を話し終えてから。俺は資材集積所に足を向けていた所、哨戒に出ていた夕立と天龍に出くわした。

「夕立もどー一緒にいい?。」

「ああ、もちろん。天龍はどうする?。」

「そうだな、俺も行くか」

とこのことで一緒に向かう事になった。

「ふんふーん。しつぎいーしつぎいー」

「ご機嫌だな? 夕立」

「提督さんと一緒だと嬉しいっばい!」

ニコニコと笑顔を向けてくる夕立は可愛い。いや、ほんとに可愛い。い。

好意っつーか、信頼っつーか。

まあプラスな感情を向けられるのは嬉しいもんだ。

「ほんつと、戦ってる時とは別人だな」

「そうか? どつちにしても可愛いもんじゃねえか」

「あれを可愛いって言えるお前がすごいよ、提督」

苦笑いしながら俺にそういう天龍。

まあ実際俺が夕立と相對するのは訓練の時だけだしな。実戦ではまた違うのかも知れない。

少し先をスキップしながら行ってる夕立を見ながらぼんやりそんな事を思う。

「なあ、提督。お前はあの夕立を轟沈から救ったんだろ?。」

「ん? ああ、まあそう、なのかな」

「何でだ？ 話は聞いた。正直、駆逐艦の一隻を失っても結果から見れば十分すごい戦果だ。なのによ……わざわざ危険を冒してまで」
んなこと言われてもな。

あん時は妖精に脅されて……って言ったら変な言い方になるか。
危険だと教えてくれたから。危険だと知れたから。

あれは間違いなく、夕立が沈むと教えてくれたんだろう。

「天龍には言ってなかったか。俺はな、誰も沈めないって約束したんだよ。それが仕方のない犠牲であっても認めないってな」

「約束、ねえ。それは、時雨と、か？」

「口に出して約束したのはそうだな。だけどまああれだよ。ポリシーってのかな？ 俺は俺に約束したんだ、誰も失わないって」

艦これをやった時。俺はそう心に決めた。

やり始めた時、何もする気が起きない無気力な毎日。

それを救ってくれたのが艦これだ。

なんて言ったら大げさに聞こえるかもしれないけど。艦これがあつたから、俺はあん時生きていられた。

毎日思ってた。

この艦娘のレベル限界まで育てたら、この海域を突破したら。もう終わっても良いって。

でも艦これは終わらせてくれなかった。

次から次に可愛い艦娘が登場したし、イベントは鬼畜だったし。腹立つ事なんて何回もあつたけど、それでも。

俺は艦これのおかげで救われた。

少なくとも、ヒキニートしていられたんだ。

「ふうん……ならオレも、さ……沈みそうになったら助けてくれるか？ 夕立、みたいによ」

「何言ってるんだよ？」

「え？」

やれやれ、何を心配してるんだか。んなもん……。

「聞かれるまでも無い、当たり前前のことを聞くな。覚悟しろよ？ 天龍。俺の下じゃ沈めねえんだ。つまりそれは俺にずっとこき使われ

るってことなんだからな」

「あ……う……。そ、そうか！ だったら良いんだ！ へ、変な事聞いて悪かったな！」

「もー、二人共遅いっほいっ！ 早く行くっほいっ！」

夕立がわざわざ戻って来て、俺の手を引く。

いや、今ちよつと艦娘ハーレム計画を遂行中なんだ、ちよつと待つてくれ。

「ほらほらっ！ 急ぐっほいっ！」

「ああ、もう。わかったわかった！」

ぐいぐいと手を引っ張ってくる夕立に足を取られている中。

「……とよ」

後ろから天龍からお礼を言われた様な気がした。

資材のチェック。

その時に妖精が寄ってきてあーだこーだと無駄話をする俺に口を開いて呆然としてた二人が印象的だった。

どうやら、妖精をはじめ見たらしい。いやいや、なんでやねん。

そう思っただけでみると、以前の鎮守府では妖精なんぞ居なかったらしい。なんでやねん。居て当たり前な存在やがな。

いや、俺もつい最近まで忘れてたけどさ。やっぱ普通は居るものだろうか？

まあいいか。

とりあえず丁度良かったんで考えてた事を妖精に相談してみた。色よい返事だったので期待できそうだ。

天龍はなんかビビってたけど最後には恐る恐る触ってたし、夕立はすぐに妖精と追いかけてこした。問題ないだろう。

そうして夕食を食べて、龍田を除くメンバーで訓練をし終わって。

「そろそろ、か」

風呂に行った三人を見送って、執務室に戻る途中。俺は出撃の決心を固めていた。

ここまでの資源消費量から考えて、出撃出来るのはもう後一回か二

回。もう後が無い。

戦艦ル級、か。

確かに、軽巡洋艦と駆逐艦でも倒せないことはない。が、それは高練度の艦娘に限る。

この毎日の訓練で高練度になったなんて言えないし、よくある練度測定器なんて、実在するのもわからない以上確かめる術もない。

それでも出撃しなくちゃいけない。

「ほんつと……きつついなあ」

正直、うだうだ考えているせいで臆病になってしまってる部分がある。

出撃命令が命を賭けてこいって命令である事を正しく認識出来る程度には。

「守りたい、沈めたくない。そう言っておいて、命賭けて来いなんて矛盾してるよなあ」

これが上に立つ者つつーか、上官の辛さなんかね。

それとも、軍の上官つてのはそこらへんを上手く割り切る事が出来るもんなのかね。

わっかんねえ。

「あー！ くっそー！」

頭で悩むのは苦手だ。ポチポチゲーが良いんだよ、俺は！ 脳筋で

何が悪い！

「もうちつと、汗流してくるか」

足を反転し、もう一度道場へ向かう。

すっかり電気を落としたその道場。

当たり前だ、もう誰も居ないんだから。

「……っ！ ……っ！ ……っ！」

そのはずなのに、その中から聞こえる物音と微かな声。

足音を殺して、中の様子を伺えば。

「えいっ！ はあっ！」

「……龍田っ！」

「っ!？」

驚いた顔と、手に持った竹刀を俺に向けている、龍田が居た。

「てい、とくく？」

「……暗い中でやらなくてもいいんじゃないか？」

驚いたまま、どこかばつの悪そうな顔をしてる龍田を尻目に、灯りを点ける。

そしてそのまま壁にかけている竹刀を手にとって、素振りをはじめた。

面を一回、二回……。

随分と鈍ってしまった腕。

時雨や夕立とはじめて訓練するために握った時よりはマシになってきたが、全盛期には程遠い。

「……何も、言わないの？」

「ん？ 何か言って欲しいのか？」

「一人でこそそんな事してる私だよ？ 皆と一緒にやればいいじゃないか、とか」

ああ、なるほど。

言ってほしいのね。かまってちゃんめ。

「別に、この鎮守府にいるのなら誰が何時ここを使おうと、それは自由だぞ。皆と一緒にやるより一人がいいと思っただらろう？」

「そ、それは……」

「それとも何か？ 恥ずかしがり屋だなあとか、素直になれないやつだなあとか。そんな事を言って欲しいのか？」

素振りをしながらさういうと、龍田は少しむっとした顔になった。

ふふ、ヒキニートの煽り能力を舐めるでないぞ。

「まあそうだよな。着任早々あんな事言っておいて……しかも夕立との演習では負けて。どの面下げて混じれるのかって話だな。俺なら耐えられんな」

「……っ」

そこまで言うとは、苛立ちを隠しめせずその場を後に……俺から逃げるように道場から出ようとする龍田。

「何だ？ さう言って欲しいってわけじゃねえのか？ それとも凶星

を刺されてもう嫌になつたか？」

「そんな事つ……！」

「ならよ……」

わかっているさ。そんな言葉が欲しいわけでも無いくらい。ましてや優しい言葉が欲しい訳でもない。

意固地になる気持ちはよく、よくわかる。

発散したいんだろ？ やり場のない胸の内を。吐き出してすつきりしたいんだ、納得したいんだ。

だつたらよ。

ぴしつと竹刀の先を龍田に突きつける。

「ちよつと相手してくれよ。お前もこんなとこ一人で来るくらいだ、汗流したかつたんだろ？ 俺も同じさ、だつたら付き合ってくれ」

「……」

明らかに戸惑った表情を浮かべる龍田。

やっていいのか。悪いのか。

ぶつけて良いのか、悪いのか。

甘えて良いのか、悪いのか。

そんな思いが手に取れる。

「それとも、他に理由が必要か？ 俺に勝てたら、俺を殺していいとか？」

「そ、それは……」

瞳が揺らぐ。

それは龍田が俺に向かう為の最初の動機だつたはずだ。

そして押し殺された動機でもある。

「なあ龍田知ってるか？ 訓練つてのは事故が付き物なんだぜ？」

「っ！」

そうだ。

命は、安い。

だつたら曝け出そう。

まな板の上に。砲塔の先に。

それが海に出て戦うことの出来ない俺の出来ること。

そして、何があったのかは知らねえけど。信頼するって言葉を失ってしまったこいつらにその言葉を思い出させる事が出来る唯一の事。

「後悔しても……知らないからっ！」

「はんっ！ 上等っ！」

そうしてようやく、龍田は俺に信頼という名前の刃を竹刀に乗せて向かってきた。

龍田が提督にストレス発散するようです

天龍ちゃんは変わった。

ううん、多分。天龍ちゃんは天龍ちゃんに戻ったっていうのがそうかも。

あそこに居た頃。ただ単なる兵器として存在を認められていた頃には見せなくて。

ただ、出撃で役に立てない私達を遠征でなら力になれると、毎日必死に真面目な顔しか見せず突き合わせて居た頃の天龍ちゃんとは全く違う。

信頼しても良いのかな？ 信頼したいな。

そんな風に天龍ちゃんは少しずつあの人に関心をもち出した。

何も出来ない、しなかった私と違って。

羨ましいとも、良かったとも思う。

それは私が出来なくて、ずっとしたかったことだったから。

やっぱり提督はずるい。

提督というだけで私達艦娘になんでも命令出来るし接することが出来る。

そうだ、だったら私を使えば良いんだ。こんな役に立つのかわからないような訓練なんかせずに、私を囿にでもなんでも犠牲にして鎮守府正面海域を開放すればいい。

それが兵器つてもものだし、そう命じる事が許されるのが提督つてものだわ。

こんな苦しい環境で、こんな辛い最前線で。

それに耐えて、必死でなんとかしようとするよりも、その方がよっぽど簡単に事が進むと思う。

でも違った。しなかった。

あまつさえ、私に何もしないでいいと言った。好きにしろとも。

わけがわからないわ。

わけがわからないから、何をすればいいのか、何がしたいのかもわからなかった。

そんな中、天龍ちゃんは強くなった。

私にはわかる、もうきつと大破してばかりの天龍ちゃんはもう見なくて済む。

そんな確信があった。こんな役に立たないと思ってる訓練で、天龍ちゃんは自分の可能性を信じる事が出来たのだから。

何もすることが無かったから、したいことがなかったから。ただそんな風景を見ているうちに。

私も、何かが変わるかも知れない。

そんな風に思つて竹刀を振つてみた。そんな時に提督に見つかつちやつた。

恥ずかしかつた。あんな態度を取つた私だ。はつきり言つてどう言葉を向けたらいいのかすらわからなかつた。

戸惑つてる私を放つておいて。提督は竹刀を振り出した。放置だつた。

それもそうかも知れない。私に殺すと言われたんだ、そんな相手にこやかに挨拶でもするようであれば、その方が怖い。

自責の念からかな。ちよつと自虐的に声をかけてみれば。

「それとも何か？ 恥ずかしがり屋だなあとか、素直になれないやつだなあとか。そんな事を言つて欲しいのか？」

なんて言われた。

腹がたつた。こっちは少し悪いと思つていたのに。そんな気持ちは綺麗に無くなつた。

この人は、狼狽えている私を見て内心ニヤついていたんだ。そんな風に思つた。

性格が悪い。確かにあの天龍ちゃんを前向きにした。駆逐艦二隻での戦果を上げた優秀な人なのかも知れない。

それでもその本性はこれだ。

兵器として私達を使うよりもっとひどい。玩具か何かと思つてるんじゃないか。

続く言葉でそんな事を思つた。

でも殺しちやいけない。かつてあの提督をそうしようとした事は

ある。だから、行為に及ぶ事へ躊躇は無い。

だけど、正々堂々と約束させられたから、出来ない。

苛立ちを抑えきれなくなりそうだったから、その場を去ろうとしたけど。

「ちよつと相手してくれよ。お前もこんなとこ一人で来るくらいだ、汗流したかったんだろ？ 俺も同じさ、だったら付き合ってくれ」

もう本当に、わけがわからない。

やっていいのか。悪いのか。

ぶつけて良いのか、悪いのか。

甘えて良いのか、悪いのか。

……甘える？ そんな言葉が過った事に驚いた。

そうか、私は。

——甘えたいんだ。この人に。

全てをぶつけてなお受け止めてほしいんだ。やり場のないこの胸の内を。

天龍型二番艦龍田でもなければ、艦娘龍田でもない。

私を感じた思いを、受けて止めて認めてほしいんだ。

「それとも、他に理由が必要か？ 俺に勝てたら、俺を殺していいとか？」

ああ、それは魅力的な誘いかも知れないわ。

今の私はどうしてしまいかわからないから。

甘えたいとも、ぶつけないとも。誰かにそう思ったのははじめてだから、どうしてしまいかわからない。

「なあ龍田知ってるか？ 訓練つてのは事故が付き物なんだぜ？」
我慢が、出来なかった。

その言葉で、私の私を抑える何かがぶつりと音を立てて切れた。

「後悔しても……知らないからっ！」

身を任せよう、この名前のつけられない思いに。

そこからはもう何をしたか覚えていない。

どんな風に竹刀を振ったのか、どんな言葉を発していたのか。

それでもその尽くを提督は全て受け止めていた。その感触が手に、胸に残っている。

——何も知らないくせにつ！

言ったかも知れない。

——私達を何だと思っているのっ！

言ったかも知れない。

——貴方を殺せないなら、私を殺してよっ！

言ったかも知れない。

——悔しい……！ どうして、私は強くないの……っ！

ああ、全部言った。

胸にあった言葉も、頭にあった言葉も。全て言ったと思う。

最後に私が何かを言いながら竹刀を振った時。

「——ああ、わかった。ありがとう、よく頑張ってくれた」

竹刀を肩で受け止めた提督は、私の目を見てそんな事を言った。

そうして今、とても恥ずかしい事に。天龍ちゃんにも誰にも見られたくないことに。

提督の膝に私の頭があった。

「なあ龍田」

「……何かしら……？」

「この頭の輪っかって一体何なんだ？」

「……知らないわあ」

提督の肩を打ってしまった事で、私は我に返った。

そして自分のしたことに顔が青くなった。

あんなに傷つけたかと思っていたはずなのに、確かにそれに気づいた時私は、やってしまったと確かに思った。

それが不思議に思う。

でも提督は、気持ちの籠もったいい振りだった。なんて笑って言った。

気が抜けた私は膝から崩れた。思っていた以上に長く打ち合っていたらしい。

服は汗まみれで、息は上がった。

そんな中でも平然とした提督に腹が立ったけど。

膝の上に私の頭を乗せて、どうでもいいような事を聞かれてしまつて。

もう、好きにして頂戴とおもつた。

「なあ龍田」

「もう……何かしら？」

「明日。鎮守府正面海域を攻略するよ」

「……え？」

さつきと全く変わらない声色で穏やかに言われて、思わず耳を疑つた。

「ああ、心配するな。龍田に出撃しろなんて言わないから」

「……」

こんな時でも、あの時の約束……ううん、契約を言う提督。

「なんだ？ 心配してるのか？」

そうじゃない。

確かに、資材貯蔵庫にあるのは残り僅かな資材。

もう、確かに後がない。正面海域を突破しない限り、この鎮守府は深海棲艦に攻められて落ちるか、資材不足で潰れるかの二択だと思う。

だけど、そうじゃない。

「本当に、三隻で勝てると思ってるの？」

「勝てるさ」

嘘。

今提督は嘘を言った。

いや、この人は本当に勝てると思ってるのかも知れない。私が見ただ嘘と思いたいだけなのかも知れない。

「私も……」

「駄目だ」

出撃する、その言葉は遮られた。

さつきまでの穏やかな表情とうってかわって、真剣な表情で。

「ど、どうして？ 私が弱いから？ 皆と一緒に訓練しなかったから

？」

「違う。お前が死にたがってるからだ」

言葉を、無くした。

確かに、そんな事も言ったかも知れないし、そう思っていないとはつきり言えない自分が居たから。

「俺は、誰も沈めない。轟沈させない。それは俺自身との約束でもあり、艦娘との約束でもある。だから、沈みたがってるヤツを出撃させるなんて出来ない。いや、言い換えてもいい。どうして出撃したいのかがあハッキリしていないやつは、あやふやなまま必ず沈む」

「あ、う……」

言い返せなかった。

出撃しても大破して、這々の身体で帰投し出撃部隊から外され。遠征に集中することで敵艦隊を打倒する力になることから目を反らしていた私。

提督が天龍ちゃんにやった仕打ちにより、人を守ろうという意思を失った私。

上官に歯向かった役立たずの危険分子として、解体されそうだった私。

「……ま、安心しろ。俺の言うことなんて信じられないかも知れないが、大丈夫だから」
「……」

「さて、いい汗かけたよありがとう。もういい時間だ、風呂入って歯あ磨いて寝るんだぞ？」

そつと足を抜いて、立ち去っていく提督に。

私は何も言えないでいた。

受け止めてくれた。私を、私の思いを。

だからこそ、見抜かれた。

ううん、もしかしたら、最初からわかっていたのかも知れない。

だけど、それでも。

「私、は」

天龍ちゃんを失いたくない？ それはある。

あの駆逐艦達を守りたい？ どうだろう。
提督を守りたい？ わからない。
私は、なんで。

「どうして……こんなに出撃したいんだろう」

正面海域突破のため出撃するようです

ヒトマルマルマル。

鎮守府正面海域攻略の命が発せられた。

夕立は戦いに対して気炎を上げ、時雨はそつと目を閉じて覚悟を改めた。

天龍もまた、時雨と同じ様に覚悟を決めた。

いつものように、いつかのように大破するかも知れない。それでも今度こそと。

命令の通り、期待されている通り正しく完璧に遂行できる兵器としてではなく、天龍型軽巡洋艦の一番艦としてやれるだけの事。いや、それ以上のことをやってやると。

自分の存在価値を知らしめたい、そしてその価値を認めて欲しい。この海に、人類に……提督に。

その思いを決めた天龍は迷いの無い瞳を提督に向けた。

「各艦出撃準備」

「了解っー」

龍田がこの場に居ないことをこの場に居る艦娘達は残念にも思った。

ただ、それ以上に今回の作戦が無事に終われば、いつか龍田と共に海を駆ける日が来るはずだと信じていた。

それぞれの過去。

きっとこの鎮守府にはこうして傷を持つ艦娘がこれからもやってくるといふ事を理由なく確信していた。

そして自分たちが救われた、救われつつあるこの居場所を守りたいと思っている。ここに来ればきっと再び前を向くことが出来るだろうから。

その信頼という瞳は各艦程度の差はあれ、確実に提督に向けられていた。

この人ならば。

何年も培った絆ではないかも知れない。単なる気の所為だったり、

運が良かったただけなのかも知れない。

それでも、艦娘の本能とも言える何か心が心にそう訴えかけるのだ。
敬礼と答礼。

その意味を正しく交わした後それぞれが出撃準備を行う。

以前の緊急出撃と違って、妖精の手を借りながら行うそれは随分と手際よく、また確実に行われた。

夕立は12cm単装砲を二基装備し、今回は魚雷を持たない。これは未だ突っ込み癖が抜けきらず自分を魚雷爆破に巻き込んでしまう事から。

少し拗ねた夕立に対して。

「この次まで出来るようになればいいだろ」

と、なんでもないように提督は言った。

その言葉を夕立は心から喜ぶ。次がある事を当たり前の様に言うその事を。

「夕立、提督さんの為なら……何でも出来るようになるっぽい」

出撃準備を行いながら、戦いに昂ぶる心を寧猛な笑みに変えて。誰にも聞こえない声でそう呟いた。

時雨は夕立とは真逆、61cm三連装魚雷を二基装備した。

自身の持っていた12cm単装砲を夕立に渡したからでもあるが、何より自分の戦い方には砲撃よりも雷撃の方がマッチしていると考えたからだ。

相手の攻撃を誘導できるならば、相手の行動そのものも誘導、コントロール出来るはずだ。そう時雨は考える。故に、行動、進路予測が重要な魚雷を手にした。

「時雨。俺は嘘つきになるつもりは無いぞ?」

そつと手を胸に置き、その言葉を想う。

それは約束。

時雨はその言葉をありったけの自分で信じている。

「任せてよ、提督。僕だって嘘つきにさせる気なんて無いさ」

出撃準備を行いながら、心を温もらせる言葉に微笑みながら。気持ちよ提督に届けと願ひ呟いた。

天龍は14cm単装砲と7.7mm機銃を一基ずつ装備した。単純に自分が持っていた物以外に装備がなかったからだ。

改めて劣悪と言ってもいい状況の鎮守府に苦笑いを浮かべる天龍。役立たずである自分が送られる場所としては相応しい。

なんて思っていたこの場所は、もしかしたら何よりも、何処よりも自分らしく居られる場所なのかも知れないと思いはじめたのはつい最近。

「世界水準を軽く超えた天龍なら、こんなもんじゃねえだろう?」
バカにしてるのかとも思った提督の言葉。

そんなバカな言葉に発奮させられた自分はなんて単純なんだろうか。

——見せてやりたい。お前が望んだ天龍ってやつを。そう思った。

「ああそうだ。オレの名は天龍……フッフ、怖いか?」

出撃準備を行いながら、お前が信じた天龍ってやつを見せてやると、ニヤリと口元を歪ませながらかつての挨拶を呟いた。

出撃準備を終えて、波止場に集まった人影は5人分。

「……で? 何でお前が居るんだ? 龍田」

「あら? 居たら駄目なのかしら?」

全く悪びれず、出撃準備を完全に終えたその姿。顔はにっこりと笑みを携え、他の三隻からチラチラと視線を受けながら敬礼を提督に向けている。

「言っただけけどな……龍田、出撃は——」

「させて欲しいの」

させないと提督が言う前に遮った言葉は出撃志願の声。

浮かべていた笑みを潜め、至極真面目な表情で龍田は続ける。

「確かに、出撃する理由は見つからなかったわ」

「なら」

「でもね。出撃したいの、ソレを見つげるために」

龍田が言った言葉に提督は声を失う。

提督から見れば、今の龍田の目はここに来てから一度も見せたことのないもの。それがどういった意味を孕んでいるのかがわからない。ただ、天龍から見ればそれはかつてよく見ていた目で。

どうすれば戦力になれるかを必死に二人で考えていた時に見せていた、見慣れた目だった。

「行かせてやってくれねえか、提督」

「天龍？」

「こいつは死にたがってるわけじゃねえ。ずっと一緒だったんだ、それくらいわかる。それに何より、一隻だけでも戦力を勿体ぶっている余裕はねえはずだぜ？」

「……天龍ちゃん」

天龍の言葉にじっと考え込みながら、龍田の目を真つ直ぐに見る提督。

その目を龍田はまっすぐ見返した。

やがて、提督は溜息をつき、呆れたように笑った。

「はあ、わかったよ。だけど約束してくれ龍田」

「何かしら？」

ここで断られたらどうしようかと内心冷や汗をかいていた龍田は提督の苦笑いと言葉に安心——したのも束の間。

「必ず戻ってこい」

「……っ！ 了解よ」

思わず背筋が伸びた。

戻って来い、その簡単な言葉以上に込められた思いを感じたから。

そんな龍田に頷きを一つした後。

「やれやれ、予定が狂ったな。作戦内容を一部変更する。龍田が艦隊に加わった事で四隻、これで陣形が取れる様になった。事前に言った通り、本作戦は海上にて二戦予想されるが共に、複縦陣を取ってほしい」

二戦という予想。

これは艦これゲームを経験し、何度も見た鎮守府正面海域と時雨達が作成した海図がぴったり一致したこと。提督がそれに基づいて会

敵が予想されると示したポイントが天龍、時雨と一致したこと。

一戦目は鎮守府正面海域の防衛ライン直ぐ側、敵艦隊の哨戒部隊と会敵する可能性が一番高く、二戦目は正面海域を抜けて、南西諸島へと向かうために通らなければならぬポイント。

提督自身はそこまで予想をしておらず、ただ艦これでこちらへんだったというあやふやな物だったが、天龍、時雨によるそこだという理由の後付けが出来た故の予想だった。

そして一戦目は敵の哨戒部隊となれば軽い編成——水雷戦隊と予想した。提督自身も戦艦ル級が現れる海域故、単なるはぐれの駆逐2、3隻とは考えていなかった。

回避性能の高い水雷戦隊を相手にするのであれば、複縦陣を取り命中精度を高めるという意図。

その言葉を受けて、出撃メンバー全員が頷き異論は無いようだ。

「天龍の後ろに時雨、龍田の後ろに夕立が来るように陣形を取ってくれ。二戦目は正直予想が立てられない、戦艦ル級がいるであろう事以外はな。従って会敵し、戦艦以外に軽空母等見られる際はそのまま複縦陣、軽空母が居らず重巡洋艦や軽巡洋艦、駆逐艦が見られる場合単縦陣で」

流石に空母はいないと思いたい提督だが、念の為砲撃戦の命中率を確保しつつ防御機能もある程度保証される複縦陣。

それ以外にも保険としての意味合いがあった。

天龍の眼帯側——左舷の死角。

それをよく知るはずの龍田がフォロー出来ればという意味もある。「もつとも、陣形を実際に組んで行動する経験はまだまだ浅い。だから全艦散開しての戦闘行動を禁止はしない。会敵して戦闘が始まったら……天龍、お前に現場の指揮は任せる」

「おうっ！ 任せとけっ！」

自信満々と言った風に頷く天龍だが、その実自信は見た目ほど無く、プレッシャーが大きくかかっている。

だが、それを求められたという喜びがプレッシャーより遙かに大きく天龍を包んだ。

——応えたい、応えてみせる。今度こそ。
そう強く思った。

「具体的な戦闘行動に関しては伝えた通りだ。……龍田」
「はあい」

何処か間延びしたような返事をする龍田だが、目には真剣な色合いが強く映されている。

龍田自身は照れ隠しや……こうして出撃に向かう艦娘の見送りをすると、具体的な戦闘行動の指示に驚き、動揺を悟られないための口調。

「龍田は戦闘運動に入ったあの夕立に対して砲撃をあてる技術を持っている。本作戦でお前に求められているのは広い視野と必要に応じたフォローだ」

「広い視野と……フォロー？」

戦況は一時一瞬で変化する。

具体的にどう変わるかなんて提督はまだちゃんと理解していない。そういうものだと時雨や天龍に教わったからそうだと思っ

「だからこそ、龍田に具体的な指示を出さないと、指針のみを伝えた。ああ。今回の作戦、余裕は無い。いや、無かった。龍田が来るまでは」

「えっと、つまり。私は他の子達が余裕を持って動けるようにすればいいのね？」

龍田の返事に頷く提督。

「実にあやふやなやりとりではあるが、これもまた仕方ないことではあった。」

提督がまだ提督として未熟であること。そして、龍田が天龍達と合同で訓練、演習を行っていないことが、具体的にどうすればいいのかが見えなかったのだ。

「龍田以外の艦は指示通りかつ、動けるように動け。龍田は自分の判断を大事にしてくれ」

「……わかったわ」

責任重大だと龍田は考える。

自分以外の三隻が戦果をあげられる。無事にここまで帰ってこられるかは、その余裕を持たせるための自分にかかっている。そう思った。

「最後になるが……。大破進軍は許さない、危険だと判断すれば絶対に帰ってこい。確かに二度目の出撃は難しいかも知れないけど……。そんな時は皆でヒキニートしよう、漁師でもいいぞ」

にへらつと真剣な表情を崩して提督はそんな事を言う。

実に軍人らしからぬその格好に、全員がふふつと笑った。

「では、全艦出撃っ!!」

「!!」

そうして、四隻は海を征く。それぞれの胸に宿した思いを艤装に乗せながら。

やっぱり戦場は地獄のようです

鎮守府を発って敵艦隊と会敵する予想は見事に的中した。加えて相手艦隊は以前時雨と夕立が対峙した構成と同じ。

相手部隊が間もなく全艦撃沈となる場面にて艦娘の損害はゼロ。出来すぎと言ってもいいぐらいの出来だった。

これには理由があった。

まずは天龍。

まるで予知でもしているかの如く敵の行動を予測し、それを外さなかった。

自身の火力は頼りないものではあるが、それでもその指示が冴え渡る。

陣形は結局あまり意味をなさなかった。その事をいち早く理解し、直ぐ様各艦自由行動を指示した事もそうだが。

相手の砲撃、雷撃に対して極めて敏感にそれを察知、前方で暴れる夕立、敵艦隊の砲撃を自身に集めた上でそれを捌く時雨。

その二隻への注意喚起は的確だった。

やはりと言うべきか、陣形を組んだ上での戦いに慣れていない夕立は突出しがちで、それに引きずられるように時雨が前へと出てしまう。

前に出てしまえば夕立の視野は極端に狭く、敵の砲撃にさらされがちで。それを自身に向けようと必死に動く時雨。

二人の必死さを補助する指揮を天龍は行っていた。

それに加えて龍田。

龍田は天龍の指揮に従いながら、前に出た夕立と時雨に砲撃をしようとした深海棲艦へと砲撃することを徹底していた。

そのおかげで、本来なら砲撃しようとしていた深海棲艦の注意がそれ、あるいは砲撃不可能へと陥り前方で暴れる夕立と時雨が守られた。

一度の実戦に勝る訓練や演習は無い。

夕立はいつもなら損傷しているだろうタイミングで損傷しないこ

とを不思議に思い、時雨はいつもなら無茶をしているだろうタイミン
グに余裕を感じている事を不思議に思い。

後ろの天龍と龍田を見て理解した。

そうして心置きなく思う通りに戦闘を続行した。

自分を守ってくれる人がいる。その事を理解したのだ。

天龍は未だかつて無い興奮を覚えていた。

役立たずと断じられた自分が、誰かの役に立っている事を実感し
て。前で暴れていた二隻が自分と龍田に向けて嬉しそうな笑顔を浮
かべたことで。

だからより神経を研ぎ澄ませた。感じられない物を感じようと必
死になった。

以前より敏感になった自分のナニカ。そしてそれを信じる力。

弱い何かに引きずられないよう、必死に強く心を持ちながら戦闘を
続行した。

龍田は未だに目の前の光景を信じられずにいた。

自分が作戦の歯車としてすっかり回っていることに、自分の力が通
用していることに。

だからより神経を研ぎ澄ませた。夕立の、時雨の天龍の。全ての脅
威を潰すことに注力した。

出撃したいと感じた心はそう、天龍だけに限らず艦娘を守りたいと
思ったから。

それが、頭ではなく心で理解できた。

「夕立っ！ 良くやった！ その場から離れろっ！ 敵残り軽巡ホ級

！ 時雨、龍田！ オレに合わせて一斉射撃準備！ 合わせろっ！」

「もちろんさ」「わかったわく」「っほい！」

天龍の声が響く。そしてその言葉に対して返される返事は信頼に
満ちている。

「行くぜえ！ 怖くて声も出ねえかあ!! オラオラあ!! 全艦……
てええええええ!!」

発射の合図に三隻揃った砲撃。

それは最後に夕立がおまけと言わんばかりに撃った砲撃で足を止

められ、軽巡水級は大きな爆音と共に吸い込まれた。

全艦、撃沈。

「つしやあー！」

敵影見えず。

それを確認した天龍は関の声をあげた。

やれる。

そう確信した。その思いは力強く握った拳が証明している。

「やったねー！」「ぽいー。夕立達、すごいっぽい！」「あらあらー」

天龍にハイタッチする時雨、抱きつきに行く夕立。それを純粋な笑顔で見守る龍田。

「あ、ちよー！ オイー！ まだ初戦が上手くいったただけだぞ！ 浮かれ

るんじやねえ！」

「うんー！」「っぽい！」

びしつと少し悪戯気を含ませた敬礼を天龍に向ける二人。

口では厳しい事を言った天龍ではあるが、その口元はニヤけるのを必死で我慢しているのか歪に結ばれている。

「うん。でもそうよく？ 落ち着いて自分の確認をしないとー」

やんわりと三人へ向けて注意を促したのは龍田。

そういう自分も艦装に問題は無いか、兵装に不備は無いか。弾薬、

燃料はまだ十分あるかと確認に余念がない。

その姿を見た夕立と時雨も心を落ち着かせてそれに習う。

天龍も自分の頬をビシツと両手で挟んだ後、確認を行った。

「……よしっ。次は戦艦ル級が確認されたって話だよな？」

「うん。損傷は無し、燃料弾薬も十分だけど……撤退するかい？」

何をバカな、と一蹴したくなかった気持ちを抑え、改めて艦隊の確認をする天龍。

先の戦闘は上手く出来すぎたと言っても過言ではない。

陣形すらしきちんと組まずに攻めた事に相手に対応出来なかっただけだ。

駆逐艦……いや、軽巡洋艦の一撃で簡単に損傷を深く与えるなんて出来ないのが戦艦。

常識で、いや。天龍が持っている考えの中にはそもそも軽巡洋艦二隻と駆逐艦二隻で戦う相手ではないと思っている。

だが、それでも。

「進軍するぞ」

「了解っぽいー!」

ここにいるのが、今の所属している鎮守府の最大戦力。当然、後ろに控えている戦力なんて無い。

進軍しなければならぬ。状況的に。

ただ天龍はそう悲観的な考えで進軍を改めて決定したわけじゃない。

隣りにいた龍田を見る。

「なあに? 天龍ちゃん」

「……龍田。わかってると思うけどよ」

そこから先に言葉は無かった。

——必ずこいつらだけでもあそこに帰すぞ。

そう目で天龍は龍田に告げた。

そしてまた龍田も。

——わかってるよ、天龍ちゃん。

笑顔で頷いてくれた。

夕立も時雨も。

旧式の自分たちとは違う、まだまだ力を伸ばすことが出来る。

そしてその礎になれる。

それはあの鎮守府がまだまだ力をつけられるということ、そうすることが自分たちの狂おしいほど渴望した『役立つ』事なのだ。

あの提督はそんな事を望んでいないとわかっている。だがそれでも必要な犠牲というものは必ず存在するもので。

二人は黙って頷きあつた。

進軍すること少し。

それは何の前触れもなかった。いや、正確には。

「——っ! 全艦四方回避っ!!」

何も無いはずの前触れを天龍が感じ取った。

その回避の声に瞬間反応できた四隻は中央を大きく開けるように動いた。

そしてその複縦陣の中に出てきた大きな穴に。

敵戦艦の砲撃が大きく水しぶきを上げて収まった。

「ちいっ！ まだだ！ 敵艦載機の攻撃が来るぞっ!!」

もしも、これが隊列を組んでいなかったら。

間違いないくこういった回避方法は取れず、直撃。誰かは大きなダメージを受けていただろう。

砲撃と共に見えたのは敵の偵察機。それに続く空気の震え。

天龍の勘が敵艦載機が来ることを告げ、それはそのまま口から発された。

「全艦対空防御たいせ……クソが!!」

言う途中で気づいた。

対空兵装を装備しているのは天龍だけだということに。

しかもその装備は7・7mm機銃。

加えて幾らか対空能力を有する複縦陣と言えど、あまりにも頼りない。

焦るような夕立と時雨の目が天龍に向けられた時。

「総員っ！ オレから離れろっ！ 敵攻撃機を引き受けるっ!! 龍

田あ！ チビ共の面倒は頼んだぜ!!」

「……任せてっ！」

「やつ!? ま、待ってよ龍……」「ゆ、夕立も……!!」

この場に残ると言おうとした駆逐艦二隻を抱え、龍田は全速でその場を脱出した。

「何でっ!? 皆でやればっ……!」

「黙って。皆で沈みたいの?」

抱えられた腕を振りほどこうとした時雨は龍田の言葉、そして目を見て口を噤んだ。

「天龍……!! ちゃんと後で会うっぽい!! 絶対！ 絶対っぽい!!」

その様子を見ていた夕立は、ぐつと下唇を噛んだ後天龍に向かってそう叫んだ。

その声が届いたのか、どうか。

天龍は黙って親指を上立てて応えた。

「つたく……硝煙の匂いが最高だなあオイ！ 天龍！ 推して征くぜえええええ!!」

遠くなつていく味方と裏腹に自身へ近づいてくる敵艦載機。

それらに向かって、雄叫びを上げながら天龍は突撃した。

敵艦載機の構成は攻撃機、爆撃機の混じった構成。

7・7 m 機銃では破壊することに期待はできない。出来ることと言えば、進路へ発射し少しでも自分を狙いにくくさせる程度。

天龍の勘が告げた。

攻撃機、爆撃機のどちらかは絶対に避けられないと。

「へっ！ それがどうだってんだ」

不幸中の幸いというべきか、数は少ない。これを発艦したのは軽空母と予想された。

避けるべきは、攻撃機の雷撃。

爆撃機に比べて数が多く、一斉雷撃を受けては一溜まりもない。

爆撃機の動きを、肌で感じる。

——雷撃を当てようと退路を塞ぐ様に爆撃が来る。

天龍の隻眼が爆撃機に向けられた。

一瞬息を飲み込み、吐き出す。

「天龍様の攻撃だ！ うっしやあつ！」

睨んだ爆撃機の直下に自ら潜り込み、後方にいる攻撃機へ向けて機銃を斉射。

それはその避ける機動を読み、美しいとも言えるような射撃を放つ。

手に取るようにわかった。

相手が急ぎ爆撃を投下しようとしていること、攻撃機が止むを得ず進路を変えて無理やり雷撃を放とうとしていること。

だから、天龍は立ち止まった。

自ら爆撃投下地点で立ち止まった。真上を睨みつけながら。避けるコースを予測して放たれた雷撃は誰もいない海を進み、天龍は。

爆撃の雨をその身に浴びた。7・7mm機銃を爆弾が爆発するその瞬間まで上空に斉射しながら。

天龍と別れてすぐ。

龍田、時雨、夕立は敵艦隊を発見した。

戦艦ル級エリート。軽空母又級エリート。軽巡ホ級エリート二隻。後期型駆逐イ級二隻。

それが敵艦隊の構成だった。

「良い？ 先の戦いと同じよ？ 時雨が敵艦隊の攪乱、夕立は食べやすい子から食べてね？」

「わかったよ……龍田はどうするの？」

天龍の事を聞きたい気持ちをぐっと堪えて戦闘へ意識を向ける。

「わたし？ 私……」

——あれをもらうわ。

暢気に聞こえる声と共に、龍田の目が敵軽空母へと向けられた。

目はその声に似合わず剣呑の一言。

絶対に沈める。誰にも譲らない。

そうその目が言っていた。

「軽空母は私の獲物よ。それと戦艦の標的も私が請け負っちゃうから」

「え!?! だ、大丈夫っぽい？」

「戦艦は主砲をさつき放ったばかり……今は撃っても副砲だけよ。再装填が終わるまでに……沈めちゃうから」

時雨も夕立も、簡単そうに言い放つ龍田にぞっとした。

頼もしく思うべきその言葉は、間違いなく殺意に彩られていて。その殺意の濃度に夕立も時雨も恐怖の念が背中を這いずり回った。

「いくわよ……全艦、散開っ!!」

言い終えるやいなや、龍田は誰よりも早く敵艦隊に肉薄した。

「あはっ、沈める船はどこかしら〜？」

そう言いながら、恐ろしい精度の砲撃が相手艦隊に降り注ぐ。

龍田の装備は14cm単装砲が二基。

持った槍を振ればその先から砲撃が発射され、返す槍でもう一撃発射される。

軽巡ホ級二隻の砲撃を難なく見切り、躲しざまに槍を向ける。

まるで踊るように優雅。自由自在に振るわれる槍から砲撃が放たれていく。

その様をもちながら、敵艦隊に確実に損傷を与えながら目指すは敵軽空母。

「夕立を忘れてるっぽい!!」

軽巡ホ級の砲撃が龍田に向けられるのを見た夕立もまた迷いなく突っ込みそのうちの一隻に肉薄。

お得意と言うべきかゼロ距離射撃を二発。

それにより軽巡ホ級一隻を撃沈。

慌てた様に駆逐イ級は夕立へと砲撃を狙うが。

「させないよっ！」

それを予期していた時雨の魚雷がイ級を貫く。

一隻撃破、そしてもう一隻は中破。

敵艦隊はバラバラに動く艦娘三隻に対応することが出来ない。

それは突っ込みながらも夕立と時雨をフォローする龍田のせい。

ゼロ距離射撃を敢行した夕立は確実に隙だらけだった。

それを狙ったもう一隻の軽巡ホ級は、砲撃を放つ瞬間に横つ面を龍田の砲撃に邪魔される。

敵艦隊のヘイトを稼ぐ時雨に攻撃を集中しようとするれば、また同じく龍田の砲撃が襲ってくる。

まるで三百六十度全てを視界に収めているかのような龍田の動き。それでもなおかつ軽空母へと突撃していくその姿は鬼神とも言えるもので。

そんな龍田は出撃時に言われた提督の言葉を実践しているだけ。

——龍田は戦闘運動に入ったあの夕立に対して砲撃をあてる技術

を持つている。本作戦でお前に求められているのは広い視野と必要に応じたフォローだ。

龍田の口元にくすりと笑みが浮かぶ。

あんなことがあった後に、自分が提督の言うことに従うなんて思いもしなかった。

でもそれは自分にしか出来ないことで。

余裕ぶっている自分は夕立の姿にかつての自分を重ねた。

闇雲に突っ込んで勝利をもぎ取ろうとする自分。

戦果をあげようと無茶に突撃する自分。

ならそうしよう。提督の言いつけを守りながら。

そう思っていた。

だが敵空母の姿が自分の射程距離に届いた事を理解した時。

「アハハハッ！ 砲雷撃戦、始めるね」

天龍と別れる事になった原因の軽空母。

その姿に届くと確信した時。頭の中で何かが切れ、龍田は鬼神の仮面をかなぐり捨てた。

すなわち。

「絶対っ……逃がさないから……！」

もう龍田の視界に収まるのは敵空母。思い浮かべるのはコレが撃沈する瞬間。

ここに至り、戦場を駆ける鬼神は敵を沈める意思、欲望に塗れバイサーカ狂乱鬼へと堕ちた。

そしてその龍田を嘲笑うように。

「つく!? なくにく? 痛いじゃないっ！」

戦艦ル級の副砲が龍田に襲いかかる。

龍田の軽空母への戦意を削ぐように、集中力を削ぐように。その副砲は龍田を削ぐ。

「ちよっと黙ってて〜?」

だから振り払おうとした。

槍を戦艦に向けた、向けてしまったその時。

「!?」

敵軽空母の艦載機が夕立と時雨に向かって発艦された。

「夕立っ！ 時雨っ！」

「えっ!?」「……ぼい？」

龍田を信頼していた。自分たちの背中を守ってくれていると思いこんでいた駆逐艦二隻。

その付近に居る敵艦隊もろとも。

「い、いやあああああ!？」

爆炎に巻き込まれた。龍田の悲鳴すらも巻き燃やすかのように。

海域突破に大破は付き物のようです

海上に膝をつく龍田。

その身に宿るは怒りの炎。だが炎が身体を突き動かすことはなく、身体と炎ごと自責の檻に囚われ動けないでいる。

——私が突撃しなければ。フォローに徹していたら。

海上に立ち上る爆炎を涙越しの視界に収める龍田が思い描いた言葉。

それは先程まで自身を穿とうしていた戦艦の副砲より強く突き刺さり、頭を埋め尽くす。

たらればの話とは後悔の代名詞。

それでも龍田は先に立たない後悔に沈む。

約束していたのだ、天龍と。

自分たちを犠牲にしても時雨と夕立を生かすと。

天龍は紛れもなくその言葉通りの行動を取った。

それが自分はどうだろうか？

突き動かす怒りを鎮めることもせず、ただただ敵を沈める事に傾倒した、してしまった。

その結果がこれだ。

約束は守られず、残ったのはただ自分の命を燃やし損ねた旧式軽巡洋艦が一隻。

守りたいと思っただはずだ。艦娘を。

——どうして出撃したいのかがハッキリしていないやつは、あやふやなまま必ず沈む。

今も鮮明に覚えている提督の言葉。

その言葉通りなら良かった。自分が沈むならそれで良かった。

これは、それよりひどい。

「あ、あは……あはは……」

何の表情を浮かべればいいのか理解できなかつた龍田の口は歪んだ。歪んだ口から力なく零れたのは笑い声。

どうして笑い声が出たのか。それは龍田にすらわからない。

何一つ守ることが出来なかった情けなさからか。それとも今度こそ全てを失ったと理解し、笑うことしか出来なかったからか。

その小さな笑い声をかき消す様に、ギギギと音を立てて戦艦ル級は主砲を龍田に向ける。

艦装が駆動する音が龍田の耳には自身を嘲笑う声に聞こえた。

「……うん。そうよね。笑われても、仕方ないわ」

その嘲笑いは、今まで龍田が経験してきた不快な音全てを集約したかの様な音。

過ちを犯し続けた自分を地獄に墮とす福音と感じた。

「ごめんなさい……そっちでは、ちゃんとやるから……許してね」

全てを海底に託し、龍田は静かに目を瞑った。

「——全艦っ！ 一斉射撃！ てえええええ!!」

その福音は、龍田に向けられた主砲から流れる事は無かった。

代わりに背後から、勇ましい声と共に大きな発砲音が聞こえ——自分の目の前で炸裂した。

「え……う？」

ありえない音に、光景に思わず出処へと振り返る。

そこには。

「オラオラア！ ビビってんじゃねえぞっ！ 龍田あ!!」

「夕立つ！ 再突撃するっぽい!!」

「ここは譲れない……時雨っ！ 出るよっ!!」

失ったと思っていた仲間達と。

「龍田!! 無事か!!」

なんともこの場に不釣り合いな漁船の艦上に妖精の発明品高速修復材を片手に掲げた提督が居た。

「夕立つ！ お前は時雨と共に戦艦ル級！ 天龍は軽空母ヌ級を牽制しつつ龍田を救出だ！」

「了解っ！」

そこからの行動は早かった。

時雨が魚雷を発射、天龍が軽空母又級へ砲撃。夕立は一直線に恐れること無く戦艦に突撃。

時雨、夕立、天龍。三人の損傷は小破程度。

なぜその程度の損傷で、無事な姿で、自分の目に映っているのか。もしかしたらもう自分は沈んでいて、ここは死後の世界で。

自分が望んでいた光景を映し出しているのだろうか。

「何でも良いわ……今度こそ……っ！」

龍田の瞳に光が宿る。

味方の一斉射撃で崩れた体勢を整え、再度主砲を構えようとする戦艦ル級に龍田は飛び込んだ。

それを振り払おうとル級の副砲が龍田を襲うが。

「まさかコレで私を抑えたつもりでいるの？ 肉を切らせて……骨を断つっ！」

肉処ではない、骨すら吹き飛ばしてしまいそうな副砲を、龍田はどれも至近弾と心に言い聞かせ肉薄を叶えた。

「天龍ちゃんよりは上手でしょ？ ふふ、上手なんだからね」
嬉しそうに。

再びこうして天龍を挿捻出来る事を嬉しく思い、いつもの笑顔を浮かべて平然と槍を――二基の14cm砲をル級に突きつけ、発砲した。

砲撃の反動、爆風で身体が大きく後方に弾ける。

「つとお！ 相変わらず無茶しやがる！」

「……天龍ちゃん」

その身体を天龍がキャッチ。大破状態の龍田を支えた。

「流石龍田さんっぽい！ でも、夕立もやっちゃうんだからっ！」

「夕立、援護するよっ！」

龍田の自身を厭わない砲撃により中破状態のル級を射程距離に収めた夕立。その後を時雨が声を上げて追う。

その時雨の音が終わると同時に、軽空母又級の下で大きな爆発音。時雨の放った魚雷が直撃し、艦載機発艦不能にした。

「……私は、夢を見てるのかしら〜？」

「はっ！ 寝てるのか龍田？ ここは戦場だぜ？」

まるで寝起き。夢から醒めてもまだ夢見心地。

そんな龍田らしからぬ表情を浮かべたまま、龍田は夢かと疑う。

天龍は始めて見た龍田の表情を一笑しながら龍田の腕を自分の肩に回す。

「まあ、その気持ちはわかるけどな。オレだってまだ半信半疑だし」

そういった後、ちらりと漁船に乗る提督の方へ目を向ける。

提督は食い入るように、または必死に……ル級と戦闘を繰り広げている時雨と夕立の姿を見ていた。

戦艦の攻撃力を嘲笑うかのように、高機動で的を絞らせず遊んでいるかのように振り回す二人。

夕立の主砲装填が終わる度にル級の損傷は蓄積し、なんとか反撃しようとするれば時雨が前に出てその砲撃の邪魔をする。

「信じられるか？ あんなボロつちい漁船で最前線までやってきてよ。轟沈しかけのオレを引き上げるやいなや高速修復材怪しげな液体ぶっかけて、行くぞ。だぜ？ ったく、艦娘使いの荒いやつだ」

「……まさか、本当だったなんて〜」

指の一本すら動かせず、身動きを全く取れない龍田は、天龍に自分の体重を全て預け共にゆつくりと漁船に向かう。

そして漁船の艦上に龍田を持ち上げ、提督に龍田を任せた天龍は。

「っしー！ 行ってくるぜ提督！ オレの活躍、見とけよなっ！」

「あゝ天龍……やる気は大いに結構なだけだよ」

肩をグルンと回し、再出撃しようとした天龍を尻目に提督は戦っている場所を指差し。

「やったっぽい！ わあい！」

「勝利か。うん、僕の力なんて些細なものさ。そう、提督と皆のおかげだよ」

「もう終わってる」

パァンツ！ と大きな音を立ててハイタッチを交わす時雨と夕立。

その笑顔と沈んでいくル級、軽空母又級の姿を見た天龍は。

「ち……ちつくしよおおおおお!!」

一番の見せ場と思っていたシーンで活躍できなかつた悔しさに声を大きく震わせた。

あの時、敵艦載機の攻撃を天龍が受けきった後。

満身創痍どころか轟沈寸前の天龍は、ふらふらと頭を身体を揺らしながらも龍田達の下へ向かうため足を運ぼうとしていた。

だかそれも数歩。

身体のバランスが崩れ、海面に倒れかけた瞬間。

「お、おおおう?」

身体にすつぽりと浮き輪がハマった。

その理解と共に大きく身体が引つ張られ……。

「いてえ!?! わぶつ!?!」

ドシンと漁船の上に尻もちをついたかと思えば頭から何かの液体をぶっかけられた天龍。

「おーすげえ。ほんとに治ってるよ」

「うそなんていわない」

「な、何しやがる!?!」

驚いたように立ち上がった天龍の目の前には、バケツを持った提督。

そして、すぐに立ち上がった自分に天龍は驚いた。

「こ、これは……一体オレに何しやがった?」

「妖精に頼んで作ってもらったんだ、高速修復材……試作だけど」

「かんしゃしいいよ」

天龍と夕立が妖精と初めて会ったあの日。提督は妖精に高速修復材を作れないかと相談していた。そして、その試作品が出撃後すぐに出来上がったのだ。

自分の姿を確認する天龍。その目には何処に傷があったのかわからないくらい綺麗になった自分が映った。

「こ、高速修復材い? んなもん聞いたこと……!」

「そんな事いいから。それよりも」

——行くぞ。

そう提督は言って漁船を再び龍田達がいるであろうポイントに全速で走らせ、天龍も直ぐ様海上に立ち、全速で向かった。

そして辿り着いた時に見た光景はまさに敵軽空母の艦載機が夕立と時雨に向かつて発艦した瞬間で。

「天龍っ！ 行けっ！」

「わかってるっ！」

それに気づかない時雨と夕立の下へと必死で走り、爆雷撃が二人を襲う寸前に天龍は二人を回収することが出来た。

「まあこれも俺が天龍の大破を読んでいたら出来たって事で」

「くすくす……なるほどねえ」

漁船艦上。

舵を握る提督……と言っても勝手に動いてくれるのだが、その直ぐ側で応急処置を済ませ身体を横たわらせた龍田は話を聞いて凡そ全てを理解した。

漁船周りには、相変わらずの無茶をした提督にぷりぷりと一通り怒った時雨が併走し周囲の確認を。

夕立と天龍は先行し進路の安全を確認しており、漁船内には提督と龍田の二人だけ。

「天龍ちゃんの大破は予測してたとしても……私の大破は予想してなかったのかしら？」

「そうだな、予想はしていなかった。だけど」

——確信はしていた。

急に真剣な表情を浮かべた提督は龍田の目を真っ直ぐに見て、そういった。

「あ……う……」

その目には色々な思いが伺えた。

やはり出撃させるべきじゃ無かった。

もつと作戦を考えるべきだった。

そして、沈まなくて本当に良かった。

最後の一つがわかった時、龍田は顔に熱を感じ何も言うことが出来なくなってしまうた。

それは恥ずかしさからか、それとも心配をかけてしまった事への申し訳無さからか。

黙りこんでしまった龍田に、提督は言った。

「それで？ 龍田。ちゃんと見つかったか？」

「え、と……何をかしら？」

顔の熱が頭に回ったのか、提督の言った言葉に思い当たりが無いと言った様な表情を浮かべる龍田。

そんな龍田に溜息と苦笑いを浮かべながら。

「出撃する理由」

「あ……」

そう言われて思い出した。

自分が今回出撃するのはそれを探すためだと言ったことを。

その答えは出ていた、艦娘を守りたいということだと。

だが、その言葉に今は違和感を覚えている。

何かが、足りない。

龍田の答えを変わず苦笑いのまま待つ提督。

その提督の顔を見て不意に理解した。

——貴方の鎮守府を守りたい。

天龍が夕立が時雨が……そして私を救ってくれた貴方がいる鎮守府を。

これからも多くの傷を負った艦娘達を救ってくれるだろう貴方がいる鎮守府を。

そう龍田の心が答えを出していた事を。

「うふふ。やっぱり答えは出なかったみたい」

「なんだそりゃ。大破までしておいてそれじゃあ骨折り損のくたびれ儲けだな」

苦笑いを通り越して、呆れた様な顔になる提督。

そう言いながらも、決して龍田をバカにしている様な色は無く。

「だから提督？ また出撃させてね？ 今度こそ見つけてみせるん

だから」

「轟沈しないって約束出来るなら……考えておくよ」

肩を竦めながら提督は龍田に言った後、再び舵を握り前を向いた。

——そう言っておけば、また貴方の鎮守府を守る為に出撃できるから。

ならばその約束を守ろう。守れる自分になろう、今度こそ。

「うん、約束するね」

「……ああ、約束だ」

その約束は酷く心地の良い物で。

心地の良さと漁船の振動に身を任せ、龍田はゆっくりと目を瞑った。

やっぱりまだまだ問題は山積みのようにです

鎮守府正面海域ノ制海権ヲ得タリ。

あの鎮守府墓場からその電文が来た瞬間目を疑った。

もしもこれが本当だというのなら、日本、横須賀鎮守府方面の前線を僅かながらにも押し返したと言うことだ。

「あり、えない」

敵強行偵察部隊が鎮守府近海の防衛ラインを割った時。

あの時でさえその敵艦隊を駆逐艦二隻で屠った事に驚いた覚えはある。

ただその時は驚き以上に安堵の気持ちが大きかった。

だけど、今回は違う。

駆逐艦二隻、軽巡洋艦二隻それも旧式。それだけの戦力で開放出来る程あの海域は甘くない。

あそこに鎮守府を建設するのにどれだけ多くの艦娘を犠牲にしたのか私はよく覚えている。

それを、僅かな戦力で。

信じたい気持ちはあったし、無事を祈る気持ちもあった。

だけど、まさか戦果をあげるなんて、思ってもみなかった。

確かにあの海域へ不要と断じられた艦娘を投入し、鎮守府を建設してから間は空いていない。つまり、敵の数は揃っていないと思われる。

「か、確認をつー！」

理性的な自分は言っている。ありえないと。

だが艦娘の本能が叫んでいる。信じていたと。

板ばさみの大淀という私はどちらを信じて良いか判断がつかなかった。

酷く動揺している自分が居る。それがよく分かる。

だから急いで海域管理部へと連絡を入れて、当該海域の確認を依頼した。

幸いあの鎮守府とは距離が近い。二時間もすれば大本営から発艦

した偵察機の情報は手に入る。

それで、もし。

もしそれが真実であったなら？

喜ばしい事なのは当然。

何よりも、嬉しい。

大本営に身を置いてはいるが、私だって艦娘だ。

あの場所に鎮守府を建設するため……しかも、他鎮守府の戦力を整えるための時間稼ぎというだけに命を犠牲にさせられた艦娘達も、少しは浮かばれる思いだろう。

本懐とも言うべき、全深海棲艦の駆逐。今まで日本防衛に必死だったにもかかわらず、初めてほんの少しではあるけど私達の牙を突き立てられたのだ。

これを嬉しいと言わずなんと言うのか。

「やはり……あの人は」

胸に手を当てて思い浮かべるのは初めて民間から選ばれた提督。

あの時提督を前にして感じた気持ちは間違いじゃなかった。命令違反をして警報を鳴らしたのは間違いじゃなかった。

私ですら。大本営の歯車として組み込まれてしまった大淀ですら共に戦いたいと思えたあの人は。

決して失つてはいけない人だ。

だけど、それでも。

「……司令長官の所へ行こう」

言わなければならぬ。

不当で不遇な扱いを行っている場合じゃない。あの鎮守府を墓場等と蔑している場合じゃない。

軍人ではないから使えないに決まっている等と断じている場合じゃないのだ。

今は好機で、あの鎮守府に戦力を集め海域開放に乗り出す時なのだ。

「どうしてですか!? 今こそ千載一遇の好機といえる時っ! どうし

「てやらないのです！」

「落ち着き給え、大淀。何を勇む事がある。鎮守府近海の制海権を得た……うん、実に素晴らしい、称賛すべきことだ。これにより各鎮守府は安全に戦力拡大に努められる事だろう」

「勇み至った私に告げられた言葉はする必要がないというにべもない言葉だった。」

それは海域管理部が確認し持ち帰った報告書に目を通して変わらない。

「今はあそこが最前線ですっ！ 後方鎮守府の戦力を拡大するのではなく、最前線に戦力を送るべきです！」

「だから落ち着きなさい。……大淀、今度は一週間じゃ済まないぞ？」
司令長官の口から出た言葉は脅し。本気でそうするつもりは、まだ、無いと思う。

ただ、司令長官の瞳には僅かに怒りの色が含まれていて、これ以上言えばその言葉は本当に実行されてしまうだろう。

深海棲艦の姿見ゆの警報を鳴らした私は、営倉に入れられた。その時の事を思い出して思わず震えた。

改めて延々と自分がただの兵器である事を散々と教え込まれた一週間の営倉生活。

「あそこに戻りたくないという思いで、口を思わず噤んでしまう。で、ですがっ！」

だがそれがどうだというのか。

あれっぽっちの戦力であるの海域にいた深海棲艦へと立ち向かう事に比べれば。わけがわからないまま提督として使われたあの人の事を思えば。

食いしばれ。あの人が、あの艦娘達はこんな事で臆したりしないでしょう？

「やれやれ、冷静なキミらしくもない。わかっているだろう？ あんな故障を疑う様な提督適性値と、たかが鎮守府近海の制海権を確保した事だけを根拠に博打をうつよりも、しっかりと実力、実績のある者たちへ戦力、時間を割き海域攻略に乗り出すほうが確実だ」と

「う……」

それもわかる。

いや、司令長官の言う私らしい私はわかる。

だけど駄目なんだ。駄目と言っている。

軍人至高主義とでも言うべきか、艦娘を使った軍事行動は軍人が誰よりも上手く行える。さらに、その中でも取り分けエリートとでも呼ぶべき人間が提督として着任した。

素質、適性、戦果。それがたかが民間人に負ける等、認められない、あつてはならない。

そんな選民思考に塗れたままじゃ駄目だと。艦娘の本能が叫んでいる。

「……あの鎮守府に戦力を集約し、より大きな海域開放を行う事が出来れば各主力鎮守府の戦力はより大きなものになります。長官、どうか……どうかお考え直しを」

「ほう……」

そう一言言った後、司令長官は私の目をじっと見つめた。

兵器如きに、ここまで言われた事で自尊心を傷つけてしまっただろうか。

だけど、その瞳に先程まで少し見えていた怒りの炎は見えない。

むしろ。

「……やれやれ、わかった。今までここに尽くしてきたくれたキミの言うことを尊重しよう」

「で、では?」

「うん。あの鎮守府に艦娘を送ろう、ある意味ちようどよかったしね」
一瞬見えた失望の色は気のせいかな。

その言葉にすっかり舞い上がった私は言葉を続ける。

「では横須賀鎮守府の戦艦長門、陸奥等如何でしょうか! 練度も戦意も高い彼女たちならきつと……!」

「いやいや、その必要はない……ん? どうやら到着したようだ」

司令長官に身を乗り出しながら具申しようとした勢いを殺すかのようなノックの音が響いた。

誰だろう？ それにちょうど良かったとは……？

「うん、僕だつて考えていたんだよ。あの鎮守府にさらなる戦力を……とは。入ってきたまえ」

「そ、そうでしたか。申し訳ありません、それにも関わらず失礼を……」

それもそうか。

ああ、良かった。方針を変えなくとも戦力の追加は考えていたのか。

だったらとんだ失礼をしてしまった。先走ってしまった。

本当はもつとしつかりと謝罪をしたかったけど、入室者だ。ドアへと向き直ろう。

司令長官の口ぶりから察するに、あの鎮守府へ異動を行う艦娘だろうか。

……まって。

方針を、変えない？

「……」

「あ……あなた達は……！」

「やあ、よく来たね」

私の背後からいつもの人の良さそうな笑顔を浮かべている司令長官の気配がする。

でもそんな事すら気にならず、私はドアを開けて入ってきた艦娘達を見て……。

「第六、駆逐隊……まさか!？」

「……うん、君達も大変だったね。今の鎮守府では大変だろうと思つて、新しい場所を用意した。君達にはそこで心と身体を休めて欲しい」

「……」

司令長官の言葉に誰一人として反応を返さない。

全員の目が死んでいる。

ただぼうつと、音のするほうへと目を向けているだけだ。

彼女たちは、あの鎮守府に送られた天龍が率いていた――。

「どういう、こ……」

「そして大淀、キミもだ」

は、い？

思わず振り返ってしまった言葉がヨクワカラナイ。

待って下さい。

今、長官。貴方は何と……。

「戦力を送るべきと言ったのはキミだろうか？　今までよく……良すぎるくらいに補佐してくれていたキミだ。送り出すのは心苦しいが……立派な戦力として活躍してくれることを祈ってるよ」

そう言つて嗤う。先程一瞬見た失望の瞳を私に向けながら。

ああ、そうか。つまりこういう事か。

——私も、不要艦とされたんだ。

背後から第六駆逐艦隊の誰かが私に視線を向けているのがわかる。だけど、それに振り返ることは出来ない。

あなた達と同じ様に不要と断じられた私もまた、あなた達と同じ目を今しているだろうから。

一章之閑話

夕立のぽいぽいdays ①

「提督さーん！ おはようございますっ！」
「ぬおっ!？」

時雨と龍田さんは朝から鎮守府近海の警備でいないっぽい！
天龍さんは昨日の夜中に警備担当だったからまだ寝てる！

だから今日お休みの夕立が提督さんを起こしに来たっぽい！

お休みだけど一人で居ても仕方ないから今日は一日提督さんのお手伝いをするっぽい！

「お、おはよう夕立……でもさ、流石に寝てる相手にダイブはちよつと……ほら俺の14cm砲の事もあるしな?」

「え? 提督さんも艤装を装備してるっぽい!? わあー! 見せて見せて!」

提督さんは普通の人間さんだよな? なのに艤装を装備出来るなんてすごい!

夕立、ますます提督さんの事を尊敬しちゃいそう!

「これあかんやつや」

「あかんやつ……? もしかして股間っぽい? 股間に装備してるっぽい?」

あ、これかな? 確かに膨らんでるっぽい!

わ、すっかり発射準備オツケーね! 寝巻き破いちやいそうだから脱がさなきゃ! これも秘書艦のお仕事っぽい!

「ちよまつ!?! 悪かった! 悪かったから!?! すぐに着替えて行くからそつちで待ってて!?!」

「でも夕立、提督さんの艤装が気になるっぽい」

夕立、これでも砲のお手入れは得意なんだから。

「じ、自分の装備だからなっ! 自分でちゃんと手入れしないと駄目だろう?」

「む。確かに一理あるっぽい。それじゃあ隣の執務室で待ってるね」

なんだか慌ててた提督さんがようやく安心したっぽい？ うーん、何なんだろう？

時雨が帰ってきたら聞いてみようかしら？

「時雨と龍田の予定帰投時刻はヒトマルマルマルって言ったな？

今がマルナナマルマル……三時間後か」

「天龍さんも皆が帰ってきたら一度起きるって連絡板に書いてたっぽい」

鎮守府正面海域の制海権を確保してから、龍田さんを中心に防衛ラインの再構築、再設定に最近は忙しい。

基本的に龍田さんが新たに足を安全に伸ばせる海域と資源分布の確認して、時雨と一日交代で夕立が龍田さんについていくようにしてるの。

確認してる龍田さんの護衛はもちろん、資源を見つけたら一緒についていった夕立か時雨が積めるだけ積んで帰ってくる。

天龍さんはそういった作業が終わるまでの間夜間警備をしてくれるの。

本格的な遠征とかはまだ出来てないけど、あの戦艦ル級が補給ポイントにしていただろう場所が見つかって、ほんとに少しだけ資材に余裕が出来たって提督さん喜んでたっ！

提督さんが嬉しいと夕立も嬉しいっぽい！

「そかそか。そしたら皆で出迎えような」

「はいっ！」

あ、えへへ。頭撫でてくれたっっぽい！ 嬉しいっぽい！

提督さんは夕立の頭をよく撫でてくれる。

最初から全然嫌じゃなかったけど、最近はなんだか胸もぽかぽかするようになってとつても気持ちいいっぽい。

……でも、時雨の前で撫でて貰えた後、時雨がすごい羨ましそうと言うか、なんとと言うかな視線で見ってくるのが怖いっぽい。

「しかしまあなんだな。出撃を意識しなくなってから随分と余裕が出来たな」

「夕立は出撃したいっぽい。……でもしばらく出撃しないんでしよう？」

したくても出来ないけど。

もう燃料も弾薬もすっからかんだったし。今は徐々に増えてきてるけどそれでも本当にゆっくり。

やっぱり建造で戦力を増やすのを目標にしつつ、資材備蓄に務めるっぽい。

そんな中でもえつと……週に一回は必ずオフの日を作ろうって提督さんが言った。

月月火水木金金じゃないっぽい！ 時雨なんかは、心配そうにしながらも昨日のオフを満喫してたっぽい！ 提督さんの隣ですつとニコニコしてたっぽい！

「ああ。やっぱり現在の戦力でこれ以上先に行くのは危ないだろうからな。いや、この鎮守府正面海域だったら平気だったのかって言われると首を横に振らざるを得ないんだけども。……ほんとに良くやってくれたよ」

「えへへ。夕立にお任せっぽい！」

また撫でてくれた！ もく提督さんは何処まで夕立を褒めてくれるっぽい？ 感激して涙が出そう。

「ともあれ備蓄やら何やらが終わったらまた出撃してもらうさ。まだまだ先になると思うが次は南西諸島海域を目指すことになると思う。その時は、頼んだぞ？ 夕立」

「はいっ！ 夕立、提督さんの為にもっと強くなっておくっぽい！」

うー、撫でるの終わりっぽい。

でも怠けてられない。夕立、難しいことはよくわからないからあんまりお役に立てないけどお茶位なら時雨に教わって用意出来るからね提督さん！

「で、その口元についた涎はなんだい？」

「うううつい居心地が良かったっぽい」

海に出てた時雨達を提督さんは一人で迎えに行った。

……起こしてくれてよかったのに。

「あはは、うん。気持ちはわかるし、何より今日はお休みなんだから責めてもないけどね」

「でもでも、夕立もお出迎えしたかったっぼい！」

ここに提督さんと一緒に来た時はみかん箱と薄っぺらい座布団しか無かったけど。妖精さんが作ってくれたソファアが気持ちよくてついつい寝ちゃった。

起きた時はヒトヒトサンマル。慌てて執務室を出たら食堂に皆居た。

天龍さんはもう一眠りするって言うってお部屋に戻って、龍田さんは提督さんに報告と今後の海域調査の相談。

時雨もヒトヨンマルマルからもう一度龍田さんと海に出るっぼい。

初めてのお休みだからなんだか調子が狂っちゃうっぼい。

「時雨ー。お休みって何すればいいっぼい?」

「そうだね。やっぱり身体を休めるのが一番なんじゃないかな?」

身体を休める。

でも夕立全然疲れてないっぼい。

「時雨は提督さんの側にずっといてたけど、それで身体を休められたの?」

「う、うん……。僕、提督と一緒にいる時が一番楽と言うか、気が休まると言うか……。そ、そんな感じだから」

わかるー。夕立もそうだからっぼい寝ちゃったもの。

ほんとに、ここは居心地がいいっぼい。

前、時雨と一緒にいた鎮守府とはぜんぜん違う。

こんなに提督さんとお話したことも無ければ、働くことも、休むことも無かった。

今こうやってお休みの日の過ごし方に頭を悩ませるなんて、あの頃の夕立は思ってもみななかったろうな。

不意に、白露の事が頭に過る事がある。

こんな風に過ごしている夕立を見たら、怒るっぼい? それとも……呆れられちゃうっぼい?

そんな事を考える。

あの時沈むつもりだった夕立を提督さんが助けてくれて。

もし、白露が沈んじゃう時の提督が提督さんだったら、白露も助けてくれたのかな？

そう思うと尚更、白露に申し訳ない思いでいっぱいになっちゃう。夕立が未熟で、考え無しに突っ込んで……それを無理にフオローしようとした白露。

「……」

あの時夕立に向かって言った言葉は未だに思い出せないっぽい。もしかしたら、恨み言だったのかも知れないし、もっと別の言葉だったのかも。

よく、わからない。

「ねえ時雨。今の夕立を白露が見たら……どう思うっぽい？」

「……白露が、かい？」

そう聞いてみれば時雨は静かに目を閉じて考え込んだっぽい。

ちよつと、嫌なドキドキがする。

夕立より、時雨のほうが白露とは長い付き合いだった。

その時雨が思い浮かぶ言葉なら、そうなんだと思っちゃうっぽい。恨み言ならどうしよう。

「やっぱり……」

「まだまだ足りないわ！ いっちばんの幸せを目指しなさいっ！」

「……かな？」

怖くなつてやっぱりいいって言おうとしたら、時雨がそれを遮った。

そして言われた言葉に目が点になる。

「うん。そうだね。そんな感じだね。いつでも一番を目指してた白露だから……まだまだ今の夕立が幸せには見えないんじゃないかな？」

白露
自分の事を気にしているようじゃ、ね」

「……」

うん。そうだったっぽい。白露はいつでも一番に拘ってた。

そっか。そんな風に言ってもらえるっぽい？

「まあ僕にもおんなじこと言ってそうだけどね白露なら。私を気にしてる限り私を追い抜けない、なら私が一番だって」

「時雨にも？ そっか」

ああ、思い出したっぽい。あの時白露は――

――私の代わりに一番になってね。

そういつてたっぽい。

瞬間、瞼が熱くなった。

どうにも堪えられないから、上を向いて必死に目を見開いてみる。

「夕立」

「んっ、なあに？ 時雨」

すごく優しい声で名前を呼ぶ時雨。思わず溜まった涙が零れちゃいそう。

そして声色を変えずに言ってくれた。

「頑張ろうね」

「うんっ……！ 頑張るっぽいっ!!」

頭の中で浮かんだ白露は、いっちばん良い笑顔で笑ってくれた。

「提督さん」

「ん？ どうした？」

今日もいつもの訓練。

それが終わって、提督さんと二人汗をタオルで拭く。

最近では十回やってようやく一本取れる位にはなれたっぽい。

提督さんは、すごい。

他の人を知らないから提督さんがどれ位の腕かとかはわからないけど、すごいことはわかる。

だって、夕立が狙ってる事を尽く看破して潰してくるのだもの。

時雨なら避けるかまともに受けるかするはずの攻撃。

それを提督はわかった上で夕立の上に行く発想で潰してくる。

一本取れるようになったって言ったけど、正直取らされているって気がするっぽい。

「夕立、もつと……もつと強くなるっぽい。ここで一番になれるくら

い

「どうした急に？」

心配そうに顔を向けてくる提督さん。

……ほんとに、夕立は恵まれてるっぽい。

「ううん。思っただけっぽい。夕立が皆を守るんだからって思っただけっぽい」

「なんだそりゃ。だけど嬉しいよ、ありがとうな」

夕立の頭を撫でる提督さんの手はやっぱり温かくて。

そう。思っただけっぽい。

まだまだ弱い夕立だから。皆を守りたいと思ったなら、皆より、誰より強くなるなくちやいけないから。

だから、提督さん。

「これからもよろしくおねがいしますっ！」

天龍様は使われたい ① あらあら龍田さん ①

「異常なし……っ」と

夜間帯の鎮守府近海警備。

龍田と時雨、夕立のおかげで防衛ラインの制定作業は終わった。

妖精とか言う奴らのおかげで防衛ラインにちよつとしたセンサー設備もつけられて、深海棲艦共が入ってくれば鎮守府の警報が鳴る仕組みにもなっている。

だから、この警備も今日で終わり。

最終確認として見回りの最後に防衛ラインのセンサーがちゃんと作動しているかを確認して、終わり。

この警備にだって、オレが出る分の燃料やもしもの際を考えての弾薬配給。その消費はある。

実際、はぐれとも言えるような駆逐棲艦と会敵したことはあるしな。

自分でも驚いているけど、その発見はオレのほうが随分早く、相手に気づかれる時は相手が沈む時であることの方が多い。

「これも、あいつのおかげなんだろうな」

天龍として……艦娘として。劇的に強くなったって実感はねえ。だけど確実にオレは強くなった。

随分と苦勞した目で見える感覚と本能が訴える感覚のギャップ。

提督と相談しながら、夕立や時雨に協力してもらいながらそれを埋める訓練。

それが出来るようになっただけでこうも変わるもんかね。

いやいや、簡単な事じゃねえってのはわかるさ。

ただ、それをオレなら出来るって。

そう信じる事が出来たあいつらがやばい。

「もつと役に立ちてえ」

信頼されるって心地よさをもつと実感したい。

もつともつと必要とされる自分になりたい。

皆に、提督に使われたい。

「はっ！ オレは玩具かってえの！」

笑つちまう。この天龍様が、使われないなんて思うなんてな。

あの出撃を経て。

今ならよく分かる。

これが誰かの為になるって事だつてのが。

やらせることがないからと回された遠征で、顔も見たことのない艦娘の弾薬を燃料を確保して。

そして、それこそが自分の役目だと自分を無理やり奮わせて、現実を突きつけられて。

あれは充実している様に見えてその実。すつげえ空虚な事だった。でも今は違う。

あいつの、あいつらの為にオレの持つてる全てを使いたい。

自分の為じゃない、あいつらにオレを使つて欲しい。

「なあ？ 提督。こんな事を思うオレは怖いか？」

兵器つてやつは使い手を選んじやいけねえ。選ばれる側なんだ。

それを、オレが、オレこそがと主張する兵器なんざ、聞いたこともない。

だから、絶対にもう自分から使えなんて言わない。

あいつに使われる為に、オレは使えと言わない。

「おっと、ここか……。つたく、妖精つて一体何だつてんだ？ こんなモンまで作りやがって」

手に持ったのは無線機。

前の鎮守府でも持っていた事はあるが、これは違う。あの時持っていたものとは性能が段違いだ。もう一種の電話のそれに近い。

このセンサーだつて、どうやったらこんなもんまで作れるもんかね。

「あーあー。こちら天龍、聞こえるか？」

「ああ、聞こえるぞ」

ザザツと言う少しのノイズ後、無線機から聞こえたのは提督の声。

「今ポイントについた。どうだ？ そつちで感知出来ているか？」

「えーつと……。おう。バツチシだ」

なんでもあいつは、オレ達が来る前にあつた出撃が大層心臓に悪かつたらしくこの設備開発が成功した時、馬鹿みたいに喜んだらしい。

詳しくは知らないが、大本営から警報を鳴らしてくれなかったらやばかったとかなんとか。

「ありがとう天龍。これで日中生活に戻れるな？」

ありがとう、か。

フフフ、悪くねえな。

こんな事オレに言うのはこいつくらいなもんだろうさ。

——ここに来て、良かった。

きつかけはオレの大失敗からだったけど。

それでもやつぱり。そう思えるのはこいつのおかげなんだろう。

「ああ、いい加減皆で朝飯が食いてえよ。後ゆつくり休みてえ」

「そっか、まあ朝飯は食えるようになるけど。すまん、休みはちつと待ってくれな？ まだまだお前にやってもらわなくちゃいけない事は山ほどあるから」

ああ、そうだ。

使えと言わない理由。もう一つあつたな。

「はっ！ しょうがねえなあ？ この天龍様に任せとけっ！」

「頼もしいわ。それじゃ、気をつけて帰ってこいよ？ んで、皆で飯の前に俺と飯食おう」

んなこと言わねえでも、こいつはオレを使ってくれてるって信じられるからだ。

「いいから寝てろよ。いい時間だぜ？ 明日起きられなくて時雨に怒られても知らねえぞ？」

「ま、いいだろ。時雨もわかってくれるさ。一段落した打ち上げしようぜ。チャーハン位しか用意できねえけど。んじや、待ってるからな」

ノイズと共に無線が切れる。

ちつくしよう、のんびり帰るつもりだったのによ。

「やれやれ、艦娘使いの荒い提督様だこと、ってな！」

しゃあねえ、急いで帰ってやるか。我が愛しき鎮守府へ。

目の前で時雨ちゃんが撫でられてる。

「うん、ありがとう。もっと頑張るね」

わく。すっごいキラキラしてる。

私も頑張ったんだけどなあ、確かに今回の掃討戦でMVP取ったのは時雨ちゃんだけどく。

「夕立もっ！ 撫でて欲しいっばい！」

「おわっ!? ったく、しようがないやつだなあ」

あ、抱きついてる。むしろ飛びついてる。

うく……。なんだろうく、もやもやするわく。

「えへへ。夕立ももっと頑張るっばい！ 次はMVP取るからね！」

「ふふ、次も僕が取るよ。負けないからね、夕立」

可愛らしく張り合う二人は可愛いんだけどく。

その二人を率いてたのは私どく。

つまりく。

「あ、あの龍田さん？ この物騒な槍は何でしょうか？」

「あらく？ うふふく提督には危害を加えないけどくロリコンならい

いよねく？ 旗艦の私は僚艦を守る義務があるからく」

私を褒めてくれてもいいのよく？

なんて、口に出たらいいのになあ。どう頑張っても言えそうに無
いって思ったら自然と槍を突きつけてた。どうしてこうなったのか
しらく？

「あー！ 龍田さん！ ダメっばい！」

「あはは、夕立。良いから良いから！ ほら、僕達はちよつと損傷し
ちやっただから入渠に行こう？」

「し、時雨っ！ 放すっばい！ 提督さんが……もぐもぐ」

——ほどほどにね？

なんてすれ違いざま時雨ちゃんに目で言われちゃった。

うう、あの子色々察しが良すぎて困っちゃう。
ボタンと扉が閉まる音。

なんだか顔が熱いわ。提督の目も見れない。

「あー……その、なんだ？ 龍田。頭、撫でて欲しいのか？」

「そ、そんなにや事……」

か、噛んだ……！ は、恥ずかしいっ！

も、もう良いや。早く私も出ちゃおう……。

「あはは。別に撫でないなんて言って無いじゃねえか。もう」

「あ、う……」

何で私は提督の方に進んでるの!? あくん！

あ、でも……気持ちいいわあ。

あの二人が何で頑張るのか、その原因がわかった気がする。

うん。安心する。

帰ってきたってことも分かるし、帰ってきてくれて嬉しいって思っ

てくれてるのがよく分かる。

「……私、やっぱり怖い？」

「んー？ よくわからんやつだなとは思う」

よ、よくわからんって……。

うーん、もうちよつと態度を改めるべきかなあ？

「でも怖いって思ったことは……ああ、最初の時位か」

「そこはっ！ ……ごめんなさい」

うー。こういう時は怖いなんて思ったこと無いって言って欲し

かったわ。もう。

「いやいや、すまんすまん。謝って欲しいわけじゃねえんだ。ちと言

い訳したかっただけでな」

「……言い訳？」

何の言い訳だろう？

提督は私から視線を外して、恥ずかしそうに頬を掻いてるけど。

「まあ、なんだ。龍田は可愛がるには綺麗すぎるから、さ」

「き、綺麗!？」

「ちよまつ!?! 槍は止めて!?!」

綺麗って何!? 綺麗ってことは、綺麗ってことね!?

フー! フー!? フー?

お、落ち着こう、落ち着きましよう龍田。

私は龍田、天龍型二番艦の龍田よ。うん、それで? 目の前の人

提督。その提督に私は槍を向けて……って。

「あ。ご、ごめんなさい」

「あ!? お、おーい?」

私は尻尾を巻いて逃げ出した。

そして部屋から出た先に居たのは。

「夕立、安心したっばい!」

「ね? 僕の言った通りでしょ?」

「な、何で? 入渠しにいったはずじゃ?」

すつごく生暖かい目で見られてる。

なんと言うか同類というか、仲間に向ける目というか。

「夕立が心配してね。ちよつと中の様子を伺ってたんだよ」

「龍田さんも提督さんの事が好きっばい! 安心したっばい!」

「好きっ!」

好きって何!? 好きってことは、好きって……ふう、それはもう良いわ。

「そ、そうね。信頼できる人だと思わわ。そういう意味では好ましいかも。安心したなら二人共入渠にいつてらっしゃいな。私は天龍ちゃんともう一汗流してくるわ」

うん。おかしくない。おかしくないわ。

「はあい!」

「ふふ、そういう事しておくよ」

うんうん。大丈夫。

何が大丈夫なんだろう?

でも、大丈夫。

「それじゃあね。ご飯の時に会いましょう」

「うん。あ、後ね、龍田」

「何かしら?」

「天龍、資材回収に向かっでご飯まで居ないって朝提督が言ってたの、忘れちゃった？」

「……」

大丈夫じゃなかった……。

うう、早く帰ってきてく天龍ちゃん。

時雨日記 ①

○月△日

他鎮守府で、白露型駆逐艦が沈んだらしい。僕もいつか沈む時が来るのかな？ いや、きっと来るんだろうね。祈っていいならせめて悔いのない最期を迎えたいと願う。

○月△日

一緒に出撃した軽巡洋艦の川内が沈んだ。

どうしようも無かった。どうしようも無いってわかったから川内が僕達を逃してくれた。自分の身を犠牲にして。

夜戦は私に任せて。

その言葉が最後の言葉で、今も僕の頭に残っている。でもそれ以上に。

——どうして許可されていない夜戦をしたのか。貴重な資材だけではなく、あの軽巡洋艦も無駄になったではないか。

そう言われた。ボロボロの身で帰投した僕達を叱責する言葉に最後まで川内の名前は出なかった。

悔しい。

提督がもつとこの海域について調査を行っていれば。って言うおとした瞬間、僕の目が気に入らなかったのか頬を張られた。

しばらく入渠も許されならしい。

辛い。

一緒に出撃した同室の白露が慰めてくれたけど、辛い気持ちは晴れなかった。ごめんね、白露。

○月△日

少し間が空いちやった。

こうして日記がつけられなかったのは少し落ち着かなかったから、こうして筆を取れるようになって良かった。

あれ以来、危険な海域への出撃を命じられる事が多くなった。

周りで轟沈する艦娘をもう何隻見ただろう。僕を残して。

こんなに辛いのに、提督は轟沈してしまった艦娘の名前を一度も出さなかった。

あの人は、辛くないのかな。

落ち込んでいく僕が辛うじて気をしっかり持てたのは白露が声をずっとかけてくれたからだ。ありがとう。

でも僕は、もう沈む艦娘を見たくないな。

残ることが幸運なんだって言うなら、こんな運いらなかった。

○月△日

同じ白露型の夕立が建造された。元氣いっぱい可愛い可愛らしい子だ。

これで今まで失った駆逐艦の穴を埋められるなんて誰かが言っていた。でも、提督は不満気だ。

——あれだけの資材を投入して駆逐艦か。

よくわからないけど、失敗したって顔に書いてあったからきつとあの人にとってはそうなんだろう。

僕はと言えば、すっかり前線を離されてしまった。

戦意も低く、出撃すれば一緒に出撃した誰かが沈む疫病神だと言われた。

でもそれを悔しいと思う事は無かった。

これで出撃しないで済む。誰かが沈む姿を見なくて済む。そう思った。

その分の皺寄せは白露が請け負ってくれた。

謝ったら、一番艦だから一番出撃するのは当たり前よ。って笑った。

でもそのかわりに夕立の面倒を自分の分まで見てあげてねって言われた。

せめてそれくらいはしっかりやろう。

○月△日

白露が沈んだ。

○月△日

夕立が大破姿のまま僕に大泣きしながら謝ってきた。自分が突出したから、それを庇ってしまったせいだからって。

さっきまで胸元で泣いてた夕立は気力も体力も尽きたのか、そのまま眠ってしまった。

夕立を責めるつもりは無い。

けど、あの人にこれだけは確認した。

「今日轟沈した駆逐艦の名前を覚えていますか？」 って。

答えは……。

○月△日

出撃しないって宣言をしてしばらく。僕と夕立はどうやら別の鎮守府に異動するらしい。

別に、出撃しないでもいいならもう何処でもいい。なんでもいい。もうこの日記も止めよう、気分が落ち込むだけだ。

○月△日

思わず止めたつもりだった日記を手を取っちゃった。

思い出したらちよつと恥ずかしいけど、それでも嬉しい気持ちのほうが強い。

あの人なら、あの提督なら。

信じたい。

○月△日

ちよつと正直どうしようもない鎮守府だった。

戦艦ル級って……駆逐艦二隻でどうしたらいいのさ。

夕食の後、自室でそんな事を思ってたら提督に道場へと呼ばれた。

竹刀なんて初めて触ったよ……まだ身体が痛い。

こんな事何の役に立つんだろう？ ただ単に僕達に八つ当たりし

ただけなんじゃ？

ううん、夕立も言ってた。どうすればいいかわからないけど、信じることは出来るって。

だったら僕だって出来るはずだ。信じよう。

明日は近海警備の後皆で勉強会だ。早く寝て身体を整えよう。

勉強会って……不謹慎かもしれないけど、ちよつとワクワクしちゃうね？

○月△日

無駄じゃなかった。あの訓練は。

そうだよ、何で気づかなかつたんだろう。何も駆逐艦らしく動く必要はないんだ。

僕は駆逐艦時雨っていう艦娘だ。

艦であつて、艦ではない。人じゃないけど人の動きができるんだ。それに、提督のあの言葉。

夕立は早速何かに思い至つたみたいだし、僕だつて。探してやる、強くなるんだ。もう二度と誰も沈めないために。

○月△日

約束、守ってくれた。

どうしよう、嬉しい。それしか言葉が出ない。夕立、助けてくれた。白露との約束も守れた。

ああ、もう……！ こういう時どう言ったらいいのかわからないよ！

今までいい人だなんて思ってた提督は。どうやら僕の理想の提督だったらしい。

そう思つてから、確信してから初めて提督の顔を直視したんだけど……うん、顔、きつと真っ赤になつてたろうな……恥ずかしい。

でも、かっこいいなあ……僕の提督。

○月△日

新しく艦娘が着任した。

提督に槍を向けた瞬間胸が真っ黒になったけど。夕立のおかげだね、すつきりしたよ。

……でもきつと。龍田も、僕達と同じ様に何かあったんだろうな。て事は分かる。

じゃないと、あんなに悲しそうな目は出来ない。

きつと、龍田の雨は止んでないんだ。

提督……。雨はいつか止むけど、僕は提督が龍田の心に降ってる雨へと傘を広げてくれるって信じてるからね。

○月△日

間引き作戦はいまいち。それは提督もわかってるみたいだ。

仕方ないって言ったら嫌だけど、こっちの戦力上大物を釣りすぎても対処出来ないし。うーん。

資材の量も流石にこれ以上は……。提督、どうする？

○月△日

やった！ 正面海域の制海権を獲ったよ！

あそこに龍田が居た事にびっくりはしなかった、だって提督だもん。きつと何かしてくれたんだ。

その龍田のおかげで僕達は活躍出来たし言うこと無いよ！

ううん、正直途中天龍はダメかと思っただけど。高速修復材？ そんな物があるんだね、初めて知ったよ。

龍田も天龍も嬉しそうと言うか、何かを完全に吹っ切れたみたいだ。ちよつと龍田の目が気になるけど……。

まあいいや、皆の入渠が終われば打ち上げ。楽しもうっと！ 提督のチャーハン、美味しいからねっ！

○月△日

くっ、やつぱり龍田は提督が……。もうっ！ 提督がかっこいいのはわかってるけどさっ！ だから仕方ないけどさっ！

……うん、いいよね、提督。

日本男児らしい黒髪に鍛えられた身体。まるで艦娘全てが愛おしいって思ってるんじゃないかってくらい優しい瞳。

あんな優しい目をされてころつといかない艦娘なんているのかな？ いや、いないね。間違いない。

だって、僕も……。

……。

はっ!?

いけないいけない。つい想像が一軒家に白い犬……じゃなくて夕立だったけど。そんな事に勤しんでる場合じゃない。

えーと？

そうだ、明日新しい艦娘が来るらしい。

建前は今回の活躍に対する報奨的な意味があるとか言ってたけど……そうじゃないよね、きつと。

また、何か傷を負った艦娘がやってくるんだ。

でも、心配はしてない。

提督はきつと、そんな子を救ってくれる。そう信じてる。

僕だって、そのためには何だってする覚悟さ。

……でも、これ以上艦娘を惚れさせないでね？ 提督。

提督は僕が……

「な、なーんちやって！ なんちやって！」

「何がなんちやってっばい？」

「うわあああああ!？」

ゆ、夕立!?! いつの間に僕の後ろに!?

「ちや、ちゃんとノックしてよ？ 取り込み中だったらどうするのさ」

「夕立ちちゃんとしたっばい！ でも返事無かったから入ったの！」

そ、そうなの？ 全然気が付かなかった……。

「それより時雨、何書いてるっばい?！」

「ん？ ああ、これ？ 日記だよ」

表紙を夕立に見せると、それをきらきらつとした瞳で眺める夕立。

「夕立もするっ！」

「えー？ 夕立、ちゃんと出来るの？ ご飯のお品書きになつたりしない？」

「時雨は失礼っ！」

あはは、怒られちゃった。

そう怒らないでよ夕立。そうだなあ。

「じゃあそうだね、次の物品依頼に書いどこっか？ 僕も、そろそろこれを書ききれちゃうし」

「うんっ！ 一緒にするっぽい！」

そうだね、一緒にしよう。

そうやって僕達を記録しよう。これからはきつと、嬉しいことや楽しいことがたくさんかけると信じてるから。

鎮守府海域突破編

提督は現状を少し把握したようです

「ふひひ……」

やっぱり黒字はいいもんだ。余裕が違いますよ。思わずテンプレ的なキモい笑い方もしちゃうってもんだ。

正面海域の制海権を手に入れてしばし。

早くもというべきかようやくというべきか。

我が鎮守府は黒字経営となった。

と言ってもほんつとうに僅かで、数字にしてみれば両手の指で数えられる程度の黒字だし、今も出撃してくれている結果によればトントになるかそれ以下。全力出撃をすれば必ず赤字になる。

それでも、だ。

「いやあー！ 苦労した甲斐があったってもんだなあ！」

どうやってもマイナスになるって状況じゃなければこっちのモンで。艦これで鍛えた資材管理能力の奮い甲斐があるってもんだ。

正面海域を脅かす戦艦ル級率いる深海棲艦を倒したことでより広い海域へと手を伸ばせるようになって、その先にはやっぱりと言うか深海棲艦が溜め込んでいた資材集積地があった。

そこに向かい資材を回収する隊。その部隊を護衛、索敵し発見した深海棲艦の残党を倒す隊。

資材消費、回収量、深海棲艦の強さ。そういった要素を考えながら色々なパターンを試す。

たまに、敵軽空母や重巡洋艦等が発見された時は全力撤退だ。

そういった時だけ改めて全力出撃。

その繰り返しでようやく黒字を収めることができたんだ。

上手くいかない時だってあるけど、皆しつかり無事に帰ってきてくれる。それだけで十分だ。

まだまだ建造を視野に入れられるほどの余裕はないけど、それでもようやく各資源は100程まで回復した。

これなら建造は出来なくても、装備開発は視野に入れて考えられるだろう。

「そうだろうっ！ 妖精さん！」

「きゆうにさんづけとかこわい」「きゆうにきてなにいつてんだこいつ」「きゆうにきてにやけてんじやねーぞ」

し、辛辣っ！ お前らそんなキャラだっけ!?

ま、まあいいや。

実際攻略戦では、妖精が作ってくれた高速修復材のおかげで助かったんだしな。

っーのもまあなんだ。

どうやってああいうもんが作られるのかわかんなかったんだよな。

艦これでは遠征とかで手に入れたり出来るけどもさ。

聞くのは無料って事で、聞いてみた結果面白そうって言っ作ってくれたんだよ。

……手をつけてなかったボーキサイト全部使ったけど。すっからかんだけど。

「いや、まあ。改めてありがとうな、お前らのおかげで天龍を沈めないで済んだし、それは皆無事に帰って来れることに繋がった。ほんとに感謝してる」

「ことばなんてー」「やすいー」「いのちかけろー」

う、うるさいわい！ お礼はチャーハンでいいっすか！

時雨と龍田が料理に興味を持ってくれて目下練習中だけど、まだまだ俺のチャーハンには及ばない。フッフ、美味いか？

ともあれだ。

ボーキサイトってのはどうやら癒やす効果があるらしい。

思えば艦載機の補充にゲームでは使用されてたし、漫画やらなんやらでは食う母されたりしてたし。そういう効果を持つてるみたいで。

駆逐艦なら100、軽巡洋艦なら300といったように消費して作れるって妖精は話してくれた。重巡洋艦以上のいわゆる重い艦ならもっとかかっていくんだろう。艦載機の補充ではもちろん消費されるんだらうし、バランスよくそれも視野に入れとかないとな。

「んで、だ。ちと相談があつてな。装備開発つてどうやるんだ？」
「かんむすといっしょにつくるー」「わたしたちだけじゃだめー」「そう
だんしながらつくるー」
ほむ。

予想通りと言うか、秘書艦を換えて装備開発に挑むつてのはやっぱ
そういう事か。

話を聞いていくと、図面作成だなんだは妖精がやって、その指示に
従つて艦娘が着工するらしい。

で、これも予想通り失敗する可能性もあるみたいだ。
ゲームと違うのは、やればやるほど上手くなって失敗確率は減るら
しい。

まあそれもそうか。要するに手慣れていくつてことだ。いつまで
も同じ失敗をするわけでもなし。

てことは将来的に艦娘が揃つていけば装備開発を重点的にしてく
れる存在を作るべきだな。ああ、メロンちゃんに明石ちゃん。貴女は
今何処。

「じゃあ改造は？」

「かいぞうー？」「なにそれー？」「しらなーい」

え？ おいおいまじかよ。

改造だよ改造。近代化改修は絶対に出来ないだろうけど、改造は出
来るだろ？ 改二実装まだ？

うん。言つておいて何だけど実際改造つて何してんだろ？

スロット増えるよ！ 改造では一部を除いてグラは変わらない
よつ！ 改二でおっぱいおつきくなるよ！

……豊胸手術？ やめて差し上げろ。

じゃ、なんだろ？

「艦娘の艦装に手を加える、とか？」

「うーん」「できないことはないとおもうけどー」「むずかしいねー」
そうなのか。

まあできないことは無いと思うつてんなら、おいおい相談してい
かね、皆を交えて。

装備開発にせよ改造にせよ。

まだまだ資材が足りてないし、当面先の話だわな。

とりあえず装備開発は妖精と艦娘共同で作る事が出来るってわかっただけで十分だ。

……あれ？

妖精がいることで装備開発が出来るんだよな？ 図面作るってくらいだし。

だったら、他の鎮守府で見たことが無いって話がマジなんだとしたら……。

「な、なあ？ お前ら妖精って他の鎮守府に居るのか？」

「えー？」「しらなーい」「でもなんだかいきたくなーい」

あー……もしかして。

「あかんこれ」

「あかん？」「あかんあかん！」「あかんこれー！」

もしかしなくても他の鎮守府に所属してる艦娘の装備って最初に持つてるやつのままなんじゃ。

まじかよ。

……まじかよ。

「ああ、うん。とりあえずありがとう。装備開発とかまあ色々これから世話になっていくけどよろしくな」

「はーい」「そうびかいはつはまかせろー」「ばりばりー」

天井はやめて！

げふん。

まあなんだ。

もしかして。

「結構どころじゃなくて、相当人類やばくないか？」

執務室に戻ってきた。

すっかり妖精のおかげで居心地の良くなったここ。ほんとに頭があがらねえな。

自分でお茶を入れて、時雨が入れてくれる味との差に思わず顔をし

かめてしまう。

いやまあ、しかめちまう理由は他にもあるんだけどさ。

色々必死だったから頭が回らなかつたけど、ようやく現状を把握できつつあるこの頃。

そして把握するにつれて思うのは。

「やばいのはここだけじゃねえってことだよな」
そう。

ヤバさのベクトルは違うけど、間違いなく他の鎮守府もやばい。

最初に言われた所属している艦娘が三十隻程ってこと。

てつきり、少数精鋭かと思ってたけどさっきの装備開発の事といい、改造の事といい。それが本当なのであれば。

「練度以外はほぼ初期状態のままって事だよな……」

そういう事だろう。

電探、甲標的、ソナーに爆雷。

そういったものは所持していない可能性が高い。

渦潮対策、索敵値対策、潜水艦対策。

いやいや、思い浮かぶことはまだまだあるけどどうしてるんだよ。

まさか、潜水艦相手にソナーも爆雷も持たせず単横陣で突っ込ませてるだけとか？ ……あかんでしょ。

この国が、世界が、人類が大きな危険にさらされてるって、誇張表現どころじゃないわ。滅亡寸前もいいところだわ。

それに加えて、この鎮守府がある海域に居た深海棲艦の強さ。

定かじゃないけど、それだけ攻め込まれてるからあんな強い奴らがここらへんにでも現れるってことだろ？ いや、ホントどうすんだよ。

というか夕立や時雨に天龍。最近から訓練も参加するようになった龍田。

たかだか一月程度、それもよくわからん訓練であれだけ強くなったんだぞ？ いや、もともと強かった可能性だってあるけど。

こんな資源も何も無い所で、演習すらろくに出来ないこの場所であれだけ強くなって海域を突破できた。

なのにも関わらずどうしてこんな状況に陥ってるのか。

「わっかんねえ……」

艦これで慣らした。なんて言っても所詮ゲーム。それがこの一月で痛いくらいに理解できた。

そしてどれ位深海棲艦との戦いを続けているのかわからないけど、この世界に元から存在している軍人様方は俺より遥かに経験値が高いはずだ。

だったら俺より効率よく、効果的に深海棲艦と戦えるはずだ。ノウハウだって比べるまでもないだろう。

——確かめなければいけない。

そう思った。

「でもどうやって?」

わからない。

どうやら俺はまだまだ知らなければならぬことが多すぎるようだ。

そんな事を考えていると。

「ん? 電文?」

一通の電文が届いた。

そして一目見て驚いた。

——は?

「あ、提督、ここにいたんだ。出撃艦隊、帰投したよ」

「え? あ、ああ。おかえり……」

いつの間にか帰ってきたらしい時雨。多分他にも居る気配がする。

あやふやなのはその電文から目が離せないから。

「提督さん! ただいまっ! 夕立大活躍だったんだから! 褒めて褒めて——!」

「今回も夕立にやられたぜ……つたくこいつには敵わねえよ」

「うふふー、最後の一発が当たってたらまた違ったわよー次はがんばりましょうー?」

どうやら皆いるようだ。

……うん、すまんがちと待ってくれ。おれはこんらんしている。

「うん？ 提督？」

「……いや、悪い。丁度新しい指令が届いたもんでな」

「指令？ 次は何をしたらいいっぽい？ 夕立、提督さんの為ならなんでもしちゃうんだから！」

あー、癒やされるー。

夕立のキラキラした目も、俺を心配してくれる様な表情を向けてくる時雨と龍田にも、任せとけと自信満々な表情の天龍にも。

はあ、艦娘最高かよ。

そうだな、こいつらと一緒に出来ねえ事なんて無いわ。

俺、一人じゃあるまいし。

たった四隻。それだけでもこの鬼畜海域を突破出来たんだ。

それが大きく広くなって多くの艦娘を迎えてもつともつと強い力になる。

そうすりゃ無敵だ。

出来ないなんて思うことが失礼だ。

「ああ。新しい指令は——」

ただそれでも。

電文を読み浮かんだ捨て艦と言う文字。

それが俺の頭から離れない。

提督が怒り心頭のようにです

「南西諸島海域への足がかりを作れ？」

「ああ。大方針としてはそうだ。南西諸島海域を目指すために俺達ができることは南西諸島沖に防衛ラインを敷く事だ」

電文の内容を飲み込み、皆へ説明する。

最終的に南一号作戦……艦これで言ってしまうえば1―4の舞台を整えることが俺達へ下された指令。

必要と思われる作戦行動はまず、南西諸島沖の哨戒。敵戦力の確認だな。

そして防衛ラインを構築するために製油所地帯沿岸の確保、資材運搬を成功させるための護衛。

実に艦これ鎮守府海域に沿っている。

「なるほどね。でも、流石に今の戦力でそんなの……出来るのかな？」
「間違いなく無理だろうな。正面海域でアレだ。先へ進軍して会敵する敵の予想なんて怖くてしたくないレベルだし」

時雨の言葉にそう返せば、天龍はうんうんと頷く。

そんな天龍を見て龍田は笑ってるし、夕立はあんまり良くわかってないのか首を傾げてる。

「同時に鎮守府の内政に努めろってのもある。これはまあある程度鎮守府運営を軌道に乗せろって事だろう。正面海域突破の時とは違っていつ来るかわからない敵に焦る必要はない、幾分か余裕は作れるはずだ」

「そうねえ。黒字になったとはいえ、まだまだ資源足りてないものねえ」

だな。

大本営がどれ位の期間を見越してるのかわからないけど、急を要しているわけじゃないだろう。

と、普通なら思うんだけど。

「それに合わせてこの鎮守府へ新たな艦娘が着任する。正面海域を突破した報奨的な意味と単純な戦力確保の意味で」

「っ……そうなのねえ。どんな子が来るのかしら？」

ん？ 一瞬変な顔してたけどどうしたよ龍田。でも普通にすぐ戻ったし、大丈夫かな。

むしろ大丈夫じゃないのはこっちだ。資材が全然足りてない中だぞ？ 来てもらうのは嬉しいけど、まともな運用はきつつい。タイミングおかしいだろう。むしろ資材くれ。

まあ、それは良いとしても。

——捨て艦。

その言葉が頭を再び埋め尽くす。

「提督さん？ どうしたの？」

「ん？ ああいや、何でも無いよ。ありがとうな、夕立」

ええい、愛い奴め！ 撫で回してくれる！

……ふう。

駄目だ、余裕ぶる余裕がないわ。

「提督さん？ 撫でてくれるのは嬉しいけど……やっぱり大丈夫じゃないっぽい！ ちゃんと行って欲しいっぽい！」

「そうだけ、提督。何でも言ってくれよ？ お前がそんなだと……その、なんだ。不安になっちゃう」

「うふふ。そうよ。提督はいつでもしっかりしてくれないと」
……つたく、こいつらは。

ふと袖を引っ張られる感覚に目を向ければ、時雨もまた心配そうな目で俺を見ていた。

指令の一部。南西諸島海域への足がかりを作れ。

その内容に、単純な戦力補充として艦娘を送るという訳ではなく、戦力を守る盾として……文字通り身を挺した盾としての役割をこなすための艦娘を送るといふ一文があった。

要するに、そういう事をしてでも指令をこなせ。って事だろう。

——決して、大事にしろと俺に言った事を翻した訳じゃないはずだ。

それほどまでの脅威が待ち受けているのだろう。正面海域を突破したからって気を緩めてる余裕はねえんだろうな。

「ありがたいな。ちつと先のこと考えてビビってた」

「なんだ、提督でもそんな事あるんだな。ちよつと安心したよ」

「提督さん大丈夫っぽい！ 夕立にお任せっ！」

そうだな、何とかなる。何とかする。そうやってきたもんな。

絶対に艦娘を沈めない。

そうさ、それだけのことだ。

俺が不安になりやこいつらはもつと不安になる。こんな姿を見せてる場合じゃねえな。

「っし！ 元気出た！ やってやるぜ！」

「うん、大丈夫そうね〜」

「そうだね。うん。提督？ 何でも言ってるね？」

俺の姿を見て喜んでくれる皆。

ほんつと、提督になって良かった。

この気持ちを味わえるなら、いくらでも頑張れるさ。

ありがたいな。

「よし。じゃあ新しい艦娘は明日のマルハチマルマルに着任予定だ。今日の仕事終わらせて、皆で歓迎の準備するぞっ！」

「二了解っ！」

「嘘……」

それは誰が言ったのか。

俺かもしれないし、天龍かもしれない。

もしかしたら龍田や時雨。夕立もそう言ったかもしれない。

それくらい、誰が言ってもおかしくなかった。

執務室に新しい艦娘を迎えた。

皆が手に持ったクラッカー。それは部屋に虚しい響きを奏でた。

その姿を見た瞬間、天龍は目を丸くしてたし、龍田もまた表情を固めた。

そんな二人に驚くより、俺も、時雨も、夕立も。

目の前にいる艦娘の目に、言葉を発せなかった。

「お久しぶりです、提督」

「大淀……」

俺達の驚きに大淀は居ない。

そしてその事を大淀は気にしてないと言っても言うかのように笑顔で浮かべて。

「大本営よりこちらの鎮守府へ異動し、着任しました。艦隊旗艦として特化設計された新鋭軽巡洋艦、大淀です。どうか、よろしくおねがい致します」

俺へと挨拶をしてくれた。

だけどその挨拶に、誰も返事を返せないでいる。

「わかってます。話すことが出来ない彼女達の代わりに、私が」

大淀は自分の後ろに揃って控えていた四人の後ろに回り、静かに紹介してくれた。

「特III型駆逐艦、第六駆逐隊とも呼ばれていました。一番艦、暁。以下響、雷、電です」

瞳に何の光も宿さないで、うつろな目をぼんやり俺へと向けてくる彼女たちを。

——何で？

俺が持っていた彼女たちのイメージとあんまりにも違いすぎるその姿に、動揺が抑えられない。

皆を見れば、俺とおんなじ感じ。一際天龍が酷く動揺しているみたいだが……すまん、気にかける余裕が無い。

そんな中、大淀は笑顔を浮かべている。

笑顔？ これを知っている？

「提督……」

時雨が俺を呼んでる。

ああ、わかっている。わかっているさ。

俺は、提督だ。

艦娘が頑張ってくれたんだ、俺が奮わなくてどうするんだ。

大きく息を吸って、吐いた。

そんな俺に視線が集まった気がする。

やろう。

「よく、着任してくれた。俺がこの鎮守府の提督だ。ここに居る艦娘で全員と君達が今まで居た所に比べたら規模の小さい鎮守府かも知れない。だけど、これから一緒にもりたてて行きたいと思ってる。どうかよろしくたの——」

「い、いやあああああああああああああああ!?!」

握手を求めようと手を伸ばした瞬間。

暁の悲鳴が響き渡った。

「提督さんっ!!」

「!?!」

夕立に突き飛ばされたと思えば。

「まじ、かよ?」

「フーツ! フーツ!」

艦装を展開した電。その砲塔の先にあつた壁が綺麗に無くなつていた。

「暁ちゃんから離れるのですっ! 離れろっ! はなれろおおおおお

お!!」

「っ!! ごめんっ!!」

「……ごめんなさい」

「あ……」

時雨が電の後ろに回って押さえつけた。その電に当身をしたのは龍田。

電はその場に崩れ落ちた。

——何だ? 一体、何が起こっている?

立ち上がった俺の視線の先には、未だ半狂乱のまま叫び続ける暁を俺から庇うように抱きしめる雷。その様子に何も感じないのか、変わらなうつつろな目を向けている響。

この光景を、俺は理解できずにいる。

「指令は、ご覧になりましたか?」

「……ああ」

ぱらぱらと破られた壁の破片が床に落ちる音が聞こえる中、大淀が俺に言葉を続けてくれる。

「これが……この子達が提督の戦力を守る為の盾。使えなくなった艦娘です」

「使えなく、なった？」

何だよそれ、どういうことだよ。

視線で話を続ける様に促せば、大淀は顔を青くした天龍の方に視線を向けて。

「彼女たちは、遠征任務を失敗しました。損害を出す可能性が限りなく低い遠征で中破、大破しました。この結果にその鎮守府の提督は激怒し……彼女たちに怒りの矛先を向けた結果。こうなりました」

「な、なあ……？ それってよ……」

「まさか……」

天龍と龍田が口を挟んできた。何か知ってるのか？

「はい、天龍さん。あの時の、第六駆逐隊です」

大淀がそう言った瞬間、天龍は床に勢いよく膝をついた。

「そうか、オレの……オレのせいかよ……ちくしょう……ちくしょう！」

「あの後。営倉に入れられた龍田さんと天龍さんはそのままこちらに異動。……提督は、龍田さんに怯えてしまったことを含めて直接ぶつけられなかった怒りを彼女たちにぶつけたようです。……そうして建造されたばかりで何も知らない彼女たちは——」

「もういいっ！」

言葉を遮ったのは龍田。待て待て、気持ちわかるけどよ？

「龍田！ 何処へ行く！」

「決まってるじゃない！ あいつ……あいつの所に行つて……!!」

あー、はい。これは駄目ですね。どうにも出来ません。

……どうにも出来ない？ 本当に？

んなわけねえだろ……！

俺が、提督がどうにも出来ないなんて言ったら駄目だろ！

「龍田」

「何よっ!？」

龍田の肩を掴んでみれば勢いよく振り向いてくる。

その目には涙が浮かんでいた。

怒りだけじゃない、何処か後悔しているような。そんな涙。

「ここにいろ」

「何でっ!? 私の、私のせいなの……! 私が感情に身を任せてあんなことしなければ……!」

「違うっ! オレが! オレがもつとしっかりしていりゃあ!」

龍田の声を遮るように俺が悪いと言う天龍の目にも涙が溢れてる。

時雨は心底辛そうな顔をして胸元をぎゅっと握ってるし、夕立は暁達と俺達の方へと視線を行ったり来たり。

「落ち着け。いいか? ……お前が、お前たちが感じてる想い。一旦俺に預けろ」

「っ!」

ああ、わかってる。

それが難しいことなんて。

自分で晴らしたいはずだ、責任を取りたいはずだ。

だけどそれは駄目だ。

「大淀。早速で悪いけど……」

「はい、どうぞされますか?」

それで浮かばれるヤツなんていないからだ。

自分の後悔を元に晴らしたって、何にも救われない。虚しさが残るだけだ。

「天龍や龍田……暁達が居た鎮守府に行きたい。そうだな、見学つて名目でいいか。今後の運営方針の為に」

「それは……可能だとは思いますが。その間この鎮守府はどうされるのですか?」

もちろん、運営するさ。当たり前だろう? 俺は提督だぞ。

「天龍、龍田はここが維持できる程度でいいから引き続き資源回収。夕立は暁達の面倒を見てやってくれ。そして時雨は俺と一緒に行く」

「何で時雨なんだ!? オレを……!」

天龍が反射的に……多分、俺を連れて行けって言おうとしたんだろ

うな。途中で止めた理由はわからないけど、口を必死で噤んでる。

「……提督？ 私を連れて行って？ お願い」

「駄目だったの。言うこと聞きなさい」

何処か必死に自分を押さえつけて、理性的なつもりで俺に言ってるんだろうけど。目が笑ってないって。

「夕立？ 辛い役まわりだけど……頼んだぞ？」

「んーん！ 夕立、提督さんの言うことなら何でも聞くっぽい！ お任せっぽい！」

につこり笑って言うてくれる夕立の頭を一撫でして。

「時雨、頼んだぞ？」

「任せてよ」

力強く頷いてくれる時雨。頼もしいこった。

「そして大淀」

「はい」

こんな状況でも笑顔を浮かべている。

……多分、必死なんだ。

何に必死なのかはわからない。ただ、必死。

手は固く握られていて、よく見ればほんの僅かに震えている。その震えは何を抑えるためだろう。

俺のイメージにある大淀。

それはこんなに必死に感情を表に出すことを抑えようとする大淀じゃない。

任務を選ぶ時ににこやかに対応してくれて、しっかりもの。まさに敏腕秘書ってなもんだ。

そう、それは俺と出会った時のような。

「無理して笑うな」

「……え？」

そんな辛そうな笑顔で使えなくなったなんて言うな。

暁達にも伝わればいいが……。

「誰も沈めない。沈ませない。それがここのルールだ。そしてそれは何も海にだけじゃねえ」

悲しみにも、怒りにも沈ませない。

もし轟沈してるなら無理矢理にでも引っぱり上げてやる。

暁達を見る。

俺の想像とはまるつきり違う第六駆逐隊。

一人前のレデイに拘る暁も、頼られようと頑張る雷も、クールな響も、ドジっ娘な電も。

今はきつと沈んでる。

大淀を見る。

俺の言葉に尚笑顔を固めるその姿。

何を思ったのかわからない。わからないけど、その思いは間違いなく沈んでいる。

「絶対に掬い上げてみせるさ。俺は、提督だからな」

ハーレム提督に困難はつきもんだ。

こんな事で挫けるようなら、来るべき正妻争いの仲裁だって、俺の取り合いにだって臨めるべくもない。

そのためにもまずは。

「ああ、覚悟しとけよ？俺の艦娘泣かせたケジメはきっちりつけさせてやる」

他の鎮守府提督はひどい有様のようです

「見学だとお!? しかも墓場の提督があ?」

「は、はい」

怖い。

天龍さんが遠征失敗してから、提督の目付きはずっと怖いままで。六駆の子達が居なくなってから、それは態度にまで出始めちゃった。

「断れっ! あそこの提督の顔など見たくもないっ!!」

「で、ですけど大本営、司令長官の認可印が捺されています。これは上層部からの命令でもあります! き、気持ちはわかりますけど命令拒否は……」

「煩い!!」

……痛い。頬、張られちゃった。

赤くなつてないといいなあ……加古に心配かけちゃう。

「クソっ! 上は何を考えているっ! あの役立たず共は良いにしても駆逐艦まで盗っていきやがって……! その上見学を許可しろだとお……巫山戯るなあ!!」

「きやあっ!」

しよ、書類がっ……! 皆で考えた具申書が……!

……う、ううん。諦めちゃ駄目。

この鎮守府にもう艦娘は全然居ない。提督が荒れちゃうのも無理ないんだ。

だったら頑張らなきゃ、重巡洋艦の……ううん、艦娘の良い所いっぱい知ってもらわないと。

そうすれば、きつと変わってくれる。今までいい所なんて全然見せられなかったから、それさえ出来たらきつと良い提督になってくれるんだから。

そうだ、あそこの鎮守府は駆逐艦二隻と天龍さん、龍田さんで前線を押し上げてくれたんだよね。だったら私達が考えた事以上の案を持つてるかも!

「て、提督！ あの鎮守府は僅かな戦力で前線を押し上げたすごい所です！ 私達にもきつと何か良い方法を教えてくれるかも知れませんが！ メリットはあります！ ここは落ち着いて——」

「黙れっ！ 私に教えを請えと言うのか貴様っ！！ ただの兵器……私の物の分際でっ！！」

ううっ！ 尻もちついちゃった……痛い。

……痛いよ、深海棲艦の砲撃より、ずっと痛い。

でも、やらなきゃ……言わなきゃ。

もう二度と、六駆みたいな子は見たくないもん。

「お願いしますっ！ 対応は全て私達が行います！ 責任も負いますっ！ だから……！！」

意を決して顔を上げると。

「……そうだ、貴様らは私の物だ……ならば私が好きに扱うことに問題はない……」

私の言葉なんて聞いてない。ブツブツと何か呟いていて、怖いと思っていた顔が。

——悍ましい顔へと変貌していた。

「てい、とく？」

「古鷹、貴様私の役に立ちたいと言っていたな？」

「は、はい。当然です、私は艦娘ですから」

私の中で何かが叫んでる。

逃げろって。

でも、役に立ちたいと言ったのは本当。

私達を使えるのは提督しか居ない。だったらそれ以外言うことは無い。

「すぐに役に立てる方法がある……と言ったらどうする？」

「……」

返事を、したらいけない。叫んでるところじゃない。

警鐘。

これは警鐘だ。頷いたらいけない、イエスと答えてはいけない。私が私にそう告げている。

「六駆共には流石に手をつけたいと思わなかったからなあ……古鷹。貴様なら申し分は無いぞ?」

「ひっ……」

悍ましい……そう思った、思ってしまったその人は。

下卑た笑みを浮かべながら私ににじり寄ってくる。

「い、いや……やめて、やめて下さい提督」

「お前は私の物だろう? 役に立ちたいのだろうか? ……ならば」

その手が、私に……。

コンコン。

「提督? お忙しい所申し訳ありません。大本営よりお客様が見えておられます」

「……っち。良い所で邪魔が入る……! 古鷹、よく考えておけ?」

貴様の役目、どうすれば私、いや提督の役に立てるのかを」

耳で自分の歯がガチガチと鳴る音が煩くて。何も考えられなかった。返事も出来なかった。

提督が、部屋から出ていく。

「古鷹さん……」

「ほう、しょうさん……」

私を呼ぶ声が女の人の声って事に気づいて、つい昨晚にも聞いた声だっと思って出せて。

ゆつくりと、怖い思いを抑えて声の方向を向けば鳳翔さんが居た。

「あ、あ……鳳翔さんっ! 私……わたしい……!!」

「今の提督に一人で会うのは危険だって……あの具申書を出す時は一緒に言って言ったのに……どうして……」

「私、私……ちよつとでも良い所をつて! 皆のこと早く見直してもらいたくてっ! ごめん、ごめんなさい……!!」

鳳翔さんが抱きしめてくれる。

……温かい。

どうして、こんなに鳳翔さんは温かいのに、提督は温かくないんだ

ろう。

「とりあえず、部屋に行きましよう？ 加古さんも、心配してますから」

「うん、うん……」

そうだ、加古にも心配かけちゃった。

ほんとに私、駄目な子だな。

提督には怒られるし、鳳翔さんには迷惑をかけて、加古には心配をかけて。

もう、私を入れてこの三人しか艦娘は鎮守府にいないのに……。

あれから。鳳翔さんにも加古にも怒られたし泣かれちゃった。

——もう絶対離れないからな。

——絶対に一人にはならない様にしましょう。

そう言っただけで三人で固まって行動してた。

幸い、と言わなければならないようにして、私達にかまってる余裕はなさそうだった。

怒鳴り口調で指示されることはあってもあの時と同じ様な空気になることは無かった。

そう、指示。

どうやらあの前線にある鎮守府の提督さんが見学に来るって話は決まったみたい。

正直、ちよつと怖くなった。

提督が私に何かをしようとしてから。私は提督という存在が怖い。確かに、ずっと出来なかつた前線の拡大。

それが出来たことは有能、優秀な提督なんだろうけど。

それは優秀に艦娘を使ってるって証拠でもある。

提督が、私にしようとしたことを、その提督は優秀にやってるのかな。

上手く言うことを聞かせながら、自分の役に立っているのかな。そんな風に思ってしまう。

怖い。

そんな優秀な人が、提督にやり方を教えてしまったら？

ああ、駄目だ。本当に、もう私達は駄目だと思う。

そうやって怯えながら、指示通り準備を整えた。

そして今、その優秀な提督を出迎えるために、三人で入り口に立っている。

「古鷹さん、大丈夫ですか？」

「う、うん……大丈夫……」

「大丈夫だって！ もし変なやつだったら……！」

あれ以来、加古の目付きが少し危ない。もしかしたら、やつちや駄目なことをしてしまいかねないとも思えるような。

鳳翔さんもいつもと変わらない様に見えて、時折鋭い目付きをする事がある。まるで、一瞬でも気を抜かないといったような。

私も、何かが変わったかな？ 自分ではよくわからない。

だけど、加古も鳳翔さんも。私に笑ってとよく言うようになった。

自分では、笑顔を浮かべていると思ってるんだけど……なんでだろう？

ああ、駄目駄目。そんな事考えてたら、提督の役に立てない。

役に立てなかったら、またあれが来る。今度は誰も来ないかも知れない。

助けて、くれないかも知れない。

それは嫌だ。だから必死になろう。役に立とう。

遠くから、ここに向かってくる車が見える。

それが近づいてくる毎に心臓が煩くなる。

大丈夫、大丈夫。

自分に言い聞かせて、到着を待つ。

そしてその車も止まり、中からまず艦娘の——あれは時雨ちゃん、だったかな？ が降りてくる。

乗っていると思う提督は出てこない。

時雨は私達の方を向いて、一瞬驚いた顔をしていたけど。私達の敬礼に対して答礼してくれた。

ああ、なんだか懐かしいな。このやり取り。

知識として知ってるだけだったこのやり取り。

提督にやってもしてくれなかったから。懐かしいって言うのはおかしい話なんだけど、なんでだろうね。そう思うのは。

でも、心地いいな。

鳳翔さんも、加古も。目尻が少し緩んでる。

私と同じ様に思ってるのかな？ 敬礼と答礼。普通の事がこうやって出来るのが嬉しいなんて。

でも、そんな空気は一瞬で収まった。

反対側のドアが開いて、中から……墓場と言われる鎮守府の提督さんが出てきたから。

「お待ちしておりましたっ!!」

加古は一瞬で敬礼するその姿に力を込めて、鳳翔さんも目付きを鋭くした。

だけど。

「ん？ 出迎えてくれたのか？ ありがとう。古鷹さん、加古さん、鳳翔さん」

「……え？」

車から出てきた提督さんの目付きはすごく険しかったけど、私達をみるやいなや笑顔で答礼してくれた。

思わず、私も皆も啞然としてしまう。

そんな私達に困ったのか。

「ええつと？ どうしたんだ？ ああ、もしかして礼の仕方が変わったか？ すまん、まだ慣れてないもんで」

そう言つて恥ずかしそうに頬をかいた。

「い、いえ。申し訳ありません。その、笑顔を向けてくださると思つていませんでしたので」

「……時雨、俺の笑顔つて気持ち悪い？」

「ううん。僕は好きだよ？」

鳳翔さんの言葉をどう受け取ったのか、いつの間にか隣りにいた時雨ちゃんへと心配そうに聞いている。時雨ちゃんは笑顔でそんな事言ってるけど。

——いいなあ。

「そ、そういつた意味ではなく！ 申し訳ありません！ 変な事を言っただけです！」

「いやいや、それなら良かったよ。こうやって他の鎮守府に来たのも初めてだし、何か無作法があったら教えてくれな？」

「と、とんでもありません！」

あはは、鳳翔さんが慌てる。初めて見たなあ。

「えつと……なあ、墓場の提督さん？ あんたは一体何しにきたってんだ？」

「こ、こちら！ 加古！」

ちよ、ちよつと！ 何失礼な事聞いているのよっ!? 折角……。

折角？

折角、なんだろう。

私は今、何を思って言おうとしたんだろう。

わからないや。

でも、そんな私の疑問は。

「ん？ そうだな。知つての通り見学と……お礼を言いに来たんだよ。あんなに良い艦娘を異動させてくれてありがとうってね」

今まで見てきた中で一番格好いいと思える笑顔と、不思議な光を宿しているように見える瞳に吸い込まれていった。

なんだろう。

なんで、私の提督はこの人じゃないんだろう。

教えたい、知ってほしい。この人に。

重巡洋艦の良い所も、艦娘の良い所も。

私達がどんな思いでこの世界に生きているのかも。

ずっと使えない軽空母だって言われながらも必死に海へと出ていた鳳翔さんも。

ずっと中途半端な重巡洋艦と言われながらも必死に自分を奮わせていた加古も。

……ずっと、誰かに重巡洋艦でも古鷹でもない私を知って欲しいと願っていた私も。

何で、涙がでるんだろう。たった今初めて出会ったこの人の前で。

「……そっか。わかった」

そんな私達の何がわかったんだろう。

でもこの人は力強く頷いてくれて。

「頑張ってくれて、ありがとう」

お礼を言ってくれたんだ。

提督が見学に来たようです

大本營の意図がさっぱりわからない。

車の外で流れる景色にそんな思いを馳せる。

見学したいという電文を送った時。その許可は一瞬で出た。

どうやって伝えようかと悩んだ事を先回りするかのようになり、その鎮守府内における出来事的一切に関してを容認する。と言った返事を交えて。

まるで、そう。

俺に何しても良いよと言っているかの様な。

指令に捨て艦作戦を取れと言った様な事を記す大本營、軍にも関わらず、だ。

「なあ、時雨。時雨は大本營についてどう思う？」

「どう思うか、かい？ ……そう、だね」

隣で少し緊張した面持ちだった時雨に聞いてみると、顎に指を添え目を閉じて考え出した。

時雨にしては珍しく考え込んでいるようだ。そんなに深く考えなくても良いんだけど……。

初期艦の時雨と夕立。戦力補充としてやってきた天龍と龍田。そして今回の六駆と大淀。

うちの鎮守府に着任してくれた皆。何か問題を起こしてしまった艦娘だっというのは、大淀から聞いた。また、その時のやり取りも凡そは。

俺がもしその提督ならまずありえない采配、運営。はつきり言って、胸糞悪い。いや、それどころじゃすまない。

聞いた瞬間思わず軍に対して出撃命令をしようかと思っただけくらいだ。

ただ、どうにも腑に落ちない。ハッキリ理由がわかってる訳じゃない。それでも妙なしこりを感じる。

違和感。

そう、違和感を覚えているんだ。

そもそもわざわざ捨て艦なんて指示をするだろうか。いくら戦力として見込めなくなつた艦娘とはいえ、同じ艦娘は現れないしその鎮守府に所属していた艦娘が轟沈すれば二度と同じ艦娘が着任しないなんてルールがある中で。

仮にそれが当たり前の世界であるなら尚更。提督は着任した艦娘を見てまずそれを考えるだろう。

俺というイレギュラーな提督だから、上の指示をわかりやすく伝えようとしている？

いや、違うはずだ。

僅か一日の講習だったけど、それを伝える機会は確かにあつたし。なんならあの時に会つた司令長官自身の口から言つても良いはずだ。

わからない。

今の俺にはそれをそうだと結論付ける材料が無い。そんな事あるわけない、あつてはならないという思いの丈しかない。

そんな事を考えていると、時雨は目を開けて頷いた。

どうやら結論が出たようだ。

「提督も知つた通り、僕達は何か失敗してしまつたり艦娘として機能不全と言うか……うん。大淀が言つた通り、使えなくなつた艦娘なんだよ」

「そんなのっ！ ……おう」

思わず否定しようとしたけど、時雨の顔を見て尻すぼみに。だつてよ。

「軍、大本営から役立たずだつて決められた事は辛いよ。そう決めつけられた時は間違いなく兵器としての自分が全てだつたから。そうさせたのは誰のせいだっ！ って憎いとも思うし、何処か自業自得だつて囁く自分もいる。だけどね……感謝してもいるんだ。おかげでこうして提督と会えたから」

「……そっか。俺はそう言つてくれる時雨に感謝してるよ、ありがとうな」

めちやくちや笑顔だつたから。

自然と時雨の頭に手が伸びた。それを怯える訳でも媚びるでもな

く自然に受け入れて目を細めてくれる時雨。

そんな時雨、艦娘だから。尚更思う。

もしも。

もしも、この世界の艦娘が不幸に沈んでいるのなら。

引つ張り上げたい。俺に出来る全てで。

「時雨。俺は、さ……。まだまだ何も出来ない提督だけどさ……」

「それは違うよ提督」

細めていた目を元に戻して、何処かちよつと怒った様子で。

「提督は最高の提督さ。だって僕、こんなに幸せなもの。こうして頼られるのも、それに応えたいと思うのも。提督だからなんだよ」

「……」

その言葉に、思わず震えた。

嬉しいと思う。重圧だとも思う。

だけどそれ以上に。

「ありがとう。なら俺は時雨がずっと最高の提督って誇れる様に頑張るよ」

「うん！」

応えたいと思う。

「ならまずは……あいつらを、スタートに立たせてやる事から始めるでしょう」

「何でも言っつてね、提督」

俺は、確かめなければならぬ。いや、確かめたい、確かめなければと思っっている。

俺が好きな艦娘達。

そいつらが、どんな思いで、この世界に生きているのかを。

そうだ、まずはそれから始めよう。

そうすることで俺に出来るものがきつと何かある、何か見つかる。そう信じて。

その為にもまずは。

「あ、運転手さん。ちよつと寄り道していいですか？」

横須賀方面の海域を防衛する鎮守府の一つ。

俺達の鎮守府もそうだが、龍田、天龍。そしてあの六駆が所属していた鎮守府もまた同じ担当だった。

天龍、龍田がかなり早くに俺達の鎮守府に着任出来たのはこの鎮守府が結構近くにあったからでもあった。

見えてきた鎮守府の規模はうちと同じか少しだけ大きいくらいに見える。

俺も紙面上でしか知らなかったけど、鎮守府にはそれぞれ建てられた場所に応じた規模があるらしい。

例えば横須賀鎮守府。

横須賀方面の海域を守る主力鎮守府とされてるその規模はかなりのものだ。

最大着任可能艦娘数は三百とでかい。課金しまくったんだな？

わかります。正直そんなでかいのに三十隻程度しか着任してないってのがありえねえけど。

他にも海岸に沿って鎮守府が点在している。

主に漁村を守る事等、出撃を主眼とする鎮守府じゃなくその場の暮らしを守って、日本国内に流通する海産物を守ったりする役目を担った小規模、最大着任可能艦娘が十隻程の鎮守府だったり。

そのどちらの役目も行える百隻程着任可能の中規模な鎮守府。

うちは中規模鎮守府だ、要するに艦娘が住める部屋とかはガラガラだったりする。

他の鎮守府と少し違うのは建造された場所が出島状態になっていて、海岸沿いではなく言ってしまうえば海の上。

本土とさほど距離はない、まあ車で一時間はかからないくらいだ。

よくこんな所に建設出来たなど今でもたまに思う。

そして初めて自分の鎮守府以外。その姿が大きく見えるにつれて、緊張してきた。

……正直、怒りの赴くままに行動したいという一面はある。

俺自身、これから話す事になるのは正真正銘の軍人。その事に不安を覚えてだつて居る。

だけど。

「着いた、ね」

「ああ」

時雨が息を飲む。

その顔は緊張していて。同時に何かの決意を宿した目をしていて。そんな時雨の前で情けない姿を見せるわけにはいかないと、腹を括って車のドアを開けた。

「お待ちしておりましたっ!!」

つと、元気いいな。と言うか。

「ん? 出迎えてくれたのか? ありがとう。古鷹さん、加古さん、鳳翔さん」

ああああああ!! 可愛い! 可愛い! 美人!!

古鷹ってやっぱり目の色違うんだ! 大天使!

加古ってやっぱり眠そう……じゃねえ! 何でそんなにギラギラしてんの!

鳳翔! おかあああああさあああああん!! 圧倒的人妻感っ!!

……ああ、もうこれで良くない? 見学。三人の顔見ただけで満足だよ。なんだか眠いんだ。

っは!?

いかんいかん。今は至極真面目モードだったはずだ。ほら見ろ、なんか困ってるじゃねえか。俺自重しろ。

でもさ、わかって欲しい。

誰だつてさ、建造の時とドロップの時つてさこんな感じだろ? そうだろう? 新しい艦娘が着任しましたつて時の心境はこうなるだろう?

いや、まあ。うちに着任してる訳じゃないけどさ。いいじゃない。「ええっつと? どうしたんだ? ああ、もしかして礼の仕方が変だったか? すまん、まだ慣れてないもんで」

「い、いえ。申し訳ありません。その、笑顔を向けてくださると思っ
ていませんでしたので」

えっ。もしかして俺の顔気持ち悪い？ やめろよまじ震える。ヒキニートは傷つきやすいんだぞ。

「……時雨、俺の笑顔って気持ち悪い？」

「ううん。僕は好きだよ？」

よかった安心した。時雨ありがとう。

言わせた感すごいけどそれで安心する位にはチョロい俺なんだ。

「そ、そういつた意味ではなく！ 申し訳ありません！ 変な事を言ってしまいました！」

「いやいや、それなら良かったよ。こうやって他の鎮守府に来たのも初めてだし、何か無作法があったら教えてくれな？」

「と、とんでもありません！」

いやマジで。

ぶつちやけ最初に大本営に連れて行かれて以来、ザ・軍！ って感じの所に行ったことねえし、知識もない。そういった面は割と不安なのよ。

別に失礼を働きに來たわけじゃないから、ほんと遠慮しないで言つてね、マジマジ。

「えっと……なあ、墓場の提督さん？ あんたは一体何しにきたつてんだ？」

……墓場、ねえ。

そーいや言つてたな大淀も。

俺の鎮守府は使えなくなった艦娘を送り、処理する為の墓場だつて。

ま、異存はねえよ。

よく言うだろ？ ケツコンは人生の墓場だつてよ。

「そうだな。知つての通り見学と……お礼を言いに来たんだよ。あんなに良い艦娘を異動させてくれてありがとうつてね」

時雨じゃないけど、感謝もしてはいるんだ。

だつてさ、資源も使わずにホイホイと艦娘を贈ってくれるんだぜ？ 最高じゃねえか。

しかもやつぱり皆可愛いし？ 最高の艦娘だし？ 上の思惑はど

うあれ、その点に関して言うことねえよ。

そんな事思ってたら。古鷹が不意に涙を浮かべた。

……。

多分。

「……そっか。わかった」

気を張っていたんだ。あらゆる事に。

俺の知っている、イメージ通りの古鷹ならきつと頑張る。

自分のいい所を伝えようと。

「頑張ってくれて、ありがとう」

なら、お礼を言わなくちゃ。

古鷹だけじゃない、艦娘は人間の為に頑張ってくれてるんだ。文字

通り身命を賭して。

「突然決まった見学で迷惑をかけたと思う、すまない。だけど今日は

よろしく頼む。皆の良い所を無知な俺に教えてくれると嬉しい」

「……はいっ！」

そう言ってみれば、改めて敬礼をしてくれた。

提督が遂に我慢できなくなつたようです

「三人以外の艦娘はいないのか?」

「はい。少し前まではもう少し居たんですけど」

うっ。そう言われると辛いな。

うちからしてみれば諸手を上げて喜ぶ事だけど、ここの人達からすれば微妙つちや微妙な事だよな。

「すまん。俺が盗つてしまったようなもんだ」

「あつ!? いえ! そういう意味で言つたんじゃないです!」

わたわたと俺の前で案内してくれている古鷹が勢いよく振り向いて両手を振ってくれる。

「……正直に言つてしまえば、別の環境に行けるなら行つたほうが良いと思ひましたから。私では……私達では、どうすることも出来ませんでしたので」

そう言つて少し俯く古鷹。それに続くように時雨の隣にいる加古、俺の隣にいる鳳翔も悔やむような表情を浮かべる。

どうすることも出来なかつた。という事は突つ込んで聞いてはいけない事だろう。それは彼女たちの後悔を赤裸々に話せつて言つてゐるようなもんだし。

何より、俺自身話す内容を間違えたと思つてゐる。

こんな顔をさせたいわけじゃないのに。

「そうか……」

かと言つてじゃあ笑える話題があるのかつて話で。

そもそも俺がここに來た理由はそういうポジティブな理由じゃない。

今もそうだ、俺がこの子達の顔を暗くさせてしまつた事を棚に上げて言うが。三人が落ち込んで、傷ついているつて事をこの提督は理解しているはずだ。他ならぬ自分が招いた事なんだから。なのにも関わらず何のケアもしてゐないと思われる現状。

その事に腹が立つ。

いや、本当に俺はコミュニケーションが下手だと思ふ。

こういう時にこそこんな雰囲気吹き飛ばすような話題を出せないといけないと思う。

この世界に来て少し経つとは言え、俺はやっぱりヒキニートをこじらせた、ただの一般人何だなんて自嘲してしまいたいそうになる。

だけど、今は違うだろう？ 俺は、提督なんだ。

「ふう……そうだ、工廠……建造ドックを見せてもらえないか？」

「建造ドックですか？ 大丈夫ですけど……ええと、多分何処も変わらないと思いますけど」

まあそりやそうだろうけど。少し間を置きたいんだよ。

それに気になることもある。

妖精。その存在。

ここに来るまでに見てきた施設では出会うことのなかった妖精。

場所が悪かったのかも知れないと思いつながらも、装備開発や建造を行う工廠なら確実にいるかいないかが分かるだろう。

うちの妖精は大体その多くが工廠にいる。

たまに執務室でお茶していたり、道場で俺達のマネでもしてるのか妖精が扱えるサイズの竹刀でチャンバラしてたりするけど。基本的には工廠。

「ああ、うちはまだ一度も建造ドックを使用したことがなくてね。良ければ使い方から教えてもらえると嬉しい」

「えっ！ 使ったこと無いんですか!？」

目を丸くする古鷹。可愛いなあ。鳳翔も加古も驚いてら。

そりや驚くよなあ、うん。

けどまあそんな余裕なかったのは確かだし。いや、今もねえけど。

「なあ……あんたのこの艦娘つてこの時雨と、天龍さん龍田さん。六駆の子達に後誰がいるんだ？」

「ああ、大淀が六駆のみんなと一緒に来てくれたよ。天龍達の前には時雨と夕立……最初はこの二人だけだった」

「え……？ そ、それでも建造を行わなかったのですか!？」

加古の質問に答えてみれば、思わずといったように鳳翔が身を乗り

出して聞いてきた。

ええ、すいません。資材無くて無理だったんですよ。

「流石に着任した時、各種資源が三〇〇程度しか無い中で建造出来るほど肝は据わってなくてな……俺は臆病者なんだよ」

「さん、びやく……?」

呆然としたように数字を呟く鳳翔。

え、何? 皆そんなもんだろ? なあそうなんだろ? そうだと

言つてよ。マジで。

「……なあ、加古さん? キミがここに着任した時、資源つてどんなもんだつたの?」

「あー……うん。ごめん、その五倍。あたしは古鷹と一緒に初期艦の次に建造されて着任したらしいから多少減つてはるはずだけど」

おーまいがっ……!」

つまりなんだ。うちだけか、あんな環境だったのは。

ほんとさ、どういふことだよ大本営さんよ。

捨て艦だけじゃなく、捨て鎮守府だとも言うつもりか? 巫山戯てる。

「そうか……いや、ありがとう答えてくれて。まあそんな感じだったからさ、見てみたいんだよ建造ドック」

「わ、わかりました。今丁度四つある建造ドック全てが稼働中ですし、ご案内しますね」

四つ!?

いやいや、うち一つだけだわ。

課金かな?

じゃなくて。

「その四つってのは最初からあったのか?」

「え、はい。そうですけど……」

オツケー。もういいわ。とりあえずそういうのは後で考えよう。ぶっちゃけこれ以上考える事増やしたら身動き取れねえレベルだし。

まずは、見学。そして、目的を達成しようじゃねえか。

「こちらが、建造ドックです」

はー、でつかい。

何がでかいつて部屋がでかい。流石に四つあるだけあるわ。うちと同じ規模の鎮守府なのにどうしてこんなに差が出来た。

艦これでは建造中の文字と共に妖精がカーンカーンつてやってるもんだから、てつきりそういうもんかと思つてたけど。俺がいる現実^{世界}では違うらしい。

資材をセットする釜みたいなのから、ぶつといケーブルが大人一人入れるくらい大きなシリンダーみたいなのに繋がってる。

これはうちもそうだけど、思わずホムンクルスやら、アンドロイドやらそういった言葉が浮かんでくる様な設備。

うちと違うのは、釜から伸びるケーブルが四つに分かれてる以外違うところはない。

「稼働してると、こんな感じになるのか」

使ったこと無いからわからんけど、今は中に綺麗な青色の液体が入っている。

思わず見惚れる位綺麗な色だ。

「この液体は、海の意味と言われています」

「海の、意思？」

なんだそりや。燃料やら弾薬やらが混ざった液体が海の意味？

「各種資源が混ざった液体、そこから艦娘を発生させる……私達は海上を征く艦娘。海を守る意思を持つ者を生み出すことからそう呼ばれています」

鳳翔が教えてくれた。

へえ……そんな風に言われてんのか、この液体。まあそう言われてみればものすつごく綺麗な海水に見えないこともない、か。

「なるほどな。……それで？ 今は誰を建造しようとしてるんだ？」

軽巡洋艦？ 戦艦？ それとも正規空母？ ああ、鳳翔と古鷹、加古。

軽空母と重巡洋艦だけならやっぱ駆逐艦を狙ってるのかな？」

「え？ 狙う、とは？」

んんん？

あ、ああ。言い方悪かったのかな。

「いや、レシピと言うか……どれ位資源を投入したらどの艦種の艦娘が来てくれるかってあるだろう?」

「い、いえ。そういったものは……えっと。確か、それぞれ現在は三〇〇ずつ投入しています。本来ならば、五〇〇以上の資源を使用するのですが……今はうちも資材不足でして」

〇〇〇う? は、はあ? 常に五〇〇以上? しかも資材足りてねえってのに三〇〇〇う?

「そ、それは何か理由があるのか?」

「り、理由ですか? 資源を投入すればするほど艦娘が着任する確率が高いから……と、聞いていますが」

あかんこれ。

俺の建造知識がガラガラと音を立てて崩れ落ちていくのが分かる。

え? いやまじかよ。

むしろ、そうじゃないと建造できないの? だったらうち絶望的じゃん。出来るようになるまでどんだけ時間いるんだよ。

思わずふらふらとシリンダーに近寄ってしまう。

近くで見た海の意味とか言う液体は僅かにキラキラと光っているようにも見えて。

「……あたしと古鷹が建造された時には、八〇〇使ったって言ったな。そう言えば」

「私の時は投入できるだけ投入したと聞いています」

は、はは。まじかよ。

そしたらあれか? 仮に戦艦欲しいって思ったら大型建造に挑めってか? あの資源ブレイカーに?

ゲームの時も清水で身を投げるみたいな覚悟の下でやったってのに。

しかも、普通の建造でその桁だ。大型だったらそれどうなるんだよ。

思わず、シリンダーに手を触れる。

——もうすぐ会えるね。

「え？」

「ん？ どうされました？」

触れた瞬間、声が聞こえたような気がした。

一瞬だったから誰の声かわからなかったけど、それは艦これで聞き覚えのある――

「ほう？ 私に挨拶も無しにこんな所をぶらついてたのか」

「っ！ 敬礼っ！」

あん？ 誰だよ、俺は今さっきの声が誰か……。

「流石は墓場の提督、民間上がりのクズと言った所か。いやはや、艦娘運用の前に礼儀から勉強するべき……そう思わないか？ 古鷹？」

「い、いえっ！ 申し訳ありませんっ！ 私が……」

「いや、いいよ。ごめんね」

振り返ってみれば、軍服に身を包んだおっさん。大体三〇後半つて所かね？ 軍人の証である佩刀見せ付けて来て、暗にお前とは違うんだなんて言ってるみたいで、見るからにうぜえ印象。パワハラとかモラハラとか素でやつちやいそうなヤツ。

慌てて弁解してくれようとした古鷹に謝って提督の前へと進み出る。ああ、時雨。そんな目しなくていいから落ち着いて。

「……申し訳ありません。私は仰る通りの民間出なもので、ちゃんと運営されている鎮守府に我を失っておりました。失礼を働いたこと、謝罪致します」

「なんだ、やれば少しは出来るようだな？ クズからただのバカに格上げしてやろう」

はいはい、ありがとうございます。くっそうぜえ。

まあ、いるよなこういうヤツ。俺も覚えがあるよ、嫌ってほどに。ある意味慣れてるからありがたい。

軍人っぽい軍人ってやつなのかどうかはしらねえけどさ。おかげで落ち着いたよ。

「しかし、だ。貴様の様なバカでは鎮守府運営も厳しいだろう。私の様な優秀な軍人の下で艦娘は運用されるべきだと思わんか？」

「と、おっしやいますとっ。」

あー時雨、いいから落ち着いて。俺の陰に居ると言ってもそんなに殺気立ってたら駄目だつて。

古鷹も、鳳翔もさ。そんなに申し訳なさそうに俺見るなって、あいつの艦娘だろう？

加古さん、加古さんや。俺はお前の寝ぼけ眼はとつても見たいがそんな目は見たくないぞ。

「やれやれ、察しも悪いようだ。無能な貴様に成り代わってあの墓場を運営してやると言ってるのだ。民間人は民間人らしく、市中に引込んでおればいい。どうだ？ ありがたいだろう？」

あー時雨さん時雨さん。艦装展開は駄目だよ？ いや、ほんとに。綺麗な顔が台無しよ？

落ち着けつて。俺も頑張るからさ。

「申し訳ありません。確かに苦しい運営ではありますが、しつかり戦果もあげております。どうか、その心の下見守っては頂けないでしょうか？」

「たかが鎮守府正面海域攻略を戦果だと？ はっ！ 思い上がったか!？」

「いいや？ 思い上がったねえよ。」

「確かに、貴方から見れば気にもかけないほどの戦果なのかも知れませんが、私達が文字通り命懸けで得た戦果です。その戦果により、私は今後より大きな戦果をあげられる、海を、人を守れると確信しております」

思い上がってねえ。確信してるんだ。信頼してるんだ。こいつらとなら何でも出来るって。

なあ？ てめーはそんな思い持ってるか？

「それを思い上がりというのだっ！ ……まあ良い。貴様も知ってるだろう」

懐から一枚の紙を取り出したおっさんは高々と書いてある内容を読み上げる。

「その鎮守府内における出来事的一切に関してを容認するっ！ なぜ上が命令としてこの見学を許可したのか疑問だったが、これで理解出

来たっ!! そう! 貴様の様な無能になりかわれと言うことだ!」

はー、お花畑属性もついたか。

まあ、確かにそういう風に受け取れるのかも知れないけどよ。

「私がそれに領くとも?」

「くつくつく……そうだな、バカな貴様だ。実際に見なければ理解できまいよ、私の有能さを。そこで、だ」

お? 良いのか?

その言おうとしている言葉、もしかしたら俺から言おうと思つてたことだぞ?」

「演習を行おうじゃないか、貴様の艦娘と私の艦娘で。教えてやる、私の有能さを。そして、私が勝てば貴様が奪つていった艦娘と持つている艦娘を貰う」

あー、ちよつと違つたわ。

まあ良い。

てか、そんだけボスカ言っちゃう鎮守府なんで欲しいのさ。

もしかしてそこでなら、俺の艦娘なら活躍、戦果を挙げられるとも思つてんのかね? 俺でさえ出来た場所と艦娘だから? しらんけど。

はーあほくさ。

「私が勝つた場合は?」

「勝てるでも思つたか? そうだな、万が一にもありえんが何か一つ貴様の要求に従つてやろう。資源でも艦娘でも持つていくが良い」
チラリと時雨を見る。

そうすれば、コクリと頷いてくれる。

——僕は、提督の為なら何でもする。何でも出来るよ。

そう目で言つてくれた。

「……一つ、条件を出させて頂きたい」

「条件だと?」

ああ。俺とお前。如何ともし難い艦娘への意識の違い。

「私は艦娘を物だなんて思つておりません。貰う、やるなんてとても口に来ない……です。私ので、私が今の鎮守府に在籍したまま。貴方の

命令に絶対に従うといった内容に変えてもらいたい」

「ほう……？ 私の傀儡となるという事か？」

「こそ。操り人形にでも何でもなつてやるさ。」

「……勝てたら、な。」

「私の鎮守府は危険海域にあります。その様な危険な場所にわざわざ赴くよりも、そつちのほうがよくばど楽かと思いますが……顔を合わせたくない艦娘もいるでしょうし？」

「ぐ……良いだろう。だが、命令を破つたその時は有無を言わさず取り上げるぞっ！」

「はい。構いません」

「おうおう顔をしかめちゃつてまあ。そんなに龍田が怖いかね？」

「あんなに綺麗で可愛い艦娘が。」

「それで？ 貴様の要求は何だ？ 叶わぬ願いだ、せめて口に出すこと位許可してやろう」

「あーあー……言っちゃつたか。お礼位言わせてほしいんだけどなあ。」

「うん。まあいいさ。」

「俺、よく我慢したよ、ほんとに。」

「その言葉が聞きたかつた。」

「……うちの艦娘に謝罪しろ。目の前で、頭を垂れろ。あいつらが許すと言うまで何度でも」

「謝罪い？ 貴様は本当に愚かだなっ！ たかが兵器を人間扱いか！？」

「クハハ！ まあよかろう！ どうせありえぬ事！ 約束してやるうではないかっ！ 古鷹っ!!」

「はっ、はいっ！」

「お前が相手をしろ……嬉しいだろう？ 私の役に立てる機会だ……わかっているな？」

「……っ！ 了解しました！」

提督に背を向けて、俺と目を合わせる古鷹。

「……ごめんなさい。」

その目はそう言っていた。

「……謝ることはねえよ。むしろ謝るのは俺の方だ。すまん。お前のやりたい事……あの提督の役に立とうってのを潰そうとしてんだからさ」

「……」

悲しそうな顔をしながら首を横に振る古鷹。

その古鷹を心配そうな、複雑そうな表情でみやる鳳翔と加古。ほんとすまねえと思ってる。

こうして俺も、お前たちを道具みたいに扱ってしまったことを。だけどさ。

やっぱり俺も許せねえ事ってのはあるんだ。勘弁してくれな。

「時雨」

「うん。わかってる」

にこやかに返事をする時雨。

その笑顔が少し、夕立とだぶる。

「任せてよ、提督。わかってるから。それにね？」

——僕もいい加減限界だったから。

そう言った。

ああ、初めて見たよ。時雨。

お前の獰猛な笑みってヤツを。

時雨と古鷹が想いをぶつけ合うようです

時雨と古鷹が海上に立っている。一人は落ち着いた表情で、一人は悲しい表情で。

古鷹は思う。

どうしてこうなったんだろうかと。

通常の演習。お互いの練度向上のために行う演習とは全く違うこれ。

互いの提督の思いを叶える為の演習だった。

ましてや単艦同士の演習。隊を組んで行動する艦娘達が行うべきものではない。

駆逐艦と重巡洋艦。

その火力の差は明確で、速力だってそう差は無い。

時雨は12cm単装砲と魚雷を装備していて、古鷹は20.3cm連装砲、自分の物と加古から借りた物の二基と7.7mm機銃。

スペック上だけで言うのなら時雨が不利だと言い切ってもいいだろう。

「古鷹さん、大丈夫ですか？」

「鳳翔さん……私」

そんな事を考えている古鷹に、この演習で損傷判定……言ってしまうえば審判を行うことになった鳳翔が声をかけに近づいた。

中立の立場を取らなければならぬものにも関わらず、そうしてしまったのは古鷹の顔に浮かんでいるモノのせいだろう。

放っておけない、そんな思いに我慢が出来なかったから。

「どうしたらいいのかわからないんです。あの提督は、言われるような無能な人だと思えません。むしろ私達をすごく大事にしてくれているみたいで。でも、私は……」

「提督の役に立ちたい、自分のいい所を教えたい……ですか」

コクリと頷く古鷹。

それはある意味呪いのような物なのかも知れない。

自分さえ、自分たちさえしっかりしていれば、提督の要求に応えら

れていれば。

あの提督は天龍や龍田を手放すことにならなくてよかったのかも知れない、六駆の皆は傷つかないで済んだのかも知れない。

あの遠征の日。

前線が押し上げられた影響で、あそこに集中していた戦力の一部が自分たちの海域へと逃げてこなければ。

そして、それらの深海棲艦への対応を私達がしつかり出来ていれば。

その思いが古鷹にある。

だからこれは贖罪でもあった。本当の意味でこれは最後のチャンスなのかもしれない、と。

一見してしまえば、ダメ男に捕まった女。ダメ男を必死で支えようとする健気な女と言った構図なのかも知れない。

それでももしかしたら提督はまた普通でいてくれたのかも、また元通りになってくれるかも知れない。

そう、古鷹は思ってしまう。

そして鳳翔もまた、そんな古鷹に何も言えないでいる。

「何を話しているんだい？ もう僕の準備は終わったけど……」

「時雨、ちゃん」

そんな二人の下へ時雨は近寄った。

その目はまっすぐに古鷹に向けられ、時雨の目を見た古鷹は俯いた。

悔しいと言わなければならない感情が古鷹に沸き起こった。

どうしてそんなにまっすぐな目を出来るのか。

どうしてそんなに無垢らしくいられるのか。

——どうしてそんなに迷いを捨てられるのか。

「ああ、うん。そうだね。その気持ちは、わかるかもしれない」
「えっ？」

時雨は優しく微笑んで頷いた。

かつてそう思って、その思いを捨てて。

そうしてまた拾い上げられたその思い。

時雨自身も思っていた。もしかしてという思い。それは確信に変わり、言葉が続けた。

「気にすること無いよ、古鷹。全力で来てよ。僕は……ううん、僕達と提督なら大丈夫だからさ」

「どうしてっ!? 何でそんな事言えるの!? 駆逐艦と重巡洋艦なんだよ!? こんなの……!」

時雨の言葉に一瞬で我を乱した古鷹は思わず詰め寄ってしまう。

ただ、時雨は変わらず微笑みを携えたまま。

「君達がここでどういった扱いを受けていたのかはわからないよ、察することは出来るけど。そしてそれはね、普通じゃないんだ」

「普通って何!? じゃあ貴女は普通なの!」

「そうだよ? 当たり前じゃないか。提督が艦娘を信頼して、艦娘が提督を信頼するなんて」

その言葉に、古鷹は絶句した。その隣にいた鳳翔さえも。

「だから僕達は戦えるんだ。だから艦娘は存在するんだ。……うん、だから遠慮しないでいいよ。思いつきおいでよ、その迷いを受け止めてあげるから」

——揺るがない気持ち、教えてあげる。

そう言って時雨はその場を離れて、所定の位置へと向かった。

残された二人は呆然とその姿を見送る。

「……鳳翔さん」

「はい」

やがて、時雨が位置につき改めてこちらを向き直った時。古鷹の目から一っただけ迷いが晴れていた。

「私、思いつきりやる」

「……」

時雨は言った。受け止めると。

ならば存分に受け止めてもらおうじゃないかと。

「敵艦発見。古鷹、突撃しますー!」

その言葉と共に、互いの想いをかけた演習は始まった。

開戦の合図が響き渡った瞬間。

時雨は全速で脇目も振らず古鷹へ突撃した。

その姿は、その顔に浮かべた笑みはかつての夕立を彷彿とさせるもので。

——たまには、良いよね。

なんて思いながら。

海風を身体に叩きつけた時雨の髪は何処か逆立っているようにも見える。

「!?」

「残念だったね? 折角距離があつたのに」

その突撃は古鷹にとつては予想外に過ぎるもので。慌てて照準をつけようとした頃には既に時雨、12cm単装砲の射程距離。

「そうでもないっ! この距離なら……外さないんだからっ!」

なおも真っ直ぐ古鷹へと距離を詰めようとする時雨。

その姿を照準越しに覗き込み——その姿を見失った。

「え!?!」

「こつちだよ?」

照準を合わせようとすればその視界は極端に狭くなる。

そしてその狭くなった視界の外、古鷹が自ら作った死角へと時雨は動いていた。

驚き声の方へと顔を向ければ、時雨は古鷹に照準を合わせるでもなく、その場にただ立っていた。

「どうしたんだい? 照準、合わさなくていいのかな?」

「ば……バカにしてっ!!」

挑発の言葉をかけながらも動かない時雨。

驚きから、動揺から、その言葉に従って再度ただ立っているだけの時雨に照準を合わせようとする古鷹に。

「きやあ!?!」

「ああ、ごめんね? でも流石に動いた方が良いと思うな」

時雨の魚雷が古鷹に襲いかかった。

『古鷹、魚雷直撃。脚部艤装に損傷、速力低下。小破』

鳳翔の声が響く。

——やられた。いつの間？ 今の動きは一体何？

驚きと動揺を増す古鷹。

そんな古鷹に時雨は尚も声をかける。

「やっぱり重巡洋艦って頑丈だね。少なくとも中破はすると思ったんだけど……まあいいさ」

「つくー」

照準も何もあつたものではない、ただその自分を苛立たせる声の方向へと向かつて砲撃した。

そしてそんな砲撃は見事に誰にも当たらなかった。

余裕を持つてその砲撃を見送つた時雨は、ゆつくりと、古鷹を中心に円を描くように再び動きはじめる。

脚部艤装に損傷判定をもらった古鷹は思うように動けない事に苛立ち、そんな自分を嘲笑うかのように余裕を持つて動く時雨に苛立つ。

——何で!? 何で当たらないの!?

時雨の艦制御。

時に速く、時に遅く。あるいは全速からの急停止。

その動きの前に古鷹は翻弄されている。

時雨の手のひらの上。まさにそういった状況。

「キミの思いは受け止めるって言ったけど……攻撃を受け止める気はないよ」

変わらない構図。当たらない砲撃。

最初の魚雷以降、時雨は一度も攻撃していない。ただひたすらに古鷹の砲撃を避ける動きに努めている。

余裕を見せている時雨だが、その実必死であつた。

自身の砲よりも遥かに大きく、火力の高い古鷹の砲。

確かに戦艦ほどではないかも知れない、だが駆逐艦の自分にとって大きな脅威である事に変わりはない。

それでも余裕を見せるのは、提督の下でこれだけ強くなることが出来たという事を見せつける為。

あなたの提督とは違う。一緒に培ってきた絆と力なんだと。その差を教えつける為に。

そしてその思いを古鷹は自分の砲撃が当たらない度に、少しずつ理解する。

古鷹は仲間の艦娘を除けば一人で努力してきた。だが、そんな古鷹の目の前に居る時雨という艦娘は違う。

仲間の艦娘はもちろん、提督とも一緒に努力してきたのだ。それが理解できる。

それが艦娘に何の変化をもたらすのかは分からない。だけど、全く違う。それだけは分かる。

「私だって……私だってっ!!」
分かった上で尚認めない。認める訳にはいかない。

それが普通だと認めてしまえば、今までの自分も仲間も提督も普通じゃないという事を認めてしまうことになるから。

その思いと共に、古鷹は。

「主砲狙って……」

「!!」

「そう……。撃てえー!!」

二基の主砲を連射した。

今までのように一基ずつ発射ではない、ほぼ同時。それも時雨の行き先止まり時を狙った文句の付け所が無い砲撃だった。

——当たる。

古鷹は確信した。

今までの普通をかなぐり捨て、ひらめきとも言える様な砲撃が当たることを。

当たる。つまり時雨は大破、撃沈判定になる。

自分は正しかった、普通だった。すなわち。

自分の提督は正しかった。

「どう、して……」

わかったのに、どうしてこうも悲しいのか。

古鷹の中で何かが叫ぶ。

——私は間違っている。と。

その叫びに耳を貸そうとしたその時。

「……うん、危なかった。かな」

「!？」

小破姿の時雨が古鷹の背中に三本の魚雷を突きつけ、その耳を塞いだ。

『時雨、自分の魚雷爆破に巻き込まれ大破も戦闘続行可能。古鷹、致命的な損傷。轟沈判定』

「負け、た……?」

「そうだよ。キミの負けだね」

ペイントまみれになった二人の姿。

古鷹は仰向けに海上で空を見上げ、そんな古鷹の隣に時雨は座り古鷹の頭を自身の膝に乗せている。

「最後……どうやったの?」

「ああ、あれ? ちょっと夕立の真似を、ね」

時雨の身を貫こうとする二つの砲撃。

自分の前へと着弾するだろうその砲弾に向かって時雨は突っ込み、自分の12cm単装砲を投げ当てた。

そして立ち上る煙の中突き進み、古鷹の背後へと回り込んだのだ。

「そんな……そんなの……」

「やってみたは良いけど……うん、やっぱり僕にはもう二度と出来なさそうだ。怖いもん」

にへらつと笑う時雨。その顔を古鷹は信じられないような物を見る気持ちで見上げる。

仮に自分なら出来ただろうか? いや、出来ない。

そんな自分を投げ捨てる様な事、出来るはずはない。

「何で、出来たの?」

「提督を、信じてるから。沈めないって言ってくれたことも……そして、必ずキミ達を救ってくれるって。信じてるから」

照れている訳でもなく、息を巻くわけでもなく。ただ当たり前のように言った。

そう、あたかもそれが普通かのように。

「違う……。違うよ、何でそんなに信頼できるの？ あの提督が優秀だから？ あなたがとても強い、優秀な艦娘だから？」

「僕が優秀？ 提督の所に来るまで出撃拒否してた僕が？ まさか。提督だって新任のペーパーだよ？ でもそうだね、何で信頼出来るかって言うのなら」

——信頼してくれるからだね。

その言葉はすとんと古鷹の胸に落ちた。座りよく、心地よく。

「そっか……。そうだよ。信頼してくれたら、信頼に応えようとするなんて……。うん、当たり前だね」

「も、もちろんそれだけじゃないけどねっ！ 僕達の為に命をかけてくれるしっ！ かつこいいしっ！ もう最高の人だしっ——」

時雨の止まらない提督自慢を耳に流して、古鷹は想う。

——当たり前だったね。

自分は全部自分の為だった。

良い所を見せたい、教えたい。それはそうすることで自分たちを大事にして欲しいから。

提督の役に立とうという気持ちを盾にして守っていた自分の本音はそれだった。

信頼しようなんて、思ったことなかった。

「まだ、大丈夫かな？」

「提督はその時ね……。ん？ 何がだい？」

今からでも手遅れじゃないだろうか。

今から信頼しようとすれば、信頼してくれるだろうか。

「……。それはわからないよ」

「そっか」

その言葉を、古鷹は目を閉じて少し残念に思う。

だが、その瞳を開けようと、時雨は言葉を続けた。

「僕にはわからない。けどね、きっとそれは提督が教えてくれるよ」

「提督が……?」

頷いた時雨は古鷹を立ち上がらせ、自分も立ち上がる。
「さあ、帰投しよう?　そこに、きっと答えはあるからさ」

おっさんはやっぱり見苦しいようです

やれやれと言うべきか。

ああいった戦法は時雨が苦手と言うよりは、嫌っていたはずなんだけどな。

でもそれくらいしないと古鷹の動揺を誘えないと踏んだのかな。それとも違う意図があったのか。まあわからん。

けどその甲斐あつてか、古鷹の動揺は目に見えていたし正解と言えば正解なんだろう。ただ、時雨の術中から立て直した古鷹は見事としか言えないけど。

俺のわがままから始まった演習とは言え、色々気づくことが出来た実りある演習だったと思う。

……あんまり死中に活を見出すつてのに慣れて欲しくは無いんだけどなあ。要相談だな。

ともあれ。

「馬鹿な……馬鹿な!! 駆逐艦と重巡洋艦だぞ!! この様な事、あるわけがないっ!!」

モニター越しに演習観戦をしていた俺と提督。

時雨の勝ち。

まあ賭けではあつたのかも知れないけど、やっぱり俺はこの光景を見ることが出来ると確信していた。

隣でわなわなと震えている提督の姿を含めてな。

「この結果に不服が?」

「貴様っ! 何をしたっ! 駆逐艦が重巡洋艦に勝てるわけがないだろっ!」

唾飛んでくるからやめろよきたねえ。

そんな事言ってるから負けたんだって何でわかんないかね。

「確かに彼女たちは駆逐艦と重巡洋艦です。ですが、艦娘です。こういう結果になることもあるでしょう」

と言うか別に艦娘じゃなくてもそうなんじゃねえかね。駆逐艦が戦艦に傷をつけたとかありふれた話だったと思うけど。

どちらにしても、今回はこうなった。それだけの話だ。

「こんな、こんな事が……!」

「さて、信じられない気持ちもわからなくはありませんが。約束です。どうかうちの鎮守府までご同行願いたい」

頭を抱えて俯いているおっさんにそう告げる。

てめーがそんだけシヨック受けてる以上に傷ついているヤツがいるんだ。そんな暇ねえぞ。

「し、知らんっ! 私はそのような約束……!」

あん? そんなテンプレ許されると思ってたんの? 約束は守る。これ、常識な?

「提督。今戻ったよ」

つと、戻ってきたか。

ペイントも落として来たようで、うん。可愛い。

「ああ、ありがとうな時雨。嫌な役回りだったと思うけど……」

「ううん、全然。でもそうだね……そう思うなら……あっ」

わかってるって。これか? これが欲しいんか? ……いやしんぼめっ!

てなもんで時雨の頭を撫でる撫でる。あーむしろこれ俺がやりたくなってる感やばい。髪ふわっふわだし超気持ちいい。

時雨も喜んでくれてるし、もうお互い幸せっ! 俺の心配とかもういいやつ!

「た、ただいまもどりましたっ!」

おつと、古鷹達も戻ってきたか。

ちよつとお前んとこの提督聞き分け悪すぎんよ、ちよつと言ってやってくれない?

「ああ、おかえり。んでお疲れ様……ちよつとき——」

「古鷹!! 貴様あー!」

つておい! 軍刀抜いて何しよう……!! 古鷹!! お前も何突っ立って……くそがっ!!

「つてえ……」

「提督?」

おっさんが振った軍刀は模造品でも何でも無く真剣だった。けどまあ、力任せに振っただけで全然刃筋が立ってない。

だから肩で刃先を受け止められた。

一応刃元も手で握れたからそこまで深くねえと思うけど……くっついてえ。

てかそんな事はどうでも良いんだよ。

「あんた、今何しようとした？」

「決まっているっ！ こんな役に立たない重巡洋艦等っ！ 今すぐこの場で解体してやるっ！」

ガチガチと刀を俺の身体から、手から離そうと動かすおっさん。やめろよ痛いから。

「て、提督っ!! そこをどいて下さい！ 私が、私が悪いんですっ！ あなたが傷つく事は……!!」

古鷹、お前が悪いなんて事はねえ。悪いのは俺達提督って存在だ。後、時雨。こんなところで艤装展開すんな。

「いいから落ち着け。んで？ 提督さんよ、てめーだよ一番落ち着かねえといけないのはよ」

「んなっ!? ぶっふっ！」

ぱつと力を抜いてやれば体勢を崩したこのおっさん。前へと倒れそうな所へ膝蹴りを一発。

ダメだねえ、訓練足りてないんじゃないやねえか？ ヒキニートにあしらわれるとかいけてねえなあ。

「いつつ……」

「す、すぐに手当をっ!!」

言いながら鳳翔さんが手当の道具でも探しに行ったのかバタバタと走っていった。

「提督っ！ 提督っ！ 大丈夫!? ……このっ……!」

「時雨、やめろ」

座り込んだ俺にもものっすごい心配そうな表情を浮かべながら近寄ってきた後、床で呻いてたおっさんに向かって砲を向けようとした時雨を止める。

「まったく、いいから落ち着けてのさ。
つておい、加古さんや？」

「お前……お前えええええええ!!」

「あー！もう!!」

「いてえんだつてばさ！ 何トドメさそうとしてんのさ加古さんや
！」

「離せっ！ 離してくれよっ！ あたしは……あたしはあ！」

「いいからっ！ こいつにはまだやってもらわねえといけない事があ
るからっ！」

「やばいやばい、傷むっちゃいてえ。頼むから抑えてくれマジで。」

「加古っ！ 落ち着いて！ じゃないとその提督さんの傷が……！」

「えあつ!? あ、あ……ごめんなさい!!」

「い、いや。いい……大丈夫だ」

「はー古鷹ありがとう。まじで助かった。」

ふう……。

「お待たせしましたっ！ すぐに……！」

「ああ、悪い鳳翔さん。すまんが頼んだわ……」

「いてて……これ服脱ぐのも……結構……。」

脱いだら鳳翔がすぐに消毒、止血してくれた。手際いいねえ。

「手の方は時雨がやってくれてる。泣きそうな表情で必死だ。すま
んな、ほんとに。」

「どうしてっ！ どうして提督は……！ もうっ！ 死んじやったら

どうするのさっ！」

「あはは、大げさだなあ。大丈夫だつて」

「あーでも時雨手が震えてるわ。うん、ほんとにごめんな。」

「やっぱさ、俺、目の前であんなことされるのは黙って見てらんねえ
んだわ。」

「……どうして、ですか？ どうして私を……」

「庇ったのかって？ んなもん、艦娘が傷つくところ見たくねえからに
決まってる」

「ああ、そうさ。」

深海棲艦との戦いで沈むってのは……認めたくねえけどわかるさ。けどさ。

「信頼してるヤツに、ましてや提督に傷つけられるなんてあっちゃダメだろう」

「っ!!」

俺の言葉に、古鷹が、鳳翔が、加古が一瞬震えた。

なんだろうね。当たり前だよなあ？

「俺はさ……嫌なんだよ。艦娘が傷つくなんて出来れば見たくねえんだ。深海棲艦相手ならわかるさ、俺だって覚悟はしてる。けどな、ほんとに出来れば……提督と艦娘が笑い合っていて欲しいんだよ。幸せそうに」

それが俺の下でつてんなら最高だけどな。

ハーレム目指して頑張ってるけども、それが一番大事な訳ではない。

艦娘の誰かが何処かで幸せそうに提督と笑い合っていてくれたらそれでいい。

「ああ、もしかして俺がこんな事したからそれで傷ついてるのか？ だったらすまん、まだまだ未熟者だからさ……目下努力中って事で許してくれ」

「……」

あふん。誰か何か言ってくれ。俺すつごく恥ずかしいやつじゃないか。助けて。

時雨。お前もだよ。

こういう時にちよろい俺を癒やすのが時雨じゃないか。

あ、こら。

お前やっぱりちよつと笑ってるだろ？ 震えてんぞこら。

あ、止めて痛い痛い。ちよつと包帯巻くの力入れすぎい！ なんてやねん！

「終わり、ました。どうでしょう？ 何処か違和感はありませんか？」

「ん？ いやいや、ありがとう。十分だよ」

うん、十分だ。まだ痛いのは仕方ねえ。

てか艦娘なら怪我しても風呂で一発だしなんでこんなふうなにかね。人間の手当なんて……する事あんまりないよな？

まあいいや。

「さて、と」

立ち上がり、未だ呻いてるおっさんの所へ。

「起きろよ、おっさん」

「ぐ……ぬ……」

念の為に軍刀を奪ってから、起こす。

どうしてくれようか？

なんて、一瞬思ったりもするけどぶっ飛ばす為に来たわけじゃない。い。

こいつをうちの鎮守府に居る六駆の皆、そして天龍、龍田に謝らせるためだ。

それを一時の気持ちで潰しちやならない。俺はあいつらの提督だから。

「貴様っ……私に何をするっ！ 軍法会議にかけて……！」

「忘れたのかよ、ここで起きたこと全てを容認するってのは」

そうそう、てめえがそれを振りかざして言ってきた事でもあるんだぜ？ 情けねえな、それも忘れて軍頼りか。

「そんなもの何かの間違いだっ！ 民間人如きが軍人に手をあげるなどっ……ひっ!？」

「てことはよ……ここであんたをこれで殺しても……容認されるってわけなんだが。そこら辺どう思う？」

しないけどさ。

でもまあ脅しにしては十分過ぎたようぞ。

喉元に突きつけた軍刀と俺の顔へ視線を行ったり来たり。生唾飲んで音が聞こえたよ。

「別にあんたに何かしたいわけじゃねえんだ。俺が言ってるのは最初の通り。うちの艦娘に謝罪して欲しいだけだ」

「そ、それだけだな!? それだけすればいいんだな!？」

「ああ、嘘は言わねえよ」

そう言えば必死にコクコクと頷くおっさん。気色悪い。

「あの……」

「ん？ どうした？ 古鷹さん」

情けなくこの場を離れていったおっさんを尻目に、古鷹が声をかけてきた。

「わ、私も……その、一緒にいいですか？」

「え？ 一緒に来るの？ いや、俺はいいけどさ……あんまりいい気持ちにはならないと思うぞ？」

心底認めたくないけど。

あのおっさんは古鷹達の提督だ。

その提督の情けない姿なんて見たくないだろうに。

「いえ、その……け、見学ですっ！ あなたの鎮守府を見学したいんですっ！」

「わ、私もいいでしょうか！」

「あたしもっ！」

うわお、何だ何だ？ 何でそんなに見に来たがるのさ。

うちこそ何も見るようなもんなんてない、多分ふっつの鎮守府だぞ？

「くすくす……いいじゃない、提督。一緒に連れてってあげようよ」

「だ、だけどさ。その間ここはどうするんだよ？」

流石に誰も居なくなるって問題じゃないの？ いかんでしょ。

「だ、大丈夫です！ この鎮守府に下された指令はもう達成済みですからっ！ 心配ありません！」

「あ、そうなの？ ……うーん、なら、いい……のかな？」

達成済みって。

やっぱりあのおっさんそれなりに有能だった？

まあいいか。

「わかった。じゃあ一緒においで。だけど、無理して見たくないものは見なくていいから。うちに着いたら自由に見学してくれていいからな」

「はいっ！ ありがとうございます！」

一斉に頭を下げられた。

う、うん。まあいいんだけどさ。

なんか時雨は察したみたいだし。俺だけわけわかってねえよ。くすん。

ふう。

ともあれ、だ。

「じゃ……行くか」

ケジメをつけてもらいに、な。

ケジメは不格好なりについたようです

——笑顔ってどうやって作るんだろう。
鏡越しの自分。

そこには歪な笑顔を浮かべた私が居た。

——役に立たないと、捨てられてしまう。
それは恐怖だった。

ましてや、初めてこの人と海を征きたいと思った提督だ。そんな人に不要と言われる、捨てられるなんて事があつてしまえば………どうなるのか。

「……っ！」
ゾツとした。

自分で自分の取るであろう行動が予想付かなくて、その事に心底怯えた。

いつからだろう。
いや、そんな事わかつている。司令長官に異動を言い渡されたときからだ。

歯向かったから、意見をしたから。

私が司令長官の意に沿わなかったから、捨てられた。

ならば私はどんな事にも従おう。冷静に、そして笑顔で領こう。
そう思った時から、決めるときから私の顔には笑顔が張り付いた。
自分でも、下手な笑顔だと思う。

それでも、浮かべなきや。どれだけ辛くても、必要とされるために。
そう決めてたのに。

——無理して笑うな。

「あれは、どういう意味だったんでしょう」

この下手くそな笑顔が不快に思われたのだろうか。
それとも。

「……そんな訳、ない」

そうだ、そんなはずはない。

私の心を見通したはずなんて無いんだ。

彼とは初日に会っただけ。鎮守府運営の講習をさせてもらった時に会話しただけ。

だと言うのに。そう思っているのに。

「何で、こんなに……！」

涙が出るのだろう。

鏡の自分が泣いている。

その涙の理由がわからない。

わからない。わからないことだらけだ。

私はどうすればいいのだろう。

これから何を求められるのだろう。

少なくとも。

「行きましよう、大淀。提督が帰ってきます」

見学から帰ってくるとの連絡は先程あった。

詳しいことはわからない。だけど、あの鎮守府の提督も一緒だとい

うことは、上手く行ったのだろう。

頬を両手で挟んで気持ちをしつかりさせる。

そうすればもう見慣れてしまった笑顔。この笑顔を携えて行こう。

それ以外に出来ることがわからないから。

「退いて欲しいのです」

「退かない」

「……退くのです」

「駄目だ」

「退くのですっ！ 退けっ！」

「退けばお前はこいつを殺すだろう？ だから、退かない」

「退けええええええええ!!」

地面に尻もちをついて怯えているあの鎮守府の提督。

電さんに胸元へ砲を突きつけられながらも毅然とそう言う提督。

暁さんの悲鳴が響き渡り続け、それをあやすように抱きしめる雷さ

んにぼうつとしたまま中空を見ている響さん。

——なんだ？ この光景は。

提督は怪我をして帰ってきた。

夕立さんはその怪我の理由にあたりをつけたのか、あの鎮守府の提督に飛びかかりそうになったけど……その後ろに控えていた三人の艦娘の顔を見て何とか抑えた。

そうして執務室に来て、六駆の皆を連れてきて……。

あの提督の姿を見た瞬間暁さんは泣き叫び、電さんは艤装を展開して砲を放とうとして。

その間に提督が入った。

「ひっ……ひい!? な、何をしているっ！ 早く、早くそいつを何処かへ連れて行けっ!!」

「おい。何言ってるんだよ。ここに来た理由を忘れたのか？ 謝るんだよ、皆に。ほら」

今にも引き金を引くかも知れない電の前で、悠長にそんな事を言う。

この人に恐怖という物は無いだろうか？

いや、それを言うならこの場に居る六駆以外の艦娘もそうだ。

何かに耐えるように下唇を噛みながらもじつとこの光景を見守る天龍さん。

今にも電さんと同じ様にこの提督へ襲いかかろうというのでは無いかと言う雰囲気放つ龍田さんも、その手をぎゅつと握りしめて耐えている。

時雨さん、夕立さんは自然体。だけど、すぐに動けるように気を配っているのが伺える。きっと提督が危ないと判断すればすぐに対応するために。

「で、出来るわけ無いだろうっ！ むしろ謝ってもらいたいのはこちらの方だっ！ なぜ私がこんな目に遭わなければならぬっ！」

対照的にこの人はすっかり怯えてしまっている。もう自分で何を言っているのかもわかってないんだろう。

この人が、彼女たちをこうしてしまったというのに。

「退けっ！ 退くのですっ！ こいつが……こいつが……!!」

「ほら、電も言ってるぜ？ あんたのせいだってよ。なら謝らねえと。

それがケジメつてもんだ……それで許してくれるかどうかはわかんねえけどよ」

「ならばソレを何かに縛りつけろっ！ 私を殺そうとしているんだぞっ！ 私の安全を確保しろっ!!」

ああ……そうか。

こんな人に彼女たちは使われていたのか。

入りきれない執務室の外で、古鷹さん、加古さん、鳳翔さんは何を思っているのだろう。

その気持ちは計り知れない。

そしてこの状況。

どうするのだろうか。提督は。

多分、この提督は謝らない。それはもう、提督にだってわかってい
るだろう。

そんな事を思いながら、提督に視線を向ける。

そうすると、困ったような笑顔を私に向けた後、溜息をついて。

「暁、響、雷、電……それに天龍、龍田。済まなかった」

「!？」

その場に居る艦娘、全員が息を飲んだ。

砲を突きつけている電ですら、顔に貼り付けていた怒りの表情を落
とした。

頭を深く下げて、謝罪の言葉を口にする提督の姿に。

「何を……しているのですか？ 電は……私達はそんな事望んでない
のです。ただ退いて欲しいだけなのです」

「それは出来ねえ。さつきも言ったが、退けばお前は砲撃する。だか
ら退けない」

一番最初に我に返ったのは電さん。手を震わせながら提督の頭に
ごりつと砲塔の先を突きつける。

ただ、その瞳には先程まで浮かべていた怒り一色だけではなく、何
処か困惑の色も混ざっているように見える。

どうして。

どうして、提督が頭を下げてるのだろうか。どうして？

「こいつは人間で、俺も人間。そしてこいつは提督で、俺も同じ提督だ。その提督がお前たちを傷つけたのなら……提督である俺も謝らなければならぬ」

「わ、わけがわからないのですっ！ あなたに謝られた所で……暁ちゃんが受けた傷はっ……!!」

その震える手を。

「……」

「響、ちゃん？」

ずっとぼうつと自失していた様な響さんが掴み、首を横に振った。

そして、暁さんの方へと視線を向け、電さんにも見るように促す。そこには。

「あ……あう……」

いつの間にか泣き止んで、恐る恐る提督に近付こうとしている暁さんがいた。

がくがくと震える足を、雷さんが支えながら。ゆっくり、一歩ずつ。確実に提督の下へと近づいている。

そして、その足が立ち止まり。

「ごめん、なさい……」

提督の頭を撫でた。謝罪の言葉を口にしながら。

「弱くて……ごめんなさい。使えない子で……ごめんなさい。嫌な思い、させちゃって……ごめんなさい」

「暁、ちゃん……」

がしやん、と音を立てて電さんの手にしていた砲が床に落ちた。

そして、それと同時に。

「ふえ……うええええええ……」

電さんも泣いた。

ううん、違う。

ここに居る皆、泣いていた。

時雨さんも夕立さんも嬉しそうに、笑顔で泣いてたし。

天龍さんと龍田さんは耐えきれなくなったのか部屋から出ていったけど、出る間際に涙を浮かべていた。

私も、わけがわからないまま、泣いていた。

「違うぞ、暁。お前は悪くないんだ。謝る必要なんて、ない。だけど、もしも俺を……提督を、司令官を許してくれるのなら……笑ってくれ。今すぐじゃなくていい、出来るようになったらいい。俺はいつまでも待つてるから」

「うん……ごめんささい」

提督は暁さんの頭に手を伸ばし……途中で止めて、やっぱり手を伸ばした。

それを、今度は泣き叫ばず、暗い表情のまま受け入れた暁さん。

「さて……おっさん。これで、大丈夫だろう？ 約束、果たしてもらおうか？」

「ぐ……し、知らんっ！ もう良いだろう！ 私は帰るぞっ！」

そう言って謝罪の言葉を最後まで口にすること無く、出ていこうとするあの提督。

——何言ってやがる。

提督がそう呟いた。

私がそう認識した瞬間。

「ひっ……」

時雨さんと夕立さんが逃げようとするあの提督に黙って艦装を突きつける。

私でも、少し怖いと思うその目には静かな怒りの炎が燃えていて。

「言ったよな？ こいつらが許すと言うまで頭を垂れてもらおうって……」

そつと提督が再びへたりこんだ男の刀を抜き、その刃を首元に突きつける。

その目には時雨さんや夕立さん以上の怒りが浮かんでいて。

「傷つけるってのはさ、傷つく覚悟のあるやつがやるもんだ。なあおっさん。お前にその覚悟……あったのかい？」

「や、やめろ……わ、私を殺すというのか!?! 軍人……提督であるこの私をつ！」

その目を私は少し怖いと思いつつも。

何処か嬉しいと思っている。

「殺すなんてしたら謝れねえだろ？　だけど、頭を下げさせるのは……別に胴体と首が離れていても出来るなあ？」

「ひ、ひい!?　ひいひい!?!」

ああきつと、この人は艦娘の為なら何でも出来る。

ただの脅しなのかも知れない。だけど万が一ここで軍人を殺して大本営に弓を引くことになっても。艦娘の為なら、喜んで振り上げた刃を振り下ろすだろう。

そう確信出来た。

何で、そこまで出来るんだろう？

この人はいつこの間提督として着任したばかりの民間人だ。そのはずだ。

それなのに、何でここまで出来るんだろう。

不思議に思う。

だけど私はその確信を嬉しいとも思ってしまう。

だから、きつと、艦娘はそれで良いんだ。

「わ、悪かった!!　済まなかった!　だから、だからあ!!」

「……だ、そうだぞ?」

土下座しながら泣きわめくように叫んだその言葉を聞いて、提督が六駆の皆へと目を向ける。

六駆の皆は……何かを諦めた、あるいは見放したかのような視線を送った後。

静かに頷いた。

「全く!　何だあの茶番はっ!　思い出すだけで腹が立つっ!」

執務室を出てから少し。

この人はずつとこんな調子だ。私如きで思っただけの良いのならば。流石にちよつとどうかと思う。

だけど、口にはしない。提督に任せられたのは見送り。それ以外には無いのだから。

「おい、貴様もそう思うだろう!?!」

「はい？ どうされましたか？」

いけない、何か話されていたようだ。

つつい汚い言葉ばかりだったから、聞き流していた。

「ちい！ 無能なヤツの下には無能が集まるっ！ ……そう言えば、貴様。大本営から左遷されたのだったな？」

「は、はあ。確かにこちらに着任する前は大本営に所属しておりましたか」

それがどうしたというのだろう。

そう思っていると。

「ひっ!？」

「ならば多少は使えるな？ どうだ？ 私の下へ来ないか？ こんな無能集団の下で使われるより遥かに良いだろう…ああ、良く使つてやるぞ？」

思わず、小さく悲鳴を上げてしまった。

この人の目が、視線が…あまりにも悍ましくて。

「や、やめて下さい！ 艦娘へのそういう事は…!」

「笑顔で何を言っている。貴様も有能な者の役に立ちたいだろう？役に立たせてやるだけだ…嬉しいのだろうか？」

何を考えているんだこの人は！ やめて…誰かつ！

「おいおい、こんな所でナニしてやがんだ？ なあ…元、提督さんよおっ！」

「あら。随分とおいたしちやってるのね？ やっぱりあの時、切り落としておけばよかつたかしら？」

天龍、さん…龍田、さん。

「ぎ、貴様らっ!」

「はっ！ ったく、ほんとどうしようもねえやつだなあおい。お前らも、悪かつたな、オレの居なくなつた後。大変だっただろう」

「…いえ」

その後ろにいたのは古鷹さんに加古さん、鳳翔さん。

その姿を見ると、ばつと私から離れて天龍さんの方へと足を進めていった。

「貴様がっ……！ 貴様のせいで私はっ！」

「あーそうだな、うん。そうだよ。謝ろうと思つて来たんだ。ほんとだぜ？ なあ龍田」

「そうね。あなたがこうなつたのは私達にも責任があるから……
だけど、ねえ？」

思わずへたりこんでしまった私の目の前で、二人は艀装を展開して。

龍田さんの槍を正面から突きつけられ、天龍さんの刀があゝの提督の背後から首に添えられた。

「ひっ!？」

「悪かつたな。使えない艦娘で。ほんつとーに申し訳なく思つてる」

「私もよく。あなたに……無礼を働いてしまつて。悪いと心から思つてるわ」

その目も口元も笑つてる。

理由はわからない。けど、何処か嬉しそうだ。

「ならばなぜこんな事をするっ！ 良いだろう許してやるっ！ だからこれを……!」

「だけどよ……お前、うちの提督を傷つけたつてなあ？」

「ぜーんぶ聞いちゃつた。だから、ね。私達を許してくれなくてもいいのよ」

「オレ（私）も許さないから」

そう言つて二人は爛々とした目を携えながら得物を振りかぶり……。

「ひいっ!？」

「ま、そんな事したら提督の顔に泥塗つちまうからな」

「そうね。だから今はやめてあげるわ。……でもね？」

二つの刃が交わる寸前で止められた。

ガチガチと刃の間で動く事もできず震えるその身体から刃が離れた瞬間その場にあゝの提督はへたり込み、その耳に龍田さんが口を寄せ

る。

「――」

「わ、わかった！ わかった！ 済まなかった！ 悪かった！ だから助けて……助けてくれえ!!」

何かを囁いた。

そして、自分の艦娘を連れる事無く、自分一人惨めに走り去っていった。

走り去った後には異臭を放つ水溜り。……掃除するの嫌だなあ。

「大丈夫か？」

「え、あ……はい、すみません」

天龍さんが手を差し伸べてくれた。

その手を持って、立ち上がる。

「なあ、大淀」

「は、はい？」

私の手を握ったまま、天龍さんはじっと私の目を見つめて言う。

「……何を無理してんのか、何であんなことされたのに笑顔を作ったのか……オレにはわかんねえ。けどよ、安心しろ」

「提督が、ちゃんと笑わせてくれるから、ね？」

……。

そう、なんだろうか。

私は、大丈夫なんだろうか。

自分の思いを口にしても、それを受け入れてくれるのだろうか。

でも、今はただ。

六駆の皆が少しだけ前を向けただろう事に、喜びたい。

そして、いつか笑顔の彼女たちに出会いたい。

その時、私とその彼女たちと同じ様に心からの笑顔を浮かべていられることを、願いたい。

そう思う。

騒動は収束したようです

あの騒動が終わって少し。

俺の負傷は順調に良くなっている。幸い化膿したりなんたりしなかった。

俺が負傷してるとは言え、日々の哨戒だったり遠征は穴をあけられない訳で。

皆海に向かう時何度も心配そうに俺を振り向いてくれるのが嬉しいやら、情けないやらの日々だった。

ようやく今日になって振り返るのは一度だけで済んで海へ向かってくれた。

そして、詳しいことはわからないが、結局あのおっさんは提督を辞任したらしい。

そう簡単に辞められるものなのかなんて思いながらも、安心した気持ちが大きい。

これは提督としてというよりは、俺個人の思いだって言うのはわかっている。

実際、日本の戦力が集まる場所一つを失った訳だしな。多分提督として、軍人としての目線なら痛手なのかも知れない。

知れないっていうのは、実際俺が辞めさせたようなもんだと言うのにも関わらず、何のお咎めもなかったからだ。

やっぱりあの電文に書いてあった全てを容認するっていうのはマジだったようで。そういった部分を含めて安心できた。

提督が居なくなつた事であそこの鎮守府は凍結。新たな提督もすぐには見つからないようで、溜まっていた資源等は一度大本営が預かって他の鎮守府に分配されるらしい。

その話を聞いて少し後ろめたい気持ちもあつたけど、現金な物で貰えるもんは貰っておこうと待っていたんだけどな。

どうやらと言うかやっぱりと言うか、うちに資源は回ってこないようで……なんでやねん。

流石に抗議と言うか直球でわけて欲しいと言った所、回ってきたの

は資源ではなく。やっぱりと言うか、艦娘だった。やったぜ。

そうしたやり取りを経て、今俺の目の前には知った顔が並んでいた。

「古鷹と言います。重巡洋艦のいいところ、たくさん知ってもらえると嬉しいです！」

「ああ、よろしく頼む」

ああああ!! だいつてんっしっ!! 古鷹ああああ!!
ふう。落ち着こう。

あのおっさんは逃げるように帰っていった……そう、一人で。

その後帰りの車を改めて手配しようとしたんだけど、時間的に厳しいとの事で、明日の一番で帰る予定だった時に電文がやってきてその場にしばらく待機させるようにと命令があった。

戸惑っていた三人だったが、そこは元同僚の力というべきか天龍と龍田が良くしてくれて助かった。

っていうのも、だ。

敬礼を受けて、答礼を返す。

お互いの手が下がったのを見てから握手をしようと近づき手を差し伸ばせば。

「っ……っ！」

身を固くして少し顔を青くする古鷹。

そう、これだ。

「すまん、少し近かったな。皆がここに着任することになったのが嬉しくてつい」

「い、いえ！ すいません！ 大丈夫ですからっ！」

無理やり俺が伸ばした手を取ろうとする古鷹だけ。

「っ！」

その手が近づく度に顔は真っ青に、そして震えは大きくなってしまった。

「無理しなくていい……すまないな。本当に」

「いえ……いえっ！ 違うんですっ！ほんとに、私は……っ！」

ここに待機してもらってる間に鳳翔から聞いた。

古鷹はあのおっさんに襲われかけたそうなの。

やっぱり首ちよんぱすべきだったなんて激しく後悔しながらも、理解した。

その事がトラウマで古鷹はいわゆる男性恐怖症……いや、もしかしたら提督恐怖症かもしれないが、そうなってしまったそうなの。

少し離れたらそれはすぐに収まる。

ただ、さつき俺がしようとしてしまった握手然り。男性とふれあいそうな距離になると身を竦めてしまう。

それでも違うと言ってくれる古鷹。自分の震える手を必死に抑え込もうとしてくれている。

やっぱり大天使。

「古鷹」

「ま、待ってくださいいね？ 提督……今すぐに——」

「ありがとう」

「えっ……？」

お礼を言うべきだろう。

俺は今まさに古鷹のいい所を教えて貰ったんだから。

「早速古鷹のいい所を教えてもらえた。そうやって俺の……いや。誰かの為に必死になってくれる優しい艦娘だつてこと。確かに伝わったよ」

「あ……」

驚いた顔も可愛い。

まあともあれ、さ。

「ゆつくりでいいさ。俺は物覚えが悪いから、その方が助かるんだ。これからも、古鷹の……重巡洋艦の良い所、教えてくれな？」

「あ、う……。……はいっ！」

うん、いい笑顔。やっぱり大天使。間違いないね。

さて、次は……。

「古鷹型重巡の二番艦、加古ですっ！ 今後共よろしくおねがいしますっ！」

加古に目を向ければピシツとした敬礼にそんな挨拶。

あつるえく？ おつかしいぞおく？

いやさ、最初に会った時からそうだけどさ。

加古さんや？ 絶対そんなキャラじゃねえだろ。あたいたい知ってるんだから。

「ああ。よろしく頼む。……時に加古？」

「はいっ！」

そんな加古もいいけどさ、セルフイメージとのギャップ萌えてやっただけどさ。

うん、でもやっぱりなんだか、なんだかだよ。

「リピートアフターミー。……古鷹型重巡の二番艦、加古ってんだー。

あ、知ってた？ 今後共ヨツロシクウ！」

「は、はい？」

え？ もしかしてさつきのが素面だった？ 俺間違えちゃった？

「いやさ、実を言うとな？ 加古。俺、こういうかしこまったと言うかちゃんとした場面って苦手なんだよ。なんとなく加古から似た匂いを感じただけど……すまん、失礼をしたな」

「いつ؟! いやいや! そんな事ないよっ! あたしもこういうの

……いい、いや! でも提督が望んでるんだったらっ！」

お? これは脈アリってやつかな?

どう思う? 鳳翔さんよ。

ちらつと鳳翔に視線を向けて見れば。

「加古さん加古さん。この方は、大丈夫ですよ。きっと」

「鳳翔さん……うん。て、提督？」

ああ、うん。わかってるよ。

「ほいきた。加古? リピートアフターミー?」

「あ、あたし……古鷹型重巡の二番艦、加古ってんだー。あ、知ってた? 今後共ヨツロシクウ！」

イエーイハイタッチー!

よっしいい音したあ! ばっちりじゃねえか!

「で、でもどうして……」

「なあ、加古?」

「え、あ、……はい」

しおらしく返事なんかするなっ！ ギヤツプ萌えで死んでしま
そうだっ！

げふん。

「常に気を張ってさ、ギラギラ敵を探してさ。そんなん疲れちまうだ
ろ？」

「……うん」

「楽しく海域開放しよう、日本を守ろう。なんて言うつもりはさらさ
ら無い。けどな、抜く所は抜こう。自分を殺してしまう前に」

使命だとか、存在意味とか……価値とか。

そんなもんは背負うべき物なのかも知れないけど間違いなく重荷
なんだ。

そしてずっと気張ってそれを背負っていたら絶対に潰れる、沈む。
かつての俺みたいに。

一回降ろして休憩するべきなんだ。気を抜かないといけない。あ
るいは誰かと一緒に背負っても良い。

「そうやって必死になってさ。重荷に潰される前に……そうだな、そ
の荷物を枕にして昼寝でもかましてやろうぜ」

「ひ、昼寝？」

「ああ、そうだ。なんだったらその荷物の中に忍ばせた酒でもかつく
らっちまえー！」

こほん。

お口が汚くなっちゃったね。

ともあれ、だよ。

「……加古、俺はな？ 加古には思う存分気を抜いて欲しいんだ。も
ちろん、寝てばかり、酒に溺れろって言ってる訳じゃないぞ？ メ
リハリつけようって話だ」

「メリハリ……」

「そうだ。そうやってメリハリをつけた姿をな、皆に見せてやって欲
しいんだ。やる時しっかりやって、抜ける時は思う存分気を抜いて
……それで良いんだって、それを皆に教えてやって欲しい」

眠い眠いと言いながら加古スペシャルしてくれる位が丁度いいんだよ。

さつきみたいにな、しっかりやってやる。しっかりやってみせる。なんて意気込まなくていい。それこそ自分を殺してまで。

まあ、この加古がそうかどうかはわからんけどな。俺の決めつけかも知れない。

けど、やつぱり慣れ親しんだ加古でいて欲しいと思うのは俺のわがままなんだろうな。

「……うん。わかった。じゃあ早速だけど——」

「皆と挨拶終わったらな？」

「ちえっ、わかったよ。いっぱい寝かせてね？」

おう、もちろんさ。ゆっくりしてくれ。

……ぶつちやけ重巡洋艦に出撃してもらうには資源が、なあ？

げふんげふん。

んでは。

「航空母艦、鳳翔です。不束者ですが、よろしくお願い致します」

ああああああああ!! 鳳翔がニツコリ笑ったから! 今日はお

母さん記念日だっ!!

落ち着こう。落ち着きたまへ。

でもたまらないっすわ。ほんつと。

おう、見てるか? これが大和撫子だ。

黙って亭主の三歩後ろを歩きっ! 帰ったら三つ指ついて迎えて

くれるっ!

そんな女いねえよ? 知るか! 童貞が妄想して何が悪いっ!!

「よろしく頼む。あなたが着任してくれてほんとに嬉しい」

「まあ……。ですが、私は言ってしまうえば弱い空母ですよ?」

何をおっしゃいますやら。

確かに色々と物足りない部分はあるのかも知れないし、自分でも納得いっていない所があるかも知れない。

それでも、だ。

「うちの鎮守府初めての空母。そういった意味もちろんあるさ。だ

けど何より……」

「何より……何でしようか？」

僕のために毎日お味噌汁作って下さい。

はっ!? 違う違う! そうじゃない。

「あなた達だけじゃなくこれから多くの艦娘がここに着任する。その時、あなたの背を見て育つ艦娘はきつと多い」

「それは……私に範となれ……そういう事でしょうか？」

そんな事言ったらプレッシャーでしょうに。追い込まなくていいんすよ。あつほら、そんなに意気込むと言うか使命感っぽい何かに燃えなくていいんです。

でもまあ平たく言えばそうなんだろうけど。でもちよつと違うくて。

「いいえ、あなたはあなたらしくいて欲しい。もちろんあなただけじゃない……加古にも言ったように、あるがまま思ったままに振る舞って欲しい。あなたが古鷹や加古を自然と守ってくれていたように俺もまた、その姿を守る為に提督をしているのだから」

「……提督」

うん、上手く言えないけど。

鳳翔は鳳翔だから皆は慕うんだろう。あるがままの鳳翔を。

無理をして皆を守ろうと必死になる姿でも、いざという時にその身を挺してでもと覚悟を決めた姿でも無く。

自然にそう出来る鳳翔だから。

「提督。もう一度言わせて下さい」

「ん? 何をかな?」

「不束者ですが、どうかよろしくお願い致します」

ああ、うん。

ほんとにさ。

艦娘最高だわ。

「ああ、こっちこそ。資源の問題で。三人にはしばらく暇させてしまいうことになるけど、その間この鎮守府に慣れてもらえると嬉しい」

「了解!」

うん、大丈夫そうだな。

「挨拶終わったかー？ なら俺達が改めて案内するから来な」

「改めて。久しぶりね、皆」

外で待ってたのか？ 天龍と龍田が笑顔で手招きしてる。去り際に俺にウィンクしてくれた。様になってんな天龍……くそう、格好いい。

その姿を見て、三人共笑顔を深めて二人についていった。

元同じ鎮守府の仲間、か。

見る限り確執と言うか、嫌な雰囲気は感じないけど……大丈夫かな。

「大丈夫、か」

古鷹のトラウマ、恐怖症に関してはこれからも考えないといけない事だろう。

俺も遠慮なく古鷹と話したいってのはもちろんだけど、やっぱり古鷹自身の為にも。

後の二人は慣れさえしてくれたら大丈夫だと思うけど。

俺が二人に伝えた事が出来る、やってくれる様になるまでは時間が必要だろうし。何より俺の押しつけを嫌がる可能性だってある。

「まだまだ……これから、か」

思わず呟く。

考えなければならぬ事は山ほどある。

大本営の意図はもちろんそうだし。これからの鎮守府運営だってそうだ。

正面海域を開放したと言っても、深海棲艦の脅威が無くなったわけじゃないのは当然。

それに、捨て艦。

「つたく、ほんとになあ……俺は一応新米提督なんだがな」

やっぱり俺にはどうしても捨て艦という指示に違和感を拭い取れない。

仮にここが捨て鎮守府で、大淀の言う通り使えなくなった艦娘の処理施設だと言うにしても、だ。

人類は脅威に晒されている。だから捨て艦でも何でもしなくては
いけない。

うん、確かにまあ納得は出来る。
出来るんだけど。

「なら尚更艦娘を大事にしないとイケない訳で」

この戦いがいつから始まったかはわからない。

けど、辛うじてなのかも知れないけどこうしてまだ人は生きてい
る。

だったら艦娘と上手く関係を築いた人だつて居るはずだ。

そう信じたい。

「提督っ！ 何怖い顔してるのー？ ほらほらっ！ スマイル！」

「うわっど!?!」

や、やめんかい！ ほっぺたむにゅっとするでない！

あああああああ！ 顔近いって！ 駄目だつて！ お前自分が可

愛いこと忘れてるだろっ！

「……頭にきました。那珂ちゃんのファン辞めます」

「えええええ!! 那珂ちゃん何か悪い事した!?!」

ずぎざぎつと後ろに退きながら、驚く那珂ちゃん。

……オーバーリアクションというか、多芸と言うか。

「提督はー、那珂ちゃんの扱いが酷いと思うなっ！」

「そんなことないよー那珂ちゃんのファンだものー」

「棒読みっ！」

ぶんぶん怒る様子を見せる那珂ちゃん。

「それにさっきの古鷹さん達つて、那珂ちゃんが生まれた鎮守府の子
達だよね？ 那珂ちゃんも一緒にしたかったなー」

「あ、ああ……そうだったな。すまん、色々考えてたもんで」

そう。

那珂ちゃんの言う通り、あの鎮守府で稼働していた建造ドックの一
つから那珂ちゃんは生まれたみたいで。

あの時は思い出せなかったけど。シリンダーに触れた時間こえた
声は那珂ちゃんだった。こうして着任してくれた時の挨拶でその事

を思い出せた。

残りの三つはスカというか何も生まれず、あの青い水は消え去った。唯一建造成功したのが那珂ちゃんだった。

古鷹達と同じように、というかついぞと言わんばかりにうちの鎮守府所属扱いとなつたんだよな。

古鷹達が改めてここに来るより先に着任してたもんで、ついつい夕イミングが。

「ぶーぶー！　那珂ちゃんのファンだったらちゃんと私の事も考えなきやダメー！」

「……イラツとしたんで那珂ちゃんのファン辞めます」

「あー！　あー！　もう！　そう言っておけばいいって思ってるでしょ！　もうー！」

いやいや、そんな事無いぞ？　マジマジ。ちゃんとCDも買ったよ？　5枚。

……着払いでタエさんびっくりしてたな。懐かしい。

「提督には罰を与えますっ！」

「ええ……罰って何さ」

何か悪い事……あーまあ放置っぽいことしたか。

仕方ない、甘んじて受け入れようじゃないか。

「罰としてー。那珂ちゃんをエスコートしてもらいますっ！　鎮守府、案内してくれたら許してあげる！」

「何だご褒美じゃねえか」

何だご褒美じゃねえか。

あ、二回言っちゃった。

「え、えうっ!？」

「可愛い子……艦隊のアイドルをエスコート出来るなんて光栄だよ。

……ほんじゃ、行くか。俺も行きたい所、あるしな」

ほら、固まってないで行くぞい。

……そうだな、那珂ちゃんなら。あいつらを笑顔にしてくれるかも知れないしな。

那珂ちゃん忙しいようです

暗くて冷たい。

私私だつて分かる前に分かった事はそんな事。

とつても居心地が悪いはずなのに、今すぐにもその場から離れた
いって思ってるのに動けない。

何処に動けば良いのかわからなかったから。

だからずっと身を縮こめていた。

早くこんな感触無くなってしまえばいいのにつて思いながら。

早く消えてしまいたい。

そんな事をずっと思っていた時だった。

ふとすつごく明るくて温かい感触があつた。

思わず身体が動いちゃつた。

その温かさに触れたいって思った。その明るさの下で動きたいと
思った。

そう思つたら思い出した。

——ああ、私は那珂。川内型軽巡洋艦三番艦の那珂だ。

私の使命は？ 私のしたいことは？ 私は？

一度にすつと胸に入つてきた。

ここから出たい。だからそう願つた。

こんな暗くて冷たい場所は那珂ちゃんには似合わない。

この先には明るい世界が私を待っている。そう思った。

ここから出た先はファンが待っている私のステージ。

手は？ ——動く。

足は？ ——動く。

私は？ ——やれる。

「もうすぐ、会えるね」

ほら、言葉だつて喋れちゃう。

さあ、目を開けよう。そして浮上しよう。

きつと私を待ってくれている人がそこにいるはずだから。

そして目の前に広がった景色は。

「艦隊のアイドル、那珂ちゃんだよ！ いつも……って誰もいないっ！？」

だだっ広く誰もいない建造ドックだった。

嘘だー、アイドルを迎えるのはフアンの役目なんだよ？ こんな私の声だけが響くステージなんて嫌だよー？

普通艦娘が着任したら誰かが迎えに来てくれるものなんじゃないかなー？ ほら、提督とか提督とかー。

もしかして私、必要とされてないっ!?

「い、いやいや。違うよね？ 違うって言うてよー。誰かー？」

あーん。やっぱり返事がないよう！

うう、困ったなあ。どうすれば良いんだろう？ とりあえず着任の

挨拶はしなくちゃいけないよね？ そうだよね？ うん。

「もー。アイドルが出迎えに行くなんて……見つけたらフアンの心構えとか作法とか教えてあげないとー!」

うん。そうよね。

フアンを育ててあげるのもアイドルの役目だもんねっ！

那珂ちゃん、ファイトっ！

「貴様っ！ もう一度言ってみろっ！」

「ひゃん!？」

そうしてうろろうしてたらいきなり聞こえたおつきな声。

思わず変な声が出ちゃったーもう。

えっと、こつちの方からだよね？

「やれやれ。そう何度も言いたいことでは無いんだけどね？ ……キミを懲戒免職と言ったんだよ。不名誉除隊とでも言ったほうが良いかい？ なんにしても今後自由があるとは思わない事だ」

「そうではないっ！ 何故私がそのような扱いを受けないとならんだっ!」

あ、こつちだね。ってなんだか怖い？ うん、怖い！

アイドルを怖がらせるなんて……ふあ、フアン失格なんだよー？

えっと……ここは執務室？

「キミ自身がよくわかって……ああいや。わかっていたらこんな事にはなっていないか。うん。すまないね？」

「ぼっ！ 馬鹿にしているのか!? 優秀な提督であるこの私をつ！死にぞこない如きがっ！」

う、うわあ……しゅ、修羅場ってやつだよ！ 那珂ちゃん初めて見ましたっ！

顔を真赤にして怒ってる人と、人の良さそうな笑顔のまま話す人。笑顔を浮かべてる人の後ろにはピシッと気をつけの姿勢で微動だにしない軍の人が二人。

えっとー那珂ちゃんのファンにはー怒る人はちよつと遠慮したいかなーって。

「うん、その通りだね。だけどね、キミの上官だ。そう、キミのこれらを左右出来る、ね」

「ぐっ！ だ、だが懲戒免職とは一体どういう事だ！ 私は何もしていかないぞっ！」

あ、あの人すごい。

あんなに怖い顔で迫られてるのにずっとニコニコしてるー。

那珂ちゃん知ってるよ？ 営業スマイルって言うのよね？

……うん、やっぱり嫌な笑顔だなあ。

「よく言えたものだね、感心してしまうよ。……艦娘への暴行。性的暴行未遂。それによって艦娘を使い物にならなくした。ああ、キミ達風に言うのなら建造物等損壊罪っていうのかな？」

「そ、そんな事はしておらんっ！ 貴様が勝手に使えないと判断して墓場送りにしただけだっ！ 私の下でならまだまだ——」

「黙りたまえ」

こ、怖いっ！

笑顔が急に真顔になった！

え？ 那珂ちゃんのファンはあのどっちなの？ どっちも嫌だよー！

「そうだね、キミ達は実に良く働いてくれた。予想外ではあったけど、期待通りにね。だからこうして予想外のフォローが出来る」

「い、言っている意味がわからんっ！ 帰れっ！ 貴様と話すような事は――」

「何故キミは……あの鎮守府場に行ったのに生きて帰ってきているのかな？」

「ぐっ……」

あ、那珂ちゃん駄目。

ちよつと見てられないかなー？ 怖すぎるかなー。

だつてー。あの人……。

「……黙れ、黙れええええええええ!!」

ワナワナと震えながら軍刀に手を持っていったもん。

あれ？ でもあの人……全然余裕がありそう？

つて、ええ!!

「はあ……キミの大事にしている軍学校に、刀の扱いを教える機会は無かったのかな？ ほんとに……何を教えているんだか。こうして対応出来ているのはそのお陰とも言うべきだけど……複雑だね」

「ひ……!!」

あの人より遅く刀を振ったはずなのに……す、すごい!

あれ？ これつてもしかして映画の撮影かな？

そうだったら那珂ちゃん嬉しいなー？

「諦めたまえ。これは上が認めた事だ、大人しく先の決まっている軍法会議に出廷しろ。……連れて行け」

「はっ!!」

あ!? こつちに来ちゃう!?

どどど、どうしよう!?

「わわっ!」

「っ!? 申し訳ありません！ 急ぎ故ご容赦下さいっ！ 失礼致しますっ!」

あわわ……え、えつと、と、答礼!

「ありがとうございますっ!」

うわー。人一人抱えながら綺麗な敬礼だなあ……あ、抱えられてる人は見ない振りっ! 見ない振りっ……!!

だってもうなんだか可愛そうなくらい落ち込んでるもん。

「……参ったな。もうここで艦娘は……ああ、いや彼が来たのか。期待通りじゃなかったなあ……」

「え!?! あ、ご、ごめんなさい!」

あ、あれ? 何で那珂ちゃん謝ってるの? うー。でも、なんと言
うか……謝らないといけない気がして。

「あはは、謝ることは無いよ。期待以上に困ることが出来るなんて嬉
しい限りだからね。……ただ、僕はアドリブに弱くてね」

「あ、アドリブ?」

「うん。僕はキミと違って台本が無ければトチってしまうんだよ……
初めまして、那珂」

「は、はい! 初めまして!」

初めましてって言うことは? この人が那珂ちゃんのファンなの
かな?

嬉しいような、怖いような……。

「えーつと……うん。そう、そうだね。那珂もあそこに行ってもらお
うかな? 色々手順をすつ飛ばしちやってるけど、紛れもなく彼の艦
娘だろうし」

「え? あ、あの? あなたが那珂ちゃんの提督じゃ……?」

あれ? 違ったのかなー?

那珂ちゃんちよつと覚悟決めようとしてたのにー!

「僕じゃないんだ。色々あってね……すまないが少し待っていてく
れ。すぐに迎えを手配する」

そう言つて執務室の電話に手をのばすこの人。

じゃあ、この人は……。

「あ、あの!」

「ん? なんだい?」

人の良さそうな笑顔で、少し悲しそうに笑うこの人は一体。

「あなたは……私の提督じゃなければ、誰なんですか?」

「そうだね……言うなれば」

——死にぞこないの無能な元提督さ。

そうして、今。

——生まれる前から那珂ちゃんのファンでした!!

——艦隊のアイドル、那珂ちゃ——ええ!?

そんな事を言って私を迎えてくれた人の後ろについていきながら案内してもらう。

那珂ちゃんの新しいステージは複雑みたい。

色々教えてもらったけどどれにも驚くことばかり。

中でも妖精さんには驚いた。

あんなちっちゃなかわいいのが色んな設備とかを開発してるんだって!　すごいねえ!

「まあこんな所かな?　どうだ?　大体わかったか?」

「うん、バッチリだよ!　ありがと!　提督——!」

移動中も楽しくおしゃべりできたしっ!　那珂ちゃん大満足ですっ!

「そっか、良かった。……それで、だな。着任したての那珂ちゃんに頼みたいことがあるんだけど……」

「ん?　何かなー提督。ファン第一号だからねっ!　聞いてあげちゃうよー!」

那珂ちゃんはファンを大事にするんです!

あ、でもー。清纯派アイドルだからー。そういう事は……だ、駄目だからねー!

「よっし。それじゃちよつとついて来てくれ」

「はい」

え、何処行くんだろう?　まさかお城みたいな……きやー!?　な、那珂ちゃんは——!　そういう事は——!

ってあれ?　ここ鎮守府の裏手に向かう道、だよな?

えっえっえっ!?!　もしかしてこんな所で!?

「さあ、ついたぞ?」

「て、提督!　那珂ちゃん!　こういう事はちゃんと普通の女の子に

なつてから……つてあれ？」

あ、なんだか提督の目が冷たい。くすん。

う、ううん。那珂ちゃん負けないっ！

でも提督と目を合わせられないから違う所見るね？　つて……あの子達は？

「あ……司令、官」

「よう、暁。調子はどうだ？」

とてて……つと近づいてきたのは……えつと、六駆の暁ちゃんだつたかな？　見知ったこと無いけど、知ってる。

「わから、ないわ……ちゃんと、出来てる、かな？」

「おう、俺にもわかんねえ。だからな？　今日は助っ人を連れてきた」
「助っ人？」

あ、目が合った。

あ、提督の後ろに隠れられた。

……那珂ちゃん泣いていい？

「あらら……。暁？　この子は那珂ちゃん。アイドルなんだぞ？」

「あい、どるっ？」

「うんっ！　那珂ちゃんはー艦隊のアイドルでえす！　きやはっ」

こ、こういう時こそスマイル！　ね！

あ、余計に隠れられた。

辛いよう。

「アイドルってーのはな？　言うなら皆に好かれる立派なレディなんだ。那珂ちゃんを見習えば暁だつてすぐに立派なレディになれる……かもしれない」

「……かもしれない？」

「な、なれるっ！　大丈夫だ！　問題ない！」

立派なレディって言うよりは、憧れの可愛い女の子路線ですっ！

あ、でも隠れるの止めてくれた。嬉しい。

「じゃ、じゃあ……えつと。よろしく、お願いするわ」

「うんっ！　那珂ちゃんにい！　まっかせてっ！」

よっし気合の入れどころだよ！

あれ？ でも、何を頑張ればいいんだろ？

そう思っていると、暁ちゃんに手を引かれて連れて行ってもらったのは。

「花壇？」

「うん……司令官が、育ててって」

「おう。一人前のレディなら花の一つや二つ嗜むもんだからな！」

あ、なんかドヤ顔してる。

……ちよつと可愛いな。提督。

「だ、から……やってるの。けど、ちゃんと、出来てるかわからないの」「そこで那珂ちゃんの出番ですよ。提督命令です！ この花を六駆の皆と育てるように！ 花の世話は六駆の皆交代でやってるからな？ 今日、明日は響って感じで。ああ、もちろん俺も来るようになるから心配するな」

「え、ええ!? な、那珂ちゃんだって……」

お花の世話なんてしたこと無いよっ!?

ん？ 袖を引っ張られる感触？

「でき、ない？」

「出来ます」

ちつくしようにやんでえこのやろうめ！ ってもんだよっ！ こんなに可愛く不安そうに言われて出来ないなんて言えないよっ！ アイドルの名折れだよっ！

そんな気合を入れてたらそつと提督が耳打ちしてきた。

——心配すんな、後二、三日したら花凶鑑と育て方載ったのが来るし、一緒に勉強しよう。全員と顔合わせするまでは俺も来る。その後も時間作って見に来る、言った通り放置なんてしないから。だつて。

……何か理由があるのかな？

そう言われてみれば、暁ちゃんってこんな子なのかな？ なんだかわからないけど違和感。

きつとその違和感が理由なんだろうねっ！

よっし！ 那珂ちゃん！ センター！ 見せ場ですっ！

「えつとー？ 響ちゃん？」

「……」

「曉ちゃんの次は響ちゃん！ がんばるぞって気合入れてきたんだけど……」

「反応がないよっ!? ぼーっと花壇を見ながら水やりしてるよっ!？」

「響、やりすぎじゃねえかな?」

「……うん」

「あ、じょうろから水が止まった。というか止めた。」

「え? 何々提督? あ、うん。わかった。」

「えつとー。この花は乾燥に強くて加湿を嫌うから……水は土の表面が乾いてたらあげる程度でいいんだよっ!」

「……わかった」

「今度はじーっと苗を見守る響ちゃん。」

「その隣に提督が座って一緒に眺めてる。」

「……司令官」

「うん?」

「……何で?」

「えーっと何が何で? なんだろう。」

「那珂ちゃんわからなかったけど、提督はわかったみたい。」

「花が咲いたらわかるよ」

「……うん」

「私もいつかわかる様になるかな?」

「それつきりまた二人してじーっと眺めでした。」

「とりあえず那珂ちゃんもよくわからないけど、響ちゃんの隣に座る。」

「そうすれば、不思議そう……なのかな? じーっと見られた。」

「どんなのが咲くか、楽しみだねえ」

「……楽しみ?」

「そうだよっ! 可愛いお花かな? それとも綺麗なお花かな? 響ちゃんはどうなお花だと思う?」

「……わからない」

「そっかあ。じゃあ一緒に咲く所見ようね」

「……うん」

良かった。一緒にお世話していいみたい。楽しみだね！

「えつと……これでいいの？」

「おう、いい感じだと思っぞ」

今度は雷ちゃん！ すっごく恐る恐るだけどちゃんと出来てる！

「ほんと？ほんとに出来てる？」

「どうなんだろう？ 那珂ちゃん」

「えつとー。バッチリだよっ！」

アブラムシ気持ち悪い！ でもしっかり取らないとねっ！

……うーアイドルはーお世話する側じゃなくて貰う側なんだけど
なー？ ねえ？ 提督？

そんな目で見てみれば、困ったように頬を掻く提督。

あ、目を逸らした。

もー！

「で、でも司令官？ 私、ちゃんと出来る気がしないわ……だってー
ー」

「雷はさ、頼りになる人ってどんな人だと思う？」

「えつ……っ？」

頼りになる人……。

そうだなあ、包容力が合っつてー男らしくてー……。

「俺はな、応えようとしてくれる人だと思ってる」

「応えようとしてくれる人……っ？」

う……違うのかなー？ 那珂ちゃん失敗した？

「そうだ。不格好でも失敗しても……結果じゃないんだ。持ち合わせている能力でもないんだ。ただ求められた事に一生懸命になれる人だと思ってる」

「一生懸命に……」

「雷。お前は今この花に頼られている。お前が居なかつたら花を咲か

せることが出来ないだろう。だから無垢に全力で一生懸命に頼られている」

「……うん」

応えようとしてくれる人、かあ。

あ、だったら那珂ちゃん今提督に頼られてるんだもん。応えようとしてくれる人だって思ってくれてるのかな？

……思ってくれてたらいいなあ。

「うん、雷ちゃん！　那珂ちゃんも一生懸命頑張るから！　一緒に頑張ろうっ！」

「うん……わかったわ！」

応えられる人になるために。

「こんなの……やって何の意味があるのですか」

「はっはー！　電は厳しいなあー！」

あ、提督ちよつと泣いてる。

那珂ちゃんも直球で言われたらなんだか悲しいよ。

ううん、何でこんな事を言えるようになったのかを考えると悲しくなる。

だって、そんな事を言ってる電ちゃんがすごく辛そうだもん。

「巫山戯ないで欲しいのです。司令官が悪い人じゃなさそうっていうのはわかったのです。ですけど……意味の無いことなんて、やらせないで欲しいのです」

あ、待つて待つて！　何処行っちゃうの!?

ふいつと背中を電ちゃんは向けるけど。

「……意味がないからやるんだよ」

「……それこそ意味がわからないのです。電を怒らせたいのですか？」

提督が言葉をかければ、電ちゃんは足を止めてくれた。

「別に何だっでもいいんだ。やりたくねえけど穴掘ってそれを埋めるの繰り返しみたいなことだっって良い。これはな？　意味を見つけるためにやるんだから」

「……意味を、見つける?」

そう言えば提督言ってたな。花を育てる事自体に意味はないって。花を育てたいと思う事に意味があるって。

「電。やりたくないならやらんでもいい。前に言った通り自由にしてくれたら良い。海に出るなんて言わない。けどな」

——何もしないって、むっちゃやくちや暇だぞ?」

提督は笑ってそう言った。何か心当たりでもあるのかな? 何処かちよつと自虐的だったけど……。

「電ちゃん! 花の冠って知ってる?」

「……花の冠、なのです?」

あ、その反応は知らないな? ふっふー。

「うん。作ってあげるよ! だから——」

「この花が咲いたら作ってくれるのですね。わかったのです。……確かに何もしないのは暇なのです」

戻ってきてくれた! 良かったー!

提督? 褒めてくれても良いんだよ? 那珂ちゃんサイコーっ

て言ってくれて良いんだよ?

「……サンキュ」

「……へへー」

うん! よし! 頑張ろう!

そうやって私と六駆の皆で花壇弄りは始まった。

提督がなんでこんな事をさせてるのはわからないけど。

那珂ちゃんの最初の見せ場が海じゃなくてコレだっけ言うのもよ
くわからないけど。

綺麗に咲くと良いな、カランコエ。

提督は鎮守府内演習をするようです

「演習開始三十分前。各艦、最終点検を行うように」
マイクを通してそう言えば、こっちに向かって敬礼を返してくれる皆。

敬礼が終われば自分の身体や砲、魚雷を確認している姿が見える。
六駆の皆と古鷹達がここに着任してから。

やっぱり軽空母や重巡洋艦を本格的に運用するには資材が心許なかつたうちの鎮守府。

何とかある程度の余裕をと天龍や龍田に頑張って貰ってある程度の資材を確保出来た。

と言っても理想の状態へはまだまだ足りないのは言うまでもなく。
資材が集まってくると同時に装備開発にも着手しだした事も踏まえるとあの鎮守府からの異動組が来る前よりも厳しいと言える。
まあ当たり前だが。

ちなみに装備開発を担当してるのは那珂ちゃん。

——あ、アイドルなのにく！

なんて悲鳴に悪いと思う気持ちはあれど、誰かがやらないといけな
い事ではあるので無理を言わせてもらった。

要するに今の那珂ちゃんの仕事は、装備開発と六駆のケアになる。
もちろん、今となつては恒例である道場での訓練にも参加してもら
いつつだが……これまたアイドルなのになんて悲鳴を頂いた。すま
ねえ。

そんな那珂ちゃんには今、ドラム缶を頑張って作ってもらってる。
それには理由があつて。

その間にも時雨、夕立、天龍、龍田、大淀による資材回収と南西諸
島沖の警備、哨戒は進められている。

これには大淀の力が大きくて。大淀が持参していた偵察機のお陰
でかなり安全に任務が行えていた。

資源回収任務、哨戒中に会敵する可能性。

やっぱり偵察機の存在は大きくて。その危険性をぐっと低くする

ことが出来ている。

正面海域奥にあったル級が溜め込んでいた資源も回収しきってしまった今、南西諸島沖の資源に手をつけられているのは間違いなく大淀のおかげだと言える。

そんな思いもあつて大淀に感謝の言葉をかけてみれば。

——い、いえ!?! お、お役に立てたのなら何よりですつ!?

なんて慌てながら引きつった笑みを浮かべていたな、何故だ。

ま、まあそんな理由で資源回収が捗っているので、少しでも回収効率の向上を目指すドラム缶。その為的那珂ちゃん。

いずれ大発動艇なんかも手に入れる事ができれば良いが、まあまずはドラム缶だろう。

僅かとは言え少しでも一度に回収する事が出来れば最終的に回収任務へと向かう数を減らすことに繋がるからな。

「提督く? 何考えてるのく?」

「ん? ああ……鎮守府内で三隻艦隊同士とは言え、ちゃんと形になつてる演習を見れる事にちよつと感動してた」

「ちや、ちゃんとした演習……」

あ、龍田さん? 落ち込まないで良いんですよ? あれはあれで必要な演習だったんだからさ?

「そういう意味じゃねえつてば。こういう事が出来る位の余裕と言うか運営が出来るようになって嬉しいんだよ。それも龍田達のおかげだ、ありがとうな」

「あ、う……う、ううん。どういたしまして」

よしよし。良い笑顔。

「いちやついてるのを電達に見せに来たのなら部屋に戻りたいのです」

「い!?! い、い、いちやちゆいてなんか!?!」

あ、龍田さん噛みましたね? 可愛い。

ああ、電さん? ジト目も良いけどスマイルだよスマイル。

那珂ちゃんは後ろからにやにやしない! ファン辞めますよ?

「そういう訳じゃねえつてば。……うちの鎮守府がどんなもんか、

しっかり見ててくれよ?」

「……わかったのです」

ため息一つした後演習場に目を向ける電。

それに倣って他の六駆の皆も演習場に目を向けた。

……と言うか、皆こつち見てたのね。あ、龍田も気づいたみたいで顔真つ赤だ。

「さて、龍田?」

「なななな、何かしら?」

落ち着け。そんな慌てないでくれ。俺まで恥ずかしくなるから。な?

「この演習、どう見る?」

「……ふう、そうね。艦種だけで言えば、鳳翔さん、古鷹ちゃん、加古ちゃんの方が圧倒的に有利なのは間違いないけど……天龍ちゃん、時雨ちゃん、夕立ちちゃんの力を考えるとわからないとしか言えないわね」

うん。俺と同じ感じだな。

まあ良い機会だと思っただ。

普通の鎮守府……と言って良いのかわからねえけど、この世界の一般的な艦娘運用方法で育ってきた鳳翔達。そしてこの鎮守府で一般的ではないかも知れない強さを身に着けた時雨達。

その差は一体どれ位のものなのかを確かめる為の。つってもどつちが上とか下とかを見るためじゃなくて。

古鷹や加古、鳳翔もちろん道場での訓練に参加してもらった。

ただ、時雨や夕立達のように何かを掴んだりするって事はないみたいで、どちらかと言えば単純な運動に近いものになった。

というのも、この動きがどう海で活かせるかって想像が全くつかないらしい。

俺自身も、そういう古鷹達にどういうアドバイスをすればいいか全く見えなかった訳で。

そんな時天龍が言ったのは艦としての動きが染み付いててそういう発想が生まれにくいんじゃないかって事。

あの鎮守府で古鷹、加古、鳳翔はほぼ出撃メンバーに選ばれていたらしく、またその戦闘方法も艦としての動きでずつと戦ってきたとの事。

そりや出来上がった物と全く毛色が違うのを取り入れるのは大変だわな、なんて納得したり。

ただそれでも何かを教える……と言えば偉そうだけど。

何かを得てもらう為には今出来上がっているものを俺が確認しなければならぬという思いもある。その上で手にしてもらわなければならない方向性が見つかるだろう。見つければいいな。

「まあそこら辺をきつちりこの演習で見極めめなとな。龍田、大淀。後で皆を交えて艦隊運用について話し合うからしつかり見ててくれな？」

「任せて〜」「了解です」

ほんわか笑顔で敬礼する龍田と、妙な笑顔がデフォルト状態な大淀の敬礼。

……大淀の事は気になるんだけど、はぐらかされると言うか話してくれないんだよな。うーん。

そういった一面が理由の全てではないけど大淀に道場での訓練には参加してもらってない。

なんと言うか、大淀がどうしたいのかわからないんだよな。

いや、強くなりたいたってのはわかるんだけど。

夕立や時雨のように無垢な信頼を向けてくれて俺の言うことすべてを吸収してやるって訳でもなく、天龍の様に特徴がある訳でもない。

要するにどうしたら良いのか、俺がわからない。

それに加えて大淀と言えば艦隊司令部。

どちらかと言えば、そういった戦術、戦略の面で俺を助けて欲しいと思ってもいたり、訓練に参加する時間を使って艦隊運用について教えてもらってる。

ともあれ。

「……開始十分前。各艦指定の位置に」

まずは現有戦力の確認だ。

「やっぱり、と言うか……」

「そうね。夕立ちちゃんはやっぱり派手ねえ」

開始と共に夕立は全速で突っ込みに行った。そして夕立が動きやすいように相手を牽制する時雨、その二人の動きをフォローしつつ指揮を取る天龍。

報告書で読んだ通り、想像通りの動きをしてる。

「古鷹は時雨の動きを見てるからそれほどじゃないけど……加古は驚いてるな。やっぱり実際に目の当たりにしたら違うものか」

「私も初めて一緒に出撃した時は驚きました」

「それだけじゃないわ。夕立ちちゃんの……そうね、言うなら気迫っていうのかな？ 絶対に倒すって気当たりがすごいのよ」
なるほどな。

深海棲艦相手に気迫が意味を成すのかどうかはわからないが、同じ艦娘同士なら怯む要因にはなり得るか。

ただ……。

「すげえな、鳳翔。全く動じてないように見える」

そんな夕立の突撃だけど、鳳翔は眉一つ動かしてない。

あ、何か指示しながら、距離を取ってる。

散開しながら動く夕立達に対して、鳳翔達はしっかりと単縦陣を取ったままだ。

「鳳翔さんはすごいものよ。一緒に出撃した事は少ないけど、何回か遠征で一緒したわ。冷静沈着ってああいう人の事を言うんじゃないかな」

「あ、古鷹さんと加古さんが……あれは」

牽制砲撃？ 夕立に当てるといよりは夕立の進行方向に被せるように撃ってるな。あ、夕立ちよつと嫌がってるか？

……ていうか古鷹も加古も砲撃精度すごいな。夕立が距離を詰められないから時雨も中々前に出られないし、天龍もどうしたら良いか悩んでるみたいだ。

「距離が、縮まらないな」

「はい。鳳翔さんの指示でしょう。重巡洋艦が一番活きる距離で固定されちゃってますね」

古鷹と加古が装備しているのは20.3cm連装砲。時雨達が装備している主砲のおよそ倍の射程。

陣形を維持したまま動いているからか集弾率が良い。装填中に近付けても、装填が終わるまでに詰めきれないし、詰めた距離は再び牽制砲撃によって開かれる。

そうやって距離を固定されているから、夕立も時雨も主砲が撃てない。

……上手いな。というか勉強になる。

「こうなってくると、切り込み隊長夕立以外の行動が鍵になる、か?」
「そうね。天龍ちゃんは基本的に対応は上手くても打開策を探すのはまだまだだから……時雨ちゃん、それも魚雷が鍵になるかな?」

「対する鳳翔さん達は、やはり鳳翔さんの艦載機による攻撃が鍵……でしょうか? ああも散開して動かれています、狙いを絞るのも大変そうですか……」

ふむ。

距離も固定されているならば、状況も固定されている、か。

とは言え、夕立への牽制射撃は徐々に至近弾寄りになって来ているかな? このままじゃいずれ夕立は小さく損傷を重ねてしまうだろうか。

「……動いたっ!」

「時雨が前に出たか!」

時雨も同じことを考えたんだろう、前に出て夕立と同ラインを走り出した。

牽制射撃の標的を二つにしてどちらかが肉薄すれば……って所か? 確かにどちらかが距離を詰めることが出来れば……ってまじかよ!?

「爆撃っ!? 鳳翔さん、今のを待ってたのですか……!」

「……やっぱり鳳翔さんはすごいわ〜」

その動きを待ってましたと言わんばかりに鳳翔が艦載機を飛ばした。

その標的は時雨。爆撃の雨に降られる。

「しぐれ、たいは。ごうちんだよー」

「わかった。……時雨、大破。轟沈判定」

そうだよな、対空機銃を持ってないからなあ……当たり前と言えばそんなんだけど。それでも鳳翔の艦載機発艦タイミングが凄すぎた。ペイント混じりの煙が晴れてペイント塗れの時雨の姿が……つて。「ほうしよう、たいは。ごうちんだよー」

「煙から飛び出て肉薄……か、ほんつとブレねえな夕立。……鳳翔、大破。轟沈判定」

時雨もやられる前に魚雷を発射していたみたいで、それは鳳翔にしっかり当たった。その隙に一気に距離を詰めた夕立の主砲追撃で沈む、か。

そうなんつても鳳翔は顔色変えなかった。つて事は想定内……か？

「ですが古鷹さんと加古さんに挟まれて……あれじゃあ」

「ううん、まだよ」

おお、天龍も距離を詰められたか。

夕立に砲を向ける二人への砲撃……つて夕立!?

「ゆうだち、ちゆうは。しゅほうにそんなしうだよー。かこもちゆうは、きやくぶぎそうにそんなしう」

「だから死なばもろともみたいな動きはやめろつての……夕立、中破。主砲に損傷。加古、中破。脚部艤装に損傷、速力低下」

挟まれてるつて認識する前に動いて魚雷を加古に至近距離でぶつ放した夕立。いやいや、ほんとに心臓に悪い。

頼むから実戦ではしないでくれよ？

まあその甲斐あつてか。

「ゆうだち、たいは。ごうちんだよー。かこもごうちんー」

「あいよ。夕立大破、轟沈判定。加古大破、轟沈判定」

古鷹が夕立を仕留めて、動きの鈍くなった加古を天龍が仕留めた。

これで一対一、か。

お互いに損傷が無い天龍と古鷹。

二人は一瞬不敵に笑いあつたように見える。

「ふふっ、天龍ちゃん楽しそう」

「ええ……ちよつと羨ましいかも知れません」

そうして始まつた砲撃戦。

一対一故、お互いの技量が勝敗を左右するのは間違いない。

「……すごい、い」

「……うん」

「私も……ううん、私だって……」

「……」

六駆の皆は随分と大人しいなんて思つてたけど、食い入るようになっている。

それぞれの胸の内はわからないけど、少しでも前を向けるきっかけになればいいんだが。

あ、那珂ちゃん？ 何かコメントを。

「な、那珂ちゃん……とんでもない所に来ちやつたかもー？」

はい、ありがとうございます。

さ、俺も集中しなおそう。

無理して演習したんだ、授業料以上の元、取らねえとな。

提督は演習評価をするようです

初めて使う作戦会議室は広がった。

なんだかんだ言って全員が揃った状態の鎮守府ってのは珍しい。執務室では溢れてしまうからこっちの部屋を使う事に。

今は演習に参加してなかったメンバーと一緒にペイントを落とすに行った皆を待っている。

「すごかったねー！　那珂ちゃんびつくりしちゃったよー！」

「そ、そうね……うん、すごかったわ」

那珂ちゃんが興奮しながら六駆の皆と喋ってるけど、反応を返しているのは雷だけだったり。

それでもめげずに暁や響、電も会話に混ぜようと頑張ってくれている。ありがたやー。

「提督、演習を見て……どう思われましたか？」

「ああ、まあその辺りは皆と一緒に話しっただけど……そうだな、言うなら違いがよくわかった演習だったよ」

大淀に言葉を返しながら思うのは鳳翔達の動き。

あれは俺が着任前に大淀から見せてもらった演習映像に近い。要するにこの世界での一般的な艦隊の動きって事だろう。

うちの動きは言えば各艦自由行動。思い思い最大効率を目指した動きをしろって動きに対して、鳳翔達は秩序だった動きを見せてくれた。

目指す所は勝利の二文字と変わらないが、それに至るための道は大きく違うように感じる。

「具体的にそれを解剖していくのが今回の演習評価になる。大淀も龍田も遠慮なく意見を言ってくれな？」

「うん、わかってるわよ」

「っ……了解です」

んー大淀さん固いつすねえ、笑顔が固いつす。しかもなんでびくつとしちやうんすかねえ……。

うーん。

「失礼します。各艦帰投致しました」

「ん？ ああ、お疲れ様。よく頑張ってくれたな。空いてる所に座ってゆっくりしてくれ」

「はあーい……はあ、もうくたくただよ寝てて——」

「演習評価終わったらな？」

「ちえ……りようかーい」

「もう、加古つてば……」

先に戻ってきたのは鳳翔達。綺麗さっぱりって感じだなっ！

穏やかに笑いながら入室した鳳翔の後ろからだるそうな……とい
うか眠そうな加古が入ってきて、それを嗜めている古鷹。

そうそう、これだよこれ。

君達はそれでいいのだよ。俺は今猛烈に感動している。

まあなんだ。

うちに慣れてきてきているようでほんとに何よりだ。

「わりい、遅くなっちまったか？ 天龍、帰投したぜ」

「夕立もっ！ 戻ってきたっばい！」

「ああ、お疲れ様。よく頑張ってくれたな……時雨は？」

天龍と夕立も綺麗さっぱり。だけど時雨の姿が見えなかったり。

聞いてみれば天龍は苦笑いを浮かべながら入り口をくいと親指で指し示す。

「……うー」

「……ええ？」

そこにはドアから半分だけ顔を出してこつち……と言うか俺の様子をじーつと伺ってる時雨さんの姿が。

なんだよ、急に萌えを意識しだしたのか？ ……アリだな。

つと、時雨萌えーしてる場合じゃねえな。

なんだろ、何か気にしてるのかね。

まあいいや。とりあえず手招き手招き。

「……ごめんなさい。一番最初に轟沈しちゃった」

しゅんと小さくなりながら、入ってきてくれた。

なるほど、それを気にしてるのね。そしたら……。

「うむ、私は大変遺憾に思っているぞ時雨」

「う……だ、だよね。ごめんなさい」

おっふ、悪ノリしたらだめっばい！ 落ち込み具合が大変なことに！ 俺の方こそごめんなさいっ！

「げ、げふん。という事で時雨には罰を与えます」

「う、うん……そうだね、どうしたらいいかな？ 何でも言つてよ」

「今日の夕食当番よろしくっ！ あ、俺。 pasta 食いてえな、ほらミートスパゲッティとか」

あ、ポカーンとしてる。かわゆい。

いつもしつかりしてる時雨だからこういう抜けた表情が映えるね、うん。

「え、えつと？ 罰って……そ、それでいいの？」

「え？ じゃあ明日もお願いして良いのか？ じゃあ……」

「そ、そうじゃなくてっ！ 僕、ほとんど何も出来てないのに……」

しつかり鳳翔に魚雷あててんじゃん。いやまあそういう事じゃねえか。

自分で失敗したって思うのならそれが正しいんだろうよ。成功だと思つたら成功だ。

そして失敗したと言うんなら、だ。

「時雨。俺は何も出来ていないなんて思つてないし、それを意味ある物にする役目も俺だ。もし失敗したって思うならしつかり次に活かしてくれ」

「……提督」

あー時雨の髪は気持ちいいなあ！ やっぱりあれだよ。頭撫で撫ではする方が得するんだよソースは俺。異論は認めない。

「……うんっ！ じゃ、じゃあ今日は腕によりをかけて作るからねっ！」

「おう、練習の成果を楽しみにしてる」

「うん！ ……つてええ！？ て、提督知って……」

わからいでか。

チャーハン専門の俺だけど流石に調味料やら食材やら何やらの減

り位気が付くしなあ。

ん？　と言うか夕立さん？　あなたはなんでドアの所でさっきの時雨と同じことしてるのかな？

「ほい〜……」

なんで切なげな声を出してるのかな!?　じーつとこつちを見つめてるのかな!?

と言うかなんだよ皆して微笑ましそうな顔しやがってからにっ!

鳳翔さん!?!　あらあらじゃありませんよ!?!

「……いちゃつくなら余所でやって欲しいのです」

あ、はい。

すみませんでした。

「さて、じゃあ改めて演習評価だ。まずは互いの旗艦である天龍と鳳翔に感想を聞こうか」

「……うっし、じゃあオレから言っつていいか?」

そう言っつてみると鳳翔は少し考える素振りを見せる。

その様子を見てか、天龍が声を上げた。

「じゃあ頼む」

「わかった。……まあそうだな、結果的にこつちの勝利ではあったけど内容的には負けててもおかしくない。そう思える要因はやっぱり空母の存在が大きいっていうか、艦種の問題と言うよりは、鳳翔さんだから。だあな」

「私、でしようか?」

「ああ。指揮能力がオレとは段違いだ。夕立の足止めを指示したのは鳳翔さんだろ?　あれから時雨が何とかしようと思えるまで、何の指示も出せなかったしな」

確かにな。

あの状況を変える為の一手を出せなかった結果、ギリ貧を察して時雨が動いてしまったのは天龍の指示が無かった事もあるだろう。

それに夕立を標的にするのはなく、進路を遮る事に注力させたつてのものもある。自分が狙われるのではなく、思うように動けない様にさ

れるってのは夕立も初めての経験だっただろうし。

それに加えて加古と古鷹だ。

加古はなんと言うか物凄く攻撃の勘が良い。一言で言ってしまうと絶妙な位置へと砲撃を置く。

夕立が行きたそうにしている進路へと上手く砲撃していて、加古の砲撃が見える度に夕立は顔をしかめる。

天龍が受けの勘が良いと言うなら、加古は攻めの勘が良いと言えるだろうな。

そして古鷹。

古鷹はまず間違いなく誰かと一緒に行動することで本領を発揮するタイプだと言える。

加古が行う砲撃の意図を直ぐ様理解して、足りない部分をフォロウしたり、加古の攻撃をより活かす砲撃をしていた。

実際夕立が距離を詰め切れなかった理由の多くは、古鷹が避けながら前に出ようとする夕立の頭を押さえていた様に思える。

夕立が取りたい選択肢を奪う加古。

夕立が取りたくない選択肢を強要する古鷹。いいコンビだ。

無論二人の間に積み重ねられた練度もあるだろうが……それだけではないと思う。

「あの足止めはフォロウに出ようとしたオレか時雨を前に出すための作戦だったんだらう？」

「そうですね、もちろんその意図はありましたが……あの場で夕立さんに損傷を与えることは求めてはいませんでした」

「ん？ どういう事だ？ ……別の狙いがあったのか？」

鳳翔の言い方が気になってつい突っ込んでしまう。

そうすれば、鳳翔は少し照れた様に片手を頬にあてながら。

「はい。その……いきなりああも勢いよく突撃されるとは思ってたんです。正直に言ってしまうと、落ち着くための時間稼ぎだったんです。時雨さんと古鷹さんの演習を見ていたから想像出来たはずなのに……お恥ずかしい話です」

「……って事はあれで動揺してたってのか？ 全くそうは見えなかつ

たぞ……流石鳳翔さんだな」

天龍の言葉に俺も頷いてしまう。

いやほんと、傍から見ててもそんな風には全く見えなかったからなあ。

「ようやく私を含めて皆が慣れてきた……丁度そんな時でした、時雨さんが前に出てきたのは。そしてああも爆撃が上手く行ったのは……この子達のおかげです」

「じようじようね」「さすがにきぶんがこうようします」

思わずといった感じで鳳翔の懐から出てきた妖精二人。おい、赤城と加賀の真似してないでその場所俺と代われ。

げふん。

そういや鳳翔達も妖精と初めて会ったって言ってたな。

そして艦載機に妖精が搭乗することも。

妖精不在でどうやって艦載機を動かしていたんだなんて聞いたことがあるけど、どうやら単純な攻撃開始指示とかは射手……空母が出来るらしい。

尤も単純という言葉の通り、予めこのポイントで魚雷を海に放つとか、爆弾を落とすとか。戦闘機に対して攻撃するとか程度だけだそうだが。

偵察機とかにも妖精が乗り込むおかげで、視界共有がしやすくなっただって大淀も言ってたし……妖精ばねえ。

まあつまりなんだ。要するに妖精の搭乗により、高度な攻撃管理が出来るようになったって事か。無論鳳翔の経験値というか練度の高さも疑いようはない。そもそも、狙ってなければ出来ないタイミングだったし。

そして改めてこうして見る事が出来て、恒例訓練でもできそうな事があるな。近々試してみるか。

「実際私もここまで上手くいくとは思いませんでした。……ですがやっぱりまだ妖精さんとの連携が上手く取れない部分もあって他の事へ意識を向ける事が難しいです」

「なるほどな」

天龍が大げさに頷く。

まあ確かに天龍や鳳翔含めて妖精の存在を皆知らなかつたみたいだし。いずれ解消出来る事柄だろう。……と言うかそれを理解した上って事なら鳳翔はあの場で魚雷等への対応が出来ないと分かっていたって事で。

うーん。自分を危険に晒す事を想定内に入れて欲しくはないんだがなあ……。

「ともあれそこで私が動けなくなつて……爆撃を躊躇なく利用してこつちに肉薄してきた夕立さんにしてやられました」

「夕立の思い切りの良さはほんとになあ……」

鳳翔が苦笑いを浮かべながら、天龍は少し呆れたように。

当の本人と言えば。

「ぼいっ？」

なんて首を傾げてるんだから恐ろしいもんだ。

夕立の一番の武器と言えはその部分になる。平たく言ってしまうば躊躇がない。行けると思えば思ったと同時に実行する。

通常の間人……いやまあ艦娘もそうだと思うけど、考えを実行に移すにはタイムラグがあるもんだ。

初動の差と言い換えてもいい。普通の車はアクセルを踏めば踏む力によって徐々に加速していくが、夕立はアクセルを踏めば、直ぐトップスピードになる。

思えば、最初の突撃だつてそのおかげで鳳翔に牽制射撃で様子見をするという選択をさせたことに違いはない。加えて鳳翔曰くの動揺を誘えたんだらう。艦載機の攻撃を先制する選択肢だつてあつたはずだらうし。

いやまあ、夕立が相手にしてきて撃沈した深海棲艦だつて間違いなくソレにやられてるんだらうけど。

「私が轟沈、その事に加古さんと古鷹さんが少し動揺する中で天龍さんは距離を詰め、夕立さんはそのままの勢いで加古さんへと迫つて魚雷発射。共に中破……本当に夕立さんには驚かされっぱなしでした」
「いやあ、あたしもほんとびっくりしたよ……何である状況から直ぐ

動けるもんかなあ」

「夕立、何かおかしい事したつぽい？」

不安そうに俺を見る夕立だけ。ほんとにこいつは……。

「そんだけ凄いことしたってことだよ夕立」

「わあい！ 褒められたつぽい！ 提督さん！ もっと——」

「だけど、気をつけてくれよ？ 実戦だったら間違いない怪我じゃ済まないんだからな？」

「——うう、了解つぽい」

しょぼんとしてしまった夕立に苦笑い。後で思う存分褒めなおしてやろう。

でもまあ、危なっかしいのは確かだから何とかしないとイケないんだけど……うーん。

「んでだ。そつからはオレが加古に砲撃、古鷹が夕立を砲撃して共に轟沈。そこからは俺と古鷹の二対一の戦いだだよ」

「うう………すいません。一発も当たりませんでした……」

ああ、古鷹まで落ち込んでしまった。俺は一体どうすれば……ぐぬぬ。

まあしかし。

「天龍ちゃんはほんとに勘が良くなったからねえ」

「ああ。天龍を傷つける事が出来るやつはそう居ないだろうな」

あ、何かドヤ顔してる。フッフ、嬉しいか？

とは言え多分それは本当のことだ。

多分一対一みたいな状況下で天龍を相手にしたら相当な腕の差が無いとかすり傷一つつけれないだろうな。

というのも天龍の……そうだな、第六感とでも言っておくか。

視界以外の感覚を強化したことにより、天龍はアクションを取られる前にリアクションを取れるようになった。

つまり、相手の攻撃に対して反応するのではなく、攻撃の気配に対して反応することが出来る。

古鷹が主砲を撃とうとすれば、それを邪魔するかのようには砲撃を先んじてするし、時雨と訓練することで学んだ回避行動を取る。

そうして古鷹は一発の砲撃も当てることが出来ないまま、天龍の攻撃を積み重ねられて轟沈してしまった。

「まあ相性もあるだろうよ。戦艦だの空母だの相手にならオレもこうは上手く出来ねえよ」

天龍の言う通り、艦載機の波状攻撃や戦艦の主砲と副砲といった物量の前にはあまり効果が無いだろう。後はフェイントを入れるとうか、時雨のような相手を手玉にする事を考えた戦闘スタイルとか。今回、副砲を持っていなかった古鷹相手だからこそといった部分はある。

「で、ですけど……」

「古鷹、そう自分を責めるな。そっちが三隻揃っている時の射撃精度は凄かった。要するに古鷹……それに加古は連携しての攻撃が上手いんだろう」

そう。

ここが一番の違い。

古鷹達は全員が足並みをそろえて勝利への道筋を辿るのに対して、時雨や夕立。天龍、龍田といったうちならではの戦い方をする艦娘はそれぞれが独立して勝利を目指す。

言うならば、チームプレイで勝利を目指すこの世界の艦隊運用。そしてスタンドプレイから生じるチームワーク、それがうちの艦隊運用。

違うのは少なくとも古鷹達は都合の良い言い訳なんかではなく、確かなチームプレイを築き上げているって事か。

「大淀」

「はい、どうされましたか？」

「大淀ならどちらの艦隊で動きたい？」

そう聞くと、少し考えた後。

「やはり……鳳翔さんの方でしょうか。何度か夕立さん達と出撃はしています……私が足を引っ張っている印象は拭えませんし」

そう悲観的というか自虐的にならんでも。

とは言え、そういった面があるのは否定できない。

出撃、戦闘内容の詳細に目を通してみれば偵察といった役割以外をしつかりこなしているとは言い難い。大淀には悪いけどな。

だけどそれは多分大淀が持っている艦隊の動き方。その常識の外に夕立達が位置しているからだろう。

今回の演習を見てそれがはつきりわかった。

「龍田」

「はあい」

「龍田ならどつちだろうか」

「両方ね」

お、間髪入れず答えるか。

「多分天龍ちゃんもそうだと思うけど……私はどつちでも大丈夫だと思っの。夕立ちゃんや時雨ちゃんの動きも理解できるし、鳳翔さん達の動きも理解できるわ」

うん、多分そうだろうとは思ってたけど確信に変えられたな。

「那珂ちゃん」

「ひゃ、ひゃい！ な、那珂ちゃんはー……」

「ん？ ああ、いや。那珂ちゃんは良いんだ、どつちも出来なくて」

「ほえ？」

正確にはどつちもして欲しくない。

ちらつと六駆の皆に目を向ける。

「っ……」

少し怯えた様子を見せる暁と雷。相変わらずつかめない視線を送る響に、視線に睨みを返してくる電。

今はまだ海に立てない六駆だけ……。

「よし。今後の方針を発表する」

そう言ってみれば、全員が姿勢を正した。六駆の皆もそれに倣ってくる。

「第一艦隊。旗艦を天龍。以下龍田、夕立、時雨の四隻編成とし、南西諸島沖の哨戒任務。そして資材回収をメインに動いてもらう」

「了解っ!!」

艦これで言えば1―2になるが……実際警備、哨戒については大淀

の偵察機のお陰であらかた敵との会敵ポイントを割り出すことが出来て安全に行えているから……資材回収が主だった任務になるか。回収時は天龍か龍田どちらかを鎮守府で控えてもらおうようにするが、基本形はこれで行こう。

これ以上は多分1―4の段階になるだろう。要するに防衛線の構築。それをするためにも。

「第二艦隊。旗艦を鳳翔。以下古鷹、加古、大淀の四隻編成とし、資材と相談の上で製油所地帯沿岸へと出撃。海域攻略を目指してもらおう」「了解っ!!」

防衛線を築く為には製油所地帯沿岸を確保して、資源の精製や運搬を安全に行える様にしななければならない。

こつちに関してはまだ手付かずだし海域の調査も行えていない。

資材を回復させつつ、調査を行い装備開発等で態勢を整えてから出撃が理想か。

今回の演習でお互いの違いを見るに、多分こういう隊組じゃないと上手く連携が取れないだろうしな、今は。

いずれしつかりすり合わせを行ってもつと幅広い部隊を組みたいが……時間が必要だろう。

「第三艦隊。旗艦を那珂。以下暁、響、雷、電の五隻編成とし、鎮守府内花壇の世話、綺麗で可愛い花を咲かせるように」

「……」

あれ？ 第三艦隊から返事がないぞ？ おつかしいなあ。

「えーつと……那珂ちゃん、もしかして要らない子なのかなー？」

「んなわけねえ。これは立派な任務だぞ」

「……信じられないのです」

ああなんだか電の視線が癖になってきたかも？ なるほど、これが噂に聞く。悔しいっ！ でも……！ ってやつか！

「い、い……一人前のレディなら！ う、海で戦う事だって……！」
「暁」

焦んな。

いや、俺が焦るような思いに駆らせてしまったのはわかってんだけ

どな。

それでも、だ。

「誰でもすぐに一人前になれるわけじゃねえさ。ゆっくりでいい、今日見た演習をしっかりと心に刻んでおいてくれ。そうしたら……」

「……そう、したら？」

お、六駆の皆と那珂ちゃんがちゃんと俺の方を向いてくれてるな。

「必ず出番がやって来る。お前達ならでは、お前達にしか出来ないことが、必ず。今はまだその時じゃないってだけだ」

「……うん。わかったわ。ゆっくり頑張る」

よしよし。わかってくれて嬉しいよ。

「那珂ちゃん」

「ぶー……もうー何かなー?」

「言った通りだ。それまで苦労をかけるけど……頼んだぞ」

「しようがないなあ、那珂ちゃんはアイドルなんだからね? 忘れ

ちゃ駄目だよー?」

……うん。大丈夫かな。

さて……忙しくなってきたね。

色々と考えないといけないことは山ほどある。

だけど足踏みしてその場に留まり続けるなんて事は……もうしたくないから。

時間が癒やしてくれるなんて嘘だから。

俺も、こいつらも。

進もう、前に。

大淀が出撃するようです

墓場と言われた鎮守府の戦力はかなりの物でした。

古鷹さん、鳳翔さん、加古さんの三人ならわかる。

曲がりなりにも元最前線鎮守府の一つに着任していた艦娘だ。その技量、練度が高いなんて分かりきっていた。

それを、ああも容易く……では無いけど、下したのがおかしい。

正直、演習評価どころではなかった。

その事実には動揺してしまった自分を落ち着かせるのに精一杯で。

おかしな事を言っていないかだけが心配だった。

不要と断じられた艦娘があれだけの成果を出して、私の目の前でそれが偶然得た物ではない事を証明して。

彼女たちは不要艦ではなかった事を自ら証明したのだ。

それに対して、私はどうだろうか。

何度か彼女達と出撃した中では足を引っ張って。出来た事と言えば偵察機を飛ばしたぐらいのもので。

本当に、私は何の役にも立っていないなかったと思う。

それでもあの人達は私にお礼を言ってきた。

———ありがとう、おかげで助かった。つて。

これだけの差を見せつけておいて、随分謙虚な事だと思う。

いや、そう思うのは私が捻くれているだけなのかも知れない。事実私は捻くれているのだろう、不要と言われる艦娘の事を何処か対岸の火事だと思っていた私だから。

だけど、彼女達は必死に努力したんだと思う。あの提督の下で。

艦娘に人と同じ様な訓練を施す。

今までそんな事聞いたことが無かったし、発想すら無かった。

それは大本営に居る軍人……司令長官だってそうだろう。

私自身もそんな事……ましてや竹刀を振り回すなんてやった事が無い。

そうした訓練の差なのだろうか。それとも別の要因か。わからない。

そんな私に提督は訓練を勧めなかった。

やらなければいけないと思ってやる訓練に意味はないとも言っていた。

……どういう意味なんだろう。

私だって強くなりたいと思う。

それをやれば強くなれるならばやるべきだろう。

そう思っただけで竹刀を手に取ろうとしたけど……そんな私を天龍さんが止めた。意味がないと言って。

わからなかった。

意味のない訓練なんて無いはずだ。ならば私に意味のある訓練というものを教えて欲しい。そう言った。

——多分だけだよ、今の大淀じゃあこれをやっても何にもならねえよ。まだ海を走り回ってる方がずっと良い訓練になるぜ？

天龍さんにそう言われてから、ずっと考えている。

今の私じゃ意味がないのならば何時の私なら意味があるんだろう。

「——ん」

けれどもその答えは未だに見つからないまま。

「大淀さんっ!」

「あ……は、はい!?!」

思考の海から引き上げたのは鳳翔さん。心配そうに私の顔を覗き込んでくる。

「大丈夫ですか？ もうすぐ目標海域に着きますが……体調が優れないのなら帰投しましょうか？」

「い、いえっ！ すいません。少し考え事を……」

そうだ。

そんな事を考えている場合じゃない。

今は製油所地帯沿岸へと敵戦力確認の為に出撃している所なのでから。

「……では改めて作戦の最終確認をしましょう」

「はいっ」

鳳翔さんの声に元気よく返事したのは古鷹さん。

加古さんは一度目を閉じて大きく深呼吸……そして再び目を開いたその瞳にはさつきまで浮かべていた眠たげな色は全く無い。

私も気持ちをすっかり切り替えないと。

そうだ、私が志願したんだ。あつちの艦隊ではついていけない……こつちなら私は十分に理解できる。いい加減に役立つ所を見せない……また捨てられてしまう。

「今回私達の任務は敵戦力の確認です。基本的に大淀さんが偵察機を発艦、確認しながら可能な限り深部までの敵戦力を探ります。提督は深部付近に渦潮があると断言しておられましたからその手前を目処に進軍します」

「渦潮？……この海域の制海権を私達が持っていた時にそんなのあつたっけ？」

加古さんが不思議そうに鳳翔さんに聞く。

そう言えば昔私が見たこの海域データには渦潮なんてあつた覚えはないけど……。

「はい、私もそうだったと思います。ですが、深海棲艦にこの制海権を奪われてから時間は経っています……変化があつても不思議ではありません。何より提督がそう仰っていたのですし、あるものとして考えます」

「わかった。あの提督が根拠も無しに言わないだろうし……ごめん、話の腰を折っちゃったね」

鳳翔さんはいえいえと首を振る。

と言うかそれですんなりと確認も無い事を納得出来るのが凄い。

「偵察機に敵影を確認出来れば私がアウトレンジで可能な限り敵戦力を削り、その結果でそのまま戦闘に入るかを決めます。大淀さん、私達が絶対に守らないといけない目標はなんでしたか？」

「えっ!? は、はい。敵戦力を詳細に確認し……」

「違います」

え、あれ？ ち、違った？

で、でもここに来たのは……。

「必ず無事に全員で帰投すること……ですよ。提督が何度も念を押し

ていたじやないですか」

「……はい、そうでした」

「そうだ、鎮守府を出る時に何度も言われたじやないか。危ないと思ったら撤退しろって。少しでも怪しい気配を感じたなら進むのではなく退けて。」

「気持ちばかりですよ、大淀さん。私も聞いた時驚いちゃいましたし」

「だよー。あたしもびつくりした。今まで死力を尽くして敵を撃破ばかりだったからねえ」

「確かに、聞き慣れない命令ではあったから……。つい、そう思い込んでしまった。」

「私も驚きましたよ、本当に。ですけど、何処か嬉しく思ってしまうのは……私だけではないと思います」

鳳翔さんが柔らかく微笑む。その笑顔につられてか似たような笑顔で古鷹さんが浮かべて、加古さんもくすぐったそうに笑う。

沈むな。無事に帰ってきてくれ。

そう言われる喜びは十分に理解できる。必要とされている事も。

……ならば私だって、そうしよう。そう望まれているのなら最大限に努力しよう。

「軽巡洋艦二隻撃沈っ！ 残るは敵重巡洋艦一隻っ!!」

「よおし！ 加古！ 行くよっ！」

「まっかせといて！ 加古スペシャルをくらいやがれー！」

「私だって……！ よーく狙って……てーっ！」

私と古鷹さん、加古さんの砲撃が重巡ネ級エリートに吸い込まれ……よしっ、沈めたっ！

「敵艦隊の全滅を確認！ 私達の勝利です！」

「やったあ！ 古鷹、見ててくれた？」

「もちろんだよ！ これが、重巡洋艦ってね！」

古鷹さんと加古さんがハイタッチしていい音が響く。

私も無事に戦闘を終えられた事に一安心。

これで二戦目。一戦目も似たような戦闘内容。

こちらの損傷は全く無い。あれだけの敵戦力相手に嘘のようだ。

「これも鳳翔さんのおかげですね」

「いえ、皆さんの力あってこそですよ」

「謙遜を。」

駆逐口級エリート二隻を先制航空攻撃で撃沈して更に軽巡へ級二隻まで撃沈させた人が何を仰いますやら。

「じょうじょうね」「やりました」

「あなた達もありがとうございますね」

帰ってきた攻撃機、爆雷機の姿から妖精の姿に戻って鳳翔さんの肩に乗る二人の妖精。

誇らしげな表情を浮かべる妖精の頭を指で撫でながら鳳翔さんも笑う。

ナデナデに満足したのか妖精は鳳翔さんが携行している矢筒の中に入って行き……しばらく経った後、その姿をそれぞれ矢に変えた。再度発艦準備完了のようだ、素早い。

「それに……提督のおかげでもあります。弓道……奥が深いですね」
矢筒を一撫でしながら鳳翔さんは思い返すように呟いた。

第一艦隊の皆が資材回収に奔走している中、鳳翔さんと提督は弓道場で何やらやっていたらしく。

そのお陰なのか元々素晴らしかった発艦技術が更に磨かれたようだ。

……鳳翔さんも、提督の訓練を受けたのか。

「元から鳳翔さんは凄かったけど……やっぱり提督の訓練ですか？」

「いいなあそんなにすぐ力がついてさ。あたしと古鷹はまだまだ全然実感ないよ」

「あら？　そうでしょうか？　古鷹さんは今まで以上に加古さんと呼吸が合っている様に思えますし、加古さんだって砲撃精度……磨きがかかったように思いますよ」

そんな鳳翔さんの言葉にはつとしたような表情を浮かべる二人。

……あれ？　じゃあ古鷹さんと加古さんも提督の訓練を受けたの

？

……。

「……大淀さん？」

「い、いえ。なんでもありません！ さあ、進軍しましょう！」

ごまかすように偵察機を飛ばす。

提督は私が訓練を受けることに意味が無いと言った。ならば、鳳翔さん達が訓練を受けた意味はあったのだろう。

そう、それだけの事だ。

……。

私に無くて、他の皆が持っているもの。意味。

それは、一体……なんなんだろうか。

「っ！ 渦潮を確認！」

「渦潮……提督の言った通り、ですか。……あの方は一体何処からこの情報を……」

偵察機の視界と私の視界はリンクしている。意識的に私の視界と偵察機の視界を切り替える事が出来るけど、思わず渦潮を二度見してしまった。

それくらい驚いた。

鳳翔さんが言う通り、あの提督は一体どうやってこんな情報を知っているのだろうか。

帰ってきた偵察機を迎えれば妖精が私の懐に潜り込む。

「鳳翔さん、どうしますか？ 渦潮ギリギリまで近づいて偵察を行いますか？」

「そう、ですね……」

静かに瞑目し、考え込む鳳翔さん。

古鷹さんと加古さんはその姿を見て周囲を警戒しだした。敵影は見えなかったけど、安全に思案出来るようにとの配慮だろう。

こういったちよつとした場面でもこの三隻がどれだけ共に戦って来たのが伺える。

「……大淀さんは、どう考えますか？」

「私、ですか？」

意見を求められた。

良いのだろうか、私なんか意見をして。

いや、何を考えているんだ。そういった分野こそ私が得意としてい
るはずじゃないか。

何のために司令長官は私を――。

ううん。それは良い。

「そうですね。艦隊の損傷は無し、燃料弾薬に消費はありますけど後
一度……いえ、二度は戦闘が行えるでしょう。渦潮のあるポイントの
手前まで進軍し、海域奥の戦力を確認する所までなら十分安全に行え
るか」と

「確認する所までなら、ですか。このまま奥に居るであろう主力と交
戦するのは危険でしょうか」

どうだろうか。

敵戦力にもよるけど……少し気になる。

「正直この調子なら……と思う部分はあります。ですけど、そう。上
手く行き過ぎてている気がして……。提督の言う通り今回は偵察に徹
するべきかと」

「……良かった。私と同じ意見です。私もそう思います。ふふ、どう
やら要らない心配でしたね？」

「え？」

……ああ、そうか。鳳翔さんは私を心配してくれていたのか。

「私にはこうして海に出ても尚考え込んでしまうほどの悩みが一体ど
の様なものかはわかりません。ですけど、ここは戦場です」

「は、はい。すいません……」

釘を刺されたんでしようね……うん。

そうだ、ここは戦場だ。油断も慢心も、一切を許さない戦場。

「それに……。きつとあの方なら、私には想像もつかないあなたの悩
みですらきつと解決してくれるでしょうから。まずはやるべきこと
をやりましょう。ね？」

「そうです、ね」

もしかして、信頼こなのだろうか。

私に無くて他の人にあるもの。

私が提督を信頼していないから、訓練を受ける意味がない。

ああ、そうなのかも——いや、違うはずだ。

私はあの人を初めて見た時どう思った？ あの人と共に海を征きたい、そう思ったはずだ。そんな事を感じる相手を信頼していないなんてあるはずがない。

だとするなら……。

……そうか、戦果か。

思えば時雨さんも夕立さんも……そしてこの三人だって、戦果を大きく挙げている。

大本営に所属していた時に演習はよく参加していたけど、実際に戦果を挙げる様な事は無かった。

だから、提督も私をどうやって扱えばいいかわからないだけなんだ。

だったら。

「行きましょう、鳳翔さん。私はもう、大丈夫です」

「はい。その様ですね。……では、予定通り渦潮前まで進軍。偵察して帰投しましょう」

そうだ、戦果を挙げよう。私の有用性を示そう。

そうすればきつと、提督は私を理解してくれるだろうから。

緊急事態が発生したようです

「至急入渠ドックの準備っ！ 天龍は出撃準備！ —— 龍田、聞こえるか!？」

『っ!? どうしたの!?!』

「第二艦隊の皆が危ないっ！ 哨戒任務は中止して直ぐに第二艦隊が向かった海域へ向かってくれっ!!」

『りようか……っ!? 敵艦多数見ゆ! ……逃してはくれなさそうね。提督、ごめんなさい! すぐに食べちゃうからっ!』

「つくー! 了解っ! 天龍に出撃してもらおうから! そっちで合流して向かってくれっ!」

『了解っ!』

—— 大淀さんが深刻な損傷です、古鷹さんも中破。安全な帰投が難しい状況です……申し訳ありません。

無線から届いた鳳翔の言葉に心底驚きながらも皆に指示を出す。

「どういう事だ? 危険を感じたなら撤退と言っていた、皆も笑顔で領いてくれていたじゃないか。それがどうして?」

「想像以上の敵戦力? いや、偵察機を持っている大淀が居るんだ、危険は事前に察知出来るはずだろ?」

「いや……予想外の出来事が起こったんだな!? くそっ! 変に偵察作戦だからなんて思わず天龍や龍田も一緒にさせるべきだったか!」

「うちの戦力は確かに向上した。だけど気軽に二面作戦なんて出来る状況じゃねえってのくらい少し考えればわかるだろうに!」

「くっそ……!!」

自分の迂闊さに反吐が出る。

「何が誰も沈めないだ……! 何がらしくなってきただ……!」

「甘すぎる……! 俺は圧倒的に甘いつ……!」

「羅針盤っ!! バケツ持って直ぐに出るぞっ!!」

「むり」

「はぁ!? 何でだよっ! 危ない艦娘が居るんだっ! 直ぐにでも

行かねえと!!

「げんじつてきにあそこまでいけるねんりようをつめない。それに」

「それに!」

「あなたはおもいしるべき。あなたのいのちがかかるいように、かんむすのいのちだつてかるいことを」

「うるせえっ! 艦娘の命を守るのが提督だつ!! 命が軽いなんてわかってるっ! だからっ……!」

「落ち着きなさい!」

っ!? 何だこいつ……雰囲気が……。

「あの時とは状況が違う。アンタはその身を以て実感しなければならぬわ。そして覚悟するべきなのよ。自分の命を賭けたってどうしようもならない事だつてあると。その位戦場いくさばで艦娘が沈むなんて当たり前なの。その軽さを真に知ってから守ると口になさいな」

「違っ! 知ってるからっ! だから沈めたくないんだっ! だから俺は命を賭けるんだっ! 行かせてくれ羅針盤!! 覚悟はある!

俺の命位いつだつて……!」

「このっ……大馬鹿者っ!!」

いつてえ!! お前、スパナはねえだろ!!

「ここに残った六駆は!? 天龍は!? 那珂は!? アンタはもう一人でここに居る訳じゃない! アンタがどうにかしようとする度に残った者を不安がらせるの!」

「っ……!」

「確かにアンタに命を賭けろと言ったわ。それであの子達を救ったのだつて十分知ってる、自慢の司令官よ。だから尚更気をしっかり持ちなさい。狼狽えるな、焦るな。このくらい何でもないんだつて虚勢を精一杯張りなさい」

言われて初めて気づく。

確かにあの時とは違う。時雨と夕立。天龍龍田しか居なかったあの時とは。

もう出撃の後俺以外鎮守府に誰も居ないなんて事は無いんだ。

——狼狽えるな。

——焦るな。

——虚勢を張れ。

残った皆に不安がけるな。

そうだ、俺がここで慌ただしく海へ行けば残った艦娘はどう考える？

毎回こんな危険があるのかと不安になるだろうか？ 海は怖い所だと思っただろう？

そして毎回俺は死に出ようとするなんて思ってしまうだろう。

「落ち着いたようね？」

「……虚勢だつてわかっているのに聞くのは野暮つてもんじゃねえか？」

そう思えても、海に出てあいつらを迎えに行きたい、すぐにでも。そればかりはどうしようもない。

そんな俺の様子を見てコイツは笑う。

「さあ、司令官？ このままじゃ第二艦隊の皆は危ないわよ？ 何でもないんだと張った虚勢に実はあるのかしら？」

「提督っ！ 準備できたぜ！ さあ、指示をくれっ！」

急いで準備を終わらせて来てくれた天龍。

その目は何でも言ってくれと俺への信頼に満ちている様。

指示。

無理やり冷やした頭で考える。

どうする？ こんな時、どうすればいい？

第一艦隊の皆には救援指示を出した。

だけど第二艦隊を庇いながらここまで戻って来られるかは賭けに近いだろう。

第一艦隊に天龍を合流させたとしても、同隻で庇いながらの戦闘は厳しすぎる。

だから。

「……第三艦隊の皆を、ここに」

「第三艦隊って……提督、まさか？」

策は、ある。

上手く行く確証も無ければ、臨めるかどうかすらわからない。けど、それでも。

「ああ、あいつらに出撃してもらおう」

「んなっ!? 無茶だ! あいつらは海に怯えて海上走行すら出来ねえんだぞ!」

わかってる。わかってるさ。

それでもやってもらわなくちゃ。

たとえ俺と二度と話をしてくれなくなっても、関係が修復不可能な位に壊れても。

皆を沈めるよりはずっと良い。沈めないという約束を守る覚悟だけはしているつもりだから。

「天龍、第三艦隊をここに」

「くっ……わかった!」

何かを言いたげな天龍にもう一度告げる。

そう、いつか来ると言った第三艦隊の役目は——今だ。

「……いつかと同じ光景だな?」

「嘘つきにはこの光景がお似合いなのです」

——すまねえ、逃げられた。

天龍は俺にそう言った。

出撃だと呼びに行った瞬間に悲鳴を上げられたと。

流石に羽交い締めにしてもなんて言えるはずもなく、こうして俺が迎えに来た。

というのも、逃げる場所に心当たり……いや、そうだったら良いなと思った場所があったからだ。

最初から俺が迎えに行けばいい話でもあるんだけど、妖精に指示を出さなくてはならなかったしな。

ともあれ天龍には第一艦隊と合流して、製油所地帯沿岸へと向かう様に指示を出して出撃してもらった。

いつかと同じ様に俺へと砲を向けてくる電。

怯える暁を守るように抱きしめる雷に、俺に色のない目を向けてく

る響。

違うのは那珂ちゃんが覚悟を決めたような顔をしながら見守って
いてくれていること。

そして六駆の後ろでようやく蕾を付けたカランコエ。

「そうだな、俺は確かに言ったもんな。海を征かなくても良いって。
征きたいと思ってからで良いって」

「はい。私達はまだそう思っていないのです。……だから、あなたは嘘
つきなのです」

嘘つき、か。その通りだ。

状況一つで約束を簡単に破る事が出来る位なら最初からしないほ
うが良い。そんな事は分かっている。

ああ、俺は酷い奴だ。だから。

「撃つても良いぞ」

「なっ!？」

受け入れよう。俺だって俺が許せないんだ。だったら電を含めた
六駆の皆が許せなかったり受け入れられなかったりするの当たり前
前。

「今すぐ撃つてくれても良い。俺が今からすることに我慢が出来なく
なれば、いつでも」

「ば……馬鹿なのですか!?! あ、謝って撤回すれば……!」

「それはしない」

そう言って電の横を通り抜ける。幸い、撃たれる事は無かった。

震えしやがみ込んでいる暁。

その後ろにあるカランコエの蕾を五つ摘む。

「暁」

「ひうつ……」

そうして暁と視線を合わせるためにしやがむが……俯いてしまっ
た。

直ぐ側からは雷の視線だろう、指一本でも触れたら……うん、どう
にかされてしまおうな。そう思える視線だ。

まあそれも構わない。

「顔を上げてくれ、暁」

「……や、いや……私、わたし……！」

涙を溜めながらも、俺の方を向いてくれた。

ああ、ありがとう。伝えたいことがあるんだ。

「幸福を告げる」

「……え？」

「カランコエの花言葉の一つだよ。本当は咲いた時に教えようと思っ
てたんだ」

出来れば那珂ちゃんが作ってくれてであろう花の冠と一緒に贈り
たかったんだけどな。そう上手くはいかないように。

スマートな男にはまだまだなれそうにもない。

「ここで過ごして……ゆつくり前向きになれた頃に花が咲く。なんて
思ってたけど皮算用になっちまった。暁？俺はお前を幸福にした
い」

「こう、ふく」

「そうだ。今まで辛いことがあった分……それ以上に幸せにしたい。
過去は消えないけど、幸福で消すことは出来ないけど。ここが暁に
とって幸せな場所であると思ってもらいたかったんだ」

目一杯の幸せの中で大人のレディになって欲しかった。ぶんすか
言いながらそれでも笑っていて欲しかった。

それがこんな形になってしまったことを心の中で謝りながら。

手を伸ばし、ビクリと震え目を閉じた暁の耳元にカランコエの蕾を
挿す。

「その幸福を……今、邪魔しようとしている奴がいる。暁の力が必要
なんだ。どうか力を貸して欲しい……そして幸せを掴み取って欲し
い。暁の幸せが俺の幸せでもあるから」

「……美しい、かん」

戸惑う暁から目を逸らしてみれば、直ぐ側に居るのは雷。

「カランコエがこうやって蕾をつけてくれたのは、一生懸命害虫駆除
したからだな？ 雷」

「……」

暁に触れたけど何もされなかった。それには安心した。

けども、俺とは視線を合わせてくれない。何処か辛そうに顔を背けてしまっている。

「あなたを守る」

「……守つてないじゃない」

仰る通り。むしろ俺は嫌がるお前達を出撃させようとしてるものなあ。

「ほんとになあ、俺は情けねえ奴だ。俺が出来ねえから花にお願いしてんだからさ」

「……」

「……雷がどんな思いで暁を守ってくれていたのか、俺にはわからない。だけど見ての通り自分ではどうにも出来ねえんだ。思いが足りねえのかな？」

「そんなんじゃない……だめよ……」

「そう。だから……雷の守るといふ思いを俺に貸して欲しい」

願いを込めて雷にも蕾を挿す。

手を離れた後、挿された蕾にそつと手を触れて目を瞑る雷。

その様子を眺めていたい気持ちは大きいけれど。

「響」

「……うん」

相変わらずわからない視線。

だけど、それでも何かを期待……なのかな？ そんな目を俺に向けてきてくれている様に思える。

だから何も言わずにそつと蕾を挿す。

すると何も言わずにそれを受け入れてくれた響。

「……花言葉は？」

「沢山の小さな思い出」

「そっか……司令官は、私と思い出を作ってくれようとしてくれたんだね」

えらくすんなり。だけど少し違うな。

「していた。じゃないぞ響。している、だ。これから先もずっと一緒

に響と一緒に思い出を作っていききたいんだ」

「……そっか」

そう呟いた後、響は胸にそつと手をあてた。

「私は、空っぽだと思う。生まれてすぐに失敗して以来、ずっと何も出来なかったから。そんな私でも、思い出は作っていけるかな？」

「いや響。だから良いんだ、空っぽだから良い。そうだとするならば分沢山の思い出を詰め込めるから」

「……これも、思い出になるかな？」

「もちろんだ。俺は響と、皆と同じ時間を過ごして思い出を重ねていきたいんだ。……知ってるか響」

「何を？」

「思い出を積み重ねれば……それは絆になるんだぜ？」

俺の言葉に、響は目を丸くして。

小さく笑ってくれた。

「さて？」

「……私は、いららないのです」

目を電に向けてみれば、小さくいやいやをするように首を振りながら後退りしている電の姿。

まるで俺から逃げるように……いや、この光景から逃げるかのよう
に。

多分だけど。

電は暁を、皆を傷つけようとする者への刃となろうとすること
で自分を守ってきたんだろう。

だから俺は皆を傷つける者でないといけない。そうじゃないと
自分を守れないから。

「撃つても良いんだぞ？」

「ち、近寄らないで欲しいのですっ！」

そう言って砲を構える電だけど、その指は引き金にかかってお
らず、少し震えながら宙を舞っている。

電は今、初めて自分を害そうとする人間を目の当たりにしているの
かも知れない。

「なあ電?」

「寄らないでっ!!」

「そんな電が俺は好きだぞ?」

「……はえ?」

いえーい隙あり。蕾を挿しつとな!

「な、なななな!」

「おおらかな心。……まあそんなの持つてなくても俺は電の事が好きだ。けど、そんな心を持つてゐる電になら思わずキュウコンカツコカリしちまうだろうな」

正確には艦娘全員が好きなのは訳だけでも。嘘は言つてねえよ?

「い、い……意味も訳もわからないのですっ!。だつて私は……!」

「はいはい聞こえませんよつと。電? もう誰が敵で味方でとかもうやめようぜ?。心が擦り切れちまうよ」

六駆の皆を守らなきゃ、皆を傷つける人は誰だ?

なんてずつと気を張つて神経をすり減らして……誰も信じる事が出来なくなつて。

そんなのやつぱり寂しいよ。

「私だつて……私だつてこんな事したくないのですっ!。でもそうしないとっ!。私は、暁ちゃんの様に怯えることも!。雷ちゃんのように身を挺することも!。響ちゃんの様に殻に閉じこもることも出来ないのですっ!」

「うん」

「嫌い……私だつてこんな私が嫌いなのですっ!。でも、でも……!」
「じゃあその分俺が電をもつと好きになろう」

電の表情が固まった。本当に訳がわからないといった様に。

「俺に預ける。誰が敵なのか、自分を傷つけるのが誰なのか探すことだつて全部、全部だ。電が嫌な事、全部俺に押し付けろ。そうしてお前が望む電になれ。……出来れば、おおらかな心の持ち主に」

「司令、官……」

そんな小さな身体で重いもん背負つてんじゃねえよ。そういうのは男に……俺に押し付けちまえば良いんだ。

それを受け取る覚悟？ ははっ！ そんなもんいらねえ！ プレゼント貰うのに覚悟がいるのかってんだ。

その発想がこれまで故に持てなかったというのなら、今持てばいい。

簡単じゃねえなんてわかってる。けど、それが出来なきゃ前には進めない。

「那珂」

「……っ!? は、はい！」

うん、ここまでよく静観してくれた。ありがとう。
てなわけで蕾ぶすーっとな。

「人望、人気……那珂に六駆と一緒に居てもらって本当に良かった。ありがとう」

「う、うん」

カランコエには西洋の花言葉として人望や人気って意味がある。まさにそれを示し、応えるかの様に頑張ってくれた。

よく皆と一緒にカランコエを育ててくれた。

文句はいつぱい聞いたけど、しっかり装備開発をしてくれた。本当に感謝している。

でももうちつと頑張ってもらわねえといけない。

「作戦内容を説明するっ！ 各艦工廠にて妖精の指示に従い準備を行い、製油所地帯沿岸へと出撃。先行していると思われる第一艦隊、第二艦隊の救援に向かうように！」

「了解っ！」

返事をしたのは那珂ちゃんだけ。

それで良い。

時間が無いのは分かっている。それでも。

「俺は波止場で待っている。……待っているからな」

……手は、差し伸べたつもりだ。後は、皆次第。

俺は来てくれる事を信じている。皆が自分の事を信じられない分俺が信じられなくてどうするってなもんだ。

それでも……それしか出来ないことを齒がゆく思いながら、その場

を後にした。

それぞれの戦いがあるようです

「大淀さん!! しっかりしてっ!! 大淀さんっ!!」

戦艦ル級が一隻。

渦潮の向こう、製油所地帯沿岸を支配していると思われる敵艦隊の姿。大淀が偵察機越しに見たのはそんな光景。

いつもの大淀なら真っ先に罠の可能性へと思い至り自重していた場面。

それがいつもの大淀ではなかったこの時、迷いはあれど焦る気持ちに後押しされ止める仲間を振り切って渦潮を渡ろうと強行しようとした大淀。

そしてそれはまさしく罠だった。

異動する前の鳳翔であれば、もしかしたら艦隊の安全の為大淀を切り捨てていたかも知れない。

だが、全員無事に帰って来いという提督の命令を守ろうと古鷹、加古と共に後を追いかけた。

渦潮に足を踏み入れようとしたその時。

大淀の側面から揃った砲撃が襲いかかり、大破。

大破した身が渦潮に巻き込まれ流れて行きそうになった所を古鷹が拾い上げた。

「あ…………ぐ…………」

「大淀さんっ!!」

呻き声を上げる大淀に意識は無い。一目見てわかるほどの重傷、大破。

後一撃、掠りでもすれば轟沈してしまうであろうその姿に古鷹の背筋を汗が伝う。

そしてその後一撃は無慈悲にもやってきた。

「くうっ!!」

自身の背後…………自分たちが進んで来た方から。

「なんで…………!」

「無事ですか!? ……どうやら私達は、最初から罠に嵌められていた

ようですね」

大淀を庇い、砲撃をまともに浴びてしまった古鷹は中破。大淀にとどめはさされていない。

ただ、鳳翔にそれを安堵する暇は無かった。

ここまで何故あれだけの敵戦力を前に被害もなく進軍する事が出来たのか。

その理由がここにある。

「鳳翔さんっ！ 駄目だ、挟まれてるっ!!」

「ええ……私達がここまで無傷で進軍できたのは……どうやらこの状況を作りたかったようですね」

渦潮向こうには戦艦ル級。そして自分たちが取った進軍ルートにも空母ヲ級率いる機動部隊。随伴艦は軽巡ホ級エリート二隻に駆逐ロ級エリート二隻。

艦隊を二つに分け、随伴艦達に鳳翔達の背後を取らせたのか。それとも、自分達の索敵範囲外から現れたのかはわからない。

わかることは今の状況が絶体絶命と言っていいほどの窮地であることだけ。

「……相手空母の相手は私が。加古さんはその随伴艦をお願いします、古鷹さんは大淀さんを」

「……たはー！ これはあれだね！ 帰ったら一年分位寝かせてもらわないとねっ！」

調子づいて加古は言うが、その目に余裕は全く無く零れ落ちるほどの覚悟が溢れている。

戻れない。

それが嫌でもわかった。理解した。だからこそ希望を口にした。

「——報告完了です。……全員、無事に帰りますよっ!!」

「了解っ!!」

そしてその希望で胸を塗りつぶした。

絶望的な状況だからこそ、希望に縋り自身を奮い立たせるために。

「被害状況はっ!?!」

「夕立ちちゃんが中破っ！ 私と時雨ちゃんが小破よ！」

天龍が第一艦隊に合流した時。全員が大きく肩で息をしていた。それもそのはず、会敵した敵水雷戦隊はまるで龍田達を轟沈させる為ではなく、ただ足を止める事だけを目的としたかの様な動き。

ひたすらに進路を妨害するためだけに動き、砲撃をしてきた。

そうしてそんな相手を無理矢理に撃沈させるために取った行動は第一艦隊の全員を大きく疲労、損傷させる。

「くっ！ 夕立、お前は——」

「魚雷が駄目になっただけっぽい！ まだまだ動けるっぽい！ ハンモックを張ってでも、戦うよ！」

帰投しろと続けようとした天龍の言葉を遮り夕立は吠える。仲間の危機に何も出来ないなんて嫌だと叫ぶ。

その夕立を見て天龍は、説得する時間の無駄を悟った。

「ちくしょうっ！ だったら良いな？ 絶対に沈むんじゃねえぞ！」

龍田！ こっからはオレが指揮を取るぞ！」

「お願いっ！」

「各艦全速っ！ 製油所地帯沿岸に向かうぞっ！」

「了解っ!!」

そう離れてはいない海域。

だが、天龍を除く全員の疲労が強くなるようにスピードが出ない。

スペック上ではそう変わらない速力を出せるにも関わらず、気を抜けば天龍だけが先行してしまいがちな進軍。

このままじゃ間に合わない。

そう天龍の勘が告げている。

龍田、夕立、時雨も同じことを思っているのか、表情に焦りが強く浮かんでいる。

それでも動けと必死な形相を浮かべながら前へと進む。

間に合わなければどうなるか。

第二艦隊を失う事になるのは当然。そう、当然辛い。

そして同じかそれ以上に。

——提督が深く悲しむ。

それだけは嫌だった。

提督の約束を破らせてしまう事。彼を嘘つきにだけはさせたくなかった。それがこの場に居る全員の思い。

だが、そう思っても身体は思うように動かない。

その事に絶望を感じ深く沈み込みそうになった時。

「――!? 何かが来る!?!」

「えっ?!」

天龍がこちらに急速接近する何かを感じ取った。

そしてそれは。

「おつまたせー! 艦隊のアイドル、那珂ちゃんだよー!!」

「那珂!?!」

ポニーテール姿の第三艦隊を引き連れる、旗艦アイドルの姿。

「それじゃ、皆! お願いねっ!」

「了解っ!!」

那珂の指示に従い、六駆の全員が手にしていたドラム缶の中身を躊躇なく龍田、時雨、夕立にぶっつけた。

「こ、これは?」

「えっとー那珂ちゃんよくわからないんだけどー……高速修復材?」

「っていうんだって!」

高速修復材。

それは艦娘の傷を瞬時に癒やすだけではなく、疲労も抜き去る魔法の液体。

初めて使用された夕立、時雨、龍田の顔に驚きの表情が浮かべられる中。天龍は海上に立つ六駆へと驚きの表情を浮かべていた。

「お前達……」

「そんなんじや駄目よ! 今は早く救援に行くのよっ!」

言葉をかけようとする天龍を遮ったのは雷。

「そうよっ! 皆は私と違って一人前のレディなんだからっ!」

「うん。早く行かないと……手遅れになる前に」

それに続いた暁と響。

「……これ、最後の一つなのです。大淀さんに……お願いするのです」

最後に電が天龍へと中身の入ったドラム缶を差し出した。

よく見れば、那珂を除く全員の足が震えている。

まだ海への恐怖を拭い去れないままにここまで来たことが伺えた。

「絶対……絶対助けて欲しいのです。もう、私は……誰かが傷つく所を見たくないのです」

それは一体何に対しての涙か。

震える手で手渡されたドラム缶を受け取り、7.7mm機銃のかわりに装備する天龍。

装備したのはドラム缶。だが。

「……まっかせとけっ！ お前らの思い……しっかりこの天龍様が受け取ったっ!!」

「……もう、天龍ちゃんだけじゃないでしょく？」

「うん。僕だってちゃんと受け取ったよ」

「夕立もっ！ ちゃんと受け取ったっぽい！」

そう言っつて再び走り出した第一艦隊。その足取りは先程とは全く違い、力に満ちている。

その姿が見えなくなるまで、第三艦隊は見送った。

「……皆、大丈夫？」

「も、もちろん……あ、あれれ？」

腰に手を当てる胸を張ろうとした暁の膝からかくんと力が抜け、海上に座り込んでしまう。

見れば暁だけではなく、那珂以外の全員が座り込んでしまっていた。

「あらら。もう初出撃ライブに緊張するのはわかるけどー」

「こ、こんなんじゃないだめね……うう」

「情けない……」

「し、仕方ないのですっ！ だつて……！」

六駆の言葉を那珂はくすくすと笑いながら聞く。

わいわいと言葉を囁す皆の姿に喜びを覚えながら。

——提督が見たら喜ぶだろうな。

そう思う。

その光景を十分に堪能した那珂は。

「うん、よく頑張ったね」

「……うん」

声をかけながら一人ずつに手を差し伸べて海へと立たせる。

「……那珂ちゃんのおかげなのです」

「えー？ 那珂ちゃん何もしてないよー？」

ニコニコと笑う那珂の手を握り、立ち上がる電は言う。

「差し伸べられた手を取る勇氣……この手のおかげなのです。私達が立ち上がる事が出来たのは」

「そっかー！ なら良かったですっ！」

笑顔をより一層深めながら那珂は言う。

「でもね、まだ私達の出番は終わってないよー！」

「え？」

その言葉に戸惑う六駆。

それに対して初めて那珂は笑顔に悪戯を含めた。

「帰^アる^ンま^コで^ルが^コ出^ル撃^ダだよっ！ それと、ね」

——帰ったら提督の手も、取ってあげてね？

続く言葉に、六駆は深く頷いた。

ポニーテールを結わう髪ゴムに添えられたカランコエの蕾を撫でながら。

——もしも私達が独立した動きをしてもその役目を果たせていた^ら。

弾着による波飛沫をかき分け、爆雷撃の矢を抜ける。

そんな中鳳翔が考えたのはそんな事。

第一艦隊の戦法が通じた様に又、鳳翔自身も第二艦隊の戦法が第一艦隊に通じた事に自信を覚えていた。

内心、あの海域を攻略するような艦隊という情報もあり、自分達のを過小評価していた節があったからこそ余計に。

だからこそ自分達はこれで良いんだとも思っていた。

提督の訓練で確かに能力の底上げは実感できた、だがそれでも艦隊

運用自体に間違いはなかったとも。

だがこの場面においては、それが求められていた。

「ううっ!!」

「古鷹さんっ!?!」

古鷹、大破。

度重なる渦潮奥から飛んでくる戦艦ル級の砲撃。大淀を庇いながら動く古鷹に限界が来た。

「うわあ!?! くっそう……!!」

「加古さんっ!?!」

加古、中破。

空母以外の相手を一人でなんて出来ない。得意の砲撃精度でごまかしながら戦うも古鷹のフォローが無い為限界がある。

「きやあっ!?!」

「鳳翔さんっ!!」

そして鳳翔もまた。大破。

艦載機数の劣る軽空母が正規空母の相手をし続ける事なんて不可能。

それでもここまで粘り強く相對出来たのはまさしく鳳翔だからこそだろう。

——だけど、もしも自分達が第一艦隊の様な動きが出来ていたら。

こういった窮地からさえか細い一つの光明すらもたぐり寄せていたのではないだろうか。

そう思ってしまう。

「……任務、失敗。ですか」

ちらりと気を失ったままの大淀に視線を向ける。

大淀を責めるつもりは欠片もない。

あの鎮守府に集まった艦娘だ、当然何かがあつた。もしくは何かがあるとは分かつていた事だから。

提督自身、第二艦隊へと大淀が組み込まれる際、鳳翔へとよく見ておいてやってくれと頼んでいた。

事実、この海域へ来た時も鳳翔はその事を忘れずに注意していたは

ずだ。

——甘かった。

あの場で引き返しておけばよかった。鳳翔はそう後悔する。あの時いざとなったら私が。等と考えるべきではなかった。

「鳳翔さん……」

「はい……ですが、私は幸せです」

最後に、心からこの人の下で働きたいと思うことが出来て。

「あたしも」

「私もです」

「ええ、最後に任務失敗で終わってしまう事が心残りですが、あの方ならきつと……」

私達の屍を乗り越えてこの国を、艦娘を救ってくれるでしょう。

そうして、三人が思い思いに目を閉じた。

——その時。

「全艦一斉射っ！」

大きな砲撃音が響いた。

そしてその音は深海棲艦から立ち昇る。

「艦隊を二つに分ける！ 龍田っ！ 夕立と一緒にあの深海棲艦共のケツに砲雷撃をぶちかましてやれっ！ 時雨はオレと一緒に第二艦隊の下へっ！」

「了解っぽい！ 夕立っ！！ 突撃するっぽい！！」

「任せて〜！ 死にたい船は……うふふ、沢山いるね〜？」

「絶対……助けるからっ！ 待ってて！」

第二艦隊全員の目が大きく開かれる。眼の前の光景が信じられない。

敵艦隊にとっては完全な奇襲。第一艦隊の一斉射で敵空母が沈んだ。

敵艦隊に走る一瞬の動揺。

第二艦隊にトドメをさすべきか、反転すべきか。

だがその動揺を解決出来ること無く。

「あはは！ 砲雷撃戦、始めるねっ!？」

「選り取り見取りっぽいっ!」

龍田と夕立が突貫し、混戦状態へと雪崩込んだ。

深海棲艦が対応すべきと判断がつくまでに駆逐口級エリートが二隻沈み、軽巡ホ級エリート二隻と龍田、夕立。二対二の構図となる。

その戦鬪を横目に全速で第二艦隊と合流する時雨と天龍。

「無事で良かったぜ……危ないっ!!」

渦潮越しに飛んでくる戦艦ル級の砲撃から古鷹と大淀を天龍は身を挺して庇う。

至近弾。

天龍が小破するも、古鷹と大淀は無事。

「……どうして……?」

「んだよ? 提督が……オレ達が見捨てるとでも思ったか?」

時雨の肩を借りて鳳翔がその下へと合流、加古も遅れてやってきた。鳳翔の目には驚きと困惑が浮かんでいる。

「戦力の逐次投入がどれほど危険な事か……っ!」

「んなもん知らねえよ、鳳翔さん。オレは生憎と頭がわりいんだ」

カラカラと小破姿にも関わらず笑う天龍。

その様子に鳳翔は表情を歪める。

「しかも私達を救出目的だなんてっ! 私達を囷にするならまだしも、どうかしています! 提督は一体何を——」

「だったらよ」

——ここであいつも倒せば良いんだろ?

そう言葉が続けながら、天龍はドラム缶をひっくり返し大淀に高速修復材をかける。

「っ!」

「よお。目え醒めたか?」

「て、天龍……さん?」

鳳翔や古鷹、加古が目を丸くする中大淀の意識が回復する。

ちゃんと回復した事に内心ほっと一安心すると共に、天龍は言葉を続けた。

「わりいが出番だ。大淀、偵察機……あそこに向かって飛ばしてくれ

や」

「えっ?」

「古鷹、加古。二人は偵察機の情報を頼りにあいつに照準を合わせろ」
「照準って……ま、まさか?」

——弾着観測射撃だ。

天龍の言葉にその場にいた時雨を除く全員が言葉を失った。

弾着観測射撃。

本来であれば、一人で偵察機を飛ばし敵へと砲撃。その弾着点を観測し次の砲撃を修正、精度を高める攻撃方法。

それを天龍はこの場の全員でやると言っている。

「む、無茶です! 古鷹さんは大破! 加古さんも中破してますっ

……私だって……!」

「ならここで仲良く皆で沈むか? オレはゴメンだぜ? 提督が帰りを待ってるからな。それに……時雨」

「うん」

鳳翔を支えるのをやめて、古鷹の身体を支える時雨。鳳翔はその場に腰を落とす。

それに続き、天龍は加古の身体を支えた。

「二人は照準を合わせて引き金を引くことだけ考えればいい。それまで俺達が支える、敵の砲撃から守ってやる」

「安心してよ。かすり傷一つつけさせないから」

天龍、時雨の雰囲気生唾を飲み込む古鷹と加古。その様子に言葉を失ったままの鳳翔。

「敵空母は撃沈した。なら制空権は関係ない。後は……大淀、お前の偵察情報次第だ」

「で、ですがっ! 私なんかじゃ……!」

大淀は覚えている。

勇み足、功を焦った自分のせいで敵の罠にかかり第二艦隊壊滅の危機へと陥れてしまった事を。

そんな自分がここに来て何故か回復し、戦況を決める重要な場面の鍵を握ってしまった。訳もわからないままに。

戸惑い俯く大淀。頭に駆け巡るのはそんな事自分には出来るはずがないという思い。

その大淀を。

「グダグダ考えてんじやねえ！ 大淀っ！ 出来るか出来ないかじゃねえっ！ やるかやらないかだっ!!」

「っ!!」

「信じてやれっ！ オレや提督、皆が信じたお前をっ！ 他ならぬお前がまずは信じてやれっ!!」

天龍が一喝した。

それは天龍がずっと大淀に対して思っていた物で。

自分を信じてやれないやつがどうして信頼されようかと。

だがそれでも提督は大淀を信じていると言っていた。ならば天龍自身も大淀を心の底から信じてやると決めていた。

そしてその信じている者が情けない顔をしている。

それが天龍にはどうしても我慢できなかった。

「——偵察機、発艦準備」

「よしっ!!」

「私の合図に合わせてくださいっ！ まずは加古さん！ あなたの勘、頼りにしています！ それに古鷹さんは続いて下さいっ！ いつもどおりですっ！」

「——了解っ!!」

その言葉を天龍への返事の代わりとした。

古鷹と加古は天龍、時雨に身を預け照準に全ての神経を注ぐ。流れる空気に鳳翔が唾を飲む。

「距離、約二二八……観測地点到着まで三、二、一……今っ!!」

「砲撃を集中だ、いっけえー!!」

「——至近弾っ！」

「主砲狙って、そう……撃てえー!!」

大淀の合図に合わせて身体に鞭を打ち引き金を引く古鷹と加古。

そして放たれた砲撃は——

「夾叉!! 戦艦ル級の小破を確認っ！ 次発装填、急いでくださいっ

！」

僅かに戦艦ル級を挟むように逸れ、直撃とはならなかった。

「偵察機、折り返して再び観測地点に向かいます——っ!」

偵察機越しの視界に映ったのは戦艦ル級が足を止めて、こちらに照準を合わせる姿。

その角度、体勢から密集しているこちらに寸分違わない砲撃が飛んでくる事が予想された。

同じく天龍もその事を感じ取った。

間違いなくここに砲撃が飛んでくる。そして天龍や時雨、大淀はともかくも損傷している艦娘は絶対に沈むと。

それが分かっても、今装填を急ぐ加古や古鷹の支えを止める訳にはいかない。

——あいつは今足を止めている。ならこれは最大の危機であつて好機。

どうするか。

その判断が天龍を急かす。

だがその判断が付く前に。

戦艦ル級の砲撃音が響いた——

「ちいっ……!! って!?! ありえねえ……」

「すごい……」

——大淀の砲撃音と共に。

そしてすぐやってきた二つの砲弾がぶつかり爆発する音。

「計算……通りです」

戦艦ル級の砲塔角度、放たれる砲弾の速度。そして自身が放つ砲弾の速度。射撃の精度。それらを全て計算した上でその弾と弾を海上でぶつけ合い、爆発させる。

大淀は、偵察機の視界を自身に重ねたまま神業とも言える事をやってのけた。

「装填は!?!」

「か、完了ですっ!」

「お、同じくっ!」

「では、再度私の合図に合わせて下さい！ 相手の足は止まっていますっ！ 距離修正はいりません！ 同地点を狙って下さいっ！」

自分が行った事を露程にも気にかけて、指示を飛ばす大淀。変わらぬ視界は偵察機のもの。

もしもこの時自分の目でこの場に居る者の顔を見ることが出来たなら、間違いなく大淀の先程までの悩みは吹き飛んでいただろう。

驚愕や敬畏。そして、頼もしきと信頼。

それら全てが大淀に注がれていたのだから。

「……大丈夫だ、お前らだつて負けてねえ。なんてつたつてこの天龍様が懂れて追い求めた奴らなんだからよ」

「天龍さん……」

「うん……」

思わず集中を欠いた二人に天龍はそう声をかける。

かつて自分がこれくらい出来れば……そう思っていたことを伝える。

「だからよ、特等席こで見せてくれ。お前らの砲撃武器を」

そしてその言葉で二人は再び集中することが出来た。

——見せてみせる。

かつてあの提督には認められなかった自分達。

それがここに来てから嘘のように求められ、認められている。

そして、それに応えたい。

その思いが二人の身体を天龍、時雨と共に支えた。

「観測地点まで三……二……一……今っ！」

「ブツ飛ばすッ！」

「……直撃っ！ 古鷹さんっ!!」

「いっけえっ!!」

加古の砲撃が直撃、間をおかず——古鷹の砲撃も直撃した。

「弾、直撃確認っ！ ……戦艦ル級沈黙っ！ 撃沈ですっ！」

その大淀の言葉に。

「やった……やったあああああ!!」

砲撃音よりも大きな鬨の声が響き渡った。

艦隊が帰投したようです

波止場から第三艦隊を送り出した俺はそのままその場所で皆の帰りを待っている。

足を震わせながらも気丈に出撃して行った第三艦隊の姿に涙が出そうになるのをぐっと堪えたまま。

今もなお虚勢を張り続けこの場で待っている。

そうしてどれ位の時間が経ったか。そんな俺の肩に羅針盤妖精がふわりと座ってきた。

「怖い?」

「……いつかも聞かれたな? 怖いさ、同じだよ」

ああ、怖い。

今度こそ誰かを失ってしまうかもしれない。その事が痛みとなつて俺の胸を突いている。

だけどそれでも。

「お前が言ったんだろう? 狼狽えるな、焦るな、虚勢を張れつて……全く、無茶な注文だよ」

「ふふ。でもそうね、いい顔をしているわ」

馬鹿言っちゃいけないよ。俺の内心を知ってるやつがそんな事を言つてんじゃないやねえ。

内心、か。

「なあ? お前は……いや、妖精って一体何なんだ?」

「何よ? 藪から棒に」

さっきの事といい、今のこいつの雰囲気といい。いつも間の抜けたような喋り方をする妖精とは何処か違う。

いや、もしかしたらこいつだけじゃない。他の妖精だってこんな風に豹変するのかもしれない。

「ずっと……つて訳じゃねえんだ。ただそういうものだって思ってた。でもこうして妖精を目的の当たりお前達にして、接して……余計にわからなくなつた。これじゃあまるで——」

「艦娘の様だ?」

「……ああ」

それもよく知る艦娘。

提督^俺の事を司令官と呼び、試すような奮い立たせるようなそんな言葉をかけてくる……叢雲という艦娘。

もしかしたら妖精って存在は——

「そうね、ここでおしゃべりをしていても良いんだけど……第三艦隊が帰投したみたいよ?」

「っ! 本当か!?!」

海を見る。

すると遠くの方に見える艦娘の様な姿が微かに見えた。

「漁船、用意できてるわよ?」

「……すぐに出るぞっ!!」

何処か後ろ髪引かれる思い。

だけどそれはあいつらが無事に帰ってきた事程大事ではなくて。

「……安心しなさいな。いずれアンタなら知る時が来るわ」

俺の耳元でそつと、そう呟いてくれて。俺は不思議とすんなり疑問を胸に仕舞うことが出来た。

「おつしごとしゆうりようっ! お疲れ様っ! 提督っ、第三艦隊帰投しましたっ!」

「ああ! ありがとう! お疲れ様っ!」

海上で良い笑顔を浮かべながら敬礼をしてくる那珂の手を取り漁船へ引き上げる。そして労いの言葉をかけながら答礼。

「大丈夫だったか?」

「んふふー。それは皆に聞いてあげて欲しいなっ!」

そ、そうだなっ!

で、でもあれなんだよ。ちよつと六駆の皆に気後れが……いや、んな事言っつてどうすんだ。それこそ狼狽えるな、だ。

「か、帰ってきたわ……と、当然よ」

「ああ、立派なレディの暁なら当然だ」

そう言っつて手を差し伸べる。

俺の手を見て一瞬身を竦める暁の足は震えていて、今も恐怖と戦っているであろうことが伺える。

それでも。

「うんっ！」

足とは違つて震えずに手を握つてくれる。

そうして船の上で初めての礼を交わし合った。

「なによもう、雷は大丈夫なんだからー！」

「そうか、そりゃ失礼したな？」

足を震わせながらそんな事言われてもなあ？ 思わず苦笑いしてしまう。

そんな俺に頬を膨らませながらも……自ら引き上げてと手を差し出してきた雷。

嬉しい気持ちを堪えることが出来ず、苦笑いを笑顔に変えてその手を掴む。

「ねえ、司令官」

「なんだ？」

そうして船の上、雷は。

「これからは……もーっと私に頼っていいのよ！」

「……ああ！ 頼りにしているぜ？」

満面の笑みでそう言ってくれた。

「……司令官」

「おう、待たせたな？ さあ、手を……」

響に手を伸ばしてみれば、小さく頷きしつかりと手を握つてくれる。

「これも、思い出？」

「ああ、ちっせえ思い出だけど……悪くないだろう？」

船の上でそう言ってみれば、響は胸に手を当てて。

「そうだね。うん。本当に……悪くないね」

「……これから、沢山作ろうな？」

少し恐る恐る言ってしまった。

だけどそんな俺が可笑しかったのか。

「うん」

随分と綺麗な笑顔で頷いてくれた。

「で、だ」

「……何なのです？」

海面をジャンプして何とか自力で船の上に乗り返もうとしている電さん。

「キミは何をしているのかね？」

「う、うるさいのですっ！ 私は自分で登れるのですっ！ 司令官の手なんか要らないのですっ！」

そう言い放って必死な形相を浮かべながら跳び続ける電。

だが、残念。背が足りない。

届かない事を認めたのか恨めしそうな顔で俺を見上げる電さん。かわいい。

「……ほら」

「う、う〜！」

差し伸ばした手を睨んだ後ふと違う方向へと目を逸し、やがて諦めたように。

「ちや、ちゃんとしっかり握って欲しいのです」

「わかってるって。落としたりなんかしねえよ」

俺の手を握ってくれた。

「けど、勢いがつきすぎたのか。」

「きやつ!?!」

「うわっと」

引き上げると同時に電が俺の胸に収まってしまい抱きつかれる形に。

その事を理解した電は。

「は、は……離れるのですー！ー！ー!!」

「うわちよ!?! しゅ、主砲はやめろって!?!」

俺に主砲を突きつけ、顔を真赤にしながら凄いい勢いで後退っていった。

「ふー！ー！ー！ ふー！ー！ー!?!」

「どうどうどう……落ち着け電、今のは事故だ事故」

猫みたいに威嚇してくる電を落ち着かせようと試みるも中々落ち着いてくれない。

そんな俺達をケラケラ笑いながら那珂ちゃん。

「ほらほら。そうやっていちやつくのも良いけどーまだ皆帰ってきてないんだからねっ!」

「そ、その通りだ。まだまだ気は抜けないんだ。か、各艦気を抜かないようにっ!」

そう言ってみれば半目で白けたような視線を向けてくる第三艦隊。何故にホワイ。

「はいはーいっ! 皆改めて警戒態勢を取っちゃうよー!」

「!了解っ!!」

「……あつるえー?」

何で皆那珂ちゃんに格好いい敬礼向けちゃってるのかなー。

頭にきました、那珂ちゃんのアラン辞めます。

……ともあれ。

「こっちは大丈夫だった……無事に帰ってきてくれよ……!」

無事を祈らずにはいられない。後は第一艦隊と第二艦隊の皆を待つだけだ。

「……よく、無事に帰ってきてくれた」

第三艦隊を船に迎えてしばらく。夕日が沈む頃に第一、第二艦隊も迎えることが出来た。

そう、誰一人沈むこと無く。今は鎮守府へと急いで漁船で向かっている。

第一艦隊の損傷は軽微。天龍と龍田が小破、夕立が中破しているが問題はなさそうだ。

まだまだいけるからと、道中の警備をしてきている。

第二艦隊はかなり酷い。

鳳翔、古鷹はボロボロ。傷がない所を探すほうが難しい状態で、加古もまたそれに近い。

大淀はどうやら無事に高速修復材が間に合ったらしく無傷。一安心ではある……が。

「も、申し訳……っ！」

「良いんだ」

何かを言おうとした大淀を抱きしめる。

「何があつたのかは後で聞く……そして話をしよう。だから今はお前達が無事に帰ってきてくれた喜びだけを感じさせてくれ」

「てい、とく……」

大淀の体温をしっかりと感じた後、横たわらせた鳳翔と古鷹に近づく。

「提督……？ 申し訳ありません、私が至らなかつたばかりに」

「何言つてんだよ、ちゃんと一番大事な任務は鳳翔のおかげで遂行してもらえた……こんな時は誇つてくれ。俺の無茶な要求に応えられたことを」

鳳翔の頭を撫でる。

「……そう、ですね。本当に……大変な任務でした……」

「ああ、酷い提督だろう？」

「ふふふ……はい、貴方は……とても厳しい提督です」

そう言つて鳳翔は目を閉じた。すぐに聞こえる静かな寝息。ようやく安心出来たのだろう。

「古鷹」

「提督、ごめんなさい。こんな格好で」

鳳翔と同じく申し訳無さそうな表情を浮かべている古鷹。それでも何とか敬礼を取ろうと手を震わせる。

その震える手を。

「いや……古鷹？ すまん」

「え？ ……あ」

優しく握った。

恐怖症だと分かっている。だけどそれでも、この手が死地を切り拓いてくれたんだと思うと。

「ありがとう。言葉だけじゃどうにも伝えきれないんだ」

「……ふふ、大丈夫です提督。怖がる力……残ってないみたい。しつかり、伝わって来ます」

俺の手を古鷹は大事そうに、嬉しそうに両手で包み込む。

初めて触ることが出来た古鷹の手はとても温かい。

「だから提督？　気持ち悪く無ければ、ですけど……」

「帰るまでずっと握ってるから」

「……はい」

にっこりと笑ってくれて古鷹もまた目を閉じた。

「あーあー。美味しい所取られちゃったかなー？」

「……加古」

酷い損傷には変わりないはず。それにも関わらず加古は笑っておどける。

「ここは古鷹に譲るからさー……提督？」

「うん？」

「この傷が治ったらさ、一杯付き合ってね？」

指でお猪口を作り、くいつと飲む仕草。

「……アテはチャーハンで良いか？」

「お!!　ラッキー!!　いいねえいいねえ!!　約束だよー?」

言いながら俺達に近づいてくる加古。

そしてその場に座り、俺と古鷹の手に自分の手を重ねた。

「……ホントはさ、あそこであたしも皆も沈む事を覚悟してたんだー」

「……うん」

「鳳翔さんが言ってた。提督の為に戦って沈めるなら悔いは無いって。あたしもそう思った……だけだよ」

少しの間。

重なり合った手に向けられて居た視線はその間の後、俺へと向けられ。

「次からは悔いが残っちゃいそうだから。もう、提督の為に沈むなんて思わない。提督と……自分の為に絶対帰ってきてやるって思うよ」

「……ああ。そんなの、当たり前だぞ?」

「へへっ!　そうだよね!　なんかさ、言っておかないといけないっ

て思っちゃってねー！」

照れくさそうに鼻を空いている手で搔く加古。

何よりの言葉を貰った。

そう、俺の為に沈むなんて思わないで欲しい。

——ああ、そうか。

もしも、俺があの時妖精の制止を振り切って海に出たら。

皆もこんな気持ちになっていたのか。

「……ありがとう、加古」

「いいよいいよ！ あたしこそありがとうね！」

そしてそのまま俺の耳元に口を寄せて。

「……大淀、大破する前にさ。捨てられたくないって言ってた。多分、

それで焦っちゃったんじゃないかな？」

「……そっか」

言い終われば俺から離れ、再び古鷹へと視線を向ける加古。

当然だけどやっぱり疲れていたんだろう、古鷹の眠りに誘われるよ

うに船を漕ぎ出す。

捨てられる、か。

ふと大淀の方へと視線を向けてみれば、俺の視線にびくりと肩を震

わせる大淀。

そうか。

やっぱりうちの鎮守府はそういう所だったんだ。

だけど。

「そんなの、認めない」

認める訳にはいかない。

俺の鎮守府は鎮守府だから。

そんな艦娘を捨てる場所であつてはならない。

笑顔が溢れる幸せな場所なんだから。

なあ、大淀。捨てられる事の恐怖もわかるし、拾ってくれた

相手の役に立とうと懸命になる気持ちもわかる。

俺がかつて抱いた思いと似た思いを抱く大淀。

だからこそわかる。俺にしか言えないことがある。

提督としても、俺としても。

大淀が提督とお話するようです

結局の所私はただ怯えていただけだった。

——今度はもう捨てられることすら無くなってしまいますよ？

何処か遠くに聞こえていた天龍さんの声と共に聞こえたその言葉は誰の物か。

でもその時の私はそれすら気にならず、ただその言葉に怯えた。

——そしてあなたは提督に……彼女達を捨てさせるのですか？

それがトドメだった。

気づけば偵察機を発艦していた。無我夢中だった。はつきり言つてあの時の事は今でも現実感を持ってない。ただそれでも。

私のせいで皆を失わせる。

私が皆を沈めてしまう。

その事が改めてわかった時、恐怖……怯え以上のものを感じた。自分を信じられるかなんて無理に決まっている。

だけ。

やるか、やらないか。

そんな単純な二択を前にしてようやく私は動くことが出来たんだ。海で提督に迎えられて、鎮守府に皆で戻ってくる事が出来て。

その事が信じられなかった。夢かと思った。

目の前の光景が信じられなくて、抱きしめられて感じた事実も体温も信じられなくて。

もう訳が分からなかった。だからあの時もやっぱり怯えていた。

そうして今、私は目の前のドアをノックしている。

「……あ、提督は居ないのでした」

——執務室……は落ち着かねえか。隣にある俺の部屋、先に行つてくれないか？ 俺もすぐに行くから。

そう言つて部屋の鍵を渡された後、提督は慌ただしく第二艦隊の皆を連れて入渠ドックへ向かった。

そうだ。いくらなんでも浸りすぎでしょう、私。

いや、現実逃避なのかも知れない。

味方殺しは居ないほうがマシ。

私はそれに近い……いえ、多分それをしかけた。ならば私の行先も決まっているだろう。

解体。

そうだ、それで良い。

私もこんな私に悩むのに疲れた。

ここは墓場鎮守府。骨が残るのかわからないけど、埋めるには丁度いい場所だから。

頭に浮かんだそんな言葉を胸で噛み締めながら、鍵を開けて入室した。

「失礼、します」

——ああ、懐かしい。

諦観で埋め尽くしたはずの胸に去来したのは懐かしさ。

部屋は至ってシンプル。

沢山の本が埋まった本棚とその近くにあるテーブル。ただそれだけ。

それだけでも関わらず懐かしさを覚えたのは、テーブルの上に散らばった書類と本の山があったからだろう。

思わず、口元が緩む。

そうだ、懐かしい。かつて司令長官の下に居た時もこんな光景をよく見た。

あの人は、どうだっただろうか。

書類を睨みながら頭を掻いていたと思う。

その仕草は酷く子供っぽくて、思わず手伝いを申し出たっけ。

——ありがとう、助かるよ。

ああ、ああ。

そうだ、それも覚えている。あの人は申し訳なさそうに笑っていた。

それがいつからだろう。

常に整頓された机。私の手伝いを必要としなくなり、そんな笑顔も

見られなくなったのは。

やっぱり、私の事を役に立たないと見切ったからだろうか。

そんな事を考えながら、思わずテーブルの上へと乱雑に置かれている紙を手に取り——驚いた。

「これ、は？」

びっしりと詰まっている文字。

パソコンで打たれただろう文字に加えて手書きのものも所狭しと加えられている。

「……夕立。白露型駆逐艦4番艦……リンガエン湾上陸作戦、タラカ
ン上陸作戦……最後は第三次ソロモン海戦、鉄底海峡に沈没した……
これは艦歴？ いえ……これは」

続く文面には艦娘となり、ここに居る夕立さんの特徴が挙げられていた。

突撃しがちな夕立さんを活かし、生かす為にはどうすべきか。必要な訓練は？ 装備は？

そういった内容がびっしりと書かれている。

「ま、まさか」

慌てて違う紙を手取る。そこには天龍さん、時雨さん……この鎮守府に着任した艦娘の提督視点によるデータがびっしりと書かれている。

そして。

「わ、私のも……」

皆のと同じ様に、艦歴や装備についての考察……そして。

訓練の所には書いては二重線を引つ張り……沢山書かれた訓練方法。

「顔を突き合わせて……相談……」

最後に大きく丸で囲われていたのはそんな文字。

「てい、とく……」

まだ他のに比べて真新しい紙。出来上がってからそんなに時間は経っていないのがわかる。

それにも関わらず、これだけ考えていてくれた。

悩んでいてくれたんだ。私と、同じ様に。

どうしよう。どうしたらいいんだろう。

私は、今の感情に名前がつけられない。

知ろうとしてくれた、向き合おうとしてくれた。

それがこうして理解できて。

思考に逃げてばかりの私とは違って、提督は歩み寄ろうとしていた。

「……話さなきゃ」

そんな人から逃げちゃいけない。

空想に怯えて、自分で勝手に逃げていただけなんだ、私は。

向き合おう、話し合おう。

この気持ちに名前を付けるために。

解体されるのは、それからでいい。それ位なら、提督は許してくれるはずだ。

その後すぐに提督はやってきた。一時間以上はかかると思っていた私の予想を裏切り少し息を切らせながら。

テーブルの椅子に私が座り、提督はベッドに腰掛け。

少し悩んでいたように見える提督が口を開く前に、私が覚えている限りの戦闘内容を報告した。

いきなりとっていい私の報告に提督は少し驚いた様子だったが、それもすぐに収めてじっと耳を傾けてくれた。

やっぱり何処か怖いと思いつつもそれから逃げる様に私は言葉を続ける。

覚えていること。

順調に渦潮手前まで進軍できたこと。

そこから飛ばした偵察機に映った光景を見て、私が無理に強行進軍しようとしたこと。

そして渦潮に入ろうとした時、砲撃が直撃し……目を覚ましてみれば第一艦隊と連合し戦闘を行った事。

全部。

私が受けた言葉、思ったこと。
全てを話すことが出来たと思う。

「……そっか」

「はい、報告は以上です」

聞き終わった提督は静かに目を閉じた。報告を頭の中で整理しているのだろうか、腕を組んでじっと何かを考えている様だ。

静かに考え込む提督を尻目に、私の胸は早鐘を打つ。

どう思っただろうか。なんと言われるだろうか。

私自身報告しながらどれだけ自分が無様を晒したのかという事が分かったんだ。

客観的に考えることが出来るのであれば、その姿はどれ程のものか……想像したくない。

仲間殺し。

私はそれに近い……いや、まさにそれをしようとしたんだ。

無能どころじゃない、もはや罪と言ってもいい。

そんな存在はどれほど戦力が不足していようと、居ないほうがマシなのだから。

だから。

「……私は、解体ですね」

「……」

解体したほうが良い。いや、解体するべきだ。私ならそうする。

多分、司令長官もそう思っただろう。だから私をここに送った。

思い出せばここへ戦艦の長門さんや陸奥さんを送ろうと提言したこともそうだ。

そんな事をすれば資源の枯渇しているこの鎮守府はどうなる？

その戦力の真価を発揮する事無く無駄にその力を失っていただろう。

私は、あまりにも視野が狭い。

一つの事へ没頭し、何かを見落としてしまう。

そんな私は……居ないほうがマシなんだ。

「大淀は……どうしてそう思う？」

「だ、だって……！ 私は仲間を殺そうとしたんですっ！ しかもた

だ能力が足りなかった訳ではありませんっ！ 私は……私の事しか考えていなかったっ！ 捨てられたくないっ！ その為にどうすれば自分の有用性を示せるか、それだけを必死に考えていた様な艦娘ですよっ!!」

どうしても何も無いでしょう！

皆が必死に任務達成の為に働く中、私だけがそんな事を考えて集中を欠いていた！

あまつさえ、自分の思いに引き摺られて味方を巻き込んで……！

「やっと言ってくれたな」

「……え？」

そんな私を見て提督は安堵するように笑顔を浮かべていた。

やっと言ったって……私は、何を言っただろう。

「捨てられるって怖いよな？ 怯えちゃうよな？ 何としてでも回避したいよな？ その行為自体はもちろん。何より、普通が狂う事が怖い」

な、何をわかったような……っ！

「何を……っく！ 違うでしょう!! 貴方は提督です！ 艦娘を使う人間ですよ！ 理解を示そうとしないで下さいっ！ 貴方がすべきことはそうじゃない、私を切り捨てる決断をするべきですよっ！」

そうだ。理解しようとしてくれなくて良い。

声を荒げる私に向けて笑みを一つ。提督はその後、静かに瞑目して口を開く。

「沢山のお兄ちゃん、お姉ちゃん。弟に妹が居るから毎日幸せです」

「はい？」

「……よくあるだろう？ 授業参観に家族やら幸せやらをテーマにした作文を発表するの。その子はそんな内容の作文を朗らかに読み上げた」

授業参観？ 作文？

提督は何を話そうとしているんだろう？ 今、それを話す事に何か意味があるのだろうか。

でも……。

「他の子がまるで自分の親を自慢するかの様な内容の作文を読み上げ
ては、うらやましいなーなんて言葉達と共に拍手をされる中。その子
が読み終わった時に待っていたのは……同情の声だった」

「ど、同情？」

話始めた目の前に居るはずの提督が、一気に遠ざかった様な感覚を
覚えた。

「それに酷く困惑した。だってその子は自信満々だったんだ、その日
来られるはずの無い親が居なくとも作文を発表する事に何の躊躇い
も無かったし、その作文も揚々と書いていた。あまつさえ、どうだ羨
ましいだろう？　なんてすら思っていた。だからこそ自分を迎える
同情や励ましの言葉に困惑した」

「それは……何故、ですか？」

膝がテーブルにあたって、思わず無意識に距離を近づけようとして
いた事に気付く。

そんな私に向かって少し寂しそうな笑顔を向けてくれた後。

「知らなかったんだ。普通の幸せってヤツは当たり前のように両親が居
る事が前提だったのを。授業参観が終わった後、何か困ったことが
あったら何でも言ってくれ。なんて言っていた人もいたし……その
日から今まで以上に遊びに誘う子が増えた。それで知ったんだ、自分
の幸せは普通じゃないって」

「……」

「物心つく前から多くの血の繋がらない兄弟姉妹達と過ごして。培っ
て来た幸せってやつはどうにも普通じゃないらしく……かと言って
その子を育ててくれた職員の人に相談することも出来ない。そうし
て幸せは疑問に代わり、狂っていった。そう、その子は捨て子だった
からそんな当たり前がわからなかったんだ」

……怖い。

その子の事を何故か自分の事に感じることが出来た。

普通が、狂う。

それは何でだ？

いや、わかってる。

捨てられたから、だ。

「その子は……どうなったんですか？」

「……荒れたよ。もう元の元気で明るかった面影なんて見られなかった。自分の普通を守ろうと誰も寄せ付けなかった。友達だけじゃなく、兄弟姉妹達まで。……そうした時をずっと過ごしたその子に転機が訪れた」

転機。

字の如く、機が転ぶ事。

そうか、その子は……。

「里親になると言ってくれた人が現れた。……そうして、色々あって。その子は元の自分を取り戻したんだ、新しい普通と共に」

「新しい、普通……」

そう言った提督はずっと浮かべていた笑顔を清々しい笑顔に変えた。今ではもう、感じる事の出来る距離に狂いは無い。

新しい普通。

そうか、提督は。

「大淀」

「はい」

「俺はお前と……いや、お前達艦娘と家族になりたい」

思わず息が詰まった。

それは予想していた言葉とは全く違う物で。

新しい普通をくれる。なんて言ってくれると思っていた予想を完全に裏切った。

「そうして皆で作りたい。居心地の良い場所を、居たいと思える場所を。……まあ、俺の手によってなんて思ってた事もあったけど、皆が幸せだと思えるには俺の手だけじゃ足りないみたいで」

「……」

言葉が、出ない。

こんな言葉を向けてくる人が居るなんて思わなかった。

私達は……兵器だ。

そんなものと家族になりたいなんて言う人がいるわけがない。

「家族を捨てるなんて事はしたくない。失敗を皆で分かち合って支え合う家族になりたい。喧嘩しても良い、泣いても良い。最後に笑い合えたらそれで良い。そうして皆で普通を……幸せを創りたい。解体なんて悲しい事を言うな、俺には大淀が必要なんだから」

「てい、とく……」

ああ……この人は……少し手を震わせながら私に手を差し伸べるこの人は。

間違いなく何処か壊れている。私達艦娘が一人でも沈めば容易く塵になってしまうくらいには。

——この危うい人を支えたい。

ああ、そうなんだ。

私がこの人に対して思った最初の気持ちは、これなんだ。

私達……うん、ここに居る艦娘達が惹かれる訳だ。

彼は、心底艦娘を必要としている。

だから。

「今回の様に失敗してしまうかも知れませんか？」

「ならそれを支えて後で沢山叱ってやる」

「後ろ向きな事ばかり考えてしまいますよ？」

「なら俺が、俺達が前向きにしてやる」

「……私は、ここに居ても良いのですか？」

「居て欲しい」

向き合おう。

私の新しく初めての居場所^{家族}と。

手を取ろう。

私^{答え}がたどり着いた提督の。

「……提督」

「うん？」

「軽巡大淀、戦列に加わりましたっ！ 艦隊指揮、運営はどうぞお任せくださいっ！」

戦闘を振り返るようです

「ひゃあっ!?!」

「ちよっ!?! ちよっと待つのですっ!?!」

「あははっ! これで終わりっぽい!」

……六駆、あえなく全員撃沈判定。

那珂ちゃんが奮闘するけど……うん。

いやまあ、わかつてた事だけどまだまだ第三艦隊の練度は低い。

特に対多数戦に慣れている第一艦隊相手は荷が重すぎるんだけども……。

——じゃあ、夕立と龍田で相手してやればいいんじゃないかな。

第三艦隊の運用方法について天龍に相談してみればそんなアドバイス。第三艦隊は近距離海上走行練習の後に龍田、夕立相手に演習を行っている。

その結果はペイント塗れの第三艦隊。

そんな皆が帰ってきてみれば。

「提督さんっ! 夕立つ、今日も絶好調っぽい!」

「あ、あははく……でも良いのかしらく……」

ふんすっ! 褒めて褒めてと飛びついて来る夕立に何処か戸惑った表情を浮かべる龍田。

手加減は要らないと事前に伝えているので気に病まないで欲しいんだけど、まあなあ?

「ああ、お疲れ様。忙しい所すまんな?」

「ううん! 全然大丈夫っぽい!」

「うん。……それじゃあ、時雨ちゃんと合流してから哨戒に向かうね?」

一息入れてからで良いぞと声をかければ元気の良い返事の後戻って行く二人。

さして。

「こんなんじゃない……駄目ね……」

「一人前のレディは……遠いわ……」

ずーんと重たい空気漂う第三艦隊へと視線を向ける。

那珂ちゃんがわたたと皆を励まそうとしてるけど……あ、こっちに恨めしそうな顔を。可愛い。

「お疲れ様。どうだった？ 初めての演習は」

「お疲れ様も何も無いのですっ！ これはいじめなのですっ！」

「これも思い出だつて言うんなら、司令官は相当ないじめっ子だね」

いやあ、好きな子をいじめちゃうタイプだとは自覚してるけども。

まあそういう意図じゃないので勘弁して欲しい。

「ま、まあまあ。……えつとー提督？ とりあえずこんな感じだったけどー……いじめには満足した？」

「いじめじゃないってば。ちゃんと戦えたじゃねえか」

「那珂ちゃん、手も足も出なかった事を戦えたとは言わないと思うよっ！」

ぷんぷんと怒る那珂ちゃん。やっぱりかわいい。

何処か少し走行練習の時にあった怯え。足の震えとは違って演習では見られなかった。多分、怯えるよりも戸惑う気持ちの方が強かっただけかも知れないけど。

那珂ちゃんによる具体的な戦闘中の指揮はやっぱりまだまだ拙かったし、六駆の砲撃もあらぬ方向に飛んでいってしまうが。

「ちゃんと指示を出せし、砲撃も出来た。それで十分だよ」

「……うう」

未だ落ち込んでいる暁の頭を撫でる。

そう、まずは海に、戦場に慣れる事。

今の所……というか当面第三艦隊に戦闘での成果は望んでいない。って言えば怒られるかも知れないけど。

練度の向上と共に、第一、第二艦隊が出来ない事を出来るようになってもらいたいと考えている。

「甘やかしてるの？ 司令官、そんなんじや駄目よ。私達は早く強くなって皆と一緒に戦える様にならないと……」

「いやいやそんなんじや駄目だつて。甘やかしてる訳じゃないさ。同じ言葉になつてしまうけど、お前達にしか出来ないことがあつてそれ

をやってももらう為の準備だよ。そしてそれは間違いなく進んでいる。焦る気持ちはわかるけど、安心してくれ」

そう言ってから那珂ちゃんに目配せ。すると那珂ちゃんはため息を一つついた後。

「はいはい。意地悪な提督をいじめるのもこの辺にしてー、皆でペイント落としに行こっか!」

「はあいー!」

く、くそう。相変わらず那珂ちゃんには良い敬礼しおってからに!

妬ましい……妬ましいぞお!

羨ましいから那珂ちゃんのファンになって見習います。

「鳳翔、ただいま修復完了しました」

「うん、改めてお疲れ様。もう大丈夫か? ……早速で悪いんだけど」

鳳翔の修復完了にはかなりの時間を要した。第三艦隊に海上走行練習をしてもらったり出来るくらいには。つまり、それだけ練度が高いつて事なんだろう。

札を交わした後、鳳翔は作戦会議室に並んだ顔——天龍、大淀、那

珂を見渡した後小さく頷く。

「ええ、もちろん大丈夫ですよ」

「すまないな。本当は少し間を入れて皆に休憩して貰いたんだけど

——」

「いいえ、提督」

て。

「鎮守府こに居ること自体が何よりの休息ですから……安心して下さい」

「……ありがとう」

そう言ってくれた。もう感謝しか言えないな。

ここにこうして無事に戻ってきてくれた事を含めて、それ以外に言葉が思い浮かばない。

だけどその事を十分に喜んでいる場合でもない。

「……よし、それじゃあ先の戦闘に関しての会議をしよう」
「了解っ！」

全員が揃った敬礼を俺に向けた後、同時に着席。
そう。

あの戦いには疑問を感じる部分が多くある。それを解決しなければならぬ。

「まずはそうだな、渦潮の手前まで順調に進軍できた事……あれは鳳翔達の練度が高かったから安全に行けたという訳じゃないって話だけど……鳳翔、詳しく教えてくれ」

「はい。今にして冷静に考えればですが、あれは深海棲艦側の罠だと考えます。道中会敵した敵艦隊のレベルは間違いなく私達であつても多少損傷するはずの相手……いえ、しなければならぬと言っても良い相手でした」

確か重巡ネ級エリート一隻、軽巡へ級二隻、駆逐口級エリート三隻だったか。

正面海域を攻略した時も思ったけど……イベントかな？ 大規模作戦かな？

うん、そう思っても良い位の敵戦力だわな。

「それが無傷で目的地点まで辿り着けた。あれは私達をその場所に誘い込んでいたのだと思います」

「戦力を犠牲にしてか？ ……それだけの為に沈めさせるってのは何とも嫌な話だな」

鳳翔の言葉に天龍が顔を顰める。

そうだな、目的の為に犠牲を容認する。形は少し違うけどまるで捨て艦戦法と言っても良い作戦だ。自分達に照らし合わせてしまうと確かに気分は良くない。

「そこからは私が」

「……大淀さん」

言葉が続けようとした鳳翔を遮ったのは大淀。

少し驚いた顔を鳳翔は大淀に向けるが、その表情に対して笑顔を向ける大淀。

ふっと鳳翔は瞑目した後、俺に本当に嬉しそうな笑顔を向けてくれた。

——ありがとうございます。

そう言ってくれているかの様。

よせやい、照れるぜ。

「渦潮前まで辿り着いた私達は予定通り偵察機を飛ばしました。そして、渦潮の向こうにあった光景は戦艦ル級一隻という物。私は……」
「……うん」

大淀は一瞬後悔にも似た表情を浮かべるけど、それも一瞬で。

「戦艦ル級一隻である訳が無い、ならばより詳細な観測を。そして……どういった理由があるにせよ戦艦ル級に敵戦力が合流するには時間を要するはずだ、今が叩く好機である。戦果を挙げようと焦っていた私は渦潮を渡航しようとし……敵の罠を成功させてしまいました」

「……私達の側面、渦潮を回り込んで来た敵艦隊。恐らく元はル級の随伴艦だったのでしよう、敵機動部隊による強襲で大淀さんは大破。大淀さんを止めようと隊列を崩していた私達は背後を取られ、ル級と挟まれた形になってしまいました」

大淀の説明に鳳翔が続いた。
なるほど、な。

大淀が何をしてしまったのかという事は本人から聞いている。あの時何があったのかは、これで理解できた。

「敵の罠、か。纏めると、敵は渦潮前をキルゾーンと定め誘導し、第二艦隊を撃破するという作戦を立てて……それに嵌った形ということか」

「だろうな。しかも後顧の憂いをも対処してた。その事を鳳翔さんが無線で提督に伝えたと同時に、援軍に向かうことが可能である第一艦隊への襲撃……偶然で片付けるってのは無理があるわな」

確かにタイミングが良すぎた。

天龍の言う通り、援軍を潰す。あるいは、向かうことを許しても損傷させて力を存分に出せないようにすることが目的だろうか。

どういった意図があるにしても、深海棲艦側は一つの海域だけに留まらず広域に渡って管制を敷いている事が予想できる。

正直、艦これだけでは及ばない部分。俺はまだまだ勉強しなければならぬ事が多いみたいだ。

「そこで第三艦隊、だな」

「うん。私達は妖精さんが急ピッチで作ってくれた高速修復材をドラム缶に詰めて出撃。輸送作戦ってやつだねっ！ 無事に達成できてよかったよー！」

ニコニコと自分達の成果を誇る様に那珂ちゃんは言う。

そんな那珂ちゃんに優しい笑みを向ける皆。

まあ、おかげで高速修復材の材料であるボーキサイトは……まあたすつからかんで。

鳳翔の修復は出来るも艦載機の補充が進まなくて。

——提督？ いえ、知らない子ですね。

——頭にきました。

なんて言われたのもいい思い出……に、したいなあ……。

「しっかし良く出撃できたな？」

「ふっふー！ 那珂ちゃんと提督が頑張りましたっ！」

あ、ドヤ顔。まあ俺も頑張ったって思ってくれてるみたいだしいいか。

あ、天龍さんなんですか？ そのまったくおまえってやつはって顔は。

良いじゃないですか、ちゃんと皆出撃出来ましたよ？ 無事ですよ？ 褒めて褒めてー。

「ふう……ともあれ、襲撃してきた敵艦隊の狙いは撃沈ではなく疲労。あわよくば損傷させてやろうって感じだったらしいから。オレが第一艦隊へ合流した後は第三艦隊が運んでくれた高速修復材が無ければやばかった。全然思ったように走る事が出来なかったからな」

「えへへー」

「ああ、那珂も提督も六駆の皆をしっかり褒めてやってくれよ？ おかげで危機一髪第二艦隊を救援出来たんだから」

ああ、もちろんだ。

でもね？ 何か皆ね？ 僕には敬礼してくれないの。何でだろうね……。電に至っては会う度に砲塔向けられちゃうよ？ 何故にホワイ……。

「はい、古鷹さんと私が大破、加古さんも中破。意識が戻らない大淀さんも含めて……沈む事を覚悟したその瞬間でした、皆さんが到着してくれたのは」

「ああ。辿り着いた時直ぐ様敵空母を一斉射撃で撃沈、その後は指示通り大淀に高速修復材をぶっかけて大淀と古鷹、加古の協力弾着観測射撃で戦艦ル級を撃沈。夕立、龍田も残りの敵戦力を撃沈することが出来ただけど……」

弾着観測射撃を皆でしたのか。ありや一人でやるもんだと思っただけど……すげえな。

詳しいやり方とかはわからねえけど凄いのわかる。一人でやることを皆でするって難しさは良くわかるから。

しかし歯切れが悪いな。

「天龍？ どうした？ 何か疑問があるのか？」

「いや……第二艦隊の下へ向かう道中に会敵することが無かったんだよ。ほんと今にして思えばだけどき、第一艦隊の足止めを考えつく様な相手だ。なら二の矢があっても不思議じゃねえだろ？ それが気になってな」

確かに。

鳳翔もその言葉を聞いてはつとした後考え込んでいるようだ。

単純にタイミングが噛み合ったという訳ではなく、相手の狙い、作戦だというのならばそれはあっても不思議ではない。

そこまで運良く、都合よく事が運ぶのだろうか。

「大淀、どう思う？」

「……そうですね。私達が渦潮前までに会敵したのは二回。それまでに何度も偵察機は発艦していて、会敵を回避もしています。その敵が救援に来た第一艦隊と会敵する可能性はあって然るべきですが……」

皆して頭を抱える。

そんな中。

「あえて戦わなかったんじゃないかなっ！」

「あえて、戦わない？」

那珂ちゃんが元氣よく発言した。

いや、あえて戦わないって。

「その理由はなんででしょうか？」

「わかりませんっ！」

皆盛大に椅子から落ちた。痛い。

「こ、このやろっ！」

「わ、わー!! 暴力反対っ! 顔はやめてー! アイドルに手を出し

ちゃダメなんだよー!」

天龍が那珂ちゃんに襲いかかった。いや、まあじやれてるのかね。

しっかしあえて戦わなかった……か。

椅子に座り直しながら少し考える。

「鳳翔、もしもあえて戦わないって理由があるとなれば何が考えられる？」

「……そうですね。まずは戦力の温存が考えられますが……結局海域を奪われたのであれば意味は無いでしょうし……。他に考えられる事は……戦わないのではなく、戦えなかった……？」

きやーきやー声上がる中考える。

鳳翔の言う通り深海棲艦側からすれば結局海域を奪われるなら戦力を温存する理由は無い。むしろ総戦力で迎え撃つべきだろう。

そして戦えなかった、か。

その可能性はありそうだけど……どういった理由で？

あの時、深海棲艦に何があったのだろうか。

頭をうんうんと悩ませ始めた、その時。

「失礼します。……提督? 電文が届きました」

「ん? ああ、ありがとう古鷹」

執務室に詰めて貰っていた古鷹が入室してきた。

見れば一枚の紙を持っている。

「……」

「提督？」

待て、俺はまだ製油所地帯沿岸突破を報告していないぞ？
なのに何でそれを知っている。そして……。

「南一号作戦、か」

電文に記載されている指令。

そこに記されているものは。

横須賀方面の戦力を集め、南一号作戦を決行する。
新たな作戦の発令だった。

司令長官も大変なようです

「司令長官、どういいう了見か説明してもらおうか」

緊迫した空気が張り詰める一室。

その中の一人、厳しい顔を浮かべた初老の男が言葉を放つ。

それに続き、半数以上の者が怒りにも似た視線を長官に投げかける。

「どういいう了見か……ですか。何に対して仰っているのか、無能な私に是非教えて頂けませんか？」

「貴様っ！ 何をいけしやあしやあと……！」

顔を赤くしながら、一切の表情を変えず涼し気な雰囲気のまま話す長官へと思わずといった様に立ち上がる怒りの視線を投げかけていた男。

彼は先日提督の地位を剥奪された男の面倒を良く見ていた者だった。

我が子同様に可愛がり、自身の知恵や経験を語り手塩にかけてその地位への後押しを熱心に行っていた。

それがどうだ。まさか提督を辞めさせられただけではなく、禁固刑となり不自由な扱いを受けることになった。

「先の軍法会議っ！ 何故あの子が提督を辞めることになるっ！ まして禁固なんぞ……説明してもらおうっ！ 場合によっては貴様……！」

「これは異な事を……私の仕事は使えなくなった者の処理。それは貴方がよく知っている事でしように」

肩を竦め、やれやれと言ったようにため息交じりでそう言葉を返した長官。

その姿を心配気な表情で見守るのは極めて少ない。

「使えなくなつた……だと？ ならば真っ先に処理すべき者が居るではないかっ！」

「おや、それはいけない。すぐに処理致しましょう……それは誰でしようか？ 職務を全うする為にも是非お教え頂きたい」

「き、き……貴様あ!!」

我慢ならぬと腰の刀を引き抜きそうになった男を。

「静まれ。私が説明を求めた了見はそれではない……中将、場を乱すだけならば退室するが良い」

「つ……い、も、申し訳ありません、元帥閣下殿……」

悔しげな表情を浮かべながらも中将と呼ばれた男は着席し……再び怒りに殺意を交えた視線を長官へと向ける。

「騒がせた。さて、長官。無能だと言う貴様に改めて問おう。大本営所属の艦隊を援軍に向かわせたその理由を」

「はっ!」

起立したままの長官は敬礼と共に姿勢を改め口を開く。

「まず一つ。横須賀主力鎮守府を守る盾であるあの鎮守府。その戦力を確認するためであります」

「確認なら偵察機でも十分に行えただろう。交戦する必要は無いはずだが?」

「はい。いいえ、元帥殿。彼女達はその為の露払いを行っただけです」

表情を動かさず言う長官の姿に元帥は口元を愉快気に歪める。

彼にとつて、自分に対していいえと口にした者は久しぶり。

まして、今までずつとはいと答えていた者が口にするのだ、愉快にもなる。

「ふっ、あくまでも援軍目的ではないということか。だが長官、貴様自身が言ったことを忘れたわけではあるまい。あの鎮守府に対して戦力を使う事は無いと」

「はい、無論です。先の作戦で失った戦力を回復させる時間稼ぎの為に建造された鎮守府に戦力を使う等本末転倒。ですが、その甲斐あって横須賀方面各鎮守府の戦力が元のもの以上に回復しつつある今、我らはその先を見なければなりません」

「……南一号作戦、か。再びあの作戦を決行する為にあの鎮守府の戦力、状態確認を行った。そう言いたいのだな?」

「はっ!」

再び敬礼を取る長官。

その姿はそれが真実であり、それ以上の答えを有してはいないと示している。

「ならば気にしている者が居るこちらも改めて問おう。何故あの提督を降ろした？ あの提督はこの場に居る中佐を筆頭に運営されている提督養成校にて優秀な成績を挙げ、あの鎮守府建設作戦を完遂させる事が出来た殊勲者ではないか。その理由を述べよ」

元帥のその言葉に待っていましたと言わんばかりに中將を含めた多くの者が身を僅かに乗り出した。

そうだ、理由を述べよ。我々を納得させるだけの理由を。

その者達の目はそう言っている。

だが、そんな視線を受けて尚。

「言った通りであります元帥。私の仕事は使えなくなつた者を処理すること……それをただ遂行しただけの事です」

「あの者は優秀な成績を収めた素晴らしい提督だぞっ!? それを……!!」

「静まれ……三度目は無い」

少し苛立つた様な声中將は身を竦め氣勢を失う。

その様子を横目にしながら長官は続ける。

「どれだけ優秀……使えた者でも使えなくなる可能性はあります。彼は少しやりすぎた。自身の戦果を誇りすぎた、そして持っていた目を曇らせた。故に処理した。それだけの事です」

「……それは、貴様の副官扱いであつたあの大淀のようにか？」

元帥が不意に長官の副官だつた艦娘——大淀の事を口にした。

その事に一瞬動揺する長官。

元帥が艦娘の名を口にしたのは初めてであり、今も尚長官の心に刺さつたままのトゲである事であつたが為に。

「——はい。その通りです。大淀が彼への敬慕の念で目を曇らせたように、です」

先程とは違い、少し顔を引き攣らせながらもそう答える長官。

その姿に元帥は、得心が行つたと言うように頷いた。

「良いだろう。その件については不問にする」

「元帥閣下!？」

「今後その件を持ち出す事は許さん。これは結果だ。この結果を鑑み、各々すべきことに向かうように」

きつぱりと言い切る元帥を前に、多くの者は悔しげにテーブルへと視線を落とす。

長官を心配していた者達もほっと胸を撫で下ろすと共に、力強い視線を持ち上げ口を開く。

「では、南一号作戦を執行する時が来た……という事ですね」

「准将……ふむ。長官、その事について述べよ」

准将の発言に、元帥の驚いた様子も一瞬。

再び長官へと視線を戻し水を向ける。

「はっ！ あの時とは違い、戦場を広げることが出来ます。そう、あの鎮守府が建ち、前線を押し上げることが出来たが故に多くの戦力が投入可能です」

「ほう……つまり、横須賀方面の戦力を集めて作戦を執り行うという事か」

「はい。あの時とは違い、深海棲艦の数も増しています……そしてそれに対応するにはあの鎮守府の戦力だけでは足りませんし……何より」

「何より?」

——二周目のある事が奇跡。それでも三周目があるとすれば、もう我々人類が敗北した後でしょうから。

「ふう……」

司令長官室に戻ってきた長官はイスに深く座り込み、身体力をすべて預けた。

——今に覚えておくことだ。

そんな言葉に辟易としながらも戻ってきた長官の顔には疲労が色濃く表れている。

艦娘兵器派。

言葉にしてしまえばその様な派閥。

一度目の南一号作戦において手酷い損害を負い窮地に立たされた後、再起を図るべく行われた鎮守府建設作戦。

それを執り行ったのはその一派。

そして多くの艦娘を沈めながらも成功させてしまつて以来、急速に勢力を増した派閥。

司令長官の知るかつての提督養成校は、今はもう彼らの思想に染まり無くなつてしまった。

その事を、酷く司令長官は残念に思っている。

そう、残念に思っているからこそ、現場を取り仕切る実権の多くを握っている長官の存在は兵器派の者に取つて目の上のたんこぶと言つていいもので、是が非でも引きずり落としたい存在だった。

だが、一度目の南一号作戦。

多くの提督、艦娘が海に散りながらも双方痛み分けとなつた作戦。

その数少ない生き残りである長官自身も紛れもない英雄で、引きずり落とす事は極めて難しい。

「複雑だね……」

形だけ見れば、南一号作戦をフォローした鎮守府建設作戦。そして今も尚期待以上に戦果をあげ続けるあの提督。

上手く行っている。間違はなく上手く行っているのにも関わらず、素直に喜べない司令長官だった。

目を閉じ、静かに今後の事へと思考を働かせている時。

「ん？」

窓を叩く小さな音が部屋に響いた。

「久しぶりだね？」

「ええ、久しぶり」

窓を開けて部屋に入ってきたのは小さな存在。

だが司令長官にとってはこれ以上無く大きい存在。

「相変わらず難しそうな顔をしてるわね？」 司令官

「ははっ、苦労してるんだよ？ これでも。よく知ってるはずだけど

? なあ、妖精」

お互い笑顔になりながら、かつてもしたやり取りをした後部屋へと迎え入れた。

部屋に入った妖精はそつと長官の机の上に座り、げんなりした声をあげる。

「あいつかわららず整頓が下手ねえ？ 何とかならないの？ このごちやつとした書類」

「はは、耳が痛いよ……まあそれはともかく言いたかった事があるんだ」

「何よ？」

「ありがとう。あのクソ提督の見張り。あの鎮守府との往復は大変だったろう？ でもおかげで助かったよ」

そう言つて小さく頭を下げる長官。

その姿に妖精は鼻を鳴らし。

「良いのよ。私こそありがとう。おかげですっきりしたわ……でも久しぶりにクソなんて汚い言葉を使うのね？」

「誰かさんのせいかもね？」

「ふふっ、よく言うわ」

笑い合う一人と一匹。

その間に漂う雰囲気はまるで長い間時間を共にした友人の様。

そのまま慣れた手付きで妖精の為に小さなコップへとお茶を注ぐ長官。

それを楽しそうに見守る妖精。

「ありがと、でも長居はしないわよ？」

「うん。だけど折角来たんだ、お茶の一杯位飲んでいきなよ」

その言葉に妖精はコップへと口を寄せる。

それからしばらく二人に会話は無かった。

だが、長官はさつきまで身に纏っていた雰囲気消してリラックスしながらイスに座って身体を休めているし、妖精もまたその様子を満足気に眺めながらゆっくりとお茶を飲む。

「……僕は、さ」

「うん？」

そんな中、不意に長官の口が開いた。

目を閉じたまま、何かを思い出すように。

「彼らの意思をちゃんと継いでいるだろうか？ 彼らの思いを無駄にしないだろうか？ ……全てが終われば、彼らと同じ場所へ行く事が出来るだろうか？」

「……司令官」

その言葉は何処か弱々しい。

だが、妖精にとっては聞き慣れた物。

「事は上手く運ばれている。アイツは本当に期待以上に動いている。アイツが今、何を感じて何を思っ…何を思っているのか。今の俺にはわからない。そんな中、それだけが心配なんだ」

「……」

「今自分がやっていること。この日本を救う為だ…というのはわかっている。けど、想いを裏切って、誰かを傷つけて…そんな事までして守らないといけないのか？」

かつて感じた雰囲気だからだろうか。

普段決して表に出すことの無い長官が表に出てきている。

そんな長官を。

「酸素魚雷食らわせるわよ？」

「……」

かつて口にしたことを思い返すように笑い飛ばした妖精。

「全く。立派な司令官になったと思ったら、まだまだ甘ちゃんな司令官ね」

「……ははっ、全くだ。キミの教育不足なんじゃないかな？」

軽口を叩き合う。

それもまたかつてあった光景。

「そうね。私としたことが、ね。じゃあ良いわ、最後の教育よ？」
「うん」

こほんと小さく咳払い。

その後妖精は胸を張りながら言葉を続けた。

「たとえば多くの者がアンタを間違いだ…と断じて。私だけはアンタを

認める。だからアンタは私を信じて先を往きなさい」

「……やれやれ、己を信じてと言わない辺り……キミも変わったね？」

「ええ、だって今の私は羅針盤先を示す者ですから」

そう言って再び笑い合うのはこれで何度目か。

妖精はコップのお茶を飲みきって窓に向かう。

「もう行くのかい？」

「ええ、アンタと同じ様にこれでも忙しいのよ」

頷きながら長官は窓を開け直す。

そうして去り際、思い出したように妖精は口にする。

「アンタがそんな調子だったら、草葉の陰の皆が心配しちゃうんだからね？　しっかりやり遂げなさいな」

「ああ、そうだね。うん……それは良くない。ありがとう」

目に力を取り戻した司令長官を満足気に見届け。

妖精は飛び立った。

二章之閑話

夕立のぽいぽいdays ②

朝日が窓から柔らかく差し込み照らす執務室へ続く廊下。

機嫌の良さを軽快な足取りで表現しながら鼻歌交じりに歩く、本日お休みな夕立の姿があった。

時刻はマルナナマルマル。

夕立の休日はまだ寝ているであろう提督にダイブすることから始まる。

朝ダイブは止めてくれと言われているのにも関わらず続けられたこの恒例に提督は白旗を振った。曰く、もう好きにしてくれと。そう笑い交じりにそう言った。

何だかんだで慕われていると実感できるその瞬間を享受出来ることが嬉しいからだろう。

もちろん夕立にしてもそうだ。

飛びついても避けられること無く受け止められ、仕方がないなど困ったような笑顔を向けられる。そんな提督の笑顔が好きで、胸が温かくなる。

夕立が自覚している沈まない意思の一つ。

それは間違いも疑いようもなく、提督から向けられる笑顔が心地よいからというものだった。

そんな訳で今日も今日とてダイブに向かう夕立。

「——あれ？ 開いてないっぽい？」

執務室のとなりの私室。

そのドアを開こうとノブを回そうとするが、ガチャリと拒むような音と手応えが夕立に伝わる。

提督の起床はいつもこの時間。

他の提督がどうかは知らないが、誰かに起こされようとも自分で起きようとも、彼はこの時間にいつも起床している。

又、提督は私室に居る際は鍵をかけない。その事は所属している艦

娘全員に周知されている事でもあった。

故に提督は今自室には不在なのだ。

「むー……提督さん、何処に行つたつぽい？」

休日の慣習とも言える様になつた行為が出来ないことを残念に思う夕立は頬を膨らませる。

片手を腰に、指を口元に添えて提督が何処に行つたのか考えを巡らせようとした時。

「あら？ 夕立さん。どうされました？」

「あ、大淀さんっ！ おはようございますっ！」

すぐ隣の執務室から出てきた大淀から声がかかった。

その声に対して元気よく笑顔で挨拶をする夕立。

「はい、おはようございます。提督に何かご用事でしたか？」

言いながら柔らかい笑顔を向けてくる大淀。

その顔に浮かんでいる表情はここに来た頃とは違う自然な物で、夕立も笑顔を思わずより輝かせてしまう。

「いつものつぽい！ そうだ、大淀さん。提督さん、何処に行つたか知つてるつぽい？」

「ふふ……そうですね、提督なら今日はいつてもより目が早く覚めたから少し身体を動かしてくるって言っていましたから……道場にでも行かれてるかと思えますよ」

大淀は提督よりも早起きだ。

というのも、大淀は製油所地帯沿岸の制海権を得た時から自ら進んで書類整理や情報まとめ等の事務仕事をするようになった。

提督が起きるより早くから執務室に入室し、提督の仕事がより捗るようにと毎日精を出している。

従って朝一番に提督が顔を合わせる確率が高いのは現在大淀。

その大淀が言うのだ、疑うまでもないが今日提督はどうやら朝から汗を流しに行つたらしい。

「そうなんだ。じゃあ夕立も行くつぽいー！」

「そうですね。あつ、今日は鳳翔さんがお披露目……もとい、朝食を作られるそうですからそれまでにはお戻りになつて下さいね？」

「うんっ！」

朝食はマルハチマルマルから。

後一時間程時間がある。要するにダイブする程度の時間は十分にあるということ。

大淀に元氣よく返事をした後、夕立は慣習を遂行すべく、足早に道場へと向かう事にした。

結果から言えば、夕立は本日初めてダイブすることが出来なかった。

「――」

入り口から見える、提督の竹刀を振るう姿。

その姿に心奪われ、目を惹かれてしまい声をかけることが出来なかったからだ。

提督が竹刀を握る姿なんて見慣れている。

ほとんど毎日と言っていい程訓練で見ているから。

それにも関わらず、夕立は初めて提督が竹刀を振っている姿を見たと感じていた。

それは何故か。

提督は竹刀を中段に構え目を閉じている。

ただそれだけなのにも関わらず、道場の空気は緊張に張り詰めていた。

「しっ!!」

不意に目を開け面を一閃。

何かの限界までキリキリと絞られた空気を断ち切るかのように振るわれた竹刀。

それは間違いなく何かを断った。

その何かが霧散していくのを確認するかのような残心の後、再び提督は振るう前の姿を取る。

そう、初めてなのだ。

提督が己の心のままに剣を振るう姿を見たのは。

再びゆつくりと空気が張り詰めていく事を確認しながら、静かに夕

立も胸を高鳴らせる。

いつも訓練の時に自分達へと向けられる姿でも雰囲気でもない。

その事実が胸に響くと同時にその響きが鼓動を後押しする。

ドクドク、ドクドクと。

血が身体を駆け巡る。

入り口からこつそりと中にいる提督の姿を覗き伺う夕立の姿は、まるで憧れの先輩を眺めている少女の様。

事実、顔も耳も赤らめ、熱心な視線を送るその様は何処からどう見てもそれだった。

唯一違うとすれば。

「提督、さん……」

持ち上げられた口元。

そう、まるで長年探し続けた仇を見つけたかのような。あるいは天啓に打たれたかのような。

そんな歪な笑みを携えていたことだろう。

「時雨」

「ん？ どうしたんだい夕立」

ちよつとしたイベントだった朝食を終えて。

食休みを挟めば哨戒に出る時雨に、何とも形容できない表情を浮かべた夕立が声をかける。

「あー……もしかして、まだ口がびっくりしてるのかい？ つ、次は大

丈夫だよ、きつと龍田が——」

「提督さんって、どれくらい強いっばい？」

朝食の件についてフォローを入れようとした時雨は続いた夕立の言葉を訝しむ。

ああ、何かあったな。そう察する。

夕立の問いが提督への信頼を曇らせたから来るものではないなんて時雨には分かりきっている。そんなものは前提ですらない。

だからこそ訝しむ。そんな事を気にしてどうするのかと。

「どうしたのさ、そんな事気にして」

「わからないっぽい。けど、なんだか気になるの」

どうやら夕立自身も何故気になっっているのかがわからない様子。

時雨はそのどちらに対しても答えを持ち合わせていなかった。

提督がどれくらい強いのかという事はわからない。

自分達艦娘に対して人間が行うような訓練を施す人は初めて、要するに他を知らないから比べようがない。

ただ、それでも提督が力になると思っただけを疑う気持ちは欠片もなく、また実際に力へと昇華された。それだけで時雨は十分だった。

故に夕立が提督の強さを気にする理由もわからなかった。

それでも思い当たる事があるとすれば。

「悩んでるんだね」

「……っぽい」

最近の演習で夕立が首を傾げている光景を時雨はよく見る。

結果は出ているのだ。夕立は間違いなくこの鎮守府での撃沈^{エクス}王だ。

被弾率が高いのは置いておくにしても、この鎮守府で一番多く深海棲艦を屠っている。

そして提督に褒められると同時に必ず言われる言葉。

もう少し自分の身も考えてくれよ。という言葉。

それが意味するのは夕立を含めて全員が理解している。

我が身犠牲に……といえれば大げさかもしれないが、肉を切らせて骨を断つといった動きをやりすぎないようにと諭す言葉であると。

「天龍さんや龍田さん……最近では古鷹さんと加古さんにも手伝ってもらってるけど……」

どうしても自身の被弾を避けられない。

訓練通りやろうとも、古鷹や加古に従来通りの艦隊行動を教えるもらっても。

平たく言っただけならば。

「壁……かあ」

時雨が呟く。

そう、夕立は壁にあたっているのだ。いや、正確に言えば壁を見

失っている。

一朝一夕で身につくとは思っていない。それは重々承知していることで。

だけでもそれが自身の乗り越えるべき壁だと思えないのだ。

それは大淀達がこの鎮守府に着任する前から僅かに感じていた事でもあつて。

同時に提督から我が身も考えろと言われ始めた時期でもあつて。

そんな悩みに頭を抱えている夕立。

「うん。そうだね。だったら夕立が思った通りに事をすればいいんじゃないかな?」

「思った通りっぽい?」

そこまで話が進んだことで時雨は思い至る。

要するに。

「壁にしたいと思った相手にぶつかってみればいいじゃないか」

そんな事を夕立に向かって言ったのだった。

「勝負?」

「はいっ!」

夜、恒例の訓練。

何時も通りに始めようとした提督に夕立は手をぴんつと伸ばし、自分と勝負して欲しいと言った。

「勝負って言ったって……何時もじゃねえけど、やってるじゃないか」

「違うっぽい! 夕立、提督さんと戦いたいっぽい!」

そんな夕立の発言に少し戸惑う提督。

相手をするにはよくある。だからこうして改まって勝負と言われてもぴんと来ない様子。

「あ。それじゃあ今日はそれを見学したいなあ。いいよね? 提督」

だが、参加していたうちの一人龍田は夕立の意を得たりとそんな事を言う。

龍田だけじゃない、その場に居る中で意を理解していないのは提督

だけの様子。

「うん、僕もそうだね。夕立と提督……どれくらいその実力差があるのか興味ある、かな」

「……ああ、そういう」

時雨の言葉を通して夕立の意を理解した提督。

要するに、だ。

「試合じゃなくて勝負して欲しいわけだ」

「はいっ！」

夕立がキラキラとした瞳と共に元氣よく返事をする。

そう、夕立が壁にしたいと思った相手。それが提督。

自分を導く者と捉えていた提督。事実今まではそうだった。あくまでも訓練で見せている提督の腕は艦娘を鍛えるための物で、自身の力を振るっている訳ではない。

朝、道場で見た提督。それは自分の力を自分の為に使っている姿。

素の実力、その片鱗を見たことで夕立は無意識にこの人を越えたいと思ったのだ。

それが時雨と会話することではっきりと形作られた。

だがそれを分かってなお、提督は渋い顔を浮かべる。

抵抗がある。そう顔に書いてある。

それもそうだ。好きな相手を傷つける事等どうしてできようか。

大きく息を吸って吐く提督。

顔を俯かせて少し。

再び上げた顔には。

「……三本勝負、な？」

「はいっ！」

決めた覚悟が顔に描かれていた。

そうして二人は竹刀を手に取り、距離を開けた。間に立つのは時雨、開始の合図と審判を任されている。

せめて防具はつけて欲しいと言う提督へ首を横に振り。夕立は防具をつけなかった。それなら自分も要らないと提督もまたつけず。

夕立曰く、痛くないなんて嘘だ。との事。

「二つ。攻撃が綺麗に入れば一本。一つ。時雨がそこまでといえればそれで一本。他に野暮なことは言わない。それでいいか？」

提督の口にしたルール。

その言葉を噛みしめ、夕立は静かに頷き竹刀を構えた。

その姿を確認した提督は時雨に視線をやり。

「——はじめっ！」

時雨の合図と共に、竹刀を火の位上段に構えた。

瞬間、空気が張り詰めた。

誰もが開始の合図と共に夕立がいつものように突撃する。そう思っていた。

だが、それよりも疾く。

「い、一本!!」

乾いた音が響いた。

電光石火。

その言葉通り、提督は夕立よりも疾く距離を詰め竹刀を振るい強かに夕立の肩を打った。

「う、うそ……」

その眩きは誰のものか。

見学に回ると言った龍田の物かもしれないし、審判をしていた時雨かもしれない。

そして、驚きの表情を浮かべたまま尻もちをついた夕立の物だったかも。

黙って再び最初の位置に戻る提督。

その姿を座り込んだまま見送る夕立は……。

喜びに身体を震わせていた。

もしも夕立が、こうして実際に初めて打倒するべき敵として提督と相対して受けた提督の圧力。それに気圧されず一步目が普段どおりに踏み出せていたならここまで差を見せつけられていなかったのかも知れない。

だが夕立はその経験に強く喜び、興奮していた。

気づけば朝浮かべたばかりの奇妙な笑顔。

遅れてやってきたじんじんと痛む肩を一撫でした後、ゆつくりと夕立は立ち上がる。

——これだ。

朝に感じた事は間違いじゃなかったのだ。

夕立が目指した強さはこれだった。

確かに提督は海で砲撃が出来るわけでも雷撃が出来る訳でもない。それでもこれなのだ、夕立が目指し、肩を並べたいと思ったのは。訳も分からずただ信じるままに提督の訓練を受けたあの頃とは違う。

訓練を海に活かすだけじゃない。提督を、鎮守府を守りたいとただ思っていた頃でもない。

今はただ、この人に並びたい。

「時雨」

「っ……二本目はじめっー!」

「突撃するっぽいっ!!」

そして追い越したい。

提督が海で戦えないのならその分自分が戦いたい。

自分にその強さを任せて欲しい。

そう思ってもらえる自分になりたい。

その思いと共に今度は提督よりも疾く夕立は初動した。

迎え討つは地の位下段に構えた提督の姿。横薙ぎに払われた夕立の竹刀を軽々と受け流し、体勢の崩れた夕立に返す刀を振るう。

それを崩れる体勢に身を任せ、あえて転げ躲した夕立。

ゴロゴロと転がり起き上がってみれば、追撃に来ている提督の姿。追撃する勢いのまま振るわれる面の一撃を夕立は。

「っっ!!」

「綺麗には入ってないっぽい!!」

腕で受け止めた。

片手で持った竹刀を提督へと我武者羅に振るう。

だが、それも避けられる。

痺れる腕を意に介さず、退いた提督へと夕立は踏み込む。

——あたる。

そう確信を持って振るわれた夕立の竹刀。だがやはりと言うべきか、それよりも疾く。

「うぐっ……!?!」

踏み込んでくると確信していた提督の逆胴^{横薙ぎ}。それが夕立の胴に吸い込まれる。

「一本っ！」

「……これで良かったか？」

時雨が宣言すると同時に、提督はうずくまった夕立に寄り添おうとする。

その提督に。

「し、時雨っ！ 三本目っ!!」

「えっ!? は、はじめっ!?!」

その声にあわてて三本目の開始を宣言してしまう時雨。

時雨が慌てたように、二本先取だと思いこんでいた者にとっては完全な奇襲。

その一撃を。

「ああ、まあ確かに二本先取とは言ってなかったな」

「あ、あう……」

手のひらで受け止めた提督。

「でもまあ、夕立が言った通り綺麗には決まってるいな？」

そう言っ提督は苦笑いを浮かべた後、竹刀を軽く夕立の頭に当てた。

「い、一本……ぽい」

悔しがっているような、恥ずかしがっている様な夕立は自ら敗北を認めそう言った。

「それで夕立? 感想はどうだい？」

「あはは……完敗っぽい」

訓練終了後。

念のために入渠をなんて提督に言われもした夕立だが、これくらい
の痛み、傷等それに入らない。

何処か訓練し始めた頃の事を思い出しながら断った後、時雨と共に
自室へと帰ってきた。

そして感想を求められた夕立は恥ずかしそうに時雨へとそう言う。

「でもやっぱり間違いないやなかったっばい。提督さんが夕立の目指す
壁だったっばい」

「そっか」

冷湿布を夕立の肩と腹部に貼りながらその答えに満足気に頷く時
雨。

「ねえ時雨?」

「なんだい?」

そんな時雨に夕立はニコニコと笑顔を浮かべて話す。

「夕立、これでもっと強くなれるっばい。まだまだだけど……いつか、
提督さんが安心して見送ってくれるように……頑張るっばい!」

「そうだね。僕も……うん、頑張るよ。頑張ろうね、夕立」

「うんっ!」

それからと言うもの。

時雨と夕立に訓練とは別に度々勝負を挑まれるようになった提督。

やがて天龍や龍田……多くの艦娘に挑まれるようになるとは露知
らず。

艦娘へと竹刀を振るう事に抵抗がある彼の目には光るものがあつ
たとか。

鳳翔さんの花嫁修業 ①

やはりこうなってしまった……というべきでしょう。

目の前に広がる綺麗な味噌汁の噴水。そして盛大に咽る皆の姿。何処か冷静にそんな事を思っています。

ですけど言い訳もしたいのです。

仕方がないじゃないですか。ねえ。

『そっぴや鳳翔って料理上手そっぴやだよな』

きっかけは確か食事の場で何気なく零されたそんな台詞。

いえ、正直そういう目と言うか。印象を感じてもらった事に対しては嬉しいのです。

戦闘以外でも傍に置きたいと思っ頂ける理由であるならば、何よりですから。

それに私自身、置いて欲しいと言うか、その……う、ううん。

その場に居たのが第一艦隊の皆さんだけだったという事も不味かったでしょう。

古鷹さんと加古さんは第三艦隊の実戦を護衛するために出払っていて……天龍さんと龍田さんもあの鎮守府に居た時あまり交流出来ませんでしたし。

そう、私が料理をしたことが無いという事を知る方が居なかった。ま、まあそれはさておき、です。

当然そんな事無いと言った私ですけど、どうやら謙遜と捉えられてしまったのか……他の方も、確かに。なんて仰って意図したわけでは無いのでしょうけど。私の逃げ道を塞ぐもので、はい。

そうして作る約束をした相手だけにあの場に居た第一艦隊の皆さんと大淀さんへと朝食を振る舞った結果が噴水……いえ、今は水溜りと化したテーブルの上だったりします。

——って。

「も、申し訳ありませんっ！」

「ゲホッ、ゴホッ……い、いや。すまん、折角作ってくれたのに……」
慌てて謝罪します。

そう言ってみれば少し落ち着いたのか提督も謝ってくれました。

「ほ、鳳翔さん？　これってー……出汁とか、ちゃんといれたー？」

「お出汁？」

時雨さんと一緒にテーブルの上を片付けながら、龍田さんが言った言葉に首を傾げてしまう。

味噌汁とは出汁を入れる物なのでしょうか？　お湯に味噌を入れればそれで終わりなんじゃ……。

「あ、あー……うんそうねえー。一応お味噌汁用の出汁があるんだけどー……」

何かを察したように言葉を濁す龍田さん。

ですけど、そんなに不味いのでしょうか……。

「あ!?　ま、待って!？」

「——うう」

思わず口を抑えてしまった。

駄目ですこれ、不味いです。少なくとも私の知ってるお味噌汁の味ではありません。味が変だと塩を入れたのが不味かったのでしょうか……。

そんな事を考えている時、不意に提督と一緒に作った卵焼きに箸を伸ばして口元に運べば……ジャリジャリと明らかに卵焼きを食べる音では無いものが聞こえてきたり。

「あ、あの……提督?」

「……うっしやおらあああああ!!」

「わっ!?　ど、どうされましたか!?　そんな急にがつついて!？」

大淀さんが驚きの声を上げる。

みるみるうちに減っていくテーブルの上にある食べ物。

私を含めた全員がぽかんと口を開ける中。

「ぐ、ごっそさん……。美味かった!!　そ、それじゃ俺書類整理してくるからっ!!」

と、執務室へと向かって行った提督。

提督……。

「全くあいつは……。しゃあねえ、俺はちと様子見てくる。龍田、俺たち

の分も食べられちゃったからわりいけど——」

「うん。すぐに作っとくね」

そう言つて天龍さんは提督を追いかけていった。

その様子をぼんやりと眺めてしまう私。

不意に袖をくいくいと引かれた感触に目を向ければ。

「ごめんなさいっぱい」

と謝ってくる夕立さん。

ええと、なんで謝られているのでしょうか。

これは私が変に素直になれず見栄を張ってしまった結果ですのに。

「僕もごめんね？　そうだよ、料理なんてする暇無いよね普通は。

提督が言う様に僕も料理上手そうだなあと思ってたから……」

「え、あ、あの。い、いえ。私もちゃんとあの時言えば良かったのですから……こちらこそ申し訳ありません」

夕立さんに続くように片付けが終わった時雨さんも私に謝ってくれた。

本当に……この鎮守府は優しい。

提督はこんな料理とも言えないものを他の艦娘に食べさせたくなかった……ううん、きつと責任の取り方なのでしょう。自分で言った料理が美味そうな鳳翔を傷つけないようにしてくれた。

他の皆にしてもそうです。提督が出来なかった、いえ、しなかった私への謝罪を口にしてくれる。真実口にした通り申し訳ないと思つているのでしょう。ですが同じかそれ以上に提督が口にしなかった代わりにといった思いが透けている。

ああ、こんなに幸せでいいのでしょうか。

いいえ、幸せと思つて良いのでしょうか。

互いを思いやる、応え合う。提督と艦娘。こんな光景があるなんて知らなかった。

知らなかった私はこの光景を幸せだと思つている。

それは間違つていないだろうか？　良いことだと信じて良いのだろうか？

そんな不安はあるけれど……提督はこの光景を望んでいる。なら、

少なくとも応えたいと思うことは間違いではないはずです。

「出来たよ。ごめんね、簡単にしか作れなかったけど……」

そう言っ手際よく並べられたのはおにぎりとお焼きたほうれん草のお浸し。

改めていただきますと言った後、それらに箸を伸ばす。

すると僅かな時間でどうしてここまで作ることが出来るのか、おにぎりには昆布に鮭、梅干しとそれぞれ違う具。お焼きたは甘めに、卵の殻なんて当然入っていないしとても綺麗。ほうれん草の上に振られた鰹節がゆらゆらと揺れている。

口に運べばそれぞれ風味よく楽しませてくれる。

龍田さんだってあの鎮守府にいた頃料理なんてしたこと無かったはず。どれだけ練習すればここまで出来るのか。

きっとあの提督が向けてくれる信頼に応えようとした結果の一つなんだろう。

そうです。私は……私も応えたいのです。

「龍田さん」

「うん？ 何かしら？」

「私に……料理を教えてくださいっ！」

「えつとー……え？ ほんとに言わなきや駄目なの？ うう……」

こ、こほん。龍田さんのくドキドキッ！ お料理教室っ！」

「待ってましたー！」

「楽しみっばい！」

やんややんやと囁し立てるのは加古さん。カンペを手に持ちながら実に楽しそう。

試食要員として呼ばれた夕立さんと天龍さんもニコニコと楽しんでいるみたいです。

「よ、よろしくおねがいします」

「えつと……でもほんとに私でいいの？」

実は龍田さんをお願いした時、やんわりと断られそうになったのです。

そこへ時雨さんが一言。

——和食を一番上手に作れるのは龍田だもの。それにすごく楽しんで作るし……適役だと思ふな。

との言葉に後押しされて龍田さんは何故か顔を赤くしながらも頷いてくれました。

……何故顔を赤くしたんでしょう？

「私もやはり和食を作ってみたいですし……時雨さんのお墨付きなら尚更ですよ」

「うう……」

時雨さんは洋食と言うか和食以外が得意との事で。

いずれ和食以外を作りたいと思えば何時でも声をかけてと言ってもらえてます。ありがたい事ですな。

「もうわかったわー……観念するね。それじゃ早速だけど……今回は肉じゃがを作りたいと思います」

「肉じゃが、ですか」

定番といえば定番なのでしょうか。

噂では家庭によって大きく差があつて殿方のおふくろの味ナンバーワンになりやすいという、あの。

ごくりと思わず生唾を飲み込む。

「そ、そんなに目に力を入れてまで緊張しなくても……。えっと、一応レシピを書いてきたから……まずは確認しましょう？」

「分かりました」

そう言われてレシピに目を通す。

人参、じゃがいも、玉ねぎ、白滝に……豚肉？

「あの、牛肉では無いのですか？」

「あ、えっとーそれはー……」

「提督が牛より豚派なんだよなっ！ 最初は龍田も牛肉で……」

えっ!? 龍田さん!?

「何か言ったかしら〜?」

「イエ、ナンデモナイデス」

びっくりした。

急に果物ナイフを天龍さんに投げつけるんですから……もう。

「道具をそんな風に使ってはいけませんよ。」

「は、はあい……ごめんなさい」

道具は大切に、ですよ？

それはさておき、提督が牛肉より好きだから豚肉を使う……つと。

「じゃ、じゃあまずは材料の皮むきからね。包丁を使うのは難しいと思うからこれをどうぞ」

そう言っ皮むき器を渡される。

よし、これなら出来そうです。ですけど……。

「どの材料の皮を剥くのですか？」

「あ、あはは……そうね、人参とじゃがいもよー」
なるほど。

じゃがいもはなんとなく知っていましたが、人参も皮を剥くのですね。

早速やってみましょう。

「うん、上手ね……あ、じゃがいもの芽もしっかりくり抜いてねーそう、皮むき器の刃の隣の……そうそう、それでくりつと」

「な、なるほど……」

こんな機能もついているのですね！ こんなに小さいのに多機能な物です……思わず感心してしまいました。

「はい。それじゃあいよいよ材料を切るね？ 包丁の使い方だけど

……あ、そう力任せは駄目だよー？ 引く、もしくは押すようにしてねー」

わ、こんなに簡単に切れるものなんですわっ！

あの時の大根には苦勞しましたけど……こうやるものなんですわ。

「煮込むと崩れて小さくなっちゃうから少し大きめに……そうそう一口大位がいいかなー？」

「あれ？ いったもつと大きかったっぽい？」

「しーっ……あれだよ、龍田のやつ提督が大口開けて頬張るのが——」
「天龍ちゃん？」

「ハイ、ダメツテマス」

むむむ……一口大一口大……。

こ、こんな感じでしょうか？

「うん、大丈夫ねー後はお出汁の作り方だけどー」

つ、ついに来ましたね、お出汁。

お味噌汁の時はこれで失敗しましたから、しっかりしないと。

「お水四百に対して、醤油、みりん、砂糖、酒を大きじ四杯ずつがいいかなー。後はこの本だしって言う顆粒の粉を大きじ一杯」

「醤油、みりん……大きじ……」

「あれ？ 龍田さんいつものヤツ使ってないっぽい？」

「夕立ちちゃん。あれだよ、早々家の味を教えてなるものかって言うー」

「加古ちゃん？」

「ハイ、スイマセン」

こ、こんな感じでしょうか！

「うん、いい感じだねー。えっとね、こういう時でもそうだけどー……味見はしっかりしようねー。今やってるのが多分一番基本だろうから……変にアレンジするのは失敗の元。どうすればどうなるか分かってからねー？」

「はい、そうですね。しっかり覚えておきます」

思えばあの時味見をしていなかった事が致命的だったのでしょう。していれば、気づいて失敗したと言えていたでしょうし……。

出来上がった出汁を一口。

……うん、大丈夫そうですね。

「もちろん具材と一緒に煮込めばまた味は変わってくるから……前と後をしっかりと覚えようねー」

「はい、先生っ！」

「せ、先生……」

たじろいだ様子の龍田さん。

おかしい事を言ってしまったでしょうか？

「龍田せん——」

「何かしらー？」

「ナンデモナイデス」

あれ？ 天龍さんも加古さんもさつきまであんなに楽しそうにしてたのに……どうして震えているんでしょうか？

あ、だ、大丈夫ですよ？ こうやって見てもらってますしもうあんな物にはならないと思いますからっ！

「後はこれで煮込むだけねー。大体じゃがいもに箸が通るぐらいがいかなー？ そういう訳でちよつと見ててねー」

「え？ 龍田さんは何処に行くのですか？」

「んー……」

そう言っつてその場を外そうとする龍田さん。流石に心配ですし最後まで居てほしいのですが……。

口元に手を当てて……ん？ 天龍さん達の方を見て……あれ？ どうして加古さんと天龍さんは顔を青くしているのでしょうか？

「そうねー最初だし……仕方ないか」

龍田さんがそう言えば、大きく息をつくお二人。

……どうしたのでしょうか。

「いただきまーすー！」

「は、はい！ どうぞっ！」

そうして出来上がった肉じやが。

味見もした、おかしいところは無いと思うし龍田さんも大丈夫と言ってくれた。

でもどうにもハラハラしてしまいます。

つついじつと見てしまう皆の箸に乗った具材の行方。

それが口に入れば……。

「おいしいっぽい！」

「うん、うめえな！」

「あー美味しい！ これで一杯出来ちやうよー！」

そう言っつて貰えた後、箸を進めてくれるスピードが上がる皆。

良かった……。ちゃんと出来ました。

それに、何ででしょうか？ 安心したとは別に、皆の美味しそうに食

べてくれる顔を見てると……。

「嬉しい？」

「……はい。何でしょう、とても嬉しいです」

そう、嬉しい。

顔に手をやってみれば、どうやら私は笑っているようで。無意識に笑ってしまう位に私は嬉しがっているようです。

「これを作る側の醍醐味ねー」

「醍醐味、ですか」

「そう。一生懸命作った料理を誰かが美味しいって言うってくれる瞬間。それが何よりも美味しいのよー」

嬉しいじゃなくて美味しいとは如何に。

ですけど、なんとなく分かってしまいます。

「とか言っちゃってえ。龍田さんは提督に食べてもらうのが一番嬉しいんでしょー？」

「いっそ私も一緒に食べてっ！ てか！」

「……二人共しばらくご飯抜きね？」

「ごめんなさいっ!!」

ああ、龍田さんのこんな顔初めて見ました。

龍田さんだけじゃない、天龍さんだって加古さんだって。

そんな顔もこんな雰囲気も初めてです。

とても、心地が良い。

「もう……。じゃ、はい。これお願いするねー？」

「これは？」

そう言って手に渡されたのはラップがかかったお皿。中には私が作った肉じゃがが一人前。

「提督に持って行ってね。……恥ずかしいけど、私は鳳翔さんの先生だから。最後まで醍醐味を教えないと、ね」

「龍田さん……」

提督は……ううん、提督も美味しいと言ってくれるでしょうか。

この前の事を考えると、少し怖い。

料理上手だと思って貰えた私に恥じない物であるでしょうか。

ですけど。

「はい、任務了解しましたっ！ いつまでも演習というわけには参りませんね」

「うん。頑張つてね」

受け取ったお皿は温かい。

ああ、そうですね。早く持っていかねばなりません。

料理も……私の心も。温かい内に。

六駆の午後 ①

「はー……生き返るわぁー……」

「うん、雷の淹れてくれるお茶は身に沁みるね……あ、おかわり貰っていいかな?」

「はぁい。ちよつとまってるねー」

鎮守府艦娘私室。

夕立と龍田相手に演習を行った後は全員疲労でぐったり。それにも関わらず自分の出番と言わんばかりに甲斐甲斐しく全員分のお茶を用意する雷の姿も見慣れつつあるこの頃。

今日の演習は何時もと少し違っていて。

まず最初に電と雷が龍田の相手をした後、響と暁が夕立の相手をしてその後組み合わせを変えてと言ったもの。まるつと半日使って何度も演習を繰り返すハードな物だった。

なお、第三艦隊旗艦である那珂はその光景をじつくりと見学させられていた。その隣に解説役として呼ばれた鳳翔と天龍を置きながら。終わって疲れ切った六駆の姿と同じく、目をぐるぐるさせながらうわ言のように何かを呟く那珂の姿もまた教導がハードだったことを物語っていた。

「はいっ! お待たせ!」

「スパシーバ……うん、美味しい」

「良かったっ! もつと用意してもいいのよ?」

ニコニコと急須からお茶を注ぎ終わった雷はそんな事を言う。

いくら美味しいとは言え流石にもう要らないかなあなんて思い、曖昧な笑顔でお茶を濁す響。

そんな二人の様子を見て微笑んでいる暁の姿。

暁は思う。

夢ですら思い描けなかったこの光景。

こんな光景を見ることが出来るなんて思ったことが無かったと。

提督が花にのせて伝えてくれた言葉に偽りは無かったのだと。

「ん? どうしたの暁? 何処か痛い?」

「えっ？　ど、何処も痛くなんか無いわ」

「でも……泣いてるよ？」

響にそう言われて初めて気づいたと、驚きの表情を浮かべながら目元に手をやる暁。その指先には水の感触。

指に触れたその水滴を見つめて、暁はふと笑みを浮かべる。

「ううん……大丈夫よっ！　痛くも悲しくもないわっ！　一人前のレディは嬉しい時しか泣かないものよっ！」

ふんすっ！　と立ち上がり胸を張る暁。

その姿を見て一瞬目を丸くする響と雷だが、暁の言う嬉しい時という物が何なのかすぐに思い当たり、互いに顔を見合わせて笑顔を浮かべる。

——ああ、本当に花言葉の通り。

響は思う。

間違いなくこれもまた思い出として一生心に残り、積み重なり途切れることの無い絆となるんだろうと静かに目を瞑り噛みしめる。

雷は思う。

今度こそ、この嬉しい時を守ると。司令官と他の皆、そして六駆。皆で一緒なら守りきれない物なんて無いと心に強く定めることが出来る。

「……夕立と龍田さんにコテンパンにされて涙ぐんでたような？」

「そ、それは違うわっ！　あんなに強くなれるのねって感動してたのよっ！」

「小声で手加減して欲しいわって言ってたわっ！」

「も、もうっ！　雷までっ！　ふ、ふんっ！　どうせ私はまだまだ半人前よっ！　それくらい知ってるんだからっ！」

ふんすかっ！　と、頬を膨らませながらいじける暁の姿に笑顔を深める二人。

これからもこの光景がずっと続けばいい、否。続けさせるのだ。そう心に思いながら。

そして暁は自分が玩具にされている事を自覚し、話題から逃げるように。

「~~~~!!」

「それで？ 電は一体何をしてるのかしら？」

布団の上、うつ伏せにバタ足で泳いでいる電という、今まで見て見ない振りをしていた光景に対しての疑問を口にした。

「いつものだよ」

「いつものね」

「ああ、やっぱりいつものなのね」

そうしてみれば返ってきたのは二者同様の答え。

聞くまでも無かった事ではあるので、やっぱり話題から逃げたかっただけだった暁。

「どうせ司令官に褒められたのにも関わらずつつけんどんな返しをしちやって自己嫌悪してるのね」

「そそそ、そんな事無いのですっ！」

がぼつと布団から勢い良く身体を起こし振り向く電。その顔はまさに凶星つかれちゃいましたと言わんばかり。

さて、先程の演習が終わった後。

提督は六駆メンバーに対して個別に演習評価を行った。

その内容は凡そ全員を褒めつつも欠点をしっかり伝えるという普通といえば普通の評価ではあったのだが。

——一番伸びてるのは電だと思うぞ。よくやってくれてありがとう。

その言葉が電に向かって飛び出た数秒後。提督の手が電の頭を撫でようとした瞬間。

執務室から砲撃音が響いた。

事実、電の成長は六駆の中で一番目覚ましい物であった。それは第三艦隊のメンバー全員が認める事でもある。

だから何の誇張でも無いし、おべんちやらでも無い。

だが、電はそれを耳に入れ言葉の意味を理解した時。顔を真赤にしながら砲撃をぶっ放した、提督に向けて。

「皆慣れたものよね？ あの音が聞こえた瞬間、ああまたか。って」

「ああ、でも龍田さんだけ何故か頭を抱えてたよ？ なんでだろうね」

「とりあえず様子見に行くかーって天龍さんがのんびり歩き出した辺り凄いわよね……私もあんな動じないレディになりたいわ」

何人かが執務室に入ればそこにはうつ伏せで倒れている提督の姿と破壊された壁。

ご丁寧なダイイングメッセージの様な何かが書かれてたのには心配を通り越して笑ってしまったたり。

そしてその笑い声で提督は自分の心配をしてくれよと苦笑いを浮かべて立ち上がるのも最早鉄板ネタ状態となっている。

ちなみに皆がゆっくり来たのは顔を赤くしながらその場から逃げた電と鉢合わせにならないように配慮しただけだったり。

龍田曰く。

——恥ずかしい所は見られたくないものなのよ……。

そう遠い目をしながら語られている。

「でもいい加減主砲撃っちゃうのは止めたほうがいいと思う」

「そうねっ！ 私は妖精さんの手伝いが出来て楽しいけど、良くないことだと思っわっ！」

「照れ隠しも程々にしないと駄目よ？」

「そんな生暖かい目で言わないで欲しいのですっ!？」

両手をバタバタ、目をぐるぐるさせながら電は必死に弁解を口にしようにするも照れ隠しだと自分でも自覚している分質悪く、あうあうとしか口に出来ない。

「でもどうして主砲撃っちゃうの？ そんなんじゃ駄目よ？」

「う……。わ、わかってるのです……。わかってるのですけど」

でもどうしても駄目なのだ。どうしても提督が好意等プラスの感情を電に対して示すとそれを素直に受け取れない電。

「まあ……。そりゃあんなに面と向かって好きなんて言われたらねえ？」

「はわわっ!？」

またしても凶星といった顔の電。

そう、電は好きと言われた事を物凄くしつかりと心に残している。

無論あの時の言葉が自分達に一步を踏み出させるための心からの

言葉であることは分かっている。

分かっているだけにそれは紛れもない提督の真実であって。故にこうして電を余計に拗らせてしまっているものでもあった。

提督の言葉に、想いに応えたい。

それは六駆だけではなくこの鎮守府に着任している艦娘全ての想い。

そんな中ぶち込まれた好きという二文字。

今までの自分が提督に対してしてきた態度を鑑みてしまい、応えたいのにそれを表に出せないと言うジレンマ。

とは言えそれが電が六駆の中で一番成長を促している要因でもある事には気づいていない。

「でも羨ましいわ。司令官に好きって言ってもらえるなんて……私もいつか立派なレディになれば……!」

「そうだね、私も言われたいな。それにその話を聞いた他の皆……すごく羨ましそうだったよ?」

「時雨ちゃんと龍田さんの目から光が無くなったのを除けばね……お、思い出しただけでも怖いわっ!」

「わ、私の気も知らないで……こっちは良い迷惑なのですっ!」
むんつと気合を入れる暁に、思い出して微笑む響と震える雷。

「まあまあ。司令官も言ってたじゃないか。おおらかな心を持って欲しいって」

「うぐう……」

「そうねっ! カランコエは綺麗に咲いたんだものっ! 電がそんなんじゃ駄目よっ!」

「うう……雷ちゃんまで……」
落ち込んだような電。

それを尻目に暁は立ち上がり、部屋でも愛でられる様にと植え替えた鉢のカランコエを撫でる。

幸福を告げる。

暁はそう言われた。

そしてそれは既に叶っている。

今の光景が幸福で無いとすれば何が幸福なのか。

——まだまだ幸せはこれからだぞ？ 暁。

評価の時に言われた言葉。

少し怖くも思ったその言葉。

「これ以上の幸せなんて……想像できないわ」

提督は今がスタートラインだと暁に言った。満足するなという意味だろう、暁は提督の言葉をそう思っている。だが暁は今以上が想像できない。

あの鎮守府での出来事は思い出たくはない。だけどどうしても不意に思い出す。

だからこそ今の幸せが天井。最高の幸せだと思ってしまう。

「……なら、最高を越えた幸せを掴もう。それを思い出に、私はしたいな」

「響……」

いつの間にか暁の隣に来た響。

ここに来るまで浮かべることの無かった優しげな笑みを浮かべてそう言う。

「そうねっ！ 私も守りたいものを守れるようにならないとねっ！」

反対側に来たのは雷。

守りたいものの中には一体何が詰まっているのか。

浮かべられた満面の笑みと一握りの覚悟。少なくとも、暁が幸せと感じているものを絶対に守る。そう言っている。

「おおらかな心……私はまだまだ持てるようになれないのです」

カランコエをそっと撫でながら呟く電。

「でも、その心を持てるくらいに……強くなるのです」

弱い自分を強くする。そしてその心を持って提督と過ごしたい。それは照れ隠しでも何でも無い素直な心でそう思っている電。

いつか、ありのままの自分で提督と笑い合いたい。

それぞれが想いのまま、カランコエを愛でる。

「ん？ はい！ 開いてるわっ！」

そんな中部屋に響いたノックの音。

ノックに返事をすれば。

「おじやましまーすっ！ 皆っ！ もう身体は大丈夫？」

「那珂ちゃん！」

一番に反応したのは電。ぴゅんつと音を立ててその元へと。

そんな電に三人は少し苦笑い。

六駆全員那珂の事を慕っているのは間違いないが、その中でもダン
トツなのが電だったりする。

「もう大丈夫なのですよっ！ それで、どうしたのです？」

「おっ！ さっすが電ちゃん！ 元気いいねっ！ 他の皆は大丈夫
？」

「大丈夫だけど……あの、那珂ちゃん……もしかして、また……」

元気に返事をした電と対照的に不安気に言葉を零す暁。

「なら大丈夫だねっ！ さあ！ 今からレッスンの時間だよっ！」

「えっと、それは……どっち、なのかしら？」

恐る恐るといった様子で聞くのは暁。

暁の言うどっちの片割れは演習の事を指している。そしてもう一
つの方は。

「決まってるよっ！ 今日はダンスの振り付けだからねっ！ 皆っ！

がんばろー！」

「おー！ ……なのですっ！」

「ほっ……演習じゃなくて良かった」

「そ、そんなんじゃない駄目よ……って言いたいけど、今日はもうお腹いっ
ぱいね」

「うん、アイドルレッスンでよかった」

初陣を立派に遂げてからこの鎮守府に立ち上げられたアイドルユ
ニット。花の第三艦隊。

そう、そのレッスンのお誘いであった。

部屋からバタバタと慌ただしく出ていく那珂と六駆。

そんな中、暁は振り返って。

「行つてきます」

カラシコエカラシコエに向かって頭を一つ下げ。
花も恥じらうだろう笑顔を浮かべながら皆を追いかけた。

天龍様は使われたい②

「なあ、これからオレはどういう訓練をすれば強くなる?」

「……お前もかい」

「お前も?」

「ああ、いや……少し前に龍田からも同じ事聞かれたもんでな?」

龍田のやつも……やっぱ似たような事考えるもんなのかねえ?

いや、同じでは無いだろうけど。

「……うーん」

今よりもっと強くならなきゃならねえ。

理由も無くそう思ったわけじゃない、未だ本調子じゃない様子の大淀。まだまだ海を征くには色んな意味で危ない六駆。それに新任の那珂。

どういう艦隊運用をするかはわからないが、少なくとも今までの様にただ相手を撃沈する事に集中するだけで良いってわけにはいかねえだろうから。

そう、これからは味方を守るという選択肢が生まれるわけだ。

鳳翔さん、古鷹、加古に関しては心配してない。あの三人の強さは悔しいとさえ思える位に知っているからな。

でもだからこそその力を得る。

そのためにも提督へ相談してんだけど……むちやくちや悩んでるな。

「んだよ、オレはもうこれ以上強くなれる余地はねえか?」

「いや。そういう訳じゃないんだけど……そうだな、あえて言うなら天龍。俺にもお前がどうすれば強くなれるかわかんねえんだよ」

わからねえ……か。

初めてあの訓練を受けて、出来るようになってからしばらく経ったけど……そう言えばいつもの訓練でオレに何か言うことは無くなってきたな。

「んじやあ何だ? 時雨や龍田と組み手してるのは意味がねえってことか?」

「うんにゃ、間違いなく意味はあるさ。身体の使い方を覚えるには十分。だけど、天龍の特性……第六感的な力に対する訓練としては何も言えないな」

オレの勘。

提督は第六感なんて言っているが、その力に対する訓練としては微妙、ねえ。ちとよくわからねえな。

「例えばだ、能力を数値化出来たとして。俺から見たら天龍の能力は筋力だとか艦としての力だとかを合わせて六あるとする。そしてそこに天龍の第六感という力が一、乗算されているのが今だとしよう」

「ん？ お、おう」

「以前にも言ったけど隻眼であるからこそ培われた能力だ。言い換えるならば、第六感があるからこそ六の力を十全かそれ以上に発揮出来ているんだ。だから今の訓練をして現段階で第六感以外の力の六ある力を七、八に増やしていくことは可能だと思う」

……ふむふむ。

あんまり意識したことは無かったが、要するにだ。

第六感を得るまで、オレは自分の力を自分で損なわせてしまっていた訳か。言葉を借りるなら隻眼であるという事で減算してしまっていた訳だ。

今は六×一で六。持っている力を十分に発揮出来ている。あるいは一と半分で九程度なのかも知れねえけど。まあその六を増やしていくのが今の訓練……っと。

「んで、だ。天龍が言っているのはそういう事じゃねえんだろう？」

「言ってしまうえば今の一を二、三へと変えていきたいわけだ」

「ああ、そういう事になる、のかな？」

漠然と強くなりたいたいと思っただけだったからそこまで深く考えていたわけじゃねえけど……なるほど、確かに乗算する数字が大きければ大きいほど元の力は大きくなるな。

「うん。そこで最初の答えだ。第六感の存在を気づかせることは出来ても、それを伸ばす方法を俺は思いつかねえんだよ」

「そっか……」

ちつくしよー……提督に相談すれば何とかなるとか思ってたけど……うーん、やっぱそううまくはいかねえよなあ。

「そういう龍田のヤツも同じ事聞いたんだろ？ あいつには何て言っただんだ？」

「ん？ ああ……そうだな、じゃあ同じ様に……天龍、ちよつとここに座って」

そう言っただけで座っていたイスから立ち上がり、俺に勧めてくる。

なんだ？ 何を龍田にしたんだ？

まあ、とりあえず座るか。

「しつかり深く座って……そう、背中もしつかり背もたれに」

「お、おう」

うわ。初めて座ったけどふつかふかじゃねえか。やるな妖精……。これなら提督も快適に執務が出来るだろうよ。

「んで？ これから……ちよつ!？」

「ほいっ」と

……流れるような動きでオレの額に手をくつつけやがった。

え？ なんだこれ？

「ほれ、天龍。そこから立ち上がってみ？」

立ち上がる？ なんかよくわかんねえけどまあやれってんなら

……。

……んん？

「……立てねえ。提督、別に力でオレを押さえつけてるわけじゃねえよな？」

「ああ。力はほとんどいれてないぞ。……そう、絶対に立ち上がるこ
とが出来ないんだよ。行動分解つつてな？ 人はイスから立ち上
がる時は前屈みに。背もたれから背をはなさないで立ち上がれない
んだよ。整理すれば少し前かがみになる、足に力を入れる、膝を伸ば
す……そうして人は立ち上がるという行為を完遂する。まあもつと
細かく分解することも出来るけどな」

不思議なもんだな。確かにこの状態からじゃあイスを後ろに引い

て提督の手から離れないと立てそうにねえや。

ん？　　そういや龍田のやつにも同じ様について……。

「……龍田にもやったんだよな？」

「ん？　　ああ、やったぞ？」

この前顔真つ赤にしてふらふらと帰ってきてたのはでこタツチか……。

いや、オレでもちよつと照れるもんな。龍田なら……ああ致命傷だ、大破撃沈だ。

「……んで？　　行動分解だっけ？　　それを龍田に教えると強くなるのか？」

「あいつは言うなれば超理論派なんだよ。天龍と同じ様に敵の行動を察知しているように見えるけど、その内訳は全く違う。お前は第六感で素早く察知出来るのに対して龍田は相手の動作とか、そういう行動からする予測なんだ」

——平たく言えば、殴りかかってくる相手が居るとして。相手が殴ると決めた時に行動できるのが天龍。殴ると決めてどちらかの腕を振り上げられてから誰よりも早く対処できるのが龍田だ。

そう言葉が続いた。

「何かを殴ろうと思えば自然と腕を引く、引いてから勢いをつけて殴る。ボクシング選手なんかはその場から強いパンチ、手を出す訓練をされていて……要するにそういう特殊な技術を持っているし磨いている。特殊な技術を持っていない人間ってのはな？　　この引くって行為はほぼ無意識だ。イスから立ち上がるのもそう、無意識に少し前傾姿勢を取る。その無意識に介入されれば当然困惑する。龍田が得るべき技術はその無意識に介入する事なんだよ」

察知と予測。その違い。

そして無意識に介入する技術。

そう言えば時雨も言ってたな。

自分は相手をコントロールするけど、龍田は場をコントロールするって。

なるほど、龍田の強さってのは要するに相手の動作から導かれる行

動予測に対して対処する速さがすごいと。

あいつは確かに目が二つ以外にもあるんじゃないやねえかって位視野が広いと思っていたけど。行動予測を作戦内容に照らし合わせてその時、その場で最善と思われる行動を取っていたって事なのな。その結果が戦場のコントロール、か。

「深海棲艦にも当然予備動作であったり、艦隊としての動きから見えるものはある。今までセンスの上でやっていたであろう事に実をつけるための視点を持つことだって話だ」

「それが行動分解を理解する事で磨かれるわけだな？」

提督は頷く。

いやまあ、あの時帰ってきた龍田見て大丈夫か心配になったけど。あの日からちよつと違う目で訓練を見てたり参加してたりしたし……確実に前進はしたんだろう。

いや、うん。そう思いたい、思っていないよな？ 龍田よう。

「それが感覚で理解出来る天龍には必要ない……というより、それを意識したら折角の第六感に悪影響が出るだろう。要するに第六感へと素直に従えなくなるから気にしないように」

「ああ、わかった」

まあそうだな。

と言うか、ふと思ったけどよ。

オレは気配を感じ取って動けるって話なら、なんで提督の手は避けられなかったんだ？ そう、オレの額に触れるっていう気配に対して動けなかった理由だよ。

いや、実際この感覚を得てからだが、誰かがオレに何かしようとする時には自然と何かしらを感じるんだよな。訓練の時然り、なんてこと無い時然り。

改めて、思い返してみると提督にだけ何も反応できねえ。

……んん？

いや……まあいいか。

龍田は提督が言うように今までセンスでやっていた部分をしっかりと解剖して理解しようとしている。確かに感覚派のオレがそれを

やったとしても自分の感覚を邪魔する力になってしまいうだろうよ。
じゃあ何だ。

「やっぱ……オレはこれ以上強くなれねえのか……」
結局の所そういう事なんだろう。

いや、六を増やす事は出来るって言うてくれてんだ。ならそれで十分じゃねえか。

「天龍」

「うん？　なんだ？」

少し落ち込んじゃまって下を見てた。

その顔を提督に呼ばれて見上げてみれば。

「確かに自分を磨き上げる天井は見えたのかも知んねえけど。お前には他の誰にも出来ねえ事があるんだぜ？」

「……そりゃ、何だ？」

他の誰にも出来ないこと？　オレが？

「自分を乗算出来ねえかも知れないけど……お前は皆を乗算する数字になれると俺は思ってる」

「……はあ？」

皆を乗算？

……意味わかんねえ。

「意味わかんないって顔してるな？」

「そりゃ意味わかんねえからな」

そのままだ。そのままそっくりお返しする。

変な慰めなんて要らねえんだよ、特にお前からは。
だけど。

「それで良いんだ、その天龍が良い。そのままのお前で居てくれ……
じゃないと第一艦隊旗艦を……いや、うちの艦娘筆頭を誰と言えはい
いかわからなくなっちゃう」

艦娘、筆頭……？

はは……いや、何言ってるんだよ提督。そういうのはエースになるだ
ろう夕立とかさ。

そんな情けない事を思ったオレの頭に、ぽんつと手を置いて笑う提

督の顔を見ちまうと。

……ああ、わかった。

今もそうだ、何も反応できなかったその理由がわかったよ。

「まあ第六感を磨く訓練も考えてみるよ、すまんが少し考えさせてくれ」

「……おう」

そう言っただけのままオレの頭を撫でる提督。

あー駄目だ。フフフ……最高だ。

要するにオレはきつと。

こいつになら何をされても良いって心底思ってるんだ。何でもしてやりたい、叶えたいと思ってるんだ。

そう、オレは提督の全てを受け止めたいと思ってるんだ。だから避けるという選択肢が心にも身体にも感覚にもない。

それくらい、ありったけのオレで提督を信頼している。

全く困ったもんだ。

これじゃあ龍田ヒトの事を言えたもんじゃねえ。まさかこの天龍様がこんなになっちゃうとはな。

提督はこんなにもオレ達を変えた。前にも後ろにも進めなかった俺達を。

なら六駆アイツや大淀ちだつて大丈夫。

オレが信じるお前 提督提督が信じるオレがいるならば天龍龍がいけないわけにはいかねんだから。

大淀のある一日① 古鷹さんは伝えたい①

「風邪……だな」

「風邪、ですか……」

体温計を睨みながら提督はそう言う。そして表示されている数値を私に見せてくれた。

三十八度五分。

その数値は疑うまでもなく今の私の体温で。

なるほど、つまり。

「艦娘って……風邪を引くものなんですかね？」

「何を他人事のように言ってるんだ」

どうやら私は風邪を引いてしまったらしい。

呆れた様な顔を向けてくる提督に申し訳ないと思う気持ちとは別に、感想は口から出た通り艦娘でも風邪を引くものなのかという感じだ。

いや、頭が回ってない証拠なのかしら。うん、ぼーつとしてるのは間違いない。

「まあそんな訳で大淀。今日はオフな？」

「で、ですが書類が……！」

南一号作戦が発令されたことで最前線であるうちがやらなければならないことは多い。

ここへと集まってくる戦力……艦娘の部屋の割り振り。補給物資確保の算段。挙げればきりがなし、それを行うための計画書だって山のようにある。

何より私が提督に任せられた部分だってある訳で。そんな中オフだなんてとんでもない。

「いいから。そんな状態じゃあ仕事になんねえってば」

「あう……」

思わず起き上がった私の肩を優しく押さえて寝かせる提督。

うう……申し訳ありません……。

そうですよね、こんな状態で書類なんてすればミスがいくつ出てし

まうかつて話ですし……。

なんでこんな時に風邪を引いてしまおうでしょう。折角提督の力になれると実感出来始めた所だと言うのに。

我ながら情けない……。

「……風邪引いてネガティブになる気持ちもわからない訳じゃねえけど。落ち込むな？ 大丈夫だからさ。とりあえず今日はゆつくり休んでおいてくれ」

「はい……」

そう言つて私の頭を撫でてくれた後、少し慌てた様子で部屋から出ていった。

それもそうだ。

自惚れじゃないと信じたいですけど、私が書類業務を手伝うようになってから大分と進みが良くなったと思う。

その私がこうして風邪に倒れてしまったんだ、私に構っている余裕は無くなってしまったはずだ。

いや、その。構つて欲しいという訳ではなく。

……うう、風邪で弱つてるから人恋しいのでしょうか。きつとそうです。

はあ……私つて艦娘はどうしてこう上手く出来ないのか。

大本営に居た時にしろ、あの作戦の時にしろ。

そういう星の下にでも生まれてしまったのでしょうか。もしそうなら恨んでやる。むしろ主砲撃つてやる、偵察機で逃しはしないわ。

「はあ……頭、痛い」

小さくぼやいてみる。

小声だったのにも関わらず静かな部屋はそれを僅かに反響させた。

「寂しい、ですね」

何も考えていなかったのに、誰からの返事もなくただ反響した自分の声を聞いて勝手に声に出た。

寂しい、ですか。

不思議と納得出来たその言葉。

こんな事を思ったのはもしかしたら初めてかも知れない。それも

そうだ、今までそんな余裕は色んな意味で無かったもの。
本当に不思議。

あの頃と今。どっちもやっている事はそう変わらないはずで、もし
かしたら最前線であるここに居る方が忙しいのかも知れないのに。
どうしてこうも寂しがる余裕があるのか。

「提督……」

それはきつと彼のおかげなのだとは分かっている。
具体的に何がどうという事ではなくて、きつと提督が私を認めてく
れたからなんだろう。

だから私は無理に背伸びをする必要もなく、あるがままで居られる
から。そしてやりたいと思つてやる事だから辛くもない。

言つてしまえばここは私が私で居られる場所なんだ。

「それなのに……」

あ、だめ。涙が出ちゃう。艦娘だもん。
ではなく。

健康管理なんて基本中の基本だ。

私達は海を征く者、戦う者。それが自分に負けていてどうして敵に
勝つことが出来ようか。

あ、だめ。落ち込んじゃう。艦娘だもん。

「寝ましよう……早く治さないと……」

そうだ、それが今の私がしなければならない仕事。
早く体調を回復させて仕事に復帰しないと。
きつと提督もそれを望んでいるはずだから。

「うん？ はい？」

目を瞑つてしばらく。少し眠気を感じ始めた頃、ノックの音が響い
た。そうして開かれたドアの向こうには。

「良かった。まだ寝てなかったな？」

「て、提督？」

お盆を持った提督が居た。

……はい？

「すまん、寝る前につて慌てて作ったから味の保証は出来ねえんだけど……」

そう言いながら先程まで居た所までやってきて。

お盆の上にあった土鍋の蓋を取ってくれる。

……いい匂い。

「お粥、ですか？」

「ああ、やっぱ風邪にはこれだよな。龍田に頼もうかと思ったんだけど生憎捕まらなくて……ほれ、熱いから気をつけろよ？」

蓮華を渡される。

えっと？ 駄目だ、いまいち状況が把握できない。

「えっと、仕事はどうされましたか？」

「ん？ さつき言っただろ？ そんな状態じゃあ仕事になんねえつて」

えーと……それはつまり、あれですか。

私が使い物にならないっていう意味じゃなくて。

「何固まってるんだ？ ああ、それともあれか」

「え？ え？」

「ふーふー……うっし。ほれ、あーん」

ふあい!? ちょっと待ってください提督!? それは些か破壊力抜群ですよ!?

「大淀？ 手が疲れるから食べてくれると嬉しいんだが……」

「あ!? は、はい！ 頂きますー！」

あちち……。

うん、匂いの通り美味しい。食欲はあまり無かったんですけど、これなら食べられそうです。

……私の顔が熱いのは熱のせいですし大丈夫。

大丈夫？ うん、何が大丈夫？ いやいや大丈夫です。

「……ちゃんと仕事もするから安心してくれ。快復した時にやること無くても泣くんじやないぞ？」

「提督……」

流石と言うべきか私が心配している事へのフォローもバッチリで。

笑顔でそんな事を言われると困ってしまいます。

だから困っているのを隠すように次の一口を要求してしまう。

そうしてパクパクと食べて。

「ご馳走さまでした」

「おう、お粗末様でした」

お盆を隣に置く提督。

優しいな表情を私に向けてくれる。

不意に、その表情を見て理解した。

そう、提督はあの言葉通り私を家族みたいに……いえ、家族として扱っているんだと。

「もう、私に構っている暇があるなら仕事して下さいね?」

「手厳しいなあ。心配で手につかないんだって」

それを確かめたくてそんな事を言ってしまう。

だってそうでしょう? 私だって、家族というものがわからないのですから。

「それでも、ですよ。そんなんじゃないやあ私が心配でゆっくり休めません」

「あらら、こりゃ一本取られたか? じゃあ大淀がゆっくり休めるように仕事しますかね」

家族の形なんてわからない。

だけど提督が向けてくれるこれが親愛だというのなら、私も私の親愛を持って返そう。

「はい、そうして下さい。私の快復を想うなら」

「ああ、そうするよ。大淀にゆっくり休んでもらいたいからな」

提督につられて私も笑う。

そう、今の私はきつと自然な笑顔を浮かべられていることでしょう。

「いつてらっしゃい、提督」

「おう。おやすみ大淀。また来るよ」

あなたは私の家族であり、鏡なのですから。

「提督さーんっ!! 褒めて褒めてー!!」

「おわっ!? 全く……仕方ないやつだなあ」

良いなあ……。

もうお馴染みと言ってもいいこの光景。

MVPを取った夕立ちちゃんがダイブして、困ったような、それでも嬉しそうな笑顔で受け止める提督。

そしてそれをとつても羨ましく思うのも慣れたもので。

「古鷹もこいつのお守りは大変だっただろう? お疲れ様」

「あ、いえ。全然大丈夫です」

製油所沿岸地帯の掃討戦。

最近では徐々に艦隊の枠を越えて色々な編成を試しながら出撃する機会が増えた。

最初こそ色々戸惑ったけど……ううん、未だに戸惑いっぱなし。やっぱり根本の違いっていうのは中々埋められないものだね。

提督が笑顔を向けて労ってくれるけど、その距離はきっかり三メートルの距離。

その事実思わず苦笑いを浮かべちゃう。

「あー……古鷹? やっぱりきつかったか? すまん、次はもうちよつと考えてみる」

「あっ!? ううん! 違うんです! 問題ないですよ!」

両手を振って違いますと言ってみれば提督は首を傾げながらも、まあ考えておくよと言って次は時雨ちゃんに声をかけに行った。

そう、あの漁船の上で手を握れたのは本当に身体が動かなかったからというだけで。やっぱり私の恐怖症は治ってなかった。

それが分かってからというもの、提督は私と会話をしたり何かをしたりする時は必ず三メートル程の距離を取ってくれている。

その気遣いは嬉しく思う。本当に。

ただ、夕立さんのように何の気兼ねもなく提督と触れ合える事がとても羨ましく思う。

あの船の上で提督の手と触れてしまったことで私はきつと――。

「欲張りになっちゃったんだ……」

こうして会話するだけじゃ物足りないと思ってしまう。

昔は……ううん、ついこの前までならこんな事思わなかった。私の事を知ってもらって、誰よりも上手く私を使える人になって貰えたならもう何も言うこともないくらい満足だったはずで。

だけど知ってしまったから、温もりっていうものを。

それを知った私は、とても欲張りになってしまったんだと思う。

「古鷹？ どうしたんだい？」

「えっ!? あ、時雨ちゃん……。もう労われるのには満足したの？」

あつ……。何処かトゲトゲしい言い方になっちゃったかな？

そんな心配をするけど全然意に介する事もなく。

「本音を言えばもつといっぱい言われたいんだけどねっ！ でも今回は夕立がMVPだし……。でも僕だって——」

「あー……。うん、そうだね？」

何か熱弁モードに入っちゃった時雨ちゃん。押しちゃいけないスイッチってあるんだなあ……。うん。

「そうだ、今日は各自申請していた物品が届いていると思うんだけど、ここに運んでくるまでにちよつとした事故があったそうだな」

「事故？ 配送業者さんは大丈夫っぽい？」

「ああ、幸い怪我人は出なかったらしい、だけど荷物が解けてしまったみたいだな。各自戻ったら確認してみてください、もし破損物等あった場合は俺に言ってくれな」

「わかったよ」

事故かあ。

うん、でも怪我人が居なかったなら何よりだね。

あ、でも今回色々注文したから……。大丈夫かな？ 急いで確認しないと。

「えーと……。？」

注文書の控えを見ながらチェックをしていく。

部屋の外に置きっぱなしだったし、加古もまだチェックしてないん

だろう。ついでに確認してあげようかな。

「——私のは大丈夫みたいだね。加古のは……何これ、酒盛りセット？」

お酒用のグラスにマドラーに……なんだろこの小さいバケツみたいなもの。うわ、ジョッキまである。ビーフジャーキーにサラミまで……まさに酒盛りセットだ。

え、まっけてまっけて。加古このセット以外……あと全部お酒じゃない。えー……。

加古、お酒こんなに好きだっけ？ あそこにいた時飲んでる所なんて見たこと無いし、飲んだことすら無いと思うんだけど……うーん。「まあいつか……ってあれ？ これなんだろう？」

箱の底に入っていた三冊の……日記帳？

私と加古の注文書には何処にも書いてないや。

事故があったって言うてたし、混ぜっちゃったのかな？ 誰のだろう？

「でも日記かあ……」

しげしげと眺めてしまう。

表紙にはワンポイントで犬のイラスト……これはゴールドデンレトリバーだったっけな？ あ、もう一冊の方はボーターコリーね。

鍵付きだし、よっぽどしっかり書いてるんだろうなあ。

日記。

そうね、私も折角新しい環境に変わった事だしやってみ——

「——そうだ」

そうだ、そうだよ。

何も別に触れられなくたってコミュニケーションは取れるじゃない。

うん、少し恥ずかしいけどこれなら。

「そうと決まれば……ん？ はい？ 開いてますよー」

立ち上がった時ドアを誰かがノックした。返事をして招き入れてみればそこには。

「あ、ごめん。今、大丈夫かな？」

「いらつしやい時雨ちゃん。荷物を解いてた所だからちよつと散らかつてるけど良いかな？」

「ううん、ちょうど良かった。その方が都合良くて……古鷹の荷物の中に日記帳入ってなかったかな？ 僕と夕立が注文してたんだけどこつちに入ってなかったんだ」

あ、さっきの日記帳時雨ちゃんと夕立ちちゃんのなのかな？

「日記帳って……これかな？」

「あつ！ うん！ それだよ！ 良かった、もう僕も夕立も残りペー
ジが少なくなっちゃって……」

手渡すとほんとに嬉しそうな笑顔。

時雨ちゃんはともかく、夕立ちちゃんは何かイメージが湧かないけど……。あ、うん、そんな事思うのは失礼だね。

でもそうだね、私としてもちよつと良かったよ。

「あの、時雨ちゃん」

「うん？ なんだい？」

「その日記帳、三冊あるよね？ あの、もし良かったらなんだけど――」

「謹啓……いや、手紙じゃないんだし」

手元には時雨ちゃんから貰った日記帳。ちなみにワンポイントで描かれた犬はボルゾイっていう犬種らしい。

そんな日記帳を開いた私はいきなり躓いている。

「うー……交換日記の書き出しってどうすればいいのー……」

そう、私に響いた天啓。交換日記。

やっぱり触れられないという事を気にしては何をするにも気が引けてしまう。

だったらそういつた接触なしにでも出来るコミュニケーション。それが交換日記。

我ながら少し乙女趣味かとも思うけれど、名案だと思う。

時雨ちゃんに譲ってもらうために説明してみれば。

――その手があった……。くそう、ここの艦娘の乙女力は化物か

……。

なんて言いながら地面に両手をついてた。乙女力？
ともあれ快く譲ってくれた。

これで後は提督にお願いするだけなんだけど……。

「やってくれるかなあ」

私に興味を持っていてくれるだろうか？

私の言葉に耳を傾けてくれるだろうか？

やってくれたとしても、興味を引かれないと止めてしまわれないだろうか。

そんな不安がある。

「それでも……」

知って欲しい。

重巡洋艦の良い所……なんて言えばちよつとごまかし過ぎかな？

私の、皆の良い所を知って欲しい。

交換日記れをきっかけにいつか気兼ねなく会話出来たりする事が出来れば。なんて思いも当然ある。

だからこそ、書き出しから悩んでしまう。

書き出しとは世界の入口。

入ってくれるかどうかはここにかかっているんだ。

「だったら大胆に……」

大好きな提督。

「うわあ!? うわ、うわあ!?!」

駄目です駄目です。これは駄目だ。消しゴムで慌てて消す。

「あふう……書き出し以外ならいくらでも思いつくんだけどなあ」

あの戦いが無事に終わったこと。どれだけここに来てから毎日が楽しいかということ。

それこそ時雨ちゃんじゃないけどこの日記帳を一冊使い切っても足りないくらいには。

「ほんとに……こんな事で悩めるなんて」

間違いない幸せだ。

かつてやったことがある提督への上申書。あれは目を通されるこ

と無く破られてしまったけど。提督ならきつとそんな事しない。そう信じられる。

「うん、そうだ」

どんな書き出しでも良い。きつと目を通してくれる。なら最初からそう書けばいいんだ。

「ありがとうございます、提督……つと」

私達を見つけてくれて。

私達を大事と思ってくれて。

そうしてお互いの、皆の良い所を見つけあって、教えあって。

そうだ、形式なんてこれから作っていけばいいんだ。それはこれからきつと出来る。

「うん。そうだよね、これから出来るんだから、ね」

結びの文は決まっている。

「親愛なる提督へ、お返事お待ちしております」

あらあら龍田さん②

——受けた傷つてのはな、その傷を与えたやつにしか治せねえんだよ。

提督が少し寂しそうに言ったその言葉を、ずっと考えている。

やり場が無くて、名前のつけられない想いを暴力に変えた事はある。

かつて天龍ちゃんが役立たずと罵られた時だって、この鎮守府に来た時だってそう。

とことん不器用な私だから、どうすれば良いのかわからなかった。それでもあの時ははつきりわかった。

そう、あれは殺意だった。

どうして提督が頭を下げているの？ あなたは何も悪くないというのに。

どうして提督が砲塔を突きつけられているの？ あなたは誰も傷つけていないというのに。

そうだ、全てはこいつのせいだ。

なら排除しなきゃ。

意識的に考えついたわけじゃなかったわ。その時は無意識。そう、無意識に私は艤装を展開しそうになっていた。そしてそれを止めたのは天龍ちゃん。

今にして思えば、だけど。本当にありがたいと思う。

あの時私の腕を掴み、目で耐えろと言ってくれた天龍ちゃん。

その天龍ちゃん自身も歯を食いしばって、もう片方の手のひらは血が滲みそうな位固く握りしめられていて。

それに気づいたから。……本当になんとか思いとどまることが出来たんだと思う。

それでも電ちゃん泣き声が聞こえた瞬間堪えきれなくなって部屋から出ちやっただけど。

後を追ってきてくれた天龍ちゃんは涙を浮かべていた。

その事を指摘すると、お前だつてと言われて初めて私も泣いていたんだと気づいた。

戸惑った。涙の理由がわからなくて。

六駆の子達へと想いが届いた事が嬉しい？ ——もちろん。

六駆の子達だけではなく、私と天龍ちゃんの事も忘れて無かった事が嬉しい？ ——それもある。

でもそれ以上に。

「悔しい……！」

口から勝手に言葉が出てきた。

そう、悔しかった。

結局私は救われてばかりだった。全部提督がやってくれた。

次こそは私かと思っていたのに、何も出来なかった。

気づけば涙が止められなくて、天龍ちゃんに抱きしめられている。

「……俺も同じだ。だからよ、せめて——」

——後始末はしようぜ。

驚いた。

思わず殺すのかと聞き返してみれば。

「馬鹿言うなって。そんな事したら提督の顔に泥塗っちまうだろ？」

なあに、二度と提督の任に就こうなんて思わなくしてやろうってだけだ」

そう言つて天龍ちゃんは笑った。

「はふう……」

——次は我慢しないから。

そう耳元で言えばアイツは逃げるように帰っていった。

不思議とその姿を見た後、気分がすっきりしている事にびっくり。

「受けた傷は、その傷を与えた人にしか治せない。かあ……」

私はアイツに傷つけられていたのかな？

もしそうだとしたら、きつとあれで私の傷は治ったんだろうね。

あれからしばらく、六駆の皆がどうなるのか心配だけど……きつと大丈夫。

「また、提督頼りになっちゃうけど……」

かと言ってどうすれば良いのかなんてわからなくて。そんな自分に少し嫌気がさしたりして。

そんな事を考えながらぶくぶくと湯船に深く身体を沈める。

何だかんだで収まったあの場だけ……どうして提督は謝ったのかしら？

謝る必要があったのはアイツで、提督には欠片もないと思うけど……。そう今でも思ってるのに、提督はあの時本当に、心の底から謝罪してたと思うわ。

言ってしまったえば、何の関わりも持っていないなかった六駆の子達。その為にあそこまで心を痛める理由がわからないわ。

「のぼせるぞー?」

「えっ!? 天龍ちゃ——わぷっ!」

び、びっくりした!

もーいきなり頭からお湯かけないでよ! あ、髪を纏めてたタオルが湯船に……もう!

「天龍ちゃん?」

「あははっ! わりいわりい! 折角の風呂で何難しい顔してんだと思ってるな!」

もー! 悪いなんて思ってないでしょう? ほんとに天龍ちゃん
はー。

「よつと……おー、いい湯加減だなあ。流石妖精、入渠も風呂もバツチ
りだ」

「……そうねえ、ほんとに染み渡るわあ」

「……龍田、何かおばさん臭いぞ?」

「うぐっ」

お、おばさんって何よー! 失礼しちゃうわ!

このお肌のハリを見なさい? 何処かおばさんなのかしらー?

「ははっ! 嘘だって! 提督の為に毎日磨いてるモンを貶したりし
ねえよ!」

「ちっ!? 違うわよっ!」

「そそそ、そんな事無いんだからねっ!! この前の発注で化粧水とか
そんなの全然気にしてないしっ!

「艦娘にも効果があるのかしらなんて思ってたないわ!」

「あーはいはい、オレが悪かったよ。ほんとにのぼせちまうぞ?」

「だっ、誰のせいだ?!」

「あー? オレのせいかな? 違うだろ? あえて言うなら提督のせい
だよ」

「う、うー……」

「か、からかわれた……」

「最近の天龍ちゃんキライよー……」

「んで? 何悩んでたんだけ?」

「……知らないわー」

「だから悪かったって。オレが入って来たのも気づかないくらいだ。
ほれ、おねーさんに話してみ?」

「お姉さんって……何急に一番艦ぶってるのよ、もう。」

「……でも。」

「……提督は、なんであの時謝ったのかなー」

「うん?」

「ほら、アイツが来た時の話。六駆の皆に謝ってたでしょ? ずっと
考えてるんだけどわからなくて」

「——俺も提督だから。」

「そう言った。」

「確かに立場は同じだと思っけど——」

「ああ、あれだろ? 責任を取るって意味だろ?」

「責任?」

「言い換えると、だ。今まで間違った扱いをしていた、もう一度チャン
スを『提督』に与えて欲しい。って事だろうよ」

「チャンス、ね。」

「そっか、そのチャンスに責任を持つって事……ね。」

「そっか。うん、そうなんだ。腑に落ちたわ。」

「響なんかは何となく理解したのかもしれないねえな、何も考えていない

ようで考えてやがる。暁も……そういう気持ちを向けられて、応えたいと思っただらうよ」

「……うん」

「しっかしあの後のアイツには笑えたな？ まさかあの場で——」

腑に落ちた。

けど。

「天龍ちゃんは」

「——ん？」

「何でわかったの？」

提督の真意……と言うか、言葉に内包されていた気持ち、意味。

私がいくら考えてもわからなかったそれ。

「提督に教えてもらったの？」

「龍田……」

ああ、悔しいな……ううん、違う。

嫉妬ね、これは。

なんでもないように、当たり前かのように答えた天龍ちゃんへの嫉妬。

まるで、私が提督のことを何も理解できていないかのような気持ちになる。

私だって……。

私だって、天龍ちゃんと同じようにこの鎮守府を、提督を守りたいと思ってるはずなのに。

「どうして？ 何で天龍ちゃんはわかるの？」

羨ましい。

きつと天龍ちゃんが言ったことは正しい。提督はただ謝ったんじゃない、きつと六駆の子達へと責任を持つと宣言したんだ。あの人はそういう人だ。

だから私だって前を向けたんだ。自暴自棄になりそう……いやそうだった私を掬い上げてくれたんだ。

なのに、どうして私にはわからないの？

「なあ、龍田。オレはよ、アイツの最高の道具になりてえ」

「……道具？」

「そうだ。たとえその為にアイツがオレに死ねと……言う訳ねえや。そうだな……この身体を求められても、か？ 喜んでなんでも出来る」

かかか、身体ってっ!? それはつまりその!?

「まあオレ如きの身体じゃあ満足してもらえねえかも知れないけど……ってどうした?」

「にやつ!? にやんでもないわー!」

もうっ! 急に何を言い出すのよ天龍ちゃん! 今は真面目に……。

「提督の意思を、想いを貫き通す為の道具カになりてえんだ……だから誰よりもアイツの言葉、想いを理解してえと思ってる」

……道具。

きつとあの人はそんな風に自分を思っただけで欲しくないと思うんだけど……。

天龍ちゃんの目は真っ直ぐで。まるで目の前に提督がいるかのように見据えていて。

「あのクソ提督も……深海棲艦も、あらゆる困難をも貫ける刃に。一振りの刀になりたいんだ」

「……」

ああ、そうか。そうなんだ。

天龍ちゃんはきつと、提督の想いそのものになりたいんだ。

そしてそれを担い、海を征きたいんだ。

天龍ちゃんは、提督に全て捧げてるんだ。

「アイツはき。何処かちよつと狂ってる」

「えっ?」

「考えてもみろよ? オレにせよ龍田にせよ……六駆にせよ。アイツはオレたちが艦娘であるっただけで簡単に我が身を犠牲にしようとする。犠牲ならオレや龍田が着任した時、時雨達の盾にでもなんでも使おうと思えば使えたはずなんだ……実際、オレはそう覚悟してたし」

それは私も思っていたことで。

確かにあの時私を囮にでもなんでもすればいいと確かに考えていた。

でも、しなかった。

「アイツは簡単に傷つこうとするんだ、オレ達の代わりに。……でもそんなの、艦娘の名折れだろ？ 海を、日本を守護するはずの艦娘が提督一人守れないなんて」

「……うん」

「アイツが傷つくなんて許せねえ……認められねえ。だからオレはアイツの道具意思になりたい。意志を貫く為の刃になりてえんだ。アイツが傷つくことの無いように」

……そんな事考えてたんだ。

ああ、すごいな天龍ちゃん。私とはぜんぜん違う。

私は……そんな事、何も考えられなかった。ただ守りたいと思っていただけで、それでも結局何も出来なくて。

「……すごいな、天龍ちゃんは」

「はあ？ 何だよ急に」

「ううん、私と違って……何も出来ない私とは全然違うもの。ちよつと……羨ましいいなー」

勢い良くこつちを振り向いた天龍ちゃんから水しぶきがあがる。

でもそれも全然気にならなくて、心底羨ましく天龍ちゃんを眺めちゃう。

「……バツカ、羨ましいってのはこつちの台詞だったの」

「え？」

「龍田、気づいてねえのか？ お前が楽しそうに時雨やら夕立やらと笑ってる所を見た提督がどんな顔してんのか」

私が笑ってる時？

え？ 提督どんな顔してるの？

「……はあ、ほんつとお前にゃ敵わねえよ」

「ちよ、ちよつと天龍ちゃん!？」

ぎばつと立ち上がった天龍ちゃん。

私に背を向けてお風呂から出ようとする。

「……すんげー嬉しそうに……いや、幸せそうな顔してんだよ提督。オレにやあんな顔はさせられねえよ」

「……」

そんな顔してたんだ。提督。

どうしよう？ え？ どうしたらいい？

それを知ってしまった私は……これからどうしたらいい？

「それによ、オレもそんなお前がいるからさこんな事思えるんだぜ？

お前が笑ってるから、心置きなく刃になりたいと思える。……これ

からも頼むぜ？ 龍田よう」

「……うん」

ああ、そうか。そうなんだ。

私も、提督の幸せになれていたんだ。

「……胸、煩いなー」

鼓動が煩い。ドキドキと、こめかみまで昇ってきている。

そうだ。じゃあこうしよう。

「天龍ちゃんが貫く刃になるのなら……私は幸せを守る盾になるよ」

何も出来ない私だと思ってたけど。

何も思い浮かばなかった私だけだ。

笑おう。

それがあなたの幸せなら。

ああそうだ。私は確かに幸せを作り出すことは出来ないかも知れない。
ない。

だけだ。

「あなたの創る幸せを守る事は出来るから」

加古に乾杯① 那珂ちゃん頑張りますっ①

「かんぱーいっ!」

「おうっ! おつかれさんっ! 乾杯っ!」

ジョッキを口に運んで中身をぐびつとね!

「ぷはー!! くうく! たまらないねっ!」

「あはは、それなら良かったよ」

世のお父さん方はこの一杯に生きているなんて言ってるらしいけど、その気持ちがよく分かるね。

以前から興味はあったんだけど、こうして初めて飲んでみたからこそわかることもあると思う。

これは確かにたまらない。喉を通っていく苦味のある炭酸飲料、ビールって飲み物が身体に染み渡っていく感覚。

「ほれ、こっちも食え食え」

「わあい、いっただっきまーす!」

差し出された提督お手製のチャーハンに手を伸ばせば相変わらずの美味しさ。

何気にレタスの交じった鮭チャーハンとか、和風シーチキンチャーハンとか提督のチャーハンレパートリーは豊富で。今日はお酒と一緒にって事で豚肉とキムチで作ってくれたみたい。

ピリツと少し辛めの刺激が更にビールを口に運ぶ要素になっていて……ああ、しあわせえ……。

「落ち着けて、一応まだまだ用意してるからさ」

「う……無理だよ提督。美味しいお酒、美味しい料理! 何より提督が居てすすまないわけじゃないじゃん!」

あの海域からなんとか無事に帰ってこれて。皆の修復が終わって。

あの時気恥ずかしくて言っただけだった約束とも言えない約束を、提督は守ってくれた。期待してなかったといえは嘘になっちゃうけど、やっぱり嬉しい。

そんなもんだから、あの会議が終わった後こっそりと。

——今夜俺の部屋に来てくれ。

なんて言われた時は思わず夜戦のお誘いかなんかだと思って慌ててお風呂に入ったもんで。長湯を古鷹に訝しまれた時はちよつと焦っちゃったよ。

ドキドキしながら部屋に入るとビールやら焼酎やら日本酒やらに囲まれた提督が居てねえ。

恥ずかしい勘違いと言うか嬉しい誤算だったなあ。

「いやいや、俺があんまり飲めないからさ。ゆっくり気味の方が嬉しいんだよ」

「え？　そ、そう？　もう、しょうがないなあ」

いや、あたしも自分が強いか弱いかわからないしそう言ってくれるのはありがたいんだけどね。

でもそうなんだ、あんまり飲めないんだ。

「すまん。とは言え加古が満足するまで付き合いたいからさ、のんびり楽しもうぜ？」

「お？　大きく出たねえ？　あたしを満足させることが出来るかなあ？」

あはは、嬉しいな。ほんとに提督の口から出る言葉は心地が良い。帰ってきてくれとお願いされたのもそうだし、この人の当たり前は本当に心へと響く。

あたしを望んでくれている。

疑いを持つ余地なんて無い、すんなりと自然にそう思えた。

そうだ、折角のお酒の席だし。

「ねえ、提督？　あたしって中途半端なのかな？」

「中途半端？」

中途半端。

それはずつとあたしが言われ続けていた言葉。

職場の飲み会で愚痴なんて、当たり前だよな？

「戦艦のように火力が出せるわけでもないし、駆逐艦のように足回りが優れているわけでもない。それにこんな性格でしょ？　あたしも自分で中途半端だなあなんて思うんだ」

もうちよつと言うなら。

あの鎮守府にいた時、古鷹と一緒に出撃をしないとときのあたしは全然活躍できなかった。多分、見込まれている戦果は普通の重巡洋艦以下だったと思う。

何度かの機会で見抜かれて、ため息交じりに古鷹と一緒に出撃するよう命令されたのは良かったと言うべきか情けないと思うべきか。

それに、そうして古鷹と一緒に出撃してようやく求められた普通をこなせるようになったあたし。

それは言い換えれば一人では何も出来ないとも言えると思うんだ。

一人で何も出来ない重巡洋艦。重巡洋艦として見込まれない半端者。

あ、駄目だ。何か落ち込んできた。

そんなあたしに提督は。

「あー、確かにそうだな」

「あはは……やっぱりそうだよねって、うえええ!」

笑ってそうだと言いつつ切った。

あれ？そこはこう、そんな事無いよとか言ってくれる場面じゃないかな!? しかも何でそんな笑顔なのさっ!

「いやいや、落ち着けて」

「う、うー……」

落ち着けないっていうか落ち込むよ。

この人なら違うって言うってくれると思ってたのに……。

「確かに加古に限らず重巡洋艦ってのは戦艦みたいに火力が出るわけでもないし、足回りが特筆して良いとは言えないな」

「……」

「偵察機も飛ばせるし、徹甲弾も積める。だけど軽巡洋艦のようにソナーや爆雷を積める訳じゃないから潜水艦相手には無力。うん、実中途半端で劣化戦艦、軽巡洋艦の方が使い勝手がいいと言われても仕方ないな」

あ、あれ？なんだろうあたしトドメさされてる？

と言うかあの提督でもここまで言わなかったよ？え？泣いていいかな？

「うん、中途半端で器用貧乏だ。だが、それがいい」

「……え？」

「それがいい？」

「それが良いって提督。もしかして馬鹿なの？」

「いや、そこで憐れみの目を向けられる意味がわからんが」

「いやー……だつてさー」

「だけでもねえよ。あのな？ 俺が思う重巡洋艦ってのはその中途半端が魅力なんだよ」

中途半端が魅力つて……なにさ？

そんな事を思いながらじとーつと睨んでみると、提督はジョッキを叩ってから。

「言つてしまえば重巡洋艦には苦手が無い。潜水艦には無力かも知れないけどな、それは役割の問題だし。幅広い装備の幅を間違えなければどんな戦場、戦況にも対応できる。それが俺の思う重巡洋艦だ」

「そ、それはそうかも知れないけど……」

「まあ確かに俺は提督としてまだまだ未熟だからなあ。そんな考えが間違いかも知れないし、足りてねえかも知れないけどさ。それにな？」

「う、うん」

「そんな俺に重巡洋艦の良い所を教えてくださいるんだろ？ 古鷹やお前がさ」

……あーもう、この人はっ！

「ちよっ!? おいおい！ そんな一気飲みは！」

「……ふはあ！ ああもう！ わかったよ！ 古鷹じゃないけどさ！ 教えてあげるよっ！ もうっ！」

そんな事言われたら見せなくちゃいけないじゃん！ 見せたいって思っちゃうじゃん！ 良い所っ！

ほんとにこの人はずるいよ。

多分自分で言う通りまだまだ提督としては未熟なんだろうけど、でも。

支えたいって思っちゃうじゃん。あなたの力になりたいって思っ

ちやうじやん。

「……提督言ったよね？ メリハリが大切だつて」

「お、おう。言ったぞ？ 加古にはそうして欲しいとも」

あー無理して一気飲みなんかしちやつたからかな？ 頭がふらふらするー。

「とうっ！」

「う、うお!？」

あーあつたかいー。提督はあつたかいなー。抱き心地最高だよー。

「か、加古さんや?」

「……今はおやすみ、だらけちゆうだからさー……へへーすっかりあつたしを支えてよー?」

ああうん。

ほんとにあつたしは半端者だつたみたい。

海では古鷹に支えてもらつて、日常では提督に支えてもらわないと駄目なんだなあ。

「俺としては役得だけど……つてそれ、俺のビール……」

「ふへへー……ていとく? お酒、おいしいねえ? こんなんじや、

酔っ払つてもしかたないよねー」

「つたく、仕方ないなあ」

「にへへー」

そうそう、仕方ないんだよ? 提督。

半端者あたまを酔こんなわせたのは提督あなたなんだから。

しつかり、責任持つて面倒見てね?

「もうっ! こんなんじや本末転倒なんだからねー!」

「うう、すまねえ……」

流石の那珂ちゃんも怒つちやうよっ!

確かに大淀さんの看病も大事だけどねっ! 自分もその風邪貰つちやつたら意味ないんだよ!

提督の頭に乗せたタオルを取り替える。

持ってみればちよつと熱いタオル、さつき測った体温は三十九度。うーん、氷枕持ってきたほうが良いよねえ？

「提督？　那珂ちゃん氷枕持ってくるけど、食欲あるかな？」

「あんまり……だけど食わねえとなあ……軽いもん頼めるか？」

「うん。じゃあちよつと待っててね？」

そう言ってから提督の部屋から出る。すると。

「て、提督は!?!　大丈夫!?!」

「何が要る!?!　なんでも言ってくれ!　すぐに持ってくるっ!!」

「那珂が居ない間は僕が……っ!」

「……あ、あははー」

ドアの前に居たのは天龍さんに龍田さん。それに時雨ちゃん。

皆必死な表情で私に詰め寄って来て怖いです。

「えつとー……じゃあ龍田さんにはお粥作ってもらいたいかなあ？」

天龍さんは氷枕とちっちゃい保冷剤を幾つか。あ、時雨ちゃんは大人しくしててね？」

「お粥ねっ!　すぐに作ってくるからっ!」

「おうっ!　任せろっ!　すぐに持ってくるっ!」

「は、放してよ那珂!　僕が提督の風邪を貰って……!」

はいはい、そう言いながら上着を脱がなくていいからねえ？　時雨ちゃん。

と言うか天龍型の二人すごいねえ、残像が……。

「ちゃんとじゃんけんで決めたでしょー?　今回は那珂ちゃんが時雨ちゃんの分もお世話するからね?　風邪が蔓延しても困るからお部屋で待っててね?」

「う、うう……」

はいはい、そんな恨めしそうな顔しないでね?

那珂ちゃん、じゃんけんに勝った時の事思い出したくないからねー?　?

……ほんと怖かったんだよ?　負けたってわかった瞬間に瞳からすつと光が消えて……うう。

「じゃ、じゃあ……」

「那珂ちゃんは良いけど提督が困っちゃうよ?」

聞いてくれないので必殺技ですっ!

「わかったよ……でも、何かあったら何でも言っただけ?」

「もちろんだよっ!」

こうかはばつぐんだっ!

トボトボと戻っていく時雨ちゃんの姿にちよつと胸が痛くなるけど……仕方ないね。

大淀さんが復調して、狙ったかのように交代で提督は風邪を引いた。

今日は製油所地帯沿岸の掃討へ第二艦隊のメンバーに夕立ちちゃんを加えて出撃。大淀さんは提督が倒れちゃったから代わりに執務をしている。

大淀さんはもうなんていうか可哀想な位落ち込んでたけど。

提督が執務出来ない分しっかりフォローしてあげる事が何よりのお役目だよ。なんて言ってみたらものすごい勢いで執務室に飛び込んでいった。

第三艦隊の皆は鎮守府正面で走行練習してもらってるけど……雷ちゃんを抑えるのは大変だったなあ。ううん、雷ちゃんだけじゃなかったけども……うん。大変でした。

「全く提督には困っちゃうね!」

那珂ちゃんだって忙しいんだよー?

今日はソナーと爆雷の開発をする予定だったのに……最近なんか物づくりが楽しく……っは!?

「ま、まあアイドルは忙しいものだもんねっ! 那珂ちゃんファイトッ!」

えつと? とりあえずお粥と氷枕はお願いできたし……。

後は汗かいてるだろうし着替え……は、部屋にあるよね? お湯もタオルもお部屋にあるだろうし。

「……やること無くなっちゃったよ?」

あれ? 那珂ちゃん要らない子?

う、ううん！ そんな事無いよね!!

「はあ……とりあえず私も風邪薬飲んでこう」

感染ったって事は感染力が高いって事だろうし、予防で飲んどかないとね。

それにしても。

「こうして思えば提督って……慕われてるなあ」

何の変哲もない朝だった。

皆でおはようって言いながら食堂に集まって、珍しく一番最後に提督がやってきて……挨拶するかと思えばその場に倒れそうになった所を天龍さんが抱きとめて。

そこからはてんやわんやの大騒ぎだった。

出撃予定の人はもう泣きそうな顔しながら出撃を渋ってたし、提督を部屋に寝かせた後は誰が看病するかでまた騒いで。

我こそがーって！ もう凄かった。

私じゃなくて提督がアイドルしたら大変な事になるんじゃないかなんて思ったり。

「何でじゃんけん勝ちちゃうのかなあ」

流石に皆冷静な部分もあって広げちゃいけないと看病は一人だけって話になって、大淀さんが一番執務には詳しいからって泣く泣く辞退してもらって。

残った皆で公平を期す為にーってじゃんけんになったけど。

……これがセンターを決めるじゃんけんとかなら良かったんだけどねえ。

「……ううん、ダメダメ！ 那珂ちゃん頑張るっ！」

別に嫌って事は無いんだもんっ！ 役得位に考えておこうっ！

そうだ、汗拭いてあげようっ！ さっぱりしてからご飯のほうが良いよねっ！

……あれ？ 汗拭くって事はえっと……裸になってもらうってこととで……。

……役得？

「き、きやー!? きやー!? な、那珂ちゃんえっちな子なんかじゃ無い

んだよう!？」

な、何考えてるの私！ お、落ち着いて……。

「……すー……すー……」

「あ……寝てる？」

部屋に入り直せば聞こえる寝息で落ち着いた。うん、静かにしないとね。

そつと顔を覗き込めば、少し苦しそうではあるけど結構深く眠ってるみたい。

「……そうだよね」

提督は、多分誰よりも寝るのが遅い。

私の部屋から提督の私室が見えるけど、部屋の灯りが落ちるのは誰よりも遅い。

それでも皆と一緒にの時間には必ず食堂に居る。

「……こんな時じゃないと、ゆっくり出来ないんだね」

それもそうだと思う。

私達だつて忙しいって思うんだもん、そんな私達を束ねる人はもつと忙しいよね。

皆に一週間に一回は休みをって言ってたけど……そう言えばこの人が休んでいるところは見たことがない。

「ほんと、馬鹿な人なんだから……」

そつと頭を撫でる。

私の手のおかげかは分からないけど少しでも提督の顔から険が取れた。

「くすっ……可愛い」

何時も私達の前では幸せそうに笑ってる提督。

出撃の時や作戦会議の時の真面目な顔した提督。

そんな顔は沢山見たけど、こんなに安らいだ顔を見たのは初めてかも。

「ちゃんと、自分も大事にしないと駄目だよー？」

「う……ううん」

あつと、危ない危ない。起こしちゃう。

でも、本当にそう思う。

皆が大騒ぎしたのだから、提督の事を大事に想ってるからなんだよ？

皆、自分が大事にされてるってわかってるから。あなたを大事にしたいって思ってる。

「那珂ちゃんは……ファンを大事にするんだよ？」

そう、もちろん私だって。

少し意地悪で、すぐにファンをやめようとするあなただけだ。

大事なんだよ？ 本当に。

アイドルの仕事が皆を笑顔にする事なら、あなたは私達の永遠のアイドル。

この鎮守府に来てから、皆を笑顔にするあなたを私は尊敬しています。

「だから……早く元気になってね？」

あなたが私のファンで居てくれるように、私もあなたのファンで居たいから。

時雨日記②

○月△日

クラツカーの音が響いた後に龍田が呟いた嘘って言葉。

頭ではわかっている、信じられないって思ったからこそ出た言葉だつて。

でも僕はちよつと違ってた。

ああ、やつぱりか。

冷たいと思うけど、頭に浮かんだ言葉はそんなもの。

わかってたはずだもの。僕が、夕立が、龍田が天龍だけがそうされたわけじゃないって。

だから僕はそんな冷たい思考で冷静に事実を受け止めることが出来た。

でもすぐに恥じた。

まるで宝物を失ってしまったかのように傷ついた表情を浮かべる提督を見て。

いつの間に僕は今の当たり前を当たり前と受け止めていたんだろう？ かつて当たり前に反発していた僕なのに。

そう、提督にとっては今の六駆が浮かべる表情は当たり前じゃないはずで。その瞳に光が宿っている事が当たり前のはずなのに。

そんな事を考えていた矢先に提督が電に砲撃された。

騒然とする執務室を動きながら、僕は自分に失望した。

僕はバカだ。

何がこんな事あってもおかしくない、だ。何がやつぱりだ。

そんな自省し続ける中、提督は言ってくれた。

頼んだぞって。

ほんとに。この短い間で、提督には何度救われたんだろう？

強い決意を瞳に宿らせてこんな僕を頼ってくれた。

そのおかげで僕は慣れてはいけなモノを改めて確認することが出来たんだ。

うん、ごめんね提督。

その分、任せてよ。提督の決意、必ず貫き通させてみせるから。

○月△日

車の中、提督の真面目な顔にちよつとドキドキしながら隣に座っていたら不意に大本営について聞かれた。

先日の事もあつて改めて考えるいい機会だと思つて考えてみた。皆が皆うちの提督みたいにな……なるわけが無いと思うし、なつたらなつたでちよつと嫌だけど。そう、提督にも言つたけど役立たずにさせない様に僕たちをもつと使えないのかなとは思つてたんだ。

確かに、女の子の身体を持つてるけど僕たちは軍艦、兵器だ。なら所謂メンテナンスとして適切な扱いをすることは出来なかつたのかなつて。

多分それなら僕も納得してたと思う、それが普通なんだつて。いや、ほんとに今にして思えばだけで。

ただやっぱりこれも言つたけど、そのおかげで提督に出会うことが出来たのだから悪くなくて。これも今にして思えばだけど感謝してる。

そう言つてみれば提督は僕の頭を撫でてくれた。そう、なでなでがあるから頑張れると言つても過言じゃないんだよ。これ、たまらないんだよ……。

……うん、思い出すだけでうつとりしちゃうから止めよう。

そろそろ着くかなつて所で提督は運転手さんに寄り道したいって言つて。

どこに行くのかなつて思つたら花屋さんだった。

軍人、正確にはうちの提督は軍属だけど。

その軍服姿を見たお店の人の態度はやっぱりだったけど、そんな事にせず熱心に色々聞くと提督に嫌うことを根負けしたのか最後には笑いながら花の話をしてくれた。

流石だなあなんて思いながらその光景を見てるうちに提督はカラコンコエっていう花を買つた。

何でその花なのか聞いたけど教えてくれなかつた……寂しい。

だから、今度僕にも何か花を買ってねって言ったら、そのつもりだよって言ってくれて。

ああ、うん。

当然だけど僕は轟沈した。提督の当たり前は反則だと思うんだ。

そうしてあの鎮守府に着いて、名目通り見学をして。

ちよつと思ひ出したくない提督と出会って古鷹と一対一で演習をすることになった。

多分僕は怒ったことがない。それは諦め癖がついていたからだと思ふ。

でも提督と出会って諦める必要が無くなって、期待することを覚えて。

だからはつきり怒りつて感情を覚えたのは初めてだったんだ。

あの人が提督を下に見ていたこともそうだし、艦娘への扱いを垣間見たこともそうだと思う。

そう、提督を傷つけた原因がはつきりこの人だってわかったから。堪えきれなかった。多分、一人であの人と相對していたら魚雷を打ち込んでいたと思う。

だけど何より。

提督が怒った。

だから僕も怒った。そんな単純なこと。

そしてその心のまま、古鷹と戦った。

夕立の真似をしたのは……うん、そうでもしないと勝てないって思ったからっていうのももちろんだけど。

僕も提督の牙である事を示したかったんだろうね。

古鷹にはちよつと辛い言葉をぶつけちゃったかなって思うけども、許してね。

そして戻ればなでなでが待っていた。

……。

はっ!?

……続き書こう。

その後はほんとの意味で思ひ出したくないんだけどね。

……提督が死んじやったら、僕、自分がどうなるかわからないよ。提督が言った言葉の意味はよく分かるけど、それは提督が居てくれる事が大前提なんだから。

でも同時に思ったんだ。この人は危ういって。

本当に簡単に、艦娘僕たちの為になら命を投げ出す。傷つこうとする。

それが信頼の下にあるならまたちよつと違うんだらうけど。提督は違う。

仮に提督が死ねば僕たちが幸せになるとするなら、すぐさま死を選ぶ。

そう思った。

だから決めたんだ。

僕は提督の命そのものになってやるって。

そうすれば、提督は軽々と命を捨てなくなるだろうから。

……あなたが死ねば私も死ぬなんて、ちよつと危ない人みたいだけでも、ね。

僕の怒り、それだけじゃなくて色々な感情はもしかしたら提督からの借り物なのかも知れない。

でもそれでいい、だからいい。

僕の心に宿った想いを燃やし続けることが出来るから。

○月△日

結局、と言ったら嫌な感じだけど。提督が六駆の皆に頭を下げたことで収まった。

六駆の目に光が戻ったのは嬉しく思う。本当に良かった。

同時に提督の覚悟の重さがわかった。

多分、あの時あの人を頭を下げなかったら……本当にあの人を首を落としていたと思うし、責任を取るといった意味だと思うけど言った言葉もそうだ。

僕たちと初めて出会った時から、ずっとそう思っていたのかな？

そう思ったら少し身体が震えた。

その身体の震えの意味はよくわからない。けど、この人を失っては

いけないって心底思った。

……頑張ろう、まだまだ足りない。

○月△日

鳳翔さん達がうちの鎮守府に着任した。あとよくわからないけど那珂も。

あの人はどうなったのかっていうのは全然興味無いんだけど、うちの鎮守府にあそこに所属していた艦娘が来るって事はそうなんだろうね。しつかり辛い思いをすればいいんだよ。

ともあれ急な戦力の増加だったから、しばらくすごく忙しかった。運用するための資材が全然足りなかったから、資材回収の為に反復遠征で大変だ。

そう、大変だったんだよ。ねえ？ 提督。

あ、ううん。別にそれを口実に甘えてなんかいないよ？ ほんとだよ？

……もうちよつとこの忙しさが続いても良いかなあ。

なんて思ってたたら那珂がドラム缶を作ってくれたりで思いの外捗っちゃって。

案外すぐに目標にしていた数は揃っちゃった。……むむむ。

まあ良いんだ。

近々鎮守府内演習をするって言ってたから、そこで良い所を見せて……ふふふ、頑張るぞ！

○月△日

そう思ってた気張った演習なんだけど……。

良い所見せられなかったよ。

気持ち空回りしたんだって自覚はあるんだよ、ジリ貧な状況だったけど天龍の指示を待つべきだった。

あの時、僕がここでなんて思わなかったらまた別の、より良い結果が生まれていたのかも知れない。

けど提督は相変わらずで……もう、ほんとに提督には敵わないよ。

反省はしつかりと。焦っても駄目だ、じっくりしつかり強くなるう。

あ、もちろんミートスパゲティは腕によりをかけて作るからね、提督！

○月△日

製油所地帯沿岸の海域を開放できた。

正直に言ってしまうえば、少し嫌な予感はしていたんだ。大淀の様子を見て、だけど。

そしてそれは一緒に出撃していた龍田の無線から現実になって、慌ただしく救援に向かうことになった。

改めて思うけど……本当に皆無事に帰ってくる事が出来て良かった。

提督を傷つけないで、嘘つきにさせることが無くて良かった。

僕も含めてだけど、誰も大淀を責めなかった。その事に大淀はすごく戸惑ってみたいだけど。

きつと提督がいろんな物を晴らしてくれるさ。僕たちをそうしてくれたように。

忘れちゃいけないのが六駆の皆。

ああして海で一緒に征く事が出来てほんとに嬉しい。

きつとすごく勇気が必要だったと思うんだ。だけど、それでもああして来てくれて。

僕たちの為、仲間の為に動いてくれたことが力になった。

あの窮地を凌げたのは間違いなく第三艦隊のおかげ。

第二艦隊の皆もよく持ちこたえたと思う。

そして天龍。

あの時不思議と、提督の姿が重なった。

もし、提督が僕たちの様に海を征けるならあんな風に指揮を取ってくれているのかも。そんな風に思った。

僕が提督の命になるって決めたように、天龍も……ううん、龍田や夕立だって。皆何かしら心に期する物が出来たんだろうね。

ちよつと苦笑いなのが、誰も護国の為にじゃなくて提督の為にって言う所なただけ。

何時からだろうね、そんな風に思うようになったのは、ただ。

心の底から守りたいって思うモノが出来るっていうのは、ほんとに気持ちがいいものなんだね。

艦娘だから、兵器だから、そういう存在だからじゃあない。

僕は時雨^僕として、心の底から提督を守りたい。そう思ってるよ。

○月△日

やっぱりすつからかんになった資材……今回はボーキサイトだけ。海から回収する毎日。

そんな中、提督は色々試行錯誤してるみたい。

第二艦隊の旗艦を鳳翔さんから大淀に変えて運用してみたり、第二艦隊に夕立を加えてみたり。

僕にしてもそう。

この間初めて天龍が旗艦で、古鷹、加古と一緒に出撃した。

ここでのやり方に慣れちゃったというか染み付いちゃったからか、結構大変だった。

日中のお仕事が終わって、いつもの訓練が終わった後。

天龍達旗艦組は毎日執務室で戦術研究を提督としてるみたいだね。

たまに僕だったり龍田だったり、加古や古鷹だったり意見が欲しいって呼ばれる時があるんだけど……。

一言、毎日参加出来る人が羨ましい。

だってさ！ 提督の真面目な顔をあんな近くで見られるんだよ!? 羨ましいよ！

この間龍田と一緒に行った時なんてさっ！ 龍田にすんごく真面目な顔してどう思う？ なんて聞いててさっ！ 僕に！ 聞いてよっ！ 龍田顔真っ赤にしてあわあわ言ってるしさっ！

その後の！ ありがとう。って提督がにっこり笑いながら言っちやっつてっ！

その笑顔！ 僕に！ 下さいっ！

……。

うん、落ち着こう。

そう、そんな感じで新しい運用方法を考えてるみたいだ。

第三艦隊にしても、毎日の様に龍田と夕立と演習してるけど、どうも普通の水雷戦隊としての運用方法を求めては無い様に見えるし。

これからが楽しみみて言えれば不謹慎なのかも知れないけど、この鎮守府が力をつけていく事がやっぱ嬉しいね。

○月△日

提督かつこいい。

あ、いや。うん。

夕立があっけなく負けちゃったのは残念だと思っただけどね？

それよりも提督かつこいい。

あ、うん。

このままかつこいいってずっと書いちゃいそうだから落ち着こう。提督は思ってたよりずっと強かった。いや、強いんだろうなって思っただけだからちよつと違うんだけど。次元が違ったとでも言うべきかな？

正直夜の訓練。竹刀を持ってする訓練で夕立の相手をするのが大変になってきていた所で。

夕立の良きライバルと言うか、切磋琢磨し合える関係とは言い難くなってきたんだよね。

夕立がどんどん深海棲艦の撃沈数を伸ばしていくと共に、手合わせでもどんどん手がつけられなくなっていくって。

一番最近の十本勝負では二回しか勝てなかった位で。

それと同時に夕立が首を傾げる姿や、少し寂しそうな顔をする所をよく見るようになってた。

その夕立を一蹴。

その姿がまたかつこ……じゃなくて。

夕立が嬉しそうに負けた事を話しているのを見て、僕も改めて思っ

た。

海に活かす為だけじゃなく、提督の本気と触れ合える自分になりた
いって。

ふふ、提督。覚悟しててね？

後、龍田ごめんね？

流星にさ、洋食と言えば時雨ってポジションを奪われたくは無かつ
たんだよ。でも龍田の和食、僕好きだからね？

○月△日

今日はすごく賑やかな日だった。

遠征から戻ってきたら食堂で那珂と六駆の皆が歌って踊ってた。

思わず何してるのって聞いたらアイドルのレッスンだとかなんと
か。

思わず首を傾げちゃった僕と一緒に遠征に出てた龍田と大淀だけ
ど。おもむろにうつすら光る棒を渡されて。

やっぱりファンの目が無いとねっ！

なんて言われてファンにされた。どうしてあんなったのか今でも
わからない。

ただすごく楽しそうに踊る六駆の皆の姿を見るとそんなのどう
でも良くなっちゃって。

よくよく聞けば中々上手に歌う那珂だったりで。

気付けば手に持った光る棒を振ってた。

あ、龍田も大淀も振ってたよ？ 僕だけじゃ無いからね？

そんなレッスンは終わった時。不意に後ろからアンコールのコー
ルがかかって。

振り向いてみたら提督や他の皆がいた。

まずいと思って電の方を見れば、顔を真赤にしながらぶるぶる震え
て主砲を構えていたけど……うん、よく我慢しましたってところかな
？

そこからはなし崩しに那珂曰くの本番が始まっちゃって。

とつても楽しかったよ。

僕もすっかりファンになっちゃった。提督があれだけ楽しそうにするなら僕もレッスンに交ぜてもらおうかな？

○月△日

大淀が風邪を引いた。

思わず心配しつつ、艦娘も風邪を引くんだなんて思ったり。

提督に看病してもらえらるなら風邪を引いちゃおうかと真面目に考えることにする。

○月△日

提督の看病をした那珂が羨ましいからファンやめるね？

○月△日

南一号作戦の詳細が届いたみたい。

提督から改めて内容が発表されたんだけど……ちよつと驚いた。

作戦行動の為にこの鎮守府に各鎮守府から艦娘が来る。うん、それはわかる。

そのために南一号作戦の準備として、必要になるだろう資材集めと製油所地帯沿岸海域の警護を集中的にした僕たちなんだけど。

作戦中、資材は横須賀鎮守府が負担するらしい。

要するに資材の心配はするなってことなんだろうけど……。

素直に喜べない僕がいる。

提督も同じみたいで、どうにも腑に落ちないって顔をしていた。

ともあれ、それに加えて明日、先遣隊として横須賀鎮守府から一隊ここに来るみたい。

誰が来るんだろう……。

また提督のことを好きになっちゃうんじゃないだろうか、それだけが心配で――

「時雨？」

「ん……？ 夕立どうしたんだい？」

同じく部屋で日記を書いていた夕立の声に筆が止まる。

「明日誰が来るっぼい？」

「うーん、流石にわからないよ」

横須賀鎮守府と言われて思い浮かぶのは長門、陸奥といった戦艦だけど……流石に先遣隊として来るとは思えないし。

「仲良くなれるかなあ？」

「ふふっ、夕立なら大丈夫じゃないかな？」

無垢にそんな事言われると、警戒してる僕がバカみたいじゃないか。

でも、そうだね。

「そっか！ なら頑張って仲良くなるっぼい！」

「うん、僕も頑張るよ」

僕たちなら、この鎮守府なら。提督ならきつと大丈夫。

度にどんな事が起ころうとここが幸せな場所には違いないし、きつと来る艦娘だって幸せな場所だと思ってくれるだろうから。

南一号作戦編

鎮守府が形作られてきたようです

ようやく鎮守府を運営することが出来ている。

そんな風に最近思う。

いや、もちろん今の今まで運営していなかったのかと言われれば違うんだけどさ。

艦隊、艦娘を選抜して海域へ出撃してもらおう。遠征へ向かってもらう。

そう、今にしてようやく選ぶって事が出来るようになったからそんな風に思うんだろう。

実際、今までの事を振り返ってみれば正面海域を突破した時も資材に追い立てられてだったし。突破したと思えば六駆の件、製油所地帯沿岸をなし崩し的に攻略できて。

基本的にうちの鎮守府は後手に回っていたんだな、なんて感じる。だからこそ、南一号作戦が発令された時は気張った。

鳳翔、天龍を筆頭に、皆の協力を得て戦術研究を必死こいてやってみたり。

うちに戦力が集まるといふのなら運用するための資材を集めなければと回収任務に勤しんだり。

大淀と頭を突き合わせては考えた企画書と言うか計画書。

てつきり今回もまた、自分でなんとかしろと言われるもんだと思つて入念な準備を進めていたんだけども。

この南一号作戦についての詳細が書かれた電文で無駄に……と言えば聞こえが悪いか。まあ、心配が無くなった訳で。

「すまん、大淀。あれだけ色々考えてくれたのに」

「いえ、むしろこうなってくれた分、他のことが進められるというものですよ」

笑ってそう言ってくる。くう天使か。

作戦に使用される資材は大本営、横須賀鎮守府より捻出される。

その一文のおかげで急に余裕が出来た。

急な大盤振る舞いに何か裏があるんじゃないかと疑っていたけど、これは製油所地帯沿岸を攻略出来たからって話だそう。

横須賀方面から製油所地帯までの海域にある程度の安全が確保出来たお陰で資材、主に今回は燃料だけどその運搬に海路を使用できることになった。

陸路と違い、より多くの燃料を運搬でき、また最前線であるこの鎮守府へと持つてきやすい海路。

聞けば、あの海域が安全だった頃は横須賀方面の鎮守府へ海を使って燃料を運搬していたそう。

多分、艦これではそういった機能が自然回復する理由だったのかも知れない、なんてふと思ったり。

そう思えば、うちがあの海域を攻略できたのって日本からしたらすごく大きいことなんじゃねえのとかも思う。

今回の作戦上うちに精製される燃料が集まってくる事になってるけどさ。南一号作戦が終われば平時に戻り、各鎮守府に分配されるようになるってことなんだとしたら。

……あれ？　もしかしなくてもすんげえ功績なんじゃ……。

「ですが提督？　タンカー護衛任務は……その、本当に第三艦隊の方々が良かったのですか？」

「うん？　……ああ、心配する気持ちはわかるけど。大丈夫だよ、それは大淀もよく知ってるだろう？」

「それはそう、なんですけども」

心配なんだな。

大丈夫、こんな事言ってる俺もすんげー心配してるから。

ここまでの海路にある程度の安全が確保出来たとはいえ、やっぱり深海棲艦の襲撃は見込まれる。

そのため、燃料を運搬するタンカーを護衛する事。それがうちに求められた任務の一つだった。

そしてそのタンカー護衛任務に出撃させたのがうちの那珂ちゃん率いる第三艦隊。

最初のうちは第二艦隊を護衛の護衛につけようとしていたんだが、やっぱりそうしてしまうと出費が激しく本末転倒。

何より那珂ちゃんに大丈夫だからと怒られてしまい、今回第三艦隊単隊で初めての出撃となる。

まあ、演習の様子を見た天龍と鳳翔からお墨付きを貰ったとはいえやっぱり心配なんだよ。

とは言え、だ。

考えた第三艦隊の運用方法は、先の作戦でもしたように、四十ノットとはっやーい島風に次ぐ三十八ノット^速な第六駆逐隊を活かした戦場へのバケツ運搬。

そして、こういった燃料タンカー船等の護衛任務をしてもらうこと。

だが六駆は海の経験が殆ど無い。謂わば練度のみならず、余裕がまったくない状態。

以前天龍に相談したのはそんな六駆をどうするかって事で。その答えが夕立と龍田の相手をする事だったりする。

——深海棲艦の百倍怖いあの二人を相手にしてたら深海棲艦なんて怖いとも思わねえさ。

とは天龍談。

六駆が海に対して持っていたものの正体の一つ。それは恐怖だ。

自分のせいで誰かが傷ついたらどうしよう。そういう思いで足を竦ませてしまう。

だから平たく言ってしまうと怖がる余裕すら無くしてやろうって事で。それは見事に実を結んだ。

今や、出撃すること自体に恐怖を覚えたりはしてないみたいだけど……それでも——

「!!」

「あっ」

音を立てた無線機の応答ボタンに指先をシューッ!!

「もしもし那珂が大丈夫か誰か怪我してないかもしかして危機か今すぐ救援指示をだしたほうがいいかそれとも——」

「えーつと……間違えました?」

切れたつ!! なんてことだつ!

「じゃねえ!! ——もしもし? 那珂ちゃん? 俺だよ俺」

「……那珂ちゃんまだ子供産んでませんつ!!」

ああん! 切れえた!

いや、まだだつ! キレテナーイ!

「はい、こちら提督。那珂? 正直すまんかった。どうした?」

「詐欺じゃない?」

「サギジャナーイ!」

「ふう……那珂ちゃんびっくりしました。えつと、もうすぐ帰投するよー。タンカーから燃料の積み下ろし手伝って欲しいみたいだからよろしくねー」

そうか! もうすぐ帰つてくるか!!

「大淀つ! ちよつと行つてくる!!」

「えっ!? あの!? 提督!」

止めてくれるな大淀よつ! 電文が届いた様な気がするし、無線機もまだ切つて無いかも知れないけど。

俺は今、風になる……っ! 風になるんだつ! 俺が疾走ればそれが風になる……俺は……止まらねえからよつ!! 止めるんじやねえぞつ!

「暁い!!」

「あ、司令官! 今戻つた……わつきやあああ!」

うおおおお!! 暁! 無事か!? 無事なんだな!?

いやっほおおおお!! 超エキサイティン!! 何時もより多く回してやるぜええええ!!

「しれ、しれーかんつ!? ちよ、ちよつと……目が、めがあ……」

「暁ちゃんを放すのですつ!!」

「ぐほうつ!」

電さん……。

主砲ぶっぱやめて頂けたのは嬉しいんですが……そこはあかん。

あかんこれ。

「はう、あう、あー……」

「あ、暁？ 大丈夫？ うわ、目がぐるぐるしてる……」

「ちよつと司令官っ！ そんなんじや駄目よっ！ 暁をぐるぐるしちゃう前にちゃんとやる必要があるでしょっ！」

お、おう……すまん、いやほんとすまんかった。

腰を叩きながらなんとか姿勢を正してみれば、そこには呆れたような那珂ちゃんの顔。

「提督……流石の那珂ちゃんも言葉がないかなー？」

「う、うぐ……いやまあなんだ……心配だったもんでつい」

そう言ってみれば大げさに肩を竦める那珂ちゃん。くそう。

「と、とりあえず。報告貰っていいか？ 見た所……うん、皆無事だな。良かった」

「はーい。第三艦隊、全員小破未満で只今帰投しましたっ！ 途中少数の深海棲艦と会敵はしたけど、作戦は成功。見ての通りタンカーも無事だよっ！」

「よくやったああ!!」

「えっ？ あっ……」

ひゃっはーっ！ やっぱり我慢できねえっ！

目を回した暁の背中を擦ってる響をがしつとな！ そおれぐるぐるー!!

「こ、これは……ハラショー……!」

「ふはは！ 良いぞお！ 実にハラショーだ！」

まったく駆逐艦は最高だぜえ!!

「……那珂ちゃん」

「……何かなー？ 電ちゃん」

「やっぱり撃って良いのです？」

「良いかも知れないねえ……」

おお？ 次は電ちゃんの番か？ 良かろう！ 本懐である！ 望

むところだ！

「ち、近寄らないでほしいのですっ！」

「ふははっ！ 嫌よ嫌よも好きの内という言葉があつてだなあ!!」
主砲を構えた電ににじり寄る。

ああ……今の俺……すつごくキモいんだろうなあ……!!
これも艦娘って奴が悪いんだっ！ 俺は悪くねえ!!

「それよりもー提督？ 燃料積み下ろしは誰がしてくれるのかなー
？」

「……あ」

あーあー……うん、積み下ろし作業ね。うん。確かに言ってたね。
忘れてたね。

「おーい！ 提督！ 大淀に言われて積み下ろしを手伝いに来たぜー
！」

大淀、お前が神か。

「どのことだ、那珂。決して忘れてなんかいないぞ？」

「う、うん。えつとー……そういう事にしておくねー？」

「……絶対忘れてたのです」

ははは、なんのことかなー？

つと、とりあえず。

「天龍ー！ あっちにつけてるみたいだから、行って船員さんの指示
に従ってくれー！」

「了解ー！ すぐに龍田達も来るー！」

「おうっ！ 俺もすぐに行くー！」

そう言ってみれば天龍は手を振ってタンカーの下へ走って行って
くれた。

うん、落ち着こう。

「ふう……。それじゃ、第三艦隊の皆は軽傷だけど順次入渠していっ
てくれ、報告書はそれからでいい。……ありがとう、お疲れ様」

「はあい、了解ですっ！」

「ま、まだ目が回ってるう……」

「ふふっ！ 司令官！ これからも頼りにしてくれていいからねっ
！」

「……は、はら……しよー」

「いい加減響ちゃんを放すのですっ！」

あ、こりやまた失礼。

「作戦成功おめでとうございます、提督」

「言つたろ？ 大丈夫だつて」

「ええ、はい。……まあ……いえ、何も言いませんとも、はい」

「いや、ちゃんと言つたほうが良いぜ？ 鳳翔さん」

「いえいえ天龍さん。目は口ほどに物を言うというものです」

「あ、あははー……」

何かな君たちその目は？ 実に提督らしかったらろう？

……そうだと行ってよ神様。

「げふん。ともあれ、報告書読んだか？」

夜、那珂が持つてきてくれた報告書。

それを各艦隊旗艦である天龍、鳳翔に読んでもらった後の会議。

「ああ、第三艦隊も立派になったもんだ」

「はい。会敵したのがはぐれであろうと、しっかり戦えた様で何よりですね」

「うん、皆すつこい頑張ってくれたんだよっ！」

護衛中の会敵が二回。

いずれもはぐれ深海棲艦だったようで、駆逐口級三隻の隊と駆逐口級エリートが二隻の隊。

そのどちらに対しても目立った損傷なく護衛任務を果たせす事が出来たようだ。

「六駆の様子はどうだった？」

「そうだね。会敵した瞬間はちよつと顔が強張ってたけど……夕立ちちゃんや龍田さんより全然怖くないよつて言ったら笑ってたよ？」

「く……ははは！ ほらな？ 提督！ 言つた通りだろ？」

「ああ、御見逸れしたよ天龍」

うん、まあ確かに効果的だったみたいだけど。

夕立はともかく、龍田には聞かせられんなあ……これ。

「うん、被弾率は全然だったよ。けど……」

「命中率、ですか」

「うん……那珂ちゃんもだけどね。やっぱり中々当てるのは出来なかつたな、提督の指示通り護衛自体はしっかり出来ただけど……結局相手が諦めて撤退するって形になって、撃沈は出来なかつたんだ」

ちよつと落ち込む那珂だけでも。

いや、メインの目的である護衛が出来たなら万々歳だしなあ。

それに、だ。

「正直、そこまで完璧に戦闘をこなされたら逆に驚くつて話だ」

「はい、天龍さんの言う通りです。護衛任務程度であれば大丈夫だと思つていましたが、本格的な戦闘となると……まだ少し心配が残りますね。実際緊急出動スクランブルに備えてはいましたし」

「だよね。那珂ちゃんもまだちゃんとした相手と戦えるとは思えないかなあ」

いやいや、何をおっしゃいますやら皆さん。

「いや、それで良いんだ。というよりは、だ。相手を撃破せずとも退けられたという事実。こっちの方が大きい」

「あ……言われてみればそうですね。那珂さん、どうやって相手を諦めさせたんですか？」

「え？ えつとー……何で諦めたかは分からないけどー。やったのは、とことん相手の砲撃を邪魔するように砲撃したり、飛んできた砲撃からタンカーを庇ったり……だけど」

うつし、見込み通り。

「……なるほど、提督。オレにもようやくわかったよ」

「はい。そういう事でしたか」

「まあ、な」

「え？ え？」

困惑する那珂ちゃんを余所に頷く天龍と鳳翔。

皮肉なもので、六駆と大淀がここに来ると知らせた電文で閃いた事。

それが護衛、防衛のエキスパートとして第三艦隊を運用するという

物だった。

うちの鎮守府だけで言うならば、前線を第一艦隊、第二艦隊。そしてそれを支える第三艦隊といったイメージになるか。

「あの時確信したんだ。ダメコンが無いここでも、似たような仕組みを作ることは出来るって」

「ダメコン？　ダメージコントロール、でしようか？」

「いや、まあダメコンは良いか……。高速修復材を戦場で使えるってのはかなり大きい。それこそ精神的な部分や燃料、弾薬つった資材の問題を除けば継戦能力を飛躍的に高める手段になる」

「えっと……。それをする専門部隊が那珂ちゃん達って事かな？」

「ああ。もちろん、それ以外の運用方法も考えている。けど、当面はそういうった運用がメインだ。言い方はアレだが、これからしばらく続くだろうタンカー護衛任務でしつかり護衛技術を磨いて欲しい」

第三艦隊はうちの鎮守府で一番足回りが良い。

六駆はもちろん那珂だっそうだ。

艦これでは速度は高速か低速としか表現されていなかったが、実際に目の当たりにすれば結構違うもので。

例えば夕立は三十四ノットの速力を持つが、六駆は三十八ノット。那珂にしても三十五、三ノットと、夕立や時雨を超える。

要するに第一、第二艦隊に数字上ではあるが、確実に追いつくのだ。逆に言えば、誰も第三艦隊に追いつけない。だからこそこの役目は第三艦隊にしかできない。

「うん、わかったっ！　見せ場がちよつと地味かも知れないけど……アイドルだっ下積みが大事だもんねっ！」

「おう、さつきも言ったけどちゃんとアイドルらしい見せ場は考えてるから安心してくれな？」

「はあい！　那珂ちゃん……。ううん、フラワーズ、がんばりまっす！」
よしよし、腐らず頑張ってくれそうだな。

「天龍、鳳翔もそのつもりで頼む。ただ、高速修復材があるからと言って変に慢心するなよ？」

「へっ！　誰に言ってやがるっ！」

「ええ、もちろんです」

ドヤ顔天龍も可愛いし、むんつと握りこぶしを作って気合を入れる鳳翔も可愛い。

はあ、可愛い。

つと、そうだ。まだ連絡があるんだった。

「それと、だ。明日、うちに横須賀鎮守府から南一号作戦の先遣隊が来る予定になっている」

「お……ついに、か」

「ああ、うちの状態とか海域の状態を確認って名目だな」

うちに着任するって訳じゃないのが残念だけど。

まあいい加減余所から来て着任するってのがおかしいと思うべきなんだろうな。

「提督？ 横須賀鎮守府から誰が来るのでしょうか？」

「……金剛型戦艦、四隻」

「戦艦四隻!? す、すごいねえ……!」

ああ、凄いな。

ただ……。

「提督……?」

「ああ、いや……」

鳳翔が心配そうな顔を向けてくる。

天龍も俺と同じ様な事を考えているのだろうか、複雑な顔だ。

「今度は……らしい艦娘であってほしい。ってな」

そう。

俺が知っている提督ラブな金剛。金剛お姉さまラブな比叡。いつも大丈夫な榛名。ちよつと抜けてる頭脳派霧島。

そんな艦娘であるように。そう願わずにはられない。

「だいじょーぶですっ!」

「那珂?」

「大丈夫だよっ! 提督っ!」

にっこにここと笑顔を向けてくれる那珂ちゃん。

……不思議とほんとに大丈夫な気がしてくる。

「だってね、提督」

「うん？」

「どんな子が来ても、きっと笑顔になってくれるからっ！」

……。

ああ、そうだな。そうだった。

「那珂」

「はいっ！」

「ありがとな」

那珂の頭を撫でる。

アイドルにお触り厳禁かな？　なんて思ったがくすぐったそうに受け入れてくれる。

「よっし！　そうと決まれば、歓迎会の計画立てるぞっ！」

「了解っ！」

誰が来ても笑顔になる。そんな鎮守府にする。そう決めたんだからな。

鎮守府に金剛姉妹が来たようです

「提督？　今回はクラッカーとか用意してないんだね？」

「ああ、うちに所属するって訳じゃないからな。流石にそこまでフランクにしようとしてしまうと礼を失ってしまいそうだし」

執務室の掃除をしてくれながらそんな事を言う時雨。天龍と鳳翔、大淀はもうじき来るだろう金剛型姉妹を出迎えに行ってくれている。

第三艦隊の皆は続くタンカー護衛任務に出ているし、残ったメンバーは南西諸島沖の偵察に出てもらった。

とは言え何もしないって事もなく。

食堂には既に歓迎会を行う為に時雨と一緒に料理を用意している。その後こうして軽く掃除をしながら待っているのだ。

「えっと、出向……って形になるんだっけ？」

「そうだな。あくまでも横須賀鎮守府所属のままうちに来てくれるみたいだ」

残念な気持ちは少しあるけど、前にも思った通り異動って形がおかしいと思うべきで。

やっぱりどんな艦娘であったとしても、着任した鎮守府で何もやる事が無いなんて事は無いはずだから。

そういう思いから見れば、今回の先遣隊として出向という形は喜ばしい事でもある。

それはつまり、金剛型の皆には役目が与えられていて決して役立たずとして追いやられた訳ではないという事。

この艦娘ならば、その役目を果たしてくれるという意図の下やってくるのだから。流石に各鎮守府合同であたるような作戦で役立たずの処理なんてクソ名目は適用されないだろう。

そう思いたい。

「提督……」

はは、そんな心配そうな目をするなって時雨。

思わず時雨の頭を撫でてしまう。

「心配すんな、大丈夫さ。きっと今日来る艦娘は沈んでなんかかないよ」

「ううん、違うよ。僕が心配してるのは……提督が辛い思いをしちゃわないかって事だよ」

……つたく。

「バツカ。それなら尚更心配するな、俺が傷つく事なんてねえってば。
お前達艦娘を迎える事で傷つくなんてありえねえ話だよ」

「わぷっ……うん、それならいいんだよ」

撫でる力に少し力を入れる。それでも時雨は目を細めて笑ってくれる。

ほんとに、俺には勿体無い位で。

あの出撃の時も、かつてヒキニートだった時もそう。

俺は艦娘に救われっぱなしだ。

「ほれ、もうそんな時間ねえぞ。さっさと終わらせちまおうぜ?」

「うん!」

そんなこんなで時雨と執務室の掃除を終わらせ、ノックの音と共に艦娘の姿が現れた今。

猛烈に感動している。

「横須賀鎮守府から先遣隊として来マシタ、金剛デース! よろしく
お願いシマース!」

「金剛お姉さまの妹分、比叡です! 気合、入れて、お願いしますっ!」

「高速戦艦、榛名です。あなたがここの提督ですね? よろしく
お願い致します」

「初めまして、横須賀鎮守府の霧島です。よろしく
お願いします」

予定時刻ピッタリに来てくれた、金剛型戦艦四姉妹。

ニコニコと笑ってくれながらも自信を感じさせる雰囲気
を放つ金剛。

そんな金剛お姉さまを慕ってます、
信頼してますと一目で分かる比叡。

柔らかく微笑みを携えながらも、
頑張りますねと榛名。

キリッと出来る女風味を感じさせてくれる霧島。

そのどれもがイメージ通りの姿だったからだ。

「よく来てくれた。俺がこの鎮守府の提督だ。南一号作戦の間、どうかよろしく頼む」

敬礼してくれている皆へと答礼を返す。

お互いにその手が下ろされた時、隣に居た時雨がほっと息を吐いたのがわかった。

それは俺も同じ気持ちで、やっぱり何処か緊張していたのは否めないから。

こう言つちや何だが、六駆達がかつて着任した時に比べてあまりに自然な金剛型皆の姿。少し緊張している様には感じるけど、それはまあ当たり前だと置いておいて。

俺に対して怯えた視線を向けるわけでも、敵意を持ち合わせているわけでもなさそうで。至つて普通の挨拶が出来た事に安心する。

だから、気を緩めた。

緩めて、俺としては自然な動きで握手を金剛に求めた。

そしてその手は。

「シエイクハンドはノーサンキューデース」

「な……！」

軽々と乾いた音と共に払われた。

驚き言葉が出ない俺の代わりに、天龍が驚いてくれたみたいだ。

「ワタシ達は馴れ合いをしに来たわけではアリマセーン。貴方が言った通り、作戦遂行の為に来マシタ。それだけデース」

イメージと変わらない笑顔のまま、イメージと合わない言葉を続ける金剛。

「……ふう。そうだな、それは失礼をした。これから少しかしばらくか……それはわからないが、よろしくといった思いからだっただ。他意は無い」

いやまあ触れたいと思う気持ちはあつたから嘘になるか。

やだなあ、俺のスケベ心をまるっとお見通しか？

……いかにいかに。

動揺してる暇はねえぞ……？

「それなら良いデスガ……プリーズ、リメンバーミー。貴方はワタシ

の提督ではアリマセン。間違えないで下さいネ」

「ああ、わかった。済まなかったな、以後気をつけることにしよう」

そう答えた俺に納得したのか、頷いた金剛は一枚の封筒を手渡してきて中身を見るよう促してくる。

「ワタシ達が先遣隊としてここに来たのはそれに書いてある通りデス。防衛線構築の手伝い、そして――」

「うちの戦力を確認するため、か」

入っていた指示書に目を通すとそんな内容が書かれていた。

「イエース。ソシテもしもこちらが想定している戦力を下回る場合デスガ……ここに所属している艦娘はワタシの指揮下に入って頂きマース」

「……お待ち下さい。仮にそうだったとして、ですが。うちの提督はどうなるのです」

鳳翔が一步前に進み出てそんな事を聞く。

指示書を見ながらも、横目で確認したその目は細められていて、少し怒気を放っている様に見える。

「南一号作戦を実際に指揮する方とは別に、後日ワタシが所属している横須賀鎮守府の提督が来られマス。ワタシの指揮下に入るということは横須賀の指揮下に入るとい事。南一号作戦中、こちらの提督の指揮権は横須賀提督に預けて頂く事になりますネ。要するにパペット……作戦中大人しくしてもらおう事になるデシヨウ。ワタシとしてはそちらをオススメしますヨ?」

「なん……!?! ふ、巫山戯るなっ!!」

「巫山戯ているわけではセーン。ぽつと出の新任提督よりも遙かに経験や実績を持っている方の指揮に入るほうがベター……当たり前でデシヨウ? あなた方もよりパワーをふるいやすいと思ひマスガ?」

「て、てめ……っ!」

「天龍」

「ぐっ……」

金剛の答えを聞いた瞬間声を張り上げた天龍に声をかければ、その怒りを無理やりといった様に沈めて一步下がってくれた。

「すまねえ……」

まあ怒ってくれたのは嬉しいんだけど、金剛に怒鳴るのは筋違いだし一理ある話。もしかしたら当たり前レベルなのかも知れない。

そう思いながらふと大淀を見てみれば……あー。

「大淀も」

「は、はい……申し訳ありません」

なんつー顔してるかね。

あつ、ほら榛名がちよつとびっくりしてるじゃんか。まったく。

「うちの艦娘が失礼をした。ところで、その戦力を測る方法が書かれていないが？」

「オウ、それはこちらこそ失礼しまシタ。方法はワタシ達と演習を行って貰いその映像を横須賀に送り判断してもらいます。勝敗は関係ないデスが、勝利すればまず間違いなく大丈夫デショウ……モチロン、その可能性は限りなく低いでしょうケド」

なるほど、演習ね。

こつちの世界は皆演習好きだねえ……本来お互い切磋琢磨し合う物のはずなんだが……つて、いや俺も人の事言えねえか。

まあわかりやすく結構だわな。

「委細了解した。日時はどうすればいい？」

「こちらは何時でもケツコウです。今からでも構いませんヨ？」

「じゃあ明日のヒトサンマルマルにしよう。流石に今すぐやって勝てる相手では無さそうだ」

そう言ってみれば、形の良い眉をピクリと動かしながら。

「へえ……勝てる、というのデスカ」

「失言だったか？ 仮に負け戦と分かかっていても勝つと思ってあたるのが筋だと思うが？」

金剛はふつと息を吐き、愉快気に笑った。どうやら俺の返事に満足してもらえたらしい。

「さて、では改めて金剛達を歓迎したい。その気持ちからちよつとした料理を用意した。是非皆で食したいんだが……」

「オウ！ パーティーデスカ！ それは嬉しいネ！ ……と、言いた

い所デスガ。そういう雰囲気でも無いデシヨウ。折角デスガ遠慮させて頂きマース！」

まあ、そうなるわな。

と言うかあれだろ？ 金剛が言った通り馴れ合いは御免って話だろうよ。顔にそう書いてる。

やれやれ、今の所歓迎会をまともに開催出来た事が無いな……いつか出来れば良いんだけど。

「わかった。だがまあ折角作ったんだ、後でも食べてくれると嬉しい」

「イエース、それなら有り難く頂くネ！」

「天……いや、鳳翔」

「はい」

「金剛型の皆を用意した部屋に案内してやってくれ。一応四人でも大丈夫だと思うけど、何か不都合が無いかも確認頼む」

天龍はちよつとまだ気持ちの整理が出来ていない様子、大淀も同じく。

だから鳳翔ならと思って頼んでみれば一瞬何か言いたげな表情を浮かべた後頷いてくれて、連れて行ってくれた。

うん、すまん。

しっかし……どうしたもんかねえ……？

あの後まあ、通常通りの予定をこなしてもらおうように皆に指示を出して一旦解散。

天龍にしろ大淀にしろ、鳳翔にしろ。皆何か言いたげではあつたけど、まあ業務が優先なわけで。

今日の夜、いつもの訓練の後に話そうということ一旦納得してもらった。

「まあ、俺もちよつと落ち着く時間欲しいんだよな……ちつと付き合ってくれな？ カランコエ」

我ながらどうかとも思うけど正直。

嬉しい気持ち大きい。

いや、驚く気持ち以上になって話なんだけど。

深く傷ついてここにやってくる艦娘という訳じゃなかったから。と言えば安心するには早いのかも知れないが。

少なくとも提督という存在に傷つけられたって訳では無さそうと思える事が嬉しい。

まあバーニングラブを向けてくれなかった寂しさはあるけど、金剛の言う通り俺はあいつの提督じゃあ無いからな。

そう思えば金剛は、提督というだけで誰にでもしつぽを振る様なケツの軽い艦娘じゃないって事で安心したりもする。

とは言え、演習結果が芳しく無ければお飾りになっちまう、か。

横須賀鎮守府の提督がどれほど優秀だったり、実力、実績のある提督なのかは分からないけど。

もしも、俺よりも艦娘を大事にしてくれる様な提督なんだとすれば……。

「あ、あのっ!」

「……ん?」

思考の海に沈んでいた所を持ち上げられる。声のする方を向けばそこには。

「榛名に霧島……いや、榛名さん、霧島さんと呼ぶべきか?」

「い、いえっ! 榛名は……榛名は榛名で大丈夫ですっ!」

「はい、私も霧島と呼び捨てで結構ですよ」

何処か申し訳無さそうな表情を浮かべた榛名と、凜とした雰囲気崩さないままにいる霧島が居た。

「そうか、ありがとう。どうした? こんな所に何か用事か?」

「えと、用事があるのはここにはなくて……」

「貴方に謝罪をと参りました。……申し訳ありません」

謝罪?

首を傾げる前に二人はがばつと頭を下げる。

「いっ!? いやいや! 意味がわかんねえって! 何か謝られる様な

事あったっけ!? とりあえず頭上げてよ!」

「金剛姉さまが、その……あなたを傷つけたと思ひまして」

「はい……。私のデータによるとあの様な態度を取れば殿方が傷つく
と予想されますので」

「いやいやいや！ 傷ついてないからっ！ ちょっと寂しいなんて
思ったただけだからっ！」

「ああもういいから！ 頭上げてっば」

「で、ですけど……」

「じゃあ、はいっ！ 許した！ 許しましたっ！ 頼むから頭上げて
くれないと俺が謝るぞ!？」

「そこまで言うとうようやく困ったような顔を浮かべながらも頭を上
げてくれた。ふう。」

「ありがとうございます、けど……」

「殿方が人目に付かない所に居る理由……泣きたい時、やましいこと
をする時とデータが……」

「はいはい、榛名はそんな悲しそうな顔しないで笑ってくれ？ なん
だったらカランコエに水やって？ 後霧島はそんなデータ捨てちま
えっ」

「まだ満タンの如雨露を榛名に渡してみれば。」

「は、榛名が……よ、よろしいのですか？」

「ああ。そんなにやらなくても大丈夫だぞ？ 土が軽く湿るくらいを
目安に」

「はいっ！ 榛名、感激ですっ!」

「女性が花を好きな確率……やりますね？」

「ぱつと笑顔になる榛名はまあうん、わかる。」

「だけど霧島さん。ちよつとデータにこだわり過ぎじゃねえっすか
ね。」

「だったら霧島もやるか？ 新しい花壇に種植えたところなんだよ」

「わ、私がですか?! えつと、その……は、花への水のやり方は……」
「教えるから大丈夫だっば」

「新しく花壇に植えたのはガーベラ。カランコエと違って十分な水
やりが必要だ。」

「カランコエを育てあげた第三艦隊の皆に新しくプレゼントしたや」

つだけど、第三艦隊にもやる事が出来た今、こうして世話を俺が代わりにやったりする時もある。

まあ忙しい第三艦隊だけど、必ず毎日ここには来てるみたいで何かしらやっていってる。けど水やりのタイミングだけは合わない時があつても仕方ないからなあ。

「こそ、そんな感じ。あんまり花自体にはかけないように……」
「は、はい……」

恐る恐る水やりをする霧島の姿に六駆の姿が少し重なって思わず笑みが浮かんでしまう。今ではもう慣れたものでお世話する時間より愛でている時間のほうが長いけど。

「あの」

「うん？ どうした榛名」

「このお花……少し頂いてもよろしいですか？」

「ああ……それなら今は居ないけど第三艦隊の皆に聞いてみてくれ。後で俺から言ついても良いけど、挨拶がてらにでも」

「わかりましたっ！」

にっこり返事をした榛名は再びしゃがみ込んでカランコエを眺める。

あ、霧島さん？ そろそろ止めようか。

「に、任務……完了です」

「はい、ご苦労さん。ありがとうございます」

そうしてしばらく三人で花を愛でる。

ガーベラの花言葉は希望や前進という意味。

六駆に宛てた物であり、俺自身やこの鎮守府に向けての言葉でもある。

そう、前進。

そうだったな。

俺はこの艦娘達を守ると決めたんだ。横須賀鎮守府の提督が俺より遥かに優秀な人間であっても、それを理由に投げ出しちゃいけないよな。

「あなたは……不思議な人ですね」

「どうしたよ急に」

カランコエに視線を向けたまま榛名がポツリと眩く。

「金剛姉さまに腹も立てず……理不尽な指示にも腐らず」

「あなたは軍人ではないと聞いています。ならば尚更あの様に言われて悪感情を抱くのが普通だと、私も思います。なのにあなたはそんな感情を持っていないように見えます」

……そんなもんなんだろうか。

確かに、理不尽な指示なのかも知れないけど。より勝算を高めるためだと言うなら仕方ないとも思う。

もちろん全力で抵抗と言うか、力を示してあいつらの提督で居続ける所存だが。

それに。

「ああいう風に言う、言ってしまう……いやもしかしたら言わなければならぬ理由があるんだろ？」

「っ!？」

おお、二人揃ってこっち見るでない。照れるわ。

「それが何なのかわかんねえけども。まあ俺はあれだよ、艦娘に悪感情なんて抱けねえよ」

艦これに救われた、艦娘に救われた俺だから。

現実になってもやってる事は今も変わらない、変わらないんだよ。

「その理由を……知りたいと思いませんか？　理解したいと……思っ頂けますか？」

「霧島？」

意を決した様に唇をぎゅっと締めた後、口を開こうとしたその時。

「こんな所でカワイイ妹達とナニしているのデスカ？」

「こ、金剛姉さま」

現れたのは金剛とそれに続く比叡。

「ああすまないな。ちよつとお前らの弱点でも教えてもらおうかと花で懐柔してたんだよ」

「オウ！　中々ずる賢いネー！　でもそんな手に乗る妹達じゃアリマ

「センヨー！」

「そうなんだよなあ、懐柔されてくれねえんだ。だから金剛教えてくれよ、お前らの弱点」

バツが悪そうな顔を浮かべた榛名と霧島の前に立って、その顔を金剛に見えないようにする。

俺の言葉にヤレヤレと肩を竦めながら呆れた様な金剛の表情を見るに、二人の様子には気づいていないようだ。

「諦めて泣きながら請われたら教えてしまうかも知れませんネ！」

「あはは、そりやちよいと難しい注文かもなあ」

いや、それで教えてくれるならマジでやっても良いけど。

まあ、出来るわけないって思っけて口にしたことだろうしそれに乗っかっておこう。

「やれやれ、プライドは一人前なのデスネ。さあ、榛名、霧島。戻りますヨー」

「は、はい！」

後ろから二人が金剛の下へと向かっていく。

途中こつそりと俺に向かって頭を下げてくれる二人だけど。

「霧島」

「は、はい？」

「これだけは言っておかないといけない。

「思わないよ、俺は」

「……そう、ですか」

その言葉に少し肩を落とす霧島。

「話したいと、知って欲しいと思っけて貰う方が先だから」

「っ！」

「霧島？ 早く行きますヨ」

最後に俺に驚いた目を向けた霧島が思っけた事はなんだろうか。それはわからない。

だけ。

「ああ、思ってもらうさ。その為にもまず」

明日の演習。それに勝つ事を考えよう。

金剛姉妹と演習するようです

『演習開始三十分前、各艦最終装備点検を行うように』

提督のアナウンスが演習場に響く中、互いの艦隊旗艦である天龍と金剛が向き合っている。

双方真剣な視線を互いに向け合っていたが、その視線をふっと緩めたのは金剛。

「良い演習にしましヨウ」

微笑みながら片手を差し出す金剛だが、表情を変えずその手を一瞥した後天龍は言う。

「なあ、金剛サンよ。オレが……いや、オレ達が使われたのは唯一人、提督だけ。使つていいのも提督だけだ。アンタにどんな理由があるのかは知らねえ。だが、オレ達はアンタにも横須賀の提督とやらにも手に余るだろうよ」

言い切ると共に天龍は金剛に背を向ける。その背中にはこれ以上話すことはないと言っていた。

「なら……ティーチ、ミー。示してクダサーイ。そのパワーを、そのマインドを」

「……言われるまでもねえ」

天龍が自分の仲間の下へと走り去る。

その姿が遠くなって行くのを金剛は柔らかい笑みで見送る。

「……シエイクハンド位、した方が良かったネ」

重なる事の無かった自分の手の平を見ながら、先日払った提督の手を重ね思い出す。

拒否されるといふ事がどれほど寂しいことなのか、思い出す。

「……良い、鎮守府デスネ」

ポツリと呟く。

感じていた寂しさを表すかのように、出た言葉は羨ましそうな、あるいは懐かしみを含ませたもので。

「お姉さま」

感傷に浸るようにその場から動かない金剛へと後方に控えていた

比叡が声をかける。

「……あの提督を、どう思いマスカ？」

「墓場鎮守府の司令を、ですか？」

近寄ってみれば金剛にそう質問される比叡。その質問に僅かに首を傾げた後、比叡は静かに答える。

「……凄いい司令だと、思います。正面海域を僅かな戦力で攻略したことも……そして」

「艦娘にアレだけ信頼、慕われていることも。デスカ？」

「はい。正直、驚きました……私でさえ、共に征きたいなんて思っただけでしたから」

比叡の言葉に頷きを一つ。

それは金剛自身も思った事だ。

あの提督の言葉に、雰囲気にも、あるいは言葉に出来ない何かに。思わなかった口にしたバーニングラブという言葉がぶつけてしまうところだったから。

その気持ちを我慢するが故に思わず握手を拒否してしまった……なんてごまかしてしまいたい気持ちをぐっと堪える。

「ワタシは……間違っているのでしょうか」

「……私には、わかりません……何が正しくて何が間違いなのかわかりません。ですけどお姉さま……」

「……」

「お姉さまに着いて行くと決めた。そこに後悔なんて欠片もありませんよ」

大きく深呼吸をした後、金剛は比叡へと振り返る。

「ソーリー……比叡。あなたには、昔から苦労をかけマスネ」

「ふふ、弱気なお姉さまも素敵ですけど……。私は最初からずっと金剛お姉さまを支えるって言っていましたよ？」

「オウ、それでシタね。サンキュー、比叡」

「はいっ！」

二人は少しだけ笑いあった後、自分の装備を点検している榛名と霧島の下へと走る。

今は感傷に浸るときでも、少しの後悔をするときでもないと。振り切る様に、走る。

「チエックは終わりマシタカー?」

「はいっ! 榛名は大丈夫ですっ!」

「チエック、ワン、ツー……はい、この霧島もいつでもいけます」

力強く返事をした二人に金剛は笑みを深める。

一人ひとりの顔を見返した後、静かに瞑目する金剛だが。

「分かってマスネ? この演習……必ず勝利シマスヨ。私達のためにも、彼女達のためにも」

「了解っ!!」

再び開かれた目と顔には勝利への意思が強く現れていた。

海の上にある輪。

輪の中心には六人分の手が差し出され、重ね合わされている。

「戦艦四隻と演習できるなんて滅多にない、胸を借りるつもりで思いつきりいけ……なんて提督は言ってたが。夕立」

「はいっ!」

「オレ達の後ろには何がある?」

手の持ち主は一つ下にある手へと質問する。

「鎮守府があるよっ!」

「じゃあ大淀、その鎮守府には誰が居る?」

元気よく答えながらも溢れんばかりの戦意を目に宿している手の持ち主。その下にある手に続いて質問をする。

「提督が、そして仲間が……私達の家族が居ます」

「その通りだ。加古、前に立つオレ達が深海棲艦に負ければ鎮守府は、家族はどうなる?」

眼鏡の奥に真剣な色を濃く彩らせた瞳、その目を質問主に向けながら答えた手の持ち主。その下にある手へと質問が続く。

「当然、危険だよねー。……想像もしたくないけど」

「オレもそうだ。時雨、演習するのは何のためにやるんだ?」

嫌な事を想像させないでよと少し抗議の視線を質問主に向けなが

らも、静かに覚悟を改める手の持ち主。更に下にある手へと問われる。

「深海棲艦と戦う力を手に入れるため。そして家族を守る力を手に入れるためだね」

「そうだ、力を手に入れるためだ。ならば鳳翔さん、力を手に入れるためなら負けても良いか？」

静かに答えながらも冷たく燃える炎を瞳に宿らせた手の持ち主。

「どんな理由が、障害があらうと……勝利を、提督に。敗北なんて捧げる訳には参りません。そうでしょう？ 天龍さん」

一番下にあつた手の持ち主は一番上に置かれた手の持ち主へと答える。

「ああそうだ、当たり前だ。ましてやこの演習相手はアイツを脅かしている。……なあお前ら、アイツ以外の下につけるか？」

その言葉に一齐に全員が首を振る、つきたいわけがないと横に振る。

「はっ！ つたく、揃いも揃って不良品ばかりだな！ 兵器が持ち主を選ぶなんてとんでもねえ話だぜ！」

「む。なら天龍さん一人で知らない人に着いて行けばいいっほい！」
笑い飛ばした天龍に頬を膨らませながら夕立は言う。

見れば、夕立以外の全員……鳳翔ですら意見は同じ様子。

「はははっ！ オレだってゴメンだね！ そうさ、オレ達は不良品。アイツの下でしか働けねえ不良艦娘さ。だからよ……」

——勝つぞ。

最後の一言が天龍の口から零れた瞬間。

「了解っ!!」

六隻から一つに纏った手、戦意の炎が立ち昇った。

「榛名っ！」

「はいっ！」

演習開始のアナウンスが流れてすぐ。

金剛は姉妹の中で一番対空に優れている榛名に声をかけた。その

意図はそれだけで通じている。そう、対空射撃態勢を作ること。

自分達に無くて相手だけが持っているもの。それが鳳翔、空母艦載機による先制航空攻撃。

金剛達が装備している主砲、35.6cm連装砲。その射程距離よりも遠くから行える攻撃。

金剛達が取れる陣形は複縦陣。五隻以上であれば輪形陣を取っていただろう。

お互いの射程距離が交差する中での砲雷撃戦で有利なのは戦艦である金剛達。そんな事は双方分かりきっている。

故に金剛達が一番警戒するべきことは相手の生命線であろう鳳翔による航空攻撃だった。

また、戦艦である自分達は相手に比べて遅い。だからこそ自分達の射程距離外から航空攻撃を仕掛け続けられないよう、最初に来るであろう艦載機の数を少しでも減らす必要があった。

その先制航空攻撃に来る艦載機を撃墜し、空からの脅威を減らす。それが金剛達がこの演習で勝利を収めるためのスタートラインだった。

「お姉さまっ!」

「イエース! 予想通りネ! 榛名、よく狙ってネ!」

速度を絞り、榛名もまた機銃を構え艦載機に狙いをつける。

榛名の持つ機銃の射程距離まで、後――

「――は、い?」

「な、何で!」

射程距離に入るかどうか、その瞬間に。

「きゃあっ!」

「榛名っ!」

艦載機はUターンし、再び距離を開けた。

そして代わりにやってきたのは二発の砲撃。

その砲撃の一発目は榛名へと至近弾、二発目は直撃。

『榛名、機銃装備に損傷。中破』

「シィット!! これは……!」

「金剛姉さまっ！ 艦載機群から一機……あれは、偵察機っ!？」

鳳翔が発艦した艦載機に紛れた大淀の偵察機。

機銃が届かない高度を悠々と飛んでいる。

「弾着観測射撃!? ……そんな、まだ距離ガ!」

「敵艦隊射程距離内ですっ!」

比叡の声に前を向けば、そこにはいつの間にか——開始の合図と共に全速で距離を縮め、自分達の射程距離内へと入って来ていた三隻の艦と。

「っ!? 敵艦載機、再びこちらに来ますっ!!」

「榛名っ!？」

再度折り返してきた艦載機が金剛の頭上に、そして降り注ぐ爆撃。その雨から榛名は身を挺して金剛を庇った。

『榛名、爆撃直撃。大破、轟沈判定。比叡、霧島、攻撃機の魚雷により小破』

「……申し訳ありません、金剛お姉さま」

「榛名……!」

先の弾着観測射撃により榛名の持つ機銃は使用不能。

それでも航空攻撃をなんとかしようとするのならば我が身を盾にするしかない。

その判断に従い榛名は脇目も振らず金剛を庇った。

「シイイット!! 霧島っ!」

「はいっ! 主砲っ! 敵を追尾して……撃てえ!!」

それでも相手はすでに自分達の距離にいる。

榛名が戦闘不能になつてしまったが、相手は自ら自分達の有利を手放したのだ。ならば、この損害の返礼を。

その思いを霧島に託し砲撃を指示した金剛は。

「……アン、ビリーバボウ」

「あり、えません……」

誰にもあたることなく海上で爆発した霧島の砲弾に目を丸くした。

金剛達へと尚も距離を詰める三隻よりも更に奥、主砲を発射したらしい大淀の砲弾が霧島の砲弾に直撃したのだ。

「つく！ 比叡、霧島！ フォローミー！」

「りよ、了解っ！」

驚き止まっていた足を再度動かす金剛達だが。

「なっ!? どうして……!? きゃあー！」

「霧島っ!?」

『霧島、魚雷直撃。大破、戦闘継続可能も脚部艤装に深刻な損傷』

動き出しを捉えた時雨の魚雷。それは霧島へと直撃した。

「わ、私の戦況分析が……」

「霧島っ！ 落ち込んでいる場合じゃない！ 早くっ！」

比叡が足の止まった霧島を引っ張ろうとするも。

「遅いっぽーいっ!!」

「!!」

『霧島、砲撃直撃大破。轟沈判定』

一気に距離を詰め、至近距離から放たれた夕立の12.7cm連装砲二門によって遮られた。

「比叡っ!!」

「くっ！ はいっ！ お姉さまっ！」

ここに来て本能的に避ける、距離を取ろうとしていた自分達の過ちに気づき夕立へ砲塔を向けようとする金剛と比叡だが。

「させねえよっ!!」

天龍が装備した14cm単装砲二門の砲撃、その至近弾により行動が遮られる。

『金剛、比叡共に損傷軽微』

どういう手品だろうか和金剛は困惑する。

間違いなく夕立は自分達と肉薄しているといっても良い距離にいるのに。

夕立が自分達に砲撃すれば自分も巻き添えになって損傷するはずだというのに。

夕立は無傷。ただ金剛達だけが損傷を重ねる。

それに加えて天龍の絶妙といってよい砲撃。まるで夕立の行動を全て理解しているかの如く、夕立を傷つけないタイミング、位置へと

放たれ金剛達の行動を阻害するそれ。

合間を縫って夕立を砲撃しようとするも必ずそのタイミングで金剛が比叡を盾にする位置にいる。

どれ程の練度を積み重ねればこうなるのか。

横須賀鎮守府でかつて主力と言われた金剛ですら想像もつかない。

ただそれでも一つだけ理解できたことがある。

——完全に捕まった。

金剛はそれだけを理解できた。

開始から僅かな時間で榛名を轟沈判定へ追い込み、相手へと有効な攻撃ができないままに霧島までも轟沈判定。

そうしてようやく、手のひらの上で踊らされていたことを理解した。それどころか。

「ひええっ！ つく、お姉さまっ!!」

『比叡、大破。轟沈判定』

こうして捕まったがために、二度目の大淀と加古による協力弾着観測射撃と時雨の魚雷が比叡を襲った。

時雨の魚雷は金剛に向けられたものだったが、その軌道上に比叡が身を割り込ませ金剛を庇い轟沈。そして複雑な戦闘行動を行っていたながらも誤射なく一切の損傷が見られない敵艦隊。

チエツクメイト。

そんな言葉が金剛の頭を過る。

どうしてこうなってしまったのか。

確かに金剛型戦艦の中で金剛と比叡はほぼ同時に建造されたが、榛名と霧島は大きく間が空いてからの建造。姉妹の中で練度に差があるのは認めるところ。

だが、それがこの今にも着いてしまいそうな決着の理由ではないと感じている。

提督には自分達の方が上だと振る舞ったその実、厳しい戦いになるとは思っていた。

高速戦艦と言えどやはり戦艦。護衛艦も無しに上手く機能する、立ち回ることができるまで安直には考えていなかった。

だからこそ、最後は精神力の勝負になると思っていた。
勝利への意思。

その力の差が勝敗を分けると思っていた。
だと言うのに蓋を開けてみればその舞気持の戦い台にすら辿り着けない。

「これでフィニッシュ!? な訳無いデシヨ! 私食らいついたら離さないワ!」

——そんなの認めラレナイ。

風前の灯火だった戦う意志を再び燃え上がらせる金剛。

「ここは……ワタシの距離デース!!」

相手の攻勢に思考を止めていた金剛は自分を奮わせる。

この演習で勝利し自分達の価値を、力を示すと共にこの艦娘をも守りたいと思ったのだ。

提督が艦娘を信頼し、艦娘が提督を信頼する。

そんな、かつて当たり前だったかも知れない鎮守府が生まれた。

今度こそ、失ってはいけなはずの場所であり光景。

だからこそ、こんな所で負ける訳にはいかない。

「撃ちますっ! バーニング——」

「いや、撃たせねえよ」

金剛に突きつけられる砲塔と魚雷。

砲塔は正面から天龍、背後に夕立。側面から魚雷を時雨。

上空を見れば再発艦された艦載機と偵察機。

紛れもなく、疑いようもないチェックメイトだった。

「……聞かせてクダサイ」

「なんだ?」

燃え上がらせた戦う意志は蟬燭火最後の煌き。やはり、徹底して気持ちの戦いすらすることができなかつた無念を噛み締めながら、静かに主砲を降ろし金剛は天龍へと問う。

「沈むと分かっている……提督と死に別れると分かっている。出撃したいと思ひマスカ?」

俯いたままに発せられた言葉。

その言葉に天龍は間髪入れずに答えた。

「するさ、出撃する。死に別れないためにな」

「ノー！ 死に別れるのは決定事項デスっ！ それハ——」

勢い良く顔をあげる金剛だが。

天龍も、時雨も、夕立も。

「アイツが望む限りオレは……オレ達は沈まない。万が一、億が一でも生き残る可能性があるのなら掴み取る。無ければ創り出す」

「夕立、提督さんのためなら何でもできるっばい！」

「もちろん、僕だって。僕の命は提督のモノ、勝手に沈んでなんかいられない」

全員が同じ顔をしていた、同じ覚悟を決めていた。

沈まない。

提督のために沈まない。

それは今金剛の目の前に居る者だけではなく、この鎮守府の総意。その圧倒的な覚悟に金剛の背中へゾクリと寒気が走る。

護国のために、提督のために、大事なモノのために沈む覚悟はいくらでもしてきたし、している。

それでもこここの艦娘は違う。

必ず生き抜く。

その覚悟を深く刻んでいるその事に寒気が走る。それはどれほどの覚悟なのだろうか。

——ああ、そうか。在るステージですらも違ったのデスネ。

「ハア……バカにつける薬はアリマセンネー」

「……」

ため息を一つ。

愚痴に近い言葉と共に両手を上げる金剛。

「負けました、完敗デース……コングラッチュレーションズ。これできつと、提督と共に海を征けるデシヨウ」

そのバカは誰に向けたものか。

喜びを表す目の前の艦娘達へか。

それとも。

生き抜く覚悟を捨てた自分に向けてか。

そんな事を、幾分すつきりとした頭で金剛は考えるのだった。

提督は応えないようです

「勝った、か……」

演習の結果、うちの鎮守府は見事な勝利を収めた。S評価間違いなしの完全勝利だ。

そう、完全勝利。

うちの艦隊に被害は無し。誰一人損傷判定を受けることなく演習を終えた。

嬉しいと思う、疑いもなく。

その思いに身を任せて目を閉じる。

製油所沿岸地帯を攻略してから、ずっと皆で一緒に考えて訓練してきた新しい動き。

それが、今回の演習で見事に成し遂げることが出来たから。

平たく言ってしまうえば第一艦隊と第二艦隊の融合、いいところ取り。

鳳翔で言えば、妖精が搭乗した艦載機による高度な攻撃術。

一度発艦してしまえば先制航空攻撃が終わるまで戻ってくることはない艦載機を途中でフェイント、Uターンでタイミングをずらして弾着観測射撃による先制攻撃の後改めて航空攻撃。

妖精に慕われている鳳翔だからだろうか、妖精は鳳翔の事をととてもよく聞く。だからこそこういった事も出来た。

いずれより高度な航空技術を身に付けて艦隊の力になってくれるだろう。

加古と大淀による協力弾着観測射撃。

加古は本当に少しだけと本人は言っていたが変わった。自分をフォロワーしてくれる艦娘を選ばなくなった。

今までは古鷹居てこそその加古ではあったが、そう。誰とでも協力出来て自分の力を発揮することが出来るようになったんだ。

相変わらず一人で何かを上手く出来る訳ではないけど、それでも大きな進歩だ。本当に少しだけなんてとんでもない。

そして大淀。

偵察機による観測技術を磨き続けたことはもちろんだが、何よりも

凄いと思えるのが相手の砲弾に砲撃をぶつける技術。

正直に言ってしまうえば、あの作戦報告書を読んでそんな事出来るわけがないと俺ですら思っていた。だが、今回の演習含めてそれが真実であると思いついた。思いついた後疑ってすまないと大淀に謝ったら何故かドヤ顔された、やったぜ。

とは言え、神業とも言えるそれだが完全に足を止めて偵察機の視界に集中しなければ出来ないっていう条件もあった。自分の視界よりも遙かに遠く、広くを見渡せる世界から自分と相手の射撃技術、距離を計算し行われるもの。

その間は完全に無防備となるから護衛じゃないが、傍に誰かをつけなければならぬ。今回は鳳翔がその役目を担ってくれたが酷く限定的な神業であることは覚えておかないといけないだろう。

そうしてそんな第二艦隊がする支援の中繰り広げられる第一艦隊らしさ。

夕立は相変わらずの突撃娘ではあるけど、突撃の仕方が変わった。無理やりの突撃をしなくなり、必ず相手の隙を見つけてそこへと突撃するようになった。

その後にしても、自分への被害を出さないよう今回の様に誰かを自分への射線上に挟むように動いたり。

平たく言えば安心感のようなものが生まれた様に思える。
時雨にしてもそうだ。

自身を晒して相手をコントロールするのではなく味方が作った小さな隙を大きく広げ、その上で自分の思惑にはめる様になった。

魚雷発射のセンスも凄いの一言。霧島を沈めるに至るきっかけを作った雷撃にはもうしびれたよ。

大淀が必ず砲撃を潰して相手が動揺する。それを見越した、信じ切った最高の魚雷だった。

そして天龍。

目立った戦果を挙げたわけじゃない。だけどこの作戦の指揮を執ったのは天龍で、毎日鳳翔と遅くまで研究しあった甲斐があったというものだろう。

それに加えて第六感。今まで敵に対して働いていたそれは、ついに味方にまで働くようになった。

あの夕立が作り出した混戦状態の中、相手にだけ損傷を与える、妨害する事が出来たのもそれのお陰だろう。

俺がかつて言った仲間を乗算するってのは、味方を鼓舞するって意味合いが強かったんだけど、予想以上の力を身に付けてくれたようだ。

第一艦隊の呼吸を知り、それに適した支援を行えるようになった第二艦隊。

第二艦隊の技術を知り、それを信頼しその身を預けられるようになった第一艦隊。

かつて第二艦隊、鳳翔が言ったように極めて高い確率で相手の動揺を誘える動き。それは深海棲艦にも通用するもので。

ある意味、この世界の艦娘達にとってうちの戦術は初見殺しと言って良いだろう。

今回の演習ではその集大成ともスタートラインとも言える、我を取り戻すまでに決着をつけるといった形を貫けた。それがこの完封と言って良いだろう勝利に表れたんだと思う。

より夕立や時雨の動きを活かす方向で考えるのなら加古を龍田に変更するし、支援を重視するのなら時雨と古鷹を変更と言ったように、様々なパターンを考えて実践は進んでいる。

基本的な海域攻略においては役割を基に第一艦隊、第二艦隊、第三艦隊の括りを変えるつもりはないが、これが今のうちが出来る最高の全力出撃編成。

……強くなった。本当に。

もしかしたら最初から持っていた力なのかも知れない、俺は別に何かを彼女達にしたわけじゃないのかも知れない。

それでも彼女達が成長して、笑顔を見せるようになって、こうして強くなった。

それが、本当に嬉しい。

だけ。

「提督」

目を開けた時、思いに浸る俺へタイミングを見計らっていたのか龍田が声をかけてきた。

「良かったねー」

「ああ……そう、だな」

そうだ良かったんだろう。

皆は強くなった、俺もまだまだ皆の指揮を執り続けることが出来る。悪いことなんて一つもないはずだ。

「何か、気にしていますか？」

「いや、良かった。そう、良かったと思ってるんだよ古鷹。だけど……」

歯切れ悪い返事が気になったのか心配気な表情を浮かべながら俺に聞いてくる古鷹。

「ただどうしても。」

「無念を噛み締めたような金剛の表情が頭から離れないんだ」

「提督……」

皆がこの鎮守府のために、自惚れじゃなければ俺のためにと頑張ってくれた事は言葉にできないくらい嬉しい。

それぞれがそんな想いの下戦ってくれたって事はわかってるんだ。それに応えたい、応え続けたいと今も強く思っている。

でもそう、金剛も。

あの隠しきれない無念だという思い。

それは一体何なのか、わからない。

だが少なくとも。

「俺は……金剛が、金剛達の想いの上に立ったんだ。そう、分からないけど無念だと隠しきれない様な程その胸に強く宿した想いの上に」

「たとえそれが善意であろうと悪意であろうと。」

「何らかを踏み立った事に変わりはない。」

その思いを背負う覚悟なんてとつくに出来ている。だけど、それを背負わせてくれるかどうかはまた別の話。

「えいっ」

「あたっ!？」

そんな事を考えていれば龍田がおもむろにデコピンしてきた。何だよちくしょう可愛いな。

「提督はねー? もっと私達を自分のために使っているのよー?」

「あん?」

ニコニコとそんな事を言ってくる。ていうか使うってな……。

「使うなんて言ったら気を悪くしちゃうかも知れないけど……あなたには私達の力になってくれた。そんな人の力になりたいの」

「はい、龍田さんの言う通りです。夕立ちちゃんじゃありませんけど……私達は提督のためになら、きつとなんでも出来ます。なんでも出来るようになります」

……お前ら。

「あなたが辛いと思うなら私も辛い。だから一人でそんな思いを抱えないで? それを喜びに変えるためなら私達に半分でも全部でも……預けてくれて、いいんだよー?」

「力不足かも知れません。だけど……私達はいつだって、提督が提督らしく居てくれる事が何より嬉しいんです」

……はあ。

どうやら俺はまだまだ自惚れきれていなかったらしい。

それどころか甘く見ていたとさえ思う。

やっぱり艦娘は最高だ。

「ったく。そうだな、だったらちよつとお願いしたいことがあるんだけど良いか?」

「もつちろん! なんでも言つて頂戴ー?」

「はいっ! 私達の良い所、たつきさん教えてあげちゃいますっ!」

「よろしい。ならば二人共、そのナイスなおっぱいを触らしてくれ」

何でもするって言ったよね!

こういう時になんかこう、格好いい言葉の一つでも言えたら良いんだけど……残念ながらイケメン力の足りない俺は下ネタに逃げろぜっ!

……。

あ、時間が止まった。

「なな、なにや!? にやにをきゆうにいつちえるの!？」

「てててて、ていとく!? わた、わたたたた!？」

ボンツと音を立てて二人の顔が真っ赤に。

いやー良いもん見れたわー。これで俺もまだまだ頑張れるわー。

なんて思ったかったんだけど?

「あーいや、すまねえ。流石に時と場合を考えてない発言だったな?」

「そしよ!? しよれは!？」

「ときとばあいがおっけーなら!？」

あ、あれ? おつかしいな?

ここはこう。このクソ提督! よろしくビンタの一発でも飛んでくる場面……。あ、いや古鷹には失言も良い所でヤバイとすぐに頭を下げようと思ったんだけど龍田と似たような反応で……。

あるえ?!

ま、まま。ええわ?

とりあえず帰ってくる皆を迎えよか、せやな。

「完敗デス。これほどマデとは思ってマセンでした」

いやびつくりするから入室するなりいきなり頭下げないで下さい。

俺どうすればいいかわかんねえからさ。

しかも対応間違ったら分かってますよね? なんて顔に書いてる比叡が怖い。榛名はあたふたしてるし、霧島の眼鏡は光ってるし。

もう一度言うけど、入ってくるなりいきなりこんな雰囲気になれるとマジでどうすりやいいかわかんねえってばさ。

「申し訳ありません。出来れば今までの失礼な言動も許して頂けるとうれしいデス」

そう言つて手を差し出してくる金剛。

これはまああれか。

握手して仲直りって事かね。

まあ、これがきつかけではあったからそれも悪くないのだけれど。

「天龍」

「んあ？　なんだ？　提督」

天龍にアイコンタクト。

お前が握手しろと伝える。

「んあ？　な、何でオレが……」

「金剛」

「ハイ」

「改めて紹介する。うちの鎮守府艦娘筆頭、天龍だ。どうかよろしく頼む」

「うぐっ」

そう言ってみれば逃れられないと悟ったのか天龍は頭をかいた後、その手をスカートで拭い。

「……天龍型軽巡洋艦一番艦、天龍だ。金剛サン、よろしく頼む」

「……ハイ、こちらこそネ。先の演習指揮、見事デシタ。是非ワタシにもティーチしてもらいたいものデス」

戸惑いながらも握手する二人。

違うだろー、そうじゃないだろー天龍。

「こら筆頭。金剛にちゃんと謝罪しなさいな」

「な、何でだよっ!?!」

「お前演習前に握手するの拒否しただろ。ちゃんと見てたぞ？　はい、謝ってどうぞ」

「う、うぐぐ……ゴメンナサイ」

「い、イエ……こ、こちらこそ?」

よしよし、これでオツケーね。

ちゃんとうちの筆頭だつてこと覚えておくんだぞー天龍ちゆわあん。

「よし、それでは先の演習評価を行うが――」
「待って下さいっ!」

と、大きな元気の良い声に目を向けてみれば比叡さん。どうしましたかね？

「お姉さまが謝っていますっ！　なのにあなたは……なぜ応えないん

ですかっ！ 気合いつ！ 入れてっ！ 受け入れて下さいっ！」

「ひ、比叡！ ストップ！ お、落ち着くネー!？」

おーおー比叡の金剛好きっぷりは変わらずか。善き哉善き哉。

あ、でも榛名の慌てっぷりに拍車が……おおう、霧島さんや眼鏡からビーム出そうやめて。

「比叡」

「なんですかっ！」

「何を受け入れたら良いんだ？」

「……はえっ？」

ともあれそれがわからないわけで。

「失礼な態度を取られた事を受け入れたら良いのか？ それともこの場を、作戦中を上手くやり取り出来るように表面上は仲良くやりましようということをか？」

「っ！」

確かに。

嫌いな相手だろうがなんであろうが上手くやれ。

それは戦場では極めて必要な技術なんだろうさ。

だけど俺は生憎と軍人じゃねえもんで。

「それは確かに正しい事なんだろう、だから艦娘として同じ舞台に立つ天龍には悪いが受け入れさせた。だが、俺は金剛が言ったようにお前の、お前達の提督ではない。ならばこそ本当の意味で受け取って欲しい物を受け取りたい」

金剛は俺に知って欲しいとなんて露程にもまだ思っていないだろう。それは分かっている。

だからこそ、思ってもらえる程の信頼を俺が金剛から得る事が先なんだ。

「金剛」

「ハ、ハイ」

声をかければ動揺している金剛。

煽るような事を言って悪いとは思うんだけど、金剛にとって俺が提督でないのであれば、俺はただの俺という個人。

艦娘が大好きなただの俺として接するしか無い。

「シェイクハンドはノーサンキュー。ああ、そうだ、そうだからこそ良い。上手くやるより、自然にやりたい。いつか……俺をお前の隣に並び立たせてもらえる時が来たらでいい。だから覚悟してくれ？ 俺は、お前の提督じゃあないと言う事を」

「……ワカリ、マシタ。よく、覚えておきマス」

その時は握手をしよう。共に海へと挑む者としてお互いを認め合おう。

さあ、その為にも。

「では演習評価を行う。その後、防衛戦構築と南一号作戦に向けての準備について打ち合わせをするぞ」

「了解っ！」

やるべきことをやり、成すべきことを成そう。全てはそれからだ。

演習映像が大本営に届いたようです

大本営司令長官室。

部屋に備えられたテレビの前、ソファに腰掛け流されている映像に釘付けになっている男。

例えば白髪だらけの頭が示すように、あるいは日々深くなっていったであろう皺と共に修羅場をくぐり抜け続けた歴戦の勇士といった風貌のように。そのどれからも想像がつかない雰囲気、顔つきとは裏腹に少年のように目を輝かせながら。

流されている物は横須賀鎮守府所属の金剛型戦艦と墓場鎮守府所属艦娘が行った演習映像。

流れ終わった映像をリモコンで巻き戻し、最初へと。

これで彼がこの映像を巻き戻した回数は三回。

一度目は驚きながら巻き戻し二度目は深く考え込みながら。そしてこの三回目は年甲斐もなく心躍らせながら。

映像が最初に戻った時、部屋の主がノックの音と共に現れた。

「申し訳ありません、お呼びしたのにも関わらず遅れてしまいました」「構いません。私を呼んだのはこれが届いたからでしょう……こちらこそ先に一人で観てしまい申し訳ありません」

敬礼していた手を降ろし、失礼しますと言いながら男の隣に腰掛けた長官。

「長官はこれを？」

「いえ、まだ見ておりません」

ならばと巻き戻された映像を見るように顎で促しながら自身も再びテレビへと視線を戻す。

映像が届いたのは今日の朝。

すぐに見ようと思っていた所、南一号作戦の詳細を詰める為にと呼び出され先程までは作戦室で会議を行っていた。

少し緊張している面持ちの長官と楽しげに映像を眺める男。

映像が進むにつれ顔に浮かべていた緊張は解けていき、決着がついた頃には何時も浮かべている笑顔を戻していた。

「大将、感想は如何でしょう？」

「……今は大佐ですよ、長官殿」

不快気に顔を歪ませつつ長官を少し睨む大将と呼ばれた男。

「良いじゃないですか。僕も大将の敬語を聞くと立つ鳥肌を耐えるのが辛いんです……それに、あなたも話しにくいでしょう？」

苦笑いを浮かべながら言う長官。

そう、長官の隣に座る男の階級は大将。元帥に次ぐ権力の持ち主。

基本的に将官は大本営勤務となる。

鎮守府で提督として着任する場合は佐官、大佐という階級が最高階級である為、一時的に階級が変更された男。

その事に対して不快を示している訳ではなく、自分の事も、あらゆる事情を分かっているながらそう告げてくる長官に鼻をつまんでいるのだ。

「……一言、強い」

やれやれと頭を振り、少し前の自分へと顔を戻した男はそんな事を言いながら話を続ける。

「……貴様がかつて言っていた艦娘は人でも兵器でもないという言葉。それを思い出した」

「と、言いますと？」

何処か懐かしむような視線に気づかないふりをした長官は話の続きを催促し、大佐は一つ頷いた後口を開き直す。

「たった今見ただろう。墓場鎮守府の艦娘、前衛を走った駆逐艦がわかり易いか。これは紛れもなくわしらが持つ艦隊行動の常識を逸している……後方から常識破りの動きをする前衛を完璧に支援したあの鎮守府の艦娘もそうだが、際立つのはそれら全てを指揮したあの軽巡洋艦。確か……」

「天龍です」

「そう、天龍。その天龍の指揮が見事だった。混戦を混戦で無くした、あの艦隊を秩序だてた、わしらには想像も出来なかった形だな。その上で指揮に徹するわけではなく、自身もしっかりと戦闘に参加。金剛型には悪いと思うが、負けるべくして負けたとも言えるだろう」

瞑目し、思い出すように語られる大佐の声は何処か浮き立つ心を抑えるの必死。紛れもなく初めて見た戦術に興奮し気分が昂ぶっていると長官は感じる。

そう思うからこそ、より詳しく話を聞き出そうと言葉を選び、話を続ける。

「それは……単純に練度だけを見て、でしょうか？」

「やれやれ……言わせようとしているのか貴様」

「さて、何のことやら」

あつさりと思惑を看破された長官の背中に冷たい汗が一筋。

その冷たさを知ってか知らずか、大きくため息をついた大佐は吐ききった息を静かに吸い込み直す。

「練度はそう大きく変わらないだろうな。一番違うのはあの目……必ず勝利するという色の他に含まれていた物があった。大きく差があったのはその含まれていた物の質だろう」

その言葉を聞いた長官は大きく頷く。

墓場鎮守府へ送った金剛型はかつての横須賀鎮守府主力。

長門、陸奥といった戦艦が建造されてから出番は少なくなってしまうが、間違いなく強いのだ。

その金剛型に勝利したというのだから練度以外に理由があると長官は思っていたが映像を見たことで理解した。

彼女達は彼の為に強くなったのだと。それはかつての最大規模、最高戦力と言われた横須賀鎮守府の艦娘を破るほどに。

「艦としての力を上手く使うだけではなく、想いによってその力を増幅させる。故に人でも艦でも無い艦娘、か……」

「大佐」

「分かっておる。兵器派の人間もこれを見れば納得する他あるまいて……わしとしても、な」

第一関門、突破。

長官はそう確信した。

もしもこの演習で彼らが敗北していたら兵器派によって立案した作戦が強行されていた所。

今となつては極僅かと言っていい中立派。成果主義派とも言い換える事が出来る、自分の保身も躍進も気にかげずただひたすらに勝利の二文字を追い求める一番軍人らしい派閥。

その筆頭である大佐……大将。

彼の発言力は極めて大きい、それは兵器派ですら捨て置くことが出来ないほどに。

長く軍に勤め、功績を重ね。順当に階級の階段を昇った彼の信頼は厚かった。それは上下関係なくあらゆる人間に。

その彼が言うのだ、兵器派は苦々しく思うかも知れないが納得せざるを得ないだろう。

「だが、分かっているな？ 墓場鎮守府の戦法は初見だからこそ通用した部分も大きい。慣れられてしまえば、ちゃんとした構成の艦隊なら……勝敗は別としても、こう簡単にはいくまい」
「分かっています。それは僕だけではなく、彼、彼女達もそうでしょう」

大佐の言葉に緩んでいた頬を引き締め直す長官。

そう、あくまでも第一関門を突破したに過ぎない。

確かにこれで別の作戦を執る、執れる可能性は高まった。そしてその作戦は墓場鎮守府に依存した形の物になるだろう。

極めて高い戦力を有すると証明したあの鎮守府。

だが、その戦力があてにならない。または潰れてしまった、その戦力から見込まれる戦果が想定以下だった時、兵器派の作戦が執られる可能性は十分にある。

中立派の大佐。

兵器派が大佐に対してある程度従うのは彼が成果主義であるからこそだ。

勝つためなら何でもやるという姿勢はすなわち、勝つための最善手を躊躇わないということ。

かつて墓場鎮守府を建築するための作戦。多くの艦娘を犠牲にするに分かつていた作戦。

あの時意見は割れていた。そして最終決定は大佐に委ねられ、可決

した。

それが建築作戦の最善手だと紛れもなく長官の隣にいる彼が判断したからこそだったからだ。

「……わしは今回大本営大将として作戦には参加しない。その意味がわかるな?」

「……はい」

南一号作戦、総司令官。それは司令長官となった。

兵器派の人間たちはこぞって反対していたが、元帥の決定であるということはもちろん、そして何より補佐として横須賀鎮守府提督として大佐がついていくとなってようやくその意を引き下げた。

そしてそれがわかった上で告げられたその言葉の意味。

「僕は、その必要があるなら……たとえどんな作戦であろうと最善手を執ります」

「……時期が来れば金剛から連絡が来る。それまでに改めて覚悟を決めることだ」

再び瞑目する大佐。

話は終わり、と打ち切る形ではあったが長官はこれを優しさと受け取った。

今もなお、自分の中で叫んでいる何か。間違えていると苦しみの声をあげている何か。

何かに蓋をして言われた通り、覚悟を改める為に今までのことを振り返る。

一度目の南一号作戦。その大敗は後悔しか残らない物だった。

あらゆる物を失った。それは自身が着任したと同時にやってきた絆深い初期艦叢雲の身体でさえも。

あの時の絶望を覚えている、失った温もりを覚えている。

そしてそれを二度と誰にも味わわせたくない。

だからこそ二周目を選んだ。新しい水平線に勝利を求めた。

それでも犠牲無しに上手くなんて行かなかつたこの世界、残されたのは勝利と言う二文字のみで。故に最善手がたとえ多くの艦娘を再び犠牲にするものであっても、長官はやれと命令するだろう。

その事を悔やむ資格は今の自分には無いと長官は考えているから。多くの物を取り戻すなんて事は出来ないし、悔やむにはすでに多くの艦娘を傷つけすぎた。

大淀は言うに及ばず、自分と似たような経験を持つあの金剛でさえも利用すると決めたのは自分だと。

後悔は先に立たない。

その事を長官は痛いほどによく理解している。

だからこそ勝利のために厭わない。この世界から全ての深海棲艦を駆逐することに全てを賭ける。

「本当は、お前にそんな顔をさせたかった訳ではないのだがな」

「……」

大佐としてでも、大将としての顔でも無い顔を浮かべながら大佐はポツリと言葉を零した。

それは長官の浮かべていた表情があまりにも悲壮の色が強いように大佐には思えたからだろう。

長官との付き合いは長い。

いや、長い等という言葉は当てはまらない。

まるで親子のように深く記憶に刻まれている二人の軌跡。

「大佐。今は、勤務中です」

「……ああ、すまない。だがな」

こほんと咳払いを一つ。

それはどちらのものであったのか、もしかしたら二人の咳払いだったのかも知れない。

だが、その咳払いで作り直そうとした雰囲気は変わらず。いや、他ならぬ咳払いをしたはずの大佐自身が変わえなかった。

「わしはこの作戦終了と共に引退するじやろう。結局お前には何一つらしいことが出来なかったが……もしもこの作戦が成功して、お互い無事に生き残ることが出来、海に平和が戻ったその時は」

「……そうですね、その時は酒でも飲み交わしましょう。ずっと出来なかった親子としての時間を……作り直しましょう」

あまりにも軍人として互いを認めあった二人。

故に言葉に出た親子という響きに違和感しか覚えられない。
その事を長官は寂しく思う。

かつては作り直すまでもなく紡がれた縁を。ただの七光息子で居ることができた時の事を。

だがそれでも創り出せるはず。

たとえ血の絆は無くとも、紛れもなく二人は親子。

新たに絆を紡ぎ出すために必要なのは時間でも何でもない。

ただ相手を想う気持ち、それだけで良いのだから。

金剛姉妹が墓場鎮守府で過ごすようです

——この鎮守府はおかしい。

それがここ数日墓場鎮守府で時を過ごした霧島の感想だった。

金剛型姉妹はそれぞれ役割を与えられた。

金剛、比叡は防衛線構築の為に撃艦隊と共に前線へと出撃。

榛名、霧島は練度不足を補うためタンカー護衛任務に就いている第三艦隊の護衛。

一日に二回行われるタンカー護衛任務。霧島は午後から行われる時に参加している。

故に午前中は基本的に鎮守府で過ごしているのだが……。

朝、妖精が吹く総員起こしのラッパが高らかに響く。

その音に目をこすりながら起床、身だしなみを整えた後まず行われるはずの朝礼は無く、食事の時間だった。

「あ、おはよう〜霧島さん」

「はい、おはようございます」

ここからおかしいという思いは始まる。

休日、非番。

そんな言葉はこの鎮守府に来てから初めて聞いた言葉。

それに今日当てはまる龍田がニコニコと厨房に立っている。

休日なのだから気の済むまで惰眠を食うでも、気分転換に精を出す等すればいいはずなのにも関わらず全ての艦娘が朝食に顔を出し突き合わせる。

龍田自身は料理が楽しいからと話しているが、料理の出来ない艦娘であってもニコニコと笑顔を絶やさず配膳を手伝ったりしていることに霧島が首を傾げたのはつい最近。

基本的に艦娘や提督への食事は民間から仕事としてやってくる人間によって作られる。

来た人間はこぞって無機質な表情を浮かべながら食事を作っていたし、ましてや艦娘へと笑顔で料理の皿を手渡したりしない。決まって予めテーブルに配膳されている物を、準備のできた者から食べてい

く。

「はい、今日は焼鮭とお味噌汁にご飯……あつそうだー、美味しいたくあんがあるのよーちよつと待っててねー」

「は、はい」

笑顔でお膳を手渡されたと同時に、両手をぱんつと叩きパタパタと冷蔵庫を開ける龍田。

墓場鎮守府では、休日の艦娘……料理のできない艦娘だった場合、提督が料理を作る。

その事を聞いた霧島は、というより金剛型姉妹全員はしばらく言葉の意味が理解できないと言ったように唾然とした。

確かにここは最前線で、民間人を派遣するには危険な場所。

だから艦娘が自炊するというのは辛うじて理解の及ぶ所、だが提督までもが料理をするとは一体どういう事かと。

見慣れた。

確かに数日を過ごした今となっては見慣れた光景だが、霧島を含めた金剛型戦艦全員が未だに慣れない。

「あれ？ どうしたんだい？ 席に行きなよ？」

「そ、そうですね。すいません」

霧島のように龍田からお膳を受け取ろうと後ろに並んだ時雨が不思議そうに霧島へと声をかける。

「あ、時雨ちゃん。今日はこのたくあんがオススメよ？」

「へえ？ ……龍田、やるね。まさかついに漬物にまで手を出すなんて……」

「うふふ。先生は、まだまだ越えられるわけにいかないものね？」

二人の間に走った火花を背に、未だどこかぎこちなく霧島は朝食テーブルへと着く。

「おはようございますっ！」

「はい、おはようございます夕立さん」

先にイスへと座っていた夕立が朗らかに霧島へと挨拶。あまりにも純な笑顔に霧島もぎこちなさを消し、つられて笑顔になった。

人懐っこいと言うべきか、裏表なく人付き合いをする夕立に対して

金剛型の全員が好意的だったりする。

「今日も一日頑張るっぽい！」

「そうですね。この霧島も一層奮励しましょう」

ニコニコと近づいてくる夕立を可愛らしく思い、頭へと手を伸ばしてみれば。

「ちよつと待つっぽい！」

「えっ!？」

ずぎぎつと大きく後ろに飛び退く夕立。その事に驚くと同時に。

「おはようさん」

「あ、おはようござ——」 「提督さーんっ!!」

提督が食堂に現れ、夕立が提督に飛びついた。

小さな呻き声とえへへ笑い。少し遅れて呆れながらも微笑ましいといったような視線を送る者達。

やがて頭を撫でられ満足した夕立は再び霧島のところに戻ってきて。

「はいっ！」

「え？ あ、あの？」

頭頂部を霧島に差し出す夕立。その意図がわからず困惑する。

「あれ？ 間違ったっぽい？ 撫でてくれようとしてたっぽい？」

「え、ええ。先程はそうでしたけど……嫌だったのでは？」

てつきり嫌がられたかと思つた霧島は恐る恐る伺うが、夕立は大きく音が出るくらい首を横に振って。

「違うつぽい！ 撫でてもらうの好きっぽい！ でもね……」

「でもっ！」

「提督さんに一番に撫でて欲しいっぽい！」

につこり高らかにそう言い放つ夕立に霧島の眼鏡がずれた。

ニコニコと笑う夕立に苦笑いを浮かべながらその頭を撫でる。

——この鎮守府はおかしい。

始まった朝食にしてもそうだ。

ここには朝礼が無い。だが正確には朝食の時間が朝礼なのだ。

全員提督が席に着くまで誰も食事に手を付けない、そしてそれが分

かっているから提督は必ず朝食に出てくるし間違っても遅刻しない。
霧島達金剛型がまったく見たことの無い、想像もない。理解すら及ばない朝礼。

それは時に談笑を交えながら、まるで戦いの話をしているなんて露程にも感じないほど穏やかに行われた。

「お、このたくあんうめえ」

「あ……あははー、おかわりあるよ〜?」

後手で提督に見えないように小さくガッツポーズをする龍田。

それに気づいた霧島と榛名は微笑ましそうに、あるいは羨ましそうに視線を向ける。

敬意を持ったこと、払ったことはある。

だが、霧島は今まで提督という存在に対して親しみを持ったことはない。

だからこうして隠すこと無く提督に対して好意を示せる事を少し羨ましく思う。

とは言え。

「ここって……一応軍、よね?」

あまりにフランク。まるで全寮制の食堂かと錯覚するような空気。それは霧島がつい先日まで身を置いていた軍という場所からはあまりに遠い。

もっと規律正しく、凜とした空気の下戦に備えるべきだ。霧島はかつてより今まででもそう思っている。

なのにも関わらず、食堂を包む柔らかい雰囲気嫌いになれず再び首をかしげる霧島だった。

——この鎮守府は不思議。

それがここ数日墓場鎮守府で時を過ごした比叡の感想だった。

緩い朝食の雰囲気。

朝礼も兼ねているなんて言われた時には思わず変な声を上げてしまった比叡、朝食後にしっかりと今日の予定について提督の口から述べられほつと安堵した初めての朝食を思い出す。

驚きこそしたものの、何故か怒る気持ちにはならなかった。

もつと真面目に気合を入れてやって下さい。

そう言っても良いはずだった。にも関わらず、口からその言葉は出なかった。

「各自、必ず無事に帰ってくるように」

「了解っ！」

防衛線構築のために出撃。後ろにあの鎮守府はまだ見えるだろうか。

ちらりと後ろを振り返ってみればそこにはもう豆粒のように小さくなってしまった鎮守府。

だけど何故かまだ見送ってくれた司令は敬礼を自分達に向けている気がする。

そう思った。そうしてそう思った心地よさだけを感じてしまった。

それが理解できず、不思議と感じている。

「どうされましたか？」

「あ、いえ大丈夫です！ 比叡、気合！ 入ってますっ！」

首を傾げていた比叡を気遣ったのは鳳翔。心配気な視線を送っている。

心配かけてすいませんと言うように両手に握りこぶしを作り鳳翔へと見せつける比叡だが。

「ふふっ」

「ええ!? な、何か可笑しかったですか?! 私、頑張りますよっ!」

頑張るからあ！ そんな微笑ましいものを見るような顔やめてえー！

何かを察したような鳳翔は頬に手を当てて微笑んだ。

バカにされている……というよりは何処か背伸びしている子供へと向けるような視線を受けた比叡は慌てて声を上げる、だがその行為がより鳳翔の笑みを深める事に理解は及ばない。

「不思議、ですよね？」

「ひえっ!? な、何がですか？」

「この鎮守府が、ですよ」

その言葉に慌てていた心がぴたりと静まった。

「その気持ちはよく分かります。私も、最初はそうでしたから」

「……鳳翔さんも、ですか？」

懐かしむ程に時は経っていない。だがそれでも鳳翔は懐かしむような表情を浮かべながらかつてを思い出す。

「これでも私はまだ、あの鎮守府に居た時間のほうが長いですから。今、比叡さんが感じている戸惑いは何となくですが察することができません。きつとかつて私が感じたものと似ているのでしょうか」

「似ている、ですか」

「はい。まったく同じでは無いでしょう。同じなのは恐らく理由のつけられない心地よさだと思います」

意図せず目を丸くするのは比叡。

自分と似ていると言われたことはそうだろう、墓場鎮守府が建築されるまで最前線と呼ばれていた鎮守府に鳳翔が所属していた事は知っている。

それどころか、その鎮守府で上手くやっていたことさえも。

「私はすでにその理由を知っています。その心地よさに名前だってあります」

「そ、それは一体何なのでしょう!? 教えて下さいっ!」
心地よい。

だがそれ以上に気味が悪いと比叡は感じている。

それもそうなのだ、僅か数日。

この鎮守府に来てからあまりにも少ない時間。

だと言うのにどうして。

「私は、何故こんなにも……っ!」

「帰りたいと思ってるのか、でしょうか」

ドクンと大きく比叡の心臓が跳ねた。それを自覚した。

そう、たった今出撃したばかりだと言うのにもうあの司令が待つ鎮守府に帰りたいと思っている。

跳ねた心臓の衝撃で口から言葉が出ない比叡に鳳翔は言葉を続けた。

「その理由は様々です。一概にこれだとは言えません、ですが」「です、が？」

そこで鳳翔は笑みの種類を変えた。

何から何へと変化したのか、比叡にはわからない。

ただ、鳳翔は少し顔を赤らめて。微かな熱に浮かされるように言ったのだ。

「兵器でも、艦娘でもなく……私の無事を祈って、待っていてくださる方がいる。私は、それが酷く心地よいのです」

「……兵器でも、艦娘でも……ない」

鳳翔は答えを述べた。

それでも比叡は理解できなかった。ただ胸にストンとその言葉は入り込んだ、主張するわけでもなくただあまりに自然に心へと座り込んだ。

鳳翔が言うように理由はきつと様々で。

その様々をきつとこの鎮守府の艦娘はそれぞれ胸に宿していて。

——この鎮守府は不思議。

感じていた気味の悪さだけが取り除かれた心地よさと海風を感じながら、前を走る金剛の下へと急いだ。

——この鎮守府は楽しい。

それがここ数日墓場鎮守府で時を過ごした榛名の感想だった。

横須賀鎮守府に居た頃の日々を榛名は充実していたと思っている。

先に建造された同型戦艦。姉と言つていい存在の金剛と比叡、その二隻から大きく間が空いて建造された榛名と霧島は演習と近海に現れる深海棲艦の撃沈が主な任務だった。

演習を行い、少しの休憩の後出撃し深海棲艦を屠る。

そうして帰ってきてみれば部屋でこっそり行われるティーパーティー。

そんな毎日に不満を覚える事なんて無かったし、それでいいと思つていた。

自分は兵器であり、この国を人を海を守る存在だと納得できる毎日

であることに喜びすら感じていた。

「榛名さんっ！ そんなんじゃ駄目よっ！」

「あうあう……は、榛名、虫は大丈夫じゃありません……」

「じゃあ雑草取り一緒にする？」

「あ、はいっ！ それなら榛名は大丈夫ですっ！」

「響、雑草取りも大概虫がいるわっ！」

「うう。は、榛名はどうすれば……」

「それなら私と新しい花壇へ使う土作りをするのですっ！」

「はいっ！」

タンカー護衛任務から帰投した第三艦隊と霧島。

第三艦隊に損傷は無し。榛名もそうだが、霧島も慣れない護衛任務に手を焼きながらも何とか無事。

とは言え今回霧島は損傷してしまったようで入渠ドックへ向かった。

任務が終わったばかりだと言うのに第三艦隊のメンバーは旗艦として提督へ報告しなければならぬ那珂を除いて真っ先に花壇へと向かった。

帰ってくるタイミングを見計らって花壇前で待機していた榛名。理由はもちろん花の世話をするため。

午前中に任務を終わらせた榛名に割り振られた仕事はもう一つ、護衛任務で忙しい那珂に代わり装備開発を行うこと。

了解しましたと嫌がる素振り無く明るい返事をした榛名だったが、その生来の生真面目さにより初めて行う装備開発作業は、榛名の自覚無くストレスとなってしまった。

自分の装備を点検、メンテナンスを行うのは当然だったが、その装備自体を自分が作成するなんて思ってもいなかったのだ。

初めて見る妖精を可愛いと愛でる余裕もなく、ひたすらに慣れない作業へ勤しむ。

那珂、第三艦隊がフル活動してしまい上手く回すことの出来なくなった装備開発。その穴は埋めなければならぬもので。

故に提督は榛名に装備開発の指示を出すと共に、第三艦隊へと榛名

も花壇の世話に交せてやってくれとお願いした。

初日にあれほど楽しげに水やりをしていた榛名ならばよい息抜きになるのではないか、そして今の明るい六駆ならばそんなストレスからすら榛名を守ってくれる、癒やしてくれるのではないかといった思惑から。

そしてその効果は覲面だった。

彼女を快く受け入れた六駆は、可愛らしく先輩風を吹かせながらも楽しそうに今は害虫駆除に精を出している。

アブラムシに思わず悲鳴を上げてしまった榛名を雷が叱り、さらなる虫地獄へ邪気無く誘おうとする響を暁が止め。最終的に電と共に土作りをすることに。

そう、初めてなのだ。

護衛任務を経験することも、にこやかに食事を摂る事も、戦闘や自身を高める演習以外に精を出すことも。

姉妹以外の誰かと笑いながら余暇を楽しむことも。

「えつと……この花はガーベラ、と言うのでしたか。どんなお花なのでしょうか？」

「可愛らしいお花なのですっ！ えつと……響ちゃーん？」

「うん。はい、これ」

雑草取りに勤しんでいた響は手を払い近くに置いてあった花図鑑を開き榛名へと手渡す。

「わっ、ほんとに可愛らしいお花ですね！」

「そ、そう？ 一人前のレディには少し似合わないなんて思ってたんだけど……」

「じゃあそんなレディに似合う花ってなんだい？」

「えっ!? ……バ、バラ、とかかしら？」

暁がバラと答えた瞬間雷が笑いを堪えきれず吹き出し、その雷にぶんすかする暁。

「な、なんで笑うのよっ!？」

「ご、ごめんなさいっ！ バラを口に啜えた暁を想像しちやっつて……つぶ。あは、あははははー!」

つまんでいた芋虫をお腹を抱えて笑っている雷へと投げつける。
笑いながらもごめんなさいと言う雷への怒りは収まらず、反対の手に持っていたスコップを頭上で振りながら可愛らしく雷へと暁は襲いかかる。

そんな微笑ましい光景に笑顔を深ませながら、ガーベラの特徴やお世話の仕方が書いてある項を眺める榛名。

不意に、書かれている文字の一節に目が留まる。

ガーベラの花言葉。

続きに書かれている前進、希望という文字。

その言葉、意味に榛名は一番艦、金剛へと思いを馳せる。

いつだって自分達を守り、導き前を走っている金剛。

その姿に停滞を感じたのは何時だったか。

軽く頭を振る榛名。

——何時からなんて知っています。ですけど……。

小さく呟く。

停滞を感じているとは言え最愛の姉である事に変わりはない。

そう、最愛の姉だからこそ停滞していると感じてしまう事が辛い。

——この鎮守府は楽しい。

もしも、この鎮守府に所属していたなら金剛も。

そんなありもしない、ある訳がない。訪れることのない夢を想いな

がら、泡沫の夢に身を任せる榛名だった。

——この鎮守府は強い。

それがここ数日墓場鎮守府で時を過ごした金剛の感想だった。

それは例えば防衛線構築任務中。

「金剛サン！ 頼んだっ！」

「イエース！ 撃ちますっ！ ファイヤー!!」

主砲を放つその一撃。

それは確かに敵、戦艦ル級エリートに吸い込まれた。

前線で戦う墓場鎮守府の第一艦隊、遙か後方から。

任務自体は極めて単純、戦力を集めやすい小さな無人島へと資材を

集積する。

その付近の深海棲艦を撃滅し安全を図る。

ただその二点のみ。

本来、集積作業は墓場鎮守府の艦娘が担うはずの役割で。

まさか出向してきた比叡がその作業を行い、比叡の護衛をしつつ撃滅作業を墓場鎮守府の艦娘が行うことになるとは思っていなかった金剛。

遠くから金剛に向けて親指を立てる天龍と、喜び跳ねる夕立。

時雨は金剛へとお礼を言っているかのように頭を下げていたし、龍田もまた同じく。

何処か引き攣った笑みを浮かべながら応える金剛の内心は驚きで満ちていた。

あの演習で強さは理解したと思っていたがそれはまだまだ認識が甘かった。

午前は第一艦隊、午後は第二艦隊。

防衛線構築任務はそうして振り分けられた。金剛と比叡はそのどちらにも参加している。

第二艦隊はまだいい、極めて高い練度だと感心できたし見習うべき動きだと理解もできた。

だが、第一艦隊はもはや理解しようとするら思わない。いや、理解しようとすることを許してすらもらえなかった金剛。

どうすればただの水雷戦隊、軽巡洋艦二隻と駆逐艦二隻が、戦艦、正規空母、重巡洋艦、軽巡洋艦、駆逐艦二隻からなる深海棲艦隊を撃破できるのか。

確かに最後一手足りない判断した天龍は正しく、金剛に支援砲撃を要請しその通り金剛は深海棲艦にトドメをさした。

だが、それだけだ。

敵空母の艦載機はその大半をすぐさま撃墜された。装備開発で新たに手に入れた25mm三連装機銃、それを巧みに操る天龍の手によって。

最優先で狙われた空母はすぐにただの動く的となり、それと同時に

駆逐艦二隻が時雨と夕立の手によって撃沈。

危ういと思うことすら失礼にあたると思うべきか、龍田は残る軽巡洋艦と重巡洋艦を難なく一人で相手取り、合流した時雨と夕立と共に撃沈。

その全てを視野に、感覚に収め指揮を執り、戦艦の動きを封じ続ける天龍。

——こつちがほんとのフォーメーションでシタカ。

理解できないそれをそう理解した金剛。

演習で見た力ならば。

そうあの力ならば言い訳できた。

戦艦四隻なんて構成じゃなくちゃんとした構成であったなら。

予め奇抜な艦隊行動をしてくるといふ情報があつたなら。

自分達と違う覚悟を深く胸に刻んでいると知っていたのなら。

いくらでも悔しがる事ができた。

だと言うのに。

「……ホワイトフラッグ、振らざるを得ませんネー」

「お姉さまっ？」

零れ落ちた眩きが耳に入った比叡が金剛へと近寄る。

だが、それに反応することなく金剛は第一艦隊へと目を向けたまま。

「アレだけストロング……ソウ、ストロングなら」

掴めるはずないと思っていた希望が金剛の目の前にチラつく。

あれほど一丸となって生き抜くと、提督のために勝利すると強い想いを宿した彼女たちならばと。

そんな、酷く残酷な希望が金剛の胸を苛む。

かつて金剛が心に宿した覚悟を今もなお力強く握って離さない墓場鎮守府の艦娘。

片や成すことも叶うことも無かった主力と呼ばれた艦娘。

「お姉さま……」

「比叡……」

手を握りしめ、震わせる金剛の背中に柔らかく温かい感触。

比叡は心を震わせる金剛を抱きしめた。

「私には……私達にはわかりませんし、それを決めるのは……」

「そう、デスネ」

あの時から、金剛が心を止めたのと同じように。比叡もまた金剛の、妹たちの事以外を考えなくなつた。

だから、その答えは導くことができない。

「防衛線構築も、もう終わるデシヨウ。そうすれば……」

金剛の言葉に頷く比叡。

集積地に溜め込まれた資材量、出現する深海棲艦量。

そのどれもが南一号作戦が近づいていると示していた。

——この鎮守府は強い。

されどもそれは果たしてどう通用するのか。

金剛は空を仰ぐ。

自身の曇天を嘲笑うかのような快晴を少し恨めしく思いながら。

提督が大佐と会ったようです

「がはははっ！　なんだソレは！　へっぴり腰にも程がある！」
「う、うるせえっ！」

ああ、見覚えがある光景だ。

厳しい顔を豪快に破顔してる爺さんと、敵うわけがないって分かっているのにそれを認めたくなくてムキになっているガキ。

必死な顔して竹刀を振ってみても、どれだけ精一杯虚を打とうとしてもそれを軽々と捌く爺さん。

「何だ何だ？　あの辺一番の悪ガキはこんな老いぼれに手も足も出ないのか？」

「はあ……はあ……うるさい、黙れっ！」

何度も吸った空気、嫌ってほど舐めた床。

道場の奥から半歩も動かず悠々と竹刀を構えガキをあしらう爺さん。

よく、覚えている。

何度も何度も、毎日毎日。

何のために行くかわからない学校は、爺さんが学校に行かないと勝負してくれないから。

それくらいこの爺さんを倒したいと思った。

何時も何時もガキを馬鹿にするように煽り笑う憎たらしいこの爺さんを。

それは何故だっただろうか？

「そうだ！　向かってこいっ！　そこに這いつくばってしまえば貴様は負け犬っ！　全てから捨てられた不必要なガキだ！」

「うるっ……せえええええええ!!」

……ああ、そうだ。

家族なんて信じられなくて、普通が信じられなくて。ずつとずつと自分の中にある何かを守ろうとして。

差し伸べられた手を跳ね除けようと必死だったんだ。

「——むんっ！」

「いぎつ……!?」

そんな必死も全然届かなくて。遥か高くそびえ立つ壁を掴むことすら出来なくて。

「ふむ、ここまでか」

「はあっ！ はあっ！」

もう一步も動けない、動けなかった。

どれだけがむしやらに竹刀を振ろうと掠りもしない現実。浴びせられ続ける罵声。

要らないガキ。

捨てられたガキ。

その事實は立ち向かう心をガリガリと削って行って、何時もそれで立ち上がられなくなる。

「分かっているな？ 貴様がわしから一本も取ることが出来なければ……」

そう、そうしてポロポロにした後決まって爺さんは——そこで。

目が覚めた。

「——つつあ!? ……はあ、はあ……」

な、何で……今頃……。

周りには見慣れた家具。しょうがないですねといつもニコニコ片付けてくれる大淀に悪いと思いつつも、何時も通りごちやごちやと書類が載ってるテーブルにひっちゃかめっちゃかになっている本棚。

そう、執務室隣にある俺の部屋。

「……うえ、気持ち悪っ」

背中がぐつしよりと汗を掻いていて。当然シーツもぐしよぐしよで。

「あたま、いてえ……」

懐かしい夢を見たせいか、ひどい頭痛。

要するに最悪の目覚めだった話。

「久しぶり、だったな」

同じじゃないけど似たような夢は一時毎日見ていた。

そしてまるつきり今と同じ状態で目を覚ます。

慣れたもんだ。

だからこの酷すぎる気分の鎮め方だって分かってる。

「……そうだ、食堂に行けば」

時刻は何時も通り。普通に準備をして行けば何時も通り。

早く行こう、早く会いたい。

皆に、艦娘に。

「おはよう」

そう挨拶をしてみれば、食堂に居た皆が一斉にこっちを向いた。

「おはようございますっ！」

ああ、うん。これだよこれ。

皆笑顔で、今日という日が良いものであると確信できるような。

何故か緊張していた心が解けるのを感じる。

そうだな、やっぱり艦娘は俺のオアシス。はっきりわかんかね。

「提督さーん!!」

おっ！ 夕立か！ よっしや今日は何時もより多めに……っであれ？

「……提督さん？」

「え、あ、おう。提督さんだぞ？」

ダイブしてくるはずの夕立は目の前で急に止まり、まじまじと顔を覗き込んできて。

「大丈夫？」

「……え」

受け止める体勢を取ったままの不格好な俺にダイブは来なくて、訝しげな表情を向けて来た。

「熱は……うん、大丈夫そうだね」

「あ、あれ？ 時雨さん？」

いつの間にやら背後に回り込んでいた時雨は、なんちゃってあすなる抱き状態で額に手を当ててきて。

「あ、じゃあ薬箱はいらないねー」

「いやまて龍田。腹痛かもしんねえ」

夕立の後ろで薬箱を抱えていた龍田と、難しそうな顔をしてる天龍。

あれ？ あれあれ？

「いや、あの……俺は大丈夫だぞ？」

「嘘っぽい！」

大丈夫だと力こぶを作ってみるが、直ぐ様夕立が少し目を吊り上げて断言してきたっぽい。

んん？

「提督ー？ はいっ！ スマイル！」

「お、おう。すまーいる？」

那珂ちゃんに促されてにつこり。

「電ちゃん、判定をどうぞっ！」

「回れ右してお部屋に戻れば良いのですっ」

「出番よ雷！」

「任せてっ！ そうね……そんな無理して笑うくらいならもう少し休んだほうが良いのですっ！ かしらっ」

「ハラショーな翻訳だね……その通り」

してみれば、第三艦隊全員で休みなさいと申し付けられた。何故にホワイ。

「提督？ ……ほんとに大丈夫ですか？ 寝苦しかったです？」

「眠りがいまいちだったならあたしにおまかせっ！ さあ、最高の寝心地を添い寝付きで提供しちゃうよっ！」

「提督？ ……すぐにお粥を作りますから……少しだけお部屋でお待ち下さい？」

「ご心配なく、今日の予定はこの大淀の頭にしっかり入ってますからっ！」

第二艦隊の皆まで……。

……。

あー、いや、なんだ。

「……………っぶ！ あははははははは！」

これを笑えなくて何を笑うってんだ。

あーあーすまんすまん。急に笑いだしたらびつくりするよな？
それでも勘弁してくれな？

——嬉しい。

ここにはかつて望んだ物、全てがある。

どれだけ手を伸ばしても掴み取れなかった家族が居る。

零れ落ちたはずの親愛を向けてくれる艦娘が居る。

「て、提督さん！ 笑ってないで早く休むっぽい！」

「あー……いや。すまんすまん！」

ぶんぷんと怒ってくれる夕立の頭を撫で撫で。

相変わらず触り心地の良い髪で、すっかり心を落ち着かせてくれる。

「ちよつと夢見が悪かったんだ。それが尾を引いてたみたいでな、身体は大丈夫……いや、皆のお陰でバツチリになったよ。ありがとう」
オアシスってのは言い得て妙だったかもしんねえな。

やっぱり何処までいっても俺の渴きを満たしてくれるのは艦娘だわ。

今までも、そしてこれからも。

ああ、そうだ。

だから俺は相応しい提督になろう。

それを独占するに足る者へとなろう。

「……ん、ほんとに大丈夫みたいだね」

「うんっ！ 夕立、安心したっぽい！」

「ああ、心配かけてすまないな」

じつと見つめてきた時雨もにつこり。夕立もにつこり。

他の皆もほつと胸を撫で下ろしてくれたみたいだ。

「今日の朝食は……鳳翔か。どれ位腕があがったか、楽しみだな！」

「え、えつと……はい。お気に召して頂ければ良いのですが」

パタパタとキッチンへと向かう鳳翔。

今日のメニューは、と。里芋のそぼろあんかけに蓮根のきんぴら

……豆腐の味噌汁にご飯。

ビバっ！ これぞ日本の朝食也！

いやあ、鳳翔も腕をあげたよね。もうなんだ、匂いでわかるわ。これ絶対美味しいやつだって。

「提督〜?」

「あ、龍田。今日の晩飯、期待してるぜ?」

「あう……もう。言いたいこと言えなくなるからやめてよねー?」

フッフ、やったか?

大丈夫だって、龍田の和食も鳳翔の和食もどっちも好きだからさ。

……大丈夫だよな?

お膳をもらってテーブルへ座ると大淀が近づいてくる。

「……本当に、大丈夫ですか?」

「ああ、心配してくれてありがとう」

さつき今日の予定は全部頭に入ってるって言ってくれてたけどな。

「後で皆にも話すが、明日南一号作戦の総司令官と横須賀鎮守府の提督が来る事になった」

「っ! ……ついに、ですか」

心配気な表情を一転させて真剣な表情に。

「金剛さん達が今ここに居ないのは」

「ああ、迎えに行った。こちらへの到着時刻はヒトサンマルマルを予定している」

その表情のまま、こくりと小さく息を呑む大淀。

うん、緊張感を高めるのは良いけどちと気負い過ぎか?

「大淀」

「はっ!」

あーだめですわこれ、完全に仕事モード。

これから朝食だよ? 綺麗な敬礼しちやっつてまあ。

「てなわけで……えっと、上官? に対しての礼儀作法教えて下さいお願いしますっ!」

「はいっ! おまかせくだ……ええ?」

違う言葉を予想していたのか、勢いの良い返事は尻すぼみに。消え調子と共に可愛らしくジト目になる大淀さんはなんていうかこう、最高やな!

でもまあそれくらい今は気を抜いておこうぜ。

きつと時間になれば嫌でも緊張することになるだろうから。

ああ、でも俺も久しぶりだな。

あのおっさん
司令長官と会うのは。

「嘘……だろ？」

鎮守府入り口。

大淀と共に待っていた相手が到着した。

そしてその相手の姿を認めた時、思わずそんな言葉が口から零れ出た。

「ほう、貴様が……」

しげしげと観察してくる男。

いや、年寄りと言つてもいい風貌。そのくせに似つかない程ギラギラと熱の籠もった視線を向けてくる。

この目を知っていた。飽きるほど、嫌ってほどこの視線を受け止めたことがある。

だから。

「じい、さん？」

「っ!？」

驚きの声が隣から聞こえる。前に立ってる人が目を丸くしている。衣擦れの音が聞こえたのは少し前、それは何で聞こえたんだっけか……って。

「し、失礼しましたっ！ お疲れ様ですっ!」

慌てて敬礼をすれば聞こえてくる安堵のため息。

やっべ、やっちまった。

あんまりにも爺さんに似てたもんで、つい我を失っちゃまった。

恐る恐る目の前にいる上官を伺うと。

「つく……がはははっ！ 上官に向かって爺さんとはっ！ がはははははははっ!」

「……えー」

抱腹絶倒つてのはまさにこんな感じだろう。

いやいや、さつきまでの雰囲気何処いった？　なんだか気が抜ける。

ああ、いや、うん。

そうだな、確かに似ている……似すぎているこの人だけだ。

こんな風に笑っている姿は記憶に無いし、笑わないだろう。

あの人が俺に向けていた視線は常に嘲笑混じりのものだったから。

そんな昏い思いに浸っているうちに笑いも収まったようで。

「失礼な言動、申し訳ありません」

もう一度謝つてみるテスト。

俺の事情や思い出やら、そんなのはこの人には関係ないはずだ。だつたら謝らねえとな。

「……ふう。いや、構わない。貴様は軍属だつたな？　ならばあまり軍そのものには慣れておらんだろう。改めて、横須賀鎮守府の提督を臨時でしておる者だ。よろしく頼む」

そう言つて答礼を返してくれる。

臨時で事は今はちゃんとした提督がいねえつて事だよな？

あれ？　だつたらそこから出向してきた金剛達の提督は……。

「タイサー！　プリーズ、ウェイトフォーミー！　歩くのが早いデース！」

「おお、すまん金剛。年甲斐も無く楽しみが足に表れおつた！」

後ろから荷物を持って駆けてきた金剛へ振り向き、がはは笑いを返す……タイサー？　えつと大佐、かな？

「……大本營で姿を拝見したことがあります。あの時は確か、大将の地位に就かれていましたが……提督の最高階級は佐官、横須賀の提督をされるために一時的に大佐になったのでしょうか」

こそつと耳打ちしてくれる大淀。

大将つて……確か元帥の一個下だつたよな？　え、すんげー偉い人じゃないか。なんでそんな人が？

「どうした？　小僧」

「こ、小僧？」

オウム返し。

いや、まさかこの歳になって小僧呼ばわりされるとは思わなんだ。確かにあんたに比べたら若造も良いところだろうけどさあ……。

「エツト……タイサ？　こちらの方が――」

「自己紹介は済ませておる。……っち、長官はまだか？」

「ソーリー、タイサ。つい先程少し遅れると連絡がありまシタ、先に準備を進めて欲しいとの事デス」

苛立たしげに後ろを振り返った大佐は金剛の返事にそうかと呟き。

「ならば仕方ない。では小僧、先に鎮守府を案内してくれ」

「わかりました。……大淀」

「はい」

一歩前に進み出た大淀。

その大淀の姿に少し驚いた表情を浮かべる大佐だけど……あ、俺が案内するべきだったかな？

「私が案内するべきでしたか？」

「ふ……いや、構わんよ。そうする発想に驚いただけだ、失礼と思わなくていい。では、大淀……だったか？　案内を頼んだぞ」

「かしこまりましたっ！　ではこちらへ……」

鎮守府の中に入っていく大淀と大佐。

その姿を見送った後。

「金剛、荷物持つよ」

「オウ、ジェントルマーン。サンキューネ」

受け取ったポストンバッグは何が入っているのかずしりと重たい。

身軽になったのが嬉しいのか、金剛は軽くジャンプした後足取り軽く前を歩く。

「なあ、金剛」

「ハイ？」

背中越しに振り向いた金剛の髪が宙を舞う。

それを綺麗だと思うよりも先に、さつき聞いた臨時という言葉。その疑問を――。

「いや、何でもない。俺達も行くか」

「――」

少し驚いた顔を向けてきた。

その顔は、俺が聞きたかった疑問を何となく察したようにも見える。

金剛の隣をすり抜けて前へと進む。

もちろん前言を撤回したくないってのはあるけども……気軽に聞けることじゃないなんて思ったのは何でだろうか。

横須賀鎮守府、臨時とはいえその提督。その彼を提督と呼ばず大佐と呼んだ理由が引つかかっていたのかも知れない。

「へい、ユ一」

「ん？」

真似して背中越しに振り向けば、そこには至極真面目な顔をしている金剛。

「あの方は、タイサ。私の……私達のテイトクではありません」

「……」

「私の……私達のテイトクは……」

ぐつと下唇を噛み締める金剛の姿に、俺もまた聞く覚悟を決める必要があると感じた。

だから完全に振り返った。そうして金剛の想いを真っ直ぐに受け止めようとした。

それでも。

「……フフっ、そうですね。あなたになら話しても……話したいと思うのかもしれない。ですけど、ノットナウ。それは今ではないです」

「……なんだそりゃ」

真面目な顔を破顔させた金剛につられて苦笑い。

何とも言えない笑顔を浮かべた金剛はそのまま再度横を通り抜けていった。

「今じゃない、か」

言われたようにいつか聞きたいと思う。そのいつかを迎えたいと思う。

その為にも。

「悩んでいる暇は無い、な」

里親と瓜二つの大佐。

そんな俺の過去なんて、今はどうでも良い。

心に改め、すっかり遠くなってしまった金剛を追いかけた。

作戦内容を知ったようです

「遅れてしまって済まないね」

ホワイトボード横に立ち、手元の書類に目を落としながら言うのは長官。反対隣には腕を組みながら静かに立つ大佐。

作戦会議室にいるのは俺と天龍、鳳翔、そして大淀に金剛。

第三艦隊旗艦である那珂ちゃんも何とか出席して欲しかったんだけど、時間が遅れてしまった事でタンカー護衛任務へ間に合わなくなりそうなのでそっちを優先してもらった。

代わりと言ってはなんだけど、大淀に出席してもらってるのはそのためだ。

「まずは改めて……諸君らの奮闘、活躍に感謝する。君たちのおかげで我が国、主に横須賀方面の機能は順調に回復することが出来た。軍……いや、国民を代表して謝意を述べたい。ありがとう」

「はっー！」

笑顔を向けてくる長官に敬礼で答える。
「だけどやっぱりと言うべきか。今までの事を考えるとどうにも素直に受け取ることが出来ない。」

横目で大淀の様子を伺ってみればなんでも無いような顔をしながらも、拳を強く握りしめているのがわかる。

鳳翔は自然な様子だけど、天龍もまた何とも言えない顔をしていて。

多分、俺自身も天龍と同じ顔をしているんだろうなと思う。

「はは……参ったね。いや、うん。そういう顔をされるとは覚悟していたけど……大佐?」

「好きにせい」

助けを求めるように長官は大佐の方へ視線を投げて……ん? 大佐と長官ってどっちが偉いんだっけ?

まあ、あの態度を見ると大佐のほうが偉いんだろうか。

ともあれ覚悟していたならどうだというのか。

正直、俺自身の考えは決めかねている部分が多い。

六駆を盾として使用しろという電文発信はこの人だし、大淀を側近扱いしていたのもこの人だ。

つまり、艦娘をそういう扱いする物として考えているという事なんだろう。

それだけを見ればはつきり言つて業腹もいい所。完全にわかり合えないといい切つてもいい。

だが、それをそうさせない理由。不自然さみたいな物も感じている。

だから態度を決められない。

もちろん、上司と言うかお偉い様相手だつてのは重々承知しているから表に出すつもりはないけど……出してないよね？

「すまなかつた」

「は……え？」

そんな事を考えていれば、長官はおもむろに頭を下げてきて。

思わず驚いてしまうぞまじで。

「はつきり言つてしまおう。僕は……いや、僕たちはこの鎮守府を人柱に使うつもりだった」

「人柱……」

頭を下げた姿に驚きはしても、嘘だろう？　なんて驚きは無かつた。

使えない艦娘を処理なんてお題目があつたくらいだ、俺にとつちやそれ以上の驚きなんて無いわけで。

「うん。君が提督としてここに着任する前に行われた作戦……そこで手酷い損害を受けた軍機能を回復させるための時間稼ぎ、その人柱にと考えていたんだよ」

なるほどね？

いや、納得できるわけ無いけどな。二重の意味で。

流星にまだまだまだへっぽこ提督な俺でもわかるさ、時間稼ぎの難しさつてやつを。

機能回復するための時間。それがどれ位必要なかはわからない、だけどそれ自体は絶対に必要で大事な時間だ。

その時間を新任である俺が稼げると見込むなんてありえない。し

かもその俺につけたのは時雨と夕立という駆逐艦二隻、明らかに戦力が足りない、少なすぎる。

言われた提督適性値とやらがどれだけ信じられる物なんかはわからねえけど、それでも明らかにおかしい。

加えて、だ。この際俺のことは良いとしても、納得できねえのは艦娘を沈める事前提、人柱について考え方が。

「……わかりました、大丈夫ですよ長官。意図はどうあれ私達は今こうして生きていて、作戦に向かうことが出来る。それで十分ですから」

「……階級、立場を気にしているのなら気にしなくていいんだよ？」

キミには僕をなじるでもなんでもしてくれていい、それくらいの権利はあつてもいいはずだ」

いやいや、そんな事しねえよ。してなんになるのさ。

あ、鳳翔もそう思う？ うんうん、そうだよな。

というか、だ。

「先ほど謝罪の言葉を頂きました、それでも過分というものです。それに私達がここに集まった理由はその話をするためじゃ無いでしょう？」

「……そうだね、キミの言う通りだ」

自省するようにそう言う長官。だけど、何処かその姿に悔しそう？

苦虫を噛み潰したような……そんな気持ちが見える。

多分、あの謝罪の言葉は謝罪じゃない。

これで水に流せ……いや、そういう事にしてくれ。と言った意味なんだろう。

納得はしていないが、理解を示した。

長官にしてみればそれでは足りないのかも知れない。

裏がある。

それはわかる、けどその裏が何で、何のためにあるのかはわからない。

……はあ。

思わず内心でため息が出る。

つまりあれだ。俺はどうやら当面の間この人への気持ちは決められないまま過ぎさなきやいけないみたいだ。

いや、そのまま過ぎしていいんだと少し安堵する気持ちがある。

だつてそうだろう？

まだ俺は艦娘を道具、消耗品扱いするのが常識なんかじゃあ無いと希望を持つことが出来るんだから。

申し訳なかったねと着席を促されたので座る。

そう、そんな話は確かにしたいけど。ものすごくしたいけど。

もつともつと言えば。

「……長官」

小さく呟く大淀。

大淀の姿を自分の視界に入れられないように話そうとする長官。自然な立ち振舞で誤魔化そうとしているけど、わかる。

エゴだとわかってるけど、この二人には少し話をして欲しいと思う。

あの時解決できなかった大淀の問題、それを解決できるのはきつと長官しかいない。

傷をつけた人にしかその傷は癒せない。

確かに俺は大淀と上手くやってる……いや信頼関係を築けたしその傷にかさぶたを作ることは出来ただろうけど、癒やすことは出来ないと思う。

言ってしまうえば新しく関係を築けただけで、修復は出来ていない。

それを解決して欲しいとも強く思う。

だけど。

それも……今じゃないんだろう。

「提督、どう思う？」

作戦概要の詳細を聞いてから。

長官と大佐は金剛達と改めて情報交換を行うようであるまま会議室に、俺達は執務室へと戻った。

一息入れた後大佐から改めて戦力の確認をしたいと話があって、明日作戦を鑑みながらの最終演習を行う事になってる。

そうして執務室へ戻ってきて開口一番天龍はそんな事を聞いてきた。

「まるっとそのまま受け取れば、うちの戦力をあてにしている……いや、頼りにしてると言うか依存してる作戦だな」

伝えられた作戦。

割り振られた役割は海域への一番槍。要するに先陣を切る事だった。

うちの鎮守府、いや、作った防衛線から直接出撃するのはうちと横須賀鎮守府の艦娘。

横須賀からは今いる金剛達と後から長門、陸奥といった戦艦に加えて何隻か来るみたいで。明日の最終演習相手は言ってしまうえば横須賀鎮守府の最高戦力とのものになる。

第一艦隊と第二艦隊で作戦海域に突入、可能な限り相手を撃破し海域を管理している相手深海棲艦親玉の場所を目指す。限界ギリギリまで進んだ所で、横須賀鎮守府の艦隊が後を引き継ぎボスを撃破する。

要するにうちがどれ位進軍出来るかが作戦成功の是非に大きく関与しているわけだ。

他の戦力は各鎮守府から直接出撃するらしく、先陣を切った俺達が困り込まれないように戦況を整えてくれるって話。

「はい……ですが、妥当かも知れません」

「ですね、我が鎮守府の戦力は今や横須賀方面にある鎮守府一と言っても過言ではありませんから……」

鳳翔、大淀が難しい顔をしながらも頷いてる。

ていうか横須賀方面一番って……。

「提督は実感が無いかも知れませんが、艦種を考えなければまず間違いないと思います。それは先の金剛さん達との演習でもご覧になりました通り」

「ああ……確かに強くなったとは思ってたよ、改めてありがとうな」

「い、いえっ！ 褒めて頂けるのは嬉しいのですが！ そ、そういう事ではなくて……！」

鳳翔さんの貴重な赤面シーンがこちらです。

……げふん。

まあそれはさておき。

「いや、あれは参考にならないんじゃないか？ 強くなったとは思いますが、ただ作戦が奇抜というか見慣れないもので相手に対応できないまま負けたと言うか……。それに、うちよりずっと前から海に挑み続けている鎮守府だってあるだろう？」

うちははつきり言っただけと出もい所だ。

他に実績を積んだ鎮守府なんし艦娘が居てもいいし、年月というか積み重ねた時間に勝る力は無いと思うぞ。

「……提督はご存知ですか？ この南一号作戦が二度目であるということ。」

「二度目……？」

一度こうして南一号作戦に挑んだ事がある？

でも、海域は攻略出来ていないわけで……ああ、つまり。

「……そうか、その時」

「はい……結果は痛み分けでしたが、多くの実力ある艦娘が沈みました。あの時生き残った艦娘は極めて少数だったと聞いています」

「……よく、ご存知ですね？」

「あの鎮守府にいた頃、先任の方に教えて頂きました」

なるほど、な。

その作戦で失った戦力を回復させるための時間稼ぎが……俺達に望まれていたことだったわけ、か？

いや、それなら尚更その残った実力ある艦娘をここへ一時的にでも着任させたほうがいいんじゃない？

「そして残った艦娘も……」

「鳳翔さん！」

「あっ！」

ん？ 何だ何だ？ 大淀さんや、何を急に声をあげたんだい？

残った艦娘がどうなったって？

「……聞かせてくれ」

「っ……」

「……それは」

言い辛そうに顔を伏せてしまう二人。

そんな二人とは対照的に、天龍が素面で。

「戦力を回復させる為の時間稼ぎ。それをするためのここを建造する作戦が執り行われたんだよ……そうしてその作戦でより多くの艦娘が沈んだのさ」

「なっ!？」

意味わかんねえ!? 回復させる戦力は艦娘だろ!? なんでその艦娘沈めてんだよ!？」

「あん時、痛手を負った艦娘達が回復するよりも早く深海棲艦は攻めてきた。残った強い艦娘がそれに対抗し、出撃したけどよ……トントン拍子にここまでの海域を奪われて。ついには横須賀の眼の前まで迫ってきてたんだ。火急を要した、実際に陸へ砲撃が飛んできた。……幸い民間人に被害は及ばなかったが、多くの軍人も死んだ。だから、仕方ねえんだ」

「……先任の艦娘も、そう言いながら笑って出撃しました。しやあないんや、うちらが、人が生きるためにはこれしかないんや。……そう言って笑って沈んでいきました」

「そうやって多くの力ある艦娘も……まだ力をつけることすら出来なかった艦娘をも犠牲にして、この鎮守府は建てられたんです。この鎮守府さえ建てる事ができればと一縷の望みを託して」

わ、わけがわからねえ……。

そうやって犠牲を多くかけてまで建てたつのに……何で人柱なんだ？ 何で、俺なんだ？

頭が上手く回らない。

だけど何か言わなくちゃ……違う、否定しなくちゃ。

「そ、それでもっ——!!」

「提督っ!!」

「っ!？」

自分でもよくわからない衝動で我を乱しそうになった俺を止めたのは天龍。

真剣な表情で、いつもと変わらない信頼とその目に宿して。

「仕方ねえんだ、あん時は提督がいなかったから。だけど……だけどよっ!」

「……今は、貴方が居ます。だからもう、あんな事にはならない。そう私達は信じています」

「……はい。今は提督の下にいます。あの時何も出来なかった私じゃない、貴方が信じている私がいいます。そして私が信じている提督が……います」

……。

落ち着け。

そうだ、忘れたのか？

狼狽えるな。

焦るな。

このくらい何でも無いんだって虚勢を精一杯張れ。

「……天龍」

「おう」

「鳳翔」

「お側に」

「大淀」

「はっ!」

この鎮守府は、艦娘の命の上に建っていた。

想像出来ないほど多くの犠牲だろう、俺に伏せたかった位に多くの。

なるほど墓場鎮守府……確かに墓場鎮守府だ。

受け入れよう。受け入れてやるよ。

俺達ヒトのために戦った艦娘がいる。

ならば俺は艦娘のために戦おう。

「……は、眠るにはちと煩すぎるよなっ。」

この海の下に眠る艦娘。

今、そいつらは安心してゆつくり休めているのだろうか。

「俺達は、強い」

「おう、そうだけ提督。オレ達はアンタのためなら何処までも強く
なってるよ」

自信満々にニカリと笑いながら言うのは天龍。

「俺達は、負けない」

「はい、提督に捧げるのは勝利の二文字。それ以外にありません」

握り拳を胸の前に静かな覚悟を示してくれる鳳翔。

「俺達は、勝つ」

「はい。暁の水平線に勝利を刻むのは私達です」

穏やかに笑顔を零してくれるのは大淀。

「……やるぞ」

「了解っ!!」

やってやるさ、どんな戦いであろうと、誰がどんな意図を持ってい
ようとも。

俺は、艦娘を沈めない。

誰も、俺の目の前では絶対に沈めない。

それがたとえ、深海棲艦、鬼級が確認されている作戦であろうとも。

作戦決行前日のようです ①

作戦決行を翌日に控えた鎮守府。

「翔鶴姉え！ 私、やるよっ！」

「あはは……瑞鶴、もう何回も聞いたわよっ。」

道場に併設されている弓道場。

そこで横須賀鎮守府よりやってきた正規空母二隻。五航戦、翔鶴型航空母艦姉妹が弓を引いている。

瑞鶴は感じている緊張感を誤魔化すように落ち着き無く一番艦の翔鶴に何度も同じ言葉を繰り返し、翔鶴もまた、緊張で黙りがちになってしまいが、そんな瑞鶴の様子に助けられる。

二人が放つ矢は未だ的中せず。されども二人共それすらを気にする余裕はない。

何故、自分たちが代表で選ばれて来たのかなんて分かりきっていること。

それは単純に一番実戦を経験している正規空母だから。

だが、明日行われる南一号作戦のような大規模な作戦は初めて。

実戦経験があると言っても、それは鎮守府近海に現れたはぐれ深海棲艦を撃沈した程度。

自分たちが建造されたときには既に墓場鎮守府が目覚ましい活躍、戦果を挙げており、自分たちに回ってくる任務と言えば墓場鎮守府が掃討作戦で討ち漏らした深海棲艦を叩く程度の物だった。

それでも、一番実戦経験が豊富なのだ。

「……あたらないね」

「そうね、瑞鶴」

ようやく二人の意識は当たらない矢へと向けられた。

的に掠めすらしらないその矢はまるで自分たちに向かつて力不足と告げているようで、二人はその宣告に身を震わせる。

「こんなので……私、私達……」

「瑞鶴……」

俯き、身を震わせる瑞鶴。

この震えが明日への緊張、自分の未熟さを悔しがるものならまだ良かった。

「大丈夫、大丈夫だから……」

説得力のない慰めだと翔鶴は理解していながらもそうとしか声をかけられない。

——怖い。

大丈夫だと声をかけながら瑞鶴の背を撫でる翔鶴もまた震えていた。

二人が震える理由。

それは恐怖だった。

明らかに力不足、練度不足だと理解できる。

実戦経験は少なく頼りない。先に行われた演習でも振るわなかった二人。むしろ、相手にした鳳翔に見惚れてすらいた。

鳳翔は確かに墓場鎮守府建造作戦の生き残り、そこからずっと戦ってきたのだろう。

自分たちと違って、堂に入り自信に満ちた戦い振りだと二人は思った。

それに比べて自分たちはと、落ち込み続ける。

そんな時。

「これだからごこうせんは」

「なっ!? な、な、何をー!?!」

馬鹿にされたと勢い良く顔をあげる瑞鶴の目の前。

そこには鳳翔の艦載機に搭乗している一匹の妖精がいた。

「あつ! こら! 急に飛んでいったと思つたら……! 申し訳ありません、鍛錬の邪魔をしてしまいました……!」

「ほ、鳳翔さん?! い、いえ、問題ありませんっ!」

すぐ後から申し訳無さそうな表情を浮かべながら現れた鳳翔へと向けられる二つの敬礼。

その敬礼にふんわり柔らかな笑顔と答礼で応えた鳳翔は、未だ瑞鶴の目の前で仁王立ち……いや、仁王飛びしている妖精をつまみあげる。

「駄目でしよう？ 訓練の邪魔をしたら」

「いつてやりました」

つまみ上げられてなお、やってやったという姿勢を崩さない妖精に鳳翔はため息を一つついた後、未だ敬礼したままの二人に向けて苦笑いと共に視線を向けた。

「楽にして下さい……朝から精が出ますね。お疲れ様です」

「い、いえっ！」

「わ、私達はこれくらいしなればなりませんのでっ！」

カチンコチンと音が出るくらいに固まりながら答える二人に鳳翔の苦笑いが深まる。

もう作戦決行は明日だということにも関わらず、この二人はここへと来た時からずっとこう。

最初こそ本当に緊張からだったのだろうそれは演習後よりますます酷くなった。

「……少し、訓練を見せていただいてもよろしいですか？ もちろんお邪魔でなければ、ですが」

「邪魔だなんてそんなっ！」

「ぜ、是非お願いしますっ！」

慌てて矢を番える二人、その姿は相変わらず固いまま。

そんなぎこちない動きのまま同時に放たれた矢は……道場の壁を越えて消えていった。

「……」

「……はっ!？」

矢の行方に何か思いを馳せてしまったのか翔鶴と瑞鶴は放心する中、一足先に我に返ったのは瑞鶴。

違うんですと顔を真赤にしながら何かを鳳翔へと弁明しようとするが。

「……続けて下さい」

「……え？」

「聞こえませんでしたか？ 続けて下さい」

「は、はいっ！」

笑いも怒りも、呆れることすらなく鳳翔は二人へと次を要求した。
真剣。

それは鳳翔の肩へと腰を降ろした妖精、もう片方の肩にいつの間にか座って笑顔を浮かべていた妖精も。

二人の拙い射出技術を真剣に観察していた。

その視線を受け、二人は気を引き締め直した。

放たれる矢はまだ的中しない。

それでも一つ、また一つと矢を射る度にのめり込んでいく。

鳳翔が放つ実戦さながらの雰囲気は飲まれていく。

ただただ矢を射るという行動だけに意識が集中されていく。

どれ程の矢を射っただろうか。

不意に鳳翔が口を開いた。

「そのまま聞いて下さい……的に矢を当てる。その事自体に意味は全くありません」

「……っ！」

「集中」

その言葉に僅か動揺した二人。だが、すぐに鳳翔の集中しろという声に集中力を戻し高める。

「仮にあの的へ百発百中出来たととしても、海では何の役にも立たない。それはもちろん、私達は航空母艦。直接矢を当てて深海棲艦を倒すわけではありませんから」

ならばなぜ？

そんな疑問は浮かばなかった。ただ、自分たちが弓を持ってここに弓道場があるからやっていただけではあるが。

二人は疑問を覚える余地がない程に集中していた。

「では何故やるのか。それはただ矢を射るその事に意味があるからです」

矢が空気を裂いて飛んでいく。

いつの間にか的を掠めている事にすら気が付かない二人。

「これで仕留める。これで仲間を守る。その想いを矢に込めて放つのです。……そう、その想いを高め、確認するためにこの訓練は行われ

る」

そうして。

「!!」

「……あたっ、た?」

「お見事」

二人が同時に射った矢が的へ吸い込まれた。

「見ていて下さいね」

呆然と的に刺さった矢を眺める二人を余所に、鳳翔は自分の弓矢を手に取る。

その瞬間。

「……っ!」

「は……う」

空気が変わった。その変わった空気に二人は息を呑んだ。

ここに来た時浮かべていた笑顔でもなく、自分たちの射る姿を見ていた時の真剣な表情でもなく。

「……しっ!」

ただ、戦いに臨む覚悟を決めた一人の艦娘がいた。

放たれた矢はまるで決まっているかのように的の真ん中に突き刺さっている。

そしてその矢が告げていた。

負けないと。

必ず守ると。

「……あなた達に足りないものは技術でも実戦経験でもなんでもありません。ただ、勝利する、生きて帰ってくる。その意思です」

「勝利する……」

「生きて、帰ってくる……」

鳳翔が言った言葉を反芻。

翔鶴も、瑞鶴も。

どちらもそんな事を考えられなかった。

実戦経験がないから、未熟だから。

作戦の先にあるものについて何も考えられなかった。

だがそれがどうしたと鳳翔は言う。

そんなモノが無くたつて勝利する意思は持てるだろう、生きると願うことは出来るだろうと。

そう言われた、告げられたと二人は胸に手を当てて感じ入る。

「私、やる」

「ええ瑞鶴。……私だつて」

二人の覚悟はまだまだ弱いものかも知れない、今この時鳳翔の熱に浮かされただけなのかも知れない。

「はい、共に戦い……そして生きて帰りましょう」

「はいっ！」

それでも戦いへの意思だけは、はつきり手にすることが出来た。

「あ、あのっ！」

「んあ？」

気の抜けた返事をしながら振り向いた天龍と龍田の視線上にいたのは遠慮がちな雰囲気を出している神通と。

「ちよつと、いいかな？」

「うん。構わないよ？」

何処と無く真剣な表情を浮かべた川内。

川内型軽巡洋艦の一番艦と二番艦だった。

「あの、さ。那珂について聞きたいんだけど……」

「ああ、那珂がどうかしたか？」

川内の口から出たのは那珂についてのこと。

「横須賀に那珂はもう……いないからさ、聞きたいんだけど……その」
言いづらそうに、あるいは言葉を探るように頭を掻きながら話そうとする川内。

その姿を見て天龍も龍田もやつぱり同型艦のことは気になるものだよなと何となく顔を合わせてしまう。

「あいつなら——」

「那珂は……役に立ってるかな？」

もういない。

その言葉から横須賀にいた那珂は沈んでしまったと予想した天龍と龍田。

なるほど、妹思いなんだなと。

元気にやっているか、辛い思いをしていないか。

そんな言葉が続くと予想して、その答えを笑顔で返そうとした天龍の声を遮ったのはそんな台詞。

「……ああ、もちろんだぜ？ あいつ無くしてオレ達はねえってほどに。なあ龍田？」

「そうだねー。いっぱい助けてもらってるよー」

役に立ってないと答えるつもりはサラサラない天龍と龍田。

だが、もしもここで役に立っていないと言えば川内と神通はどういった反応をするのかを気にしてしまい、笑顔をぎこちないものへと変えて答えてしまう。

「それは、戦力として……でしょうか？」

神通が重ねて問う。

その意図は何なのか。

最初に聞いた川内の質問も含めて、どうやら心温まるものではないらしいと少し緊張感を高める天龍。

「……那珂は第三艦隊旗艦でよくやってくれてる。任務は主に輸送作戦や護衛作戦だが、いずれオレ達と一緒に肩を並べる日もそう遠くねえよ」

「そう、ですか……」

答えを聞き、川内と神通。二人してその場で押し黙ってしまう。

何かを思案するように沈黙する二人の姿。

何を考えているのか、それを天龍が聞くために口を開こうとした時。

「あのさ、お願いだからさ……那珂を弾除けになんて使わないでね？」

「……もし、それが必要なものでしたら……私達に申し付け下さい」

「なっ——!？」

「……」

川内達の言葉を聞き絶句する天龍と龍田。

川内達の言葉は紛れもなく那珂をもう沈めたくないといった思いからだろう。

そのためにならいくらでも沈んでやる、何十何百でも弾を浴びてやるという悲壮な覚悟を宿している。

その姿は何処か、過去の自分たちに重ね合わせてしまえそうなほどで。

「バカヤロウツ！」

「っ!？」

思わず誰に対してでもない罵声の言葉を上げてしまう。

「弾除けだ!? 代わりに沈むだ!? そんな事するわけ……言うわけねえだろうがっ!!」

「何甘いこと言ってるのさっ! そんな覚悟で勝てるわけないじゃん! 死力を尽くすって言葉の意味分かってる!？」

川内は、知っている。

そうやって今まで海域を守って来た艦娘の姿を。

そう言って一番の見せ場だと笑顔で戦いに臨んだ艦娘を。

「……そうでもしなくては、先に沈んだ艦娘に合わせる顔がありません」

神通は、知っている。

その時何も出来なかつた自分の姿を。

もう二度と残されるだけの自分でいたくないと強く決心している自分の心を。

「つたりまえだ! 死力を尽くすってのはなっ! 死んでも死なねえって事だっ!!」

「い、意味分かんないよ!」

「わかれっ! 沈んだヤツがためえの死を望んでたまるかっ! 生きてるヤツが最初っから沈むことに向かつてたまるかっ! オレの知らねえ那珂であつても! お前らが沈んで欲しいなんて望んじやいねえことくらいわかるっ!」

天龍の言葉に、身体が固まる。

口から出た言葉に、心が何か反応している。

「……わりい、大声出しちまった。ちつと頭冷やしてくる」
「あつ……」

悔しげな、悲しそうな顔を隠すように天龍は一人足早に立ち去る。思わず伸ばされた川内と神通の腕は、何を掴もうとしていたのか。

「……天龍ちゃんが、ごめんね〜?」

その腕の先を包み込んだのは龍田の手。

急に感じた温かさに我に返される。

「い、いや……こつちこそ——」

「私は、止めないよ?」

口から零れそうになった何に対してかわからないままの謝罪、その言葉を遮ったのも龍田。

「弾除けに、犠牲になろうとすることを、私は止めないよ? だけどね」

「——私達の提督がいる場所では、絶対に沈めない、沈めさせないから。」

「——」

続いた龍田の言葉、雰囲気にも全身の肌へと走るものがあつた。

龍田は言っている。

沈めるものなら、弾除けになれるものなら……犠牲になれるものならなってみると。

「……ねえ、二人共?」

「え、あ……うん、何?」

「……はい」

ニコリと笑って場を切り替えた龍田は二人の後ろを指差す。

「あなた達の知っている那珂ちゃんじゃないかも知れないけど、望んだ答えが生まれるか分からないけど……本人に、聞いてみたらどうかなー?」

その指先にいたのは那珂。

かつて、自分たちの先を往った妹の姿。

「あつ! ようやく会えたよー! 川内ちゃん! 神通ちゃん! 神通ちゃん!」

「那珂……」

「那珂ちゃん……」

笑って手を振っている那珂。

その姿に何故か涙が浮かぶ二人。

「そしてね、いっぱい怒られたらいいよー？ ……さ、いってらっしゃいね」

二人は走ってくる那珂へと向かう。

知っている那珂じゃないけれど、かつてあったかも知れない光景かもしれないけれど。

それは決して、失われた未来ではないのだから。

作戦決行前日のようです ②

自室にてすっきり板についた昼寝。

それは作戦前日であつても変わらない加古。

気持ちよさそうにベッドの上で睡眠に浸る横で、作戦概要が纏められた書類を確認しているのは古鷹。

確認していると言つても既に諳んじる位に読み込まれたそれ。

加古の休息に付き合っている間、手持ち無沙汰だから読んでいるといった程度でしかない。

二人を知らない者から見れば、たるんでいると一言叱咤されてもおかしくない。

それでもそんな声を上げるものは誰もおらず、その事を理解している二人に余計な緊張感は一切なかった。

戦い前日にして、極めて自然体。

古鷹は可愛らしく欠伸を漏らし、加古が不意に目を開けた時。

「あふう……うん？ はい、開いてますよ」

部屋にノツクの音が響いた。

古鷹の返事と共に開かれるドアの先にいたのは横須賀からやってきた重巡洋艦二隻。

「お邪魔しま……つて悪い、休憩時間だったな。出直すよ」

「い、いえー。大丈夫ですよ？ どうしました？」

緊張を顔に描いていた摩耶は失敗したと表情を切り替えて部屋を後にしようとするが、慌ててそれを古鷹が止めた。

「で、ですが……その、申し訳ありません」

「ふああ……んっ、と。はいはい！ 大丈夫だから入っておいでよ。

丁度暇してたんだ」

ベッドから身体を起こし大きな欠伸を一つ。

そうしてしっかりと覚醒した加古は申し訳なさそうに摩耶と共に部屋を後にしようとしている鳥海へと声をかけた。

急に整ったいらっしやいませの態勢に複雑な気分を抱えながらも、言葉に甘え、お邪魔しますと入室した二人。

丸テーブルに座布団を敷き、着座を促す古鷹とお茶の準備をする加古。

摩耶と鳥海は二人の姿に改めて首を傾げる。

「な、なあ？　なんでそんなに落ち着いてるんだ？」

疑問を堪えきれず聞いてしまう摩耶の顔には未だに緊張の色が残っている。

それは鳥海も同じ様子で、どうしてこうも恐らく普段どおりに過ごしていられるのかが不思議で仕方なかった。

有り体に言ってしまうえば摩耶も鳥海も作戦に対して恐怖心を抱いていた、本来の気質を見失ってしまうほどに。

翔鶴型空母と共に出撃していた故に実戦経験自体はある。

その出撃を威勢よく抜錨だと勇み臨んだことだつてある。

それでもやはり実戦経験不足だと南一号作戦を前にして実感した。

「落ち着いてるって……慌てふためいてた方が良い？」

「そ、そういう訳ではありませんが……でも、その方がらしいと思いません」

二人の前にお茶の入った湯呑を置いた加古が言う。

立ち上る湯気と同じようにゆらゆらと鳥海の視線が彷徨い、急に湧き上がった羞恥の心へ沈む。

恥ずかしいと思った。

この人達はこれほど落ち着いていると言うのに、未だ慌ただしく落ち着かない自分の心を。

「……やっぱあれか？　そんだけ強いから、なのか？」

摩耶は思う。

演習で見せつけられた練度の差。

一瞬に満たない程の隙を貫いて来る加古。その穴を修復不可能な位に直ぐ様広げてくる古鷹。

あの時に見せられた鋭い目付き、威圧感。

それを感じない今でさえも感じる器の違い。

自分も二人のような域に達することができれば、また違うのではないかと。

「……どうしよう古鷹」

「え？ どうしたの加古」

気付けば身体をぶるぶると震わせている加古。

何かまずいことを言っただろうかなんて慌てそうになる摩耶と鳥海を余所に。

「褒められたっ!! こりやあ一杯やらないとっ!」

「……あ、あはは。そうね、そうだね嬉しいね?」

ガバッと立ち上がり、喜びよ天まで届けとガッツポーズを決める加古。

そんな加古に摩耶はテーブルへ強かに額を打ち、鳥海の眼鏡がずれた。

「ふ、ふざけてんのかっ!?!」

「お、怒られた……」

「そうだね加古、ちよつと大げさだったね?」

「そ、そういうことではなく!」

もう摩耶も鳥海もわけが分からなかった。

言ってしまうえば憧れたのだ、目指すべき目標とすら思ったのだ。

だからこうしてやってきた、未熟を自覚し震える自分たちの力になつてくれることを期待して。

それがどうだ、この二人は戦い前日に惰眠を貪り欠伸をする。

肝が据わっているのかと思えばまるつきり戦いの空気を感じられない。

演習の時に見た姿は欠片もなく、別人かとも思えるような二人。

「……ふざけてなんかないよ」

「ああ!?!」

しゅんとしよげている体を見せていた加古は小さく呟く。

「あたしってさ、ほんとに自堕落が大好きなんだよ」

「それが、何か?」

上げられた加古の顔には満面の笑み。

そんな笑顔でなんとも言えないことを軽々と言う。

「一日中寝て過ごせるならそうしたいし、夜は提督とお酒に溺れたい

なんてずっと思ってる」

「……加古、そんな事思ってたの？」

隣で同じように笑顔を浮かべていた古鷹の視線だけは痛いと思いつながら、加古は続ける。

「でもさ。今は出来ないじゃん？ そんな大好きな自堕落を邪魔するヤツがいるから」

浮かべていた笑みに真剣の色が指し混ざる。

「だから全力で邪魔を排除する、大好きなここで過ごす時間を守るために。強い、弱いじゃないよ、なんでそうしたいのか、だと思おうよ」

「……」

テーブルを叩いた手の痛みをやけに強く感じる摩耶。

間違つてなかった。

頭に過るのはそんな言葉。

「摩耶さん、鳥海さん。私も、同じです」

「えっ？」

「ああいや、自堕落したいわけじゃないけど……。私は重巡洋艦の、うん。私の良い所を提督に伝え続けたいだけなんです。もつと言っちゃえば、提督に喜んでほしいだけなの」

古鷹と加古。

二人して同じ色を瞳に携えた。

——そのために戦い、生き抜く。

そう強く訴えていた。

顔を見合わせた摩耶と鳥海は思う。

「あたしには……」

「私には……」

無い。

強く生を望む理由が、無い。

艦娘として生まれ、戦いが生きる理由になって。

艦娘として生まれたいとも、戦いたいとも思わず定められていて。

そんな自分たちに望まれるモノはあっても望むモノなんて無いと思っていた。

「それじゃーさ」

「うん、そうだね。お昼休みからは駄目だね」

何処から取り出そうとしたのか酒瓶を持とうとした加古の手をペシリと古鷹が払う。

わかっているよなんて言いながらも止めなければ確実に酒盛りを始めようとした加古に苦笑いを古鷹は一つした後、二人に向かって笑顔で告げる。

「そのために勝とう、生きよう。生きて……生き抜いて探そうよ。その理由を、ね？」

——こりや負けるわけだ。

摩耶は思う、一切の悔やみ無く白旗を振ることが出来る。

——強いわけですね。

鳥海は思う、一切の疑い無く強さを認めることができる。

そして二人は思う。

——強くなりたい。

今はまだ見えない生きる意味。

それを手に入れるためにどれ程の困難が待っているのだろうか、想像もつかない。

結局の所、二人の答えは見つからなかった。

「ああ、やってやる。生きてやるさ」

「そして私もいつか見つけます、その意味、理由を」

それでも、この二人に憧れ目標にしたいと思ったのは間違いでは無かったと確信することができた。

故に進む、進みたいと思った。その二人が示した生き抜くという道を。

「今の言葉、取り消すのです」

「私は思ったことを言っただけ。その必要があるとは思えないわ」

剣呑な雰囲気に含まれる廊下。

空気の発生源には艦装を展開し砲塔を電に突きつけられている、横須賀よりやってきた朝潮型駆逐艦、霞。

突きつけられて尚、平然と撤回の意思を見せず睨み返していた。

「か、霞！ 謝罪しなさい！」

「何で？ クズをクズと言って何が悪いの？ 朝潮だって首、傾げてたじゃない」

「また……言ったのです……！」

ぎりっと引き金にかかる電の指に力がこもる。

今にも引かれそうなその時。

「電！ もうっ！ そんなことしたら駄目じゃない！」

電の身を羽交い締めにしたのは雷。

バタバタと後ろから六駆のメンバーが走り寄ってきた。

「はなっ……放すのですっ！ この人は……！」

「分かってるっ！ 分かってるからっ！ ちよつとこつちに来てちようだいっ！」

そのままずると電の身を引きずっていく雷。

「雷ちゃんはっ！ 許せるのですかっ!? 司令官さんを……あんな風につ！」

「許せるわけじゃないじゃないっ！ でも……我慢だつてしなきゃっ！」

その言葉を最後にこの場から姿を消す。

残ったのは朝潮、霞、暁、響。

砲塔を突きつけられていた部分を手で払いながら、小さく息を吐くのは霞。

視線を彷徨わせながらもぐつと拳を握った後。

「えと、電が失礼したわ。……ごめんなさいっ！」

勢い良く頭を下げた暁、それに倣い響も頭を下げる。

「い、いえ！ こちらこそ申し訳ありませんっ！」

勢いがうつったのか朝潮もまた頭を下げ、霞だけが頭を上げている。

「……何で謝ってんのよ朝潮。……はあ、ほんつと……さいあく」

額を片手で押さえながら大きなため息を吐いた霞。

何が最悪なのか。

それは一言で言ってしまうはこの鎮守府に対しての言葉。

霞は司令官という存在に憧れていた。それは朝潮も同様に。南一号作戦という大きな戦いを前に不安や緊張といった気持ちももちろんあった。

それでもそれ以上に、初めて自分達を使う、指揮する人間という存在に出会えることが嬉しかったのだ。

ましてや墓場鎮守府。

毎日毎日下される近海警備という名前の撃ち漏らし掃討任務。

ただ海を走っているだけの日が多かつたつまらない任務。

そんな自分たちとは真逆に華々しく戦果をあげていく鎮守府の司令官。

否応無しに期待した。

どれ程素晴らしい司令官なのかと胸を高鳴らせた。

その腕で自分たちはようやくやく輝くことが出来るとも思った。

そしてその司令官と初めて顔を合わせた時。

——このクズ！

やってしまったと思った。

つい期待からくる緊張で罵声が出てしまった。

だからすぐに謝ろうとした、朝潮と二人で。

——ありがとうございますっ!!

その前に憧れだった司令官から顔を煌めかせてお礼を言われた。憧れだった。

そのイメージは音を立てて崩れ、代わりに霞の頭に積み上がったのは変態というイメージ。

朝潮はお礼を言われた意味を理解できなかつたのか首を傾げているが、憧れる像には程遠い姿だということとは理解していたようで。

執務室から出た後は思わずというか当たり前に愚痴が口から飛び出した。

そうしてたまたまそれを耳にした電に砲を突きつけられた。

「訳わかんない……もう、さっさと作戦始まっちゃえばいいのに」

もう早く終わってしまいたかった。

司令官がいようがいまいがそれは何の関係もなかつた。

ガンガン行くわよ。

伝えたかった、思う存分使ってくれと。

それも伝えられず、思いを発散できず。

「そうすれば……沈めるんだから、華々しく私も——」

その言葉が出た瞬間。

「馬鹿な事言わないで欲しいわ」

乾いた音が霞の頬から鳴り響いた。

勢いのまま呆気にとられている朝潮の方へと向いた顔を戻せば、遠慮なく振り切った腕をそのままに、至極真剣な表情を覗かせる暁。

「こ、このっ！」

「一人前のレディなら、間違ってもそんな事言わないわ。半人前が調子に乗らないで欲しいわね」

暁とは対照的に腕を振り切れなかった霞。

半人前。

その言葉でいとも簡単に止められた。

「……私も、私達も偉そうなこと言えないけどね」

霞の振りかぶったまま動けないでいる手をそっと包みながら降ろしたのは響。

「イズヴィニーチェ……ごめんね？ それでもその言葉は聞き逃がせないんだ。私達にとってそれは何よりも立ち向かうべき言葉だから」
言いながら軽く霞の身体を抱きしめる。

されるがままだった霞は体温以外の何かを温かいと感じた瞬間。

「っ!!」

「お、っと……」

響の身体を突き放した。

それは響をではなく、沸き上がった名前のつけられない温かさを拒絶するため。

「……行きましょ、響」

「うん」

「ちよっ!?!」

その響に声をかけ、もう用は無いと背を向け離れていく姿。

悔しいと思った、苛立ちもした、だが何よりも。

「待ちなさいよっ！」

「……羨ましい？」

「っ!？」

背中越しに振り向いた響は一言そういった。

そして理由もわからずその言葉に動揺した。

「それは貸しにしておくわ。腹が立ったのなら、悔しいと思ったのなら……作戦が終わった後に返して。必ずね」

響とは違い、振り向かないまま言い去っていく暁。

「ほんとに……わけがわからないっ！」

「……霞」

廊下の床を踏みつけ憤慨の意を表す霞。

朝潮も、思った。

——私達は沈みに行くわけではない。

戦うのだ、勝ちに行くのだ、そしてこの海域から深海棲艦を退けるのだ。

それは確かに司令官の存在に左右されるべき意思ではない。

「朝潮っ!!」

「は、はい!？」

思わず背筋を伸ばして返事をしてしまう朝潮。

霞はいつもの調子で朝潮の名前を呼んだはずだ、それなのに。

「絶対勝つわよっ! ガンガン行くわっ! そして必ずこの一発、利子に熨斗もつけて返してやるわっ!!」

「……うん。そうね、そうよね! 勝ちましょう霞! やり残しがあつたまま沈んでなんていられないわ!」

先程までと全然違うように感じられた。

それもそのはず。

今このときにして初めて、自分の意思で勝つと心底決意出来たのだから。

「本当に、良いのかい?」

「……」

作戦の最終確認を終えた後、廊下を歩く長官と金剛。

念を押す……いや、作戦前日となった今でも何処か躊躇う気持ちがある長官だから、イエスと答えると分かってなお本人から聞きたい、そしてそれを免罪符にしたいのだろう。

事実、思わず出たそんな言葉を失言だったと顔で表現している。

だが、金剛は瞑目し改めて自分の胸の内に問う。

本当に良いのか。

答えは決まっている。

イエスと答えることに抵抗は無い、それはあの時からずっと宿していた想いだから。

目を開ける。

「あ、暁……大丈夫、大丈夫だから」

「あーうー……やっちゃったわ……私、思わず……」

その視界に入ってきたのは壁に片手をつき項垂れる暁と、その背中を心配そうな表情を浮かべながら擦る響の姿。

「うん？ どうしたんだらうか……って、金剛？」

長官を置き去りに、答えをそのままに、金剛は二人の下へと近づいていく。

「ハイ！ どうしマシター？」

「あ、金剛さん」

「ぴゃあ!？」

かけられた声に思わず被っていた帽子が一瞬宙を舞う。

そうして恐る恐る顔を金剛に向けるその一連の流れに浮かべていた金剛の笑みが深まる。

「驚かせてごめんネー？ あんまりにもサプライジングだったカラ」

「さ、さぶらいじんぐ?」

「えっと……驚いたって事、かな」

金剛は心の底から驚いていた。

この鎮守府に来てからというもの、艦娘の泣いている姿を見たことが無かったから。

目をゴシゴシと勢いよく拭った暁は大きく深呼吸をした後。

「な、何のことかしら？ わ、ワタシワーカリーマセーン」

「ええ……？」

強引過ぎる強がりを見せた。

往生際が悪いと言うかなんと言うか……肩を竦め、ため息をつく響。そして金剛は一瞬目を丸くした後。

「クスクス……ワタシの真似デスカ？ グツジョーブデス。……デスケド」

笑いながら暁の目尻に残った涙を人差し指で拭う。

「涙は女の武器デース。こんな所で振るうものではありませんヨ」

「あう……」

羞恥に染まる暁。その肩を響が軽く叩く。

「……叩いちやったの」

「ホワツツ？」

「絶対にしないって……決めてたのに。やられて嫌なことは、絶対にしないって、決めてたのに」

俯きながら溢れる言葉。

霞を引つ叩いてしまったのはつい先程。

その事を強く、強く後悔している暁。

「私、嫌なことも言ったわ、我慢出来なかった。だって、沈むなんて……沈みたいなんて、絶対に言っちゃいけないって思ってたから」

「——っ」

あまりにも端的な説明。

それでもその言葉は金剛を大きく揺さぶった。

動揺した、扶られた。

金剛の心が痛いと言っている。

沈みたいなんて言っただけじゃない。

そう、その言葉はこの鎮守府に在籍する艦娘全ての認識であり覚悟。

生きる、生き抜く。まだ見えぬ明日を提督と、皆と迎えるために。
正しい。

それは諦めた金剛でさえも正しいと思える決意。

「暁サン」

「は、はい」

腰を折る、暁と同じ高さに視線を合わせる金剛。

そうしてゆつくりと語り聞かせる。

「あなたがした事は間違いじゃありません」

「え？」

「そして、正解でもないデシヨウ」

真剣に。

酷く真剣に金剛は語る。

まるで、今生最後の言葉を伝えるかのように。

「そんな問題が、私達が生きる世界にはメニー……沢山あります。あなたが間違いだと思っても、ある人の正解である事も多いデス」

「……うん」

ままならないものだ。

自分の行動、意思。そのあり方は人によって大きく姿を変える。

「答えは受け取った人にしか導き出せません。しないと心に決めていた暁サンがやってしまった……それが正しいか間違いかは、やられた人が決めることです」

「やられた人が、決める」

言葉の意味を確かめるように胸の前で手を握る暁。

「その人が怒るなら謝りまシヨウ」

「うん」

「その人が感謝したなら喜びまシヨウ」

「うん」

「そうして仲良くなりまシヨウ。お互いを理解して、明日を一緒に迎えるために」

「うんっ！」

大きくうなづく暁の顔は笑顔、そう、いつもどおりに戻る。

「私、ちゃんとするわっ！ 謝るし喜ぶ！ レディなものっ！」

「ハイッ！ ベリーキュートなレディデスネ！ さ、元気になったの

なら今日はもう休んで下さいネ。明日に差し支えマスヨ?」

「そうするわっ! ありがとう金剛さんっ! 明日は頑張ろうねっ!」

「ハラシヨ……スパシーバ、金剛さん」

ぶんぶんと金剛に向けて手を振りながらその場を離れる暁と、小さく頭を下げた後離れる響を笑顔で見送る金剛。

——話せて、よかった。

暁に向けて話せた事を嬉しく思う。

「……良い、鎮守府デス」

「……そう、思うのかい?」

それは少しだけ変化した金剛の答えだったから。

金剛は、思う。

もしも自分が最初からこの鎮守府に着任していたのならあれだけ無垢に前を向くことが出来ていたのだろうか。

もしもそうなのだとしたら。

誰も、失わずに済んだのだろうか。

「さっきの言葉は……提督の?」

「ハイ、いつか言っていた言葉を思い出しまシタ」

——今からすることが正しいかどうかは歴史家にでも聞いてくれ。

そう言つて一人鎮守府に残り、散つた人。

横須賀の戦力を迫り来る深海棲艦の裏を取らせるために回り込ませ、自身を囮にした愚か者。

「チョウカン」

「なんだい?」

そんな提督を……思い出す。

言えたバーニングラブは彼には届かず、それは餞はなむけの言葉となつてしまった。

「そうして下サイ」

「……それがさっきの答えかい?」

「ハイ」

真つ直ぐに長官の目を見据え伝えられた返事。

「そして、もしも……この提督がそれを間違いだと言うのなら伝えて下サイ。ヒストリアンに聞いて下サイ……と」

「わかった。必ず……伝えよう」

変化した答えの先は未だ変わらず。

超長距離からの飽和攻撃。

その場にいる艦娘もろとも敵深海棲艦を討ち滅ぼす作戦、その目印、その役目。

「ありがとうございます、チョウカン」

「……任せてくれ。必ず……必ず成功させると約束する」

墓場の提督には伝えられなかった作戦。

その作戦の最終確認を、金剛は笑って静かに了承した。かつての正解を導き出すために。

作戦決行前日のようです ③

「捉えたっぽいっ!!」
「っっ!」

目の前で汗を飛び散らせ、金髪を踊らせ竹刀を振るう夕立を見て一言。

可愛いっ!

あ、いや、今更つすねすいません。何してても可愛いっす。

「あいたっ!?!」

「一本!」

時雨の判定が道場に響く。

まー確かにびつくりしたけども、まだまだですよ。

とは言え逆胴を繰り出してくるとはね、こないだ俺がやったこと
の真似……か?

確かに逆胴は俺の得意技だったりするから、結構やって見取り易
いんだろうけど、どうせやるなら普通に相手の右胴を狙う胴打ちから
して欲しい……。相手の左胴を狙う逆胴より応用が利くのは確かだ
から。

ああ、いや、別に剣道を教えてるわけじゃないからどんな太刀筋を
描こうと構わないんだけどもな?

どうやら夕立は今までのように竹刀を片手で振るうわ投げるわと
いった無茶苦茶はやめたらしい。何処で学んだのかしつかり剣道し
ている。

胴返し面、平たく言えば胴を狙ってきた一撃へのカウンター。

加減はしたけど何をされたかいまいち理解できてないようで、打た
れた頭を涙目になりながら擦る夕立。

逆胴への返しだったから普通とは少し変わった形になったんだけ
ども、そこは得意な逆胴ですから対策はバッチリなわけで。

夕立が俺の真似から始めてると言うのなら、いずれこれも覚えられ
るんだろうなあ……。胴打ち練習しとこ。

「大丈夫か?」

「へ、へーきつぽい！ それより次っ！ 次やるつぽい！」

心配する俺を余所に返ってくる催促の声に思わず苦笑い。やる気があつて大いに結構なんだけども。

剣道に慣れてきた夕立とは対照的に未だ艦娘に暴力……じゃあ無いのかも知れないけど、こうやって痛い思いをさせるのに慣れない。だからついつい消極的になってしまう部分があるのは認めるところ。

「いやこの辺にしとこう、明日は作戦決行だぞ？ ちと早いけど終わって身体を休めたほうがいい」

「えー!? 夕立、まだまだやりたいっぽい！ 後一回！ もう一回だけお願いします！」

「う、うーん」

時雨に目で助けを求めてみるが、返ってくるのは苦笑いだけ。何となくゴメンねなんて思つてそうだ。

ああつまりもつかいやらないといけないわけね……。

「がははっ！ ならばわしが代わりに相手をしようではないか」

「えあつ!? た、大佐さん!？」

……まじかよ。

「なんだ小僧？ これでもわしはそこそこやる方だぞ？」

「い、いえ！ 失礼しましたっ！」

そうじゃなくて、だ。

爺さんそっくりの顔してまんま爺さんと似たようなことしないで欲しいんだよ。

「わあい！ もしかして提督さんより強いっぽい？」

「さあて……どうかな？ 貴様は確か……夕立、だったな。それは実際にやってみて決めるがいい」

「はいっ！ よろしくおねがいますっ！」

あーあー……トントン拍子に決まっていこう。

不意に感じた視線に目を向けてみれば。

——良いの？

なんて時雨さんが困ったように。

まあ二人共やる気満々みたいだし？ 時雨さんにお任せするっぽい。

そう目で返してみれば竹刀を構えてやる気満々な二人の間に立つて。

「始めっ！」

開始の合図を出した。

「突撃するっぽいっ！」

威勢よく飛び出した夕立、その姿をニンマリと笑いながら迎え撃つ大佐は……っ!? あ、あかんこれ！

「夕立っ!! 逆胴はやめろっ!!」

「っ!」

「……ほう?」

慌ててブレーキをかけながら間合いの外へと飛び退く夕立。

何で? なんて目で見られるが……。

「そんな暇はねえ! 来るぞっ! 集中しろっ!」

「っ!」

歳に見合わない機敏な踏み込み。

その体軀から放たれる面の一撃は。

「し、しびれる……っぽい」

「よく防いだっ!!」

受けに回り構えた夕立の竹刀から乾いた音が響いた。

音の大きさが一撃の重さ、鋭さを如実に示している。

勢いのまま攻められ続ける夕立。

反撃するなんて考えられないだろう怒涛の攻め。

覚えがある、あの竹刀捌きは受けたことがある。

ああ、ほんとに勘弁して欲しい。

何処まで似てるんだよあの大佐は。

表情、剣筋、呼吸。

全てが記憶に重なる。

それが同一人物だなんて囁きかけてくる。

混乱している自覚がある、だから混乱から逃げようと試合に集中し

ようと目を向ければ。

「どうしたっ!? そのまま終わるかっ!?」

「ま、まだまだっ……ぽい! そこお!」

大佐だけじゃない、夕立がああ時の俺に重なる、重ねて見てしまう。

そうだ、あの時、爺さんから不意に放たれた逆胴を……。

「甘いわっ!!」

「!?」

返した。返して面が決まると確信したはずのそれは呆気なく空を裂いて。

「一本!!」

「……きゆう〜」

そうか、これが……これだったのか。

あのときは何をされたかさっぱりわからなかったけど。

返し面の一撃を躲し様に抜き打つ、あまりにも綺麗な抜き胴。言っ
てしまえばカウンターに対するカウンター。

あれで、今床に沈んだ夕立と同じ格好をさせられたんだ。

「艦娘に剣道なんぞ教えとるとはな」

「剣道を教えているつもりはありませんよ」

夕立の介抱を時雨に頼み、道場に残ったのは俺と大佐だけ。縁側に
腰掛けて身体を涼めている所。

がははと機嫌良く話す大佐とは裏腹に、未だに落ち着かない鼓動を
気にしないようにしながら会話するのは骨が折れる。

「ならば何故だ? 趣味か?」

「まさか。俺……いや、私は単純に身体を動かす鍛錬として剣道のよ
うな何かを勧めているだけです」

実は夕立に限らず時雨もちゃんとした剣道をするようになってい
たり。

天龍や龍田……まあ他の皆はこの鍛錬に前よりも熱を向けてくれ
るようになったと感じてるけど、この二人のように剣道らしくという
わけではなく、どうすれば俺を攻略できるかに執心してる。

「海を介さぬ鍛錬、か。なるほど、人としての力を高める。それがこの艦娘の強さというわけか」

「……さて、それはどうでしょう？ 私では判断出来かねる事ではありませんが、そうだといいなとは思いますが」

艦娘は艦にも人にもなれる。

だから艦娘の人としての力を向上させるなんて考えでやり始めたこの訓練は、力を海に活かすための何かにはなったと思う。

夕立や時雨が自分の戦い方を見つけたように、天龍が第六感なんて力を見つけたように。

それがかつて言った、人としての練度向上だというのならそうなんだろう。

ただ、それ以上に感じたことがある。

大事なのは気付きだと。

立ち向かう、立ち向かえると気付くこと。

生きる、沈まないと固く決心出来ること。

手に宿した艦としての力を人として振るう理由に気付くこと、そして理由を、自分の力を信じること。

そうやって思うことができ、気づいて一つ。

改めた考えがある。

「艦娘は艦でも人でも無い、か」

「え？」

ドキリとした、心臓が跳ねる感触がした。

考えていた事を見透かされたと思ったけど、どうやら違うようで。

「貴様はどう思う？ 艦娘とは何だ？ 兵器か？ それとも人か？」

「艦娘です」

間髪入れず答えた。

そう、それが俺の改めた考え。

「何か？ なんて答えは最初から出ていたんですよ、艦娘は艦娘だ。

人か、艦か、じゃあ無いんです」

「ほう？」

こうしてこの世界に来て艦娘を目の当たりにして。

人のように話し、兵器のように深海棲艦を撃破する姿を見て。

「大佐が求める答えではないのかも知れませんが、そもそも答えですら無いのかも知れません。ですけど、私は……」

「……」

世界はゲームのように優しくなくて、限りないほどのハードモード。

どうすればいいか考えた、色々なことを学んだ。

艦これをプレイしていた時に想像していた勝手な設定は簡単にひっくり返った。

今までやってきたことが無駄だなんて思わない。けど、それは俺の意図とか思惑とか……そんな安い何かを軽く超えて実感として突き刺さってきた。

この世界の現実突き刺されて、多くを知って。

環境も変わって、俺も色々な部分が変わったんだろう。自分でまだ気付けないこともあるだろうけど。

だけど、それでも。

それでも変わらないモノがあった。

これからも変わらないモノがある。

「共に海を往く者であることに変わりはない。それで良いのだと思います」

艦娘が大好きだ。

その好きに恥じない自分で在り続けたい、その好きを守れる自分になりたい。

それだけはずっと今までも、これからも。

「……つく」

「？」

「がははははっ!! そうか! そうだな! 艦娘が何であろうとも!

共に戦う者であることに変わりはないっ! がはははははっ!!」

シリアスぶち壊しの笑い声である。抱腹絶倒とはこのことか。

えー……なんか面白いこと言ったかよ……。

「いやはやすまんすまん！ そんな目で見るな！」

「い、いえ！ つて、痛い！ 痛いです！」

バシバシと景気よく肩を叩かれる。

いやまじ痛いっす。

「ふー……。ああそうだ、その通りだ。我々は難しく考えすぎているのかもしれない」

「はい？」

「いや何、軍人の頭は固いという話だ」

空を仰いで喉をクツクツと鳴らす大佐。

多分、この人は色々なことを知って、色々なものと戦って来たんだろう。

その道中、沢山悩んで壁にぶち当たって。

その全てが解決したかのような、長く降り続いた雨が止んで虹が差し込んだかのような。

そんなさっぱりとした笑顔を浮かべていた。

「小僧」

「……はい」

だから小僧はやめ口ツテ。

「ここは、良い鎮守府だな」

「………光栄です」

「ばかもん、世辞ではない。わしもここに来た時はほとんどわからなかったが……今、わかった」

そう言つて……いやちよ!? 頭撫でるなし!?

「おい！ 確か……時雨、だったか？ そんな所で隠れておらんでこっちへ来い！」

「ひゃ、ひゃい!?!」

唐突に大佐が縁側廊下の奥へと声を出せば、慌てて出てくるバツの悪そうな顔をした時雨。

いやん、いつからいたのさ時雨さん。

「えつと、介抱終わって夕立寝ちやったから……その、お茶でもって思つてね？」

「がははっ！ そうだな、有り難く頂こう！」

しずしずと差し出されたお盆の上に乗ってる湯呑。

大佐に倣って飲んで見ればなんとも言えない生温さ。

「うう、そんな目で見ないでよ提督。は、話の邪魔になっちゃうかなって思ってる」

「いや、いいんだ。怒ってるわけじゃないから」

ちよつと照れくさいだけだから。

決意表明なんておおっぴらに言うもんじゃないんだよ。

「ふむ……小僧、この茶はのどが渴いたであらうわし達が飲みやすいようにと配慮してくれたものだろう？ 感謝こそあれ怒る、落ち込むことはないだろうに」

「うぐ」

なんだよこの爺さん！ 口うめえなこんちくしょう！ その話術俺にくれっ！

あつ、ほら！ 時雨だつてなんか嬉しそう……こら、その通りだよみたいな顔するでない！

あーもうほんとシリアス何処行った帰ってこい。

「……ありがとう、時雨」

「えへへ、どういたしまして」

うん。

可愛いから許すっ！！

あ、いや元から怒ってますん！

「小僧」

「は、はい」

うわ、急にシリアス帰ってきたっぽい。

真面目な顔して何でございませうか。

「わしはこの作戦で軍人引退……最後の任務だ」
「……」

そうなのか。

なんだろう、なんでだろう。

惜しいと思ってる自分がある。寂しいと思ってる自分がある。

この爺さんは似ているだけで、爺さんじゃないはずなのに。

「失敗は許さない、許されない。……いや、認められない。作戦概要上もそうだが、貴様の鎮守府戦力が成功の鍵を握っていることに間違いはない」

「……はい」

先鋒である俺達。

その成果次第で後の展開が苦しくも楽にもなる。そういうことだろう。

「これは軍人として、上官としての命令ではなく……この国に住む一人の人間としてだが……」

「はい」

「頼んだぞ」

一言。

ただその一言を告げられた。

瞬間、胸のすく思い。

「条件があります」

「ほう？ いい度胸だ気に入った。言ってみろ」

それが何なのかはわからない。

ただ、わけがわからないままその衝動に従って言う。

「成功したら……お互い無事に生きて帰ってきたら……俺と、戦って下さい、剣道で」

「……良かろう。楽しみにしておく」

ニヤリと笑った後、大佐はこの場から立ち去っていく。

「提督？」

「……うん？」

袖を引かれる感触と声に向けば笑顔の時雨。

「僕、頑張るね」

「ああ、俺も頑張るよ」

そう言って、二人で少しだけ笑いあって。

明日への覚悟を改めた。

南一号作戦が始まったようです

「俺は、さ……長官みたいに軍人らしく、かつこいい演説、訓示なんて出来ねえ」

死力を尽くし、この水平線に勝利を刻もう。

防衛ラインに築かれた簡易な作戦司令本部、全艦隊の前で長官はそう言った。

言葉の終わりと共に全艦娘が敬礼をした。

話す長官の隣で提督も集った艦娘に向かって敬礼をした。

艦娘から向けられる悲壮とも言える覚悟。

それに酷く泣きそうな気持ちになりながら。

「だから今から言うのはわがまま。そう、俺のわがままだ」

苦笑いと共に顔を上げた提督。

それにつられて墓場鎮守府の艦娘達も口端を持ち上げた。

作戦は彼女たちが出撃することが始まる。

そしてその開始を告げるのは提督が命じる出撃号令。

その号令をいつものように、されど鎮守府艦娘全員が提督の前に揃っているという光景にくすぐったさを感じながら待つ。

「まだまだみんなと一緒に同じ時間を過ごしたい」

口から出たのはそんな言葉。

死ぬなども、生きろとも言わなかった。

「足りねえんだ、俺は欲張りだから。皆と過ごす時間がまだまだ足りねえ、もつと仲良くしてえし、一緒に戦いたい。まだ見えない暁の水平線に勝利を刻んだとしてもずっとそれは変わらねえ」

あまりにも自分の欲望に素直な言葉であり願望。

だがそれを聞いた全員が一層顔を綻ばせた。

「はっ！ それはこっちの台詞だぜ？ 提督！」

「ええ、そして何よりの言葉です。わがままなんかじゃありませんよ」

「そうだよっ！ 提督っ！ 那珂ちゃん達の見せ場……ちゃんと見ててね！」

理解していた。

死ぬかも知れないという事実から目を逸らし、逃げた言葉では無いということ。

そう、当たり前なのだ墓場鎮守府の面々からすれば。

この戦いに日本の行く末がかかっていると長官は言った。

正しくそうなのであれば、失敗してしまえば皆と今までのように過ごすことが出来ないだろう。

戦いに追い立てられ、心は擦り切れ、辛い日々が変わってしまいかも知れない。

だからそんな事は認めない、認められない。

今の幸せが崩れるかも知れないという可能性ですら、許す気は欠片、塵ほどにも無い。

故に、勝つ。

戦いの先にあるモノ、得られるモノは幸せであるべきだと。

各艦隊旗艦艦娘がした返事に続くように湧き上がる言葉。

——寝てる間に勝って帰ってきてるから。

——安心してよ、提督との約束守ってみせるから。

——お任せ下さい、必ず勝利して帰ってきます。

——一人前のレディになった証、見せてあげるわっ！

幾つも声が上がリ、提督もまた笑顔を深める。

先の訓示で作り上げた雰囲気は微塵も無い。あるのはただただいっつもどおりの雰囲気。

傍から見れば慢心とすら思える発言、空気。

だが、それで良い、それが良いと提督は頷き、その頷きを持って上がった声が止む。

「第二艦隊っ！」

「はっ！」

そしてその言葉で直ちに第二艦隊の艦娘は敬礼と共に戦に臨む顔を宿した。

「先鋒一番槍っ！ 可能な限り進軍し、第一艦隊が進む道を切り拓くように！」

「光栄ですっ！ お任せ下さいっ！」

先鋒の先鋒。

榮譽とも思えるその役割への震えを敬礼に変えて鳳翔は答える。

第二艦隊の役目は戦場へと突っ込み道を切り拓く。

「第一艦隊っ！」

「おうっ！」

先の第二艦隊同様でありいつもどおり、なんでも言ってくれと自信に満ちた表情で返事をする。

「第二艦隊を支援しつつ進軍っ！ 作戦目標地点を確保せよっ！」

「よっしゃあ！ 任せとけっ！」

墓場鎮守府に求められた目標地点、それは最低でも海域の半分まで進軍すること。それが最低ライン。

極めて厳しく無謀であると言っても良い内容ではあるが、それがどうしたと笑って任せろと言う。

「フラワーズ第三艦隊っ！」

「はーいっ！」

変わらぬ笑顔に一握り、されど何よりも固い覚悟を宿しながらされた返事。

「防衛ラインの守備をしつつ、戦況を見て高速修復材の輸送っ！ 何が起るかわからねえ、警戒態勢を崩さないように！」

「はいっ！ フラワーズ、お仕事入りますっ！」

防衛ラインに築かれた資材集積所の警備をしながら戦況を伺う。

鎮守府のメンバーから離れる役目ではあるが、一度戦況が動けば極めて重要と言える役目。

知ってか知らずかという疑問は露程もない。全て承知の上でなお、笑顔で任せてと返事をする。

「全艦隊……出撃っ!!」

「了解っ!!」

そうして、いつもの波止場ではない場所で。

いつもどおり戦意を漲らせて出撃していった。

墓場鎮守府の面々が出撃して少し。

「す、っい……」

「ああ。……いや、私は怖いとすら思うよ、陸奥」

観測機から送られてくる墓場鎮守府の艦娘が戦う様を映した映像。それを見ていた横須賀鎮守府主力。長門型戦艦、長門と陸奥は画面に釘付けになっている。

映る第二艦隊の姿は確かに小さく損傷を重ねている。

それでも確実に敵を撃破し進軍していて、何よりも。

「沈む気が、しない」

「ええ……」

今、第二艦隊の大淀が中破した。

これで驚いたばかりの協力弾着観測射撃と相手の砲弾を撃ち落とすといった神業はやりにくいだろう。

だがしかし、それでも戦意は一向に衰えず動揺すらも伺えない。

それどころか更に連携は深まり、冴え渡っている。

弾着観測射撃や、攻撃機、爆撃機によるアウトレンジ主体に戦っていた物から一転、大淀が被弾した瞬間にミドル、ショートレンジ戦法へと切り替わった。

混戦になりつつある戦況を鳳翔が飛ばす艦載機発艦のタイミング、その精度で秩序立て。

古鷹、加古による連携砲撃で確実に仕留める。

そしてその合間を縫うように放たれる大淀の牽制射撃。

変幻自在。

どれ程の練度が、経験があればそうできるのか、まさに底なし。

状況が変われば直ぐ様最善手を生み出しそれを発揮する。

仮に、いや万が一。動ける者が一隻になろうが、深海棲艦が撃沈する光景は変わらないと思わされる。

長門が呟いた恐怖。

それはもちろんその強すぎる姿もあるが、何よりも徐々に損傷を重ねていったなお、必ず生きて帰るという意思が画面越しでさえも伝わってくる事だった。

その目、その姿全てが言っている。

必ず勝つ、生きて帰ると。

自分たちが決めた、何をしてでも勝つという覚悟。

同じように思えたそれとは全く真逆。

眩しく、恐怖心すら覚えてしまうくらいの重く強い覚悟。

それが長門の胸を熱くさせる。

「……………どうだい？」

「——はっ！ 申し訳ありません！ つい夢中になってしまいました！ 出撃でしょうか!？」

後ろからいつの間にか現れた長官の姿に慌てて敬礼をする二人。

伝えられていた作戦も、画面から伝わる熱に浮かされたのか頭から抜け落ちているようで、その姿に長官は苦笑いを浮かべる。

「いや、たった今金剛達に出撃してもらった所だ。君たちの出番はまだまだ後になるだろう」

「……………!」

出番。

その言葉で自分たちの役割を思い出し、唇を噛み締めてしまう長門。

「……………長官」

「なんだい？」

長門の姿に思うところがあつたのか、陸奥が口を開く。

「私達も……………あの場に行つて戦えないのかしら？」

「戦いたいのかい？」

戦いたい、あの艦娘達と。

それは本能とも言える何かの叫びだった。

何かのために勝利したい、その勝利を捧げたい……………そう思える大切な何かへと。

艦でも人でもなく、艦娘が宿している本能。

「そ、そうです！ ……そうだともっ！ 私は……………この長門も戦えるっ！ 立派に、華々しく戦い勝利を刻めるっ！ だからっ……………長官っ！」

「許可できない」

決死の想いで本能に従い叫ぶ長門を迎えたのはにべもない言葉。

「確かに彼の艦隊はこの作戦で重要な役割を持っている。だが、それと同様かそれ以上にキミ達の役目だって重要で、代えが利かないものだ」

「そうなのかも知れないっ！　だが！　あれだけの力ある者達と戦えばっ——」

「長門っ!!」

言い切る前に陸奥が長門を遮る。

——誰かを犠牲にする事無く勝てるかも知れない。

そう続くはずだった言葉が遮られる。

「……失礼しました、長官」

「構わないよ」

陸奥とて思った、言いたかったその言葉。

だが、長官の返事を聞いて無理だと悟った。

「そうだね、一生恨んでくれて……いや、恨んで欲しい。キミ達を使う僕は、あまりにも無力で無能だと」

「……つくー!」

長官から顔を悔しげに背ける長門。

あらゆる可能性を考えていたのだろう、その希望にもしかしたら縋りたいと今も思っているのかも知れない。

それでもこの作戦を執ると決めた。

「そうですね……はい。私は……陸奥は、一生貴方を恨むことにします」

「ああ、ありがとう」

陸奥はそれがわかった。思い知らされた。

たとえ自分たち艦娘の手をどれだけ汚そうとも、長官自身の手を、名誉を汚すことになろうとも。

彼は手を振り下ろす、金剛ごと敵を撃てと告げる。

だから、諦めた。

普段なかなか本音を映さない瞳をわかりやすく昏くした。そうして覚悟を決めた。

「私は……っ！」

長門は未だ葛藤している。

今ほど自分が戦艦であるということに恨んだことはない。

長距離から火力ある一撃を叩き込むことが出来るから、性能が高いから。

なるほど確かに適材適所。

そう、自身の想いから全く真逆に位置する適所。

そんな長門を見て陸奥は思う。

——誰か助けて欲しい。

そう思う。

勝利するために何故同胞を撃たねばならないのか。

勝利するために何故共に戦い沈む事ができないのか。

長門型戦艦姉妹は、酷く、強く恨み悔やむ。

もしも、画面に映る彼女たちのように強ければ。

ぐうの音も出ないほどに強ければ執られなかった作戦かもしれない。

「っ!? ……さあ、見てご覧。そうせざるを得なかった理由が……わかる」

「っ!?!」

「これが……」

一瞬長官に走る動揺。

それを押さえ込み二人の視線を画面へと促す。

墓場鎮守府の艦娘が急ぎ艦隊を再編し整える。

「空母棲鬼……かつて、僕たちが負けた相手だ」

そこに映るは空母棲鬼。

かつて、敗北し日本を追い詰めた元凶が居た。

「ちいつ！ 最奥にいるんじゃないのかよっ！ 古鷹！ 加古

！

「はいっ！ もちろんいけますー！」

「おうさっ！ まっかせときなっつて！」

作戦海域のド真ん中。

下された命令、ここさえ奪うことが出来れば任務達成と言える場所。

そこに、空母棲鬼はいた。

天龍の呼ぶ声で意図をすぐに理解した二人。

小破未満の二人は第一艦隊へと合流し、戦闘態勢を整える。

「鳳翔さん！」

「はい……悔しいですが、私と大淀さんは一度退き、再出撃出来るよう急ぎます……ご武運を」

その場を離脱する大破した大淀と鳳翔。

既に第三艦隊が帰路の護衛にと姿が見えている。

鳳翔は艦載機の補充、大淀は短期間に行った協力弾着射撃、弾落としにより集中力が極めて低下している。

それはどちらも高速修復材では癒やすことができない。

見える敵艦隊は、最奥に構えていると言われていた空母棲鬼率いる機動部隊。

編成は重巡り級エリート、軽巡ホ級フラグシップ二隻、駆逐口級後期型二隻。

「今頃提督は——」

「まじかよ……なんて言っただけさうねー？」

天龍の後を龍田が言う。

そして、言ってるだろうねと皆で笑う。

「だけど提督は——」

「勝つって信じてくれてるっばい！」

時雨の後を夕立が言う。

僕が言いたかったなと頬を膨らめます時雨に、夕立はしてやったりと笑顔を浮かべる。

「ったく……古鷹、加古。大丈夫か？」

「はいっ！ よろしくおねがいます！」

「あいよー！ ……思う存分指示してよ？ あたし、やっっちゃうからね！」

頼もしい言葉に頷く天龍。

「ナンドデモ……ナンドデモ……シズンデイケ……！」
海に響く呪詛。

それが示すのは戦闘距離まであと僅かだということ。

「勝つぞっ!!」

「了解っ!!」

空母棲鬼から発艦される艦載機。

気炎を巻き上げながら、立ち向かい。

今、戦いの火蓋が切られた。

空母棲鬼と戦うようです ①

「ちいつ！ 何だっつんだこの威力は!!」

「天龍ちゃん！ 大丈夫っ!？」

空母棲鬼から放たれた攻撃機、爆撃機を手にした25mm三連装機銃で相手取る。

那珂が毎日のように工廠で開発任務に従事し、手にすることが出来た機銃。

それは確かに以前装備していた物より遥かに高性能で、装備している天龍と龍田が行う対空射撃を強力なものへと導いた。

だがそれを以てしても撃ち落とすきれない艦載機。

残った艦載機の爆撃。

直撃こそ無かったもののその余波は威力を示すには十分すぎるもので。

早くも小破してしまった天龍と龍田の頬を汗が伝う。

「シズメ……ナンドデモ……!」

艦載機と思わしき物体が空母棲鬼の下へと向かっていく。

それを受け入れながらも視線はこちらの轟沈を心の底から望むかのような色を宿していて。

「天龍っ!」

「わあっつるっ！ 時雨、加古は敵駆逐艦を！ 夕立、古鷹は軽巡！

奴さんの回避性能はかなり高いと見えるが頼んだぞっ!」

「了解!」

出された指示に直ぐ様動き出す。

陣形を構えながらの艦隊行動ではあの艦載機にまとめて潰されるとの判断。

そして、かねてより練習をしていた第一艦隊らしい動きの共有。

既に第三艦隊を除く全ての艦娘達が互いの動きに対応できている。

味方に対応できると言っても、その上で相手へと対応できるかと言えばまだ一抹の不安がある。だが、今この時においてはそれが求められた。

「龍田は重巡り級！ ビビンじゃねえぞ！」

「調子に乗らないのー……誰に言ってるのかしら？ 私が、提督の前で沈むわけないじゃない。それより天龍ちゃんこそ大丈夫？ あれの相手は一筋縄じゃ行かないよー？」

「はんっ！ 可愛らしい熨斗つけてそれこそ誰に言ってるやがる！ オレは……天龍様だぜ？」

一閃見合う二人。訪れる一瞬の余白。

「沈むなよ」

「天龍ちゃんこそ」

勢いよく合わされる互いの手。

乾いた音を背に龍田は走り出す。

「シズメ……シズメ……！」

「おーおー随分とお怒りのようで」

変わらぬシズメという言葉。

何故かそれを怒っていると感じる天龍。

何に対して怒っているのかはわからない、それでも先程より遥かに強い憎悪とも呼ぶべき怒りを感じる。

感情は海に例えられる事がある。

だからかその怒りの海に飲み込まれ、沈みそうになる天龍。

だが。

「……沈めるかよ」

「ナンドデモ……ナンドデモ……！」

ならばそれは立ち向かうもの。

ならばそれは踏み立つもの。

「あんたが何に怒ってるのかはわかんねえ、だが……」
相対し、目を閉じる。

一瞬の間隙すら見せるわけにはいかない戦場。
理解していてなお、開眼し。

「わりいが乗り越えさせてもらうぜ？ そう、オレの名は天龍……フフ、怖いかな？」

「ナンドデモ……クリカエス……シズメ!!」

艦載機再発艦。

かつて絶望を抱いて見上げたそれに、希望の槍を纏って立ち向かう。

「時雨！」

「わかってるやー！」

空母棲鬼率いる艦隊の陣形が崩れる。

崩さなければ対応できないと一瞬で看破された。

いや、散開して向かってくる第一艦隊を各個撃破をするよりも先にやられると本能で理解できたのかもしれない。

それは墓場鎮守府にとつては思惑通りと言っている。

だが、相手側の被害なしにそうなることに不気味さを感じる。

「ここは……譲れないっ！」

時雨と加古が相手取るは駆逐口級後期型二隻。

その不気味さに蓋をして、溢れて漏れる前に倒す。

時雨は近づく速力を全開に、その後ろで加古が静かに主砲を構える。

「砲撃を集中だ……」

相手の行動に楔を打ち込む時雨と類まれなる砲撃センスを持つ加古の相性は非常に良かった。

時雨の手の上で踊るだろう敵の動きを捉える事ができる加古。

その踊りを止める砲撃を放つ、仮にそれが通らずとも、踊りを止め

させなかった時雨が止める。

死踊へ誘う指揮者、時雨。

それはつまり、踊らされてしまえばその瞬間沈むことが確定してしまふ。

「ガア!!」

「やめてよ……痛いじゃないか」

見えないタクトを振りかざす時雨に口級二隻の砲撃が集中し、小破する時雨。

口級も理解していた、もしもそうなってしまうえば終わりだと。そう

本能が告げていた。

「いつけええええ!!」

「!?」

その判断は正解でも不正解でも無かった。

勢いよく向かってくる時雨へと砲撃しようとする。時雨の動作は動きながら捉えられる物ではなく、またすぐにでも近づけさせないために精密なものが求められた。

故に立ち止まった。

狙いをつけるために、必ず当てるために。

そしてそれを加古に狙われた。

結果は口級一隻中破。

「……君達には失望したよ」

「……ガ?」

間拔けな声が響いた、とても深海棲艦が発する言葉とは思えないほどに。そしてそれがこの海に遺した最後の音になった。

中破した口級の足元に時雨が発した魚雷が迫り、貫く。

残り、口級一隻。

「残念だったね」

「……」

呆気にとられているうちに近距離へと迫った時雨が一言。那珂によつて開発された新しい主砲、12.7cm連装砲を突きつけてそう言った。

そうしてようやく気づいた。

既にタクトは振るい終わっていて、終幕を告げるカーテンが降りていた事を。

アンコールの声は、上がらない。

「夕立……突撃するっばい!」

軽巡ホ級フラグシップ二隻は一言驚いていた。

その何の策も抱えてないことがわかる程清々しい夕立の突撃っぷりに。

後方に味方であろう古鷹を置き去りに、ただただ愚直に真っ直ぐ飛び込んでくる姿。

もしもホ級に意味ある言葉が発せられるのならば間違ひなく馬鹿かと言っていただろう。

もしくは古鷹に叱責していたかも知れない、仲間を見捨てるのかと。

だからこそいつの間にか崩れていた陣形にため息をついた。

感じたモノは恐怖なのだろう、確かに未知に遭遇してしまえば怖くも感じる。

決して、自分たちが沈められると思つてのものでは無い。

このような愚か者相手に何を勘違いしていたのかと。

そんな事を思われていてなお、古鷹は悠然と佇み主砲を構える。

それどころか笑みさえ浮かんでいた。

「やっぱり夕立ちちゃんは可愛いなあ」

この緊迫した戦闘で、悠長にそぐわないことすら言つてのけた。誰かのアクションに対しての行動。

連携ありきの古鷹、連携する能力なら他の追隨を許さない古鷹。

独自に動き、一人で自由に敵と相対する。

バカ爆弾カミカゼと言われても否定できない夕立。

二人の相性は最高と言つて良かった。

「さあ、素敵なパーティーしましょう？」

ホ級の射程距離に入ったと同時に夕立は誘う。

それを鼻で笑つてしまうホ級。

何が素敵なパーティーか、考えなしに突っ込んできている間に照準はしっかりとつけられているというのに。

返事の代わりに放たれる砲撃。

それは真っ直ぐに夕立へと向かい。

「あははっ！ ちょっと痛いっばい!!」

「!？」

至近弾となつた、そしてその事を理解したと同時に。

「やったね！」

古鷹の砲撃がホ級へと直撃した。

夕立、小破。ホ級一隻中破。

割の合わないトレード。

いや、理解できないトレード。

何故当たるはずの砲撃が至近弾になったのか、いやそれはまだいい、何故、何故損傷したのにも関わらず爛々と突撃を続けているのか。そして何故仲間が損傷しているのにも関わらず未だに笑顔を浮かべられているというのか。

知らない、いや忘れたはずの何かに嘸し立てられ怒りがホ級へと巡る。

その怒りに身を任せ勢いよく動き出す。

「そう言えば回避性能が高そうだって天龍さん言ってたっばい！」

「はいっ！ 気をつけてくださいね！ 夕立ちちゃん！」

もう何もホ級には響かなかった。

あるのはただ怒り。

カミカゼを敢行させる。

損傷に対して何も感じていない。

かつて誰かから受け取った何か。

その何かがわからないままにホ級を支配している。

「!!」

支配された感覚に身を任せた結果、気付くことが出来なかった。

無傷のホ級と中破したホ級。後者の速度が低下していることに。

「捉えたっばい!!」

故に追いつかれるのは当然。

中破したホ級に夕立が肉薄している。

慌てて反転し夕立を挟み込もうとするも。

「行かせないよ」

先程浮かべていた笑みは何処へ行ったのか、鋭い眼光を宿した古鷹の砲撃を打ち込まれてしまい足を止められる。

ならば砲撃で支援をと大きく口を開けるが。

「あははっ！ ソロモンの悪夢！ 見せてあげる！」

撃てない。

二隻の距離が近すぎるのもそうだが、何よりも常に射線上にホ級がいる。

回避性能が高いだなんて問題じゃない、あれほどの近距離で避けられる物は無い。

加えて、そんな近距離で砲撃を行っているにも関わらず夕立は一切の損傷が見られない。

——アリエナイ。

積み重なるホ級の損傷。

その思いはホ級が撃沈するまで鎖となって動きを縛る。

「さあつー！ あなたも素敵なパーティしましょ!？」

「夕立ちちゃんは大丈夫？ そう。じゃあ残りはあなただけ」

——アリエナイ。

知らない、こんなのは知らない。

ただひたすらに巡るその言葉。

それは結局勝利何かに行き着くことは無かった。

震えていた。

「さあ、死にたい船は何処かしら？」

ゆつくりと重巡り級へと向かう龍田。

その顔にはいつもと変わらない笑顔。

その笑顔に、雰囲気……自身の背後にある絶対的な死の恐怖に震えていた。

「早く天龍ちゃんのところに戻らないといけないんだ……だから、ね？」

——沈んで。

背後で感じた死。その波に浚われたくない一心でリ級は砲撃を放った。

狙いも何もあったものではない、ただ闇雲に放たれた一撃は運良く

……いや運悪く龍田へと真っ直ぐ飛んでいく。

だが。

「へえ？ 凄いんだねー？」

運が悪かった。

放った瞬間に当たると思ってた喜んだ事に絶望したから。

それは呆気ないほど簡単に避けられた。

最初から当たらないと思っただけならまだ良かった。

どうせ適当に撃ってしまっただけの砲撃、望みを一瞬でも感じてしまえた故に回避された事実がり級に重くのしかかる。

何よりも。

「私を本気にさせるとは、悪い子ね。死にたいの？ うふふ」

重巡り級エリートの一撃。

それは軽巡洋艦ならば一撃で大破、轟沈まで考えられるほどの威力。

故に龍田は警戒レベルを一つ上げた。

万が一にも当たってはいけないと気を引き締めた。

そう、引き締めさせてしまった。

背後にある死の気配など到底及ばない。

眼前から漂う絶望、沈められるという濃密な極死の気配。

相對して、僅か。それこそり級が一発砲撃を行っただけ。

ただそれだけで悟った。

——マケル。

敵わない、敵うわけがない。

どれ程工夫を凝らそうが、どれ程果敢に攻めようが自分は手も足も出ずに沈められると。

「あはははっ！ 砲雷撃戦、始めるね！」

それは宣告。

今からお前を沈めると言う絶対的な宣告。

龍田の装備している主砲、20・3cm連装砲が火を吹いた。

砲弾がり級へと向かい、至近弾となる。

損傷は軽微、小破にすらなっていない。

安心するべきだ、自身は一発でも当てることが出来れば勝てると。時代遅れの旧式軽巡洋艦の一撃など大した損傷にもならないと。

だと言うのに。

「どうしたのー？ 撃つてこないのかしらー？」

り級はただ海を滑るだけ。

砲が上がらない、狙いなんてつけられるわけもない。

何度も撃とうとした、そしてその瞬間当たらないと確信した。

構えようとする度に、龍田の砲撃が飛んでくる。

装填中に狙いをつけようとすればその狙いを予測され撃とうとした場所からいなくなる。

格が違う。

間違っていた、そもそもを。

相手に合わせて散開などするべきではなかった、相手の土俵に付き合うべきではなかった。

「あらく、もう声も出ませんか？」

何処か少し落ち込んだ色を含みながら龍田は言う。

楽しんでいたわけではない、まして余裕ぶっていたわけでもない。

ただ単純に弱い者を痛めつける構図になってしまったことを残念に思った。

弱者。

そう、ここに格付けは成った。

「ごめんね？」

だから謝った。

決して弱い者いじめは趣味ではないと。

そう言いながら、静かに引き金を引き続けた。

「よう、お早いお帰りで」

「っ！ 大丈夫!？」

最初に帰ってきたのは時雨と加古。

中破……いや、大破寸前の天龍へと慌てて駆け寄る。

「天龍ちゃん！」

続いてやってきたのは龍田。

先程までの表情を潜め、天龍へと心配そうな目を向ける。

「て、天龍さん！」

最後に古鷹と夕立。

「無事帰ってきたってこたあ上手く行ったわけか。すまねえな、そんなオレはちと手こずってるわ」

「そんな事はいいからっ！」

天龍は諦めた。

一人で空母棲鬼を撃沈することを。

開発された新しい主砲であろうと、さしたる損傷を与えられることはなかった。

というのも空母棲鬼が発艦する艦載機の火力が高すぎて回避に専念せざるを得なかったため。

狙いをつける余裕などない、ただひたすらに提督と共に磨き上げた自分の第六感を信じて攻撃機、爆撃機に臨み回避し続けた。

それでもこの姿。

天龍の第六感を以てしても、25mm三連装機銃と以前手にしていた物よりも遥かに強力な機銃を手にしても、だ。

「っ！ 天龍ちゃん、一旦指揮預かるわよ！」

退け。

龍田の言葉に込められた意味はそう。

「いんや、駄目だ。ここでオレが指揮する」

その意味を分かかっていて尚天龍は却下した。

理解できていた。ここまで空母棲鬼と戦闘を繰り広げた天龍だからこそ理解した。

「オレ以外じゃ、あれには対応出来ねえ」

「天龍ちゃん!!」

このまま龍田に指揮を預け、天龍は戦域から離脱し回復に戻る。

そうすれば確かに天龍は無事帰投できるだろう、しかし、残った全員は確実に沈む。

それを理解していた。

「っ!? 増援!?!」

そこに空母棲鬼の遙か後方からこちらに向かってくる深海棲艦の

姿。

奥歯を強く噛み締めながら龍田はどうするべきかを必死で考える。だがその答えを出す前に天龍の指示が飛んだ。

「いいか？ オレは引き続きアイツの注意を引く、それは変わらねえ。……増援が合流する前に、ケリを付けるぞ」

「……わかった」

天龍が一人、艦隊から距離を取る。

「良いな？ オレも長くは保たねえ、お前らが空母棲鬼を倒すのが先か、オレが駄目だと退くのが先かだ。……頼んだぜ？」

この場面においても天龍は決して沈むという言葉を使わなかった。

その意味、意図を艦隊全員が理解し領いた。

「行くぜっ！ 全艦突撃っ！」

「了解っ!!」

戦いの行方はまだわからない。

勝利の女神は未だ微笑まず、その笑顔の向け先を決められないまま。

第三艦隊が出撃するようです

「那珂ちゃん!!」

「わかってる！ 皆、準備は良い？ フラワーズの見せ場だよっ！」
那珂へと提督から出撃指示が出たのは第一艦隊が空母棲鬼と会敵したのと同時。

また、那珂自身も行かなければならないと同時に判断していた。
理由なき不安。

指示を出す提督の声からは焦った様子を感じ取れたし、那珂自身海域の中盤で標的と出会うことに不安感を覚えた。

「良い？ 私以外、暁ちゃん、響ちゃんは魚雷とドラム缶。雷ちゃんと電ちゃんは主砲とドラム缶を装備していくよー？」

「了解！」

その不安を表に出さず飲み込み、出来るだけいつもを演出するように那珂は笑って指示を出す。

第三艦隊へと指示を出しながら那珂もまた装備を整える。

那珂が開発できたのは、主砲と魚雷。ソナーに爆雷、それとドラム缶のみ。偵察機を何度か開発しようと試みるも、失敗してしまった。

理由はわからない。

凶面は確かにあった、間違いなく作成に問題はなかった。
それでも失敗した。

故に那珂が装備するのは主砲と魚雷。

15. 2cm連装砲と61cm四連装酸素魚雷の二つのみ。

「……緊張してる？」

「もちろんっ！ でも私、嬉しいわっ！ その気持ちのほうが強いのだ！」

案じた那珂の声を余所に胸を張りながら暁は答える。

「ようやく、一人前になれた私達の力を司令官に見せることが出来る」
響が胸に手を当て、瞑目しながら続き。言い終えた後、瞼を開き電へと視線を寄せた。

「わ、私は司令官なんて……」

「そんなんじや駄目よ？　ちゃあんと私達だってできるようになったところ、見せるんでしょ！」

視線に背くように意地を張ろうと慌てた電の肩へと雷の腕が絡みつき。

「……はい、見せるのです、見てもらうのです。私が……私達はもう大丈夫だつてところをつ！」

言葉を変えた。

その目は力強く那珂を射抜く。

タンカー護衛任務へと赴き、帰投する度に提督は波止場で待っていた。

嬉しいと思う反面、少し情けない気持ちちが六駆にはあった。

こんな任務、こなせて当たり前なのに。

それでも無事な姿を見せる度に本当に嬉しそうに喜ぶ提督。

嬉しいけれど、誇らしいけれど。

「じゃあ……証明しよっか」

私達は大丈夫、あなたに守られているだけの艦娘じゃないと。

「私達にしかできないことっ！　行くよっ皆っ！　フラワーズ、出撃っ！」

「了解っ！」

あなたの力であり盾。

そんな一人前のレディになったのだということを証明するため、思いつきり波をかき分け出撃した。

「勝手は、榛名がつ！　許しませんっ!!」

一際大きな砲撃音を轟かせながら榛名は戦場を舞っていた。

榛名率いる横須賀第二艦隊が任された任務は、金剛率いる横須賀第一艦隊を無傷で最奥へと導くこと。

本来墓場鎮守府が道を切り拓き、海域中頃までの制海権を得てから訪れたはずの戦い。

「くっ……！　霧島っ！　大丈夫ですかっ!?!」

「私は大丈夫ですっ！　それよりも……」

霧島が送る視線の先。

そこには既に中破してしまった霞と神通の姿がある。

「こんなんじゃない……霞は沈まないわっ！ 冗談じゃないったらっ！」

「まだ、まだ……もう一撃くらい、いけますっ！」

残る鳥海、翔鶴いずれも小破。

かくいう榛名、霧島も損傷が全くゼロとは言えなかった。

「なん、で……！」

「他鎮守府は一体何をやってるのですかっ！ これじゃあ……！」

翔鶴は未だ冷静になれず、鳥海もまた苛立ちを隠せない。

なぜ既に突破したはずの海路に深海棲艦がいて榛名達の行く手を阻むのか。

それは両翼に展開する他鎮守府の戦力が想定以上に機能していないからだっただった。

出撃はされた、確かに。

それでも敵が強すぎるのだ、両翼で留められない程に。

事実、少しずつだが他鎮守府の戦力は撤退の様相を見せ始めている。

決戦は横須賀と墓場鎮守府に任せ、戦力を温存せよという命令が飛ばされていたためだ。

だからこそ倒さなくてもいい、その場で相手をしておくだけでよかったはずの任務、それさえ許されなかった。

そしてそれを榛名達……横須賀鎮守府、墓場鎮守府の面々は知る由もない。

「くうっ！ そこですっ！」

榛名の主砲が深海棲艦を捉える。

砲弾が直撃した戦艦ル級は海へと沈んでいく。

「もう、来ないで……！」

損傷が激しい理由は、榛名達横須賀第二艦隊の練度が低いからという理由ではない。

今もそれを証明した、決して深海棲艦に劣っていない。

「つく！ 敵機見ゆ！ 新手ですっ！」

撃沈した、それは何隻目か。

翔鶴が祈るように零した願いを嘲笑い、鳥海の悔しげな言葉とともに新たな深海棲艦の艦隊が顔を覗かせた。

終わりの見えない増援。

両翼が機能せず、徐々に中央へと向かってくる戦力。

肉体的にはもちろん、精神的にも追い詰められていく第二艦隊。

「あの方達だって……っ！……っ！ここを突破したんだからっ！」

墓場鎮守府の第二艦隊は見事突破した。

予め配置されていた強力な敵艦隊を、だ。

自分たちと似たような作戦だった。

第一艦隊の力を温存し、決戦に備える。その露払いが第二艦隊。

「そうですっ！……こんな所で負けていられませんっ！」

榛名の悔しげな声に霧島が奮起する。

そう、榛名は悔しかった。

似たような作戦を完遂した墓場鎮守府の第二艦隊をすごいと思った。

単にその強さをそう思っただけじゃない。

後ろに続いていった第一艦隊の目に宿っていたのは信頼、必ず自分たちを戦場へと導いてくれるという絶対的な信頼。

大淀が中破した時ですらそれは変わらなかった、絶対に沈まないと思わされた。

そんな強く憧れてやまない艦隊に対して自分はどうかだ。

後方から送られてくる金剛の、第一艦隊の心配気な視線。今にも援護に出てきそうな雰囲気。

「こんなの……認めませんっ！」

だから奮起した。

ここで力を示して要らぬ心配だと言い切りたかった。

そうして流石は榛名だと言って欲しかった。

だが、不意に悪魔が滑り込む。

——ダレニ？

「あつ——」

この作戦は、この作戦が終われば。そんなセリフを言ってくれる者は――

「霞っ!!」

「っ!」

思考を、動きを鈍らせたその悪魔。

悪魔が作った隙を戦艦ル級の砲撃が付き、中破した霞に牙を突き立てようと襲い来る。

「私は……っ! 借りも返せないままっ……!」

牙が霞を食い破ろうとした、その時。

「ぼーっとしないのっ!」

「!」

その腕を力強く引かれた。

「あ、あんた!」

「ふう……まったくっ! それだから半人前って言ったのよっ!」

ぶんすかっ! と怒る暁の手によって。

「これで貸し二つ目だね」

「ひ、響さん……でしたか? 今のは、一体……?」

「はあいつ! 横須賀鎮守府第二艦隊の皆さんっ! お待たせっ!

フラワーズやってきましたっ! もう大丈夫だよっ!」

呆気に取られたままの第二艦隊を尻目に、ニコニコ笑顔な那珂が続ける。

「とは言うものの私達も急いでるんだよ。だからライブはまた今度ねっ!」

「な、那珂ちゃん! あなた達は一体……」

何をしに来たのかと続く言葉は魚雷の爆破音と砲撃音でかき消された。

霞へと砲撃した戦艦ル級へと放たれた、暁と響の魚雷、追い打ちかける雷と電の砲撃。

その一斉攻撃を身に浴びせられたル級は大破寸前の状態へ陥ってしまう。

「ありやりや、しつこいファンは嫌われるよー?」

言いながらトドメの一撃を放ったのは那珂。

放たれた主砲の砲撃は見事にル級へと吸い込まれ、海へと沈む。

「でも最初的那珂ちゃんの魚雷が当たっていけばしつこくなかったと思うわっ！」

「そ、それは言っちゃ駄目なのですっ！」

ル級へと放たれた魚雷は三人分。そのうち那珂の魚雷だけが外れていた。

「て、てへっ！」

誤魔化すように笑う那珂。

決して上手な砲撃でも魚雷発射でもなかった。練度から見れば榛名達のほうが格上だと感じられるものだった。

それでも結果オーライと言わざるを得ない那珂のスマイル。

「そ、それよりもっ！」

「榛名さん」

作戦の変更があったのかと那珂へ詰め寄る霧島を余所に、旗艦である榛名へと真面目な顔を向ける那珂。

「ここに、雷ちゃんと電ちゃんを預けていくよ。それで何とか持ちこたえて欲しいな」

「っ！」

前線への道筋を確保する重要性は言うまでもない。

だが、この場に駆逐艦二隻を残して何になるというのか。

疑問が榛名の口から出る寸前で止まったのは、それで勝てる、持ちこたえられると確信しているような那珂の顔。

そして、その通りだ任せなさいと言わんばかりの表情を浮かべた雷と電の姿。

「私達は確かに砲撃も魚雷もまだまだ下手っぴ。今ル級を撃破したのだからだつてまぐれだよ？ でもね？」

疑問を察したように那珂は言う。

それでも心配するなと那珂は言う。

「誰かを……何かを守る事だけは、できるから」

それが第三艦隊、本当の役目。

撃沈、撃破を目的とした出撃でもなければ輸送任務でもない。ただ、何かを守ることにだけに特化した艦隊。

その技術を以て暁は霞を庇ったのだ、護衛したのだ。

「安心してっ！ 皆は攻撃に集中してくれていいのよっ！」

「……はい、言いたいことはあるんですけど、司令官が見てる前では誰も沈めない。それが最優先任務なのです」

息を呑むのは第二艦隊。

榛名も、霧島も、翔鶴も、神通も、鳥海も……霞でさえも。

全員が圧倒された。

誰も沈めないと言っていた、そう覚悟をしていると言っていたモノに圧倒された。

「よっし！ それじゃ暁ちゃん！ 響ちゃん！ 行くよっ！」

「了解っ！」

もう言葉は無いと振り向きもせず先をゆく那珂達。

その背中は信じるという文字が書いてあるように思える。

「そんなんじや駄目よっ！」

呆然と見送る第二艦隊へ雷が言った。

言葉通りそんな状態じゃ駄目だと活を入れた。

「そうなのです、まだ戦いは終わってないのです。気を抜いてる場合じゃないのですよ？ ねえ、霞ちゃん？」

「ぐっ、ぬぬぬっ！ ふんっ！ そんな事言われなくてもわかってるわっ！ ガンガン行ってやるわよっ！ あんた達こそしっかりしなさいよ！」

からかうように水を向けられた霞は顔を赤らめいつもの調子に戻る。

その様子を見て、我に返っていく第二艦隊達。

「神通さん……よね？ 他に危ない人が出ない限り私はあなたにつくわっ！ よろしくねっ！」

「……はいっ！ よろしくおねがいますっ！」

「それと、榛名さん」

「は、はい」

一人未だ呆けている榛名へと雷は胸を張り、自信ありげに言う。

「私達への指示は要らないわっ！ 損傷させてはいけないなんて考えないでねっ！」

「はい、いつもどおりの六人で思いっきりやってほしいのです」

榛名は。

「はいっ！ ありがとうございますっ！ よろしくおねがいしますねっ！」

新たに憧れを見つけた。

この小さくも頼もしい二人は言外に言ってるのだ。

あなた達を沈ませないし、私達も沈まないからと。

—— 本当に、墓場鎮守府は……！

何故か湧き上がりそうになる涙。理由はわからない、理解できない。

ただ、思うのだ。

「っ！ 敵機見ゆ!! 今度は艦隊で来ますっ！」

「はいっ！ 榛名、全力で参りますっ！」

強く蓋をせざるを得なかった、金剛を犠牲にしたくないという想い。

それを、諦めなくて良いのかも知れないと。

仲間を助けるなんて当たり前。

そして頼まれたのならば。

「全力で応えるのがレディよっ！」

「ウラー！ その通りっ！」

戦意を漲らせる暁と響に力を分けてもらいながら、強がっている自分を奮い立たせる。

自覚していた。

第三艦隊旗艦として振る舞う、頼りがいがあつて強い那珂を演じている自分という存在を。

本来の自分はまだにも頼りなくて、か細い。

それでもそんな自分が唯一誇りに思っている事がある。

——私は提督のファンで、あの人も私のファン。
ならば応えよう、あの人が自分のファンでいてくれるために。
それが、那珂の根源。

揺るぎなく触れれば温かい立脚点。

触れてしまえば折れそうな自分を支える強い点。

「見えたっ!! 暁ちゃん! 響ちゃん!」

その点を曇らせたくない、ずっとずっとファンであり、アイドルでいて欲しい。

だから戦う。

今この時においては微かに見える第一艦隊の皆を窮地から救うために。

「了解っ! 行くわよっ! 響っ!!」

「もちろんっ!」

那珂に合わせていた速度を変え、先行する二人。

どういった窮地で、今一番に守らなければならないのは誰か。

そんな訓練は山ほどやった、タンカー護衛で実践もした。

先の霞を庇った時もそうだ、何を指示したわけでもなく暁は一番に

助けなければならぬ者を助けた。

だから大丈夫。

そう思った。

しかし。

「っ!」

大きな爆音が響いた。

同時に、先行していた暁と響が足を止める。

「どうしたのっ!」

「あ……あ……」

「う、そ……」

震える視線を那珂が追えばそこには立ち上る爆炎。

「み、皆はっ!」

薄々感じている。

爆煙を口元を歪めながら嗤う空母棲鬼の姿を見て。

それでも信じられなかった、認めたくなかった。
だが、それでも。

「……あそ、こ」

暁の震える指先が示す先は揺らめく煙の中。

煙の外には海へと座り込み、信じられないと言った表情を浮かべて
いる古鷹と加古。

「うそ、だよ」

口から出る言葉。

分かっている、痛いくらいにわかっている。
すなわち。

「嘘だああああああ!!」

守るはずだった、守ることができはずだった。

だと言うのに現実、目の前の光景は残酷で。

——間に合わなかった。

叫んだ言葉とは裏腹に、何処か冷静な自分がそう告げた。

沈まぬ意思があるようです

熱いはずだ。

空母棲鬼の爆撃を、攻撃機の発する魚雷をその身に受けたのなら。冷たいはずだ。

攻撃を受け、海に倒れたのなら。

あるいはもう既に何を感じることも無くなってしまったのか。

不思議に思った天龍は立ち上がり、周囲を見渡す。

「(っ)は……っ？」

海で戦っていたはずだ、仲間たちと共に。

それが何故唯一人暗闇の中に立っているのか。

負けるつもりはなかった。それでもあと一手足りなかった。

あと一手。

あと一手さえあれば、目論見通り空母棲鬼を中破させることができ
たと思っっている天龍。

だが、叶わなかった。

損傷は確かに与えた、しかし艦載機発艦を止められなかった。

「ちくしょう……」

何が沈まないか、何が天龍様か。

想いの力なんてものは幻想で、只々強大な敵に対して怯える負け犬
の遠吠え。

どれ程力をつけたと思っても、嘲笑うかのようにさらなる力に押し
つぶされる。

悔しいと思った。

提督と培ってきた力を、絆を上回られたことを。

「ちくしょうっ!!」

かつて自分の無力を嘆いたことは何度だつてある。

大破してばかりの自分、だから出撃メンバーから外された自分。

そして、ただの遠征で大破してしまった自分。

それを遥かに上回る悔しさへと耐えることができず、口から出る音
を止めることが出来ない。

「なんでっ！　なんでオレはっ！　くそっ！　くそっ！！」
自身を嘆き続ける天龍。

そんな天龍に。

「よう、何を悔しがってんだ？」

「っ!？」

小さな妖精が声をかけた。

「良いじゃねえか、オマエはよくやったよ。旧式軽巡洋艦のくせにさ、あんな化物相手によくやった。それでいいじゃねえか」

「良いわけあるかっ!!　オレは……オレはっ!!」

天龍を何倍も小さくしたような妖精。

笑ってよくやった、満足している、誇っていいと語る妖精。

なまじ自分に似ている妖精だからか、その言葉に反発する心を抑えきれない。

「アイツの想いを背負って負けたんだっ!!　アイツの力に、刃になれなかつたっ!!　それで……それで良いわけがねえっ!!」

何よりも悔しかったその想い。

天龍が抱えた一振りの希望という名の刃。

それは提督の意思を貫くためのモノ。

その刃が折れてしまった、折られてしまったことを認められない。「無理だつて。わっかんねえかな?　どれだけ頑張ろうが天井つてのはあるんだぜ?　オマエは強くなった、それでも尚届かねえ壁……それが空母棲鬼つてヤツだ」

「知るかっ!　オレが弱いなんてわかってるっ!　だけどな……だけどっ!」

冷静な自分が言う。

目の前にいる妖精が言っていることに間違いはない。

どれだけ力をつけようとも、新しい力を、意思を手に入れようとも破れない壁はある。

「認めねえ……認められねえ!　アイツの意思が何かに負けるなんてこと……認められる訳がねえっ!!」

吠える。

負け犬が、負けて尚沈んでいないと吠え叫ぶ。
だから。

「はっ！……羨ましいよ、オマエが」
「ああ!？」

そつと天龍の手に触れた妖精。

先程までの天龍を馬鹿にしたような雰囲気はまるで無く、心底羨ましいと思っっている。

負けたことは認めている。

だが、沈みつつある自分のことはまるつきり認めていない。

「認められねえか」

「……ああ」

「勝ちてえか」

「ああ」

——強く、なりてえか？

最後にポツリと零すように言った妖精。

「ああっ！」

なる、ならねばならぬと天龍は強く返事をした。

そうして。

「覚えとけよ？ その気持ち。数多のオレが想って貰けなかったモノ。……オマエに託してやる」

「わっ!? 夕立つぽい!？」

「そう、夕立つぽい」

目を丸くする夕立の前に飛ぶ妖精はニコニコと楽しげに笑っている。

「夕立、頑張ったっぽい！」

「え？ 何を、かしら?」

唐突に言われた言葉に首を傾げてしまう夕立。

「あんな強そうな深海棲艦に立ち向かったっ！」

「っ！ そうっ！ 空母棲鬼は!？」

慌てて周りを見渡せば暗闇が広がっている。

そのことに先程以上に首を傾げてしまう。

「(っ)……どこかしら？」

「どこでもいいっばい！　夕立は頑張ったっ！　もう休んだほうがいいっばい！」

きやつきやとはしやぎながら妖精は言う。

その姿はまるで夕立の健闘を称えるかのように。

そしてその言葉に夕立は嫌悪感を浮かべる。

「休めないっばい！　夕立は……まだまだ戦えるっばい！　勝つまで……ハンモックを張ってでも戦うよっ!!」

自分は海で戦えない提督の代わりなのだ、分身なのだ。

目指した力が提督ならば、提督が振るう力が自分なのだ。

そしてそれは勝利するまで振るわれる、提督が笑顔でよくやったと飛び込む夕立を受け止め、褒めてくれるまで続くものなのだ。

「夕立っ！　まだ勝ってないっばい！　提督さんに頭、撫でてもらってない！」

純粹過ぎるその想い。

「……眩しいなあ」

その眩しさに目を眩ませる妖精。

「でも、夕立は負けたの。ここは海、海の意味の中っばい。夕立は沈むの、これから暗い昏い海へ」

眩ませながらも夕立にあるまじき顔を浮かべながら妖精はそう告げる。

「嫌っばいー！」

ぷいっと顔を背けながらいとも簡単に拒否する夕立の頬は膨らんでいた。

認めなかった、自身の敗北を。

認められなかった、提督の敗北を。

「認めるっばい。それだけ提督の事を想えるなら、私達と同じになれるっばい。そうして艦娘を応援しましょう？」

「嫌っ！」

断定した、断言した。

沈めない、沈むことを拒否した。

「……はあ、私ながらすごく頑固っぽい……」

やれやれと頭を抱える妖精。

だが、その顔には笑みが一つ。

「仮にもう一度戦つても……同じになるっぽい。それでも、戦うの？」

「もちろんっ！ 何度でも、突撃するっぽい！」

まさにカミカゼ少女。

沈まない、沈んでも突撃する、戦うことを止めないと夕立は言う。

「私は、提督さんの力だからっ！ 提督さんは負けないっ！ だから

夕立も……負けないっっぽい！」

既に負けたという事実を忘れて……いや、そんな事あるはずが

ないと前を向き続ける。

だから。

「今のままじゃあ同じっぽい。私、もう一回これをやるのは嫌っぽい」

「っぽい？」

妖精が、そつと夕立の指を掴む。

「強くなりたい？」

「うんっ！」

「勝ちたい？」

「うんっ！」

——じゃあ一緒に戦ってあげるっぽい。

ニッコリと笑いながら妖精は言つて。

「うんっ！ 一緒に素敵なパーティーしましょっ！」

やっぱり夕立も笑顔で返事をした。

「夕立が出来なかったこと……あなたにお願いするっぽい」

「何処に行くんだい？」

「戦いに」

妖精に背を向け暗闇の中を歩く時雨。

その背を飛び追う妖精。

「キミも僕ならわかるでしょ？ もう戦いは終わったんだよ？」

「キミも僕ならわかるでしょ？ もう戦いは終わったんだよ？」

「そうだね、僕は負けたんだろうね」

ここが何処かはわからない。

だが、敗北した結果ここにいることはわかる。

故にここはそういう場所なんだろうと時雨は思う。

ならばこそ一刻も早く戻らなければならぬ。

時雨が沈む。

提督の命であると定めた自分の死とは、提督が提督であることの死に相違ないのである。

「僕が負けても提督は負けない。だから僕は戻るんだよ」

「……意味がよく、わからないな」

頭を抱える妖精へと背中越しに笑う時雨。

何よりも。

「提督を嘘つきにさせたくないから……そう言えばわかるかな？」

「ああ、うん。そういうのならわかる、かな」

提督と結んだ約束。

沈めない、沈まない。

今辛うじてそうなっていないと時雨は理解している。

ならば浮かばなければならぬ。

その約束は何よりも重く、大切に愛しいものだから。

「そうしてまた負けるのかい？」

「っ……」

浮かぼうとする足を止める一言。

それも、分かっていた。

一手足りない。

あの時感じたその思い、時雨だけではなく全員がそう感じた思い。

蓋をして意思だけで進もうとした時雨が立ち止まる。

「……なら、どうすれば良いのさ」

「見送ろうよ、かつてから今までそうしたように。多くの艦を艦娘を見送ったよね？ ここに来たってことはそういうことだよ？」

時雨の記憶。

艦としての記憶、艦娘としての記憶。

脳裏に浮かんだ、無念を心に抱いて沈んでいった仲間たち。

「後を託すことができるって幸せだよ？ そう思わないかな？ 思っ
てなかった？」

「……」

時雨は目を閉じて想う。

それは果たして思ったことだろうか。

「少し違うし、今はもつと違うかな」

「違う？」

とても強い何かが現れて、それに託したいとは思っていた。

そうすれば見送ることも、見送られることもないだろうと。

だが。

「僕はそうなりたいと思ったんだよ。託されることも託すこともない
存在になりたいって」

「……」

それはどういった存在か。

「誰も沈む必要がないくらい強く。重い約束を軽く、当たり前に出て
るほど強い存在に」

嘘を誠になんかじゃあない。

誠を当たり前にする。

沈まない、沈めないというのは約束である必要は無いと。

生きることが当たり前前で、出撃すれば必ず帰ってくるのが当たり
前。

「僕は、提督の命になりたい。提督が提督の思う当たり前通りに生き
ていられるように」

「……なるほど、ね」

「あつ！ もちろん提督の命っていうか、提督命も当たり前なんだけ
どね？ もうさ、提督無しだなんてありえないっていうか——」

急に妖精へと振り向き頬に手をあて身を悶えさせ始める時雨に、冷
たい目を向ける妖精。

目とは裏腹に宿った思いは。

「はあ、わかった、わかったよ。僕の負け、だからそのクネクネするの

をやめてよ。かつて知った身体でそういう事されるとなんだか辛いから」

「——へっ!? あ、ああうん。ごめんね?」

我に返った時雨にため息を一つ。

そうして妖精は表情を引き締め、最後の確認をする。

「見送りたい?」

「ううん」

「見送られたい?」

「ううん」

——じゃあ、生きようか。

呆れたように妖精は笑う。

「うんっ!」

知ったことか、当たり前だと時雨も笑う。

「全く、僕は惚気を聞きに来たわけじゃないのにね」

守りたいと思っただのはいつだったか。

提督に八つ当たりをした時か、それともバケツを掲げて海に出てきた時か。

大きな時を経た訳ではないのにも関わらず、その立脚点を懐かしむ

龍田。

「何でかなあ? どう思う?」

「知らないわ。頭に爆撃が直撃しちゃったからじゃない?」

その答えは既に出ている。

だが、龍田は妖精に問う。

あててみて欲しいと笑って問う。

「はい、間違いです。あなた、私なのにわからないんだ?」

「……どうしよう。とつても腹が立つな—?」

妖精も気づいた。

そう、これは惚気だ。

何が悲しくて自分の惚気を聞かなければならないのか。

目の前に居る龍田は……いや、龍田も負けてなお提督を想う艦娘

だ。

だからこれから自分と同じように妖精となり、鎮守府の力になろうとしている存在だ。

だと言うのに。

「答えはねえ?」

「……好きになつたきつかけなんて聞きたくないわ……」

まるつきりそうなる気配がない。

どういう事だと妖精は頭を抱える。

この艦娘は負けた、すなわち沈みつつある者だ。

だと言うのに、沈まない。

沈む寸前にも関わらず、まだ当たり前のように生きている。

「あなた、負けたのわかつてる? 沈んでるのよ?」

「知ってるよ? だけど、私が提督の前で沈むわけないじゃない」

あっけらかんと龍田は言う。

本当に爆撃で頭がおかしくなったのだろうかと少し心配になりつつある妖精。

その小さな手を龍田の額に添える。

「熱は……無いわね?」

「失礼しちやいます」

可愛らしく怒る振りをする龍田へとため息をつく妖精。

同じ龍田であつたはずなのに、目の前にいる龍田の事が全く理解できな

「きつかけは、大事だよ? でもね?」

「あ、はあ……」

三白眼で言葉の続きを待つことにした妖精。

諦めた、こいつはもう何があつても言わなきや話が進まない。

「それが当たり前過ぎて、その当たり前を守るためなら、なんでもできちゃうって思えるの」

「……」

至極、真面目な顔をして龍田は言い切った。

言っている。仮に沈んでいる最中であつても這い上がることが出

来ると。

「あの人にとって、私達が生きてるのが当たり前。無事に帰ってくるのが当たり前。ならそれを守るわ」

「っ！ それが出来なかったから今こうしているのでしょう!？」
激昂するは妖精。

かつての自分でさえ思っていた、提督や仲間のため。そのためなら沈んでも沈んでやらないと。

そしてそれが叶わなかったからこそこうして妖精になった。

故に目の前の龍田を受け入れられない。

「守るって言うなら負けなくてよっ！ 沈みそうにならないでよっ！ 私に……出来なかった私にそんな姿でそんな言葉を言わないでっ！」

妖精は吠える。

その姿はかつて龍田が提督に八つ当たりしたときのものに似ている。

だから気づいた。

龍田が今するべきことに気づいた。

「だったら、ね?」

「何よっ!？」

——アイツ、一緒に倒さない?

暗闇に包まれている世界の先を指差す龍田。

その怒りも、悔しさも。

共にぶつけよう、八つ当たりをしよう誘う。

「それとも……自信、ないかなー? 負けちゃったあなたじゃ、無理かなあ?」

「なっ——」

あまりに拙い煽りの言葉。

されども必死に考えて言う言葉。

提督のように上手く煽れたわけじゃないのは理解している。

それでも、この言葉が妖精に必要なだと理解できた。

かつての自分がそうだったように。

「ふざけないで……」

「ふざけてないよー？」

「あなたも沈んだくせに……」

「沈まないよー？」

——だったら、証明して見せて。

浮かべた涙の理由は何だろう。

「もちろん。……」一緒に、ね？」

龍田は妖精の涙を拭い笑う。

「見せてみなさい、あなたが当たり前前に守る姿を」

負けた事を理解した。

だが全員が負けてなお沈むことを認めず拒否し、這い立ち上がった。

そして揃って口にする。

「天龍——」

「夕立——」

「時雨——」

「龍田——」

「——改」

空母棲鬼と戦うようです ②

あと一歩、あと一手だった。

天龍は間違いない大破寸前の身で空母棲鬼が操る艦載機を捌ききった。

向けられた攻撃機が放つ魚雷を躲し、轟沈しなかった。

天龍と別れた龍田達もまた爆撃機を凌いだ。

それぞれがダメージを受け中破状態となつてなお、空母棲鬼へと己の武器を突き立てる。

だと言うのに、空母棲鬼が負った損傷は小破。

艦載機発着陸不可能と思われる中破には届かなかった。

敗北の香りが漂い始めた中、諦めなかった、なお二回目の攻撃に移ろうとした。

轟沈一步手前の天龍を庇うべく陣形を整えようとした。

そしてそこを狙われた。

もしも。

もしも、海路を確保している榛名達の下に深海棲艦が現れなかったら。

もしも、那珂率いる第三艦隊がほんの僅かでももう少し早く出撃していたら。

もしも、この場に空母棲鬼が現れなかったら。

確実に何事もなく突破していただろう戦闘。

幻想に思いを馳せてしまいたくなる気持ちを抑え、歯を食いしばるのは古鷹。

「……加古っ！」

「っ……わかつてる！」

重巡洋艦であるということが幸いしたのか、それとも別の幸運か。

大破状態になりながらも爆炎から投げ出されるも、辛うじて無事な二人の目に宿る戦意は衰えず。

だがその戦意は少しだけ間違っていた。

本来の彼女達であれば退くことを考えていた場面。

那珂率いる第三艦隊の声がした、ならば護衛を依頼し、そのまま一旦提督の下へと帰投するべきのはず。

冷静では無かった。

ありえないと思っていたことが起きた、あるいは想いが強すぎて目が眩んでいたのかも知れない。

だから立ち向かおうとする。

敵討ちか弔い合戦か。

提督が望むわけがない戦いを挑もうとしたその時。

——改。

目の前で立ち昇る爆炎からそんな声が聞こえた気がした。

瞬間。

「わっ!?!」

爆炎が霧散した、水飛沫が生まれた突風と共に爆炎を振り払った。

そしてその中心に、空母棲鬼が放った艦載機の攻撃を受けてしまった第一艦隊の面々が。

無傷で悠然と立っていた。

「てん、りゅうさん……?」

「おう、天龍様だぜ?」

何時も通りの笑顔だった、それに続いて少し恥ずかしそうに龍田も夕立も時雨も笑う。

だがそれもほんの間。

すぐに表情を引き締め直した天龍は指示を飛ばす。

「古鷹、加古は第三艦隊と合流して高速修復! その後、増援の足止めを頼むっ!」

「っ! 了解!」

二人は同時に返事をする。

言っている意味を瞬時に理解した。

あとは任せろ。

そう言ったのだ天龍は。

率いる面々も続いて頷いた。

先程までのダメージは? 何故無傷で? そもそも勝てるのか?

それら全ての疑問を無理やり棚に上げられた。

そしてそれを信じる事が出来た、故にその場を後にして状況がさっぱり理解できていないであろう第三艦隊へと合流すべく走っていった。

「……アリ、エナイ」

「あー……おう、まあ気持ちはわかるさ」

狂気とも言うべき感情に輝かせていた目を丸くしている空母棲鬼に、天龍は苦笑い交じりで話す。

「だがアンタは言つてたろ？ 何度でも繰り返すつてよ」

「ッ！ ソウ、クリカエス……ナンドデモ……ッ！」

おかげとも言うべきか、そうして我に返る空母棲鬼。

その隙について攻撃を仕掛ければいいのにも関わらず天龍は笑みの種類を変える。

「オレ達も同じさ、何度でも立ち上がってやる。アンタが何に怒ってるのかはわかんねえ……けどよ！」

勝ちを選ぶ余裕なんて無い。

それでもそうしなければならぬと何故か理解できた。

空母棲鬼。

この相手には真正面からぶつかり合わなければならないと心で理解している。

「アンタの怒りを沈めてやるっ！ オレ達はそれを乗り越えるっ！生きて……提督の所に帰ってみせるっ!!」

「シズメ……シズメエエエエエエ!!」

艦載機再発艦。

それに……否、海の怒りへと立ち向かった。

——アリエナイ。

それは何度目になる心の眩きか。

沈めたと思った艦娘が無傷で立ち上がったことはもちろんそうだが何よりも。

「ここは譲れないっ！ 譲れる訳がないっ！」

「悪夢もパーティも……始まったばかりっぽい！」

もう二度と沈められないと思えてしまう。

いや、その言葉は正確ではなく、二度と勝てないと確信出来た。現実的に考えてもそれは間違いではなかった。

もとより予め損傷が与えられていた事で釣り合っていた数と戦力の差。

故に空母棲鬼は六隻を相手に勝利寸前までたどり着けていた。

それがどういう事か。

唯一空母棲鬼の艦載機に対抗出来る天龍が損傷ゼロで再び向かってくる上、同じように無傷の随伴艦。

そのどれもが先程までの動きをより洗練された状態、加えて先程まで無かったあと一手を重ねてくる。

今もそうだ。

いつの間に時雨は魚雷を二度発射した？

いつの間に夕立は主砲を二基発射した？

「任せて……！」

いつの間に龍田は魚雷を装備していた？

理解できない。

ただただ一方的とも言える程に損傷を重ねていく自分の姿も。

この先にある敗北という未来も。

「ミトメ、ナイッ！ シズメ……シズメエ!!」

「おっと……おっせえなあ？ ちゃっちやとやれよ！ こんな風に、

よっ！」

中破に至る瞬間飛ばした艦載機は見事に天龍の対空射撃で撃墜される。

そう、いつの間にか装備されていた二基の対空砲塔から放たれる射撃によって。

撃墜された艦載機。

よしんば、されていなくとももう空母棲鬼に戻る事はできない。

空母棲鬼、大破。

もう、艦載機は飛ばせない。

「これでアンタはもう何も出来ねえ」

「……」

遠くで第三艦隊が増援の相手をしている光景が見える。

そして、ここでは囲まれ主砲を突きつけられている空母棲鬼の姿がある。

静かに。

先程までの砲撃音飛び交う戦場であったことが嘘のように訪れた静寂。

完全勝利まで、あと一撃。

「ククク……カッタト、オワツタトオモツテルノカ……？ カワイイ、ナア……？」

「……だろう？ これだったら提督の隣で胸を張れるかもな」

空母棲鬼の言葉に顔をしかめながらも軽口を返す天龍。

勝敗は決した、天龍達が構える主砲の引き金を引けばこれで南一号作戦は終わる。

そのはずだった。

「天龍ちゃん！」

「っ!? どうした!? 那珂!?」

鳴り響く天龍の無線。

応答してみれば切羽詰まったような那珂の声が聞こえてくる。

「新手っ! どうしよう! すっごく強そう……っ! きゃあ!」

「那珂っ!? ちいっ! 一旦退けっ! すぐに行くっ!」

「アハハハハ! ソウ、ナンドデモクリカエスッ! ワタシガ、ワタシ

タチガ……ウミガツ! ミトメナイカギリッ!」

負けてなお負けていないと吠える空母棲鬼。

全てを呪い尽くすかのような高笑いをあげて……。

「……なら、認めさせるだけだっ!」

それを断末魔と変えた。

「天龍ちゃん!」

「わかつてる!」

急ぎ第一艦隊へと向かってくる那珂と合流する。

小破姿の那珂達第三艦隊と古鷹に加古。
焦ったような表情と共に、出た言葉は……。

「おんなじ……ううん、空母棲鬼より……すごく強そうだよっ!」
空母棲姫が現れた事を示すものだった。

「馬鹿なっ!!」

集積所に建てられた簡易司令部。

送られてきた映像に驚き、両手を机へと叩きつけたのは長官。

「空母、棲姫……」

先程まで激情を吠えていた提督でさえ思わずモニタに視線を釘付けにしたまま呟いてしまう。

画面に映る空母棲姫は映像を捉える観測機に向かってニヤリと笑みを零した後。

「くっ！観測機がっ！」

その観測機が空母棲姫より発艦された戦闘機によって撃墜された。

「長官」

「……分かってます」

その中でも動揺せず、二文字に多くの意味を込めて長官に声をかけたのは大佐。

大きく深呼吸をした後、長官は無線を手に取る。

「榛名、戦況はどうだい？」

『はいっ！ 墓場鎮守府の援護もあり戦線維持できていますっ！ 榛名は……いいえ。皆、大丈夫ですっ！』

何処か少し声を弾ませながら榛名は答える。

その声は何処か緩みそうになる気を引き締め直して。

「それは良かった。その奮闘あって空母棲鬼は墓場鎮守府の艦隊が撃沈したよ」

『ほんとですかっ!! じゃあ……!』

「だが、空母棲姫が現れた……第二艦隊は戦線の維持に努め、金剛達第一艦隊が目標海域へたどり着くのを援護するように」

そう告げた長官の言葉は固い。

そしてその固さで榛名は弾ませた声を沈ませた。

『……了解、しました』

「頼んだよ」

無線が途切れ、そのまま長官は金剛の無線へと繋ぎ直す。

そうして進軍を指示する言葉の中に。

「——空母棲姫を、頼んだよ」

『オフコース！ お任せ下サイ！ 長官こそ、後のこと、それに妹達を

……頼みマシタヨー？』

提督にとつて聞き逃がせない言葉があった。

同時に長官は失敗したと表情に出した。

今、墓場鎮守府の提督がいる前でするべきやり取りではなかった

と、長官も気づいた。

「長官、今のはどういった意味ですか？」

「……っ。君が知る必要は無い」

一瞬の葛藤。

その後に苦渋の表情を浮かべながらも無線を長門へと繋いだ。

「長門、陸奥。指定のポイントへ出撃だ」

『……了解、した』

「長官っ!!」

問い詰めようとする提督に背を向け、存在を無視するかのよう指

示を出す長官。

提督の手が長官の持つ無線へと伸び……触れようとした瞬間。

「超遠距離から、高火力飽和射撃による空母棲鬼……いや、姫の撃沈。

そう、金剛を巻き込んだのな」

「なっ!？」

口を開いたのは大佐。

提督に対して隠し続けていた作戦を今この場で告げた理由がわからず、長官は大佐に驚きの視線を投げかける。

「幸い空母棲姫に砲は搭載されていない様子、艦娘は艀装展開時に海を走る力だけではなく、武器を扱うだけの大きな膂力を得ることができ。その力を以て物理的に空母棲姫を押さえ込み、遠距離からの狙

撃で金剛もろとも沈める。それが今から執り行う作戦だ」

「……意味……わかんねえ……!!」

呆然とする長官を余所に続けられた作戦内容。

言っている言葉の意味を理解できないといったように震える提督。

「大佐っ!! 何故彼に!!」

「貴様ももとより話すつもりだっただろう、そう。作戦が止まらない状況になれば」

「ぐっ……!!」

つかつかと大佐は歩みを提督に進める。

そして未だに震える提督の肩を掴み、諭すように言う。

「これが、軍人だ。成果のためには手段を選ばない、存在する命は全てが消耗品であり駒。納得しろ小僧、貴様の艦隊、艦娘に被害は出ん」

「納得……納得だつて……?」

はっとしたように我へと返った提督は。

「なっ!? 何を!?!」

「長門っ! 聞こえるかっ!? お前は納得してるのか!? 今からお前は仲間を撃とうとしてるんだぞ!? それでいいのか!?!」

『……』

長官が手に持つ、つながったままの無線を奪い取りその相手に向かって言う。

だが返ってくるのは電話線が切れたかのような静寂のみ。

「長門! 良いのか!?! お前はこれから一生! 仲間を沈めた艦娘として生きていくんだぞ! 答えろっ! 長門っ!!」

『納得しているわけがないっ!!』

必死に問いかける提督へと、ようやく返ってきたのは同じように必死に作戦へと従事しようとしている長門の声。

『我が砲は深海棲艦を撃破せしめるために存在しているっ! だが……だがっ! 私は、この長門はっ! あなたの艦娘達のように強くないっ!!』

「っっ!!」

『できるならそうするっ! 死地へと臨むなど本望っ! この命、使

えと言うなら幾らでもその覚悟があるっ！ それでも……それでもっ!!——』

その言葉が言い終える前に無線からごそごそという異音が発せられた。

そうして雑音が静まれば。

『貴方が、墓場鎮守府の提督ね？ こうしてお話できて光栄です。出来ればもつとゆっくり話していたのですが……時間も無いし、こういう事を言つて良いわけがないなんて知っているけど——』

——助けて、下さい。

何もせず仲間が沈む姿なんて見たくない。

自らの手で仲間を沈めるなんてしたくない。

艦でも、人でもなく。

一人の艦娘として零れた、狂おしいほど贅沢で綺麗なわがまま。

「陸奥」

『……はい』

だから提督はこう言った。

艦でも、人でもなく。

艦娘家族のわがままを認めるようにこういった。

「任せろ」

『……っ！ お願い……お願いだから……！ 金剛を……私達を……！』

「任せろって言った。安心してくれ……俺の目の前では、誰一人艦娘を沈めない」

そう言つて無線を切つた提督。

動きは迷いなく、確かな足取り。

「何処に行くと言うんだっ!? 落ち着きなさいっ!」

長官は慌てたように肩を掴み、引き止める。

だが、それに振り向くことすら無く振り払う。

「アンタ私が言ったこと忘れたの!？」

「羅針盤……」

同じく慌てたように羅針盤妖精が提督の行く手を阻む。

あの時の事を忘れたのかと叱咤する。

「覚えているさ、それこそ言われてから今までずっと忘れてねえし、半人前の俺が一人前になるための言葉だって思ってる」

「だったらっ！」

「だけどさつき俺は失敗したんだ!! あの瞬間……魚雷と爆撃があいつらの身を包んだ瞬間、確かに失敗した!俺は嘘つきになったんだ!」

あの瞬間、確かに提督は己の過ちを悟った。

もしも、海路を確保している榛名達の下に深海棲艦が現れなかったら。

もしも、那珂率いる第三艦隊がほんの僅かでももう少し早く出撃していたら。

もしも、この場に空母棲鬼が現れなかったら。

そんなイフの言い訳を頭に並べる前に悔やみきれない思いで押しつぶされ叫んだ。

「だから……! もう間違えない!! あんな奇跡はいらねえ! 何処までも俺は俺の意思を貫いてやるっ! 見せてやるよ、これが俺の虚勢の張り方でお前への答えだっ!」

今度は間違えない。

その意思と覚悟を持って羅針盤妖精を押しつけ歩みを進める提督。

「小僧」

「……」

だがそれを止めたのは声。

大佐が静かに鋭く発した音。

「わしとの約束は反故にする気か?」

「……いいえ、守るために行くんです」

背中越しのやり取り。

訪れる一瞬の間。

重たい空気。

「……一時間だ、それで全てを終わらせる。出来なければ作戦を執り行う」

「っ……ありがとうございますっ！」

「大佐っ!」

大佐の返事に驚き振り返る長官、提督は駆け出し既に離れていく。

「なあ、長官」

「くっ!? なんでしょうか!」

どうすれば良いのかと混乱する長官へと大佐は穏やかに言う。

「わしらは、軍人。兵器を扱い、兵を扱うことにかけては誰にも負けんという自負がある。だが……」

「……」

「兵器でも兵でも無い艦娘は……一体誰が一番上手く扱える、いや。誰が一番上手く共に戦えるのだろうか」

消えゆく提督の背中、その背中を頭をかきながら追う羅針盤妖精。

一人と一匹の背を目で追いながら、独り言のように呟く大佐。

「それが……彼だというのですか?」

「わからん。だが小僧は言った、ただただ共に戦う存在だと、共に海を往く者だと」

瞑目し、思い返すように、感じ入るように零し続ける大佐。

「賭けてみたくなった。賭けるだけの価値を感じた。そう、この作戦における最高の戦果とは、誰一人の轟沈者を出すことなく勝利を迎えることに変わりはないのだから」

「……」

見送った提督の姿は既に小型の船に乗り込んだ。

そしてその船へと寄り添うように集う艦娘、鳳翔と大淀。

「一時間だぞ、小僧。見せてみる、お前の戦いを」

勢いよく発進する船に向かって、軍人ならざる願いを祈った。

提督が戦うようです

「鳳翔!」

「お側に」

「大淀!」

「はいっ!」

補給が終わった様子の二人に声をかければ、すぐに返ってくる返事が頼もしい。

目が言ってる、なんでも言ってくれと。

そのことを心から嬉しいと思う。

失敗したばかりの俺なのに……微塵も揺るがない信頼を向けてくれることに。

「海に出るぞっ! 俺の命を頼んだっ!」

「了解っ!!」

我ながら適当かつ抽象的な命令だと思う。

それでも一瞬の間すらく返事をしてくれたことに、涙が出そう

だ。
「ちよつと! いい加減にっ!!」

「言っただろ? これが俺の虚勢の張り方だ!」

エンジンキーを回しながら、未だ止めようとしてくる妖精。

その気持は嬉しい、俺の身を案じていることがわかるから。

「アンタが行って何になるの!? 砲撃も雷撃も出来ないっ! ただの

いいのも良い所よ! 犬死して艦娘を泣かせたいの!」

「確かに何も出来ねえ! だがよ……だが!!」

だけど。

「一緒に……戦えるっ!!」

「っ!」

あいつらが知らないところで死ぬなんて嫌だ。

あいつらをただただ待つことしか出来ない俺なんて嫌だ。

怖い。

怖いさ、言う通り犬死することだって!

それでも、それでもだっ！

「なし崩しじゃない！ 状況に慌てただけでもない！ 俺の居場所に行くだけだっ！！」

居場所。

それは温かい鎮守府でも、砲撃飛び交う戦場でもなく。

艦娘あいつらの隣。

それが俺の居場所なんだからっ！

「ああ……もうっ！ バカは死ななきゃ治らないっ！ わかったわよっ！ 一回死んでらっしゃいなっ！！」

「ありがとう！！」

そうして船の舵に取り付く妖精。

ああそうだっ！ バカってのはバカに気づけねえ！ そりゃ死ぬくらいしか治す方法がないのかも知れねえ！

だったら俺のバカは一生治せねえんだよっ！ 死ぬ気はまっぴら無いからなっ！

「準備完了ですっ！」

大淀が船に高速修復材の詰まったドラム缶を搭載してくれた。

ああ、流石よくわかってる。それでこそ、だ。

ならば後は……っ！

「行くぞ………抜錨だっ！！」

「了解っ！」

スロットル全開で征くだけだ！

「横須賀第二艦隊見ゆ！ 戦闘中です！！」

「鳳翔っ！！」

「お任せ下さいっ！」

偵察機からの情報を伝えてくれる大淀。

前方はもちろん、この船の周囲に深海棲艦が見えないかも気を配りながら。

そんな中鳳翔は弓を番える。

まだ見えないはずの敵艦の姿を見ようと目を細めている姿はこん

な時じやなかったら間違いなく見惚れてるだろうな。

「風向き、よし。航空部隊、発艦！」

妖精が宿っているだろうその矢が放たれる。

そして風切り音を響かせながら飛ぶ矢がその姿を変えた。

——直上、急降下。

爆撃機へと変化した矢は獲物に向かってその機体を降ろして……。

「よしっ！」

「深海棲艦の撃沈を確認っ！ 周囲敵影見えっ！ 横須賀第二艦隊

も無事ですっ！」

「よくやったっ！ 流石だ鳳翔!!」

思わず親指を上げて鳳翔へと向けてみれば、照れたように小さく頭を下げる鳳翔。可愛いっ!!

……ああもうっ！ そんな事思ってる場合じゃねえっつのに俺っつてやつはっ!!

「敵影なしなら……大淀！ 鳳翔！ 先行して味方艦隊の損傷を確認っ！ 中破以上の損傷を受けている艦娘にはドラム缶だ！ そのまま周囲警戒に努めろっ！」

「了解ですっ！」

二人が勢いよく走っていくのを見送る。

ふう……一旦落ち着け、俺。

さて、どうするか。

既に横須賀第二艦隊へ援護に入っている雷と電をこの船につけて先を行けばまず間違いなく無事にたどり着けるだろう。

だが、それほどまでの戦力を俺につけて良いのか、それが問題だ。合流する前までの戦い振りを見るに、援護は絶対に必要と言える。

ましてや両翼の動き、どんどここに向かってくる深海棲艦の数は増えている事を考えれば……。

「ちよっと、今更怖気づいたの？」

「……はっ！ 馬鹿言っつてんじゃねえ！」

ったく、羅針盤状態でんなこと言っつてんじゃねえよ。

ともあれ、横須賀第二艦隊だけじゃあこの戦いが終わるまで持ちこ

たえるのは難しいだろう。

持ちこたえるだけならば六駆だけで十分かも知れない、だが……。
後、一時間と言われたタイムリミット。

時計を見てみれば残り四十五分。

その時間以内に終わらせることが出来たとしても持ちこたえてい
るだけならば、その場を放棄して弱っているだろう、空母棲姫と戦っ
た艦隊へと挟撃に向かう選択肢だって相手にはある。

釘付けにする必要がある。

守っているだけじゃあ駄目だ、積極的攻勢が必要なんだ。
なら。

「っ!?!」

「っ! 無事か!?! 榛名!」

考えている内に到着した。

見れば横須賀の皆は驚いたように俺へと視線を投げつけてくる。

……いや、よせやい。照れるじゃねえか。

「ど、どうして——」

「気にするなっ! いいか? 俺達から打って出るぞ?」

そう言ってみれば、驚いた表情を信じられないものを見る目へと変
化させる霧島。

確かに驚くだろう、守っているだけで精一杯なんだ、攻勢に出るな
んて発想が出るわけもない。

「こ、このクソ提督っ! 状況わかってるの!?! 守ってるだけで一杯
一杯なのにつ!」

「守ってたら金剛達を助けられるのかっ!?!」

霞がまんま俺の考えていた事を否定してくるけど、それじゃあ金剛
を助けられないんだ。

わかってる。

それがどれ程厳しいことなんて十分にわかってる。

「……何か手が、あるのですか?」

「もちろんだ」

神通が探るように聞いてくる。

神通だけじゃない、鳥海も、翔鶴も。

金剛を、横須賀第一艦隊を助けたいんだ。その希望があるなら聞きたいんだ、知りたいんだ。

「お姉さまを……助けられるのですか？」

「そうだ、助けられる……いや、助けてみせる」

「金剛姉さまを……諦めなくて良いのですか？」

「そうだ、諦める必要なんて、ない」

霧島が、榛名が信じられないように、縋るように聞いてくる。

二人が……この場にはない比叡でさえも、横須賀の艦娘全員がそうだろう。

「……お願いします」

「おう」

俯かせていた顔。

その顔を。

「横須賀鎮守府第二艦隊っ！ これより提督の指揮に入りますっ！
どうか……どうか金剛姉さまをよろしくおねがいますっ！」

「任せろっ！」

涙を振り切るように敬礼をしながら上げた。

その敬礼に続く、随伴艦の面々。

「いいか？ ここで敵がやつてくるのを待っている必要なんてない。
艦隊を二つに分けて左翼、右翼へと進軍する」

今この場にいる戦力は横須賀の六人。榛名、霧島、翔鶴、神通、鳥海、霞。

それに加えてうちの鳳翔、大淀、雷、電の四人。計十人の艦娘がいる。

「左翼に鳳翔を旗艦とし、霧島、神通、霞で進軍。右翼に榛名が旗艦で、翔鶴、鳥海、雷で進軍。大淀と電は俺と一緒に中央を突破だ」

少なくともってきたとは言え、両翼の戦いはまだ続いている。

それらに合流するように向かって進軍すれば、敵を挟撃する形になるだろう。あわよくば、両翼に展開している他鎮守府の戦力と合流することが出来るかも知れない。

問題は。

「私達に……出来るでしょうか？」

「出来る」

榛名が不安そうに言う言葉。

それに向かって断言できる。

「皆の任務は唯一つ。生きて帰ってきた金剛を、第一艦隊を笑顔で迎えること……いわば今からの進軍はそのついでなんだぞ？」

「は……う」

この任務だけは放棄できねえよなあ？ 受ける前から躓いてらんないよなあ？

「俺から言えることも唯一つ。生きてこの任務を達成してみせろっ！

それだけだっ！」

一瞬訪れる静寂。その後。

「——了解っ!!」

「よしっ！ いくぞっ!!」

全員が揃った敬礼を俺に向けてくれた。

「鳳翔」

「わかっていきます。……必ず、私も、皆も無事に帰らせます」

「雷」

「ふふーん！ 司令官に頼られて失敗する私じゃないわっ！ まっかせてー！」

ああ、大丈夫だ。

信じてる。

残り、三十分。

「提督っ！ 敵艦隊見ゆっ！ どうされますかっ！」

「ちいっ！ そう上手くは行かねえか……！」

大人しく両翼に展開しておけばいいってものを……！

「だがどうする？ こっちの戦力は軽巡洋艦と駆逐艦、大淀と電だ
け。」

深海棲艦の単艦ならともかく艦隊を相手にするだけの戦力はねえ

……。

「司令官さん」

「どうした!? いなず……っ!」

船に寄ってきた電の顔を見てぞっとした。

「任せて欲しいのです」

その顔に宿ったあまりにも強い決意の表情。

「っ! 駄目だっ! お前——」

「沈むつもりは欠片も無いのですよ? ただ、見て欲しいのです。司

令官のおかげで強くなれた電の姿を」

我が身を犠牲にしても。

なんて覚悟が垣間見えたのは全く気の所為。

決意の表情から、初めて見るけど知った笑顔を向けてくれた電。

「私は……フラワーズは守ることに特化した艦隊。ここから第一艦隊、那珂ちゃん達がいるところまでなんて……難しくもなんとも無いのです」

「……わかった。電、頼んだぞ」

「了解なのですっ!!」

そう言って速力をあげ走る電。

「大淀っ!」

「はいっ!」

「電のフォローに注力しろっ! 後少し……頼むぞっ!」

「了解ですっ!」

その後を追従する大淀。

二人が、会敵する。

「電の本気を見るのですっ!」

砲撃、その砲撃は敵艦隊旗艦の軽巡洋艦ホ級エリートに直撃した。

だが、大きな損傷はなく、よくて小破止まりで……。

その頭を電の方向へ向け——

——ようとした。

「ふふふっ! そっちじゃないのですよっ! 鬼さんこちらっ! なのですっ!」

まじかよ……向くまでもなくその真正面に立つ、だど？
つていや！ 驚いてる場合じゃねえ！ あいつ……！

「おっと残念なのでしたっ！ これはお返しなのですっ！」

「……は？」

思わず間拔けな声が出た。

いやいやありえねえだろ！ 何でそんな簡単に避けられるんだ！？
相手艦隊の一斉射だぞ！？

それでも踊るように……いや、遊ぶようにひらりひらりと身を躲し
続ける電。

一体何が起こってる？ 俺は今、何を見てるんだ？

ただただ避ける。そうして合間を縫ってコツコツと砲撃をホ級へ
と積み当てる。

「……すごい」

大淀も思わずと言った様子で呟いてた。

同感だ、そんな言葉しか出てこない。

そんな時。

「……提督っ！」

「っ!？」

電の相手を諦めたのか、こちらに標的を定めた敵艦隊。

濃密な殺意が向けられていると実感して、少し足が震える。

……こんな相手と戦っていたのか。

思わず逃げたくなる気持ちが鎌首をもたげる。

だけど。

「おーっと！ そっちじゃないのですよ！」

「電!？」

突撃した。

恐らく自分を標的とさせるために。

そしてそれは……。

「駄目だっ！ 罠だっ！」

獲物がかかったと笑うように口を開け、砲塔を覗かせた深海棲艦
達。

——やられる。

そう思つて逃げろと口を開こうとした瞬間。

「そこなのですっ！」

「!？」

その砲塔に向かつて鋭い砲撃が放たれた。電の主砲から。

「罨にかかったのはどっちなのでしょう？」

「は、はは……」

もう笑うしかねえや。

ホ級、自身の砲弾誘爆もあり、撃沈。

敵艦隊は残り三隻、いずれも駆逐口級エリート。そのどれもが呆気に取られている。

電がどうですかと言わんばかりに俺へとドヤ顔を覗かせてくる。

その姿を見て、理解した。

「守る、か」

「提督？」

ああ、確かに俺は守られた。

だがそれは結果的に、だ。

戦い方は何処か、夕立と龍田に似ている。

躊躇わない突撃、相手の動作に自身を重ねる様。

あの二人相手に、必死に演習を重ねた成果だろうか。

……なんて、複雑に考える必要はない。

要するに電は自分を守ったのだ。

敵の攻撃を自分に向けさせ、その攻撃から自分を守った。

その結果相手は倒れ、俺は守られた。

「なんてこつたい……」

完敗だ。

六駆の中で一番伸びたとは思つてた。

でもそれはどうやら第三艦隊の役目という枠を越えていたらしい。

「そうだよな、お前はそうやって皆を守ってきたんだもんね」

一番伸びるわけだ。

盾で収まるような電じゃなかったわ。

「沈んだ敵も、出来れば助けたいのです……」

ああ、はいはい。

本音だろうよ確かに。

「だから……そこを退くのですっ!!」

だが電さんよ、もうそれ、ただの脅し文句になってんぞ？

「提督！」

「ああ……遠慮なんていらねえ！ 大淀も行ってこい!!」

「はいっ！」

まったく、頼もすぎるな。うちのやつらは。

「だから後は……」

任せとけ、その力を振るう価値がある俺だっで見せてやるから。

残り時間はあとどれだけか。

「見えたっ!!」

「提督っ!」

天龍が驚いた視線を向けてくる。

「金剛……横須賀第一艦隊はっ!」

「っ、この先だっ！ オレ達はここの確保を指示されてるけど……行くのか!？」

「あつたぼうよっ！ 天龍！ 言いたいことは沢山あるけどっ！ まずは先にこの戦い終わらせるぞ！ そいつら食い終わったらすぐに来てくれっ！」

天龍達が相手しているのは戦艦ル級フラグシップ率いる艦隊。

簡単に倒せる相手じゃねえってのはわかるけど。

「おうっ！ 先に行って待つてろっ！ オレ達もすぐに行くっ！」

頼もしすぎる返事。それに続く龍田達の頷き。

ああ、大丈夫だ。

こうして無事な姿が見られて良かった。

ほんとに、すまねえ。

後でいくらでも謝るから……今は。

「よしっ！ 那珂っ！ 暁！ 響！ 行くぞっ！ 俺を守ってくれっ

!!

「んもうっ！ ファンがステージに登ってくるのはマナー違反なんだからねっ！」

「その通りよ司令官っ！ 折角のお披露目なのに！」

「でも……頼まれたからには」

——全力で^了応^解えるよっ！

残り時間は——

「こんごおおおおおおおおおおお!!」

「っ!？」

——ゼロ。

金剛が戦うようです

不器用な人、そう思いました。
いつでも頭を抱えて。

どうすればあの海域を攻略できるか、どういった艦隊を組めば皆の力を引き出せるか。

どうすれば、誰も傷つかないで済むのか。

そればかりを考えている人でした。

初めて出会った時は、戦艦である私にすごく嬉しそうな顔を向けてくれて。

これでもつと安全に勝利することが出来ると喜んでくれました。

嬉しかった。とても。

だから私も精一杯期待に応えたいと思いました。

海を征く私、それを見守ってくれる提督。

戦いは大変でした。

生まれたばかりの私では中々期待に応えることが難しくくて。

それでもなんとか帰る度に次は頑張ろうと、もつと上手い作戦を立てられるように頑張ると言ってくれました。

やがて比叡が建造されて、間を置いて榛名と霧島も着任できて、私達の戦力は増していった。

横須賀の主力は金剛型姉妹なんて言われるようになりました。

未だに突破できない日本と南西諸島海域の間にある壁。

それでもいつか必ず突破してやると戦意は高まるばかりでした。

でも、その戦意から実る力が花を咲かせることはありませんでした。

南一号作戦。

横須賀方面の名高い艦娘が集った一度目の作戦。

必ず突破する、突破できると意気込む私達は……空母棲鬼率いる艦隊に敗北しました。

横須賀鎮守府の仲間、他の鎮守府の仲間。

次々と海に沈んでいきました。

——金剛さんがいれば必ず……！

——私達の後を……頼みましたっ！

私さえいれば、必ず巻き返してくれる。

今は負けても、必ず雌伏の時を乗り越えて必ず勝利してくれる。

そう言つて私を生かすために沈んでいききました。

悔しきで頭がおかしくなりそうでした。

どうして、どうしてと何度も心が泣きました。

もしも、隣にずっと居てくれた比叡がいなければ、提督がいなければ。

悲しみの海に沈んで二度と浮かべることがはなかつたでしょう。

横須賀に帰投して、修復作業に追われて。

今度こそと出撃しようとしたときには、もう目の前にまで深海棲艦

達はやってきていました。

そこで、言われたのでした。

——今からすることが正しいかは、歴史家にでも聞いてくれ。

在籍艦娘を横須賀鎮守府から出撃させず、他鎮守府より出撃させる。移動するその間、横須賀鎮守府そのものを囮にする。

到底領ける作戦じゃなかったのに。何処か艦娘を犠牲にすることを嫌つていた提督らしさを感じて納得しそうになって。

南一号作戦で散つた多くの艦娘、その多くの命に涙し、心を痛め続けた彼の気持ちがいほど伝わってきて。

もう艦娘を散らしたくない。

もう誰も悲しませたくない。

その想いに私は初めて負けたと思いました。負けたと思つてしまいました。

そして、一人の英雄が執つた作戦は成功しました。

いえ、完全勝利は出来ませんでした、撤退。退けることに成功しました。

瞬間、私は膝を折りました。

悲しみに浸りました、提督の死に沈みました。

そうしたことを、今でも悔やんでいます。

一歩も動けないくらいに落ち込んでいる間に執られた墓場鎮守府

建造作戦。

更に多くの艦娘が沈みました。

後を託されたのに。

想いを無下にしてしまいました。

だから。

「サンキュー……天龍。アナタ達はこの場所を確保しておいて下さ
い」

「……わかった！ 金剛さんよ……沈むんじゃねえぞ？」

返事は出来ません。

ですが、見事空母棲鬼を撃沈したあなた達に敬意を捧げ。

そしてこの世界の未来を託します。

「つ……！ 私たちの出番ネ！ フォローミー！ 皆さん、ついて来
て下さいネー！」

「了解っ!!」

あなた達と、あなた達の提督に。全ての艦娘に祝福を。

そして今こそあの人と沈んでいった皆の悲願を……！

「果たしてみせマスッ!!」

そのためなんでもしてみせマス。

たとえ、この身を海に沈めることになろうとも。

空母棲鬼……いや、それを遥かに超える存在。……姫、空母棲姫と
でも言うべきでショウカ。

出会ったことも、見たことも、知ったこともない存在のハズ。

だけど、私の記憶が言ってます。

「ハイッ！ 瑞鶴っ！」

「はいっ！ アウトレンジで……決めるっ!!」

あれはあの時の空母棲鬼ダト。

「シズメ……！」

墓場鎮守府の皆さんと同じように新たな力へと目覚めたのでショ
ウカ、それはわかりません。

瑞鶴さんの艦載機と空母棲姫の艦載機が交わり……ほぼ無傷の敵

攻撃機と爆撃機が向かってクルツ！

「うそっ……!?!」

「シィット！ 摩耶っ!!」

「おうっ！ ぶっ殺されてえかあ!?!」

摩耶さんの対空射撃に合わせて私と比叡も斉射する……デスケドっ！

「げっ!?!」

「対空防御態勢っ!!」

そのほとんどが撃墜させることも、出来マセンカ……！

……これほど、強いと言うのデスかっ！ あの時より遥かに……強いというのデスかっ！

「皆サンツ!?!」

摩耶さんが中破……いや、大破と言っても過言ではありません。

比叡と瑞鶴さんは小破、デスガ……。

「くうっ！ こんなの、かすり傷なんだからっ!!」

「ひええ!?! でも、まだ気合いつ！ 入ってますっ!」

よし、大丈夫そうデス！

戦闘中じゃなければ、以前までドコカ自信なさげだった瑞鶴さんの戦意が衰えていないことを褒めてあげたいところですが……！

決断、するタイミングなのかも知れません。

まだ互いの先制航空攻撃を躲しあっただけ、互いの制空権を奪い合っただけ。

あまりに早すぎるタイミング、ですが。

「お姉さまっ!」

わかっていマス。

これ以上の損傷が出れば、全員沈む可能性が高まると。出来れば普通に戦って勝利を掴み取りたかった。

叶うことなら長門達にその手を汚させたくはなかった。デスガ。

「……皆さん、墓場鎮守府の戦い方は覚えてマスネ?」

「こ、金剛さんっ!?! まさか……もうっ!?!」

「ま、待って下さいっ！ 朝潮は……私はまだ大丈夫っ！ やれますからっ！」

川内さんと朝潮さんがやめろと言ってくれる。とても嬉しいデス。ですけど、その希望に絶る、吟味する時間は無さそうなのデス。

「今からすることが正しいかは、歴史家にでも聞いて下さい……比叡っ！ 指揮を頼みマスヨツ!!」

「つつ!! く、う……うう……!!」

比叡っ!!

「了解っ!! 比叡っ！ 気合い、入れてっ！ やりますっ!! ご武運をっ!!」

「……サンキュー、比叡。大好きデスヨ」

艦隊から、離れる。

背中の方から、私の名前を呼ぶ声がスル。

ああ……ソウ、グッド……悪くありません。

あなたの気持ち少し、わかった気がします。

——後は、頼んだぞ。

はい。お任せ下さい。

ああ、ああ。

後を託せると言うのは、こんなに気持ちの良いものなんデスネ。

信じられる仲間がいる、憂いはありません。

そう言えば、こんな言葉があります。

「Today is a very good day to die」

さあ、行きましょう。

「撃ちますっ！ ファイヤー!!」

ふふっ！ そうデス！

これくらいじゃあ、あなたに損傷と呼べるものなんて与えられないっ！ そんな事、わかってマス！

「ワタシはっ！ 食らいついたら、離さないネツ！」

だから精々私を舐めて下さい、侮って下さい。

あの時と同じようにっ！

そうデスツ！ あの頃から私は変わらないまま……あなたの目の前に立っているっ！

「ナンドデモ……ナンドデモ……シズンデイケ……！」

「くうっ……!!」

懐かしいっ！ そうデスっ！

私はこの艦載機にやられましたっ！ それデモツ！

「甘すぎるネツ!!」

「!?」

変わらないのは気持ちだけっ！ 憎くてたまらないっ！ 提督を散らせたあなたがっ！ それを許した私がっ！

だから一緒に沈みましようっ！ この世界を呪って沈みましようっ！

そう、何ということはありません！

私は……ワタしはっ!!

「……ユルさナイツ!!」

許さない、ユルセナイ。

ダレが、多くのカンむすを悲しみにシズメた？

ダレのせいデ、オオクのいのちを散らせタ？

「はハッ！ アはハハハはハッ!!」

アあ、モウ、イタクナイ。

カナシクモナイ。

スベテがユルセナイ。

ワタシヲノコシテイツタテイトクモ。

イノチノシヨウモウニイタマナイニンゲンモ。

ムリヨクナジブンモ。

「シズメ……シズメエ!!」

アナタモ、ソウデスカ。

ユルセナイノデスネ。

ワカル。

ムネンニチラサレタ。

ネガイモ。

キボウモ。

スベテ、チラサレタソンザイダト。
ソウカ。

ダカラ、ソウ、ナツタノカ。

ナラ、ワタシモ——

「——チ、がいマスッ!!」

アイズガ、ミエます。

もうスグ、ウツテ、クレます。

怒りニ……悲シミに……沈むのハ……。

「ナ!？」

「ソレからでいいデスッ!!」

遠くデ、ほうゲキのオとガキコエタ気がします。

暴れないデクダさい。

一緒に、沈んであげますカラ。

一人ぼっちは、寂しいデスから。

いくらデモ、聞きます、聞かせてクダサイ。

あなたの呪いヲ。

「(こんご)おおおおおおおおおお!!」

「っ!？」

は、イ………?

ナンで……あなたが……ココに?

アレは、ふネ?

セマって、船が……!?

「バカヤロウっ!!」

「きやあっ!？」

ナガとが、むツが撃つタ弾が来たワケでもないノニ。
大きな、衝ゲキが。

……いたイ。

「うおおっ!」

船カラワタしの身体ニ飛びつく、抱きつくように。

そのチカラは大シタものじゃないのに、空母セイキの身体ヲ手放してシマウ。

離れタ、空母棲キへ船が激突シテ、そこに。

「ぬおおわああああ!!」

「つく!?!」

長門タチの砲撃が飛んでキマシタ。

条件反射のヨウニ彼を庇ってしまう。

「ば、バカデスカあなたはっ!! 何でこんな所につ!!」

「うるせえ! 馬鹿に馬鹿なんて言われたくねえっ!!」

ナツ!?

馬鹿はあなたでしよウ!?

戦う力もないくせにつ! わざわざ死にに來るようなヒトのくせにつ!

第イチっ!

「馬鹿じゃないならなんデスカツ! 私のテイトクでもないのにつ! そんな言葉を言わないで下サイツ!」

「そっだつ! 確かに俺はお前の提督じゃねえっ! だがなっ……だがつ!!」

——戦友にはなれるっ!!

「は……い?」

「戦友がお前を沈めていいなんて思うかっ!? 戦友がお前を沈めたいと思うかっ!? ……思わねえっ! 全くもって思わねえよっ! 金剛っ!!」

何、を。

言ってるのデスカ? この、人は。

「見ろっ! あいつらは何のために戦っているっ! 見ろっ! あいつらの悲しそうな顔をつ! 誰も……誰一人としてっ! お前の死なんて望んでねえっ!!」

「っ!!」

分かってマス、分かってマスっ!!
そんなことは分かっているんデスっ!

「それでも必要なんですっ! 私为空母棲姫に勝つためには! あの人の願いを叶えるためにはっ!!」

「ああっ!? あの人の願い!? 金剛を沈めることを許すと言ったのか!!? 沈めたいと言ったのか!? 言ったならそいつはただのクソだっ!!」

クソ!?

あ、頭に来ましたっ!

「取り消して下サイツ! 提督は、提督はクソじゃないデス! 私達の無事をいっだって願っ——」

——あの人は。

そうだ、あの人はいつだって。

「だろうよっ! 提督って存在はなっ! いつだって艦娘の無事を祈ってるっ! 戦友がいつだって無事に帰ってくることを祈ってんだっ! 待ってんだっ! 笑顔で帰ってくることをっ! そしてそれは提督だけじゃねえっ!」

無事を祈ってる、願っている。

提督だけじゃない。

それは、誰?

「海で戦う全ての戦友がっ! お互いの無事を願ってるっ! 金剛っ!
! お前は違うのかっ!? 答えてみろっ! 金剛っ!!」
「わ、わたし……私は……」

しがみつくように、継るように掴まれた肩が、痛い。
生きてくれと懇願されている、生かそうとしてくれる気持ちだが、痛い。

——後は、頼んだぞ。

あの人の、言葉。

それは、どういう、意味デシタ?

「ちいっ!! 横須賀第一艦隊っ!!」

「っ!」

「金剛をつ……戦友を守れっ!! 随伴艦は俺達墓場鎮守府に任せろっ!!」

何か、言っている。了解という返事が聞こえた気がシマス。戦友？

ああ、そうデス。

私は、あの人と一緒に戦って……今も。

「戦って、いマス」

「っ!? そうだっ! 金剛っ! 戦ってるんだっ! 戦友の意思を、命をつ! 願いを守るためにっ! 生き抜こうとしているんだっ!

金剛っ!!」

後は、頼んだぞ。

その言葉の意味。

「生きてくれ……そう言ったというのデスカ、提督は」

自分の、艦娘の仇を討ってくれと。南一号作戦の成功を託したわけじゃない、というのですか。

「教えて下サイ、提督。あなたは、私に、生きて欲しいと、願うのデスカ?」

教えて下サイ。

同じ、提督なら。

共に戦う戦友ダト言うなら。

「当たり前だっ!! それは、それだけはっ! 死んでも変わらねえっ!!」

「っ!!」

ああ……ああ……。

なんて、温かい……っ!

それは、さつき感じた心地よさなんて比べ物にならナイ!

そうデス! 私もソウ!

確かに感じていたのデス!

困ったような顔をしたあの人のティーパーティー。

嫉妬した比叡が無茶を言って! 榛名が楽しそうに笑って! 霧島があの人と同じように困った顔をしていまシタ!

覚えている、覚えていマス。

あの時あれほど心地よいと、幸せだと噛み締めていたはずなのにっ

！

「……ヘイ！ マイフレンド お馬鹿さん！」

「おう」

「泳げ、マスネー？」

「あつたぼうよ！」

回されていた腕が、手が、離される。

さつきまで感じていた痛みがなくなったことに、寂しさを感じてしまいます。

「私の活躍、見ていてくださいネ？ 頑張るから目を離しちやノー

……なんだからネ！」

「ああつ！ 特等席で見せてもらうぜっ!!」

前を、向く。

そこには私の戦友が戦っている姿。

涙が、浮かぶ。

景色を滲ませている暇なんてないとわかっていマス。だけど。

「届いて……」

手が震える。

気づけば私の身体はボロボロで。

今自分が海に立てている事が不思議に思えるくらい。

そんな時。

——ようやく、私になれまシタネ。

声が、聞こえた。

——ずっとずっと、待ってまシタ。

ごめんなサイ。

誰かはわかりませんが、私はようやく戦友と戦場同じ場所に立てまシタ。

——あなたの力になりたいと、願ってまシタ。

こんなに弱い私デス。

提督を言い訳にして、自分の弱さから逃げるような。

——だからこそ、デス。
ありがとう。

——倒したいという気持ち、それは？
皆と生きるため。

——生きるとは？

守りたいと願いつけるコト。

——イエース！　それがわかれば大丈夫デス！　さあ！　一緒に
戦いましょう！！

ハイッ！

「金剛——改っ！！」

何かに突き動かされたように出た言葉。

瞬間、手の震えが止まった。頼りないと感じていた身体に力がこもった。

「全砲門っ！　開いて下サイ！」

私を見て驚いている、喜んでいる、泣いている仲間が見える。

ボロボロになりながらも誰一人沈まず戦い抜いている戦友が見える。

心配をかけてごめんなさい。

弱かった私でごめんなさい。

もう、間違えません。

だから、届いて！

「バーニング……」

届いてくださいっ！

提督に、仲間に、友達につ！！

そしてあなたにつ！

「ラァァァァァァブ！！」

轟音が響く。

訪れた静寂。

「シズカナ……キモチニ……そうか、だから私は——」

ずっと聞こえた、She is meという言葉。

最後に零れた呟きの意味、先は理解できません。

でも、空母棲姫が……いえ、彼女が私と同じように救われたということはわかりまシタ。

「や……っつた？」

誰かが呟いた。

それが誰かはわかりません、デスケド。

「やった……やったああああ!!」

光の粒子となり風に運ばれていく空母棲姫。

美しくも悲しいと感じるその光景をみて。

「お姉さまっ!!」

私にボロボロの身体で抱きついてきた比叡の体温を感じて。

「金剛」

「……はい」

声に振り向けば海を泳ぐ彼の姿。

ああ、そうだ。

やらなければならないことがあります。

「手を……」

「……良いのか？」

隣に並び立たせてもらえる時がきたらこの人は言っています。

「はい。……いいえ、こちらからお願ひしたいデス」

「そっか」

それは今です。

あなたは私の隣に並び立つに相応しい……いえ、並んで欲しい人。

「金剛」

「ハイ」

ああ、全然似ていないその笑顔。

全然似ていない風貌だと言うのに。

「よく、やったな」

「……ハイッ!!」

提督だ。

提督に言ってもらえた。

それが、とても嬉しくて、溢れる涙が止められなくて。

ようやく、勝利と知ることができました。

南一号作戦が終わったようです

大きな歓声に包まれた。

皆、泣いていた。

それはもちろん、俺も。

「お姉さま……お姉さま……っ！」

「……ゴメン、ネ」

びちやびちやの軍服はもうまるつきり気にならなかつた。

お互いの体温を確かめ合うように、無事を喜ぶことが出来る。

当たり前じゃなかつた、この光景。きつと、それはこの世界にとつて。

結局の所、俺は何もしていない。

深海棲艦を倒した訳でもなければ、ただ皆の危険を高めて、自己満足を貫こうとしただけなのかも知れない。

天龍と龍田の肩を借りて、この集積所に帰ってくるまではそう思っていた。

それでも……。

「……負けたわ」

「妖精……？」

肩に煤まみれの羅針盤妖精が乗ってきた。

俺と一緒にあの時海へと飛び出してたから大丈夫だとは思ってたけど、なんだか安心する。

「アンタは私の描いていた理想の司令官像を軽く乗り越えた。……うん、ちよつと違うかしら？ 多分、思い描けなかつた理想の司令官になつた」

叢雲に似ているこの妖精。

静かに、だけど何処か少し悲しそうに笑いながらそういつてくる。

「わかんねえよ……そんなの。何が理想かなんて、まったくわかんねえ。だけどさ」

「……うん」

こうして誰一人沈むことなく、帰ってこれた。

それだけは間違いなく思い描いた理想そのもので。

「この光景が見られるなら、俺は何度だって同じことをする。そうしていつの日か、理想が当たり前になって、そんな当たり前の中で生きることができればと思う」

お互いの無事を涙して喜ぶよりも、気軽にお帰りと言えるように。成功も、失敗も。

笑顔で話せる、そんな世界に。

その第一歩を踏みしめた、そう思いたい。

「そう、ね。そんな世界が、未来があるのなら……あの子達も、戦わずにいられたのかも知れないわね」

「……」

今までいた海を眺めて言う妖精の横顔は儂げで。

艦娘は誰も沈んでいないというのに、何かを悼むかのようで。

「深海棲艦、か」

「っ！」

妖精が少し震える。肩から伝わってくるその小さな振動。

もし。

もしも、艦これで言われていたように、深海棲艦は沈んだ艦娘の成れの果てだと言うのなら。

「……何やってるの？」

「お前に倣ってるんだよ」

手を合わせる。

一度だけ、したことがある死者を悼むこの行為。

あの時はただ呆然とやらなければならぬとやっただけだったけど。

今は、言える。

「ありがとう、ゆっくり休んでくれ」

「——っ!!」

妖精が勢いよく飛び立った。離れ際に感じたのは水の感触。

どういう理屈か現象か。

それはわからない。

だけでも、深海棲艦も、妖精も。

元は艦娘だった、なんとなく思う。

そうなくても、成り果ててなお戦い続けている。

「誰も沈めない、か」

ただ単なるちっぽけな俺のプライドから始まった約束。

それはもしかしたら、この世界へすべき約束になるのかも知れない。

「よく、生きて帰ってきてくれた。これも——」

長官が皆の前に立って言う。俺もまた、その隣で長官の言葉を耳に流しながら皆の顔を見渡している。

不思議と、出撃前之時とは違って見えた。

勝利したからってのもあると思うけど、もっと別の何かが変わったと思う。

いや、変わったのは俺なのかも知れない。

ただ単なる艦これ好きで、お前たち皆俺の嫁だなんて思っているのは変わらない。

けど、一つ。自分で言った言葉を今更に実感している。

戦友。

そう、艦娘全員家族であり、嫁であり、戦友。共に海へと挑む者だと。

そうなりたいたって思ったことが、叶った。なんて自惚れている。

「——はあ……うん。そうだね、わかってる、わかってたさ」

「——え？」

不意に長官の声色が変わった。

横を見てみれば、苦笑いを浮かべて肩を竦めている長官。

「喋るべきは、労うべきは僕じゃない。……うん、無粋な真似をして悪かったよ」

「え、は？」

そのままちよいちよいと、こつちに来いと手招きしてくる？ え？
何？

「南一号作戦がこうして最高の戦果を得られたのは、艦娘はもちろん君のおかげだ。僕は何もしていないからね」

「え？ いや!?!」

「いやいやいや!? 俺なんて場違いもいいところだからねっ!？」

「こうして前に立つてるのだけで精一杯だからねっ!？」

「いいから行け、小僧!」

「ぬわっ!?!」

背中から押される感触。

く、くそう！ 爺さんなんてことしやがるっ!?!

そうして崩れた体勢を戻して顔を上げてみれば。

「敬礼っ!!」

「ちよっ!?!」

天龍がいたずらっぽいやつ顔しながら号令をかけた。

そうして、一斉に向けられる敬礼。

長官には敬礼の号令なんてしてなかったじゃねえか！

何で今するんだよっ！

「はは、やつぱり慕われているねえ?」

「あ、あは、あはははは……」

あ、あかんこれ。

逃げられへんやつや。

ああもう！ わかったよ！ 腹くくってやるよ！

「……楽にしてくれ、ああ、大破者や傷が辛いやつは座って……いや、

何なら寝転がってくれ。後、天龍は後で説教な」

「んなっ!?!」

そう言ってみればところどころから上がる小さな笑い声。

はいはい、ダシにするくらいはさせてもらおうからな。

「えーと……本日はお日柄もよく……」

「提督ー！ お見合いなら一対一でお願いするよー!」

加古てめえ!?!

ああ！ だから笑ってんじやないってばよ！

「加古、お前は一週間飲酒禁止」

「そ、そんなっ!？」

あーもう無茶苦茶だよ！ くっそ覚えてろよー。

「はあ……全く。すまないな、身内ネタなんて披露してしまつて。ともあれ、だ」

話し始めてみればすぐに笑い声は収まつて。

俺の言葉へと耳を傾けてくれるのがわかつた。

だから最初に一番いいことを言おう。

「ありがとう、そしておかえり。皆無事で、本当に嬉しい」

「――」

瞬間、何人からの目から、涙が零れた。

「うちの鎮守府では、ルールが一つある。それが沈まない、だ」

それは約束。

最初は時雨に対して、そしていつからか艦娘に対してした初めての約束。

「怒られると思うけど、俺は沈まないためなら逃げてもいいと思つてるし、なんなら敵前逃亡して漁師にでもなんでもなればいいと思つてる」

戦うから沈む。なら戦わなくていい。

ずっとずっと俺の隣で笑つてくれればそれで良い。

それは間違いない本音。

「だけど、誰かのそばで笑うためにはこの戦争を終わらせなければならぬ。だから戦う。……皆、そうだと思う。いや、もしかしたら艦娘だから戦わなければならぬなんて思つてるかも知れない」

笑い続けるために、幸せで居続けるために、それら全てを守るために戦う。

そう、戦いは仕方のないことだ。

何故始まつた戦いなのか、いつから戦いが定められたのか。

そんなことはわからない。

「どうしても逃げられない、避けられない戦いという定め。それは大事なものが増える度に大きく、強くなつていく。そうして戦えば、大事なものがまた一つ増えて……そんな終わらない輪の中

に俺達はいる」

誰かを助けて、何かのために戦って。

そうして大事なモノが手に入って、大事なモノの大事も守りたくなつて。

ずっとずっと続いていく戦いと、増え続ける大事なモノ。

「だから、言いたい。生きていれば、また戦えるって」

「っ！」

かつて何処かの偉い人が言った言葉。

言ったことで非難を浴び続けたその人。

「非難してくれてもいい……どのみち戦えと言ってるじゃないかと呆れてくれてもいい。それが間違いだとも、正解だとも言わない」

辛いさ、苦しいさ。

戦うことも、戦いへと送り出すことも。

だけどそれが幸せにたどり着くための道筋なら。

「それは歴史家にでも聞いてくれ。遙か未来で、この戦いについて考えるヤツへと押し付ける」

「――あ」

正しい道が幸せな未来にたどり着くとも、間違った道が悲しい未来にたどり着くとも限らない。

もしかしたら信じる正しいに向かって悲しみへとぶち当たる結果になるかも知れない。

もしかしたら間違った道こそが幸せな結末へと続いているかも知れない。

「隣にいる艦娘を見てくれ」

言葉に従って隣を見合う皆。

「信じるモノがそこにある、信じたいモノがそこにある……信じるべき戦友が、そこにいる」

正しさも、間違いも。

そんなものは信じなくていい、意識しなくていい。

「そして、俺を見てくれ」

不格好な俺。無様な俺。

自己満足を貫いただけの、俺。

「俺は、皆の戦友になりたい」

それでも共に征きたい。

この海を、幸せに向かつて。

「命を預け合い、守り合い、生きること信じ合う……そんな戦友に、なりたい。そしていつの日か一緒に……」

——暁の水平線に勝利を刻みたい。

……。

「今日の勝利はその第一歩だ。そして俺が皆に戦友として認められるための第一歩でありたい。……皆、お疲れ様。俺達の……勝利だ!!」

瞬間。

「——!!」

鬨の声が湧き上がった。

さつきとは違う喜びを爆発させた。

笑いながら泣いて、勝利を喜んだ。

「小僧」

「……はい」

不意に声をかけられた。

どうしてだろうか、そつちへ顔を向けることが出来ない。

「提督」

「はい」

逆からも。

俺は、皆が喜んでいる光景から目を離すことが出来ない。

「良い、言葉だった。軍人としてではなく、ただのジジイとして思う」

「僕も……そうだね。目からウロコが落ちる思いだよ」

そうかな？

ただ感じた想いを言葉に変えただけで、めちやくちやな話だったと思う。

「これで、わしも心置きなく引退できるといふものだ」

「力不足で申し訳ありませんね？ 大佐」

俺を挟んで笑ってるんじゃないってばさ。

というかそうか、大佐は引退か。

「引退する時には決まってやることがある……小僧、約束、楽しみにしているぞ」

「……お手柔らかに」

引退試合、か。

部活じゃないんだからさ……ったく。

離れていく長官と大佐、二人の背へとようやく視線を向けることができた。

そうだ。

大佐が引退試合って話なら。

「俺は、歓迎試合ってか？」

ああ、そうだな。

そうなのかも知れない。

「なあにしてくんだよっ！ 提督!!」

「ぬおっ!!」

ててて、天龍さん!? おむ、お胸が気持ちよろしくよっ!!

「提督さんっ！ 褒めて褒めてっ！」

「ぐおっ!!」

はらっ！ はらがあ!?

ていうかダメ！ お胸に反応した砲塔が!?

「もー、だめよー？ 提督だって疲れて……きやっ!？」

「龍田は美味しそうな所を取らないの」

ちよまつ!! 時雨さん!? 龍田の足をそこで引っ掛けたらっ!?

「あふん……」

「あ、あ……」

おう、いえくす……わんだほー……。

「ぐいぐい!!? めんにゃひゃ!!」

「いえおれのほうこそめんなさい」

あーもうむちゃくちゃだよ……二回目じゃん。

役得ありがとうございます。

「あらあら、もう、提督を独占しないでくださいな。ささつ、提督、こちらへ……」

「ほ、鳳翔さんは抜け目ないと思うなっ!？」

鳳翔に片腕を取られて、もう片方の腕を古鷹に取られて。気持ちよくて。

「にしっ! 両手に花だねえ! 提督っ!」

「ふ、ふけつなのですっ!」

加古にからかわれて、電に軽蔑されて。

「響? 私達レディーも行ったほうがいいのかしら?」

「そうだね、ここは行く所だと思うな」

「そうよっ! お疲れの司令官を助けなきゃっ!」

突撃準備をしてる暁と響に雷が見えて。

「はいはい! 那珂ちゃん今から歌いまーす! 提督っ! 一緒にデュエットするよっ!」

「ちよまつ!? 那珂ちゃん!? 先に助けて欲しいかな!？」

盛り上がりどころを逃さない那珂ちゃんに文句を言っつて。

「あーもうっ!! 幸せだよこんちくしょうっ!!」

幸せを、勝利を、噛み締めた。

閑章

約束していた一戦のようです

戦い終わって日が暮れて。

一旦墓場鎮守府に戻ってきた横須賀鎮守府の面々、大破者等損傷の多い艦娘は入渠し修復に勤しんでいるのだが……。

今、金剛型戦艦姉妹は仮宿を後にするため荷物を纏めている。作戦は終了した。

つまりここに居る理由がなくなったのだ。

「榛名？ 大丈夫ですか？」

「……えっ？ あっ、はい！ 榛名は大丈夫ですっ！」

ぼんやりとした様子で手が止まっている榛名へと、心配そうに金剛が声を掛ける。

大丈夫だと笑顔を浮かべられるものの、やはりぎこちないのは否めない。

しかしそれを指摘する気は金剛に無かった。

誰もがここから離れたとは思っていないと確信していたから。

ここにいない比叡でさえも。

——どっちを羨めばいいのか、わかりません。

比叡は困ったようにそう言った。

それは金剛が提督の心許せる戦友になれたことをさすのか、金剛と絆を深めることができた提督をさすのか判断がつかないという意味で。

「私達は横須賀鎮守府所属の艦娘……異動という手段はありますが、金剛姉さまが改へ至ったことを含めて戦力上の問題から叶わないでしょう」

榛名の元気がない理由を金剛と同じように察していた霧島。

叶うなら自分だつてと、少し残念そうに困り顔で話す。

だから事実を突きつけた。

優しく、諦める理由を提示した。

「そう、ですね……うん。わかってます、霧島。ごめんね？」
「いえ。気持ち……はい、わかりたくないくらいに、わかりますから」

二人して落ち込む光景を見て金剛もまた思いを燻らせている、この鎮守府に残りたいという思いを。

霧島が言った手段、それを誰か一人でも叶えてしまえば歯止めが利かなくなる。

そういった危惧があった、故に諦めざるを得ないのだ。

繰り返して言えば、誰もがこの鎮守府に着任したがっていた。

作戦が、あの演説が終わった後。

駆逐艦の朝潮は尊敬の念を煌めかしていたし、霞でさえ何処か感じ入ったように涙を浮かべていた。

彼女たちにしてみれば、初めてなのだろう提督の存在。

一度期待して、期待をやめて。

それから示されたあの提督が提督だという証明に、強く心を惹きつけられた。

大佐という臨時の提督はいたが、あくまでも臨時でいずれ違う人になると一歩線を引いてしまう。

だからだろう、その引いてしまうのではなく、引かなければならぬと意識して歯がゆい思いに囚われた様子だったのは。

軽巡洋艦の川内、神通もそうだ。

那珂と少し話が出来たようで、その後から目に見えて戦意の種類が変わっていた。

そして大本の理由を目の当たりにして、想いを胸に留めておくため四苦八苦している。

神通は何か言いたげに提督へと手を伸ばして、途中でやめて。

川内もまた、今まで夜戦夜戦とはしゃぐ姿から想像ができないくらいいしおらしい姿を見せた。

二人の姿にやっぱり姉妹なんですね、なんて言った金剛へと誰もが頷いた位に。

だからこそ、この人と一緒に戦いたい、戦える自分になりたい。そ

の想いは横須賀鎮守府で一番強いかも知れない。

重巡洋艦の摩耶と鳥海はともわかり易かった。

摩耶など、ここに居たい！　なんて憚らず言っていたし、鳥海ですら摩耶の言葉へ追従し何度も頷いている。

古鷹や加古へ憧れた二人、そしてその憧れの二人が心から尽くす提督。

そこにあれ程の男気を見せられてしまえば……摩耶はもう我慢できなかつた。

自分の心へと良くも悪くも素直な摩耶だからこそ、それが嘘偽り無い本音だと周りも理解していた。

鳥海もまたそういつた部分に好感を覚えると共に、あの危なげな人を守りたいというか、そういつた庇護欲のようなものが生まれているのだから始末に負えない。

正規空母の二人？

ああ、うん。もうあの二人は駄目かもしれない。

演説の後、翔鶴と瑞鶴は提督と直に話す機会があつた。

それは偶然としか言えない機会ではあつたが、そこで言われたのだ。

——翔鶴がいなければあの戦線は維持できなかつた、ありがとう。

——瑞鶴のおかげで空母棲姫の艦載機と渡り合う事ができた、ありがとう。

なんて。

二人共自信というものが無かつた。出撃前に少し改善は見られたものの、力を認められるような言葉へと無意識に飢えていた。

そこにあの提督はそんな言葉を言ったのだ。

翔鶴は顔を真赤に小さくなりながら弱々しい謙遜をしているものの、後ろ手でガツポーズを隠せなかつたし、瑞鶴はその場で強気なことを言ったものの、後でだらしない顔をしながら仲間に自慢していた。

その自慢を聞いて摩耶の額に青筋が立っていたのは気にしないほうがいいだろう。

そして。

横須賀鎮守府現最高戦力、長門と陸奥。

はつきり言ってしまうえば。

どうしてこんなになるまで放っておいたんだっ！

その一言だった。

二人共軍というものをよく理解している。

上官の命令は絶対だし、命令違反なんてとんでもない。あの時零れた助けてという一言は理解していてなお出てしまった言葉。

何より心とは別に理性で理解していた、こうしないと勝てないという思い。

それを自身の命を賭して覆した提督に対して強い尊敬の念を覚えていた。

長門は提督の姿を見る度に胸を熱くさせ、未だに涙を滲ませるし。

陸奥にしても、つかめないあらゆる口調を提督の前で出来ないまま顔を赤らめるといふ、まるつきり憧れ人の前で固まる少女といった様相を呈している。

二人が他の艦娘が思っているこの人と戦いたい、とは違い、この人に仕えたいと思っているあたり提督の罪深さが垣間見える。

まあなんだ。

要するに提督への思いは各々違うものの、ここで戦いたい、この鎮守府に居たいという想いは強いのだ。

だからこそ誰か一人の異動を認められてしまえば、歯止めが利かなくなるかと金剛は思っている。

「はあ……テートクー……どうしたらいいのデスカ……」

今は亡き提督へ胸の思いをぶつける。

困っているのは金剛自身もそうだ。

皆と同じようにあの人を提督と呼びたい思いとは裏腹に、二君に仕えずという言葉通り、何処か不義理だと思ってしまう心。

そしていずれやってくるだろう横須賀鎮守府に着任する正式な提督。

前者はまだ良かった、ある意味金剛にとって幸せな悩み、そうだと

思えたから。

だが後者はそううまくいかない。

成果至上主義派。

それは言い換えれば中立派とも言える。その派閥、最大権力である大佐が退役してしまえば、力を失ってしまうだろう。大佐だからこそ保っていた派閥であるが故に。

ストツパーが力を失う。つまり、大きな派閥である兵器派の勢いが止められなくなるということ。

横須賀鎮守府のような大きく力ある鎮守府には当然と言うべきか、兵器派の息がかかった提督が着任する公算が高い。

ならばその思想通りに自分たちは使われていく。

以前までならそれで良かった。

だがもう駄目なのだ、理想の提督。いや、理想と思える提督の存在を知ってしまったから。

どこでどんな指示を、命令を受けても、必ず墓場鎮守府の提督と比較する、してしまう。

そうなればどうなるか。

考えて、自分の中に生まれた想像に息を飲んでしまう金剛。

——艦娘の反乱、第二の深海棲艦となる、ネ。

知るということはやはり罪なのだろう、知恵のリンゴが示した通り。

提督が変えたのはそんな当たり前。

提督が示したのは当たり前という幸せなのだから。

「ままなり、マセンネー……」

一つの問題が解決すれば新しい問題がやってくる。

複雑な思いが溢れ出ないように、手元のダンボールにテープを張った。

「……」

「……」

全ての艦娘が修復を終え、予定されていた一つの行事が行われる。

それがこの試合。

道場の真ん中、少し距離を開けて初老の軍人と若き提督が手に竹刀を持ち相対していた。

周りには多くの艦娘。始まる前から漂う空気に思わず息を飲んで
いる。

それもそのはず、まるで静かだと言うのに二人の間では既に試合が
行われているのか見えない火花が散っていた。

張り詰めすぎた緊張の糸。

いつそれが途切れるのかがわからず、ただただ限界はまだかとその
瞬間を見守っている。

「いいんだね？ 防具をつけないで」

「……はい」

「クック……わし相手に剛毅なものよな」

空気は変わらない。

だが、相対する二人の口元は少しだけ歪む。

片やこの試合を心待ちにしていた男。

片や失われたはずの機会へと喜びを隠せない男。

胸に期する物は違えど、間違いなく相手の打倒を心から望んでい
る。

「三本勝負、審判は僕。……互いに悔いのないように」

「はいっ！」

「おうっ！」

長官の振り上げた手が――

「はじめっ!!」

緊張の糸を切る。

その瞬間だった。

「一本っ!!」

咆哮が上がった、それは双方から。

一瞬の交差。

そしてその瞬間に乾いた音が鳴り響き……。

「はあっ！ はあっ！」

「……ほう」

長官の手が上げられ、提督が、一本取ったことを示した。

「うそ、デス」

「お、お姉さま？ 大佐って、確か——」

一拍の間が開ければ沸き上がったのは墓場鎮守府艦娘の歓声。それを何処か遠くに聞きながら、目の前の光景に目を瞬いた。

「ハイ……唯一の、達人と呼ばれる方デス」

この世界での大佐は剣道十段……達人と呼ばれる唯一の存在。そんな相手から、一本。

手を抜いたのか？ そんなことありもしないのは大佐の顔が物語っている。

嬉しそうに。そう、嬉しそうに口元を歪めている大佐の顔が。

そのことに提督は気づかない。

一瞬だったのにも関わらず荒い息を整えることに必死で。

「長官も見習ってもらいたいものだな？」

「ははは……耳が痛いです」

大佐が愛弟子である長官へと悪戯気に水を向けてみれば、背中に冷たいものを感じている長官。

正直、長官ですらも上げた手を信じられずにいた。

どこまで予想外、どこまで期待以上を示してくれるのかと。

「つ、次……お願いしますっ！」

「おうっ！」

再び距離が開く。

未だ肩で息をする提督に対して、余裕がある大佐。

「二本目……はじめっ！」

「うるうああああ！」

「つぐん！」

振り下ろされた瞬間、大佐が突っ込む。

竹刀が空気を、ありえない音を立てながら切り裂く。

そんな面への一撃を、しっかりと受け止めた提督。

受け止めてしまった提督。

「どうしたっ！ さっきのはまぐれかっ!？」

「ちい……っ!!」

挑発するような言葉とは裏腹に大佐の内心は驚きで満ちていた。まるで自身の攻勢を知っているかのような、経験したことがあるかのような受け。

必死な様相は見て取れる、事実提督は必死だった。思い出すように、かつてに帰るかのように。

あの頃必死に考えた受け方、返し方をその身に降ろす。

二度と実現するはずなかったその方法を宿す。

その過程で。

「つてえええええ!!」

「一本っ!!」

現実を追いつけなかった思考。宿しきれなかったその方法。

それより先に疾走った小手への一撃。

上がった長官の手は大佐に向けて。

これで、一対一。

「っ、はあっ！ ふ……はあっ！ はあっ！」

「……小僧」

上がりきった息。忙しく上下する胸と肩。

そんな提督へと大佐は静かに声を掛ける。

「誰に、教わった」

「はあっ！ つつはあ！ ……あんた、だよ……はあ、はあ……」

目を丸くするのは大佐。

それは事実ではない、自分の教え子は長官ただ一人。

目の前にいる青年へは一度たりとも教えたことはないし、最近視界にはいつてきたばかりだ。

「……そうか」

「はあ……はあ……」

次第に整っていく提督の呼吸。

そうして顔が上げられれば。

「こやつ……」

「ぎあつ！ 決着……つけようぜっ！ ジジイ！ もう俺は……負け犬でも、ガキでもねえっ!!」

——わしを見ていない。

大佐を通して別の誰かと戦っていた。

それは恐らく、極めて大佐に似た誰かと。

侮辱と捉えても良かった、大佐はこんなにも提督と向き合っているというのに。

相手は自分と戦っておらず、ただただ乗り越えるべき壁、乗り越えなければならぬ壁として見られている。

「つくー！ ガハハハハハ!!」

だがそう捉えなかった。

「良いだろうっ！ 小僧……いやっ！ クソガキっ！ 全力でかかってこいっ!!」

「つたりめえだっ！ クソジジイっ!!」

ならば全力で立ちふさがるべき壁となろう。

提督が何を乗り越えなければならぬかと思っているか大佐には理解できていないし、察することも出来ない。

だが。

「ああ……わしは幸せものだ」

こんなにも、先は明るい。

自身の目の前で、竹刀を向ける一人の青年はきつと大きくなる。

その礎になれる、死を以てではなく、生きて意思を託すことができる。

そのことを、ただひたすらに幸せだと思う。

「三本目っ！ はじめっ！」

「うらあああああ!!」

「そうだ！ 向かってこいっ！ そこに這いつくばってしまえば貴様は負け犬っ！ そうではないと示してみせろっ!!」

提督は、何処か聞いたことのある台詞を耳にする。

かつて、どうあがいても勝てなかった、床に這いつくばらされた。不必要と、断じられた。

「うるっ……せええええええ!!」

だが、今は違う。

自分が負け犬で居てしまえば、不必要な存在だとするならば。

「ああああああ!!」

艦娘はどうなる。

自身を提督と呼び慕う艦娘の気持ちは。

負け犬の下で在らせて良いのか。

必要ない者同士で傷をなめ合うのか。

「違うっ！ 違うっ!!」

「むっ……!?!」

認められない、そんな存在にしようことは認められない。

想いを竹刀に宿して提督は腕を振るう。

いつしか受け手は大佐、鋭い眼光を宿しながら機を伺う。

「そこおっ!!」

「っ!!」

裂帛の気合と共に放たれた、大佐の逆胴。

その太刀筋、剣閃を。

「それはっ……知ってるんだよっ!!」

「なっ!?!」

一歩退いた、受けずに退いた。

返される目的の逆胴は提督の胴を打つことも、逸らされることもなく空を切り。

「一本っ!!」

提督の引き様に放った面打ちが、綺麗に大佐の頭へと吸い込まれた。

多くの艦娘が見守る中、長官の手が提督に向けられる。

静まり返る道場。

今あの瞬間を理解できたものは極めて少数。

だが。

「……誘われたのはわし、か」

「はあ、はあっ……は、い、答えは……見せて、もらってましたから

……」
提督が勝利したということは理解できた。

「小僧」

「はい」

興奮の坩堝、鳴り止まぬ歓声。

試合後の礼、その姿のまま顔を上げない提督。

呼びかけられて尚、上げない。

上げられなかった。

言葉尽くせぬ想いがあった。

もう二度と成立しない戦いだったそれが、今実現して勝利している。

ぼたりぼたりと床に雫が落ちて、弾かれた水滴が王冠を描く。

「顔を上げろ、小僧。勝者は胸を張るべきだ」

「……はいっ」

ようやく上げられた顔は涙で濡れていた。

嗚咽はない、ただ静かに涙を流している。

「その涙はわしとの別れを惜しむものとしておこう」

「そうしてくれると、嬉しいです」

苦笑いを向ける大佐。

応じる提督は涙を止めることなく恥ずかしげに笑う。

「……長官」

「はい……こちらを」

大佐に手渡されたのは一振りの軍刀。

それを一度ぐつと握りしめた後。

「貴様にこれを託す」

「……え？」

至極真面目に提督へと手向けた。

「貴様は軍人ではない、そしてわしはもうすぐ引退する身。だからこれは軍刀ではない……ただ戦友の勝利を祈った贈り物だ」

「……」

言っている意味を理解できないまま呆然とする提督の手へと無理やり握らせた大佐。

その重さを確かめるように、提督は軍刀へと視線を落とす。

「貴様の……いや、提督の勇姿に、想いにわしの意味を託す。日本を、海を……艦娘と共に、頼んだぞ」

短く、簡素な言葉。

既に会話は十分にしたと、そしてその上で提督を提督として認めた。

提督の心は言っている。

身に余るモノだと、到底背負えないと。

だから。

「はいっ！ 大佐の意思をこの海に刻みますっ！」

最後に精一杯のつよがりを見せた。

もう負け犬ではないと、クソガキでもないと。

精一杯の虚勢を張った。

「良い返事だ」

その虚勢を虚勢と理解して、大佐は微笑んだ。

満足したような、憂いが全く無いような、清々しい笑顔で。

「……ふむ、じゃあこの際だから僕からも」

「……はい？」

僕もいるよと存在感を示す咳払いをした後。

ニッコリと……何処か悪戯気な笑顔を浮かべて。

「提督、君に辞令を言い渡す」

「じ、じれい？」

どきりとしたのは提督だけではなく、この場にいる艦娘全員。

その全員が。

「墓場鎮守府の提督、並びに横須賀鎮守府提督代理を兼任するように！ ……ああ、当面頼むよ？ しばらく探すつもりも予定もないからね」

妙に様になっている長官のウインク。

それすら気にする余裕なく。

「!!」

再び大きな艦娘達の声が上がったのだった。

長官が語るようです

墓場鎮守府。

その名称は蔑称でもなんでもないただの事実。
艦娘が提督に見送られる波止場。

先日の戦いが嘘のように穏やかな海。

ここに長官が来てから、どれほどの時間が経っただろうか？ 軍帽

を胸に押さえ、静かに黙祷を捧げる長官の姿。

それは本人でさえわからない、少なくとも時間を気にするという余裕はなく、彼の心にあるのはただ悼むという念だけが在った。

多くの艦娘が墓場鎮守府の下に眠っている。

その死を悼むために建てられたといえれば言い訳になるのだろう。

だがその言い訳をようやく本当へと変えることが出来た長官の胸にあるものは何か。

勝利を喜んだことに嘘はない。

紛れもなく平和への第一歩であり、日本に尽くす一人の軍人として心から良かったと思っている。

それでも、今この時において一番強いのは悔やむ心。

かつて自分が彼のようにであったなら、こんな鎮守府は要らなかった
と言うのに。

そう悔やむ心。

悔やむ心を謝罪に変えて、許されることのないだろう相手に頭を下
げる。

「長官」

「……大淀、か」

祈りを止める声は長官の背後から、長い黒髪を海風になびかせ訪れ
た。

声の主は大淀。

振り向くことなくそうであることを理解する。

当然だ、大淀と長官の付き合いは墓場鎮守府の提督よりもまだ長
い。

培った絆の深さは別に、その時間だけは疑いようもなく長い。

「お身体に、障りますよっ。」

「そうだね、うん……もう少ししたら戻るから気にしないでいいんだよ？ それに身体に障るといふならきみだって——」

いいかけて、止める。

この程度、海の上で戦う艦娘にとってはなんというものでもないことを思い出す。

「まだ居られるというのなら、失礼して……隣、よろしいですか？」

「……ああ、もちろん」

長官の横に並び立つ大淀。

その顔には緊張が浮かんでいる、いや。その緊張を必死に抑えていともどおりの表情を貼り付けようと必死になっている顔が浮かんでいる。

それに気づけるくらいには大淀と時を重ねてきた長官。

決して踏み入れられないようにと壁を作って幾月、死守し続けた大きな壁。

その壁を隔てて今、二人は共に海を眺めている。

「提督に、言われました。話してこい、と」

「はは、抜け目ないね……彼は、ほんとに」

提督が今もみくちやにされているだろう道場。

忍んで抜け出してきたはずなのに、気づかれていた。

どこまで彼は期待以上、想像以上の存在にいるのだろうかと恐怖にも似た感情を覚える。

だからこそ、長官は白旗を振った。

表情を変えずとも、目には強い決意の光を宿す大淀。

それは壁を乗り越えるためか、溝を埋めるためか。

それとも決別するためか。

「……妖精も、深海棲艦も、元艦娘だと言えば……君は信じるかい？」
一興だと思った。

どうせ自分は台本がなければ事を上手く運べない。

今回の作戦は台本から大きく離れた展開を見せたが結果は台本の

結末に描いた通り。

描かれた展開は自身のものより遥かに素晴らしく、得難い最高の過程。

ならば台本の外に飛び出すのも、いいかも知れない。

アドリブの中にこそ生まれる、より良い何かがあるかも知れないと、長官は心を開いた。

「海に散って尚、提督やこの国を想い続けたものが妖精に。深い恨みや苦しみ、失意と共に沈んだものが深海棲艦になったといえ、君は信じるかい？」

深海棲艦は前触れなく、発生した。

従来の海軍兵器は意味を為さないまま沈んでいき、海を奪われていった。

そうして日本の海を侵そうとした時、艦娘は現れた。

「現れた艦娘という存在、彼女が言うままに僕たちは戦いの態勢を整えた。そうしてわけがわからないまま日本を守るべく海に挑んだ」

多くの艦娘が沈んだ、多くの深海棲艦を沈めた。

犠牲を出しても勝利を刻みながら、手探りでどうすれば上手く戦えるかを考えた。

「それでも結局僕は敗北した。だから選んだ、二周目を」

「二周、目？」

聞くことに徹していた大淀が首を傾げる。

だが、その意味を聞く前に、遮るように一つ笑みが挟まれ聞くことは叶わず。

「少しはマシになった僕。だからすすいと階段を駆け登られて今は司令長官なんて呼ばれている。全ては深海棲艦をこの海から排除するため、それだけに向かつて振り返らず駆けていた」

艦娘の知識を、戦いの知識を。

新しい世界で存分に奮った。

もとより、立場の力もあった、大佐の養子である彼は七光すらも利用した。

「それでもある時疑問に思った。どうして戦えば戦うほど深海棲艦は

強くなっていくのかと」

戦いに明け暮れて、海域を取り戻して先に進む度強くなる敵戦力。それは何故だと疑問に思った。

「ある深海棲艦と相対した。彼女は言ったんだ、何度でも繰り返すと、変わらない限り」と

戦果だけを見れば極めて順調だった。

重ねる損失、散っていった艦娘や提督。

その犠牲に見合うだけの戦果、いやそれ以上の戦果をあげた。

多くの深海棲艦を打ち破り歩み続けてきた長官は、ただの一言で足を止められた。

「ふと思った。振り返れば失った命は多く、雑に扱った命も多かった。勝利することに必死で、省みなかった僕は、もしかしたらただ徒に戦いを激化させてしまっただけなのではないかと」

多くの人間はそんな長官を褒め称えた。

護国の意思は彼こそが体現せしものだと。

だが、その考えが過つてから動けなくなる。

犠牲が悲劇を生むのなら、深海棲艦を生むのならどうすればいいのか。

結局艦娘を犠牲にしないで勝つ方法を彼は見出せなかった。

足を止めて考えた、今更だとなじられつつも艦娘と相談した。

かつてあったかも知れない道を辿り直すかのように、取り戻そうとするかのように。

今までの快進撃は嘘のように、再び奪われていく海。

足を止めている間に今度は海が犠牲になった。

「ある日、僕の相棒とも言える艦娘が散った。……悲しかった、ずっと二人三脚で戦ってきた艦娘だったから」

「相、棒……」

心に小さなトゲの感触。

しくしくと痛みだす大淀の心は何故だろう。

「でもある時再会できた……その姿を変えて、妖精として」
そして知ったのだ、教えられた、世界の仕組みを理を。

深海棲艦はあらゆる負の感情を元に艦娘が姿を変えたもの、妖精は沈んで尚人と共に戦いたいと願ったものだ。

だから新たに模索した。艦娘を深海棲艦にしないためにはどうすればいいか。

沈んでも人の力になってももらえるほど強い絆を結ぶためにはどうすればいいのかを。

だが……。

「遅すぎた。共に戦った艦娘は海に散り、ただ提督を纏める立場だけが残った。気づけば、僕が新たに訴えた思想を間違いだと言高に叫ぶ兵器派なんて呼ばれる派閥ができて、何が正しいのかわからなくなっていた」

かつて栄光の道を進んだ人間の失墜と変化、かわりに掲げられた新たな思想。

混迷極まる軍部を余所に、戦い続ける鎮守府提督と艦娘達。

艦娘と協力することが大切であると示すように大淀を長官の秘書官として抜擢するも、小さな抵抗虚しく深まっていく各部との溝。

そんな中追いつめられたように発令された南一号作戦。

「結果は知っての通り。作戦責任者である僕の思惑を余所に発令された墓場鎮守府建造作戦の成功。対外的には認めざるを得なかった、かつて僕が進んだ道は正しかったのだと」

戦果に犠牲は必要で、命散らしてこそその勝利だと。

兵器は兵器らしく、兵は兵らしく。

それこそが勝利へ続く唯一の道だと。

事実、兵器派の人間は長官が収めた成功を元に作戦を立てていた。彼らは元長官の信奉者とも言える存在で。急に失敗し続けた長官の姿を認められない存在でもあった。

今はもう見る影もないが、かつては長官がやってきたことこそが正しかったと証明してやると息巻いていたのだ。

そうすれば再び長官は立ち上がる。

今の生温い艦娘との共存、共生という思想が間違いだつたと気付く事が出来ると。

「そうして、そんな中現れたのが……提督」

「その通り。当時は……いや、今も、か。僕は一旦諦めた、態勢を整えもう一度挑み直そうと考えた。提督適性測定器を言い訳に、彼を、艦娘を犠牲にその時間を得ようとした」

文字通り提督を捧げて、使えない艦娘を別の鎮守府で処理し、再度同じ艦娘を同じ鎮守府で建造できるといふ可能性を残そうとした。

今度は間違えないと、三度目の正直に賭けた。

その結果。

「目を疑ったさ、報告書を持つ手が震えた。軽巡洋艦二隻、駆逐艦二隻であの正面海域を突破したなんて信じられなかった」

「……」

結局それは二度あることは三度の道だった。

戦意が目に見えて低い艦娘、提督から傷を与えられた艦娘。そんな者を送って沈めば深海棲艦となる可能性は極めて高いというのに。

それを何処か理解しつつも、止められない程追い詰められていたなんて、言い訳に過ぎないだろう。

完全なる日本の崩壊へと続く道、新たな深海棲艦を生み出そうとしていた一步を提督が止めたのだ。

「希望が見えた、僕はそれに縋るしかなかった。兵器派の思想を認めただ上でそれを覆せる程の実績を彼に上げてもらう方法を考えた。だから……君に行ってもらった、大本営内でも極めて練度の高い君に」
多くのことを長官から学んだ大淀。

指揮、運営、実戦。

かつて英雄と呼ばれていた彼の教えは確かに素晴らしいものであった、大淀が自己に対して下していた評価を遥かに超えるほど。

長官の、英雄の懐刀と呼ばれていたことはそのまま真実であった。

「後は知つての通りだ。僕の用意した筋書きの結末とは少し違ったけど、南一号作戦を完遂させ、その実績を元に彼を横須賀鎮守府提督に据える……流石にこの結果を見たら、反対する者も黙らざるを得ないだろう、なにせ彼らにすら出来なかったことだから」

その言葉こそが信じられないと大淀は目を丸くする。

自身の記憶にある長官は、自分を役に立たないと切り捨てたはずの人物で。

実はこうでした。

なんて言われても、嬉しいと思う気持ちよりも疑いの気持ちが先に出てきてしまう。

「うん、その気持ちは理解できるさ。だからこれが僕の本心だとも言わない。恨むなら恨み続けて欲しい、いや、そのほうがいい」

苦笑いを浮かべながら長官は言う。

分かっているのだ。理解もしているし、そう仕向けたのは何よりも自分だからこそ。

この事を直接伝える気は欠片もなかったし、聞かれても答えないうもりだった。

「だけど、言わせて欲しい。無責任で、無能で……台本の無い僕がこんな事を言つて良いのかもわからないけど」

——強く、なったね。

その言葉に、大淀の目から一つ雫が落ちた。

「はい……はいっ！ 了解しましたっ！ 私は……大淀は長官を一生恨むことにしますっ！」

「くっ……あははははっ！ うん、そうだ、そうだね。流石は元、僕の片腕だ」

満足そうに頷く長官。

大淀も同じように理解している。

それに気づけるくらいには長官と時を重ねてきた大淀だからこそ。許さないで欲しい。

その事を。

そして言っているのだ、あの提督と共に暁の水平線を目指し勝利を刻めと。

長官が逃した魚は大きいと、判断が間違っていたと後悔させ続けて欲しいと。

「ここは……良いところだね、大淀」

「はいっ！ 自慢の家です！」

恨むと言ったわりに綺麗な笑顔を長官に向ける大淀。

そんな顔に苦笑いを浮かべる長官。

傷は、つけたものにしか治せない。

真実そうなのであれば、今大淀の傷は癒えたのだろう。

互いに謝りも、許しもない。

だが、胸にあった小さなトゲは消えその傷口を塞いだ。

大淀も、長官も。

溝は確かに今も存在し続けて二人を別つ。

だがそれは別れではない。

長官は、過去を乗り越えるがために。大淀は未来を征くために。

南一号作戦で二人が得た最大の戦果とは、この門出なのかも知れな

い。

鎮守府近海対潜哨戒のようです

「ソナーに感！ 気をつけて！ もうすぐ会敵するわっ！」

「よおっし！ じゃあ作戦通りに、私と電ちゃんは海上に現れた艦を叩くよっ！ 暁ちゃん、雷ちゃんは潜水艦へ爆雷っ！ 響ちゃんと霞ちゃんは漁船護衛だよっ！」

鎮守府近海対潜哨戒と銘打たれた作戦。そして行われる海上護衛戦。

了解という返事が響く中、墓場鎮守府第三艦隊の面々は漁船を守るべく戦闘態勢を整える。

南一号作戦の成功により横須賀方面近海にて漁が再開された。

組織的な動きが見られなくなり、散発的に現れる程度にまで減った深海棲艦出現率だが、やはり脅威であることに変わりはない。

故にその漁業を、安全を守るべく出撃した第三艦隊。

艦娘に見守られながら、海上で行われる久しぶりの漁に漁師が感じ入っていた中、無粋にも深海棲艦は現れた。

「良いかい？ 基本的に私達は相手を倒すことを考えなくていいからね？」

「わ、わかってるわよっ！ こんな全然、楽勝なんだからっ！」

漁船付近に展開する響と霞。

敵艦隊を迎え撃つべく離れていった四人の姿を見送りながら、響は霞の様子を注意深く観察していた。

第三艦隊に組み込まれた霞。

本決定ではないものの、提督はそう指示した。朝潮や軽巡洋艦の二人、川内や神通に羨ましがげな視線で見送られながらあの提督の艦娘として迎えた初出撃。

威勢よく出撃したものの、時間が経つに連れて不安心が鎌首を上げ、強気な言葉がから回っていることに響は気づいている。

南一号作戦で旧横須賀第二艦隊が戦線を維持出来たのはフラワーズのおかげ。

そんな認識があった。

事実として、フラワーズの救援が間に合っていないなければここに居る霞は間違いなく沈んでいた。それは霞自身も理解している。

だがそんな出撃前にあった六駆とのやり取り、それが霞の心に強く残っていて。

「借りは……しつかり返してみせるんだからっ！」

平たく言ってしまうえば気負い過ぎている。

ビンタ一発に対してビンタを返すつもりは無かった、自分の力を示し、墓場鎮守府の一員として有用であると証明することで返すつもりだった。

そんな中で言い渡された仮所属先と任務。

絶好の機会だと思った、ガンガン行つてやると息巻いた。

そうすることで自分勝手な期待に報いてくれた提督に対して報いるという気持ちも強かった。

成功させてやる。

完璧には無理かもしれない、もしかしたら大きな損傷を負ってしまったうかも知れない。

それでもこの漁船だけはしつかり最後まで守り通して見せる。

そう思っている所に。

「それじゃあ一生無理だと思う」

「え……？ な、なんでよっ!？」

苦笑いを浮かべた響がやんわりした口調で鋭い事を言う。

「いいかい？ もしも司令官に、私に暁に借りを返したいと思うのなら……無事に帰ることだけ考えるんだ」

「そ、そんな生温いこと……だったら漁船を沈めても、民間人に被害が出てもいいのっ!？」

まるで自分たちの後ろに控えている漁船をハナから見捨てているような言い草へ反射的に声を荒げてしまう。

まあ落ち着いてと手振りを加えながら響はそんな事ないと言葉を続ける。

「もちろんそんなつもりは全く無いよ、いい訳がない。だから私達が居るんだ」

そう言つて会敵し、戦い始めた皆を指差す響。

敵艦隊の構成は目に見えるだけで軽巡水級エリートが一隻と駆逐イ級が二隻。

暁、雷の動きを見るに後二隻海に潜んでいる深海棲艦がいると予想される。

自分で下手くそと評した那珂の砲撃はしつかりとイ級に吸い込まれ、電は遊ぶように水級を手玉に取っていた。

「す、ぐい……」

その光景に霞は目を奪われる。

あの時はそんな余裕がなかった、初めて見る墓場鎮守府艦娘の戦い振り。

沈む光景が思い浮かばない。

仮に自分が戦う姿を誰かが見た時、こう思つて貰えるのだろうか。

「失礼な言葉になるけど、多分霞じゃあこうはならないと思う」

「……っ」

響が言つた言葉へ反論できず悔しげに唇を噛む霞。

その通りだと思つた、今の自分じゃあ無理だと答えが出ていた。

「多分、司令官は一番最初にこれを見せたかつたんだと思うよ？ 霞と私達に大きな力の差はない。でも決定的に違うものがある」

「違う、もの？」

聞き返そうと振り向いた霞を置いて、不意に響が前へと出て。

「響っ!!」

「わかつてるさ」

主砲を構えてみれば、戦っていた深海棲艦、駆逐イ級がこちらに向かってきている。

前衛の包围を無理やり抜けて来たのか、中破姿のイ級は。

「ウラー!!」

あつさり響の主砲に沈んだ。

「……」

霞は気づかなかつた、想いに惑う最中に居たから。

しかし響は気づいた。惑う想いを持ち合わせていなかったから。

「これがその差、だと思う」

「そう……」

邪魔をした。

それは何だと聞きたい気持ちを、霞の何かが邪魔をする。

ちっぽけなプライドなのかも知れないが、それは霞にとって譲れないものでもあり、大事なものでもあった。

だから。

「ふんっ！ いつか返してやるんだからっ！」

これはきっかけ。

借りの返し方、それはまだ見つからない。

しかし、その方法を見つげるためこの光景をしつかりと目に焼き付けようとする霞に、響は目を細めた。

「ええぞ！ ええぞ！」

「ひゅー！ 暁ちゃんマジレディ!!」

「とうぜんよっ！」

深海棲艦の邪魔ははいつたものの、久しぶりの大漁に涙を流しながら喜んでいた漁師達。

「かみなりちやああん!!」

「いかずちよっ！ かみなりじゃないわっ!!」

その漁師たちは今、輪の中で踊るフラワーズの面々へと歓声を贈っていた。

今まで何の成果も上げられなかった軍。その軍への印象は極めて悪かった。

自慢の船は海を走ることなく、海風に錆を付けられていく。

いつか海へ出ることを夢見ながら道具の手入れをする日々。

仕事ができない状態で、日々困窮を感じる中、何度も手を罪に汚そうと思った。

何故こんな思いをしているのに、吉報は世に出回らないのかと鬱憤は溜まるばかりで。

限界だった、限界が見えた時によろやく待ち望んだ報せが舞い込ん

だ。

「那珂ちやああああああん!!」

「きやはっ! 皆! ありがとう!!」

それは謝罪からだった。

知らせた男はまっすぐに頭を下げた。

今までつらい思いをさせて済まない。

そして感謝を贈られた。

すぐに再開できるのも耐え忍びこの時を待っていてくれたおかげだ。

そう言った男の隣から、緊張混じりに言われた言葉。

艦娘と共に漁をしてもらうという内容。

「電ちゃんマジ天使」

「はわわっ!?! て、天使じゃないのですっ!」

そうして今、最高の結果が待っていた。

国を、人を守る艦娘と言われていたその存在を見て。

必死に自分たちを守ろうと戦う姿を見て。

戦っていたのが自分たちだけではない事を理解した、実感した。

「かすみんは踊らないのん?」

「か、かすみんっ!?!」

それがこの状態。

獲れたての魚料理に舌鼓をうちながら、歌い踊る艦娘に声をあげるこの光景。

全ての苦勞が実った光景だった。

「あはは、すいません。まだアイドル修行不足なんすよ、霞は」

「おっ! 提督さんじゃねえかっ! 今回はありがとうよっ! おかげで見てくださいよ! こんなに獲れたんだっ!」

民衆にとつて最高の戦果とも言える幸せの渦へと提督が現れた。

目の下に深い隈を拵えながらも、眩しそうにフラフラズが踊る姿へと目を細める。

そんな提督へと獲れたての魚を誇るように、感謝するように見せる漁師。

「あつ！ 司令官つ！」

「えっ!? 提督っ!?!」

やってきた提督を見つけたフラワーズは霞を残して向かう。

南一号作戦の成功後、任命された横須賀提督の兼任。

間もなく様々な手続きや作業へと向かった提督へ作戦の成功を伝えるために笑顔で足早に。

「司令官っ！ どうっ!? 私達、ちゃんとやったわっ！」

「ああつ！ 流石は最高のレディ、御見逸れしたぜ」

むふーと胸を張る暁の頭を撫でる提督。

レディと言うには少しだらしない笑顔でなでなでを迎え入れた暁。

「司令官」

「おう、響もおつかれさん」

ぽふっと胸に収まった響と笑顔を交わし合う提督。

「司令官さん、えっと……こ、これ！ 美味しいから食べてほしいのです！」

「おっ！ うまそうじゃねえかつ！ ありがとな。いなず、まつ!?!」

電が足を躓け、提督に食べてもらおうと持っていた焼き魚を顔にぶつけ。

「し、司令官っ!?! だ、大丈夫!?!」

「大丈夫大丈夫、ありがとな雷」

慌ててハンカチを手に持って提督の顔を拭く雷。

もみくちや一歩手前であっても提督の笑顔は変わらないままで。

「提督? 大丈夫?」

「ああ……うん。ちよつと休んでこいって言われてな? いやあ、流石にきつついわ……けど」

目の隈に気づいた那珂は気遣うように言う。

意味を間違えることなく受け取った提督は笑顔を深めながら言葉を返し。

「やっぱ皆と会えるのが一番元気になれるわ……那珂、作戦お疲れ様。ありがとうな」

「あ、えへへ。……うんっ！」

空いている手を那珂へと伸ばし、その柔らかい髪を撫でながら労った。

そうすることで提督自身も労われた。

慣れない作業、会議、そういった疲れが抜けていくと実感できる。

「ちよつとつ！ このクズつ！ いい加減そのだらしない顔をひつこめなさいつ！ 他の人も見てるのよ!? だらしないつたらつ！」

「おつと、すまんすまん。霞も忘れていたな？」

出遅れた霞が肩を怒らせながらやってきてそう言った。

だが疲れからか、民間人の前でだらしない顔をしないで。という言葉の意味を解釈しそこなった提督は、なんだ寂しがりやさんめと霞の頭に手を伸ばし。

「ちよつ!?! ちよつとつ!?!」

「霞もお疲れ様、うちとしては初出撃で大変だっただろう？ これからも一緒に頑張ろうな」

撫でると共に労う、その手を何故か。

そう、何故か。

「あのねっ！ 私はそういうのを求めてたわけじゃ、なくて……その……」

振りほどけなかった。

そんな霞に電は白けた視線を向けていたし、那珂は笑うのを必死で堪えているのか肩を震わせ。

「ツンデレ乙」

「ちつ!?! ちがつ!?!」

漁師に突つ込まれた。

顔を真赤に霞は漁師たちへと足を急がせ弁解に向かう。

「なんか悪い事したな？」

「ふふつ！ いいんじゃないかな？ 間違いじゃないよ」

照れてるだけだよと那珂は笑いながら言った。

霞が何かその勢いでやらかさないかと心配した六駆が追いかけて、この場に残るは那珂と提督。

二人の間に少しだけ訪れた沈黙。

居心地の悪さは感じない、ただ穏やかな雰囲気、海風が包み込む。

「方針は決まった？」

「……ああ、やっぱまずは日本そのものの安全確保が優先になりそう
だ」

少し寂しそうな顔を浮かべる提督。

その内容に那珂は察しを付ける。

「そっかあ……しばらく、寂しくなるね？」

「まあな、だけどそうも言ってもらえねえや。横須賀鎮守府の運営をど
うするかも考えなくちゃならねえし……まったく、長官も無茶言う
よ」

困ったと目尻を下げながら那珂へと愚痴るその姿。

それを那珂は嬉しく思う。

この人の弱音を聞けるようになった自分を誇らしく思う。

「でも、頑張っちゃうんでしょ？」

「さてな。俺は頑張ってるつもりはねえよ」

当たり前前のことをやってるだけだと提督は笑う。

目の前で繰り広げられている暁と霞のやり取り、内容はわからない
が周りの笑顔を見るに大事ではないだろうと顔を綻ばせる。

「私も……皆も。提督の力になるのは、当たり前。なんだからね？」

「那珂……」

驚くように那珂へと視線を向ける提督。

迎えたのはとびきり優しい那珂の笑顔。

「やれやれ……那珂ちゃんのファンはもうやめられそうもないな」

「あつ！ まあたそんな事言つてー！ ダメなんだからねー！」

笑い合う二人。

笑いが絶えないこの光景。

「ああ、まだまだこれから、だな」

「うんっ！」

守りたい、広げたい。

気持ちを強く再び心で結び、しばしの休息に身を任せた。

提督は忙しいようです

「お疲れ様です、提督。お茶を淹れてきますね」
「ああ、ありがとう」

勝手知ったるなんとやら、司令長官室に備え付けられている簡易なキッチンへ向かう大淀を見送って一息。

いやあーきついっす。

まったくやんなつちやうね。

横須賀鎮守府の提督を兼任するって話からまあ大変になるのは覚悟してたけどさ、こういう大変さは想定外だよまじで。

さっきの会議もそうだけど、居心地悪いのなんのって。

なんか知らんけど敵意？　なのかね、会議室に入った瞬間すんげー目で見られるわ、いちやもんつけられるわとなんなの死ぬの？

昨日那珂ちゃん達に会ってなかったら間違ひなく魂飛んでたね、こーう、白目剥いてる俺を見るといーか。

ていうのもあれだ、艦娘兵器派とかいー派閥の人。

部屋に入るなり舌打ちされるわ、意見を言えば被せてくるわととも面倒くさい。

こちららただでさえお偉いさんと会議するってだけで神経すり減らしてんのに、なんだってんだ。

だけどまあ勉強になった、って言えば良く言いすぎかも知れないけど。

思想に対しては全く理解を示せないが、今後の方針については領ける部分が多かった。

南一号作戦が成功して。

確かに横須賀方面は安定していくだろうけど、日本から見ればそれは小さなもので。

今後、俺は南西諸島へと出撃して行くもんだとばかり思っていたけど、そこにストップをかけたのは兵器派の人。

横須賀だけ平和になろうともそれで全国を賄えるものじゃない、うちの戦力を他に派遣するってのは兵器派ならではの意見だったと思

う。

話に上がっていたのは舞鶴方面だけど戦況は厳しいらしい。ならそこで苦しんでるのは人もそうかも知れねえけど、艦娘だってそのはずなわけで。

そう考えて頷いてしまった。

まあ、頷きたくなかったんだけどね。

何が悲しくて嫁と離れ離れにならねばならんのだ。

なんて、そういう思いはある。

幸い……と言うべきかゴネて欲しかったと言うべきか、天龍達は納得してくれた。

まあそれぞれに条件付けられたけど俺にとってもご褒美だからそれは良い。

今頃は舞鶴に到着した頃かな？ ……あいつらなら大丈夫なんて思うのは責任放棄になるのだろうか、わからん。

派遣する条件として作戦内容に対する拒否権は確約してもらったし、滅多な事にはならないと思うけど……まあ条件に対してめっちゃやる気出してたし、無事に帰ってくるのは間違いないだろう。

—そしてさっきの会議。

「お待たせしました……つと、もう一つ、ですネ」

「あはは、済まないねタイミング悪くて」

「お疲れ様です」

振り返ろうとした所で長官が帰ってきた。

立って敬礼しようとした所を手で遮られ、前のソファがぎしりと音を立てる。

「君もお疲れ様、あと 鎮守府近海対潜哨戒作戦も順調なようで何よりだ」

「いえ、俺は何もしてませんよ。劳いの言葉はぜひ彼女たちに」
いやほんと。

第三艦隊……フラワーズは南一号作戦を経て強くなったなと実感した、守る戦いはうち随一だと思う。

元々は1―4を攻略すれば潜水艦ひしめく1―5……つてな考え

でソナーや爆雷を使った対潜戦闘を視野に入れていたことも合わせり、見事な適役振りを見せてくれた。

加えて霞。

六駆と一悶着あつたつて話は聞いていたけど、鳳翔の勧めもあつて第三艦隊へと組み込んでみたがいい刺激になつたみたいだ。

まあその一悶着も俺が原因だつて話だから謝つただけけど……またこのクズ呼ばわりされて反射的にありがとうございますと言つてしまった、俺はもうダメかもしれない。

「そうだね、そうすることにするよ」

そう言つて柔らかく笑う長官。

誰だこいつなんて言いそうになるのは仕方ないと思いたい。

言つてしまえば大淀のことや南一号作戦含めて、この人に対してはあんまり良い印象を持つてなかつたからね、仕方ないね。

「さて、早速だけど……さっきの会議についてどう思う？」

「そう、ですね……」

さっきの会議。

今後、横須賀鎮守府をどう運営していくかつて話なんだけども。

深海棲艦との戦いが始まってからすぐに建てられた鎮守府。

それだけに、建造できる艦娘が極めて少ない。

多くの艦娘がそこで生まれて、散つていったためだと考えれば少し複雑な想いがある。

「はつきり言つて伝統だとか、横須賀最大の鎮守府だとか。そういうのに拘っている場合ではないと思います」

当初出た話は横須賀鎮守府への引越。横須賀の提督をメインに考え、墓場鎮守府を兼任するつて形への移行。まあ、やることは変わらないけど体裁の問題だそう。

墓場鎮守府の戦力もまるつと移してしまうつてもので、長官と何故か兵器派の人らもこぞつて推そうとしてきたけど……それには盛大に反発した。

「横須賀で新たな戦力を建造することが期待できない以上、別の利用方法を考えるべきです」

「ふむ……別の利用方法、か」

実際、体力的だとかまあキヤパ的に現実的じゃないっていうのは勿論なんだけど、それ以上に嫌な予感がして。

大淀と一緒に問い詰めてしまえば、中々腹黒い長官だったりすると知った。

引っ越しを提案してきたのも長官で、その理由は大佐……いや、爺さんの後継者として俺を立てて、緩衝材として利用するつもりだったとか。

実績も立て、爺さんの後継者的な意味合いを掲げてこの軍刀を持ち、さらに横須賀へと据えることで兵器派への睨みを利かせるなんて言ってた。

その目論見は俺に却下されてしまったわけだが。

「加えて墓場鎮守府の位置。最前線であることに変わりはないですから、横須賀の最大戦力と言われているうちを動かすわけにはいかないでしょう」

そういつた理由もある。

仮に横須賀鎮守府へ引っ越して、その後誰があそこに着任するのかって話だ。

多分兵器派の狙いはこつちだったと思う。

最前線であるから戦果をあげられた、そういう認識を俺に持つてるみたい。

横須賀に俺を着任させるのには抵抗がある、だが、一旦座らせておいてる間に、兵器派が最前線に立ち、戦果をあげて横須賀提督の座を奪い返す。そういう狙いがあったんじゃないかと思う。

そのせいでやんややんや言われたのよ……まじで疲れた。

「思想、派閥。軍のパワーバランスは一旦置いておいて。俺があそこから動くつてのはナシで考えましょうよ」

「……やれやれ、そうだね、そうすることにしよう」

軍の恥部であるとは自覚しているのか、少し恥ずかしげに笑って誤魔化す長官。

とは言え俺も結構無茶苦茶言ってるつてのは自覚してる。

平たく言えば横須賀鎮守府を管理する権利だけ寄越せって言つて
るようなもんだから。

別に権利が欲しいわけじゃないけど、辞令が出てしまった以上仕方
ない。自分の出来る身の丈を探さないといけないわけで、それが俺の
出来る範囲だつてだけだ。

「お待たせしました……ですが、別の利用方法と言いますが何かある
のでしょうか？」

「そうだね、それが無ければ……次の会議では押し切られてしまうか
も知れないよ？」

まあそうなんだよな。

軍人じゃねえからっ！ 軍属だからっ！

なんて切り抜け……いや、ゴネただけなんだよな実際。

じゃあ正式に軍に迎え入れよう、じゃなきゃ提督クビな。

なんて言われたら領かなきゃならねえし、多分そういう方向で考え
てきそうな気もする。

長官自身その考えはあるのだろう、ゴネ始めた俺をフォローしてく
れはしたけど、どっちかと言えば冷静になって考える時間を作ってく
れたって意味合いが強いと思う、その上で納得しろつてことだろう
さ。

なんせ、長官も俺を横須賀に据えたいと思ってるんだから。

「だけど君も大きくなったね、初めてあつた時とは別人のようだよ」

「はい？」

頭を抱えだした俺を見かねたのか話を変えた長官。 ありがてえ。

まあ、そうだな。

ここに来た時の俺なんてドツキリだと信じてたし、そうとう間抜け
面をしてたんだろうさ。

「くすくす……私も主砲を突きつけた方を提督と呼ぶなんて思つても
みませんでした」

ああ、そうだったそうだった。

懐かしいなあ……そのおかげで提督になれるんだーなんて実感で
きて、大淀に講習を受けて……ん？

「講習……?」

「どうしたんだい?」

いやちよつとまって。

そうだよ、講習だよ講習。

あれって本来もつと時間をかけてやるものなんだよな?」

「長官、俺が受けた講習……時間が無いからってあんなんでしたけど、本来はどうなんですか?」

「あ、あんなん……」

あ、ごめん大淀、落ち込むな? うん。

「ああ、本来は軍学校……提督養成校とも言えるか、そこで一年学んでから提督として着任することになってるけど……」

「それですよっ!」

そうだよ、養成校!

そうやって学んできた提督がああのカソ提督みたいな有様だとか言うのにはちよつと気になるところだけどそれは良いとして!」

「横須賀鎮守府を養成校にしましょうっ! 艦娘のっ!」

「艦娘の……養成校?」

艦娘は提督という存在と違って、何も知らないままに生まれた鎮守府の提督に従って戦う。

古鷹や加古、鳳翔がそうだった、信じて疑わなかった普通。その普通を形作れる事が出来れば。

「そうですねっ! 横須賀で艦娘建造が出来ない、けど設備や備蓄は随一でそれを腐らせるには勿体無い! 横須賀方面の安全は幕場鎮守府で確保して、練度の低い新米艦娘を育成する。そうして力を身につけた艦娘が卒業し、生まれた各鎮守府へ再配属される……そういうシステムを作りましょうっ!」

「ふむ……なるほど」

我ながら会心の発想だと思う、フッフ、天才か?

そんな発想を聞いて思案顔の長官と大淀。

いやいや、悩みなさんな、素晴らしいと言ってくればそれで良いのだよ?」

「まず一つ、それは誰が教えるのかな？」

「そりやもちろん俺が……」

「そうしてしまうと、墓場鎮守府の指揮は誰が執るのでしょうか？」
う、うぐつ……そ、そりやそうだけど……。

「加えて建造元の鎮守府、養成中はどうするのか？ 全てがそうとは限らないが、すぐにでも戦力を欲している鎮守府だってあると思うよ？」

「そ、そこは異動でなんとか……」

「難しいでしょうね。それが可能な程高い練度を持っている艦娘のほうが少ないでしょうし、よしんば居たとしてもその鎮守府に在籍している艦娘と息を合わせるのに時間を要してしまうでしょう、私が第一艦隊の皆さんへ中々対応できなかつたように」

はうあつ!?! う、ぎぎ……。

「兵器派の支持も得られないだろうね、彼らは提督養成校の実権を握っているし……思想もそうだ。君のような意に沿わない者の思想を広めたくないだろうからね」

「そうですね、言ってしまうえば共存、共生……親艦娘派の方々からは支持頂けるかも知れませんが、少数ですし」

うぐう。

……。

「ふう……難しいですか」

「そうだね」

ダメかーそつかあ……いいアイデアだと思っただけだなあ。
でも勢いで言った案なんてそんなもんかも知れない……けど。

かつてクソ提督の下にいた鳳翔達。

沈んでも目的を達成しようとする強いけど悲しい決意。

言わせてもらえれば、やっぱりそんなの間違つてると思う。

甘いと言われようが、温いと言われようが。

沈まなければ、また戦えるんだ、一緒に。

だったら沈まないために、沈む前に力を付ける。

そんなのがあつてもいいと思うんだけどな。

「だからやってみようと思う」

「……はい？」

え？・なんて言ったのこの人。

やってみよう？・何を？・

「提督提督、顔が面白いことになってます」

「え？・あ、お、おう？」

いやいや、二人揃ってクスクス笑ってないでさ？・

えっと、まあなんだ。落ち着いて？・

「艦娘養成校、良いじゃないか、素晴らしい。確かにさつき挙げたような問題もあるし、もつと色々出てくると思うけど……長期的に見れば間違いなく横須賀の……日本の戦力を高める結果になるだろう」

「はい。そうですね、丁度横須賀にいた長門さん達もいることです、彼女たちをモデルとして墓場鎮守府内で色々試しながらシステム構築してみるのがよろしいかと」

「うんそうだね、実際横須賀鎮守府の艦娘達はまだ墓場鎮守府のやり方を理解できていないだろうし……テストケース、モデルケースとしてやっていきながら各方面へ働きかけてみよう」

あー……うん。

何やらお話が盛り上がっている所、大変恐縮なのですが。

「え、やるの？・艦娘養成校」

「うん？・君がそう言ったんじゃないか、やらないの？」

うっそまじかよ。

まじかよ。

「……やりましょうっ！」

「よし、それじゃあその方向で詰めていこう。差し当たっては明日の会議で頷かせる事が出来る程度にはね」

「はいっ！・微力ながら私もご協力させていただきますー！」

艦隊これくしょんは始まらなかったけど。

これ、あれだよな？・

艦娘学園始まるよ、だよな？・

……。

「萌えてきたっ!!」

「おお、流石だね。うん、僕も負けてられないね！ 頑張ろうっ！」

よっしゃあ！ 艦娘にセーラー服って絶対に合うんだよ間違いないっ！

やってやるっ！ 俺は、やってやるぞお！

第一艦隊が派遣されたようです

「夕立っ!!」

「わかつてるっぽい!」

天龍の指示と夕立が主砲を構えたのは同時。砲塔から放たれた弾は見事に戦艦ル級に直撃した。

ル級は声をあげる間もなくいつの間にか忍び寄っていた時雨の魚雷に襲われ、大破。

「天龍ちゃん!」

「おうっ!」

トドメどころかオーバーキル。

一縷の慈悲すらなく天龍と龍田の斉射によりその姿を海に沈めた。

「す、(っ)いね……ね?」

「……ええ、認めざるを得ないわ」

同じ艦隊に組み込まれていた長良型軽巡洋艦四番艦、由良はそれしか口にすることができず。

また、墓場鎮守府の艦娘は常識はずれという噂の中身を知った扶桑型戦艦二番艦、山城もただの噂だと切り捨てた過去の自分を恥じた。

それは舞鶴鎮守府に所属している艦娘全ての感想でもある。

日本各地の正面海域を取り返す。

その言葉と共に派遣された墓場鎮守府第一艦隊。

まず最初に彼女たちがやってきたのは舞鶴鎮守府。

各地の戦況は厳しかった。

ある程度原因や理由の差はあれども正面海域を辛うじて守っていると云った程度で、各方面の海域へ出撃するなんて夢のような話。

中でも舞鶴は横須賀以上にギリギリだった。

建造へと臨んでも失敗続き、平たく言ってしまうばもう何処の鎮守府も一度艦娘を建造し、沈めてしまっていた。

一番容易く考えられるジリ貧、まさにその通りの道を辿ってる途中で。

どの艦娘も戦意を漲らせることが出来なかった。

先が見えていた、訪れる未来を誰もどうすることも出来ない諦めていた。

徐々にすり減っていく戦力。

かつて仲の良かった艦娘、姉と呼び慕った艦娘を失い、出撃する度に誰かが沈む。

限界だった。

日本の崩壊は舞鶴からなんて言われる事を軍も、艦娘も覚悟した。そんな中だった。

「あんなに、強くなれるんだね……ね」

由良の目に幾分ぶりの光が宿った。

希望が見えたのだ、その光が差し込む瞬間を見たのだ。

明るく照らされているはずの海がその通りに見えるようになったのはいつぶりだろうか。

はつきりと水平線を眺めることが出来たのはいつぶりだろうか。

見える光景を滲ませながら、忘れていた喜びを噛みしめる。

「でも……どうして……今頃っ……!」

叶うなら最愛の姉とこの水平線が見たかったと、タイミングという不幸を呪うのは山城。

喜びはある。

希望も見えた。

それなのに扶桑型戦艦一番艦、扶桑はいない。

共に喜びたかった。

共に希望へ涙したかった。

握りしめられた拳にはうつすらと血が滲む。

どうしてもつと早く来てくれなかったのかと、お門違いに八つ当たりをしたくなる。

あれほど強いのであれば掴み取れたはずだ、扶桑が隣にいる未来を。

今更に訪れた希望へと憎しみが募る。

叶うのであれば。

「私は……っ! 沈みたかったっ!」

強いと評された墓場鎮守府艦娘。

その強さを振るうための犠牲になりたかった。

そうすれば姉は褒めてくれると思っただ、よく頑張りましたねと褒めてくれるはずだった。

それすらも、許されなかった。

「山城さん……」

強さとは時に残酷で。

強さの一助になることすら出来ない力とは弱いという事実を偽ることなく真つ直ぐに伝えてくる。

俯き震える山城へと掛ける言葉が見当たらない由良。

由良とて思っていたのだ、犠牲になりどころだと。

だがそんな犠牲など要らないと、必要ないと。

由良と山城が何をせずとも被害なくこの戦闘は終わっていたと二人は確信している。

そんなところに。

「おーいつ！ 何してんだ？ おつせえなあ！ さっさと帰るぞー！」

なんて。

あまりにも軽すぎる言葉が、いや。

自分たちを馬鹿にするように聞こえる言葉が飛んできた。

「っ！ そんなに強いならっ！ もっと早く来てよっ！」

言った天龍は決して馬鹿になんてしていない。

それどころか追い詰められてた舞鶴の艦娘達の様子に胸を痛め、負担をかけまいと、より一層奮戦した。

そんな天龍達へと返された言葉は恨みの声。

どうして、どうしてと諦めきれない、悔やみきれないと叫ぶ音。「天龍ちゃん……」

気遣うような龍田の声を背に受け、天龍は山城へと向かう。

行すべきは海域拡大ではなく、日本の解放。

長官からの発案に提督は頷いた。

戦果をあげることよりも先により多くの艦娘を救うほうが先だと

了承した。

苦渋の決断と言うには言葉が過ぎるかも知れないが、提督も艦娘も互いに離れるのは嫌だという言葉を、気持ちを飲み込んだのだ。

だから怒っても良かった。

それがわざわざ離れたくない提督の下からやってきた自分たちへと向ける言葉なのかと。

だが。

「わりい……本気でそう思ってる」

「っ!？」

言ってしまった、我慢するはずだった昏い想いを口に出してしまい震える山城の目の前で。

天龍は静かに頭を下げた。

「オマエの……山城の言う通りなんだ。もつと早くに強くなって、こうして援軍に來られたなら。そんな事を言わないで済んだのかも知れねえから」

それもまた天龍の……いや、墓場鎮守府の想いだった。

「わ、わかったこと言わないでっ！もう、遅いの……姉さまは、扶桑姉さまはっ!!」

止まらなかった。

その通りだと、自分たちの不手際だと認められたから止まらなかった。

止められない山城とは別に、由良もまたふつつつと湧き上がる気持ちがある。

天龍の謝罪はこうも言っているのだ。

お前たちじゃあ勝てないと。

「……っ！」

反論できなかった。

言いたい気持ちはあった、自分たちはここまで生き残ったと、すなわち弱い艦娘ではないと。

言えなかった、弱くないなら何故勝てないのかと言われるのが怖くて。

「わかつてる、お前らは強い。オレ達なんかより遙かに強い」
「て、適当なこと……!」

それすらも否定された。

強いと思つた相手は自分たちのほうが強いと言つた。

強いから勝つ。強いほうが勝つ。

それは戦い全てにおいてそのはずで。

なら強いと言われた自分たちは何故負けて続けているのか。

「オレは、オレ達はただ先に救われただけだ、生きる意味と目的を見つけて出せただけだ。ずっとずっと辛い中で戦い続けて生き残つたお前からよりつええなんて口が裂けても言えない……だがよ、生きる意思つてのは……何よりも困難で、何よりもつええ」

「っ!」

そこが違うと天龍は言う。

「死んだやつが生きてるやつ之死を望むわけがねえ、戦友が戦友の沈む姿を見たいわけがねえ。だから強くなるうと思ふんだ、だから生きるつて困難に立ち向かうんだ。……オレ達はそう学び、信じていることができた」

何処までも、何処までも一途に。

生きろと望まれていると信じて愚直に生へとしがみつく。

それが海に臨む全ての想いだと、信じ抜く。

「扶桑は、山城が沈むことを望んでるのか? 散つていった戦友は由良が沈むことを待っているのか? ……オレにはそうと思えねえ。だが、ソレはお前らが見つけた答えが全てだろうよ」

天龍の言葉に俯く山城と由良。

その顔は何かに気づいたように、あるいは悔やむように。

「ゆっくり考えてみてくれよ、そのための時間ならオレ達がつけてやる、作ってみせるから」

そう言つて天龍たちは帰投すべく動いた。

立ちすくむ山城と由良の肩を後に続く龍田、夕立、時雨が一撫でしていきながら。

「山城、さん」

「……ええ、私達も、帰りましょう」

死に場所を見失った代わりに見せられたのは生きる場所。その場所を、何処か眩しいと感じながら、ゆっくり天龍達を追いかけた。

舞鶴鎮守府、あてがわれた一室。

損傷なく帰ってこれた墓場鎮守府第一艦隊の面々は軽くシャワーを浴びた後、部屋で合流した。

「天龍っ！」

「んあっ？ なんだよ……って!？」

ベッドに腰掛けた天龍へと夕立はダイブした。

驚きながらもなんとか夕立の身体を抱きとめた天龍は、目を丸くしたまま腕の中にいる笑顔の夕立を見やる。

「えへへー……天龍、ちよつと提督さんっぽい！」

「あ、うん。僕も思った。天龍最近提督に似てきたよね」

「そ、そうか？ ……へへっ」

照れくさそうに、だが嬉しそうに夕立の頭を撫でる天龍。

天龍にとって何よりの褒め言葉だと、その様子を見ていた龍田は思う。

改めて、舞鶴鎮守府の状況は想像以上に悪かった。

方面各鎮守府の戦力は極めて低い、具体的な数字を挙げてしまえば十隻の艦娘がいれば大きな戦力と呼べるほどに。

統括する軍部の内輪もめでもなんでもなく、ただ純粹に艦娘の運用を失敗し続けていた。

やることなすこと全てが裏目に出た結果であり、誰が悪いという明確なモノが存在していなかった。

そうしている内に自分たちの力ではもうどうすることも出来ない状況で。

まさに横須賀が執った南一号作戦が失敗してしまえば確実に舞鶴は崩壊していたと言える。

「それにしても……由良さんと山城さん。大丈夫かなー？」

「……わかんねえ。けど大丈夫にするのがオレ達の仕事だ、気張らねえとな」

二人だけではない。

舞鶴鎮守府に着任している艦娘、全ての士気が低かった。

二人と同じように絶望に沈む一歩手前で、ギリギリ生にしがみついている状態。

天龍達がやってきたことで作戦は成功した。

少なくとも戦力を整える土台は、時間は得られるようになるだろう。

だが、それだけでは足りない。

「なまじつか……簡単に勝っちゃったからね」

「むふー！ 夕立達、強いっほい！」

難しい顔を浮かべる時雨とは対照的に、撫でられるがまま胸を張る夕立。

そう、正面海域に居た深海棲艦の力は墓場鎮守府のものとそう変わりはなかった。

あの時と比べて大きく強くなったと喜ぶ気持ちはあれど、心配事ができた。

「ああ……このままじゃ、依存されちまう」

帰ってきた天龍達を迎えたのは大きな歓声だった。

勝利という希望に誰もが喜んだ。

それ自体は良い。

だが、あまりにも天龍達ありきの勝利だった。

「私も、言われちゃった。私達がいれば、舞鶴も安泰だつて」

龍田が困ったように話す。

自分たちはいずれ去る身で、舞鶴が安定する目処がつけばこの後呉や佐世保へと向かう手はずになっている。

海域自体は突破した。

残り掃討戦を幾らか行えばその目処は立つだろうが。

「このままじゃ、僕達無しじゃあ同じことになる、ね」

迎えられた歓声と同時に向けられた視線。

この人達がいれば。
という色。

「……自信、だけじゃねえが。足りてねえな」

「そうねー。この人にならつていうのも、圧倒的なカリスマを持つ人も……足りてないね」

かつて舞鶴にそういう人間がいたのかはわからない。

ただ現状そういった人間も艦娘もいないことはわかる。

舞鶴鎮守府の提督は、涙して自分たちを迎え入れた。

まだ戦っていないにも関わらず、噂に聞こえる墓場鎮守府の艦娘がやってきたという時点で勝利できると安堵した。

それほど追い詰められていたのだろう、艦娘と同じように。

決して意思が弱いわけでもなく、艦娘を無下にしているわけでもなかった。

ただ救われるかも知れないという可能性がやってきただけで涙するほどに追い詰められていた。

情けないと思つて良いかも知れない。

それでも天龍たちはそう思わなかった。

なんとかかしてみせると士気を高める事ができた。

問題なのは解決した後。

一つ解決すればまた一つ問題が出てくる。

慣れきったものではあるが、簡単に解決してしまうことが許されないという状況は初めてだった。

「提督なら……提督なら、こういう時どうする……?」

「ほいっ。」

天龍がそう呟く。

こういう時に提督はどうしていたか、そう考えようとした時。

「訓練するっほい！ 提督さんなら、竹刀で訓練するっほい！」

天龍の胸から身体を起こし、揚々と、朗らかに夕立はそういった。

「舞鶴の皆は弱いっほい！ だから鍛えないとだめっほい！ 夕立、皆を鍛えてあげるっほい！」

「……ふっ、あはは！ 夕立、そうだね！ そのとおりだね！」

そんな夕立のシンプル過ぎる言葉に時雨はお腹を抱えて笑う。

天龍は目を丸くしたまま思考を止めていたし、龍田も難しく考えすぎてそんな簡単なことに気づけなかったと苦笑いを浮かべた。

「そっか、そうだな……その通りだな夕立っ！　ちっとやってみるかっ！」

「っばい！」

自分たちがやっていた訓練。

何よりも心を鍛えることができたと思えるあの訓練。

「そうだね、ここの皆にはうってつけかも知れないね」

「ふふ、そうだねー。今度は受け止める側か……うん、やってみせるわ」

話は決まったと勢いよく立ち上がる天龍。

そう、提督の意思は何も海に刻むだけではない。

艦娘を、戦友を、家族を守るということだって含まれている。

だからこうして来たんじゃないかと、笑みが浮かぶ。

「よっしゃあ！　それじゃ行くぜっ！　墓場鎮守府第一艦隊、出撃だっ！」

「了解っ！」

笑顔のない鎮守府に笑顔を刻むため、揃って意気高々に戦場へと出撃した。

夕立のぼいぼい days ③

舞鶴の正面海域を突破してきて欲しい。

一口で言えば日本の安全確保に奔走しろという任務が提督の口から告げられた時、夕立はすぐ頷くことが出来なかった。

天龍、龍田は一瞬考える素振りを見せたものの了承するまで然程時間は要しなかった。

天龍にしてみれば提督の命令に逆らうといった発想を持ち合わせていないから当然と言えし、龍田だって似たようなもの。

二人共提督から発されるモノの成就というか、仮にちよつと大本営潰してきて欲しいなんて言われたとしても、出来る出来ないは別にして爛々と躊躇なく実行するだろう。

言ってしまうえばその意味を考えたりすることはあっても、無条件で受け入れてからなのだ。

ともかくにもまずはやる。

やってからその意図については考えることはある。

盲目的とは言わないが、それくらいに提督のことを信頼しているし好き、あらゆること全て叶えたいと思っていた。

では中々頷けなかった夕立と時雨はどうなのか？

言うまでもないが、天龍や龍田と同じくらい。本人たちに言わせてみればそれ以上に信頼や慕情を提督に対して持っている。

それでも違うところがあるとすれば、自身の力は提督の下でこそ振るわれるという思いがあるから。

提督と提督の大事を守ることができれば他はどうでもいい、といえは極論すぎるか。

それに近い思考を持っている二人だから提督の下を離れることにはそれなりに反発しようとした。

それなりに、という部分は提督の言ったお願いはその大事を守ることであるということも理解していたから。

その上で、いまいち気が乗らないということに対して駄々をこねると言った程度のもの。

ただその気持ち察している提督は言ったのだ。
頼むよ、何か一つできる範囲でなんでも言うことを聞くから。
なんて。

瞬間時雨の目は光った。言質取ったと言わんばかりに態度を翻して頷いた。

何をお願いするのかはわからないが、時折顔を緩めて危うく涎を零しそうになる姿が散見されることから欲望に忠実なものであることは疑いないだろう。

慌てた、というかすぐ頷くんじやなかったと後悔したのは龍田で、ちよつと泣きそうになっていた程。

勿論天龍も龍田も、という言葉が後に続かなければもう少し大変なことになっていたかも知れない。

そんな第一艦隊それぞれが了承ムードの中で夕立は言ったのだ。
今から夕立と真剣勝負をして欲しい、と。

驚いたのは夕立以外の全員。
言った夕立の顔は真剣そのもので、誰よりも先に喜びの声をあげると思っていた予想に反していた。

真剣勝負。

それが夕立の提督に対する言うことを聞くという提督の言葉に対する願い。

一番先に察したのは提督だった。

つい最近自分も似たようなことをしたと。

何処か整理しきれない想いを整理しようとしたと。

だから頷いた。

そしてそれを喜ぶこともなく、ただお願いしますと一言口にして一人道場へと向かう夕立。

夕立は、強くなった。

あの作戦で改へと至った夕立。

こうして家へと帰ってきて、冷静になった時に気づいた。

これだけ強くなったのだからもしかしたらという思い。

もしかしたら提督という力の壁を乗り越えられるのかも知れない

という期待。

そんな時だったのだ、大佐と提督の試合は。

自惚れていた、そう思った。

目を奪われたのは事実で、提督の勝利を心からうれしく思ったのももちろん。

だが、見た光景から理解できたのはまだまだ提督の力として至っていないという事実。

そう悟り、震えた。

「夕立、まだまだ強くなきゃいけないっぽい」

服を着替えながら壁の縁を掴んだと思っていた手を見る。

掴んだと思っていたものはただの窪み。

目指した力は遥かに高く自身を阻む。

「そう……」

かつて願った同じ景色を見たいという想い。

見るために登る高さは如何な程か。

「それが分かるくらいには……強くなつたっぽい？」

静かに瞑目した夕立。

何を思っているのか、それはわからない。

ただ、数秒後に開かれた目。

「確かめたいの、提督さん……夕立は、あなたの力になつてるかしら」

宿っていたのは強い決意。

今度こそ。

今度こそ頂を覗いてやるという光に満ちていた。

「ルールはこの間と同じ……いいのが入ったら一本の三本勝負でいいかい？」

いつかと同じ光景。

違うのは墓場鎮守府の艦娘だけではなく、元横須賀鎮守府、今はもう同じ提督の下に着任した艦娘達も居るということ。

二人は同時に頷く。

提督は……。

いや、提督も分かっていた。夕立が求めているものを。そしてそのためには本気で相手をする必要があると。

「夕立」

「はい」

いつもと違う夕立。

純粹に、天真爛漫に提督へと好意を向ける夕立はここに居ない。

ただ力を望む、一人の求道者がそこに居た。

「今回は、本気でやる」

「っ！……はいっ！」

一瞬息を呑んでしまう。

間違いなく、提督は言葉通り本気で夕立へと向かう心構え。

自身の艦娘を傷つけることはしたくないという考え、手を抜いて怪我をしない程度になんて考えこそが夕立を深く傷つけると理解したから。

光景は、同じ。

だが、雰囲気はまるで違う。

大佐と提督の勝負の時に感じたものと同じ。

第一艦隊の艦娘達が改という一つ上のステージへ至ったように、提督もまた一つ上のステージに至った。

整理できないものを整理できた、故に一皮むけた。

だからこれはまるつきり中身が違う。

その証拠に始まったもいないのに夕立は額に汗をにじませていた。相対しただけ、それだけで向かう気力をねじ伏せられてしまいそうになる。

折られてしまいそうな心を支えるだけで汗が浮かぶ程に力を要していた。

「一本目——」

時雨の手が、上がる。

同時に張り詰めた糸が。

「始めっ！」

切られた。

「突撃するっぽ——「ツメンっ!!」

竹刀が合わさる乾いた音。

同時にやってきた手への痺れ。

肩ではなく、面。

あの時とは違う、中途半端に氣遣われた一撃ではなく、本気の一撃。

「おおおお!!」

「——っ!!」

痺れに顔をしかめる間すら与えられず繰り広げられる怒濤の攻撃。

ただ必死に防ぐことしか出来ない夕立は。

歓喜に震えていた。

「一本っ!!」

「……」

「はあっ！　っ、はあっ！」

これだと思った。

目指す頂は遥かに高く、霞んですらも見えないことを実感した。

前にやった勝負。

それがお遊びに感じられるほど。

綺麗に入ってしまった胴への一撃。

思わずうずくまってしまった夕立へと視線を向けることなく、提督

は定位置へと向かう。

床に伝う汗、乱れる呼吸。

その全てが喜びだった。

「夕立、大丈夫？」

「へ、へーきっぽい！　まだまだ、これからよっ!!」

痛みを堪えて立ち上がり、竹刀を構える夕立。

そして、確信した。

今は、どうやっても勝てないことを。

勝負になっていない、これはただ力の上下関係を衆人に示すだけの行為だと。

「はあ……はあ……提督、さん」

「……おう」

表情を動かさず提督は応じる。

彼とて戦っているのだ、傷つけない相手を傷つけないければ傷つけてしまうことへと。

その事をとともうれしく思いながら、情けなくも思う。

「夕立……絶対、提督さんに勝ってみせるっぽい」

「ああ、夕立。楽しみだよ」

いつか、全力を躊躇わなく出してもらえる自分へ至る。

そんな辛い戦いをせずとも、そうしなければ戦えない自分になってみせる。

「二本目——」

だからこれはスタートライン。

ようやく初めて目の辺りにした力の壁。

その線を。

「始めっ!!」

踏み出した。

「っぽい!!」

「っつ……」

そうして今、舞鶴鎮守府。

やはりと言うかあつた道場。

天龍達の発案は首を傾げられながらも提督に受け入れられた。当たり前でもあつたのだ。

強くなる方法があると聞いて飛びつかない方がおかしい。

それはどれだけ士気が低い相手だろうともそう。

彼とて理解している。

今のままじや舞鶴は救われても日本は救われないと。

ならばどうするべきなのか、答えは単純明快そのまま強くなること。

「甘いつぽい、そんなんじや夕立には勝てないよっ!」

「はあ……はあ……そ、そんな事、言われても……」

由良が戸惑いながら膝を床に突く。

疑問はあった。

こんな事をして何になるのかと。

日中に行われる演習は理解できる。

いや、第一艦隊の動きはさっぱり理解出来ないものの、確かにこんな相手へと勝つことが出来れば強さの証明には十分だ。

勝つためにあれこれ作戦を考え実行する、それだけでも十分な経験であり鍛錬。

だが、このなんちやって剣道は一体なんなのか。

「ふーん……演習で私達に勝てない上に、こんなことでも勝てないんだ？」

「なっ!？」

近くで龍田が山城を煽る。

心底バカにしたように、姉を失って当然だと言わんばかりに。

「ぼっ、バカにしてっ!!」

「そうそう、そうやって向かってきて？ 私が悪いんだよ？ 遅くなっただけが」

吐き出してしまえと、我慢するなど龍田は誘う。

出鱈目に振るわれた竹刀を確かめるように受け止める。

かつてやり場の無かった想いを提督に受け止めてもらえたように。

繰り広げられる光景を見守るは天龍。

不思議に思う。

これが舞鶴鎮守府の艦娘を救う手段になるかはわからない、けど妙な確信があることに。

今、舞鶴の時間は動き出した。

そんな確信が。

やっていることは提督の二番煎じで、ただの流用と言えはそうなのかも知れない。

だが。

「てーい!!」

「まだまだっほい!!」

由良が竹刀を一振りする度に。

「私はっ……私はあっ!!」

「うん……それでっ!」

山城の竹刀が龍田の竹刀を打つ度に。

「天龍」

「ん? ああ、大丈夫そうか?」

鍛錬で怪我をした艦娘の手当をしていた時雨。コクリと頷いた後、天龍と同じように光景を眺める。

何処か懐かしげに見守る時雨は、今竹刀を握っている二人の気持ちが少しずつ前向きになっていく事を確信した。

「こうして傍から見ているとき……思うんだ」

「何をだ?」

感じ入るように胸に手をあてる時雨に、なんとなく言いたいことを察しながらも聞き返すのは天龍。

「僕たちに必要だったのは、きっかけ。戦ってもいいって思えるきっかけで、前を向いてそれを信じられる強さだったんだって」

「ああ……そうだな」

片や出撃拒否した艦娘。

片や役立たずと断じられた艦娘。

昏い想いに囚われて、前を向けなかった艦娘。

それは今、誰よりも前を向いて戦い、生き抜く覚悟を決めた強い艦娘になった。

その強さを与えてくれたのは提督。

誰よりも憧れ、慕い、共に生きたいと思っている彼の力によって。

「思えば、夕立は誰よりも早くそう気づいたのかも知れないね」

「夕立が? ……ああ、そうなのかも知れない、な」

戦いたいと最初から思っていたのは夕立。

強くなりたいと最初から願っていたのも夕立。

沈みたいとも、沈みたくないとも思っていなかった。

ただ真っ直ぐに出来ることを、なりたいものへと向かっている。

「提督の力そのものになりたいたって夕立は言ってたけど……もしかしたら、そんなきっかけを与える力にも夕立はなりつつあるのかも知れ

ない。って、最近思うんだ」

「……なるほどな。本人に自覚がねえのも、似てるっちゃあそうかもしれねえな？」

「あつたらそれはそれで嫌だなあ、たらしみたいじゃないか」

二人は笑い合い、夕立を見やる。

そこには相変わらずビシバシと由良に竹刀を振るう姿。

由良は涙目になってはいるが、何処となく楽しげで。

今までは色々な事を考えていた、考えすぎていた。

仲間を守りたいと思っても力が足りず、力をつけるためにどうすればいいか。

そんな答えの出ない悩みに迷い込んだまま戦いへと赴いて。

苦しいと思っていた。だから常に模索していた、楽になる方法。

こうして余計なことを考える余裕を奪われる機会こそ、由良には必要だったのかも知れない。

そんな機会とは山城にも必要で。

抱え込んだままの思いをこうしてぶつける相手が必要だった。

同じく苦しんでいる仲間にぶつけるなんて出来ない山城だったから。

そして、そんなきつかけを生み出したのは夕立。

「まだまだ……足りないっぽい!!」

夕立自身の成長にも必要だから、なんて打算で考え出したことではない。

ただこうして力を与える側としても、力を付けることでより提督に近づける。

そんな事を、時雨は思った。

「ともあれ……この調子なら」

「……うん、お役御免は早いかもね？ 早く帰って提督と……くふふ」

急にクネクネしだした時雨にヒキながらも天龍は。

「そうだな。……ああ、早く帰らせてえよ」

今頃何をしているのかと、墓場鎮守府^{我が家}へと思いを馳せた。

元横須賀艦娘がアップし始めたようです

「ちよつと、長門、落ち着きなさいってば」

「あ、ああ……すまない。だ、だがしかしだな……」

墓場鎮守府作戦会議室。

集まった艦娘は元横須賀鎮守府に所属していた艦娘達。

そわそわと落ち着かない長門に呆れた様子で注意するのは陸奥。

注意したのはいいものの、自分でも何処か浮ついた気持ちを隠せない。

それはここにいる艦娘全てがそうであるため、内心仕方ないかとも思っている。

墓場鎮守府に所属、と言うよりは墓場鎮守府提督の下に着任してから。

霞を除く艦娘がまだ正式に提督へと挨拶が出来ていなかった。

「や、ヤバイぞ鳥海……なんだか震える」

「そ、そんな事言われても……私だつてそうだし」

というのも仕方がないと言えば仕方ないことで。

提督への辞令が発せられてすぐに提督は手続きや会議のために墓場鎮守府から離れなければならなかった。

海上護衛作戦や第一艦隊への指示をするために一時的に帰ってきたことはあるものの、中々そういった時間をしっかりとれないでいたのだ。

「霞が羨ましい」

「ちよつ!?! や、やめてよ朝潮! わ、私別に……そんなんじゃないってば!」

霞は第三艦隊と共に海上護衛作戦へ出撃する際に挨拶も行えていいのせいか、羨ましいというか妬むような視線で見られることもしばしば。

ただ、皆に先んじて挨拶が出来たという点は少しうれしいことには変わらないようで、そういつた視線も理解の上仕方ないかとも思っているが、やはり早く挨拶して欲しいと思っている。

提督自身も挨拶がまだちゃんとできていないことに胸を痛めているのは勿論だが、ちゃんと迎えるための手続きと言われてしまえばそちらを優先しなくてはならないわけで。

「だけど、ようやくだね」

「はい……失礼をしないかだけが心配です」

川内が少し嬉しそうに、神通が心配気にそう言う。

そんな何処か足が地面につかない中、元横須賀鎮守府艦娘だけの呼び出し。

ようやくちゃんと顔を合わせる事が出来ると期待してしまうもので。

「まあまあ皆落ち着いてつてば！ 提督さん、いい人だから大丈夫だって！」

「こ、こら瑞鶴！ て、提督がいい人なのは間違いないけど……そんな知ったように言わないの」

何故か胸を張りながら言う瑞鶴を翔鶴が嗜めるが、何処か自慢気なのは否めない。

やっぱり摩耶がイラツとしてしまい、声を出そうとした所で。

「失礼します」

「っ!？」

会議室のドアが開く音に全員がビクリと肩を震わせた。

振り向きたい気持ちを堪えて一斉に気をつけの姿勢を取り、正面を向けば。

「皆さん、お疲れ様です。急な集合申し訳ありません」

「……」

そこに提督の姿は見え、大淀が柔らかく微笑みながら立っていた。

居ると思っていた提督の姿を目線で探そうとする一回の姿に大淀は笑みの種類を変えて。

「あ、あはは……えっと、申し訳ありませんが提督は今日こちらに来られませんよ」

「――」

その一言に全員が肩を落とした。

いや、一部の艦娘は肩を落とすどころかガクリとイスへ座り込む者もいる。

まあそれも仕方ないかと大淀は理解を示す。

自分でも彼女たちと同じ立場になればそわそわと落ち着かない毎日を送っていたらうことは簡単に想像が付く。

何より平たく言ってしまえば憧れの人とでも言うか、そういう人に会えるかもしれないなんて思えば尚更。

「ごほん。お気持ちは察しますが、そうも言ってられません。傾聴、願います」

だがそれはそれ。

大淀はここにいる艦娘達の気持ちも理解しているが、その彼女たちのためにと奔走している提督の姿も知っている。

中間管理なんて胃が痛むことこの上なしではあるが、両方へと介入できる自分が踏ん張らねばと眼鏡を光らせた。

「結論から言いましょう。ここにいる皆さんには、天覧演習へと臨んで頂きます」

さて、大淀が言った言葉に目を丸くして理解できないまま続けられた話。

「霞さん、あなたは海上護衛作戦に参加して頂きましたが……作戦開始前、漁師の方々はどうな御様子でしたか？」

「そうね……気分のいい視線を受け取れたとは言えないわね」

海上護衛作戦終了後の様子、艦娘や提督に対して涙を流しながら感謝の言葉を述べる姿からは想像も出来ない視線。

言ってしまうえば、何の成果も挙げられないモノに対して血税を絞られている。そういった気持ちから向けられた憎しみとも取れるものだった。

こいつらが役に立たないから、俺たちは苦勞している。

そんな認識が海で仕事をする人間だけに関わらず、多くの国民の胸に宿っていた。

「はい、我々艦娘に対して……というよりは軍に対して、ですが。国民の皆様は良い感情を持っていないのは事実です」

艦娘の数は、多い。

確かに一つの鎮守府を見ればそう多くないのかも知れないが、各地に点在する艦娘の総数を考えるとやはり多いのだ。

維持コスト。

そんな艦娘一人にかかるコストは国民一人より遥かに高い。

長いスパンで見ればそう人間と変わらないのかも知れないが、短期間で多くの糧を消費する。

出撃に消費する燃料、弾薬。傷ついた身体を癒やすための鋼材、ボーキサイト。加えて日常生活を送るための場所、食事等。

それらは当たり前のように国民の生活を圧迫する。

「ですが、南一号作戦の成功により少しだけ風向きが変わりました。国民にすればようやく生活が元通りになるかも知れないという期待を持てる位には」

「ふむ、だがそれがどう天覧演習に結びつく？ いや、確かに天皇陛下に我が力をご覧頂けるのはこの上ない名誉だが……はつきり言って、それは第一艦隊や第二艦隊の者がするべきだろう」

天覧演習。

天皇陛下の御前で行われる演習に力及ばない自分たちが出る。

名誉なことではあるが、あの作戦で戦果をあげた者が行うのが筋だろうと長門は言う。

他の艦娘も同じ意見のようで、天覧演習の言葉に一瞬目を輝かせていたものの、すぐそこに行き着く。

「はい。失礼を承知で言えば仰る通り。金剛型の方々を除いて、皆さんの練度は第一、第二艦隊の方々から見れば頼りないものです」

すっぱりと言い切った大淀の言葉に何人かの目が伏せられる。

とはいえこれは事実だ。

南一号作戦前、詰め込むように行われた演習ではあったが、そのどれも墓場鎮守府所属の艦隊に敗北を重ねている。

よほど特殊な状況設定ではない限り、勝ち筋すら見つけられなかつ

た。

実戦経験で言えば金剛姉妹が抜きん出て高く、大きく差が開き川内、神通と続く。

その他は似たり寄つたりの経験で、長門、陸奥に限って言えば超長距離からの狙撃練習ばかり行っていたため艦隊行動の経験はほぼ無いに等しい。

「ですので皆さんには艦娘養成訓練学校、略して艦学へと入学して頂きます」

「……はい？」

どやあ……なんて効果音が聞こえてきそうな大淀の顔。

陸奥が言葉を理解できず首を傾げるのに全員が続いた。

「え、えつと……艦学？　ですか、養成訓練とは一体……？」

「順を追って説明しますね」

眼鏡の位置を直す素振りを見せながら大淀は手元の資料を捲り口を開き説明を始める。

現在、日本の戦力は著しく低い。また、深海棲艦の戦力が高いこともあり、各鎮守府で艦娘を育成する余裕を生み出すことが難しい。

そのため何処かで基本的な艦娘としての動きを学び、最低限の練度へと至らせるための機関を作る動きがあり、横須賀鎮守府をそのまま機関施設へとするという話が決定されたということ。

その機関の効果確認、テスト、モデルケースとして旧横須賀鎮守府に着任していた艦娘が選ばれたと。

「……んだよ、それってつまり、アタシ達はここに着任出来ないってことか？」

摩耶が極めて不機嫌そうにそういう。

似たような気持ちなのか、それに続くように少し険しい目が大淀に送られる。

「いいえ、そうではありません。みなさんは間違いなく墓場鎮守府……いえ、提督の下に着任した艦娘です」

「だつたらっ！　……なんで、なのかな？」

一瞬声を荒げそうになる川内だが、大淀の安心させるような笑みを

見て語尾を緩める。

その顔は嬉しそうで。

ここにいる艦娘、全員が提督の力になってやると意気込んでいると確信できたように。

「この話は提督があげた話です。背景に軍部の思惑もありますが、皆さんが海で生き残るために必要だと思って出した話なのです」

「司令官が、ですか？」

意図を掴みあぐねるかのように朝潮は首を傾げる。

神通、霞はその言葉を深く考え込むように目を閉じた。

生きていれば、また戦えるから。

そう彼は言った。

自分の知らない記憶にある、帰ればまた来られるという言葉。

それを彼なりに変えて口から出たもの。

強く、強く艦娘の生還を望むもの。

「提督は、沈めない戦いを展開したいと言っていました。沈めない、沈まないとは、この鎮守府絶対のルールです」

中に込められた意味は違うのかも知れない。

提督自身が言ったように、また戦えるようになるため、戦力を無意味に削ることを良しとしないためなのかも知れない。

「そのルールを、広めたい。絶対のものにしたいと提督は言いました。そのための皆さんなのです」

だがそれもまた、提督の力になる術なのだろう。

彼の信念は勿論、多くの艦娘が力を付けながら生き抜くことは間違はなくこの日本を守ることになるのだから。

「それに皆さんの養成期間中、海上訓練等はともかく、座学の教師は提督ですよ？」

「皆っ！ 行くぞっ！」

「了解っ!!」

呆気なくくらいその一言で簡単に全員が頷いた。

そして大淀はコントよろしくその場で滑った。

「……いえ、わかってた。わかってましたけど……！ 私だって入学

したいくらいですけどっ！」

実はこの話、大淀だけではなく第二艦隊や第三艦隊、金剛型の面々は事前に知っていた。

海上訓練でそれぞれ誰が教師役になるかという部分を相談するためにだが、口を揃えて彼女たちも生徒として行きたいなんて言った経緯がある。

ちなみにその時も大淀は滑った。

「とは言え、さっきも言ったが。それが何故天覧演習へと結びつく？」

「はい。先程も言った国民感情への配慮と、軍部の思惑です」

なんとか立ち上がった大淀はお尻を払いながら口を開く。

国民感情への配慮。

簡単に言ってしまうえば、力を宣伝し感情の安定を促すというもの。

この力で日本の安定がこれから進んでいくと、もう心配はないと知ってもらうため。

「勿論長門さんが言われた通り力を示すものですから、第一艦隊と第二艦隊、第三艦隊から選抜し一つの艦隊として演習に参加します。そして……その選りすぐりの艦隊と戦うのが皆さんです」

「なん、ですって？」

陸奥が驚き、長門は絶句した。

「吉報が一つ、第一艦隊の皆さんが舞鶴方面海域を突破しました。この調子で行けば、およそ一ヶ月もしない内に戻ってこられるでしょう。その一ヶ月で、皆さんには墓場鎮守府と戦える力へと至って頂きます」

「――」
そしてその絶句は会議室で共有された。

軍部の思惑。

要するに効果があるのかどうか、という部分。

「天覧演習は三日にかけて行われます。どれだけ強くなったかによって変わりますが、一隊は墓場鎮守府と、もう一隊は横須賀、他の鎮守府から選りすぐった艦娘艦隊と演習を行って頂きます」

選りすぐったといえは聞こえはいいが、実のところ兵器派の息がか

かった鎮守府艦娘。

南一号作戦時、戦力温存という名目のもと両翼から撤退していった艦隊で、墓場鎮守府が倒れればそれに成り代わろうとしていた戦力。その戦力は、少なくともここに居る元横須賀鎮守府の艦娘よりは強いと断言できるほど。

仮にその艦娘達が南一号作戦で戦力温存という命令がなければ、もう少しあの作戦は楽に展開されていたかも知れない。

とは言えそういった戦力の中から兵器派は間違いなく選りすぐりの艦隊を率いてくる。

天覧演習で負けてしまえば、自身らの思想に基づく運用が非効果的だと知らしめてしまう事になってしまうから。

故に、必勝の構えを築いてやってくる。

墓場鎮守府の艦娘だつて手は抜かないだろう。

勝ちを譲るなんて真似をすればそれは軽率な侮辱だと理解しているし、何よりも。

「私達は全力を出します。提督の力は、ぽつと出に負けるなんてあつてはなりませんから」

それほど安っぽい絆ではないと不敵に笑う大淀。

そう、最高の見せ場で提督にここまで強くなつたと示す舞台でもある時に手を抜くという発想はない。

「……それに勝て、というのか。勝てると思っっているのか、私達が」

長門は声を震わせる。

作戦中に見た光景、あの力に挑み勝つ。

それはどんなに困難な任務なのか。

「勝て、とは言いません。皆さんは力を示すだけでいいのです……少なくとも、ここで戦えると納得できるだけの力を」

不敵な笑みを崩さず、大淀は内心で皆に謝罪する。

提督も、大淀も……もつと言えば長官でさえ、こういう形は取りたくなかった。

何の障害もなく受け入れ、共に過ごし戦いたかった。

だがそれは許されなかった。日本が、軍が、あらゆるモノが許すと

言わなかった。

やはり、提督の下で共に在るためには、すでに着任している艦娘達のように、何かの壁を乗り越えなければならなかった。

「ふ、ふふ……」

「長門、さん？」

俯き肩を震わせる長門。

見れば他の全員もそう、肩を震わせていた。

その光景に大淀は申し訳なさを加速させる。

試すような形にして申し訳ない。

簡単に受け入れられなくてごめんなさいと。

その想いを口から出そうとした時。

「胸が、熱くなるなっ!!」

「おうっ！ やってやるっ！」

「え……？」

勢いよく顔を上げたのは長門と摩耶。

「はい……元々、あの方にふさわしい自分になりたいと思っていたところでした」

「ええ、その通り。守られるだけの存在になんて、なりたくありませんから」

胸に手をあてて静かに力を漲らせる神通に続く鳥海。

「翔鶴姉えっ！」

「そうね、瑞鶴。やる気出てきたわね！」

やる気を漲らせるのは翔鶴型姉妹。

「ふんっ！ 私は別にクズのことなんてどうでもいいけど……弱いっと思われるのは認められないわっ！」

「こ、こら霞っ！ ですが……はい、私も強くなりたいですっ！」

「そうだね、強くなるためなら……何だってやるよ！」

提督のために、力を。

そう望むのは霞、朝潮、川内。

「あらあら。皆やる気になっちゃって……ねえ、大淀？」

「は、はいっ！」

頬に手をあてて笑う陸奥は、不意に大淀へと声を掛ける。

その目は挑発的に、あるいは挑むように。

「私達、火がついちやったわ。……こんな火遊びなら、いくらでもして頂戴？ 必ず望んだ……ううん、望み以上の結果を出してあげるから」

「は、はは……そうですね」

浮かぶ炎の煌きにたじろく大淀。

——これは、私達もうかうかしてられないわ。

口々にやってやると気炎を上げる面々。

その姿に頼もしさを覚えると共に、冷や汗を流さずにはいられないのだった。

提督とようやく挨拶出来たようです

提督ですが、教壇から見える光景が怖いです。

あ、いや。違うんだよ。

こうして艦娘がイスに座って机の上にノート広げてるのを見るとなんかこう、ビバっ！ 学園！ なんて思ったりするんだけどさ。

「……」

向けられる視線っていうのかね。

わくわくっつーか……キラキラっていうか……。

鳥海とか朝潮、神通なんかの真面目組は緊張してるみたいだけど。

「あーそうだな、まずはやっぱり授業と言えば起立礼だよな？ ……」

んー、長門、頼めるか？」

「了解したっ！」

うおっ!? そんな気合い入れんでも!?

ていうかすげえ……一糸乱れぬってこのことか……無駄に迫力あるぞこれ。

先生、やっぱり少し怖いです。

ま、まあとりあえず……だ。

「ありがとう。……まずは先に謝らせてくれ、済まなかった。皆とちゃんと挨拶をする時間さえ中々取れなかったというのに、こうした形がそのちゃんとする時間になってしまった」

これだわな。

忙しかったなんて言い訳でしかない。

やろうと思えば出来た、とは言えないくらい忙しかったけどそれでも理由にはならないだろう。

何よりも先にやらなくてはならない事だったはずだ。

「いや、大淀から事情は聞いた。むしろお疲れ様と言わせてもらいたい」

「ええ、そうよ提督。ほんとにお疲れ様です」

「……ありがとう」

周りの皆も同意を示すように頷いてくれる。いやあ、嬉しいね

ちよつと泣きそうだわ。

苦労も報われるつてもんだけども、その分皆にこれから苦労してもらわなきゃいけない分ちよつと気が引ける。

ほんとにどうしてうちの鎮守府へは普通に着任できないかね？

困ったもんだ。

まだまだ気張らねえとな……！

「うっし！ そんなじゃ申し訳ないが切り替えさせてもらうぞ。まずは……」

ちよつと溜めてみればゴクリという音が聞こえてきそうなくらい緊張している皆。

いやいや、そんな緊張しないでください。

「自己紹介っ！ そう、挨拶しようぜ！」

あ、霞が机に頭ぶつけてる痛そう。

あ、鳥海が口から魂抜けてる、戻ってこい。

「ちよつとこのクズ！ そんなのしてる場合じゃっ——」

「ありがとうございますっ！ ……さて、皆はどれくらいお互いのことを知っている？ 好きな食べものは？ 得意なことは？ 趣味は？ ……別にふざけてるわけじゃないさ、わかんなくてもいいけど、大事なことなんだ」

俺たちは戦に赴く者。

だが、戦うだけじゃないんだ。

「敵を知り己を知らば百戦殆うからず。なんて言葉があるが、そこに俺は一言味方もという単語を付け加えたいんだ。確かにここにいる皆はお互いのことをよく知っているのかも知れない、もしかしたら知らないのかも知れないけど……それ以上に俺が皆のことを知らない。だから教えてほしいんだ」

日本のために、人間のために。

もしかしたら俺のためになんて思ってくれているのかも知れない。

それはとても素晴らしいことで嬉しいこと。

だけど、戦いだけのために生きて欲しいとは思わない。

隣にいる誰かと笑い合うために、笑い合いたいと思える誰かを作っ

て欲しい。

友達百人出来るかな？　じゃねえけど。

戦いの技術以上に、幸せに暮らすための自分を作って欲しいんだ。

「ならば私からしよう！」

「おっ！　流石長門！　ビッグセブンは伊達じゃない！」

ちよつと沈黙が漂っていた所で長門が立ち上がってそう言ってくれる。流石だぜ。

「私が長門型戦艦のネームシップ、長門！　敵戦艦との殴り合いは任せてくれっ！　……着任したという言葉はまだ取っておこう、あなたの力になると証明できた時に言わせてくれ」

「おうっ！　よろしくなっ！　その力、自信。俺も見習わせてもらおうぜ！」

かっけえ……まじイケメン。いや、イケ艦娘。

その自信に満ちた振る舞いは見習わないといけないな。

「じゃあ次は私ね。長門型戦艦二番艦、陸奥よ。あまり火遊びは……えつと、その。提督が望むなら、いいですけど……よろしくおねがいします」

「なあ、陸奥さん……それはちよつと反則だと思うんだ……」

なにそれ萌え殺しかな？　それともハニートラップかな？　火遊びしちゃうよ？

げふん……ともあれ。

「陸奥」

「はい」

悶たい気持ちをなんとかこらえて陸奥と視線を交わし合う。

陸奥が照れたように視線を外そうとするけど、なんとかと言った感じで維持してくれている。

「俺は助けられたか？」

「……はい、これ以上ないほどに」

あの時交わした約束。

金剛を、自分たちを助けてくれと言った言葉。

「良かった。ならこうしよう、今度は俺を助けてくれ。俺には陸奥が、

皆が必要だから」

「……はいっ！ 任せて頂戴っ！」

うんうん、良かった良かった。

こうやって陸奥の笑顔を見れてほんとに嬉しいわ。

「翔鶴型航空母艦一番艦、翔鶴です！ 墓場鎮守府の皆さんに少しでも近づけるよう、瑞鶴と一緒にがんばります！」

「妹の瑞鶴です！ 翔鶴姉と一緒に提督さんのもと一生懸命頑張るわっ！ 改めてよろしくおねがいします！」

「ああ！ 二人共期待してるぞ！」

おー流石仲良し姉妹というか、同時に立ち上がって挨拶してくれた。呼吸バツチシだな。

後から聞いたけどそんなに実戦経験がないとかなんとか。

意外だな、なんて思ったりもしたけど、声をかけた時の喜ぶ顔を見て納得できた部分もあったり。

「二人共、誰かに近づくなんて考えなくていいぞ？」

「えっ!? そ、それは——」

「ど、どういう意味!? ……ですか？」

あーっと、言い方間違えたな。これじゃあ期待してないみたいに聞こえるか。

「いや、言い方が悪かったな。二人共それぞれ、二人だからこそ誇れる物がある。まだわからないかも知れないけど、それを見つけて活かすこと。それが出来れば誰に引け目を感じることも無くなるさ、一緒に頑張ろうな」

たとえば装甲空母になれたり。

何より示し合わせたわけでもなく呼吸を合わせられる二人。

きつと大きな力になれると確信できる。

そんな想いを込めて二人を見つめると。

「……はい、そのお言葉すっかり覚えておきます」

目を閉じて胸元で手を握って静かに頷く翔鶴。

「良かった！ 私、頑張るからっ！ 改めてよろしくおねがいします！」

笑顔で大きく頷いてくれた瑞鶴。

うむっ！ 可愛いっ！

「高雄型重巡洋艦三番艦の摩耶様……ち、違う！ えと、違います！
ま、摩耶です！ よろしくお願いいたしますれば!?!」

「……おーう」

摩耶様どうしちまったい。

姐さんと呼ばせておくれよ、ていうか。

「何だよ皆俺をどうしたいの？ 萌えなの？ 死ぬの？」

「え、えっと……提督？」

おっと、頭を抱えてる場合じゃねえや。

「加古にも言ったことなんだがな？ リピートアフターミー。摩耶様
だぜっ！ よろしくなっ！ はい、どうぞ」

「んなっ!?! え、えっと？ ま……摩耶様だぜっ！ よろしくなっ！

……こ、これでいいか？」

うむ、大変よろしい。

まあそうやってこう、俺に気遣ってくれるつつうかそういうのは嬉
しいんだけど、だ。

「あんまり気にしないで欲しいんだ。俺は皆と対等で、一緒に海へと
挑むものだ。言いたいことを言いたいように言おう、お互いに。そっ
ちのほうが好きだし、何より摩耶に似合ってると思うぞ」

「そ、そうです、か……じゃない、そうか？」

「ああ。お互いらしくいこう。そしてありのままを好きになっていこ
う」

「好きっ!?!」

！
いやまあ……俺はすでにぞっこんラブも良いところなんだけどな

あー可愛いんじゃあ……。

「鳥海です！ 司令官さんの下、何にも負けないようになりたいです
！ 摩耶共々、どうぞよろしくお願いしますー！」

「おう！ かしこまったぜ！」

顔を赤くしながら座った摩耶と代わるように敬礼しながらしてく

れた挨拶。

真面目だなあとという印象が強いのはやっぱあれかね、艦これのイメージと大淀……いや、眼鏡のせいか……？

「なあ鳥海」

「はっ！」

気になる……気になるぞお！

そう、眼鏡をしても美人だけど、眼鏡キャラは外すとなお美人つてのはお約束っ！

「眼鏡、外してみてくれない？」

「……は？ い、いえ、構いませんが……」

そういつて外してくればそこには。

「……おで、もうじんでもいい……」

「司令官さん!？」

眼鏡は卑怯。俺、覚えた。

皆して俺を萌え殺す気かと思っていたけど……人、これを自爆という。

「ありがとう鳥海……ええもん見せてもらったわ……」

「え、ええ……」

首を傾げながら座る鳥海。

ああ、霞さんの目がイタタタ……ありがとうございませすっ！

「川内！ 夜戦なら任せてくださいっ！」

「ああっ！ 頼りにしてるぞー！」

そう言えばうち、夜戦つてあんまりしてないな。

確か最初に夕立と時雨がしたくらいのはずだ。

敬礼しながら挨拶してくれる川内を見てふと思う。

多分、何処か危険な夜戦を避ける意識があったんだろう。

あの時漁船上で見た夕立の大破姿は今でも忘れられない。

「川内」

「はいー」

だけどきつとそうも言つてられなくなる。

これからどういう風に作戦が、指令が飛んでくるかわからないけど

攻略すべきはここからどんどん遠くなっていった。

それだけ時間もかかるし、予定通り、予想通りの時間になんて出来なくなるのは確かだ。

「本当に頼もしい。もう一度言うけど、頼りにしている」

「っ……！ はいっ！ 任せてっ！」

何かを感じ取ってくれたのか、着席した後ぐっと手を握りしめている川内。

自分の好きなこと、得意なことで頼られるのは嬉しいことだって知ってる。

だから似たような想いを抱いてくれてるんだろう、うん。本当に頼りにしているからな。

「神通です。……あの、どうかよろしくお願い致します」

「ああ、神通。こちらこそよろしくお願いします」

何処か頼りなさげに、弱々しく挨拶をする神通だけ。

目が、強い。

いや、ギラギラしてるって意味じゃなくて。

静かな決意を感じる。強くなってやるって言う決意を。

「なるほど、鬼の二水戦」

「えっ!? えっと、その……」

ああいや、そうわたたししないでくれ!?

「いや、すまん。……神通は、強くなりたんだなって思ってな。目がそう言ってる」

「……はい。強く、なりたいです。もう誰も沈めないためにも」
強くなるためには何でもする。

どれだけでも自分をいじめ抜く、耐えてみせるって目をしてる。

……何処か、俺に似てると思った。

だから。

「神通」

「はい……っ!? え!? えっと!? あの、その!? そんな事されると、

私、混乱しちゃいま……」

近寄っておもむろに頭を撫でた。

セクハラ？ 知らんがな。

「……うん、神通。よろしくな？」

「えうつ!? えと、えつと……はいい……」

ほすんと顔を赤くしたまま座る神通、可愛い。

川内も、神通も。

横須賀の那珂を沈めてしまったって話は聞いた。

俺もそうだったけど。多分、言って理解出来るものでもないと思う。

自分で気づかないと駄目なんだ、一人で先を目指しても限界があるってことは。

何かの壁にぶち当たって、一人ではどうしようもないって思い知って。

そんな大きい壁も誰かと一緒なら乗り越えられるって気づかないと駄目なんだ。

自分が強くなれば皆を守れるなんて幻想だ。

ワンフォーオールなんて言ってしまうえばそれで終わるけど、皆が皆のために。

今度こそはと思う気持ちは分かる。けど、今度こそは自分が誰かを守るように、自分も誰かに守られてるって気づいて欲しいな。

そんな思いで頭を撫でちまった。

撫で心地？ 最高でした。

「駆逐艦、朝潮です。勝負ならいつでも受けて立つ覚悟です！」

「良い意気込みだ感服したケツコンしてください」

「は、はい!?!」

黒髪ロングは正義、異論は認めない。

しかもさあ、真面目でさあ、可愛くてさあ……最高かよ。

長門？ ああもちろん素晴らしい！ だがよ、朝潮はこうさ……分かるだろ？ 紳士ならさ！

……ん？

「あ、ごめん。思わずキュウコンしてた」

「い、いえつ!? し、司令官が望むのであれば……!」

ああ駄目!? 皆の目が痛いっ!!
げ、げほん!

「いや、すまん。皆俺の嫁だから諦めてくれ」

「は、はあ……?」

「こーおのクズ! いやっ! 変態っ! 朝潮に変なこと言わないでよねっ!!」

「ありがとうございますっ!」

絶対調であるっ!

朝潮が首を傾げて座ると代わりにによつきり勢いよく立ち上がった霞にはお礼を。

もはやクズ呼ばわりは感謝しかねえんだよなあ……ママア……。

「霞」

「何よっ!」

とは言え霞からは挨拶してもらっているわけで。

あん時の焼きまわしをしても仕方ない。

「ガンガン頼むぞ」

「……っ!」

その氣勢も、俺への叱咤も。

第三艦隊の戦いを見て、思うこともあつたはずだ。

それをどう捉えて自分のものにするかはわからない、けど。

「あつたりまえよっ! ガンガン行くわっ! ついていらっしやいな!」

「ああ、置いていかれないように頑張るよ」

成し遂げてくれるだろうさ、霞なら。

「さて、座学を始める前に改めて皆に言っておくことがある」

自己紹介、挨拶をしてもらってすぐ。

いい加減俺も真面目モードにならねえとな。

「あの時言ったように、ここでは絶対のルールがある。それが沈まない、だ」

約束。

俺のポリシーであり、艦娘とした初めての約束であり……この海への約束。

「皆がどれだけ沈んだ艦娘を見てきたかはわからない。けどそれも今日で終わりだ。約束する、俺は絶対に皆を沈めないって」
間違ってる。

沈んでいい、犠牲にしていいいなんて間違っているんだ。

日本を、人を……何かを守るために何かを捧げるなんて絶対に間違っている。

誰がそれを良しとしても俺は絶対に良しとしない。

「今、この日本では多くの艦娘が沈んでいる。もしかしたら今この時でさえ誰かが沈みそうになっているかも知れない」

第一艦隊が舞鶴の海域を突破した。

その報せは知っている、とても喜ばしいことで感謝に絶えない。

だが、まだまだ多くの艦娘が苦しんでいるであろうことは事実だ。

「そんな艦娘を生まないために、この養成訓練学校計画はあり、成功させたいと思っている。皆、よろしく頼むな？」

「了解っ！」

よし。

全員がしつかり領いてくれた。

自惚れじゃなければ、だけど。

俺へのイメージって相当良いんだろうと思う、そのイメージを崩さないようにとは言わないけど少なくとも向けられている期待には応えられる自分でいられるように頑張らねえとな！

六駆の午後 ②

「~~~~!!」

「……で？ 電は一体何をしてるのかしら？」

第六駆逐隊。

朝の海上護衛作戦が終わり、損傷した暁がドックから帰ってきてみればいつかと同じく電が布団の上で暴れていた。

「あ、あはは……」

苦笑いを浮かべながら誤魔化すようにお茶に口を付ける雷と素知らぬ顔で続く響。

はて、と暁は首を傾げる。

南一号作戦終了後より電は司令官へと主砲を突きつけなくなったし、ぶっ放すなどもつての他。

故にこうしてやらかした！ なんて後悔や羞恥に悶えている電の姿を見なくなっただけははずで。

「龍田さんの気持ちを理解できたんだよ」

「はわわっ!」

「……あー」

合点がいったと手を叩く暁。

言ってしまうえばそう、照れ隠し等含めた霞の姿と自分を重ね合わせてしまっているのだ。

「こうやって受け継がれていくものなんだね……ハラショー」

「ハラショーじゃないのですっ！ 他人事にしないで欲しいのですっ！」

「だって他人事だし……」

軽微なものではあったが損傷してしまった暁と違い、那珂を含めたフラワーズは艦学計画が行われている横須賀鎮守府を見学してから帰ってきた。

ちやうど今日の予定は駆逐艦の海上訓練。当然、朝潮と霞に焦点があてられた訓練内容だったのだがそこで見た光景は。

——このクズっ！ こんなんじや駄目だったらっ！

——ありがとうございますっ！
なんてものだったわけで。

「でも何で司令官はありがとうって言うのかしら？」
「私も今度言ってみようかしらっ！ このクズっ！ もっと私を頼りなさいっ！ ……こんな感じ？」

こうして動くように。

と言った動きを示してその通りに動く練習とは違い、それぞれの適正を確認し、相談しながらより良い動きを追求する訓練内容。

それ故提督と対象艦娘、朝潮、霞と話し合いが繰り広げられていたため話す機会は非常に多かった。

提督の意見を尊重しがちな朝潮と対照的に、霞は毎度のように提督へとあれこれ熱を持って話している。

そんなことを言う霞の姿がやけにいきいきとしていたと言うか。構って欲しいが故に辛辣な言葉を向けているように見えたと言うか。

——わ、私もあんな感じだったのです……？

なんて恐る恐る言った電に響は躊躇なく頷いたのだった。

以来、顔を真赤にして帰ってくるなりベッドダイブバタバタ状態の電。

何気にそれは龍田も電の姿を見て通ってきた道だったりするとは天龍談。

司令官を喜ばせるためにという考えのもと、少し危険な作戦が雷と響によって練られている中少し落ち着いた電は顔を赤くしたまま。

「こ、このままじゃ駄目なのですっ！」

「……うん？」

すっくりと立ち上がり、高らかと言った。

片手を握りしめ目には何やら決意の炎を揺らめいている。

「え？ もう主砲撃っちゃ駄目よ？」

「そ、そんな事しないのですっ！ ……これは……そうっ！ ……名誉挽回なのですっ！ 汚名返上しなければならなのですっ！」

何を言ってるのかしらこの子は。と、首を傾げる暁と雷。

なるほど、どうやら電はああ言った行動を司令官にしていたということ汚点、恥と捉えているようで。

それを上回る何かをしなくてはならないと思い立ったようだ。とは言え響は思う。

なんだかんだで司令官も嬉しそうだったけどな、なんて。

「わかったわ！ 電がそう言うなら私にまっかせて！ 名誉挽回作戦！ 発令よっ！」

「あ、そう言えば今日司令官戻ってくるって鳳翔さんが言ってたわ！ すつごく疲れてるだろうから何か出来ればいいけどって考えてた！」

「きよ、今日なのですっ!?!」

最近の提督は忙しく、毎日同じ場所に留まっていることが少ない。墓場鎮守府に基本的に詰めている第二艦隊の面々が寂しそうにしているのは記憶に新しく、フラワーズもまた同じ。

第二艦隊は南一号作戦海域の掃討作戦、第三艦隊は海上護衛作戦と忙しく提督と中々顔を合わせられないでいた。

大淀が提督の補佐として行動を共にしていることを妬むくらいには寂しく思っているのだ。

いわばチャンス。

たまたまタイミングよく自分たちの業務は終了していて、この後の予定は何もない。

尻込みする電とは対照的に、響は残っていたお茶を飲み干し。

「ウラー！」

「えっ!?! ど、どうしたの響?」

勢いよく立ち上がって鏡の前に立つ。

帽子の角度をチェックし、髪を整えくるつと一回り。

「……ハラシヨ」

「え? え?」

鏡に映る自分の姿へ一つ頷いた後スタスタとドアノブに手をかけ。

「不死鳥の名は伊達じゃない。出るよ」

呆氣に取られる六駆を置いて出撃していった。

「……はっ!?!」

一番先に我へと返ったのは雷。

「こ、こうしちやいられないわっ! 司令官に頼られるのは私なんだからっ!」

後を追うようにバタバタと出ていき。

「暁ちゃん」

「何かしら?」

取り残された電と暁は顔を見合わせ。

「こうしちや——」

「いられないわっ!」

競うように部屋を後にしたのだった。

「おかえり、司令官」

「ん? おお、響! ただいま」

車から降りた提督の元へとトテトテと近づき柔らかくダイブする響。

優しく抱きとめる提督は、少し目立つクマがある目尻を緩ませる。

「あれ? 今日は一人名なのか?」

「んん……一人じゃ、だめかい?」

頭を撫でられる感触を堪能しながら提督を見上げる視線は少し潤んでいて、なんだか胸を高鳴らせてしまう提督は頬を指で掻きながら。

「いや、そんな事ないよ。出迎え、ありがとうな」

「うん」

頭に乗せられていた手を掴み、先導するように軽く引きながら共に鎮守府へと入る二人。

「今日見学に来てくれてたけど、どうだった?」

「どうって?」

腕に絡みついてくるやけにスキンシップ過剰な響へと、何だか照れてしまった提督はごまかすようにそんな話題をふるが、いまいち意図が伝わっていなかったようで首を傾げる響。

首を傾げながら上目遣いは反則だろなんて、自分の失策へと恨むようなご褒美をあげたいような複雑な心境へと陥ってしまう。

「ああ、いや。ほら、俺はなんか変なことしてなかったかなあなんて」「ううん、そんな事してなかったよ。いつもどおり、かつこいい司令官だった」

しれっとそんな事を言う響に提督はノックアウト寸前。

こんな事しれつと言う子だっただろうかなんて思いは消え去り頬を染めてしまう。

なんなの今日が俺の命日なのと頭を抱えたい提督にさらなる試練が食堂で待ち受けていた。

「おかえりなさいっ！ このご主人様っ！ ご飯にする？ お風呂にする？ それとも雷様にする!?!」

「……うぼあ」

響と共にやってきた食堂。

そこにはエプロンドレス——メイドさん風味にフリルを多くあしらった衣装に身を包んだ雷が胸を張っていた。

口から魂を飛ばす提督の隣で響は。

「……やるね」

「ふふんっ！ この雷様にまっかせなさい！」

一体誰がこんな事を吹き込んだのか。

後ろで顔を赤らめて慌てる鳳翔を尻目にバチバチと視線を鳴らし合う響と雷。

そこへ。

「お、おかえりなさいっ！ しれー……んっんっ、パパっ!!」

「パパ!?!」

服こそいつもどおりの物だったが、手を取り続ける響の反対側へと抱きつき、破壊力抜群の言葉を放ったのは暁。

もはや歩く屍と化した提督は……もう駄目かもしれない。

「くっ……暁、なんてあざといんだ……」

「や、やるわね……!」

「ふふーん！ レディの魅力にしれいか……パパもイチコロねっ!」

提督が帰ってくるとスキップして食堂に来てみれば何この光景と古鷹は提督の代わりに頭を抱えた。

その隣には加古がお腹を抱えて笑っている。

「……加古？」

「ひーお腹痛い……！ いやいや違うんだよ古鷹。あれ、那珂が今度のライブのために作ったって衣装であたしは何も言っていないよ？

……暁に入れ知恵はしたけど」

提督の後から食堂に入った大淀は思わず呟いた。

——暁さん……恐ろしい子っ！

もはや、あーとかうーとしか喋ることが出来ない提督の手が引かれ、なすがままされるがままに食堂席へと着席した提督。

思考力の鈍った頭の片隅で予感があった。

六駆はあと一人いる、そしてその一人が来た瞬間、自分は萌え死ぬだろうと。

そして、その一人が。

「し、しれいかんさん……お疲れ様なのです」

お盆の上にお茶を載せてやってきた。

雷と同じ姿で。

「あ、ああ。ありがとう、電」

内心ほつとしていた。

いや、間違いなく破壊力抜群の姿ではある電の姿。

とは言えやはり二度目、破壊力はそこまでなくギリギリ、辛うじて理性を復活させることに成功した提督。

だからこの後の攻撃に対してノーガードだった。

「はわわっ!」

「ちよっ!?! あぶなっ!?!」

狙いすました一撃だった。

お茶は緊張感からか震えていた電の手を伝い震えていて、いつ零してもおかしくなかった。

だからある意味必然、お盆の上に置いてあるお茶を提督が座るイスの前、テーブルに置こうとした時に零してしまうなど。

そしてそれが提督のズボンを濡らしてしまうなど。

「ご、ごめんなさいなのですっ!?!」

「い、いや!・電こそ大丈夫か!? 火傷してないか!? ってちよお!?!」
予め、念の為。

電は計算してやったわけではない。

当たり前に腹黒くはないし、そもそもそんな余裕がない。
だからこそ本気で慌てた。

濡らしてしまった、早く拭かなきゃとすぐさま提督の前に跪き、何処から取り出したハンカチでズボンを拭いた。

何処をととは言わない。

そして。

「ごめんなさい、ごめんなさいなのです……えぐっ」

「――」

涙目で提督を見上げながら一生懸命拭いた。

そう、提督の薄汚い欲望の象徴ごと。

「え? 提督? 提督!?!」

「た、大変!?! 提督!・しっかりしてください! 提督!?!」

予感は正しかった。

確かに提督は死んだ。

幸せそうな顔をしながら、一切の意識を手放した。

「はっ!?!」

「あ、気が付かれましたか?」

提督の自室、ベッドの上。そこで提督は目を覚ました。

傍らには鳳翔がほっと胸を撫で下ろしている姿。

なんだかんだと多忙だった提督の身体はこれ幸いと深く休息を求めていたようで、目を覚ましたのは提督の意識がシャツトダウンしてから一時間経っている。

大慌てしたその場にいる艦娘達だったが、ベッドへ運び身体を横たわらせてみれば寝ているだけだとわかって安堵した。

「え、えっと……俺は?」

「ええつと……はい。まあ、お疲れ様でした。ということだ」

——加古はお酒一週間禁止ね！

——そ、そんなあ！ 古鷹、勘弁してよー！

隣の執務室からはそんな声が聞こえてくる中、鳳翔は苦笑い混じり。

そんな鳳翔の顔を見て、さつきまでの喧騒を思い出す提督。

「……一体何だったんだ？」

「あ、あはは……。今日提督がこちらに帰って来られると聞きました。それで——」

——労おうとこの子達なりに頑張ろうとしてくれたんですよ。

鳳翔が続けながら向けられた視線の先。

「そっか」

「はい。ですので怒らないであげてくださいね？」

半身を起こした提督の足元に固まって寝ている六駆の姿。

一番近くにあった電の頭を優しく撫でる提督の目は穏やかで。

「怒るもんか、おかげで元気になれたよ」

「……それは、良かったです」

ほっと安心する鳳翔。

六駆だつて疲れていたんだろう、海上護衛作戦は漁の特性上早朝に行われる。

提督が帰ってきたのは夕方、作戦に合わせていた身体のリズム上、いつもなら既に眠気がやってくる時間。

それでも提督のためにとあれこれやろうとしてくれた想い。

それが提督の胸を温かくする。

「俺は、幸せもんだよ」

「ふふ、この子達が起きたら言っておあげてください。きっと喜びますから」

そのまま鳳翔は食事を持ってきますねと部屋を後にした。

柔らかい電の髪を撫でる提督の手に、顔を緩ませながら。

「しれー、かんさん……」

「えへへ……もおーつと、たよつて、いいの、よー」

「うらー……」

「れでいなら、とう、ぜん……」

可愛らしい寝言。

それぞれの顔はひどく穏やかで。

「ありがとう、な」

そんな顔を見せてくれることこそ、何よりうれしいと。

穏やかな時間に身を委ねた。

提督が鎮守府に帰ってきたようです

目の前にある紙束の山にため息が出る。

いやまあ久しぶりに帰って来たうちはやっぱ最高だし、六駆の皆は可愛かったし。

萌え殺されたおかげで十分な休息を取れたって言える。

けどもこればかりは仕方ない、久しぶりに帰ってくれば書類仕事溜まつてるってことなんてわかっていたはずだ。

艦学で俺が担当した座学……というよりは特徴把握とでも言うべきか。

建造されたてはやほやってわけでもない皆だから基本的なことなんて当然知っていたわけで、座学なんて改めてやるよりそれぞれの特徴を確認する時間にあてたわけだ。

そしてそれも一段落して一旦大淀に任せられたし、ゆっくり片付けていこう。

特徴把握。

そう、艦娘だって人間と同じように得手不得手がある。

たとえばフラワーズ。

電なんかは魚雷よりも砲撃のほうが得意だし、暁もどちらかと言えば砲撃のほうが上手い。

雷は魚雷のセンスに目を見張る物があるけど砲撃精度はイマイチ。

響で言えば砲雷撃戦よりも今やっている海上護衛作戦で会敵する潜水艦相手、対潜攻撃に関しての才能がメキメキと。

那珂に関してはオールマイティになんでもこなしてくれるが得意と言えば響と同じく対潜だろう。

最近毎日のように出撃してもらってるおかげであの海域に現れる深海棲艦の数も減り、一度に多くの戦力を必要としなくなったし。

まったくフラワーズは最高だぜ。

まあようやくゆっくり出来ると喜んでた那珂ちゃんには艦学で軽巡洋艦、川内と神通の教師役に出張って貰ってるけど……すまん、那珂ちゃん。見学に来たタイミングが良すぎたんや。

こつちにずっと詰めて貰っていた第二艦隊の任務、金剛型の皆と協力して南一号作戦海域の残党狩りも順調に進んでいるし。

それぞれにある程度の余裕が出てきただろうけど、那珂ちゃんと交代でその余裕をそれぞれ艦学で教師役をする時間にあててもらおうから……うーむ、ほんとにすまねえ……。

予め説明して快く領いてくれたけど……やっぱりちゃんとした休みは欲しいよな、ブラック企業かな？

そういう負担を減らすためについて意味もあつた特徴把握だけでも、こつちはようやくというか艦これの知識が役に立った部分大きい。

一番わかり易いのは摩耶だろうか、ゲームで対空番長なんて呼ばれていた通りやっぱり対空射撃が上手かった。

まあ防空重巡洋艦とも呼ばれていたし当たり前といえはそうなんだけどな。

同じ重巡洋艦の鳥海で言えば火力が高いことがゲームでの認識だったように、こつちでもその予兆は見られた。

なんと言うか相手の脆い所や瞬間をよく狙い撃てるって感じ、計算どおりとは鳥海談。

そういった感じに皆の特徴を把握してどうすればそれを活かせるかって私見を教師役をしてくれる皆に用意する。

空母の翔鶴、瑞鶴。戦艦の長門、陸奥には鳳翔を。

重巡洋艦の摩耶と鳥海には古鷹を。

既に行ってもらつてる那珂ちゃんには軽巡洋艦の川内、神通。駆逐艦の朝潮、霞の教師役に。

……教官役って言うべきかな？ いや、まあいいか。あんまり軍っぽくするのも嫌だし。

「しっかし、どうしたもんかねえ……」

書類の山が示す通り、墓場鎮守府の運営と教師役を同時にする困難さってのも当然あるけど。

こうして回りくどいことをしなくちゃならないのは長官が言った通り兵器派の人らのせいでもある。

曰く、思想汚染が云々かんぬん。

そう言ってる人が一番毒されてるじゃねえかと突っ込みたくなつたのは俺だけじゃねえよな？

とはいえ言っている意味がわからないでもない。

艦学計画が成功したとして、あくまでも将来的な話にはなるけど、変に考え方や動き方にクセをつけてしまつたら行き先で苦労してしまふ可能性もあるわけだ。

今回に限って言えばうちに着任する艦娘だと確定しているから、教師役に俺やうちの艦娘がなれる。だからそういう心配はないけど、目標はどの鎮守府にも即戦力として着任できるだからな。

それに収穫もあつた。

俺をそういつた役目として確定させたくないがために自分たちが教師役として影響を及ぼせられなくなつたわけだから。

権力つてのはやっぱり文字通り力なんだ。

使い方によつては誰かを傷つける暴力にもなり得るわけで。

そんな力を宿した腕を俺に振りかぶつてきて、それに反撃するのはあんまり自覚ないけど南一号作戦成功の立役者らしい俺なら簡単なんだらうけど、それをやってしまったらずっと一緒の構図になつてしまふ。

より大きな力でのつぶしあい程虚しいもんはないと思うから。

要するに相手と同じ土俵に立つて納得してもらわないと駄目なんだらうさ。

権力争いなんてしてる余裕は欠片も無いはずだけど、自分の後が確保できないとろくに前を向けない人間だっている、俺だつて権力じゃねえけどそうだから。

そう、だから結局艦娘が艦娘を教える学園という体に落着いたわけだ。

まだちゃんと決まつてるわけじゃないけど、横須賀鎮守府の建造履歴を見ればちょうど練習巡洋艦である香取、鹿島が未建造だったから、二人を教師役にできればななんて思つてる。

いや、香取はともかく鹿島が建造出来るのかはわかんないけど。

だけど結局天覧演習なんていう成果発表の形になるとは思わな

かった。

それも一つの権力によるつぶしあいじゃないのかと思わないでもないけど……正直そういった部分に関しては想像もつかない。いやだって俺一般市民ですし。

なんとなくそんな事に天皇さんを利用していいものなんかと言う不安というか、若干もやもやした思いはあるけど。

ともあれ天皇さんも了承したって話だしそこは納得しなくちゃならないんだろうな。

一ヶ月。

大淀の予想は今手元にある報告書によって正しいと証明している。舞鶴の状態、各艦娘の様子。

そういった内容に気分を落としてしまいそうになるけど、それを解決するための艦学計画。

「何としても成功させねえと……ん？ どうぞ」

報告書から目を離せばノックの音。

ノブが回されてドアの向こうから入ってきたのは。

「へーい！ マイフレンド 提督！ 戦果リザルトあがったヨ！」

「おお、お疲れ様金剛。疲れただろう？ 今お茶でも淹れるからソファに座ってくれ」

「サンキューー！」

元気にニコニコと入室してきた金剛。

いやあ、やっぱいいですね、可愛いですね美人ですね。

提督って呼んで貰えないのは彼女なりの考えというか整理の仕方だろう。

まあ俺も戦友になれるって言った手前それに異を唱えるつもりはないけど、ちよつと違和感あるのは仕方ない。慣れないとな。

「他の皆は大丈夫か？」

「イエース！ 鳳翔さんのおかげネ！ とは言えダメージもあって入渠してもらってるヨ」

出撃してたのは金剛が旗艦で、鳳翔、加古、榛名に霧島。

順調な残党狩りとは言え損傷する程度の敵戦力はあるってことな

ら、ある意味この構成にして正解だったのかも知れないな。

なんとまあ戦艦揃いで豪華かつ消費資材から目をそむけたくなるメンツだけど……フッフ、資材関係はすっぱり解決したからな、余裕が違いますよ。ある意味資材不足の悩みが解決したのが一番の成果かもしれないねえ。

まあその余裕を金剛型姉妹の中でも少し練度が低いように感じる榛名と霧島のために使えるなら良いってもんだらう。

ほすんと座った金剛を横目に、買ってから出番の無かった紅茶葉ビンの蓋を開ける。

えっと……まずは……。

「そかそか、無事に帰ってきてくれて何よりだよ」

「エへへ……」

何その照れ笑い、破壊力やバインでもっとやってどうぞ。

とと、温度は……これくらいいいか？ あ、そう言えば爺さんところから饅頭送られてきてたっけ、紅茶に饅頭……まあ無いよりはまし、か？

「報告書はまたすぐに見るけど。何か感想はあるか？」

「そうダネー……同じ艦隊で行動するとやっぱり鳳翔サンと加古サンの凄さが良くわかったヨ。あの二人だけ次元が違ったカナー……」

ふむ、改になった金剛から見てもまだそういう言葉が出るか。

鳳翔や加古の練度が高いのはもちろんだけど、そう差は無いと思うんだけどな。

しっかし、改……か。

以前妖精に相談した時に聞いた時は難しいって言われた改造。

まさか海上でそうなるとは思ってもみなかったな。

ちと聞いてみるか？

「ほい、お待たせ。金剛程上手く淹れられてないと思うけど……ああ、あとこの紅茶葉もあげるよ、姉妹で楽しんでくれ」

「わあっ！ サンキュー提督っ！ あとこれハ……お饅頭？」

「はは、ちょうどいいお茶請けが無くてな。要らなかつたら置いといてくれていいから」

そう言ってみれば少し慌てて饅頭に口をつける金剛。
もにゅもにゅと咀嚼してから。

「……フフ、紅茶とは少し合わないかもネ！　だけど、美味しいヨ！」
「ありがとう。今度はちゃんとクツキーでも用意しとくよ」
気を使わせてしまったかなと心配。

「ごまかすように饅頭を口に運んでみるけど……うん、やっぱり饅頭と紅茶はイマイチかも。」

もっかい謝つとくか和金剛へと視線を戻してみれば……何故かちよつと顔を赤らめてる金剛さん。

「ん？　どうした？」

「エッ!?　う、ううん！　なんでもないネー！」

慌てて紅茶を飲む金剛だけど、どうしたよ？　うん？

まあいいか。とりあえず、だ。

「残党狩りとは違って、少し聞きたいことがあるんだけどいいか？」

「え、あ、ハイ！　オフコース、なんでも聞いてくだサイ！」

ピシッと背筋を伸ばして聞く態勢を整えてくれる姿もいいね！

「あの時……空母棲姫を倒した時。金剛は改になった、という言葉で合ってるかわからねえけどそんな時の事を詳しく教えて欲しいんだ」

「ハイ、そうデスネ……」

んー……と口に手をあてながら思い返すように考える金剛。

第一艦隊の皆には結局ちゃんと聞くタイミングが無かったからなあ。

映像で見てた俺からすれば、轟沈を確信した瞬間に煙が晴れて無傷の天龍達がいたって感じだったし。

改ってわかったのは一つ多く装備を持っていたことからだ。

何度かこれ以上装備できないかって試したことがあるけど、持とうとすれば上手く艤装を展開できなくなったり動けなくなったりしてたからな。

置き換えてみれば改造でスロットが一つ増えたってことなんだろう。

「私にわかるコトは……あの時、不意に声が聞こえてきマシタ。その

声とスピークした後、身体に力が湧いてきて……知らない間に改と言っているマシタ」

「声？」

あそこにいたのは俺と金剛、離れて比叡達が戦っていて……後は空母棲姫くらいしかいなかったけど……。

「ハイ。聞き覚えがある声……多分、自分の声だと思えます。その声は言っていました、私の力になりたかったト。ようやく私になれたト」

「……ふむん」

イマイチよくわからないけど……。

つまるところ何かと対話して、その何かの力を手に入れた。その結果改に至ったってことだろうか。

本来の改造は一定の練度に至って必要な資材を用意してつてなもんだけど。

でもあの場所に資材なんて無かったし、ましてや工場みたいな設備もあるわけがなく。

自分の声、か……。

仮に金剛という自分がそこに居たとして、それがどうしたら金剛の力になる……うん？

「近代化改修……」

「ハイ？」

そうだ。

仮に自分がそこにいたのなら、そしてその自分から力を得たというのなら。

それは合成、近代化改修なんじゃないか？

もしそうだとしたら。

強化は確かに出来るだろう、だけど改造とは違う。

改造には資材が……いやいや待って待って。

「なあ金剛。建造される時の資材が混じり合った液体って、海の意味なんて呼ばれてるんだよな？」

「ええっと、ハイ。そういう風と呼ばれています、誰が言い出したのか

はわかりませンガ」

資材。

海上に何処からともなく生み出される艦娘専用のモノ。

今では製油所地帯から多少なりとも生成される燃料なんかもあるけど、元々は海が生み出していたものだとするれば。

それをまとめて建造ドックにぶちこめばそれは海となる。

海の意味。

それがその名前の通りのモノだとしたら？

建造ドックとは海の意味から艦娘を喚び出す装置なのだとすれば

？

海の意味が生み出した艦娘、あるいは深海棲艦や妖精。

そういう存在になる前の思念みたいなものが海に宿っていて……それが金剛、第一艦隊の皆の力になるとしたら？

「なるほど……」

「??」

あくまでももしかしたらで確証はない。

だけどそう考えれば……色々な疑問の答えが出てくる気がする。

一度建造された鎮守府にもう一度建造されないってのは、沈んだ、あるいは沈められた場所に戻りたいなんて思わないだろうし。

ドロップ艦娘がないってのは……海の意味がそうさせている、のか？ それは何故だ？

建造ドックを使えば生まれる可能性はある。だが、海上で出会うことは無い。

じゃあやつぱりそもそもこの考えが間違っているのか？

……わかんねえ。

「——ンドー！ 提督っ！」

「えあつ!？」

びっくりした！ え？ 何？ 金剛のドアップ？ 可愛い！

「ふう。どうしマシタ？ いきなり考え込んデ」

「あ、ああ……悪い、建造についてちよつと考えてて」

「それでシタカ……いきなり難しい顔して黙ってしまうノデ、何か失

礼なことを言ってしまったかと思いまシタ」

いっけね、そんな顔してたか……ほつと安心したようにソファに座り直す金剛にもつかいごめんなさいだな。

「すまん。金剛が何か失礼をとかそんなわけないから安心してくれな」

「ハイ、安心しまシタ。ですけど、何か変なコト言ったらすぐに教えてくださいな？」

んー……ああそっか。まだちよつと最初に会った時のこと気にしてるのかな？

何の問題も無いし握手もできたから解決万々歳なんだけどな。

「金剛」

「ハイ？」

名前を呼んでから手を差し出す。

戸惑ったように俺の顔と手へと視線を彷徨わせる金剛だけど。

「俺は、金剛の戦友ともだちだろ？ 変に遠慮するな。さっきだつて別に俺の頭を引っ叩いても良かったんだぞ？ 目を離しちやノーつて言ったデシヨ！ なんて」

「……」

目をパチパチと何度か瞬いた後。

「クスクス……ハイ、じゃあ今度はそうしマスネ！」

「ああ、ご褒美だから遠慮なく頼む」

手を握ってくれた。

うん、あの時はどさくさに紛れてみたいなものだったけど、改めて、な。

俺も、ようやくこの世界の影を掴めたのかも知れないんだ。

まだまだわかんねえことはたくさんあるけど、一緒に乗り越えていこうな。

那珂ちゃん頑張りますっ② 大淀のある一日②

——那珂のことは何があっても守るから。

私に向かつて私じゃない私へと向けて川内ちゃんはそう言った。

——今度こそ、守ってみせます。

神通ちゃんも川内ちゃんと同じように。

私は、何もわかっていなかった。

この世界に艦娘として生まれてから、初めてこの世界の片鱗を見たんだと思う。

フラワーズ……六駆の皆が特別ってわけじゃないって言うことを、思い知ったんだ。

とつても悲しかった。

鎮守府で見た皆の姿はいつでも幸せそうで。

お互いを大事に思っていて、慕っている提督の下で一生懸命働いて。

辛いことは当然あるけど、それでも皆で乗り越えて行くのが当然だと思っていたから。

乗り越える機会すら得られないなんて思ってもなかったんだ。

目の前にいた川内ちゃんと神通ちゃん。

二人共、ずっとずっと何かを悔いていて、今度こそって言う決意に満ちていた。

だから思わず泣いちゃった。

そんな悲しいことを言わないでって、よくわかりもせずになんか言っちゃった。

二人をすごく慌てさせちゃったけど、そうだよな？

自分を犠牲にしても守るなんて、全然嬉しくない。

一緒に頑張りたいって思ってる私は全然嬉しくないんだよ。

そう言ってみればバツの悪そうな顔をしちゃった二人。

私は、本当に何もわかっていなかった。

だから知りたいと思っただ。

悲しみの乗り越え方を。

「那珂さあ……どうしたらそんなに上手く動けるの？」

川内ちゃんがすっごく真面目な顔で聞いてくるけど、上手いかなあ？

うちでは……というか天龍さんに比べたらまだまだなんだけどな。

「那珂ちゃんすごいです。私も、当てられる気がしません……」

うーん、褒めてくれるのは嬉しいんだけどな……。

ていうか、うう、なんで那珂ちゃんが先生役をしないといけないの……？ アイドルなのに……こういうの苦手だよ。

だっておうちでは一番新顔で、練度もまだまだで。

第三艦隊の旗艦とは言うけれど、第一、第二艦隊の皆に比べたら全然なっていないのになあ、まったく提督ったら！

大体人使いが荒いんだよっ！

毎朝早くからの海上護衛作戦が落ち着いたと思ったたら今度は先生になってくれなんて！ もう！

「那珂ちゃん？」

「あ、ううん!? そう、だね……」

二人に苦笑いを返した後、手に持った書類を改めて見てみる。
夜戦。

その中でも目を引く単語はこれ。

提督から貰った教導計画書、川内ちゃんと神通ちゃんを軸とした夜戦部隊を作る計画が書かれている。

川内、神通、鳥海、朝潮、霞、長門。

あくまでも予定。

結果を見て改めて考えるって書いてるけど、提督が考える夜戦艦隊のメンツはこの六人。

霞ちゃんは第三艦隊にちよつとだけ入っていたし、これからも一緒になるのかな？ なんて思ってたけど違ったみたい。

じゃあなんで一緒にお仕事したのかなって思ったけど、多分うちの戦い方を見せたかったんだろうね。

そう、戦い方。

「多分、根本的な戦い方が違うんだと思うな」

「戦い方？」

ドラム缶、高速修復材の輸送任務はちよつと違うとしても護衛作戦、護衛行動。

それは相手を倒すよりも相手から守るって戦い方だもん。

守る人がそばにいて、自分が傷ついてなんていられない。

それは提督がずっと言っている沈むなって言葉もそう。

那珂ちゃん達は自分を犠牲に誰かを守るんじゃないかと、全てを守る戦い方をする。

二人にはごめんなさいだけど、相手の撃破は二の次なんだよね。

「うん。えつと上手く言えないけど……川内ちゃんも神通ちゃんも、相手を倒すためにどうするかって考えてると思うんだ」

計画書から思えばそれで正しいのかも知れないけど、やっぱり当たり前に自分が沈まないでって言葉は頭に来ると思う。

「うん？ そりゃこつやつて那珂から教えてもらうのもそのためなんじゃないの？」

「それは、そうなんだけどー。多分ちよつと違うと思う」

夜戦は、危ない。

視界の悪い中で戦うなんて当然危険で、すこしの危険が轟沈に繋がっちゃう。

うちで極端に夜戦が少ないのは、意識的か無意識かはわからないけどそういうことだと思う。

それでも、あえて夜戦艦隊を作るって提督は言う。

それはつまり。

「自分を守るためにどうするか。それを考えて欲しいんだよ」

「自分を、守るために？」

那珂ちゃんを教師役に選んだ理由。

それはその術を教えるため、だと思う。

危険いっぱい夜戦でも生き抜けるために。

「うん。敵を倒して皆を守るんじゃないんだよ、皆を守った結果敵が倒れる、なんだよ」

「……よく、わかりません」

だよねー、言ってる那珂ちゃんもよくわかりません。

ただ、その違いを二人からは強く感じるんだ。

さつきまでやってた演習でもそう。

敵の砲弾から味方を庇うって行動はおんなじだけど中身が全然違ったんだ。

川内ちゃんを狙った一撃。それから身を挺して庇った神通ちゃん。その庇うって目的はしつかり達成できたけど神通ちゃんは中破判定。

「神通ちゃんが川内ちゃんを庇ったの、ね。もし、あれが雷ちゃんなら川内ちゃんも雷ちゃんもきつと無傷だったと思うんだ」

「それは……単純に練度の問題なんじゃないの？」

ううん、違うよ川内ちゃん。

フラワーズなら、どっちも無傷。

そう言っちゃえば出来すぎかも知れないけど、少なくとも庇った側は小破以下で済んでいたと思う。

目的さえ達成できれば、自分の身なんて。

そんな風に言えば悪く聞こえちゃうかも知れないけど、そういうことなんだよ。

「二歩目が遅いんだ。自分の損傷を、庇うって行為にカウントしてないように思えるよ」

「っ」

あ、凶星……かな？ ごめんね、神通ちゃん。

凶星……違うか。

そう、それが普通で当たり前、なんだろうね。

やつぱり私はまだまだ何も知らないんだなあ……。

「二人共、さ。南一号作戦の前お話した事、覚えてる？」

悲壮、なんて言うのかな？ そんな決意、覚悟を伝えてもらったときのこと。

世界には私の知らない当たり前って言う名前の、悲しいことがたくさんあるって知ったときのこと。

「もしも、ね。今の二人に庇われたら……私、また泣いちゃうと思う」
あの時も泣いちゃったけど、今度は泣くだけじゃ済まないかも知れないね。

だってそうだよね？ 私のせいで誰かが、二人が傷つくってことだもん。

そんなの、私も……那珂も許せないと思う。

私は、那珂はアイドルだ。

皆の笑顔になるアイドル。

「私は皆を笑顔にするために笑顔を浮かべるけど、その笑顔は皆のおかげで浮かべられるんだよ」

我が身を賭してなんて嫌だ。

危ないでしょ、しつかりしてよね。なんて、笑って言い合いたい。

「私を、那珂を大事に想ってくれるのは嬉しいんだ。沈んじやった那珂とどんな風に過ごしてきたのかはわからないけど……そんな風に想って貰えるなんて、きつと嬉しかったと思う」

だからごめんね那珂ちゃん。

私はあなたを許せない、悲しさから来る決意を二人にさせたことを、許さない。

笑顔で笑顔を奪ったあなたを、きつとずっと許さない。

誇りには思うよ？ もちろんだよ。

自分を犠牲に誰かを守るっていうのは、きつと尊いこと。

だけどそんな当たり前を知らない私には関係のないこと。

「それでも那珂も、私も。二人が傷つくのが嫌だって言う気持ちは一緒。あの時はただ嬉しくないって喚いちゃっただけだけど……今ならはつきり言えるよ」

二人がじつと私を見てる。

あの時、もう一度お話したいから絶対沈まないでと言う約束を守ってくれた二人が。

私の答えを聞くために、目の前にいる。

「私は……那珂はもう大丈夫。絶対に沈まない。だから、二人も沈まないで？ 一緒にずっと、ずうっと笑って生きよう？」

那珂ができなくて、私ができること。

私にはできそうにもないことをやった、那珂への弔い。

それが、笑って生きること。

「……那珂、なかあ………」

「ごめん、ごめんなさいい………」

……ああ、やっぱり提督はすごいな。

私はこうして遠回りして、ようやくできたこと。

なのに提督はずっと……きつと、提督になってからずっとこうやってきたんだ。

悲しみも、涙も受け止めて。

皆が笑顔になれる未来を探して前を向いて。

そんな人のファンになれて、とつても嬉しいよ。

「も、もー！ 泣かないでつてばっ！ 那珂ちゃん笑顔にしたいんだよ!？」 泣いてもらいたいわけじゃないんだつてばっ!？」

川内ちゃんも神通ちゃんもお姉ちゃんでしょ!？ あーもう！

困っちゃうなあ！

でも……うん。

きつともう大丈夫。

これからは、笑顔で前を進むだけだから。

提督が鎮守府へと帰ってしまった。

ああ、いえ。

当然のこととここにずっといるわけにもいかないのですけど……
やっぱり寂しい。

……はっ!？」

何を言っているのですか大淀！ 私を信頼して養成校を任せて頂いたのですよ！ 寂しがっている場合ではありません！
それに。

「……やはり、すごいですね」

残していつてくれた各艦娘のデータ。

提督の私見を交えたその完成度は極めて高い。

それぞれをどういった形で運用する予定かといったところまで含めて、思わず舌を巻いてしまいます。

予定と言つてもどちらかと言えば指針みたいなもので。

まずは天覧演習に勝利することが最初の目標ではあるのですが、それでも、です。

第一艦隊へは翔鶴さんと瑞鶴さんを。

第二艦隊へは陸奥さんと摩耶さんを。

そして残りの方は夜戦を主目的とした艦隊に。

第一艦隊へ正規空母のお二人を入れた理由は恐らく天龍さんたちがある程度自由に動けるためにでしょう。

鳳翔さんのように、合間を正確に縫った艦載機の攻撃はまだまだできないでしょうけど、アウトレンジからの攻撃は目を見張るものがありますし。

何よりお二人の呼吸。

独立して二人だけを見ればあの阿吽の呼吸は得難いものです。

第一艦隊の大きな力になるでしょう。

第二艦隊は少し重い編成……とでもいいますか。

駆逐艦のいない編成で、少し護衛能力に欠けるようにも思えますが

……鳳翔さんを活かすため防空能力の高い摩耶さん。

そして戦況を広く見ることが出来る私が陸奥さんの護衛に、加古さんと古鷹さんは変わらず。

これはこれでいい形のように思えます。

資材の心配が無くなったからこそその編成とも言えますね。

そして金剛型の皆さん。

榛名さんは第三艦隊が護衛戦以外の時に編入する形を取るようですね。

金剛さん、比叡さんは目的によって翔鶴さん瑞鶴さんと入れ替えていくみたいですし、陸奥さんの代わりに霧島さんが控えている形。

練度だけで言えばこの養成校の皆さんよりも遥かに高いものを

持っているでしょうし、決戦や大きな作戦の時は金剛型の皆さんがメインになるでしょうか。

もちろん状況によって第四の艦隊を編成するという考えもあるとは仰っていましたか……さて、どうなることでしょうか。

「改めて……大きくなりましたね」

感動すらしてしまう。

私が着任した時を思えば急変とも言っていない戦力の拡大ぶりだ。

急激な変化はやはり我々艦娘ももちろんそうだけど、提督の負担も大きいでしょう。

それだけに、この僅かな期間で各艦娘の特徴を把握して将来図まで思い浮かべられる提督の凄まじさが感じられます。

一般人。

そう、彼は一般人だったはず。

なのにも関わらずどうしてここまでの能力を持っているのかが不思議で仕方がない。

はつきり言って、提督養成校で主席を取っていてもおかしくないレベルでしょう。

確かに日夜努力している姿は知っています。

ですが、言葉は悪いですが異常とも言えるでしょう。

顕著なのは摩耶さんの防空能力を見越していたこと。

確かに彼女は防空巡洋艦という名前を持っている、だからそれに足る能力を持っていておかしくないと思えますが。

本人ですら半信半疑だったその力を実感させる等、並大抵のことでありません。

「一体、あの方は何者なのでしょう……」

そんな風にも思う。

いえ、もちろん親愛なる家族、最愛の提督であることに間違いはないのですが……。

「はあ……提督……」

勝手に口から出てきてしまう。

それも仕方がないのです。

南一号作戦で見せていただいた姿はもう言葉にできません……格好良すぎます……。

普段なら、普通ならあんな危険なこと絶対に止めるべきなのに、あの凛々しい顔で命令されてしまったら……もう……。

「って何を思ってるのですか私はっ!？」

「ほう? この長門にすら気づかず何を考えていたのか、是非教えてもらいたいな」

「ひゃい!？」

びびび、びっくりしましたよう!?! いつからそこに長門さん!?!

「あらあら……ほんとに気づいていなかったのね」

「やれやれ、あの提督の右腕とは思えないな」

み、右腕っ!?! 私がつ!?!

て、提督の……右腕……。

「ふへへ……」

「……今なら簡単にその腕になりかわれそうだが。陸奥、どう思う?」

「そうね、このまま放って置いてそうしちやいませしょうか?」

はっ!?! い、いけない! そんなこと許しませんよ!?!

「申し訳ありません。それで、どうされましたか?」

「急に戻らないでくれ……」

「うふふ。これもあの方のせいなんでしょうね? まったく罪な方

……それはさておき、大淀? これからについてちよつと聞きたいん

だけど、天覧演習には私達の中から六人選ばれるでしょう? その六

人はどうやって選ぶのかしら?」

あ、そうですねその事をお話していませんでしたね。

実のところ墓場鎮守府から天覧演習に臨むメンバーは決まってる。第一艦隊のメンバーに加えて、鳳翔さんと……金剛さん。

私や古鷹さん、加古さんが選ばれなかった理由は練度が足りないとか

かそういう意味じゃなくて、余所から合流した艦娘であつてもうちなら上手くやれるというアピールなんて意味合いが強い。

だから今頃金剛さんは第一艦隊の動き方を必死で学んでいるはず

……きつと提督から。……羨ましい、じゃなくて頑張ってもらいたいです、私達の分も。

「こちらのメンバーと墓場鎮守府の艦隊で演習を行ってもらい、その結果で選抜する形になります」

「ほう？」

「墓場鎮守府の艦隊って……具体的に？」

つまり残るは私と古鷹さん、加古さんに加えてフラワーズの皆さんに金剛さんを除く金剛型の方々、計十一人。

内訳はまだ決まってないですが、五隻の艦隊と六隻艦隊になると思われる。

もちろん決まってもそれを教えるわけにはいきませんが。

「それは秘密です。ともあれその演習内容で選抜します、こちらがどう艦隊を編成するかは……自分たちで考えてみてくれと仰せつかっています」

「へえ、私達で決めるのね」

「なるほど。確かに相互理解に努めるとも提督は言っておられたからな、領ける」

うんうんと頷く二人。

と云うかなんだか提督への信頼が厚すぎないかしら？ そこはちよつと何かあるのではないでしょうか？ ほら、決めるのは提督の仕事だろうとかなんとか。

「あ、あの？ よろしいのですか？ 責任放棄とか思ったりしていませんか？」

「何を言う！ あの方がそう言ったのなら、この長門っ！ 全身全霊で応えるのみだっ！」

「ええそうよ、きつとそういったことにも意味があるのでしよう？ ならそれをしつかり探さない」と

あ、ダメです。これはダメだ。

二人共すつごく目がキラキラしています。提督の言葉を借りればあかんこれです。

というかお二人に何があったのですか。

尋常じゃないくらい信頼されてますけど提督？　ほんとに何したんです？

「あ、あはは……」

「だとするなら早速皆で話し合わないとなっ！　ふふ、胸が熱くなってきたぞっ！」

「ええそうね、三番砲塔が気になっちゃうくらい」

うわあ……すつごく燃えてるなあ……。

あ、いつてらっしやいませー……。

「提督……大淀は、ちよつとどうかと思います」
罪作りにも程がありますよ？

きつとあの二人、提督が言うことならなんでも素直に聞いちゃいますよ？

ああ、そう言えば他の方もそんな感じだった気もします……。

唯一の救いは霞さん……いや、あの子も大概……ううん。

「あ、頭が痛い……」

どうしてこうなったのですか……。

ま、まあ悪いことではない、無いですよ？　もう私にはわかりませんよ……これ。

と、ともかく。

「順調……ええ、そうですね。順調と言っていいでしょう」

皆さんの練度も、気持ちも。

随分と整ってきた。

ならばあとは。

「前を向いて進むだけ。そうですね？　提督」

ふふ、私も人のこと言えませんね。

あの人のためなら何でもできる。それはきつと、皆一緒でしょうから。

鳳翔さんの花嫁修業 ②

嫉妬。

一言で言ってしまうえばそんな感情。

ただただ作戦の成功を喜べただけならどれだけ良かったでしょう。ただただ後進の育成、その成長に喜べただけならどれほど。

どうしても羨ましいという気持ちに心が巢食ったまま、そんな想いに囚われているのがわかる。

今の私は誰にも見せられないとも思います。

あの方が仰ったように、私の背を見て育つモノがいるのなら尚更。

だから私は精一杯強がる。

気にしていない、今できることに集中することしかできない。

そう思い込むことしかできない。でも。

「悔しい、ですね」

改へと至った第一艦隊の皆へ。

正規空母であるというだけでいずれ私なんて遥かに及ばないだろう高みへと至る翔鶴さんと瑞鶴さんへ。

提督もやっぱり罪な人だと思えます。

第一艦隊の皆さんだけならまだいいのです。

別格。そんな思いがあることは否定できませんから。

ただ、あの二人。

日に日に力をつけていく姿を見て、見せつけられて。

そうしているのが自分だとしても、悔しいという思いはどうにもできない。

軽空母、古い古い軽空母。

全ての空母の母といった存在だなんだと言われても力をみれば時代遅れも甚だしい。

搭載できる艦載機の数だって、後進の空母達に比べればなんて頼りないことか。

やっぱり逃げることはできないみたい。
でもどうにも足が進まなくて。

「ほうしようさん?」

「…………ごめんなさい」

肩にいた妖精さんへ謝ったのは何故でしょうか。

慕ってくれている艦娘に見せなかった姿を見せてしまったから、なのかもしれない。

もう目の前に見える鎮守府^{我が家}。

帰ればきつと温かい笑顔で皆が待っているって確信できます。

でもそんな中でこんな顔をしたままで入ることはできません。
だから。

「ちよつと、寄り道しましょうか」

返事を待たず、そつと波止場へ向けて歩みを進めた。

「かぜがきもちいいです」

「ええ、さすがにきぶんがこうようします」

肩から離れて目の前を飛び舞う妖精さんに少し笑顔を浮かべる
ことができます。

戦いの中波立つ水面とは違い、何処までも穏やかな海。

時間が時間ならもつと綺麗だったのかもしれないけど、既に照ら
してくれる太陽は沈んでいることが残念に思えます。

今日で、教導任務は終わり。

やれることはやった。

教えられることは全て教えられたと思います。

長門さんと陸奥さん。

お二人は流石というべきか、飲み込みが早く教えることなんて殆ど
ありませんでしたし。

空母のお二人にしても、何より足りなかった自信さえつけば後は水
を得た魚のよう。

改めて、羨ましいと思いました。

私が鍛錬をつみ続け、得たものを簡単に吸収するその姿。

未熟な部分が見えど、成果は私以上のものを叩き出す光景。きつと彼女たちに限らず、あの学園にいる皆はすぐに提督の力になれる。

改めてここに着任した時、私よりも遥かに頼られ、遥かに優れた戦果をあげる。

そう、確信できてしまう。

嬉しいという気持ちは確かにあります、あるのです。

でも……。

「……そういうもの、なのでしょうか」

座ってみれば地面は少し冷たい。

その冷たさから逃れるように膝を抱えてみますが、それほど変わりもせず。

先に散った彼女たちもこんな思いを抱えていたのでしょうか？

私に戦う術を教えてくれた方々も、こんな悔しさを覚えたのでしょうか？

そんなことはないように思えます。

やっぱり私は、提督の頼れる力でありたいと思っている……いえ、想いすぎているのでしよう。

戦力が増えて、大きくなって。

提督の力が思う存分に振るわれるようになると喜ぶべきことなどはずなのに。

何処か、それは常に自分でありたいなんて思っている。

「強く、なりたい」

そう思う。

ずっとずっと思っていたことですけど、今尚更強く思います。

提督に頼られ続ける自分で居たい。

艦娘に頼られ続ける自分で在りたい。

そんな自分を誇りに思い続けたい。

……わかっています。ずるい私はわかっているのです。

たとえ強さが無くともそう思われ続けるだろうなんて。

慌ただしくここを出発した第一艦隊の皆さんだって、変わらない信

頼を私に向けてくれていて。

あの時第一艦隊の皆と艦隊を組んだ古鷹さんと加古さんだつてそう。

私の言うことを流石だと頷きながら聞いてくれた学校の皆だつてそうでしょう。

少しでも気を抜けば、緩めてしまえば甘えてしまいそうになるそんな考え。

そう思ってしまう自分が恥ずかしい。

「鳳翔さん」

「え？」

呼ばれる声にいつの間にか俯いていた顔をあげれば、二人の妖精さん。

飛び回っていた時の笑顔を潜めて、至極真剣な表情を浮かべていて。

「強くなりたいですか？」

いつもの雰囲気をまるつきり感じない。

それは何処か歴戦を思わせる戦人のモノで。

「私達なら……鳳翔さんの力そのものになることができます」

何かの決意すら感じるその表情。

生唾を飲み込んだことすら気づかず、飲み込まれてしまいそう。

「艦載機のパイロットなんて役目じゃなく、鳳翔さんの力に」

「鳳翔さんが望むなら、私達はいつでも……」

それは魅力的すぎる誘惑。

そう話す二人の目が、雰囲気誘われて、私は――。

「はいストップ」

「きやつ!？」

な、なんですか!?! 敵襲ですか!?! 目の前が真っ暗です!?!

「何をされるのですか?」

「頭にきました」

え、えつとこれは……軍服?

え? 何で……つて、提督!?!

「まったく、帰りが遅いから心配したぞ? ……ってはいはい、わかったから止めてくれ。赤城、加賀」

「っ!」

「なっ!」

赤城、加賀……?

え? 一航戦の? 何でそんな名前が……?

「ああ、まあうん。後で説明するけど今は置いといてくれ。とりあえず自己犠牲精神はノーサンキューってことで」

「で、ですが!」

「鳳翔さんの為になら!」

自己犠牲精神?

「沈んで尚俺達の、艦娘の力になろうとしてくれることには感謝の言葉しか出ない。けど、今は妖精とは言え元艦娘。ならそういうのは認められないな」

そういう提督の顔は真剣そのもので。

目の前を飛んでいた妖精さんが驚いたように固まって……消沈したように俯いてる。

元、艦娘……。

妖精さんが?

「鳳翔」

「は、はい!」

思わずびくっと立って敬礼。

こうして真剣な顔をしている提督には敵いません……。

「鳳翔は、強くなりたいか?」

「……はい」

「それは、この二人を犠牲……といえば言葉が悪いな。この二人の力を貰ってでもか?」

犠牲……? 貰っても?

まさかさつきのは……。

「……」

言葉が、出ない。

思わないと、喉までのぼってきているのに、出かかっているのに。口から言葉が発せられない。

なんで……………？

教えてもらったはずだ、犠牲なんて必要ないと。

それなのに……………私は……………！

「……………ありがとう」

「……………え？」

何故、お礼を言われるのです？

何故、嬉しそうなのです？

私は……………浅ましい。

力の誘惑に負けそうになっているのですよ？

あなたが赤城と、加賀と呼んだ二人を犠牲にしようとしていたのですよ？

「鳳翔、海に立ってくれないか？」

「……………はい」

わからない。あなたは一体何を……………？

わからないまま、艦装を展開して、海に立つ。

背後から提督と、心配そうな妖精さん二人の視線を感じる。

「目を瞑ってくれ」

「はい」

元々暗かった海。

目を閉じることで完全な闇が広がる。

感じるのは微かな波の感触と、頬を撫でる海風。

……………そして。

——こんばんは、月が綺麗ですね。

「っ!？」

「そのまま」

思わず目を開けそうになったところで提督の声。

ギョツと目に力を入れる。

そうすれば全ての音がなくなった。

前から感じる微かな温もり。

目を閉じているはずなのに明るくすら感じるそれ。
光。

そう、光を感じた。
だから。

「こんばんは、いい夜ですね」
返事をした。

——随分と悩まれていたようですが、どうされましたか？
……強く、なりたいんです。

——あら？ もう既に随分と強いと思いますけど。
いいえ、私は弱い。

少なくとも、後進に怯えてしまう程には弱い。

今の居場所を奪われてしまうんじゃないかと怯えてしまう程、弱い
です。

——気の持ちよう……なんて言えますけど。そんなことはないで
しょう？ あの方も、仲間も。そんな風には考えないって理解してい
るのでは？

……はい。

そうです、理解しているんです。

私があるはずのないことに怯えていることくらい。

そんな事に怯えてしまうこと自体が皆への侮辱になってしまっ
ていることくらい。

それが、回りくどくもたどり着いた私の弱さであるなんて。理解し
ているんです。

気にしていないような振りをして、強がって。

弱さを預けることができない、そんな私だって。

——そうは言いますが、あなたはしつかりと与えられた任務をこな
しているではありませんか。先の教導任務も、この前の南一号作戦
だって。

わかってます！ わかっているんです！

それで十分だと、こなせたことで満足するべきだとわかっているん

です！

ですけど……だけどっ！

——ですけど？

私はっ！ 嫌なんですっ！

言われたことを忠実に、完璧にこなすだけじゃあ嫌なんです！

あの人に……提督に！ もっともっと喜んでもらいたいです！

次も、その次もっ！ ずっとずっと、もっともっと頼りにされたい

んです！

浅ましいなんてわかってる！ でも三步後ろに控えて言われるが

ままなんて嫌なんです！

この任務なら鳳翔を、じゃない！ どんな任務でも鳳翔ならって

言って欲しいんです！

私は、わたしはあっ！

——あ、あの……わかりました、わかりましたからその辺で……照

れてしまいます。

ふえっ……？

あ……。

——はい、よくわかりました。……いえ、私のことながらそれほど

の激情を秘めているとは……なんて少しびつくりです。

あうあう……。

——慕っているのですね、あの方を。

……はい。

あの方は決して言わないでしょうが、この命を求められても笑って

投げ出せます。

ただ慕っているだけではありません。

提督は、この世界にいる艦娘を救ってくださる方です。

未だ見ぬ悲しみでさえも、きつと幸せに変えてくれる人。

ならそのために使う私の命。なんの躊躇がありません。

ですが……。

——その光景を生きて、あの方の隣で見たい。

その通りです。

私は、弱い。

この先、激しさを増す戦い。

その中で生き抜くためにより大きい力が欲しい。
そうして提督の隣で笑い合いたい。

——はあ……羨ましいです、本当に。

……ふふ、そうでしょうか？

少し、苦しいですよ？ 何せ嫉妬ばかりしてしまうのですから。

——そうなのかもしれませんね。

だから、私は。

——ええ、良いでしょう。と言っても、最初からいつでも大丈夫
だったんですけどね。

ん？ いつでも大丈夫……ですか？

——私はあなた、あなたは私。そして私達は海の意味。既にあなた
方は海に認められていますから。

海に、認められている？

——理解する必要はありません。必要なのはきつかけ、強く私達に
願うきつかけ。それだけです。

……よく、わかりません。

——それでいいのですよ、私達は。後は——。

——人が、海に認められるだけ。

「鳳翔——改」

無意識に呟いていました。

それと共に身体から湧いてくる力に驚いてしまいます。

「鳳翔さん……」

「これは……流石に、気分が高揚……どころじゃありません」

声に振り向けば目を丸くする加賀と呼ばれた妖精さんと、目を潤ま
せる赤城と呼ばれた妖精さん。

そして。

「おかえり」

「……」

優しげな笑顔を浮かべている提督。

——ああ、お慕いしています。

あなたの力になりたい、そう思える自分が誇らしい。
肩にかかったままだった軍服を握る。

あなたは多くの艦娘を救う人。

そして私はそんなあなたを救える艦娘で在り続けたい。

これからもずっと。

死が二人を別つまで。

「はいっ！ 教導任務より鳳翔！ ただいま帰投いたしましたっ！」

加古に乾杯 ②

「加古スペシャルを……くらえっ!!」

南一号作戦海域の深海棲艦残党掃討作戦。

順調に捗ってると思う。

出撃する度にすっかり数を減らせているって実感がある。

順調。

そう、順調なんだよ。

空母棲姫、だっけ？ もうあんなのも見なくなっただし、精々フラグシップ級がちらほら見られるくらいで。

改っていう新しいステージ？ そんな強さに至った第一艦隊や鳳翔さんの力を借りなくても十分にこなせるくらいには。

改。

金剛さんはわからないけどさ。

もしもそんなステージに次至る人がいるのなら鳳翔さんだっけって思ってたから、それは問題ない。

問題？

ううん、なんていうんだろ。純粹に喜べたし、祝えたんだ。

順調なのは掃討作戦だけじゃない、戦力の拡大って意味でもそう。養成学校についてあたしはノータッチだからよくわからないけど、きつと強くなってまたここに帰ってきてくれるって話ならそれで十分だし。

既存戦力のあたし達第二艦隊、第三艦隊の皆だっけ改っていう新しい場所を見つけられたんだ、目指したいと思う。

思ってる、そう、思ってるんだ。

「加古さんっ！ 新手ですっ！」

「はいよっ！ まっかせといてー！」

敵は……空母ヲ級エリートが旗艦の機動部隊、か。

ちよつと、面倒くさいな。

「金剛さんっ！ あたしと一緒にまずは随伴艦からやろう！ 六駆の皆はいつもどおり！」

「イエース！ 了解したネ！」

「任せてっ！」

金剛さん、か。

随分とうちに慣れてくれたなんて思うよ。

いや、嫌味じゃないよ？ 嬉しいって思ってる。

天覧演習に第一艦隊、うちの代表として出ることが決まって提督や鳳翔さんと念入りに動き方の研究をしてるし、それを少しずつだけどしっかり活かせているように思う。

少なくとも、天龍さんたちが違和感を覚えたりしない程度には動けるようになったんじゃないかな？

何より、改。

他の金剛型戦艦の人たちはまだって中、金剛さんだけが至った改。

あたしが、まだ至れない、改。

元々十分な練度はあったと思う。ただ気持ちがついてきていなかっただけなんだって。

以前をあんまり知らないけど、それでも見違えたなんて思える位には強くなったんだろうね。

……羨ましい。

「加古さんっ!!」

「っ！ っとお……ごめん暁っ！ ありがとう！」

「いいのよっ！ これくらい、当然だわっ！ でも、気をつけてね？」
「いっけない、集中しなきゃね。」

危うく爆撃に巻き込まれるところだったよ……。

「すー……はー……」

そうだ、集中しなきゃ。

六駆の子達は今回が初めての掃討作戦参加だ、気を抜いている余裕なんて無い。

でも。

「ウラー！」

「電の本気を見るのですっ!!」

強くなった。

いつの間に、なんて言ったら失礼かもしれないけど、確かにそう感じる。

それに。

「金剛さんっ!」

「ハイッ! 行きますヨ? バーニング……」

「らあああああぶっ! ってね!」

雷、改。

フラワーズの中で、一番最初に改へと至った雷。

あたしを差し置いて、那珂よりも早く。

……どうして。

「っ!? 加古さんっ!!」

「へ……っ? つとおおう!?!」

あつぶな!? 今のはほんと危なかった!

「ごめんっ! 雷っ!」

「もっと頼っていいのよっ! ……って言いたいけど、加古さん?

そんなんじゃない駄目よ? どうしたの? 今は敵を倒すことに集中し

なきゃ!」

………煩いなあ………。

っ!?

ち、違う! そうじゃないでしょあたし!

「うん、わかってるっ! もう大丈夫だからっ!」

「ほんとに? わかったわ! でも無理しないでね!」

無理?

いや、無理しなきゃ……じゃないと……。

「違うっ! 今は、今は戦闘に集中、集中だっ!」

頭を振って変な考えを振り払おうとするけど……古鷹……あたし、

どうしたらいい?

やっぱり第一艦隊の皆みたいに、一度轟沈一步手前にならなきゃ駄

目なのかな?

鳳翔さんはどうやって改になったのかな?

古鷹……古鷹はどうやって改に至ったの?

教えて、教えてよ、あたしに。
じゃないと……あたし。

「加古さんっ!!」

「あ……」

これは、駄目だ。

魚雷、避けられない、六駆も……。

ああ、でも。

「加古さん!!」

これで、あたしも改に、なれ、る……?!

「……やっぱ、そうだよねー……」

誰に向かってつぶやいたわけでもない。

あ、ううん? ごめんね? 修復ありがとう、大丈夫痛くないから。

入渠ドックでせつせと妖精が動いている姿を見ながら、猛省するのはあたし。

余計なことと言って妖精の邪魔するのもなんだし……あー気持ちいいー。

不思議なもんだよね、見た目はまるつきりお風呂なのにさ、隣では外された艦装をカンカンしてる妖精に、浸かっているだけでふさがっていくあたしの身体についた傷。

熱いとも、冷たいとも感じないこの液体。まるで身体が液体と溶け合ってるのかって感じ。

こうやって見ると、あたしは艦娘なんだなって強く思う。

言っちゃえば人間じゃないんだなって。

ここに居ると、ううん。

この鎮守府に居ると、そんな事すら忘れてしまいそうになる。

戦っている時以外だけをみれば、まるで女子寮なんかで。

みんな仲良く、楽しく、生活する場所みたいに思えて。

……ふふ、なら提督はあれかな? 寮母さんならぬ寮父さんかな?

そんな人と禁断の関係を、なんて。ますます漫画なんかで現実感がないや。

そんな事したら皆との関係はどうなっちゃうんだろうね。

多分、形は一緒じゃないかも知れないけど、皆提督のこと慕ってるし。

「……そんな皆に、迷惑かけちゃったな」

あたしは、どうやら大破したらしい。

気づいたらここに居て、心配そうな顔した妖精があたしの世話をせつせとしてくれた。

無事に戻ってこれたってことは、多分なんとかなって撤退できたんだろうけど。

「まズったなあ……」

ほんと、六駆の皆は初めての掃討作戦だったっていうのに、何やってんだあたしは。

情けないって思う。嫉妬して、戦いに集中しきれなくて。

その結果が大破だ。

「提督も……きつと慌てたんだろうな」

順調だった。悪くて中破止まりだった。

それもだんだん少なくなつて、小破すら見なくなつてきた時に、これだ。

提督に心配をかけた。

それは、何よりも辛い。

「ほんとに、情けない」

こんなだから改になれないんだよ。

鳳翔さんに続いて、間を置かないですぐ古鷹が改になって、ちよつとしてから雷が改。

鳳翔さんにも古鷹にも聞いたよもちろん。どうやったら改になれるのなんて。

海と会話したって言ってたけど、いくら語りかけてもうんともすんとも言わない海。

あたしだって強くなりたい。

そんなの当たり前と思ってる。

強くなつて、皆の力になりたいさ。

「何が、違うんだよう……」

あ、駄目だ泣いちゃいそう。

ほんと、キャラじゃないよ……。

「かこさん、かこさん」

「……うん？」

何かな？ あ、もう終わった？

そう思って起き上がろうとしたけど、そうじゃないみたいで。

「あんまり、おもいつめないほうがいいよ」

「え？」

そんな事を言って、すぐに艤装の修復作業に戻っていった。

……思いつめる？

あたしは、思いつめてるのかな？

いや、そうなんだろうね。

だから、大破なんてしてしまう。

メリハリ。

提督に言われた、メリハリ。

それで言うなら、ずっと張っていたんだらうね。

「意識しなきゃ……って？ はい？」

「加古さん？ 修復中しません」

鳳翔さん？ どうしたんだろ？

「修復が終われば、提督の私室へとのことです」

「……うん、わかったー！」

遠ざかって行く足音を耳に入れながら。

……お叱り、かな？

そんな事を考える。

まあ、当たり前だよな。

今回ののは完全にあたしのミスだ、言い逃れようがないし、逃れるつもりもない。

だけど。

「あの提督に、怒られる、かあ……」
想像もつかないや。

金剛さんのやり取りは見たけど、怒ってるなんて思わなかったし……むしろ羨ましかったくらいで。

「駄目だつてば、ほんとあたしは……羨ましいってなにさ……」
ほんと、どうかしてるよ……。

「加古、修復終わったよー」

「ん？ おお、お疲れさん。とりあえずそこに座ってくれ」

ちよつと……どころじゃなくドキドキしながら。それでもあたしらしく、提督が望んだあたしらしく入室して声をかけたつもり。

そんなあたしに笑顔をつくれた後、テーブルの前にあるイスを勧めてくれる。

けど、謝るなら、座つてなんかいられないわけで。

「どうした？」

「い、いやっ！ あの、さ……」

謝るつもり満々なのになんでそんなに緩い雰囲気だしてるのさ！

しかも、えっ？ 何？ 箱から何を取り出すの!?

まさか夜戦!?! 特殊な夜戦訓練でお叱りされちゃうのあたし!?

「うん？」

「え、えっと……それ、何？」

あたしのへたれ！ 何じゃないよ！ ナニだよ！

じゃない！

謝ろうあたし！

「ああ、実はな。爺さんから……ほれ、地酒だつてさ。やっぱ飲むなら加古とだろう？」

「へっ？ あ、ああ、うん。お酒かー」

そうでもない！

ああ、でもお酒……お酒かあ。美味しそう。

「あの人、なんかめっちゃいろいろ送ってくれるんだよ。ありがたいよな」

「う、うん……そうだね、いつかお返ししなくちゃね」

手際よくグラスを並べて注いでくれる提督。

いつの間にかあたし座つちやつてるし……うう。

「そうだなあ、何がいいかな？ 今から一緒に考えてくれよ。……つと、ほらどうぞ。アテも一緒に入ってたから」

「あ、ありがとう」

えつと、なんだつけ。エイヒレ？ あ、こつちはたこわさ……あの人、渋いなあ。

それにこのお酒……なんだかい匂いがする。

「花酵母だつてさ。あ、ロックでいいか？ それとも水割り？」

「ろ、ロックでいいよ」

「あいよ……それじゃ、今日も今日とてお疲れさん！ 乾杯！」

「か、かんぱい！」

軽くグラスをあわせてから一口……あ、美味しい。

苺、かな？ 甘い香りですごく飲みやすい。

「うん、美味しいな」

「そうだね、すごく美味しいや」

ちびちびと飲む。

飲みながら提督は笑顔でいろいろ話してくれる。

最近電が主砲向けてくれなくなつて嬉しいやら寂しいやら。

金剛がお茶会に誘つてくれたとか。

六駆が金剛たちの真似をしてお茶会ならぬ緑茶会を始めたとか。

楽しそうに、嬉しそうにそんなことを話してくれる。

あたしは、それに相槌をうちながらも何処か座りが悪い想いに引き

ずられて。

お酒は美味しいって思うんだけど、やっぱり何処か楽しみきれない。

やっぱり、当たり前で。

だから提督もだんだん話すことが無くなつて。

グラスがテーブルに何度かコツコツとあたる音だけがやけに耳に残つて。

「……提督は、何も言わないんだね」

「ん？ 何もつて……ああ、話題のチョイスまずつたか？ すまん、他

に何があつたかな……」

「そうじゃなくて！」

それでも笑顔だけは絶やささないで、一緒に居てくれる提督。そうじゃない、そうじゃないよ。

提督の話はなんでも楽しいさ、嬉しいよ。こうやって美味しいお酒もあつて、最高だつて言い切れる。

だけど、だけどさ。

「怒ってないの？ あたし、今日大破したんだよ？ しかも、自分の不注意で、皆に迷惑かけて！」

「……」

怒つてよ、怒つて欲しい。

何してるんだつて、気を抜きすぎだつて。

そんなんだから、改になれないんだぞつて。

じゃないと、あたしは……！

「本当にただ自堕落なヤツになっちゃう！ あたしは……提督の力になりたいのにつ！」

良いところを見せたいつて思った、そのために頑張つてたつもりだった。

でも、まだあたしは改になれない。

鳳翔さんや古鷹のように海と会話なんて出来てない。

それは、なんで？

あたしが、こんなヤツだから？

中途半端で、一人じゃ何も出来なくて、挙げ句自分を危険にさらして、味方もそれに巻き込んで。

そんな、ダメなやつだから？

「教えてよ、提督。あたしは、どうやったら提督の望むあたしになれるの？ どうしたら、改になれるの？」

教えて？ 提督。

あなたになら、何を言われても良い。

詰ってくれても、なんなら罵声を浴びせられたつて構わない。

それで提督の望むあたしになれるなら、力になれるなら。

ここに居て欲しいと思ってくれるなら、あたしは。

「なあ、加古」

「……何？　かな」

心の準備は出来てるよ。

なんでも言ってる？

「別にいいじゃないか、改になれなくたって」

「……え？」

それは、あたしに何も期待していない、ってこと？

「あーもう、そんな捨てられた犬みたいな顔するなって。言い方悪かったか？　違う違う、俺はたとえばどんな加古でも一緒にいたいって思ってるから！　捨てるなんてありえねえから！」

……それは、嬉しい、けど。

「良いか加古。お前は既に俺の力だ、仲間だ、大切な家族だ。そんな風に思ってもらえてるのはすごく嬉しい、掛け値なしに。だけどそれで自分を見失うな」

「自分を、見失う？」

あたしは、自分を見失ってた？

自分って……何？

「加古は眠い眠いと言いながら、加古スペシャルしてくれるくらいが丁度いい。気を張ってる加古もかっこいいけど、そうしなくちゃならないからそうするなんてしんどいことするな」

そうしなくちゃって……そんなこと。

「改にならなきゃ俺と一緒にいられないわけでもない、まして力不足だなんても思わない。無理なんてするな、俺の望む加古じゃない、等身大の自分を海に問え」

「等身大の自分を、海に問う？」

「そうだ。加古のなりたい加古になれ。それがたとえ改って姿じゃなくても、それはそれでいいんだ。じゃないと、海が加古を見つけてられない」

……。

あんまり、意味はわからない。

提督は一体何を思ったんだろう、何を思ったんだろう。だけど。

「……ん」

「加古？」

あたしでいいって言ってくれた。

なら、こんなあたしでも大丈夫かな？

「とうっ！」

「またかよ！ ったく……」

こんな風に寄りかかっちゃうあたしだけど。

どうすれば改に至れるか、まだまだ全然わからないあたしだけど。

「お酒、美味しいね」

「……ああ、そうだな」

やっぱりさ、思っちゃうよ。

あたしは、あなたに相応しいあたしになりたいって。

教導任務が終わったようです

「起立、礼っ！」

「はい、ありがとうございます。今日も一日お疲れ様です、それじゃあホームルームを始めますね」

教壇に立つ古鷹へと向かって長門の号令と揃った礼が向けられる。やけに様になっている古鷹はニコニコと笑みを絶やさずそう言った後、着席を促しながら手元の資料を捲った。

「さて、今日の体育……バレーボールはどうでしたか？　そうですね、朝潮さん」

「はいっ！　最初は戸惑いしましたが、やっているうちに皆さんの呼吸のようなものを理解することが出来ました！」

ビシツと敬礼しながら姿勢正しく発言する朝潮の姿はまさに優等生そのもの。

その答えにうんうんと頷くのは全員。

那珂、鳳翔に続き三人目であり、最後の教師役、古鷹。

古鷹の担当は同じ重巡洋艦である摩耶と鳥海ではあったが、前任の二人に比べて少ない。

そのため、最後のまとめというべきか、全体の調整訓練も請け負っていた。

その訓練内容は水上で行われるのはもちろん、朝潮が言ったように一見まったく海に活かせないようなものも含まれていた。

今日のバレーボールを含め、野球、バスケットボール等スポーツが必ず一日の予定に組み込まれている。

「最初は意味わからなかったけど……どうして中々、やってみると確かに皆の呼吸がよくわかったよね」

「はい。今では姉さんだけではなく、他の方がどう思ってるか、どうしたいかがわかるようになった気がします」

そう話すのは川内と神通。

古鷹が教師役として着任してから、その訓練内容は那珂と鳳翔に比べてガラリと変わった。

墓場鎮守府らしさを組み込んだ水上艦隊行動をみっちり叩き込まれていた今までとは違い、海へと出る時間は極端に減った。

そのかわりに時間を割かれている様になったのが余暇とも言える時間。

スポーツはもちろん、トランプ遊び等。

そう、遊びとも言える時間が増えた。

当然最初は困惑した面々。

実際、こういう事をやってほしいと提督から指示された古鷹でさえ少し首を傾げていたものではあったが、なんとということはない。

要するに互いへの理解を深めるための時間なのだ。

霞を始めとして、多くの艦娘が懐疑的にも遊びとも言える訓練へと首を傾げていたものの、そうした時間を経て行われた水上演習は確かにいつもより不思議とスムーズに動けた。

それを実感し、自分の考えがまだまだ至っていないと自省した艦娘も多い。

古鷹自身もその姿を見て効果の程が実感でき一安心。

夜遅くまでゲームのルールブックを読んだかいがあつたと胸を撫で下ろしたのはつい最近。

同時に、やつぱり提督はすごいなあとキラキラ想いを馳せていた姿が大淀に確認されている。

「そうですね、多分、皆がここに来る前より遥かに相互理解が深まったと思います」

「ああ、そうだな！ 今なら誰にも負ける気がしないぜっ！」

「……摩耶、それ、スポーツでなら、よね？」

「うぐっ」

とは言えその通り。

それぞれ艦種としての練度は高まった、相互理解も深める事が出来て、今ここにいる面子であれば誰とでも苦を感じず行動できる。

何よりのものが築き上げられたと確信できる反面、ただそれだけとも言える。

「焦らないで？ 今日はその事について話をしますね」

「む……といふことは」

「もしかして？」

古鷹の顔つきが変わる。それにすばやく反応したのは長門と陸奥。続いて弛緩していた雰囲気は再び引き締め直された、ただ、古鷹の顔つきが変わっただけで。

その事に一つ喜びを噛みしめた後、開いていた資料……第一艦隊の報告書を手にとって口を開く。

「佐世保鎮守府……要するに、第一艦隊が従事している作戦の最終目標。そこに到着したって報告が来たよ」

「えっ……!？」

「ま、まだ二週間と少し……ですよ!？」

戦慄とも取れる驚きの声をあげたのは瑞鶴と翔鶴。

第一艦隊が墓場鎮守府を離れてから正確には十六日、その日数で舞鶴、呉の海域を突破した。

それだけではない。

今の所、第一艦隊の訓練を受けた舞鶴鎮守府の艦娘達、その全ての練度向上が確認されている。

事実、舞鶴鎮守府から第一艦隊が出発した後すぐ、舞鶴鎮守府は正面海域から先の海域まで突破し、海域確保したという報告もあがっていた。

「すごい……いや、驚異的とも言うべきだな」

「ええ。流石提督の懐刀ね、確か舞鶴の状況は一年近く不利なままだったと聞いていたけど……それを、ね」

理由のはつきりしない震えが長門と陸奥に奔る。

いや、震えたのは二人だけではない、ここにいる全ての艦娘が震えた。

それは古鷹も同じ。報告を聞いた時、報告書を読みながら震える手を隠すことが出来なかった。

「驚いてもいられないよ? 作戦終了が近づいているってことは……わかってますよね?」

「選抜するための演習が近いってことね」

神妙な顔をしながら答えを言ったのは霞。

その顔は面白くないと書いていたが、それが皆と同じように流石だと褒め称えたい気持ちを押し殺した故に浮かび上がっているということとは全員が理解している。

そして同時に。

「そんな相手と、戦う……」

誰かがつぶやいた。

その事に気づいたのだ。

正確にはまだ戦えると決まったわけではないが。

「……詳しいことを説明しよっか」

「ああ、是非頼む」

古鷹は領きを一つ。

そして続いて説明していく。

「三日かけるのは変わらないです。初日は観覧式。翌日に旧横須賀鎮守府艦娘、皆のことだね。その相手として別の鎮守府から選りすぐられた艦娘艦隊と演習。そしてその勝者が最終日に墓場鎮守府第一艦隊と演習を行う形になりました」

初日の観覧式は兵器派主体で行われるため墓場鎮守府にはほとんど関係がない。

天皇陛下への奏上にしても長官が行うし、それに加えて提督が南一号作戦の殊勲者として陛下より勲章を直々に与えられる位。

その事にこっそり震えている提督はさておき、出番は無い。

ここにいる面々が力を入れるべきは二日目。

元々は結果がどうあれ最終日に旧横須賀鎮守府の艦娘と墓場鎮守府の艦娘による演習が予定されていたが、少し変化した。

理由は兵器派の声。

名目的には横須賀方面最強と言われる墓場鎮守府の艦娘と演習を行い、経験を積むためというものではあったが。

やはり権威を示したいという思惑が予想されている。

「どうして今更予定が変更に？」

「……ごめんなさい、それはわからないんです。ただ、第一艦隊の皆が

呉鎮守府の海域を突破した後位にそういう意見があったって聞いたけど……」

そのタイミングで何があったのかはわからない。

しかし、既に決定された事実としてそうなった。それはもう覆せない。

提督にしても、長官にしても流石に今更予定を変えることは出来ないと云ったが、それでも、である。

「……キナクさいわね」

「はい、どういう意図があるのでしよう」

目を細めるのは川内と神通。

無言ではあるが、陸奥も同じように思考を巡らせる。

「ともあれそういう形になりました。なので天覧演習に臨める人数は六人に。選抜方法はうちで演習した上で決めるつてことに変わりはないです」

「ああ、了解した」

少し残念そうに肩を落とす長門ではあるが、直ぐ様暗い気持ちを振り払う。

そう、自分たちの役目。いや、願いは天皇陛下に力を示すことではない。

提督だ。

墓場鎮守府の提督に力を示し、捧げられるに足ると認めてもらうこと。

その思いを宿し、古鷹を見つめる。

「流石ですね……」

聞こえないだろう声で小さく呟く古鷹。

純粹に、真つ直ぐ向けられる視線を少し羨ましく思ってしまうのは何故か。

それでも自分は彼女たちにとっては先達。

墓場鎮守府へと先に着任した先輩なのだ、情けない姿を見せるわけにはいかないと頭を軽く振って視線を見つめ返す。

「ふっ……それはこちらの台詞だよ、古鷹先生」

「ふふつ、ありがとうございます。……話を戻しますけど、墓場鎮守府での演習、天覧演習、そのどちらも全力を尽くしてもらうことに変わりはありません」

その通りだと頷くのは全員。

しかとその意思を目に、心に宿している。

「本日付けで、私からの教導は終わりになります。このホームルームの後、皆さんで墓場鎮守府演習に望むメンバーを検討して下さい。私に報告する必要はありません、私もこの後墓場鎮守府へ戻りますから」

「……了解した、ならば次に会う時は——」

敵だな。

続けられるはずの言葉は古鷹の笑顔で止められた。

「違います、味方ですよ。仲間です、家族です。これから更に強くなった皆の姿、楽しみに待っていますね」

「……ああ！ 楽しみにしていてくれ！」

握手と笑顔。

共に宿る意思は同じ、提督の、家族の、仲間の、友のために。

「さて、それでは早速だが」

古鷹が後にした部屋。

元は作戦会議室だったのにも関わらず、今不思議とその言葉に違和感を覚える場所。

そんな教室の教壇にたったのは長門。

ここで過ごしているうちに持ち前の性格も理由だろうが、まとめ役となっていた。

その隣ではチョークを持って朝潮が姿勢正しく気をつけの姿勢を取っている。

委員長、そんな言葉が思い浮かぶ姿。

更にノートを広げ鉛筆を片手にしているのは鳥海。

議事録を取る目的だろうが、やけに様になっているのは何故だろうか。

「……いや、改めて皆。お疲れ様、だな。共にここまで邁進出来たことを誇りに思う」

「いやちよつと長門？　まだ全然途中だからシメみたいな事言い出すのやめてくれない？」

「おつと、すまない。なんだか胸が熱くなつてしまつてな」

お別れ会でも始まるのかと焦った陸奥によって止められるが、気持ちにはわからなくもないと理解がある。

僅かな時間ではあつたが、不思議な連帯感とも言えるような絆を築き上げることが出来たと確信しているからだろう。

他のものにしても、陸奥と同じ気持ちなのか苦笑いを浮かべながらも何処か頷きそんな雰囲気は放っている。

「陸奥の言うようにまだまだ途中だ。教導が終わつた今からこそが、我々の踏ん張りどころだろう。墓場鎮守府演習……古鷹を始めとして、鳳翔や那珂が言う第一艦隊ほどじゃ無いという言葉。それは全くあてにならないのだから」

「そ、そうだよねっ！　あの人達絶対謙遜が過ぎるよ……十分おかしいよ……」

「ず、瑞鶴……」

鳳翔の教導を思い出したのか顔を青くして震える瑞鶴。

困つたような顔を向ける、同じく鳳翔から教導を受けた翔鶴と陸奥だったが、そんな中長門はうんうんと大きく頷き同意を示す。

想像してみて欲しい。

艦載機射出訓練や砲撃練習。その隣で実戦さながらのプレッシャーを受け続け、ひたすらに成果を出すまで同じことを繰り返させられる光景を。

鳳翔はひたすら無言で見ていた。

やってみなさいと、出来なければ誰かが損傷するのだと。そう、ここは練習場じゃない、実戦の場と認識しなさいと。

できるできないではない、平たく言えばやれ。

そういう圧力を笑顔の裏から飛ばしていた。

「いや、まさにその通りだ。はつきり言つて鳳翔は怖かった。那珂の

教導を受けていたもの達が羨ましく思えたくらいにはな

「いやいやいや！　那珂も十分アレだったからね！」

「あ、あはは……」

「あんたも一回受けてみたら良かったのよ……」

「……はう」

慌てて言うのは川内、遠い目をするのは神通と霞。長門の隣で小動物を彷彿とさせるかのように震えるのは朝潮。

那珂は、一言で言うなら容赦がなかった。

本人の明るさもあり、開始の雰囲気はすこぶる良かった。

だがアイドルという名の通り輝くような笑顔を振りまきながら言うのだ。

——うん、それは駄目だね！
と。

素晴らしく的確に、容赦なく行動のダメ出しをする。笑顔で。

第三艦隊のまとめ役は伊達じゃなかった、もつと言うのならば天龍や龍田の影響だろうか、本当に言葉で抉ってくるのだ。笑顔で。

まさにギャップ殺し。

笑顔で簡単に誰かを凍りつかせた。しかも本人にその自覚がなかった。

そんな中、ある日朝潮は言った。

——那珂さんのファンやめます。

「……すまない」

「ううん、きつとどこも一緒だったろうから……ねえ？　摩耶さん」

「……触れないでくれ」

そう言ってやっぱり遠い目をする摩耶と鉛筆の芯を折る鳥海。

古鷹は……すごかった。

経験と知識を融合させ、かつわかりやすく丁寧に摩耶達へと教えた。

そう、ひたすら、丁寧に。

それは少し那珂と似ているかも知れない。

だが決定的に違うのは。

「ごめんなさいごめんなさい、古鷹さんが悪いんじゃないです、私が悪いんです。ごめんなさいごめんなさい……」

「ちよ、鳥海!? しつかりしろ!」

摩耶が、鳥海が上手く出来ないと言っていると古鷹が落ち込むのだ。私の教え方が悪かったと。

そうしてもっとわかりやすく、丁寧に再度伝えられる内容。その繰り返し。

平たく言ってしまうえば良心がズタボロにされた、自分の下手さを恨むどころの話ではないくらいに。

「……そこまでにしよう。いや、本当に悪かった」

「ええ、そうしましょう」

墓場鎮守府の常識、いや、最低限のレベルが高すぎて辛い。

それは間違いなく生徒達、心からの悲鳴という訴え。

先に言った長門のシメの言葉は、ある意味そんな気持ちから来たものなのかも知れない。

「ともあれ編成だ! 編成の話をしようじゃないか!」

強引に話を変えた長門の目端に光るもの。

その輝きによって全員の目に光が戻る。

「今までの訓練で、恐らく我々は誰と組んでも一定以上の行動は出来ると思われる。だから問題は——」

「やっぱり相手の想定ね」

長門の言葉を引き継いだ陸奥。

艦種から見るオーソドックスな編成という面は当てはまらない事をよく理解している彼女たち。

故に、戦艦が、空母がではなく、誰が相手になるかという問題が一番大きい。

たとえば大淀。

遠距離からの攻撃を無効化してくる大淀に対して戦艦や重巡洋艦は非効果的だろう。

一気に近づいて、その余裕を奪う必要がある。たとえば加古。

古鷹とセットで編成されることは予想に難しくない、そしてその二人を相手にするためには、すばやくどちらかを無力化することが求められる。

「……改めて思うけど、墓場鎮守府強すぎないか？」

「肯定する言葉以外が思い浮かばないです……」

ポツリと零れた摩耶の言葉に翔鶴が頷く。

確かにそれぞれを見ればまだ弱点が見られる、つけ入るところが想像できる。

だが、何よりそれを埋め合う力が強すぎた。

旧横須賀艦娘の考えることなどお見通しも良いところだろう。

必ずそれをカバーする編成が組まれる。

「となると、やはり……」

「想像を超える、しかないわね」

それは何よりも墓場鎮守府らしい発想。

セオリーに左右されず、常識を打ち破る能力。

ここまで考え、全員が理解した。

「なるほど、最初からこれを求められていたのか」

何のために仲良くスポーツで汗を流したのか、水上訓練の時間を削ってまで。

要するに。

「私達でしか出来ない戦法……それを見つけないきゃ、ね」

そういうことだった。

第一艦隊が戻ってくるまで、ペースで考えれば残り一週間というところ。

その時点で教導が終了した、それはつまりここから先は自分たちで考え、導き出せということ。

提督自身は導き手、その役目になりたかったと思っっているそれ。しかし、ここは学校で。

学びから答えを見つけ出すのは生徒自身他ならない。

「案ずるより産むが易し、か」

瞑目したまま長門は言う。

その言葉に立ち上がったのは、やはり全員。

「大淀さんに演習場の使用許可もらってきます！」

「ああ、頼んだ！ 先に行って準備をしておく！」

朝潮が駆ける。

開かれた教室のドア、続いてくぐる艦娘。

その全ての瞳には希望。

ただただ前を見据えるための武器が宿っていた。

第一艦隊の任務が終わったようです

「ふう……」

佐世保鎮守府正面海域。

蔓延っていた深海棲艦も周囲に見当たらず、そうしてようやく天龍は一息をついた。

「天龍」

タイミングを見計らって時雨が声をかける。

その後ろでは天龍、時雨と共に出撃した佐世保鎮守府の艦娘が喜びをあらわにしていた。

時雨に一つ頷きながら天龍は喜びに涙する艦娘達を見て微笑む。

今頃龍田率いる別働隊も上手くやっているだろう、正面海域程度の敵戦力等今の自分達に取っては脅威にならないのだから。

「龍田と夕立も大丈夫だよね」

「ああ、よっぽどオレ達が戦った相手よりも強いなんてことがなけりや大丈夫だろうよ」

佐世保鎮守府の戦力、その数は多かった。しかし、誰も練度が低かった。

数を活用し、第一艦隊を二隊にわけてそれぞれ天龍と龍田が指揮をとる。

そうすることで見違えるように良い動きを見せた。

時雨も安心したように、身体力を抜いた後、念の為周囲警戒に向かうねとその場を離れる。

その姿を見送った後、改めて喜びの渦中にいる艦娘達へ視線を投げる天龍。

確かに、上手くいった。

舞鶴と似たような状況だった佐世保。

ただ足りなかったのは率いるリーダーシップを取ることが出来る人材で。

そのポジションに天龍や龍田が収まってしまえば直ぐ様機能しました。

この正面海域突破作戦はその最終確認。

今頃この戦闘映像と今までの戦闘報告書を見て佐世保提督が改めて研究しているだろう。

「天龍ちゃん」

「お、お疲れ龍田、夕立。そっちも……ああ、聞くまでもねえな」

「ぽいっ！ 夕立達もバツチリだったよ！」

ニコニコと天龍に抱きつく夕立の頭を撫でる天龍。

舞鶴を後にしたくらいからか、夕立は天龍に抱きつくようになった。

それは提督の代わり、といえはそうなのだが、理解してなお天龍に悪い気分は生まれていない。

損傷は、軽微。

同じように龍田達の後ろで喜びたそうにしている艦娘達へと視線で行って来いと示した天龍。

わあっと歓声を上げた後、佐世保鎮守府艦娘達は集い喜びの渦を広める。

「これで、ようやく帰れるねー」

「ああ、そうだな」

指示された舞鶴、呉、佐世保の正面海域を突破し確保した。

これで、第一艦隊が任された任務は終了。

明日にでもここを発つことが出来るだろう。

「……天龍さん？」

「ん？ ああ、ワリイ。ちと考えちゃまってな」

目処がたった事に喜ぶ夕立や龍田と違い、何処か少し浮かかない顔を浮かべている天龍へと夕立が気づく。

「……呉、だね？」

「時雨……ああ。まあ、な」

警戒から戻ってきた時雨に頷く天龍。

舞鶴、佐世保は似たような状況だった。

とは言え厳しい状況に変わりはないが舞鶴ほど切羽詰まったというまでもなく。

特に呉鎮守府は何故これで正面海域を突破出来ないのかと疑問に思える程度にはそれなりの戦力が整っていたのだ。

「いや、確かに……言っちゃあ何だが、弱かった。そう、弱かったんだがな」

「あまりにも消極的すぎる、よね?」

龍田が言葉を引き継ぎ、それに頷いた天龍と時雨。

夕立は首を傾げているものの、静かに話を傾聴する。

「佐世保は……まあ、わかるんだ。数が多くてもそれをまとめる役がいなきや意味ねえって」

「そうだね、ここの提督が悪いってわけじゃないんだけど……やつぱり明確なリーダーは必要だよな」

悪い雰囲気では無かった。

それなりに提督と艦娘達の関係も良くて、いつかのような兵器扱いと言った厳しいあたりは見られない。

ただ、墓場鎮守府のように深い信頼関係を築き上げられているというわけでもなく。

中途半端。

そんな言葉が口から出ないまでも思いとしてはあった。

無論バリバリと兵器扱いして欲しいなんては思わないが、それでもである。

「そんな中呉は、積極的に前に立つわけでもなく……なんつーんだろうな、オレ達のことを観察してた気がするんだ」

「夕立も、なんだか嫌な感じだったっぽい」

思い出したのか、珍しく浮かない顔をする夕立。

後ろから自分を撃たれる、なんて思ったりはしないが、一緒に戦っているのにも関わらず何処か連帯感を感じられなかったそれ。

第一艦隊の提案した訓練も受け入れられず、海域突破してしまえばすぐに出発を促されたことといい、あまり呉鎮守府に対していい思いが無いのは共通している。

観察。

天龍が言ったように、夕立が感じたように。

呉鎮守府所属の艦娘はその通り天龍達を観察していた。共に出撃して深海棲艦を打倒する、それは確かに行動として行った。

一斉砲撃の号令にも従うし、行動、指示にも従われる。

一見何の問題も無いかのように見える光景ではあったが、何よりも。

「あそこの提督も、そんな感じだったねー？」

「うん……僕、あの提督は好きになれそうにないかな」

艦娘をまとめる提督すらもそうだった様子だった。

戦闘そのものに集中せず、天龍たちを観察していた。まるで、天龍達との違いを見つけ出そうとしているかのように。

それは、何のためだろうか。

「あ、あの……天龍さん」

そこにおずおずと声をかけ、思考を打ち切らせたのは妙高型重巡洋艦、羽黒。

「ん？ ああ、すまねえ。帰るまでが出撃、だわな」

「は、はい。えと、そのすみません、お話の邪魔をしてみました……」

自信なさげに、申し訳なさそうに告げる羽黒。

さつきまでの戦い振りが嘘のよう。

「何いってんだ、んなことねえよ。つか、さつきの威勢はどうした？」

倍の相手にでも艦隊を支えるつってたじゃねえか」

「い、いえいえ!!? あれは、その……! 言葉の綾って言いますか……!」

小さくなりながら慌てる素振りを見せる羽黒の頭をくしゃつと一撫で。

「お前ならやれるよ、間違いねえ。天龍様が保証する。……ここを支えるんだろ? それくらいやってやりや、随分助かるさ」

「天龍さん……はいっ! 私、がんばりますね!」

「っし! じゃあ帰投すつか! 羽黒はあいつら率いてくれや、オレ達もすぐに行くからよ」

「はいっ!」

そう言つて駆けていく羽黒。

その姿を見送る天龍の背中に。

「……そういうところまで似なくてもいいんだよ？ 天龍」

「っぽい」

「天龍ちゃんも艦娘たらしの道を歩むのね……」

そんな言葉が刺さった。

佐世保鎮守府を後にして、現在は車の中。

天龍たちが少しでもくつろげるようにと出された車は大きい。

運転席からは完全に隔離され、小さな窓を開けなければ会話は出来ないし、座席も向かい合つて座れるくせ足をどれだけ伸ばしても、背もたれをいくら倒しても遮るものがない。

そんな車によくやくなれたのは墓場鎮守府に帰る今。

実感はなかったが、どうやら重要な任務であるという事実は思った以上に身体を、精神を摩耗していたらしい。

天龍、龍田、夕立、時雨はそんな疲れを落とすように寛いでいる。

「そういえばさ」

「んあ？」

時雨が思い出したように口を開く。

うとうとと舟を漕ぎ出しそうになっていた天龍と夕立がその声に反応して目を開ける。

「提督の何でも言うこと聞かつて約束……皆はどうするの？」

「あう、夕立はもう使っちゃったっぽい……」

そう言えばそんなのもあったなと思ひ出すのは天龍。

一瞬ピクリと反応した後顔を赤らめて俯くのは龍田。

しゅんと落ち込む夕立。

天龍にしてみれば、そういったご褒美がなくとも提督の命令、お願いならば二つ返事のため、もしかすると言われなかったら忘れ去っていたかも知れない。

そして龍田。

実は任務が終わりに近づくとつれ落ち着きを失つていったのはそ

の約束のせい。

もちろん戦闘中にそれを出すようなヘマはしないが、出撃後の休息時間中、一人ベッドで悶えているところを発見されたりしていたのはご愛嬌というべきか。

夕立は出発の際提督と真剣勝負という形でそれを使ってしまったが故にもう何もお願いできない。

有意義だったし、自分に必要だったと今でも思っているのは間違いないが、少し羨ましそうに指を咥える。

「そういう時雨はどうするんだ？ そんな事聞くってこたあ、何か考えついでるんだろ？」

「もちろんだよ。でも他の人と一緒のお願いになってもあれだしね。聞きたいなあって思ってる」

なるほどと天龍は頷く。

とは言えお願い、言うことを聞くと言われても何も思いつかない天龍。

改めて頭を捻ってみてもこれというものがない。

あえて言うのならオレを使い続けてくれなんてモノではあるが、自身への約束と、言わずもがななんて思ったりしてしまう。

「……何にやけてるのさ？」

「んお!? に、にやけてたか!？」

そう、墓場鎮守府艦娘筆頭、天龍。

何もそんな事を言うまでもなく、提督は自分を使ってくれという信頼と確信。それに満たされている事を実感して頬を緩めてしまった。

「天龍ちゃん？」

「い、いやいや！ 何も変なことなんて考えてねえって！ そういう龍田はどうなんだよ!？」

「ふえっ!？」

はたして墓場鎮守府艦娘、むつつり担当龍田は何を考えていたのか。

実のところ時雨が一番気にしているのは龍田である。

もし願いが被るとしたら龍田だろうし、時雨の心にある龍田への対抗心から、より提督への効果的なアプローチを模索していた。

水を向けられ、赤い顔をさらに赤らめ、慌てながら何か言おうとする龍田へと鋭い視線を向ける時雨。

「え、えつと……そのー……」

「何だよ、別に何言おうと驚かねえって、龍田だし」

「そうだね龍田だし」

「ぽいぽいー」

「……その扱いは不服だわあ……うう」

ほらゆー言っちゃいなよ！　なんて雰囲気にも縮こまる龍田だが、それはまだ決めかねていた。

理由は簡単。

自分たちがこうして忙しい日々を送っていたと同じかそれ以上に提督も忙殺されていただろうと予想していたから。

帰って、落ち着いて。

そうやって生まれたゆとりとも言える時間を自分のために使ってもらうなんてと、少し気が引けているのだ。

もちろんあれやこれやと願望自体はある。

一緒にゆつくり縁側でおしゃべりしながらお茶を飲みたいなんて思う。

だから。

「提督に、ゆつくり休んで欲しいかな。なんてー……」

「うぐっ!？」

そんな龍田の台詞に胸を押さえたのは時雨。

「うう……龍田の乙女力は化物……?？」

「おとめぢから……?　時雨?　意味わからないっぽい」

首を傾げる夕立の純心な視線も合わさり、力なく崩れる時雨。

「お前は何を考えていたんだよ……」

「……聞かないで。僕、自分がどれだけ欲に塗れていたか実感しているところだから……」

時雨の頭を夕立が撫でる。

意味はよくわかっていないものの、時雨は何かと戦っているのだ、それを応援しない夕立ではない。

そんな時雨は実に欲望へ一直線だった。

一日提督の膝上で過ごすとか、ハグから頭撫で撫で一時間コースだとか。

ちなみにそれ以上過激なことを考えもしたが、時雨の鼻から流れた赤い雫によって塗りつぶされた。

「まあ、時雨はさておき、だ。とりあえず帰って休む時間はあるだろうけど、鎮守府演習に天覧演習だ。まだまだ気が抜けねえな」

運転手から手渡された書類を開くとそこには墓場鎮守府の現状などが記されている。

既に全員が目を通したそれ。

艦娘の学校とは面白いことを考えたなあなんて全員で頷きあったりもした。

「横須賀鎮守府の子達は……どれくらい強くなったのかなー？」

「わからないっぽい！　けど、絶対強くなってるっぽい！」

根拠なく言う夕立に、そのとおりだねと笑って頷く龍田。

龍田自身もその確信はある。

自分を含めて、極めて短期間に練度向上した各々の艦娘のことを考えれば間違いないだろう。

実際、提督の訓練をもとにした訓練を施した舞鶴鎮守府の艦娘達、その練度向上速度には目を見張るものがあった。

第三者、ではないが。外から見ることでも実感できることもある。

結果自分たちが離れてすぐに正面海域の次すらも確保したとの報告も耳に届いた。

「頼もしい限りだな。肩を並べるのが楽しみだ」

「あらー？　いいのー？　すつごく強くなって天龍ちゃんなんか抜かされちゃうかもよー？　筆頭の座も奪われちゃったりしてー？」

意地の悪いことを言う龍田。

それでも雰囲気が悪くならず笑い合えるのは。

「上等だよ、上等。それで提督の力になれるんなら喜んで抜かされて

やるよ」

そういうことだろう。

そしてそれでも自分が、自分たちが提督の力であることに違いはない。

それで十分。

提督の力が大きく、強くなることは大歓迎で、その結果提督が成したいと思えることが成し遂げられるならそれ以上の喜びはない。

ドヤ顔でそう言う天龍も。

悪戯顔に幸せを含めた笑顔を浮かべた龍田も。

未だ落ち込んでいる時雨も。

よく分かかってないが眩しい笑顔を浮かべ続ける夕立も。

全員、そう思っている。

「……早く、着かないかな」

誰が言った眩きか。

車内に浮かんだ言葉は、それぞれの胸に溶けていった。

第一艦隊が帰投したようです

「提督？　慌てないで？　まだあと一時間もありますよ？」

「あ、ああ……そうなんだけどな？」

そんな困ったような顔を向けないで下さい。

第一艦隊が！　今日！　帰ってくる！

当然執務なんて落ち着いて出来ませんよ。出来るヤツなんているもんか。

三週間ですよ三週間！　長官やらは早すぎるって目を丸くしてたけど早いことなんてないです、長かったです。

忙しかった、忙しかったさあ！

やっぱり夕立のダイブが、時雨の雰囲気、天龍の自信たっぷりな態度が、龍田の笑顔が無いとき！

寂しいんすよ!!

他の皆がいるから寂しさが紛れる、なんて思わない。誰かが誰かの代わりなんて思っていない。寂しさを埋める存在なんかじゃない。

たとえ第一艦隊の皆じゃなくて、第二艦隊の皆が離れていたとしてもこうやって寂しい思いをしていたらどうよ。

当たり前として存在がいなくて事実から生まれる寂しさは受け止めるべきなんだけどさ。

うるせえ寂しいんだよ!!

なんて話を昨日めでたく改になった加古と飲みながらしてたら抱きつかれた。毎度の抱きつき癖ながら気持ちよかったです。

まあそれはそれとして。

腕時計を見ればマルキュウマルマル。

古鷹が言う通り到着予定は一時間後のヒトマルマルマル。

入り口に立って、続く道路を古鷹と眺めている。

その風景は変わらなくて。

だけど今にも第一艦隊を乗せた車がひよっこり現れそうで。

やっぱりそれで落ち着ききれない俺。

そんな隣で笑っているのは古鷹。

片手で海風に揺れる髪を直しながら、心地よさそうに俺へと倅い前を眺めている。

流石になんでそんなふうに笑ってられるのかなんて聞かない。

今更、お互いがお互いの隣にすることが心地良いなんて、当たり前前のことを言葉にしたりはしない。

だからこれは幸せな時間。

落ち着かない気持ちはもちろんある。

だけど、隣に居たいと思ってる人達の隣にいられる時間は満ち足りているモノ。

もしかしたら俺だけが思っていることなのかも知れない。

なんて逃げたりしない。

俺は、この時間を生み出すために頑張ってきて、これからも頑張るのだから。

「あ、提督。あれ……」

「お、おお!!」

なんて落ち着くように思考していたら！ 車！ 車ですよ！

間違いない！ あれは俺が手配した車！

「うおっしやこうしちやいらねえ!!」

「あ！ 提督?! ……もう」

すまねえ古鷹！ 俺の心が、身体が！ 走りたがってるんだ！

止まらねえ！ 俺は止まらねえからよ！ 車も止まるんじやねえぞ！

あ、やっぱすいません止まって下さい、事故は起こるさは勘弁してくださいぞ。

「提督さーんっ!!」

「おおっ！ おかえりタ立っ!!」

止まった車から飛び出てきたのはタ立。

ああ、やっぱこれっすこれっすよ!! たまんないっす！

「えへへっ！ ただいまっぼいー!」

「ったく、すぐそこじやねえか、逃げやしねえんだから待ってるよ」

「そう言いながら天龍ちやーん？ 顔がにやけてるわよー?」

「龍田もね?」

うるせえ全員にやけてるじゃねえか!

ああもう! やっぱ……やっぱりなあ!

「第一艦隊旗艦、天龍! 任務完了、ただいま帰投したぜ!」

姿勢の良い、笑顔で向けてくれた敬礼。

さつきまで俺に抱きついてきてた夕立もいつの間にかピシツと。

それぞれが誇らしく、そしてここに帰ってこれたことが嬉しいんだろう笑顔で、胸を張って。

「ああ! お疲れ様! よくやってくれた、鼻が高いし嬉しいぞ!

おかえり、皆!」

賑やかな、お帰りなさいパーティだった。

鳳翔の上達した腕で振るわれた料理も、突如始まったフラワーズのライブも。艦学から来てもらった旧横須賀の皆も。

全員が笑顔で楽しんだ。

霞にこんなことだけのために呼んだのかと怒られたりもしたけど、ありがとうございますの一言で一刀両断さ。

面食らっていた金剛達含めた旧横須賀のメンバーだけど、これが墓場鎮守府だったのは分かってくれたんじゃないかななんて思う。

こんな光景を守るために、続けるために、戦っている。

俺だってそう改めて思った時間だった。

そう、だからこそ。

「皆、聞いてくれ」

宴もたけなわ。

盛り上がり、水を差すってのは悪いけど、まだまだ俺たちは戦いの最中、目指すべき場所への道半ば。

自分でも少し硬めの声が出たと思う。

だからだろう、一瞬で雰囲気切り替わった。

昼から酒が飲めるとはしゃいでいた加古も。

笑顔で踊っていた那珂ちゃんも。

お腹いっぱい、苦しそうにしていた瑞鶴も。

全員が俺へと真剣な表情を向けた。

「まずは第一艦隊が無事に任務達成して帰ってこれたこと、嬉しく思う」

「おう。こんなのお茶の子さいさいってもんだぜ？ 提督」

ああ、ありがとう。

「第一艦隊がいらない中、海域の掃討作戦、海上護衛任務。苦勞をかけたと思うが、よくやってくれた」

「ふふ、ありがとうございます。ですが、天龍さんの言う通り大したところではありませんよ？ 提督」

「そうだよっ！ 那珂ちゃんも漁師の人たちと楽しめたし！ 言うことなしなんです！」

そうだな、よく頑張ってくれた。

第一艦隊と同じく、鼻が高いし、頭も上がらねえ思いだよ。

「金剛型戦艦の皆も、慣れる、馴染む、戦うと大変だっただろう。それでもよくついてきてくれた」

「そんなことないネー！ 全部楽しかったヨ！」

「はい、榛名も楽しかったです！」

そう言ってもらえると救われるよ。

そして楽しいと思ってもらえる場所であってよかった。

「艦学へは中々顔を出せずにすまない、だけど皆がしっかりと力を付けていることはわかる。それが見れるのが楽しみだよ」

「ああ、最高の成果を捧げようとも」

自信満々に頷く長門はやっぱりカツコイイな。

それに続く皆の目にもすっかり力が漲っている、これが見れただけでも艦学は成功だと確信できる。

……大きく、深呼吸。

当たり前だが、ここで俺に信頼という絆を向けてくれている皆のことを信頼している。

未だ見ぬ、会えぬ艦娘のことだってきつと無条件で信頼するだろう。

だけど、それでも。

「これからの予定を今、改めて伝える。各自報告書等で知っていることもあるかも知れないが、しつかり聞いてくれ」

「了解！」

全員が姿勢を正して敬礼してくれる。

力を感じる。なんでも言ってくれと、なんでもやってやるという意気込みも。

それを頼もしく感じるのは当たり前。

「天覧演習はこれより十日後、横須賀鎮守府演習場にて行われる。それに臨むメンバー選出は一週間後、ここで行う演習で決める」

問題は、ない。

そう、ここまでは何の問題もないんだ。

だからある問題はこの後。

「そして、天覧演習の後。発令される作戦がある」

「……作戦？」

天龍の目が細くなった。

他の皆が集中力を高めたことがわかる。

「MI作戦」

「えむ、あい……作戦」

「予め言っておくけど、この作戦が執られることは確定している。だが、公表はされていない。全体に向けての発令は天覧演習最終日、演習後に出される」

先に知ることが許されたのは軍部の上層限られた一部のみと、俺を含めたここにいる艦娘全員だけ。

どういう形で作戦が執られることになるうとも、うちが中枢、もしくはそれに相当する何かを担うことに変わりはないだろう。

故に今から心構えを含めた準備をしておけということ。

「作戦の全体指揮は長官が執ることになっている。決まっていないのは、現場を統括する者のみ……そしてそれは、天覧演習最終日の結果によって決められる」

「っ……それは、つまり」

俺か、他の誰かか。

他の誰かにあたる人間は、兵器派の人間。

予定を無理やり変えさせた兵器派の目的はここにある。

天皇さんの目の前で力を示し、その指揮権を得るため。

裏を返せば、俺達墓場鎮守府に勝てる算段がついたということだろう。

「薄々勘付してるかもしれないけど、あえて触れない。だけど俺は、それになりたいと思ってる」

MI作戦の、目的。

艦これではAL/MI作戦と、AL海域もあつたけど……まあそれはいいだろう。

軍、対外的には天覧演習にて日本の武力、戦力を民間人へと誇示し安心してもらうなんて意図があるのはもちろんな話。

そしてその戦力を以て、大規模作戦へとあたり、成功させる。

そうすればきつと国民の皆は艦娘、ひいては軍という存在を改めて認めることだろう。

そして、内事情として。

「過去を、乗り越越える」

MI作戦の元となった、ミッドウェー海戦。

日本海軍は空母四隻、航空機約三百機等を失うという大きな損害を受け、以後の作戦主導権をアメリカ軍に譲り渡すことになる。まさに太平洋戦争のターニングポイントとも言える戦い。

そんな史実、過去に抗い、乗り越越えるためにはうってつけの作戦。

「俺達は、過去を乗り越越えないといけない。いや、受け入れると言ってもいい。多くの艦娘を悪戯に沈めてきた過去を」

それに照らし合わせている。

正直、俺にはぱつとこないものではあるが、長官は酷く真剣にそう言った。

——海に見放された我々は、海に認め直されなければならない。

そう言った。

「今までと同じように……艦娘を使ってはいけないんだ。共に立ち向かわなければならぬ。そしてそれが出来るのは——」

「提督しかいねえだろうな」

天龍……。

「ありがとう」

「はっ、よせよ。オレだけじゃねえここに居る皆そう思ってるよ」

見渡せばその通りだと頷いてくれる皆。

自惚れ……だとは分かっている。

まだまだ新米提督な俺だ、そんな大それた立場に就くなんてもつての外だなんて分かっている。

だけど。

「俺は、自惚れられなくて失敗したから。今度はしつかり自惚れたいと思う」

もしも、艦これをベースに考えるのならば。あの苦しい、いや、苦しすぎたイベントを思い出すのであれば。

戦力はまだまだ足りない、そう思う。

それでもこの作戦の先に得られるものが必要だと長官は言った。得られるものつてのが何なのかはわからない。

だけど不思議と、海に認められなければならないっていう言葉に頷けた。

すでに、艦娘達……少なくともうちの皆は海に認められているらしい。

だから鳳翔や古鷹、雷も、時間はすこしかかったけど加古だって。艦学に居る艦娘を除く墓場鎮守府、全ての艦娘は改へと至った。

認められたからこそ新たなステージに至ることが出来た。

ならば今度は俺、俺たち人間が踏ん張る番だ。

「だから皆の力を貸して欲しい……頼む」

頭を、下げる。

おかしな話だ。

この世界の住人じゃないはずの俺なのに。

僅かな時間で誰よりも艦娘を大事に想っていると自負出来てしまっうなんて。

だけど海に、世界に認めて欲しい、認めさせたい。

人間は、上手く艦娘と、海と共存できるのだと。そうしたいと思ってる俺がいるのだと。

「はあ……おい、どうする?」

「そうねえ……やっぱりまだまだ私達は頑張らないといけないのかもー」

沈黙の後、天龍と龍田の声が聞こえた。

「そこが提督の魅力だよ」

「ぽいぽい! だから皆提督さんのことが好きっぽい!」

見なくてもわかる、笑顔でそう言ってるだろう時雨と夕立。頭を上げてみれば、全員の笑顔が迎えてくれた。

そして。

「全艦娘、整列っ!!」

天龍が歩み出て、皆へと号令をかける。

一糸乱れぬ、なんて今まで何度も見せてくれたけど、今回はそれ以上。

まるで一つの生き物かのように、すばやく、綺麗に整列した。

「提督の願いを拒否するものは一步前へ!」

動かない。

「願いを叶えることが難しいと思うものは一步前へ!」

微動だにしない。

「提督の力だと自負するものは一步前へ!!」

空気が、揺れた。

まるで大きな塊が迫ってきたかのよう。

「提督以外に使われたいと思うものは居るか!」

「いいえっ!!」

指揮者がタクトを振ったのかとでも思うくらい、一斉に否定の音が鳴り響いた。

「提督のために全力を振るう覚悟を持つものは敬礼っ!」

それは美しすぎるパーカッションだと思った。

衣擦れの音ですら、揃えばどこまで迫力あるものになるのだと。

「……オレ達、墓場鎮守府艦娘、総員。提督の家族であり、友であり、

力だ。提督の願いはオレたちの願い。それを嫌だと言うやつなんて、いねえよ」

「……」

俺に向かってそう言った天龍もまた、敬礼を向けてくれた。

……。

ったく。

「わかった。よおーくわかったよ」

こんなに気持ちよくケツを叩かれたのは初めてだ。

そうだな、そうだよな。

「俺の願いも、お前たちの願いだ」

「そういうこと」

にかつと笑った天龍の笑顔が眩しい。

確かに、俺はまだ世界にも海にも認められていないのかも知れない。

人間にだって、まだまだ俺を厄介者だと思っただって多いのかも知れない。

だけど。

「皆の力に期待するっ！」

「お任せ下さいっ!!」

答礼して言ってみれば、また揃って返ってくる。

ああ……心地良い。

そうだ、そうだよな。

俺達は皆で一つの力だ。

皆で、挑もう。望みを一つに束ねて槍に変え、このさいっこうでハードな世界へと挑もうぜ。

ありがとう。

大好きだぜ、皆。

選抜演習が始まったようです

「……どう思う？ 大淀」

「申し訳ありません、私にも……」

ついに、というべきが始まった天覧演習メンバーを選抜するための鎮守府演習。

第一艦隊と第二艦隊で演習するために無茶したよな、なんて思い出すのも程々に。

第一艦隊に公平を保つべく、海域哨戒を頼んで見送ってから始められたこの演習。

演習場で向き合う艦隊へと疑問符が思い浮かぶ。

「随分と……思い切ったって言うべきか？ 偏った編成にしたもんだな」

艦学の編成。

長門、陸奥、霞、朝潮。その四人。

対する墓場鎮守府の編成は、榛名、古鷹、加古、那珂、暁、雷の六人。

墓場鎮守府の編成を今日になってから先に提示してから決めても良かったとも考えると流石に頭を捻ってしまう。

確かにそうすることでもう片方の艦隊を六人編成にすることは出来る。

先に六人編成をした、つまり残りは五人。比叡、霧島、大淀、響、電となるわけで。

この次の戦いで数的有利を生むためにこの編成を……？

「数的有利を……という部分で考えれば、初戦に戦艦のお二人を同時に編成する理由がよくわかりませんね」

「ああ。確かにぱつと考えるだけなら戦艦に駆逐艦の護衛を一人ずつで動きやすそうではあるが……どうやっても手数が足りないだろう」

押しつぶされるのは明白。

それなりの損傷は与えられるだろうが、勝つための編成には思えない。

かと言つて、最初から勝負を捨てるなんて雰囲気には見えない。

向き合つてる長門達の顔には不敵な笑顔が浮かんでいるし、陸奥や霞、朝潮にしてもやる気満々といった感じ。

一瞬、自分の力を俺に見せられればそれでいいと考えているのか、なんでも思つたけど。

この顔を見るにそういうわけでもなさそうだ。

「何か、狙いがある。そう見るべきか」

「はい。予想は付きませんが……いえ、だからこそ楽しみですね」

少しわくわくしている様子の大淀に苦笑い。

いや、気持ちはわからないでもないんだがな。

『開始三十分前、総員最終点検を行うように』

アナウンスすればこちらに向かつて敬礼する皆。

点検を行いながらしているのは打ち合わせ、だろうか。

長門が真剣な表情で全員に何かを言つて、それに頷く全員。

そんな姿を目を細めて見るのは榛名。

霧島にしてもそうだけど、二人の練度向上には目を見張る物があつた。

金剛、比叡と差がついていたその実力は埋まったと言つて良いだろう、同じ改というステージに登つたことで自信もついたように思える。

……そう、改だ。

艦学に所属しているメンバーは誰一人改に至っていない。

そのことを考えても、圧倒的な差があると思う。

「その差を埋めるのは並大抵のもんじゃないぞ……？」 長門、見せてもらおうか、その答えを」

「……提督、お時間です」

頷き、マイクを手に。

『演習、開始っ！』

開始の合図を出した瞬間だった。

「胸が熱くなるな……いくぞっ！ 一斉射っ!!」
「なっ!？」

一斉射、だって!?

それは長門が改二になって初めて行えるモノのはずだぞっ!?

凜とした長門の声、合図に従い砲撃する陸奥。

同時に、突撃開始する朝潮と霞。

放たれた砲弾はしっかりと目標に吸い込まれて……。

「那珂は中破、暁、雷は大破。那珂は主砲に損傷、暁と雷は轟沈判定よ」

「あ、ああ……」

叢雲妖精から告げられた言葉をそのままマイクを通して告げる。

水飛沫が晴れた後から覗く光景は、那珂と暁と雷の驚きに顔を染めているもののすっかり古鷹達を庇っている姿。

そうとう驚いたんだろう、流星に損傷を抑えてとは無理だったか。

「一斉射……これが長門さん達の答えですか……っ!」

大淀も目を丸くしている。いや、もちろん俺だって。

……落ち着こう、まだ演習は終わっていない。

「……なるほど、先制一斉射で数の差を埋める、か」

「はい、そして朝潮さんと霞さんの突撃は……長門さん達が装填完了するための時間稼ぎですね、見事です」

朝潮と霞は上手く榛名達の邪魔をしている。

大淀の言う通り一斉射で撃ち切った弾を装填するための時間稼ぎに注力しているのか、無茶な突撃ではない。

「……」

「朝潮、霞、共に中破。脚部艤装、主砲に損傷よ」

「ああ」

流星というべきは古鷹と加古だろう。

動揺を一瞬で静めて朝潮と霞に主砲を放ち、しっかりとあてている。

「朝潮、大破。轟沈判定」

そしてそこを榛名の主砲が捉えた。いい連携だ。

流星に那珂ちゃんは効果的な攻撃は出来ないな、損傷した主砲じゃあ霞は捉え損ねてしまったみたいだ。

霞がなんとか長門と陸奥に合流する。

うん、しつかり装填も終わっているな。

「これで三対四の構図だが……」

「霞さんと那珂さんは攻撃の数として数えにくいでしょうね。ただ……」

那珂ちゃんは攻撃が出来なくても守る技術がある。

となるとお互いの数は減りはしたが構図としてはあまり変わらない、どころか長門達の不利に変わりはないだろう。

一斉射は確かに驚いた。

十分以上にうちの新たな武器として勘定できる。

うん、有意義な演習――

「なん、だど?」

「長門? いいわね? 主砲、一斉射!!」

待て待て待て、そんな事戦闘中にしたらいいのだぞ!! ていうか陸奥、お前もか!?

か、改二とは一体何だったのか……。

ああ、そりや当然狙われる……つて霞っ!?

「霞、大破。轟沈判定だよ」

……つたく、だから犠牲的行動は駄目だつて言ってるのにな。下手くそな庇い方しやがって……。

だだけど……。

「古鷹、加古、那珂が轟沈判定ね」

「ああ」

今回は仕方ないでしょう?

なんて目でこつち見るな、変な信頼の仕方しやがってからに。

「……怒るべき行動ですが……提督?」

「わかつてる。アイツは言っただ、ちゃんと墓場に組み込まれたらこんな事しなくてもいいのよね? つて」

褒めて良いやら悪いやら。

叱るべきかそうじゃないか。

判断つかねえよまったく。

「これで榛名さん一人に対して長門さん陸奥さん二人……数の上では

逆転……って!？」

「陸奥、大破よ、轟沈ね」

榛名は大丈夫です、ってか？

古鷹、加古は一斉射の直撃コースにいなながらも最後までしっかりと砲撃して、霞に庇われはしたものの狙いはバッチリだった。

榛名を庇った那珂ちゃんも見事、流石フラワーズ旗艦と言うべきかあの身体でよくやったよ。

これで、一対一。

なるほど、ようやく冷静になれた。

つまるところこうしてうちに来るまでに鍛えられていた狙撃技術、その昇華が一斉射なんだろう。

その武器を信頼してそれを活かすという一念へと一途に行動した朝潮と霞。

変に欲へと駆られてしまえば、あの時間稼ぎ目的の突撃から二人は帰ってこれなかったろうし、その結果陸奥の一斉射は無理だった。

帰ってくることを信じて二度目の一斉射に向けて準備をした、途中で援護射撃をしなかった。

確かな信頼で結ばれた艦隊行動だったと言える。

残念と言うべきか、やはりと言うべきか。

長門と榛名の一対一は榛名が一方的と言っているレベルで有利に展開されている。

それでも、よくここまで食らいついた、展開できたと称賛するべきだな。

もちろん榛名達が力不足だということはない。

むしろよく立て直したというべきだろう。

「長門、轟沈判定」

『長門、轟沈判定だ。そしてそこまで、演習終了。皆、帰投してペイントを落としてくれ』

悔しそうな顔をするのは暁と加古。

一瞬そんな表情を浮かべた榛名と古鷹ではあったが、最後には全員で握手。お互いの健闘を称えているようだ。

「提督」

「ああ、大淀……楽しみだな？」

「はいっ！ 大淀、行ってまいります!!」

おう、行ってらっしゃい。

「さて、艦隊メンバーは消去法でわかった上だ。どうなるかね」

「はいっ！ 榛名、楽しみですよ！」

隣でわくわくと目を輝かせている榛名。

ペイントの汚れがほぼ無かったからか、始まるまでにやってきた。

改めて、艦学メンバーは旗艦は翔鶴。以下瑞鶴、摩耶、鳥海、川内、神通。

対する墓場鎮守府メンバーは大淀を旗艦として、以下霧島、比叡、響に電。

「榛名はどうなると思う？」

「そうですね、有利なのは艦学の皆さんだと思います。数的にはもちろん、総合的な火力も高いでしょうし……」

そうだな、俺もそう思う。

実際墓場鎮守府側はかなり厳しい。

翔鶴、瑞鶴の艦載機による攻撃を捌くのはもちろん、摩耶や鳥海の一発だって怖い。

川内、神通にしても侮れないのは確かだろう。

「大淀達は如何に足で相手を攪乱できるか、だけど……」

「霧島と比叡姉様がいる以上、攪乱としての足並みを揃えるのは難しいですね。速力に違いがあります」

だな。

順当に考えれば響と電が戦艦二人の護衛をして、大淀が穴埋めをするって役回りだけど……ちと大淀の仕事が多すぎるな。

艦載機に目を向ければ鳥海や摩耶、重巡洋艦の一発に対応出来ないだろうし逆もそう。

どちらかを犠牲にせざるを得ない、大淀はどちらを取るのか。

先の演習で得た人数差という有利。

それをどう活かすかが艦字としては考えるところだろうな。

何も考えず物量で押し切ることが出来る……なんて甘い考えは通じない、それほどに練度の差がある。

「予想まったくつかねえな？」

「はいっ！」

榛名可愛い。

はっ!? 思考から逃げるな、俺!

ほら、叢雲妖精が怖い目で見ているだろう？

『開始三十分前、総員最終点検を行うように』

よしと頷かないで下さい叢雲妖精さん、怖いです。

あ、榛名さんも笑わないで下さいませんか？

「榛名が……そうだな、あそこにいたとしたらどうする？」

「はい。私なら……やっぱりまずは対空防衛態勢を整えて、来るだろう艦載機の先制攻撃を凌いだ後……まずは正規空母の二人を目標にするでしょうか」

ふむ、なるほどね。

確かに榛名も対空技術に優れている。その技術を以て艦載機の攻撃をやり過ぎしてから思考。

俺と同じだな。実際この場面で艦載機の先制攻撃をもったいぶる必要はない、むしろその攻撃結果がどうあれ後の展開は有利に運ぶだろう。

逆に大淀達からすれば、最初のそれをどうにかすることがスタートラインに立つための条件でもある。

そうして凌いだ後、翔鶴と瑞鶴を少なくとも中破以下にして艦載機発着陸不可な状態にする。

……やっぱ厳しいなあ。

「司令官」

おっと。

全員準備完了、時刻もぴったりだな。

『演習、開始っ!』

さて……??

「やはり艦載機を飛ばしましたね」

「ああ、セオリー通り……だけど？」

何だ？ あの動き、それに数……。

あれは、全部爆撃機？ いや、二人共攻撃機も積んでいたよな……？

あれじゃ流石に全機落とされちまうぞ？

「提督！ あれっ！」

「うおっ!? まじか!？」

少し間を置いて飛んでいく攻撃機。

先に飛んでいった爆撃機は真つ直ぐ大淀達の場所に飛ばず、回り込んで……。

「響、中破。霧島、電が小破ね」

「……ああ」

……すげえ。

巧み過ぎるだろ、ていうかあの二人の息合いですぎ。

爆撃機が回り込もうとする瞬間に攻撃機の魚雷が発射され、逃げ道を塞ぐ。

なんとか避けた後すぐに襲いかかる爆撃。

それぞれ翔鶴と瑞鶴が完璧に同じ動きを取らせた。

「榛名、もしかして芸術でも見ているのでしょうか？」

「俺も似たような気分だよ榛名」

悠々と戻っていく艦載機。

攻撃機は流石に幾らか落とされたものの、爆撃機は無傷で全機翔鶴と瑞鶴の下へ。

鳳翔仕込みの発艦技術ってのはもちろんあるだろう。

だけど、あの艦載機の操り方は二人ならではのものと確信できる。

まったく、長門や陸奥といい、翔鶴、瑞鶴といい……。

「魅せてくれやがる……っ！」

そんな空母二人の攻撃をあれだけの損傷で抑えたのは見事と言わべきなのは間違いない。

それぞれの対空態勢、対空射撃の技術はもちろん、やはりフラワーズ駆逐艦の動きが冴える。

響は比叡を完璧に庇った、比叡が負うはずだった損傷ごと。電は霧島を完璧に庇った、お互いに損傷を半分ずつ背負い。

そうやって全体の損傷を軽微に抑えた、全員がしつかり動ける程度に抑えた。

仮に、そこいらで出くわす深海棲艦空母級なら全員無傷で潜り抜けていただろう。

改めて、ヨーイドン。

榛名はもう目のキラキラが止まらないようで、ものすごく楽しそう。

多分、俺も似たような顔してる。

そんな中先手を取ろうとしたのは鳥海。

計算していたのだろう、狙いをつけようとしていた比叡に向かって放った砲撃は当たり前のように大淀によって撃ち落とされた。

「……何度見ても神技ですね」

「まったく同感だ」

そんなの聞いたことねえよまじで。

ともあれ、そうして比叡を遮る物は何もなく、しつかり付けられた狙い通り摩耶へと砲撃が飛び。

それを神通が庇った——無傷のままに。

「上手い、な」

「はい、まるでフラワーズの皆さんみたいですよ」

那珂に教導を受けたのは伊達じゃない、つてところか。

続いた霧島の砲撃、それは鳥海の撃ち終わりを狙ったものだが、これも川内が庇うことで無傷に終わる。

最初の航空戦以降、互いに損傷が生まれない膠着状態。

流石に戦闘が始まってしまえば得意のコンビネーションは出来なのか、それとも上手く墓場鎮守府が警戒できているのか。

どちらも正しいような気がするが、確かではない。

戦闘中の艦載機発艦に関してはそう目を見張るモノはないと思う。

摩耶が、鳥海が撃った砲撃は大淀が撃ち落とす。

落とせなくとも、響や電の護衛技術という壁に阻まれる。

改めて、膠着状態が続いていた。

「状況が動きませんね」

「ああ、どちらに対しても称賛できる光景と言えるな」

数の差を練度で埋める大淀達。

その差を埋めきれられないよう突き放し続けている翔鶴達。

だが、いつまでも続くわけではない。

艦載機が発艦される度に徐々に落とされている。

いずれ発艦すべき艦載機がいなくなるのは目に見えていた。

要するに翔鶴達はジリ貧なのだ。

対する大淀達はこのままでも一向に構わない。

だから状況を動かさそうとするのは翔鶴達。

そう思っていたけど。

「っ!? 電さんが!」

「突撃……? いや、あれは……!」

思い返すのは南一号作戦の時に見た電の姿。

相手の攻撃を完全に見切り、遊ぶように深海棲艦を撃沈させていく

あの姿。

それが重なって見える。

「危ないっ!」

「……いや」

榛名の叫びを小さく否定する。

そして俺の予想通り、待つてましたと言わんばかりに電に向けられ

た鳥海の砲撃は。

「……えっ?」

「見切ったか、電」

いとも簡単に避けられた。

目を丸くする鳥海に向けて、電は笑顔を浮かべるけど。

「榛名、ちよつと怖いです」

「あはは……」

もう当たらないのですよと言っているのか。

あるいは、よく出来ましたと高みから見下し褒めているのか。いずれにせよ挑発的に感じられる笑顔。状況が、動いた。

守勢に回りながらも相手の動きを観察していた電が攻勢に移り、翔鶴達は動き方を変えることを強いられる。

電を止めるために川内が。それでも足りず神通が。

二人がかりでようやく電の相手が出来ている状況。

それはつまり。

「摩耶、中破」

「鳥海、中破」

比叡と霧島による攻撃から守る者がいなくなつたことだ。

「これは……決まつてしまいました？」

心配そうに言う榛名だけど……そうだよな。

「そう言うわけでもなさそうだぞ？」

中破した摩耶と鳥海。

それで何かを振りきつたのか二人が、電を止めるべく突撃。

同時、川内と神通が電を置いて霧島と比叡に向かって突撃しようとする。

当然それを阻もうとする電だが……。

「電、大破。轟沈判定ね」

古鷹、加古のお株を奪うような連携射撃が電に襲いかかった。

それは初めて見せる連携だろう、もしかしたら切り札として取っておいたのかも知れない。電の予想を遥かに超える程の巧みさだったから。

そして。

「霧島、大破。轟沈判定。川内も同じく轟沈よ」

神通の油断しましたねなんて声が聞こえてきそうだ。

川内と神通の突撃は実り霧島を轟沈させる。ただ、その動きに何か違和感を覚える……どうしてこうもあつさり？

だけどそれを考えている暇なく。

「爆撃機!!」

畳み掛けるような翔鶴と瑞鶴の爆撃機が比叡を襲う。

「響、轟沈。鳥海も轟沈ね」

響が比叡を庇い、轟沈。

それを信じた比叡の砲撃が鳥海を捉え、こちらも轟沈。

「一気に状況が動いたな」

「はい……未だに理解が追いつきません」

目を丸く瞬かせる榛名、可愛い。

しっかしほんと一瞬で様変わりだな。

残るは大淀と小破した比叡。それに対して神通と中破した摩耶。

翔鶴と瑞鶴は無傷だが……発艦出来る艦載機がもうないだろう。

さっきの爆撃機はしっかりと大淀が撃ち落とした。

ここで盾にならなれると動きはしないだろう、それは俺が絶対にやめろと言っていることだからではあるが……。

いや、まだそれには早いか。その理解でよしとしよう。

悔しそうに、一步及ばなかったと唇を噛んでいる二人。今はまだこれだけでいい。

「決まり、ですね」

「ああ」

俺と榛名の言葉通り、予想通り。

先の展開はやはり大淀と比叡が有利のまま終わる。

「いい、演習でした」

「そうだな、あいつらの力。しかと見る事が出来たよ」

海上で握手を交わす皆。

ありがとうございましたと言っているんだろう、どこか悔しそうな思いも伺えるけど納得してるように見える。

うん、榛名の言う通りいい演習だった。

しっかりそれぞれの力を知ることが出来た。

「それを活かすも、殺すも……俺次第だな」

あいつらの力に応えるためにも、しっかり頭捻りますか！

天覧演習初日のようです

あー……くっそ緊張した。

演習場からの帰り道、今日の日程は全部終了。

明日の打ち合わせやらなんやらで遅くなりそうだったから、皆には先に帰ってもらって今は俺だけ。

勲章授与式とかまじわけわかんねえよ……なんで天皇さんから直接貰ってるんだよ俺、死ぬの？

しっかしなんつーかオーラが違ったよな、うん。

カリスマなんて言ったらちよつと安っぽいかも知れないけど、人を惹き付ける空気ってああいうことなんだろうな。

自然とかしこまってしまったつうか……身が引き締まる思いだ。

その後すぐに行われた観覧式。

面白くないなんて少し思っちゃまうけど、やっぱり流石だなとも思った。

ものすごく綺麗に、かつわかりやすく。誰も目を釘付けに、感嘆の息を零してしまうような。

自信満々にやらせろと言ってきただけのことはある。

意外って言えばそうなんだけど、今日から三日間の天覧演習を見に来た人は多かった。

どこかのお偉いさんから普通の一般人さんまで、報道ヘリだって飛ぶ始末。

ここに直接来られなくても、テレビで見てる人も多いだろうって見込み。夕方、晩のニュース番組なんかでも特集が組まれるのかなんとか。

反応を見るに、やっぱりただ知らなかっただけなんだなと。そんな風に思う。

誰が、どんなやつが命をかけて戦っていることに気づけば漁師の皆さんと同じように受け入れ直してくれる。

安直なのかも知れない。けど、ただ戦果……それも芳しくないものばかりを知ってしまえば誰だって嫌になるのは当たり前だろう。

そうだと気づいたのは艦娘と触れ合おうの時間。

見に来てくれた人には子供の姿もちらほらあった、その子供達は目をキラキラさせていて、設けられた艦娘と遊ぶ時間を満喫してくれたみたいだ。

子供は大人と違って物怖じしない。純粹に興味って気持ちに後押しされたのか、すごく楽しそうで。

そんな子供の姿を見て、中々踏み出せないでいた大人達も少しずつ艦娘と会話したりと。

ある人は自分の子供、孫とでも考えられるような一見女の子に守ってもらって。

ある艦娘はこんな人達を守っているのだと改めて実感できて。

お互いがお互いのことを少しでも大事に思うためのきっかけになったことだろう。

有意義……いや、この上ない最高の時間だったと思う。

「だけど……ククツ、あいつら面白すぎだろ」

子供達との交流を請け負った艦娘の多くはうち。

特に予定が無かったからだけど……子供相手に狼狽えていた皆は見ものだった。

天龍なんか艤装を展開した時に現れる剣のせいと、思春期真っ盛り
の心を疼かせた子供にチャンバラごっこを挑まれていたし。

龍田もなんでか知らないけど泣いてる子供を泣き止ませようと戸
惑いながらも、必死に抱っこしたりあやしたり。

暁なんか小さい女の子相手にレディとはなんぞやと説いてる姿が
微笑ましかつたり。

少しだけしか見れなかったのが残念だ。きつともっとほっこり出
来る光景があっただろうに。

「ほんつと……幸せだな」

明日からがどうなるかはわからない。

あいつらならきつと勝利してくれる、なんて確信めいた信頼はあ
る。

ただどここの初日でもう十分にお腹いっぱい。

人と、艦娘はきつと手を取り合って上手くやっていける。
そんな風に思えた。

これから始まる過酷な作戦があらうと、未だ見ぬ脅威が誰かを脅かそうとも。

きつと、俺達は乗り越えられる、艦娘と共に。

「あ、あのっ！」

「ん？」

つと、浸つてて気づかなかつた……つて羽黒？ どここの所属だろ……。

「す、すみません！ えと、その……！」

「ふふ、慌てないでね、ね？ 申し訳ありません、墓場鎮守府提督さん。私は舞鶴鎮守府所属、長良型軽巡四番艦の由良です。この度は援軍のお礼に参りました」

やつぱ可愛いなあ……柔らかかボイスに笑顔……ああ、癒やされるう。

そうじゃなくて、舞鶴？ つてことは。

「じゃあもしかして……羽黒は佐世保の？」

「は、はいっ！ 噂はかねがね！ 光栄ですっ！」

おどおどしつつもやつぱ様になつてる敬礼姿。続くように由良も向けてくれる。

「はあ……不幸だわ、まだまだ出撃に忙しいっていうのに……」

おうおう、そこにいるのは山城さんじゃねえですか。

相変わらず不幸を満喫してますねえ！ 美人！

そして……。

「光栄です、お疲れ様です」

「……ああ、ありがとう」

呉鎮守府の、球磨型軽巡洋艦四番艦、大井。

……。

とりあえず、答礼して、だ。

「遠くから皆もお疲れ様。活躍は聞いているよ、うちの艦娘がいなくなつた後も頑張つてるみたいだな」

「ありがとうございます。でも、天龍さん達のおかげですから……」
よせやい、謙遜なんか要らねえつすよ。

舞鶴の逆襲。

なんて言われてるくらい快進撃を続けている舞鶴鎮守府。

佐世保の躍進。

とか言われるくらい見違えた佐世保鎮守府。

そして。

「申し訳ありません、中々良い報せを届けられず」

「いや、正面海域の維持も大切だからな。おたくの提督はどう思ってるかわからんが、俺としては十分じゃねえかと思ってるぞ」

特に何も情報が届かない、呉鎮守府。

さつきから、会話こそすれ視線を交わすことが出来ない大井。

何処か居心地悪そうに、必死に礼儀としてを支えにこの場へ留まっている。

「恐縮です」

その姿勢を崩さず、形だけで畏まってくれた。

由良達も気づいているのだろう、少し訝しげに首を傾げながらも言葉が続けてくれる。

「えっと……明日の演習は艦娘養成訓練学校、でしたか？ その方々が出るのですよね、ね。私、楽しみにしています」

「そうね……私も、折角来たのだから勉強させて頂くわ」

「はい、私もしっかり得られるものがあるよう精一杯勉強させてもらいますね！」

だからこの空気を打ち払おうとしてくれるかのように明るく言ってくれた。

ありがたい……ってか、艦娘に気を使わせてどうすんだって。

「ああ！ 是非明日だけに限らず最終日まで見ていってくれ！ うちの自慢をしっかりとらせてもらうからさ！」

そう言ってみれば大井以外の皆は一瞬目を丸くした後。

「ふふつ、なんとなく、天龍さん達が提督のことを慕ってる理由がわかります」

「惚気……コレは惚気よ……何故横須賀まで来て惚気を……不幸だわ」

「いいじゃないですか。幸せそうでは何よりね、ね」

「惚気たつもりは全然ないんだけど……ううむ。」

「ともあれ笑ってくれたしよしとしようか。」

「あんまり引き止めてもご迷惑ですね、最終日まで楽しみにしていますー」

「ああ、ありがとう。期待に応えられるよう頑張るよ」

「まあ俺が戦うわけじゃないけど、気持ちはな。」

「一礼のあと離れていく由良達に手を振って見送れば……残るは。」

「で、だ……大井」

「はい」

「その場に残ったのは大井。」

「一瞬由良が振り返ってこつちを見た気がするけど……心配すんな、大丈夫だ。」

「『コーヒーと紅茶、どつちが好きだ?』」

「……は?」

「波止場から見える海は赤い。」

「やがて黒くなって、今はまだうつすらと見える墓場鎮守府も、やがて夜の帳に塗りつぶされて見えなくなってしまおうだろう。」

「その事に柄でもなくセンチメンタルな気持ちを抱えながら、手に持った缶コーヒーを一口。」

「不味いな」

「……なら、飲まなければ良いのでは?」

「少し離れて同じように海を眺める大井。」

「手に持ったお茶のプルタブは開けられていない。」

「いやな、うちではコーヒーなら時雨が、紅茶なら金剛が、お茶なら皆が淹れてくれるんだけど……それと比べればって、当たり前か」

「……そうですか」

「やれやれ、冷たいね。」

それでこそ大井ってなもんかも知れねえけど、どうせならもつと切れ味良く突っ込んでもらいたいもんだけどな。

自慢ですか？ 魚雷の的になりたいんですか？
なんてな。

まあいいさ。

大井が何かを話したいんだろうことはわかる。

当たり前だけど、何もなきや由良達と戻っていくわけで。

それが何なのかって話だけ……。

「……負けて下さい」

やっぱそれか。

「……大井の口から聞きたいって言葉じゃねえな？ 北上さん自慢の

が聞きたいぞ、俺は」

「っ！ き……っ！ ……ぐ、あ、あなたは知っておられるのでは？」

……少し、安心。

沈んだ北上のことを話題に出したのはすまないと思うけど、やっぱ
り北上のことを好きだったのが確認出来て何より。

だったら大丈夫。

「悪かったな。それで？ 負けて欲しいってのは？」

「呉鎮守府が、どういう場所なのかはご存知のはず。なら、先程の言葉
で十分御理解いただけると思っていたのですが」

まあ、な。

呉鎮守府。

兵器派軍人達の影響が強くある場所。

予め知っていたわけじゃないが、実際に第一艦隊を派遣して、報告
書が届いて。

そして長官の意見を聞いて、ようやくそうだと気づけた実態。

「それはうちの戦力分析をして、勝てないと悟ったからそう言うのか
？」

「お答えできません。ですが、もしもここで敗北の約束を頂けるなら
……」

大井の手が服のボタンに……って!?

「ちよつと待てい！」

「私ではご不満でしょうか？ ああ……初物がお好き、とかでしようか？ それでしたらご心配なく、未だ誰も知りませんので。もしも熟練の手管をご所望でしたら……お好きに染めて頂ければと思います」
そうじゃなくてだな!?

大井のおっぱいたまんねえなんて昔言ってたけどだな！

「そうじゃない……答えられないと言っていたな？ ならこれは上の指示か？」

「いいえ、私の意思です」

……へえ？

随分ときっぱり言うね、予想してたんだろうか。

上官を庇う、そうとも取れるけど……。

「そうか、なら頂こう」

「っ！ せ、節操がありませんね、ですが……構いません。お、お好きにどうぞ」

ぐいっと引き寄せてみれば少し震えている大井。

やっぱり視線は合わずにそっぽを向かれています。

「大井、顔をこっちに向けてくれないとキスが出来ない」

「し、しなくても、で、出来ることは……出来るのではありませんか？」

……やれやれ。

いやまあ自分のこと棚に上げきれないで心臓バクバクだけどき……はあ。

「じゃ、コレ。脱がすぞ？」

「ど、どうぞ……つて」

はい、ばきつとな。

「つたく。こつというのマジであるんだな……」

「……」

小型マイク、ねえ。なんと言うか……なんと言うかだなあ……。

あ、大井ごめんな。すぐに離してやるから、もうちよつとだけ待ってくれ？

「改めて聞くぞ？ 何故こんなことをしようとした？ お前の意思

じゃねえってことはわかるが」

「ち、違います！　これは……私の意思です!!」

んー？　いや、もう強がなくなってもいい……うん、他には何もありませんよな。

大丈夫、うん。

あ、ごめんごめん、ちよつと下がるな？

「もう何もないと思うけど……好きに喋って大丈夫だぞ？」

「違います！　私は……あなたが後悔すると——!!」

後悔？　何のことだ？

あ、もしかして大井にお手つきできなかつたこと？

そりやむつちや勿体無いけど……こんなところで、こんな形はなあ？

「ほう？　流石に勲章持ちにもなれば余裕が違うようだな？」

「——お疲れ様です、中将殿」

そんな時に現れたのは中将、兵器派の筆頭さん。

少し息を切らせているのは多分マイクが潰れて慌てて来たからだろうな。

俺が民間人だからって舐めてたか？　いや、まあ偶然だけど。大井を母港画面で舐めるように見てた俺だからこそなんだろうけど。

「——」

一瞬大井の顔に浮かべられた嫌悪感。

すぐにさつきまでと同じ仮面を被り、中将の下へと歩いていく。

離れ際聞こえた謝罪の言葉は……何に対してだろうな。

「南一号作戦殊勲者ともなればさぞ見目麗しい女性に声をかけられたと思うが……そんな中から艦娘を選ぶとは、やはり変わり者にも程があるようだ」

「はは、申し訳ありません。やはり、私は艦娘に傾倒し過ぎなのかも知れません」

空々しいにも程があるな、面の皮が厚いつつうか。

良いよ別に、むしろ褒め言葉だし。

あんたの舞台で話そうじゃねえか。

「まあ良い、幸い寸前止まりだったようだ。この手でしょっぴけなくて済んだことを嬉しく思うでしょう」

「そうですね。今営倉にでもぶちこまれてしまったら、作戦にも参加できませんでしたから……おかげさまで、助かりましたよ」

皮肉には皮肉を。

なんてガキの喧嘩じゃないんだからとも思うけど。もう随分と繰り返したやり取りだし、いいだろう。

お互い、本気でそうしたいわけじゃないってのはわかってる。じゃれ合いみたいなもんだ。

まあそれにしては小型マイクなんざ持ち出してやりすぎ感はあるけどな。

……あれ？　もしかして今回はマジだった？

「ともあれ改めて、南一号作戦の成功に、各方面への援軍派遣。今回観覧式を任せて貰ったことも含めて賛辞と感謝を贈ろう」

「光栄です」

……ふう、このタイミング言うかね。

やれやれ、追及すんなってことですねわかりますと。

「それにしてもこんなところで艦娘遊びとは随分と余裕だな？　それで明日は大丈夫なのかね？」

「明日？　何かありましたか？」

これくらい刺していてもいいだろ。うん、効果覷面。

あんたが言うように、俺だってうぜえおっさんの顔なんざ見たくないんだよ。

「減らず口を……だが、そのおかげで我々にも勝利の目がありそうだ。楽しみだよ、貴様の目が凍りつくその瞬間が」

「……ええ、全く楽しみではありませんが。良い演習になることを期待しています」

面白くなさそうな顔を期待してたけど……どうやらほんとに自信があるようだ。

不敵な笑顔を浮かべて踵を返す中将と。

「おい」

「はっー！」

それに続く大井。

ちらつと一瞬悲しそうな顔を向けて来てくれたその目へとようやく視線を交わせる事が出来た。

そしてその目が。

「……ポケット？」

上着のポケットへと流れた。

意図を問い返そうとしたけど既に見えるのは背中だけで。

その示した中には……紙が一枚。

「……そっか、そういうこと、か」

ぐしやりと音を立てるメモ。

そこに書かれていた言葉。

「ああ、大井……やっぱりお前は良い女なんだな」

そのことを嬉しく思う。

そしてそれ以上に。

「兵器扱い、か……」

ある意味、その観点からは正しいんだろう。

明日は苦しい戦いになる、それが確信出来た。

だけど……。

「認めねえ……そんなの絶対認められるわけがねえ……！」

わかったよ、全力でかかってこい。

その上を行って、認めさせてやるさ。

そして必ず。

「後悔させてやる……っ！」

天覧演習二日目のようです

天覧演習。

一日目より多くの一般人が集う演習場。艦娘は一人ずつ海上に登場し、自身の姿を見せるために海上を一走り。

共に流れる自身の名前。

アナウンスが響けばそれをかき消すような歓声が沸き、今最後に登場した長門の頬を引きつらせる。

演出過剰ではないかと、天皇陛下の前で行うには些か低俗にすぎるとではないかと。

そんな心配を余所に盛り上がる会場。

『長門型戦艦、一番艦長門っ!!』

声に従って片手をあげればまさに興奮の坩堝。

一日目と二日目にしてこの違いはどうだと苦笑いが自然と浮かぶ。決して不快ではない。

昨日行われた民間人との交流。

そこで改めて守りたいと心に期することが出来た。

この国にいる全ての人間を守る。

それも自身達が敬愛してやまない提督のもとで。

それは何よりの幸福だと、長門だけに限らず幕場鎮守府に所属している艦娘全員が思っている。

「長門」

「ああ」

陸奥が戦意を漲らせた目で長門を見つめる。

続いたのは瑞鶴、摩耶、川内、朝潮。

全員が、必ず勝つぞと長門へ訴えていた。

——これほど胸が熱くなるものか。

長門は心でそう呟く。

この舞台に立てたのも、今こうして熱い気持ちを持ち続けられることも。

全て提督のおかげであり、共に歩んだ仲間、家族が居てこそ。長門の目が滲む。

まだこれからだと言うのに。

一体いつからこんなに涙もろくなってしまったのかと自問する長門だが、その答えは既に出ていた。

そしてそれもやっぱり提督のせいでありおかげ。

どれだけ心酔しているのかと冷めた言葉をかける者がもしかしたらいるのかも知れない。

だがそれでいい。

たとえ愚か者と言われようとも愚直に提督を信じて前を征く。

南一号作戦、艦学、演習を経てここに立った長門達の答えだった。

「だからこそ——」

「わかってるわ」

目の前に立つ相手を認めない。

ただただ冷たい機械のような瞳で長門達を見つめるモノを許さない。

「伊勢、飛龍、蒼龍、鈴谷、熊野、大井……」

何があったのかはわからない。

記憶で知る彼女たちではあるが、きっと本来はこうじゃないと確信めいた何かがある。

故に決断した、提督の力である自分たちは覚悟した。

「絶対に……救ってみせるぞっ!!」

「了解っ!!」

『天覧演習——始めっ!!』

開始の合図、それと同時に長門は手を振り被る。

「行くぞ陸奥っ! 一斉——」

「っ!! 艦載機来ますっ!!」

——一斉射。

その言葉と砲撃は長門達に向けて飛んでくる艦載機によって遮ら

れた。

戦闘機、攻撃機、爆撃機……そして、瑞雲と——
「危ないですっ!!」

——魚雷。

大井によつて発射された先制魚雷は陸奥に向かい、その脅威を朝潮が防ぐ。

「あぶなっ……ありがとうっ！ 朝潮!」

「いえっ！ ……っ!? まだです！ 瑞鶴さん！ 摩耶さん!!」

「おうっ！ まつかせときなあ!!」

「ええっ！ まつかせて!!」

当然続く相手の艦載機による攻撃。

多すぎる数に泣き言は生まれない。

ただ向かつてくる攻撃へと摩耶を筆頭に対空迎撃を試みる艦隊。
歯を食いしばり艦載機の群れへと臨む。

『摩耶、朝潮中破。陸奥、長門小破』

この程度で済んだと思うべきだろう。

観客が目を丸くし、アナウンスの後に大きな歓声があがったことがわかるように、派手。そして美しく、苛烈すぎる先制攻撃だった。

「くうっ……! 長門っ!!」

「わかつているっ！ 行くぞっ！ 一斉射っ!!」

この判断は少し裏目。

一斉射のために足を止めていた長門達に対して、伊勢達は既に動き出している。

一斉射自体は行えたものの、有効な攻撃とはならなかった。

『鈴谷、熊野小破』

一斉射の迫力に再度上げられる歓声。

だがその歓声に成果はついていかず。

「くそっ……!」

「まだよっ！ 長門！ 砲雷撃戦、用意っ!!」

冷静でなかったことは認められる。

やられたからやり返した、そんな意地の張り合い程度であったこと

も認める。

そして。

不利な状況から始まった戦闘に覚悟を決めた。

「陛下、ご覧くださいましたか？　これが我が艦隊の力です」

観覧席。

天皇陛下を真ん中に、その隣に立つは長官。

左右に座っている提督と。

にやけ面を必死に抑えた顔。

そんな顔を天皇陛下へと向けて力を誇示する中将。

それを背に提督は。

「ぐっ……」

振り上げたくなる腕を、殴りつけたくなりそうな拳を抑えることに必死だった。

長門達は気づいているだろうか、伊勢達の表情に。

苦痛を必死に押さえつけようと唇を噛み締めているそれ。

改。

伊勢は戦艦から航空戦艦へ。鈴谷、熊野は改造することによって重巡洋艦から航空巡洋艦へと艦種が変わる。

だからこそ蒼龍、飛龍達の先制航空攻撃に参加出来る瑞雲の発艦が行えた。

大井にしても同じく、改造によって重雷装巡洋艦へとなり、先制雷撃を行うことが出来る。

「素晴らしいですね。ですがまだまだわかりませんよ」

「その通りでございますな！　ですがこの勝負……我が艦隊の勝利として、陛下に捧げましょう！」

揚々と言葉を連ねる中将。

固く震えながらも結ばれた提督の手のひらから、一滴の赤が伝う。

艦娘は海へと認められ、海から力を得て改へと至る。

艦娘として形になる前の力、あるいは艦娘が海へと落とした力。

それを取り戻し、改というステージに立つ。それがこの世界の理だ

と理解できた提督。

ならば今演習場で戦っている兵器派艦隊の艦娘もまたその道を歩んだのか。

「んなわけねえ……！」

小さく呟かれた答え。

それは正しい。

彼女たちは人為的に改へと昇らされた。

呉鎮守府で観察された第一艦隊。

それは改であるものとそうでないものの違い。

決して、どうすればあかも上手く動けるのかと研究されたわけではない。

ただどうすれば改と同等の力を得ることが出来るかということの研究され……実践されたのだ。

「あんなに苦しうに……！　なるわけがねえ……！」

辛いよ、苦しいよ。

提督の目には、伊勢が砲撃する度に、鈴谷が、熊野が瑞雲を発艦させる度にそう言っているように見えた。

助けてよ。

飛龍が、蒼龍が艦載機を発艦させる度にそう訴えられているように聞こえた。

未だ提督のポケットにあるくしゃくしゃになった紙。
簡単に、簡潔に。

『あなたを悲しませたいと思いません。ですが、私達は整備されました。兵器らしく人の手によって』

そう書かれたメモ。

こつそりと、いじらしく。

遠回りに何かを求めた文章。

大井は負けてほしいと言った。

それは何故だろうか。

勝てば満足して無理な改造を止めると思ったのかも知れない、もしくはこれこそが正しい形だと思ったのかも知れない。

あるいは……提督へと答えを委ねようとしたのかも知れない。

艦隊の中、唯一平然とした顔で戦闘行動を取る大井。

彼女はあの中で唯一の成功例。

他の者は練度が足りない、改造自体の失敗。あるいは別の何かで無理な改というステージに苦しんでいる。

それに加えて人の手によって作られた装備。

本来妖精と艦娘が共同で作られるそれ、妖精がいなかったため人の手のみで作られたそれも苦しみの原因だろう。

提督はそれを正しいと思わない。間違っていると今すぐに断罪したい。

だが、戦力の増強。

その一点にのみにおいては正しい。

改というステージ。

それはあまりにも険しい道。

墓場鎮守府の面々が軽々と歩んだ道は、他の艦娘にとって険しい道だった。

だから、正しい。

艦娘を兵器と見るならば、持ち主である人がその力を整備し、性能を向上させることは普通で、当然の行為だ。

この改造方法が確立されて、より安全に失敗なく改へと至ることが出来るのなら。

それは多くの艦娘を強くさせるだろう、艦娘本人の意思を無関係に、間違いなく。

結果、人類は深海棲艦に対して持つ戦力を向上させることが出来る。

「わかってる……わかってる……！」
理屈ではわかる。

彼女たちは謂わばその輝かしいだろう未来への踏み台であり礎だと。

だとしても、認められない。

唯少しの犠牲も認めない、兵器ではなく艦娘の幸せを願う彼には、

決して認められないのだ。

「長門、陸奥、瑞鶴、摩耶、川内、朝潮……」

今戦っている彼女たちの名前を呼んだのは何故か。

初めての対外演習。

鎮守府内の仲間同士以外で行っている、ありふれた、普通の演習。

天覧演習とは言え、やっていること自体に変わりはないそれ。

初めてにして、あまりにも大きく、大切なものが賭けられた演習だった。

「はあ、はあ……長門……大丈夫？」

「つぐ、ああー！ 問題ない！」

戦況は、墓場鎮守府にとって悪い。

轟沈判定を受けたものこそいいものの、それぞれが中破以上の損傷判定を受けている。

対する兵器派艦隊は熊野が轟沈判定だが、他は小破程度とまだまだ動きに陰りは無い。

一挙一動に歓声はあがるものの、その観衆自体兵器派の勝利を薄々と察している状況。

「どうしたらいいっ!？」

「長門さんっ！」

蒼龍が発艦した艦載機を撃ち落としながら摩耶が。

飛龍が発艦した艦載機に向かって戦闘機を飛ばした瑞鶴が、旗艦である長門に問う。

思考を巡らせ続けながらも戦況に対応している長門。

問いかけられたものへの答え、それは用意されている。だが。

「もう少し……踏ん張ってくれっ！」

「っ！ 了解っ!!」

その言葉を受けて、攪乱するため再突撃するのは川内と朝潮。

続く砲雷撃戦の中、少しでも長門が落ち着いて考えられるように、その時間を作るようにと身体に鞭を打つ。

長門の頭に浮かんでいる答え。

その手段は取れない、取ってはいけない。

今はもう誇りとした墓場鎮守府の一員、誰かを犠牲に勝利を目指すなど許されないし、許さない。

故に模索する。

誇りを失いたくないと必死で思考を巡らせる。

このメンバーが選抜された理由。

やはり長門、陸奥による一斉射が主眼におかれているだろう。

それを活かすためにはまず長門と陸奥が一斉射に向けて行う準備をするための時間の確保。

準備中の二人を守る護衛と、相手の足を止めるための攻撃。

——今、誰がそれを出来る？

川内、朝潮に攪乱目的ではなく轟沈を視野に入れた突貫を命じればその時間は取れるだろう。

かつて、金剛ごと敵を撃ち抜こうとしたようにすれば戦況は五分、いや有利へと持ちなおせるかも知れない。

「だが……っ！」

それは選ばない。決して選ばない。

選んでしまえばかつての自分へと逆戻りして、もう二度と墓場鎮守府で胸を張れないと理解している。

だから。

「長門……時間切れだぜ？ 言ってくれよ、突っ込んでこいって」

「だめだっ！ それだけは絶対にしないっ！」

摩耶が言う、言つてすぐに長門に拒否される。

同時に川内と朝潮が大破判定を受けて戻ってきた。

「はあ、ふう……長門、そうじゃ、ないと思う」

「ふ、ふ……ふう……はい、私も、そう思います」

「なんだと？」

勝利への道が暗くなってきたことを理解していた。

だがそれでもなお照らしてみせると目で語る。

——墓場鎮守府の皆は、こういう場面で必ず行つて必ず無事に帰つてくるんじゃないか。

一瞬の沈黙が降りた。

長門の目から鱗が落ちた。

そして。

ようやく理解した。

「摩耶っ！ 川内っ！ 朝潮っ！ 突撃準備っ！ 遠慮するなよ？」

好きなだけ食べてこいっ！！」

「了解っ！！」

「瑞鶴っ！ 私達の護衛を頼むっ！」

「まっかせて！ 絶対邪魔はさせないからっ！」

「陸奥！」

「ええ！」

—— 一斉射、準備。

自分たちが、真に墓場鎮守府の一員だとするなら。

その通りだと思つた。

確かに、こんな絶対的敗北を前にしてなお沈まなかつた。

だから。

「胸が……熱くなるなっ！」

今から行うのはその証明。

元よりそれが目的、それこそここで捧げるはずだった提督への証。

我らは墓場鎮守府の艦娘である。

「頼むぞ……いや、信じてるっ！！」

無事を勝ち取る姿を信じ合い応え合うこと。

それこそが墓場鎮守府最大の武器なのだから。

「いつくぜえー！！」

中破判定の摩耶。

その足は鈍く、まさに格好的。

だから静かに、鈴谷は狙いをつけた。心を軋ませながら、流れない

涙に苛立ちながら。

砲撃。

「甘いねっ！」

「!？」

その的が急に鈴谷の視界から消える。

川内がその視界から奪った、誰よりも早く判断し、摩耶の身体を攫った。

まるでフラワーズの護衛技術を彷彿とさせるように。

「サンキューー！ 川内！」

「何のこれしきってね！ 行くよっ！」

鈴谷の砲撃は空を切り、誰も居ない場所へと線を描く。

体勢を再び整える摩耶と川内、その二人に向かって砲撃しようとするのは伊勢。

「知っていますか？ 小さな損傷でも命に関わることを……！」

唯一動く足。

砲塔は損傷判定、魚雷だつて発射不具合判定。ろくに使えたものではない。

だからこそ脅威ではないと見逃された、だからこそこうして肉薄叶うことが出来た。

「これなら戦えますっ!!」

むき出しの魚雷を伊勢に叩きつける。

その姿は夕立に少し似ていて。

『伊勢、大破。轟沈には至らず。朝潮、ごうち……し、失礼しました！』

朝潮に損傷はありません！」

一際大きな歓声。

少しではなく、夕立と同じ。相手に至近距離で損傷を与えながらも自身は無傷でいる技術。それをもって悠々と再び駆け出す。

「っ！ このっ！」

慌てて主砲を構えるのは大井。

だが。

「つく!？」

撃てない。

まるで伊勢を盾にするかのようにして動き続ける朝潮へと狙いをつけられない。

撃てば必ず伊勢を巻き込む、そんな位置で朝潮は舞う。

兵器派の思想に賛同しているなら撃てていたはずの魚雷。

それが撃てない。

「安心したよ」

「なっ!?!」

朝潮に気を取られているうちに詰められた距離。

照準をつけられなくなった主砲を大井へ突きつけるは川内。

「気づかなかった? ふふ、これなら夜戦でも使えそうだね」

いくら気を取られていたと言えど、ここまでどうして距離を詰められようか。

川内が磨いたのは護衛技術だけではないと、海上走行技術も磨いたのだと大井の驚きにより証明させた。

「このっ!」

「遅いねっ!」

振り向きざま大井は主砲を川内に放とうとする。

この距離だ、撃てば自身も損傷するだろう砲撃。だが、相手は瀕死も良いところ。

多少の損傷が見込まれど、轟沈判定は奪えるだろうと。

そう川内へと意識を囚われてしまった。

「摩耶様の攻撃っ! 忘れんじゃねえぞっ!!」

「きゃあっ!?!」

そんな大井の背中を穿つは摩耶の砲撃。

未だその距離は遠い、しかしまるで古鷹や加古を思わせるような正確な一撃。

『大井、轟沈判定。川内、ごう……ま、またですか!?! 失礼しました!』

川内、損傷なし!!』

「うそ……」

驚きに固まるのは大井。

ついさつき、目の前にいたはずの川内は、既に爆風に巻き込まれない位置。

川内の技術。

それは時雨の急制動急発進を川内なりに昇華させたもの。

緩急によつて相手の誤認を誘う技術だった。

川内の損傷は脚部にもある。

それであっても失われない、惑わせる技術。

「たい、くうみはりも……げんとし……っ!!」

「やらせないよっ!」

だがこれで孤立したのも確か。

すかさず蒼龍の艦載機が川内へと向けて発艦されるが、それを見越した瑞鶴の艦載機が現れそれを撃墜。

残った艦載機の攻撃は川内の姿を捉えられず。

「だいにじ、こうげきの……ようを……!」

ならば一斉射の準備をする戦艦二人の護衛はない。

それを理解していた飛龍が艦載機を飛ばすが。

「はっ! あたしの後ろへは抜かせねえ!! どうだっ!!」

その進路上に構え、必死にこれだけはと守っていた対空砲を斉射する摩耶によつて大幅にその数を減らす。

辛うじて長門達の下へと辿り着き、爆撃を敢行するも。

「……へへっ!」

「ありがとう……っ!」

「よくやってくれた……っ!」

『瑞鶴、大破。轟沈には至らず!』

瑞鶴がその身を呈して守護する。

「すず、やに、おま、かせ……!」

瑞鶴に向けられる鈴谷の砲塔。
だが。

「あ……れ……?」

限界。

何の脈絡もなく膝から崩れ落ちる鈴谷。

不思議そうに、自分の手を、足を眺める。
改というステージに練度の足りない身体が、限界を迎えた。

「……よく、がんばったね」

そんな鈴谷に、川内の砲塔が突きつけられる。

何が起こったのかわからないまま、その砲塔をぼうつと見る鈴谷は。

「えへ、へ……すずや、ほめられ、て、のびるたいぶ、じゃん？」

「うん、いっぱい褒めてあげる」

僅かに笑って、川内の砲撃を受け入れた。

『鈴谷、大破。轟沈判定』

「馬鹿な……馬鹿な馬鹿な馬鹿なっ!!」

テーブルに拳を叩きつけるのは中将。

かつての誰かのように、目の前の光景を信じられずに喚く。

「艦娘の戦いとは……こうも、すごいものですね」

感じ入るように光景へ釘付けになっているのは天皇陛下。

興奮を抑えられないと言うように身体を震わせている。

残るは、伊勢、蒼龍、飛龍のみ。

あれだけ賑やかだった会場。

今はまるで水を打ったような静寂に包まれている。

「……皆」

光景に釘付けになっているのは提督もまた同じ。

絶望的とも言ってよかった展開。

だというのにも関わらず、最後の突撃を見た瞬間に何故か勝利を確信できた。

そしてその確信は。

「いくぞ陸奥っ！ 一斉射!!」

長門の凜とした声が響く。

中破した姿からは想像もつかない程正確に、その砲撃は――

『……伊勢、蒼龍、飛龍。轟沈判定』

――願いの先へと吸い込まれた。

瞬間、今までで一番大きな歓声が沸き起こる。
信じられない、すごい、感動した。

そんな言葉が次々に口にされている。

「やったね」

「長官……はい、やってくれましたよ、流石自慢の家族です」

提督の肩を叩いたのは長官。

その顔には安心したような笑顔が浮かべられている。

「き、きさまあ!? 一体、何をしたっ!?」

「……どつかで聞いたセリフ言っつてんじやねえよ……」

そこへ詰め寄ったのは中将。

天皇陛下の前だということをすっかり忘れてしまっているかのよう
に顔を赤らめている。

「御前です、控えましょう」

「ぬ、ぐ……し、しかし!」

長官がしやうがないなど間に入り、天皇陛下へと頭を下げる。

その姿を一笑みした後。

「どちらも、素晴らしい健闘ぶりでした。それほど艦娘を信じていた
のでしよう、私はそれを嬉しく思いこそすれ不快には感じませんよ」
「有り難く……」

そんな台詞で許された。

「中将」

「ぐ……なんだっ!」

しっかりと中将の顔を見据えて、提督は口を開く。

「良い、演習でした。いい経験を積ませてもらいました。ありがとう
ぐぐぐいます」

握手を求めながらそういった。

御前故、逃れられぬとその手を取った中将の身体が提督にぐつと引
かれ。

「あなたのやり方はある意味正しい。だが次にソレをやってみろ
……」

「ひっ……」

提督は耳へと寄せた口を離し、至近距離から眼光鋭く中将の目を穿ち。

「たとえ地の果てまででも追いかけて……二度とふざけた真似が出来ないようにしてやる」

「――」

越えてはならない一線がある。

お前がそれを越えるのなら、自分も越えることに躊躇はない。

「正しいさ、戦力向上のため必死になることは……それだけは認める。そんなために俺を馬鹿にしてもいい、目の敵だにしたつていい……だが」

――艦娘を傷つけるのだけは許さねえ。

腰から下げた大佐譲りの軍刀。

頭金が、無意識に再度距離を詰められた中将の腹部へ冷たく擦れ。

その感触と言葉に中将の腰は砕け、へたり込んでしまい頭を俯かせる。

「長官、艦娘異動の手配……頼みます」

「やれやれ、この場だけに限らず……だけど、いいさ。喜んでそうしよう」

肩を竦める長官に軽く頭を下げた後、陛下に歩み寄る提督。

「陛下」

「流石ですね。素晴らしい演習をありがとうございます」

握手を求められ、それに応える。

だが、それじゃあないと切り上げたい提督。

「……ふふ、そうですね。行っておやりなさい」

「ありがとうございますっ！」

そう、それだと敬礼を一つした提督は直ぐ様その場を後にする。

「長官」

「はっ」

その姿を笑顔で見送った天皇陛下はそのままの顔で、嬉しそうに長官へと。

「日本の未来は、明るいと感じて良いのですか？」

「もちろんです。その未来、確かに手繰り寄せること、ここに誓いま

しよう」

既に消えた背中。

その背中を想い、未来へと馳せることが出来た。

天覧演習最終日のようです

天覧演習、最終日。

快晴という単語がよく似合う日だった。

演習会場で生まれる熱気は太陽に負けず、前日にも増して空へと立ち昇る。

そこから外れた、工廠。

初めて見る妖精の姿へと驚いたのもそこそこに、大井はベッドで静かに寝息を立てる伊勢達の姿をぼんやりと眺めている。

「……演習を見なくて、よろしいのですか?」

「バレたか。許可は貰ったし、あいづらも行つてこいつて言ってくれたよ……ほれ、こんなもんしか作れねえけど食つてくれ」

差し出される皿に盛り付けられていたのはチャーハン。

横目でそれを見た後視線を外し、再び戦友達の姿へと戻す大井。

「お心遣いは嬉しいですが……」

「昨日からなんも食つてねえだろ? 看病してくれてるのはありがたいが、そんな大井が倒れたら……こいつらが目を覚ました時に悲しむぞ?」

昨日の演習が終わってから。

控室に戻った伊勢達は瞬間崩れ落ちた。

途中で鈴谷が動けなくなったように、糸が切れたかのように。

それから一時入渠ドックへと運ばれたものの、効果は見られず。

こうして工廠へと運び直され、手術とでも言うべき行為が妖精主導のもと行われた。

やはり人の手による改造は艦娘への負担が大きく、身体がそれについていっていかなかったことが原因だった。

流石の妖精でも改造前へと戻すことは叶わず、再び元に戻るためにはそれなりに長いリハビリを要するとの見立て。

それは身体も、心も。

「……いただきます」

「おう」

チャーハンから漂う香りに身体が敗北したわけではない。ただそれを引き合いに出されては食べざるを得ないと皿に手を伸ばす。

彼女たちに対して、大井。

唯一の成功例、大井。

一口食べてみれば空腹を思い出したのか自然と進みは早く、あつという間にキレイになる皿。

なんだか悔しいと頬を染める大井に提督は苦笑いを浮かべ。

「……北上の意思を守るため、か」

「……やはり知っていたのですね。私の見立ては間違っていたのやら正しかったのやら」

ごちそうさまでしたと、両手を合わせテーブルに皿をおいた大井は、にらみつけるというには力が足りない目を提督へと向ける。

呉鎮守府で、沈んだ北上。

持ち前の性格から、慕われているわけではないが、何故か頼りになると評され、気づけばリーダー扱いになっていた北上。

兵器派思想の下で運用される彼女たちの精神は摩耗していた、だが、北上がそれを支えていた。

—— だつたらやればいいじゃん、大丈夫だつて。

無茶な命令、無理を通さなければならぬ命令。

だがそんな命令は確かに行うことができれば効果的なもので、必死に、死力を尽くしてと海へと向かう中、北上は気負った姿を見せることなくそう言つて出撃し、達成して帰ってきた。

「そうやって北上さんは皆の盾になってくれていました。だから提督の命令を達成するために、北上さんを中心に纏まって……阿武隈とは、やっぱり仲があんまり良くなかったですけど」

それでも幸せだったと大井は微笑む。

必要なメンテナンスは的確に行われた。補給もされたし、運用もある意味正しかった。

その関係は人間と兵器。人間に扱われる兵器というだけで。

中々成果は上げられなかったにしても、亀の歩みだったとしても着

実な一歩を刻めていた。

「ある日を境に、運用方法が変わりました。その境は……お察しの通りかと」

「墓場鎮守府建築作戦、か」

頷く大井。

あの日、作戦成功したあの日。

あれから確かに変わった、より苛烈な命令が下されるようになってた。

こうすれば戦果はあがるのだと、兵器派の思想、やり方こそが正しいのだと証明を急ぐように。

「北上さんと……阿武隈。二人は揃って沈みました。あんなに仲が悪かったのに、示しあったかのようにそれぞれの随伴艦を逃すために」
「……」

今思えば少し羨ましかったと言葉を続ける大井。

一緒に沈むことを許されなかった自分と違って、許された阿武隈に今でも嫉妬していると話す。

「北上さんの艦隊にいた私。反対する私に北上さんは言いました」

——大井たちだけだからさ、この後を任せたいと思うの。……今まで、ありがとね。

そうして帰投した後。

烈火の如く怒り狂う提督を尻目に、大井は一つ決意した。

「私が、北上さんの代わりになる」

もう負けないと。

誰よりも強くなつて、皆を守ると。

北上がしていたように、道作るものになってやると。

「そんな時でした、彼女たちが来てくれたのは」

日々任務をこなす大井。

その姿は鬼気迫るかのようで、強さを追い求めて身を焦がし続ける彼女たちの目の前に現れた墓場鎮守府第一艦隊。

「僅かな戦力で正面海域を突破した鎮守府。その力で南一号作戦成功へと導いた艦娘。……噂は嫌でも耳にしました、だから好都合だと

思ったんです」

「強くなるため……違いを見つけるための、か」

手を握りしめた大井。

そう大井が思ったときだった、同じことを考えていたのは呉鎮守府、ひいては兵器派の人間たち。

「命じられました。違いを見つけろと、どうすればあのように強くなるか考えろと。それは私と同じ想いでした、彼女たちの力を一つでも多くモノにしてやろうという部分において、ですが」

僅かな時間だった。

墓場鎮守府第一艦隊は何の苦もなく、呆気なく海域を突破した故に。

それでも見つけた大きな違い。

それが、装備の数。

「連携だなんだなんて……理解できませんでした。想像を、理解を遥かに超えていましたから。だから、装備の数が違うと、そう提督へと伝えました」

「……そして、それを可能にするための改造を受けた」

自嘲気味に嘲笑う大井。

後悔は先に立たなかつたと、眠る伊勢達を見て話す。

人工改造技術。

墓場鎮守府建設作戦より前、兵器派が立ち上がって間もなくから進められていたこの研究。

建設作戦の成功により、兵器派主導のこの研究は積極的に力を向けられるものになったが、この世界のルールにより進捗は芳しくなかつた。

だが、提督が改の完成形を見せてしまった。それ故に進んでしまつた技術。

結局成功と言えるのは大井だけ。

しかしそれは大井にとってのみにも関わらず、改造は成功だと提督たちは喜んだ。

——これで我らの正しさを証明することが出来る。

そう、光の宿らない瞳を浮かべた伊勢達の前で言った。

「……私には、わかりませんでした」

自分がやったこと、やってきたこと。

北上の言った言葉、その意味。

何かが崩れ落ちた気がした。

そしてその何かがわからない。

それでももう負けたくないという想いだけは強く残っていて。

「あなたに、あなたの艦娘に勝ちたかった。それは嘘じゃありません。強さの証明にはこの上ない相手ですから……。でも何処かで……。負けなかった、間違いだと言って欲しかったんでしようね」

止まることが出来なかつたから、止まり方を忘れてしまったから。

誰かに止められたかつたとそう零す。

大きく息を吸って、吐く大井。

胸の内を確かめるように、言い残した真実がないか探った後静かに提督の目を見る。

「あなたが素晴らしい提督だとわかっています、それだけに悲しませたくないとも思っていました……このザマ。申し訳ありませんでした」

「大井……」

深く、深く頭を下げる大井。

その姿に宿るのは確かな謝意。

大井は助けられたと思っっている。

何をしてももらったわけでもない、ただ演習で自分たちに勝利されて、こうして愚痴とも懺悔とも言える話を聞いてもらっただけ。

それでも、確かに救われたのだ。

崩れ落ちた破片が何か、気付くことが、出来たのだ。

「何も言わないで下さい。先程、辞令を頂きました。これから私達はあなたの艦娘、きつとこれから——」

その言葉は最後まで音にならなかつた。

「っ!? これはっ!?」

「空襲警報……!?!」

深海棲艦の襲来を告げる警報によってかき消されたから。

騒然とする天覧演習会場。

何事かと理解する暇なく、民間人から優先に避難誘導が行われている。

「まさか……っ!?!」

「ちっ……良いところで邪魔が入るってなあ! 工廠へ急ぐぞっ!!」

「駄目よ天龍ちゃん! 今横須賀鎮守府には……っ!」

演習場から急ぐ天龍達。

ペイント弾から実弾換装を行うために工廠へと向かいたいが、そこに今いるのは意識がまだ戻らず眠っている伊勢達がいる。

「くそっ! どうすりゃいい……!?! 空襲警報だ、あんまり時間はねえぞ……!」

南一号作戦防衛ライン。

そこに作られたセンサーが反応し、鎮守府の警報を鳴らすのは空襲を示すもの。

深海棲艦の進軍よりも遥かに早くここへとたどり着くだろう。

「どっちにしても提督はあそこにいるっ! 指示を仰ぐしかねえ!」

「っ! そうね! 急ぎましよう!」

海を後にして、工廠へと走る。

その途中。

「居たっ! 天龍君っ!!」

「長官っ!?! 避難誘導はっ!?!」

「大丈夫だ! 順調に進んでいる! 君たちは出撃することになるだろう! だが今横須賀鎮守府に弾薬の備蓄は無いつ!」

昨日の伊勢達の修理。

それは通常修復に使われるよりも遥かに多くの資材を消費した。仮にあったとしても、換装を行うための設備は今伊勢たちによって使用されている。

「ならっ!」

「ここからなら大本営が近いっ! 換装設備もある! そこで準備を

！」

——瞬間。

嫌な予感が天龍に走った。

「わかったっ！ 聞いたな!? 急ぐぞ!!」

「了解っ!!」

だが、それに従えるほど余裕はなくて。

「すぐに車を回す!! 門の前で待機していてくれ! 僕は彼にこのことを伝えて一緒に後を追うっ!!」

駆け出す長官、言葉通り、工廠へと向かう道を変え、門へと急ぐ天龍達。

「お待たせしましたっ!」

「大丈夫だっ! 急いでくれっ!」

墓場鎮守府所属の艦娘がそれぞれ車に乗り込み、慌ただしく大本営へと出発し。

「お待ちしておりましたっ! 準備は出来ています! こちらへっ!」

「おうっ!!」

大本営で換装、装備を整える。

素早く、誰もミスなく的確に。

まさに緊急出撃^{スクランブル}、そうだと言うのに一切の無駄がなく。

「よしっ! 後は波止場で待機するぞ!」

「お待ち下さいっ! 長官より連絡です!」

緊急事態とは言え、完璧。

後は提督だけ、提督さえいればいつものように出撃し、いつものように戦って、いつものように帰投する。

全員が、そう思っていた。

——彼が、伊勢達が、いない。

その言葉を、聞くまでは。

「あ、あ……」

広がる光景。

伊勢は海上に身を伏せ、熊野と鈴谷は両手をついて。

蒼龍、飛龍が力なく膝立ちに。

大井も大破してなお、何かを追いかけてようと足を引きずりながら前に進もうとしている。

そんな、光景。

「何が……あつた……？」

一目見て何かに敗北したとわかる。

だが、それでも理解したくない何かがあつた。

「提督さん、は？」

分かつている。

そう呟いた夕立も分かつている。

大破しているのは艦娘だけではない。

見慣れた、いつだつて戦場で見るには不釣り合いなお世辞にも立派と言えない舟。

それが大破し、沈みつつあることで。

「てい、とくー？」

声を張っているつもりだった。

呼びかければ必ず、いつものように柔らかい笑顔で返事をしてくれるその声。

だから呼べば返事があるはず。

でも、何も返ってこなくて。

「うそ、だよね……？」

だから分かつている。

提督に何かがあつたなんてことは分かつている。

「大井っ!!」

前を征こうとしている大井の身体が、倒れる。

それでようやく天龍は再び走ることができた。

「てん、りゅう……さん？」

「何が……何があつた……？」 どうして大破なんてしているんだ……

？ 提督は、提督は何処にいる？」

震える声を自覚できないまま天龍は大井に問う。

大井の身体を支える腕も、何かを認めたくないように震えている。
だから。

「申し訳、ありません……」

「なんだよ……っ！　なんで謝ってんだよ！　大井っ!!」

悲痛な表情を見ていられなくて。

そんな天龍にここで起きたことを伝えるのが、大破した身に走る痛みより辛くて。

「提督が……深海棲艦に、拉致、されました」

「っ!?!」

それでも。

この事態を防げなかった者の責任を果たした。

最後之閑話

夕立

「甘いっぽーい！」

「っ!？」

んふふっ！ 夕立の勝ちっぽい！

あ、でも大丈夫かな？ 結構強く打っちゃったっぽい……。

「大丈夫っぽい？」

「ええ、大丈夫ですよ。ですが、流石ですね夕立さん。私も見習わないといけません」

褒められたっぽい？ わあい！ 嬉しいっぽい！

とと、喜んでばかりもいられないよね。それじゃあ手を……っぽいとね！

「とと、ではもう一本……」

「んーん！ ちよつと休憩するっぽい！ 続けてやればいいってわけじゃないと思うの」

やる気があるのはいい事っぽい！

だけど、大切なのはしつかり今の内容を振り返ることだと思うの。

一度一度の機会を大切に、しつかりと良かったところ、悪かったところを考えないとだめっぽい。

それに折角こっちに來てお泊りなんだから、根を詰めすぎても勿体無いっぽい。

「なるほど……」

そう言ってみればちよつと考えてからうなずいてくれた神通さん。わかつてくれたっぽい？

「やるね、川内さん」

「時雨こそ……ねっ!」

そんな声に振り向いてみれば、時雨と川内の打ち合い。

竹刀のぶつかる音が聞こえなかったからすっかり忘れちゃった。

二人共、すごい。

時雨がすごいのは分かってたけど、それに追いつく川内さんも中々なの。

夕立と神通さんはさっきので三本目だったけど、多分あの二人はただ一本目。

それだけずっと長い間打ち合っていたのに、一度も竹刀を相手に触れさせてないっばい。

「姉さんの動きを夕立さんはどう見ますか？」
「はい？」

二人の姿を眺めながら聞かれたけど……んー。
「二人共、似てるように似てないっばい」

そんな風に思う。

挙動全てで相手を掌握しようとする時雨に対して、挙動で相手を惑わそうとする川内さん。

上手く言えないけどやっぱり違うっばい。

時雨の予想先、そこに虚を作る川内さん。

今もそう、時雨は竹刀を振らせようとあえて隙を見せた、そしてそこに川内さんはフェイントを入れる。

だけどそのフェイントは見切られて……。

「うー……ややこしいっばい！」

「ふふふ、そうですね」

あ！笑わないで欲しいっばい！

だって仕方ないっばい！あの二人がやってることわかるけど、わからないんだもの。

……でも。

「そろそろ、いいかな？」

「くうっ！」

時雨は少し手加減してる。

それはきつと川内さんもわかってるっばい。

虚から繰り出す攻撃を見切られちゃうっていうのは、実力が上じやないと出来ないから。

こうやって傍から見て初めて分かるってこういうことっばい。

時雨もとっても強いんだって。

「……決まるっぽい」

「え?」

川内さんの動きが、虚を作りきれなくなった。

多分、振りかぶったあと狙ったのは胴打ち。私でもわかるくらいの狙い。

だから。

「ふっ!」

「いつっ!」

振りかぶった竹刀が胴打ちの軌道へ変わる瞬間、時雨の小手打ちが綺麗に決まった。

「はあ、はあ……やっぱ駄目かー。うん、ありがとうございます」

「ううん、十分すごかったと思うよ。ありがとうございました」

そんなことを言い合ってる二人の姿からも実力差がわかるっぽい。

肩で息をする川内さんに、平然と笑顔を浮かべて一礼する時雨。

「やっぱりまだまだおつきな差があるんだなって思っちゃう。」

「……良い機会だったと確信していますが、これほどの差があるのですね」

「ぽい?」

なんとなく驚いている……のかしら?

そう言えばあっちでも毎日川内さんと鍛錬してたって言ってたし

……自信あったっぽい?

……えへへ、じゃあやっぱり夕立達、とっても強いっぽい!

っつて!!

「てーとくさーん!!」

「おーやってるなって……おう、お疲れさん夕立」

褒めて褒めて! 夕立、今日も頑張ったっぽい!!

あふ……んー! やっぱり頭撫で撫で気持ちいいっぽい!

「夕立……」

「ぽいっ!」

し、時雨っ!?

「ごめんなさいっばい！ す、すぐに代わるっばい！」

「はいはい、時雨もお疲れさん」

「んっ……もう、こうすれば良いって思ってたないかい？」

いや、それで良いっばい。

時雨、尻尾があつたらブンブン振ってるっばい……夕立には見えるっばい……。

ほら、川内さんも神通さんも苦笑いしてるの……。

「しっかし神通も川内も……良いのか？ パーティーの後だぞ？」

ゆっくりしてくれたら良いのに」

「あはは、やっぱり毎日やってこそだからねー」

「はい。それに、今の自分を知る、そして夕立さん達との違いを知りたい機会でしたから」

うんうん、その通りっばい！

でも、提督さんの言ってることも正しいっばい……んー、どっちのほうが良いのかしら？

うーん？

「まあもうすぐ夕食だ……時雨？ 今日作ってくれるんだろ？ 楽しんでるぞ」

「えっ、もうそんな時間なの!? わわっ……! ごめん夕立！ 片付け任せていいかな!？」

「了解っばい！ ご飯楽しみにしてるっばい！」

お任せっばい！ 時雨も折角龍田にじゃんけんで勝ったんだから夕飯頑張つて美味しいの作るっばい！

……でも、どうして龍田さんも時雨も帰ったら自分が作るって言ったのかしら？ ようやく帰つてこれたんだしって、鳳翔さんも労いますって気合い入れてたっばい。

……夕立も、お料理するようになったらわかるっばい？

練習してみようかしら？

「川内も神通も、折角の機会だ。俺と夕立で片付けておくからさ、皆と親睦深めてこい」

「えっ、いや、良いよ。私達もやるよ？ 自分たちで使つたんだし」

「良いから良いから、鍛錬も大事だけど皆と仲良くなるのだから大事なんだから」

夕立ももつと仲良くなりたippほい！

「あ、大丈夫よ神通さん！ 気にしないで欲しいippほい。」

ちゃんと提督さんと二人で――

二人、で？

「えと、ならお言葉に甘えて……よろしいのでしょうか？」

「おう、むしろ甘えて、ガンガン甘えて。ほら、行った行った！ ちゃんとここは夕立と二人で綺麗にしておくから……なっ？ 夕立！」

「ぽいっ！」

び、びっくりしたppほい！ 急に頭撫でないで欲しいppほい！

……あれ？

頭を撫でられるのは、嬉しいこと、よね？

夕立、どうしちゃったの？

「お疲れさん、夕立」

「は、はい！ て、提督さんも、お疲れ様でした」

う、うう……どうしたらいいppほい？

夕立、上手くおしゃべり出来ないppほい……。

お掃除しながら提督さんはずっと楽しそうに笑ってお話してくれたのに……夕立、なんだか変なことしかお返事出来てなかったppほい。

提督さんとお話するの、大好きなのに。

「だい、すき……」

「ん？ どうした夕立？」

うん、そう。

夕立は、提督さんのことが大好き。

夕立だけじゃない。

時雨も、龍田さんも天龍さんも、皆。

提督さんのことが大好きで、提督さんのためならなんでも出来て。そんなのずっとわかって、当たり前のこと。

なのに。

「胸、ドキドキするっばい……」

「夕立……?」

どうしてかしら?

もしかしなくても、提督さんと二人つきりだからっばい?

でもでも、夕立そんなの何回も……。

「無かったばい……」

思い返してみたら、絶対誰か一緒に居たっばい。

時雨が、龍田さんが……天龍さんが。その中に夕立も居て。

それが、とつても楽しくて、嬉しくて。

そっか、二人つきりって初めてっばい。

「夕立」

「は、はい!」

な、何かしら!? ってごめんなさい! ずっと考え込んでたっばい

!?

「ちよつと、縁側座るか。休憩しようぜ」

「う、うん……そうする、っばい……」

あう……いつもとおんなじ笑顔のはずなのに。

どうしてこんなに顔が熱いのかしら。

前を歩く提督さんの背中。

いつもなら、これ幸いって飛びつきに行くはずなのに、そんな気になれない。

夕立、今とつてもおかしくなってるっばい。

だから、こうしてちよつと距離を空けてお隣に失礼しちゃうっばい。

「ふう……夏真っ盛りとはいえ、この時間はやっぱマシになるな」

「……っばい」

そういえば、もう八月っばい。

夕立と時雨がここに来たのが春だから、もう半年以上経ってる。

……そっか、もうそんなに経つんだ。

「この時期は蚊が鬱陶しいな。夕立は……つか、艦娘って蚊に噛まれ

たりするのか？」

「う、ううん。そういうの、ないっぼい。耳元に来ると、いやだけど」
蚊に噛まれると痒くなるっぼい？」

夕立、経験がないからわからないけど……。

「そっか、そりゃあ羨ましいな」

「そう、かしら？」

そんなの経験したいとは思わないけど。

でも、羨ましいのは夕立の方っぼい。

だってそれは、人間さんにしか味わえないことだから。

艦娘の夕立には、きつと、わからない感覚。

「なあ夕立」

「ぼい？」

「ありがとうな」

それは、何に対して？

「お前が、時雨が……ここに来てくれた初めての艦娘で、良かった」

「……」

それは、夕立の台詞。

白露を沈めちゃって、今度こそはって思ってたけどその機会が貰えなくて。

見放された夕立を、大事に、大切に……強くしてくれた、夕立の台詞。

「俺を、信じてくれて。一緒にここまで歩んでくれて、ありがとう」

「ていとく、さん」

それも、夕立の台詞。

ずっとずっと、夕立のことを信じてくれて、手を引いてくれて。

夕立が目指してる先で、おいでおいでしてきてくれた提督さんへの、夕立の台詞。

「皆を守ってくれて、皆の強さの先にいてくれて。ありがとう」

「それは、それは……」

夕立の台詞、夕立の台詞っぽい！

全部……今言ってくれたこと全部！ 夕立が、夕立が提督さんに言
いたい言葉！

「俺は、艦娘が大好きだ」

「……」

知ってる。提督さんが夕立達のこと大好きなのは知ってること。
でも、どうしてか少し寂しい。

「大好きな皆と一緒に過ごせるのも、皆の、夕立のおかげだ。ありがとう
うな」

「……っぽい」

ああ、なんでかしら。

こうして笑って頭を撫でてくれてるのに、ちっとも嬉しくない。
大好き。

その言葉だって、とっても嬉しいはずなのに。

……ああ、そっか。そうなんだ。

「提督さん」

「うん？」

嫌なんだ。

艦娘の夕立を好きなことが。

私。

そう、夕立じゃなくて、私に言って欲しいんだ。

夕立が提督さんのことを大好きだと言っていたのと同じ。

私も提督さんのことが大好きなんだ。

「私、提督さんのことが大好き」

「ああ、嬉しい。俺も、大好きだぞ」

違う、違うよ提督さん。

でも、きつと伝わらない。

だから。

「いつか、ね」

「うん」

今は良い。

きつと、私はまだ夕立だから。

「あなたよりも強くなる」
力になる。

提督さんが海で戦えない分、私はその力となって戦う。

それは夕立じゃない、私が決めたこと。

「だから、その時」

もう一度言おう。

あなたの力と私が認められた時に。

「いっぱい褒めてねっ！ 提督さんっ！」

そうしてくれたら、きつと。

私は何にでもなれるから。

天龍

オレ達の帰還、任務成功パーティが終わって、初めてじゃねえかな？ 全員揃って一夜明かすなんて。

いい一日だった。

疲れなんて忘れてしまうほどに楽しかった。

皆笑顔で、心の底から楽しいって笑って。

中々出来なかつた歓迎パーティ。

そんな今までを吹き飛ばしちまえるくらい盛大で。

心の底から提督の下に着任できて良かった、なんて思う。

実はちよつと泣いちゃった。

それに気づいた龍田に笑われちゃったよ。

まだまだこれからだよ、なんて。

オレも、そう思う。

これはオレ達が幸せを目指して頑張る道中で、先はまだまだ遠いなんてわかってる。

だけど、それでも。

パーティが終わって、なんか急に部屋へと訪ねてきた長門や陸奥と話したりして。

長門が提督を褒め称える度に、陸奥がオレ達の事を羨む度に。

良かったと……本当に良かったと思っただ。

これからも問題はたくさんあるだろう、MI作戦だってある。

それでも、もうこの鎮守府で悲しみにも怒りにも沈むことはない。

そんな風に確信できた。

提督がいる限り、きつと。

艦学の連中がまた向こうに行ったパーティの翌日。

出張任務の報告書を持って行ってみればお願いごとは何だと聞かれ、やっぱりオレは特にないって言っちゃった。

だってそうだろう？

ほんとに時雨が話題にするまでオレはそんなことを忘れていたんだ。

改めて言われても、既に叶っていることを叶えてくれなんて意味が
わかんねえ。

こうしてここまで……未だに自分でも信じられねえ位強くなって。
提督に、皆に必要とされて。

出来すぎた夢かなんかじやないのかつて、そんな風に思う。

ほんとのオレはあの鎮守府でとくに解体されていて、ずっとずつ
と夢の中に生きてるんじゃないやねえかつて。

幸せ。

そう、今が本当に幸せなんだ。

とりあえず遠征につてわけでもねえ、やれることがねえから遠征で
もねえ。

そこにオレが必要だから必要な場所に使われて。

天龍としても、オレとしても、一人の艦娘としてもこれ以上に幸せ
なことなんかないんじゃないやねえかとすら思う。

だから特にならない。

これ以上を望む、なんて強欲だとは思わないけど。

本当に思い浮かばないんだよ、提督。

そんな事を言ってみれば、やっぱりいつものちよつと困った笑顔が
浮かべられた。

オレが、皆が愛してやまない笑顔の一つを浮かべてくれた。

嬉しそうに、幸せそうに。

見せてもらったこつちがそれ以上に嬉しくなつちまうような笑顔。

そして頬を掻きながら言ったんだ。

——じゃあちよつとついてきてくれ。
つて。

まあ当然オレは二つ返事なわけだ。行き先なんか聞くまでもない。

……いや、聞く必要がないつて言うべきか？

その場から海に行つてちよつと一人で出撃してきてくれなんて言
われても行くし。

そのまま寢室に連れて行かれて服をひん剥かれようが笑つてこの
身を委ねられる。

オレは提督の意思を叶える者。

志を貫く一つの刃。

拒否はこと提督に関してしない、したいとも思わない。

盲信極まりなんて馬鹿にされようが構わない。

オレの事をいくら罵ろうが、詰ろうが痛くも痒くもない。

ただただ提督の意思さえ折られなければそれでいい。

まあそんな事を考えながらついていってたわけじゃねえけど気づけばオレは車の中、提督の隣に座ってる。

「なあ提督、それ何だ？」

「手土産だよ」

手土産……っつーと誰かに会いに行くのか？

いや、自分ながら変なクセになつたとも思うが、こうする理由を聞かないオレ。

もちろん言われなくても理解できるなんてプライドもあるんだけど、聞かなくてもわかりたいなんて願望があったりで。

提督も知ってか知らずか、作戦指示以外のこういう時に目的を話さないでオレの反応を楽しんでいるみたいだ。

……いや、全然構わないんだけどな？

なんだか見透かされてるみたいで恥ずかしいなんて思ってたねえぞ？

「まあ望みのない天龍ちゃんに、俺のお願いを聞いてもらおうと思ってるな？」

「……つたく、ぶっ飛ばすぞ？」

あーほら、やっぱりオレで遊んでるんじゃねえかつたく。

はいはい、笑ってないでいい加減教えてくれよ。

「悪い悪い。大佐覚えてるだろ？ 退役して暇なのか色々うちに送ってきてくれるからさ、いい機会だし顔出しにいいこうと思ってるな」

「そうなのか。いや、そりゃいいんだけどよ、執務は大丈夫なのか？」

「ああ、今日はちようどよく時間が空いてるんだ」

……下手くそな嘘はやめろつての。

さては提督まあ無理したな？ オレ達のお願いを聞くための時

間作りやがったな？

はあ、怒るに怒れねえよまったく……知らねえからな？

「爺さんは天龍のことがえらくお気に入りみたいでな、ちょうど良かったんだって……何ニヤニヤしてるんだ？」

「べ、別に!?! なんでもねえよー!」

あーまったく、オレってやつは……。

でも仕方ねえじゃん。

嬉しくてたまんねえよ……。

「ようこそいらっしやいました。噂の提督さんと……噂の天龍さんです
ね？ 大したおもてなしは出来ませんが、どうぞ入って下さいな」

「お、お邪魔します」

「……ん」

あれ？ どうしたんだ提督？ 奥さんのことじつと見て……ま、まさかお婆さんが提督の好み、とかじゃねえよな？

「？ どうしましたか？」

「あ、いえ、すいません……お邪魔します」

うーん？ 驚いてたみたいだけど……まあいいか。

慌てて靴を脱ぐ提督に倣ってオレも。

案内されたのは和室。

外から見ても立派な純和風の屋敷だったから予想してたけど……

広いな。

微かに畳の匂いがして、艦娘と言えど日本人？ って言うべきか、
落ち着く。

「がははっ！ よく来たな小僧っ！ そして天龍っ！ まあ座れ座れ
！」

「相変わらず元気だな、爺さん」

「し、失礼します」

話にはちよつと聞いてたけど、豪快な人だな……作戦中の姿からは
想像もつかねえや。

バシバシとあぐらをかいたまま自分の膝を叩いてオレ達に座るよ
うに言ってくる大佐……いや、もう大佐じゃねえか。

なんて呼んだらいいんだろうな？

「まあとりあえず、いつも色々送ってくれてありがとうございます。
これ、つまらないものですが」

「なんじや、面白いモンもってこい」

「あらあら、あなただったら……ありがとう、頂戴いたしますね」

包みを受け取った奥さんはそのままお茶も用意しますねと席を外
して……あ、やべつ、オレも手伝うべきか？

「ああ、いいぞいいぞ座つとれ天龍。小僧と二人きりにされても面白
くない、わしはむしろお前と話したかった」

「お、オレと!? あ、いえ、わ、わたしですか!?!」

「けつ、調子の良い爺さんだ」

やっべ、な、何話したら良いんだ!?

こんなことになるならもうちつとマナーとか龍田に聞いときや良
かった!?

「構わん、普段どおりに話せ……いや、わしの方こそ畏まるべきじや
な。申し訳ありません、艦娘の天龍さんへの無礼……」

「い、いえいえ!? 大丈夫ですから!?! あ、う、あく……提督う……」

「おいジジイ、気持ちわりいからやめろや」

「……貴様にはもう少し年上への口の利き方を躰けなければならんよ
うだな?」

ああっ!?! や、やめてくれよ!?!

オレのために喧嘩しないでくれ!?!

「あらあら……賑やかですこと」

「む……」

こ、これが救いの神つてやつか。

奥さんがお盆にお茶載つけて持ってきてくれれば、大佐は大人しく
……。

あれ? もしかしてこの人より奥さんのほうが強い?

「どござ」

「あ、ありがとうございます」

カランとお茶に浮かぶ氷が音を立てる。

車の中は涼しかったけど、やっぱり外は暑くて……こんな音色からさえ涼を取れるってもんだ。

……思考放棄じゃねえぞ？

「はい、提督さんも」

「あ、はい……」

「うん？ 何じやタエの方をじつと見おつてからに……こやつはわしのもんじや、やらんぞ？」

「ぼっ!? ちげえつての! ……ただ、よく似た人を知つてて、なんだか変な感じがするんだよ」

ああ、そうだったのか。

でもそう言う提督の顔は何処と無く暗くて、ちよつと心配になりそうなくらいで。

だからかな？

「ふんっ！ 貴様弛んでいるな？ 表へ出ろっ！ 鍛え直してやるっ！」

「いい!? い、いきなりかよ!? あ、ちよやめっ……ああああ……」

「て、提督!？」

「あらあら……」

行っちゃまった……引きずられて。慌ててなんとかしようと思ち上がるけど、連れて行く時に目線向けられたし……オ、オレはどうしたら……。

「ふふ、実はあの人ね。ずっと楽しみにしていたんですよ？ この間の借りを返してやるって、来られる連絡を聞いてからずっと」

「は、はあ」

ああなるほど。さっきの目線はそういうことか。安心しろじゃなく、邪魔するなっということか。

……いや、それ余計に止めたからわしが良かったんじやねえか？

「大丈夫ですよ、言つてましたからわしはもう提督さんに勝てんじやろうつて。それはもう嬉しそうに。ちよつとじゃれたいだけですよ」

「そ、そうですか」

「だったらいい、のか？」

「よくわかんねえけど……まあ、大丈夫だって言うなら。」

「くすくす……やっぱり艦娘と言えど女。好いた殿方のことは心配してしまふものなんですね」

「いつ!？」

「好いたって!？」

「えと、そりゃあれか！ いわゆる男女の……!」

「あれ？ 間違えてしまいましたか？」

「い、いえ……オレ、ああいえ私は、その」

「話しやすい喋り方で結構ですよ？」

「……はい。オレは提督のことが好きです」

「……ふう。」

「びっくりしちまったがなんて言うことはねえ。」

「今更っちゃ、今更な話だ。」

「少なくとも龍田が提督に感じてる気持ちと同種のをオレだって感じている。」

「龍田だけじゃねえ、多くの墓場鎮守府にいるやつはそう思ってるだろうよ。」

「ふふ、複雑な顔してますよ?」

「そ、そうですか?」

「複雑、なんだろうか。」

「あいつが慕われるのは良いことだ、色んな意味で。」

「その中にオレもいるってだけの話だ。それで良いはず。」

「……やっぱり、女なんですねえ」

「お、おうっ!? そ、それってどういう!？」

「提督さんのモノになりたい、そうお顔に書いています」

「……モノ、か。」

「間違いじゃねえ。」

「それは確かにオレが思っていること。」

「提督にとって最高の道具。」

意思貫くための刃に。

「それは、いつでも思ってますから」
必要とされた時、それを叶える。
それで良い。

龍田や時雨……まあ他の奴らの気持ちはわかるさ、オレだって少なからずそういう気持ちはあるから。

だけどオレは今で十分。

当たり前前にオレを必要としてくれる、それで十分なんだ。

「……女の嘘は、自分につくものではありませんよ?」

「え?」

嘘?

オレは嘘をついているのか?

いやいや、そんなわけねえ。

今が十分、十分すぎるって確かに思ってる。

「そんな、嘘なんかじゃ……」

「そうですね、あるいは女の幸せに気づいていないか……ならこうしましろう?」

「は、はい?」

そういうや否や、オレの耳元に口を寄せて――。

「あーくっそ、爺さん元気すぎだろう」

「あはは、お疲れさん提督」

帰りの車。

思ってた以上に提督はボロボロの姿で戻ってきた。

それと同じかそれ以上に大佐はボロボロになっていたけど、二人共やけに満足そうなのが印象的で。

こうして毒づいている提督だけど、笑ってる。

それが、なんだか妙に嬉しい。

「んあ? なんだよ天龍、笑っちゃって」

「な、なんでもねえよ」

すまねえな、提督。

勘弁してくれよ？ これでもわりと緊張で潰れちまいそうなんだ。

——たまには女の方から積極的に行きましよう？

さつきから頭の中でグルグル回る奥さんの言葉。

要するに、女を感じてみるってことらしいけど……うう。

「……どうした？ 熱でもあるのか？」

「んにゃ!？」

あー!? 駄目だって、やめろって!

そんな男の匂い振りまきながら近寄るな!?

い、今のオレはちよつとダメだから！ 提督もよく言うだろ!? あ

れだよ！ あかんこれだって!

「ああ、そつかすまん。汗臭いな俺」

「い、いや。構わねえけどさ……」

ちよつと距離があく。

その距離にちよつと寂しさを感じてしまったり……あー駄目だオ

レ、ほんとうかしてるや。

「なあ、提督」

「うん？」

そう、だな。

今のオレはおかしい。

提督と二人きりで、今はプライベートと言える時間で。

「て、天龍？」

「フッフ、駄目か？」

たまには、積極的に。

たまには、兵器天龍としてじゃなく。

「駄目じゃねえけど、嬉しいけど……俺、臭くねえか？」

「大丈夫だよ」

提督との距離を詰めて、肩に頭で寄りかかる。

……ああ、悪くねえ。

こういうのも、悪くねえ。

こうして提督の体温と匂いを感じられて、胸が温かく、お腹の奥がきゅつとなった。

多分、オレって女は、すごく、こんなにも提督を求めてる。だけど。

「オレはさ、最高の道具になりてえ」

「……天龍」

ああ、そんな変な顔するなつて。

提督が嫌がる意味じゃねえから。

「提督の想いを貫ける、道具。意思そのものになりてえ」

「……」

女以上に、大きいその気持ち。

オレはやっぱり、どこまでいってもバカなんだろう。

気づけた幸せの形じゃ、きつと満足できないんだから。

「だから提督。もし……もしもこの先、道具が要らない世界になったら……」

——その時はオレを貰ってくれるか？

「バツカ」

「バカつて……うおっ?」

だ、抱き寄せられた!?

う、うおお……こ、これはダメなやつだぜ!?

「……ありがとな」

「……おう」

頭の上から、すごく近く聞こえる提督の声。

ああ、そうだな。

もうほんとに龍田をからかえねえわ。

きつと、今。

オレは目指すべき幸せの形が見えたんだから。

龍田

「え、えつと……提督ー？　へ、変じゃない、かなー？」
「……」

や、やっぱり変だった!?　て、天龍ちゃんに聞いた私が間違ってた!?

で、でも那珂もバツチリだって言ってくれたしー……も、もしかして提督の好みじゃなかった!?

「きつ！　着替えてくるねー!?!」

「はっ!?　ま、待て待て龍田！　違う違う！　すっげえ似合ってる！

可愛い！　美人！　言葉が出なかったただけだって！」

可愛いっ!?　美人っ!?

「は、ほうあうあ……」

「いや、ほんとに。すごく似合ってるよ龍田」

う、う……嬉しいけど、あーんそんなにまじまじ見ないでえ……。

「こう言っちゃ何だけど、龍田はワンピースがよく似合うな。清楚な雰囲気マシマシで……思わずどつかのお嬢様かなんかだと思ったよ」

「い、い、言い過ぎよう」

いつもの制服の方がやっぱり良かったわあ……もうドキドキしすぎてどうにかなっちゃいそう。

で、でも折角のデートだし……。

「ひゃん!?!」

「うおっ!?!　ど、どうした龍田!?!」

でででで、デート……デートなんだあ……。

おっかしいなあ、何でこんなことになっちゃったんだろう？

私は確か提督のお願いなんでも聞くに對して、ゆつくり休んでって言ったはずなのにー……。

じゃあ一緒に外へ出かけようって、どうしてそうなるのよー。

ううん、多分言ってくれた通り。私と一緒に出かけるのが休憩になるってことなんだってわかってる。

う、嬉しい、けど……うう。

それに。

「提督だって、その、かつこいいわー」

「お、そうか？　ありがとうな！」

ああ！　駄目！　反撃にならないわっ！

むしろその嬉しそうな笑顔やめて！　大破しちゃうから！

でもでも、やっぱり格好いいのよ。

シンプルなシャツとジーンズだって言うのにね、いつも軍服姿しか

見ていないからかな？　そんな風に感じちゃう。

……こんな人と、今から外へ行くんだー。

「よっし、それじゃ行こうぜ！」

「……ねえ、提督ー？　ほんとに、良いのかなー？」

私は、艦娘で。あなたは人間。

確かに揃って歩くことはあると思うわ、軍という囲いの中、鎮守府

という中でなら。

だけど、街と一緒に歩くなんて聞いたこともない。

「知ってるわ、私達艦娘があんまり国民の皆からよく思われてないのも」

私は、良い。

石を投げられようが、嫌な目を向けられようがなんとも思わない。

提督が私と一緒にその、遊びに出かけるっていうのが休息になるっ

ていうのなら、いくらでもお付き合いますわ。

けど、あなたがそれで嫌な思いをするのは嫌なのよ？

……ああ、そうか。

だったらそんな悪意から私が守れば良いのね、単純な話。

ふふ、そうね。

あなたを守ることが出来るなんて誉れ以外になんでもないもの。

「龍田」

「え？　あ、うん。なにかなー？」

危ない危ない。

やっぱりどうにも提督以外のことは……ちよつと軽く考えちゃうなー。

でも、大丈夫よ提督。

あなたの幸せは、私が――

「難しく考えるな、俺が艦娘とデートしてみたいってだけだ。絶対楽しくするから、気楽に楽しんでくれ」

「はうっ!?!」

ドック……ドックは何処っ!? 大変、私が大破しました! ごめんなさい!

だから提督はどうしてこう……もうっ!

「んじゃ、改めて」

……うん。

そうよね、そうなんだよね。

「えっと……今日は、よろしくお願い致します」

「なんだそりゃ」

うふふ、私にもわからないわー。

だけど、そんな風に思ったんだから仕方ないよねー?

差し伸ばしてくれた手を、そっと握ってみれば。

ああ、提督も緊張してたのかな?

なんてわかるくらいにはちよつと汗ばんでて、震えていて。

今日は目一杯楽しもう、なんて思った。

手をつないで街を歩く。

い。 やっぱり、なんて言えばそうだけどあんまり良い視線は向けられない。

怒っているのかな?

ろくに海も守れない私達が呑気に遊んでいるのを。

それでもさっきまで乗っていた車の中で提督は言ってた。

漁師の人たちがそうだったように、皆知らないだけなんだって。だから、こうして一緒に歩くんだって。

そういうもの、なんだろうね。

知らないから、怖い。

知らないから、遠ざけようとする。

私もよく分かるわ。

幸せを知らなかったから、怖かった。

幸せへの道のりを知らなかったから、無いものと探さなかった。

きつと今は私達に向けられている視線も、変わる。

私が変わったように。

「龍田」

「なあに？」

声に振り向けば笑っている提督。

私の幸せを創り出す人は、本当に楽しそう。

ただこうやって街を歩いて、展示されてる服を見て、あれが似合う、これが良いなんて言ってるだけなのに。

幸せで涙が出そうになる。

この人が、好き。

私だけじゃなくて、皆を幸せにしてくれるこの人が、大好き。

ずっとずっと気づいてたしわかってたこの気持ち。

抑えよう、蓋をしようなんて思ったことはない。

私と同じように皆提督へ好意を伝えていて、伝えられた提督がほんとに嬉しそうに、幸せそうに喜んでくれて。

だから我慢しようなんて思わなかった。

伝え方の拙い私だけど、精一杯、出来る限り同じように提督を喜ばせることが出来たらって思ってる。

きつとこの人は、艦娘を愛している。

天龍ちゃんを、夕立ちちゃんを、時雨ちゃんを……龍田を。

艦娘というだけで愛している。

だから、救われたんだろうね私達は。

もしも、私っていう個を見られていたならもう少し違った今があったと思う。

それは幸せには違いないんだろうけど、多分何かを失っていた。

誰かを守るために誰かを犠牲にしていたと思うわ。

提督が、艦娘皆を愛していたから、皆、今を生きている。

理屈をこねたわけじゃない、それでも何故かそう思えちゃう。

だから、私は艦娘でいい。
皆が幸せに過ごしていること。

それがあなたにとっての幸せなら。

私はその幸せを守る艦娘艦になるわ。

「つと、龍田。ちよつと待ってて貰っていいか？」

「うん？ いいよー、じゃああそこで待ってるね」

お手洗いかな？ 近くのお店に入っていく提督。

ベンチに腰掛けて、流れる人を眺めてみる。

……この人達を守っている、なんて実感はないなー。

こんなこと言ったらダメなんだろうけど、提督を守ることの結果的に守られているこの人達。

正直に言っちゃえば、そんな副産物、おこぼれのように命をつないでいる存在。

ううん、この人達が頑張ってるおかげで私達は戦えている。

だから、感謝しなくちゃいけない。

「なんて……私は、ダメな艦娘ねー」

私にとって特別な人間は提督だけで。仲間の皆と提督の幸せを守ることが出来たらそれでいいの。

仕方ない、っていうのは言い訳よね。

でもそれでも仕方がないので、私は不器用だから、大切なモノを守るだけで精一杯だから。

「他の皆は、どんな風に思ってるんだろうねー……つて、あら？」

ふとか細い泣き声が聞こえた。

その声を追ってみれば、そこには小さな女の子。

お母さんはどうしたのかな？

「……どうしたのー？」

「えーん！ うえーんっ！」

な、何で声をかけちゃったのかしら……？

私に出来ることなんて、何も無いはずなのに……。
だけ。

「えつと……お母さんはどうしたのかな？」

「えぐつ、えう……おかーさん？ えぐつ……」

「そう、お母さん。一緒じゃないのー？」

あ、間違っちゃった!? 余計に泣いちゃった……うう、どうしたらいいのー？

「お待たせ龍田って……どうした？ 迷子か？」

「あ、提督……」

良かった、提督が帰ってきてくれた。

これで大丈夫ね。

そう思ってたなら、提督は女の子の視線に合わせるようにしやがみこんで。

「お嬢ちゃん？ ほれ、これを見てくれ」

「えぐつ、えぐつ、どれー？」

何で持ってたんだらう？ リボン紐？ それの両端を括って……。

「わあ……っ！」

「ちようちよの出来上がりー」

あやとりの代わり、かな？

「続きまして……ほい、ほいっ！ 箒の完成っ！」

「すごい！ ねえ！ もっともっどー！」

はしやぐ女の子、もうさつきまで泣いてたのが嘘みたい。

すごいなー提督。何でそんなことまで出来るのかなー？ やけに

小さい子になれてるみたいだけど……。

「よっし、お嬢ちゃん。もっとやってあげたいのは山々なんだけど、お客さんがお嬢ちゃん一人はにーちゃん寂しい。誰か知っている人は近くに居ないか？」

「おかーさ……あ、あう……あのね、あのね……えぐつ」

ああ!? ま、また泣いちゃう!? て、提督？ 大丈夫!?

「そっか、じゃあにーちゃんと一緒にお客さん探そっか？ お母さんがいいかな？」

「……うん」

「じゃ、お母さん一緒に探そうな」

わたわたしてる私とは違って、笑って女の子を抱っこして。

まだちよつとぐずってる女の子だけど、ちよつと安心したみたいで。

ぎゅつと提督にしがみついた。

「無事に見つかって、良かったねー」

「ああ、そうだな」

あれからちよつと。

ぐずっていた女の子の機嫌がなおれば提督はすぐに女の子を肩車して。

そのまま近くから離れないでぐるぐると歩いていけば、母親が息を切らせて走ってきた。

買い物中にはぐれたとかなんとか。

大事にならなくて良かった、なんて安心しちゃった。

提督も内心すごく心配してたのかな？ 母親が走って来た姿を見て、すっごく安心したような顔をした。

——おねえちゃんも、ありがとう！

——艦娘の方、ですよ？ 無知で申し訳ありませんが、今日のことといい、いつもありがとうございます。

バイバイする時に言ってくれた言葉。

柄じゃないと思うんだけど、それですっごく嬉しくなっちゃった。

私って単純なのかなー……あんな子だったら、人だったら守りたい、なんて。

「ああ、そっか……」

「ん？」

まだまだ知らないことがあるのは、私も、なのね。

悪意だなんだばかりを知って、それ以外を知らなかったから。

きっと、知ることが出来たら、私は……。

「それにしても、悪かったな？ 折角のデートなのに」

「……ううん、私、楽しかったな？ 提督の新しい顔も見れたしねー」

守りたいと思うことが出来るのかな？

提督のように、なんて言えないけど、提督が誇ってくれる程度にはそんな想いを持てるのかな？

帰ってきて、波止場から眺めれば海は紅。

あの赤い中で戦ったことはいっぱいあるけど、こうして見るのは初めてで。

なんだか不思議。

こうして提督と座って初めてを眺めるのも。

初めて男の人とデートしたことも。

あれだけ興味を持てなかった提督以外の人間に、興味を持ち始めたことも。

不思議。

本当に、提督の下に来ることが出来てから私はずっと不思議の中にいる。

それはとつても心地よくて、離れがたくて。

「提督、ありがとうねー」

「どしたよ急に」

ふふ、わかってるんだよー？

今日この時間を作るために無理したでしょ？ 天龍ちゃん、言っただよー？

ほんとなら、ちよつと怒りたいところだけど嬉しくて言えないって。本当だね。

「ううん、デートしてくれて。今日はほんとにありがとうございました」

勿体無いってすつごく思うけど。

これ以上こうしていたら、立ち上がれなくなっちゃいそうだから。

「なら良かった。けど……龍田？」

「なあに？」

——まだデートは終わってないぞ？

そう言っただけ出してくれたのは。

「これは……？」

「括ってたりボンが無いのはノーコメントな？ ……まあ、なんだ。

日頃の感謝を込めて」

小さな箱。

開けていい？ って聞けば笑って頷いてくれて。

「わぁ……………」

「センスに関してもノーコメントで」

キレイ……。

これ、ロケット、よね。

彫ってあるのは……薔薇、かなあ？

「気に入ってくれたか？」

「う、うんっ！ じゃ、じゃなくて、どうしたの？ 急に？」

そう言うと、提督は曖昧に笑って。

「デートでプレゼントを贈るのは、普通のことだろ？」

なんて言った。

多分、今提督は一步引いた。

自分で詰めてきてくれた距離なのに、自分で一步引いた。

こんなにも私を幸せにしてくれてるのに、自分で幸せから一步引いた。

それは、何でだろう？

「提督……私、幸せだよ？」

「……ああ、俺もだよ」

嘘じゃない。

でも、多分提督はそれでいいと、そこまでが自分の幸せだとラインを引いている。

だから私達は救われた。

それは間違いじゃない、だけど。

「今日は……ううん、これから、この先も、ありがとうね」

私は艦娘でいい。

そう思ったばかりの私だけど。

この人の幸せになろう。

艦娘としてではない私は。

幸せに何処か怯えているあなたを包む^盾幸になるわ。

時雨

「ねえ、提督?」

「お、おうっ!?」

ふふ、そんなにびつくりしないですよ? 何もとって食べようなんて思っていないからさ。

でも、そうだね。

「僕、そんなに魅力ないかな?」

「ななな、何の魅力ですか時雨さん!」

こうして一緒のベッドに二人で寝転がってるのに、手を出してくれないのは何だかちよつと寂しい気もする。

いつだって食べられる準備はオツケーなんだけどな? 提督。

「言わせるのかい?」

「……これ以上意地悪しないでくれよ時雨。ドキドキして仕方ない」

うん、ドキドキしてくれるなら……ってほんとかい?

「あ、ほんとだ」

「言ったそばからですかっ!」

提督の背中から、抱きしめるように胸へと手を伸ばしてみれば、寝間着越しからでも伝わってくる鼓動。

とても、まるで音が聞こえて来そうな位に、ばくばく、ばくばくと忙しそう。

ならしいかな?

少なくともプライド? は傷つかなくて済みそうだね。

「全く……どんなお願いかと思ったら一緒に寝たいなんてなあ」

「なんでも聞くなって言ったじゃないか。それとも嫌だった?」

一緒に寝るだけじゃなくても良かったんだよ?

一晩ぎゆつと抱きしめながらでも、なんだったら――

「……嫌じゃないです」

「ん」

えへへ。

うん、ありがとうね提督。

ありがたいの気持ちを腕に込めてみれば、提督の匂いが少し強くなる。

くすぐったそうに身じろぎする提督だけど、腕を振り払ったりはしない。

結局僕のお願いはこれだった。

提督と一緒に寝たい。

そ、そりやもちろん、もっと過激なお願ひも考えたさ。

たとえば……あう。

だけど提督は多分、結ばれば解けて離れてしまう。

そんな風に思うんだ。

何処か、致命的とでも言うのかな？ それとも確定的？ そんな一

歩は決して踏み出さない。

こんなにも深い絆で結ばれたと思ってるのに、何もかもを捧げたいと思っっているのに。

絶対に、そんな関係を築こうとしない。

夕立は言ってた。

私は提督の力になるって。

天龍は言ってた。

オレは提督の意思になるって。

龍田は言ってた。

私は提督の幸せになるって。

提督の大切な何かを目指してるけど、提督の女になるとは誰も言わなかった。

じゃあ僕が、なんでも思うけど。

何故だろうね、やっぱり僕も皆と同じように、女になりたいって思うよりも。

「提督、僕はね？ 提督の命になりたい」

「命？」

そっだよ提督。

僕は、提督の命になりたい。

「提督が生きる理由になりたい。僕のために生きて欲しい」

「時雨……」

わかってるよ。

提督は今、決して誰か一人を選ばない。

歪み。

提督は歪みを抱えている。

こんなにも、あんなにも艦娘を望んでいるのに。

ただの上司と部下、使うもの使われるもの以上の関係を築いているのに。

きつと提督もわかってる、気づいている。

望めば、僕達は提督にありとあらゆるモノを捧げられるって。

命も、身体も、心でさえも。

捧げたいと思っっていることを提督はわかってる。

だけど……いや、だからこそ、かな。

僕達墓場鎮守府の艦娘全員がこうして今生きているように、幸せなように。

そうであるために、一人を選ばない。

もしも、そうだね。

僕一人を好きになってくれたのなら、誰よりも愛してくれていたなら。

きつと夕立は沈んでたし、天龍も龍田も……どっちかは沈んでいただろうね。

だってそう。

僕を選ぶってことは誰か他の人を切り捨てるってことなんだろうと思うから。

天秤は常に同じ高さでなければいけない。

それが意図してなのか、それとも別に何か理由があるのかはわからない。

「領かなくていいよ提督」

うん、苦しめたいわけじゃないんだ提督。ごめんね。

提督がそういうことを理解しているって、わかった上で言うのは卑怯なんだろうね。

だからこれは僕のわがまま。ただの目標なんだ。

自惚れと言つてもいいかも知れないね、僕が生きていれば提督も生きてくれると信じたいなんて。

「提督は皆の戦う理由で、生きる理由。僕もそう。今の形を変えようなんて思わないし、変えてとも思わない、だから……」

だけど、だからこそ言っておかないと駄目だつて思つたんだ。

この人は、本当に簡単に、自分の命を軽く扱うから。

それが何故そうなったのかは……やっぱりわからない。

きつと提督が今まで生きてきた中で培つた何かがあるんだろうし、もしかしたらそれこそが提督の歪み、その何かの理由に起因するものなのかも知れない。

「だから……お願いだよ……」

「……泣くな、時雨」

……泣いてないよ、提督。

だから無理して抱きしめなくてもいいんだよ？

じゃないと、僕。

「ほんとに泣いちゃうじゃないか……」

「そっか」

そんなに優しい目で、優しく頭を撫でないで。

提督に、生きていて欲しいだけなのに。

あなたの唯一になりたいって気持ちが抑えられなくなるじゃないか。

僕こそが、その歪みを治したい、治してみせるつて……思つちやうじゃないか。

「ご、ごめんね？」

「いいんだよ」

は、恥ずかしいところ見せちゃったな……。

提督の胸に顔を埋めて、泣いて。

こんなつもりなかったんだけど、ほんとに。何でだろうね？

……ううん、これもわかつてる。

心配なんだ、怖いんだ。

この人が居なくなることに、失ってしまうことが。

ここに来るまで、たくさん誰かを見送ったはずなのに。

もう僕はそれを辛いとだけで済ませられる気がしないから。

「なあ、時雨？」

「……何かな？」

「約束、覚えてるか？」

もちろんさ。

誰も沈めない。ただ一人の轟沈も許さない。

それは僕が初めて人間と、提督と交わせた約束で、大事な、大事な約束だから。

「もしも、俺が沈むことで時雨が沈むなら……俺は、沈まないよ」

「……ほんと？」

それは今、僕が何よりも望んでいること。

こうして一緒に寝ることより、唯一になることより。

ただただ提督が生きてくれる。

それが何より一番の願いだから。

「ああ、約束する。皆の願いも、俺の願いだから」

「……約束、だよ？」

小指を差し出してみれば笑って絡めてくれる指。

ああ、僕は単純だな。

こんなにも簡単に、安心できる。

この人はきつと約束を破らない。

そしてその約束を守るためにきつとなんでも出来る人。

そう信じているから、安心できる。

そういう自分が、誇らしい。

「ああ約束だ。……これで時雨との約束は二つ目だな？」

「うん。どっちも、絶対破らないでね？」

提督を約束で縛りたいわけじゃない。

自由に、思う存分に自分のやりたいと思うこと、大事なことをして欲しい。

それはきつと僕達にとつても大事なことでやりたいことだから。だけど。

こんな嬉しい約束なら、いくらでもしたいな。

やっぱり、話は尽きないね。

ようやく落ち着いた鼓動。

緊張してたのは提督だけじゃないんだよ？ 僕だつてそうさ。

でも今は、ただただ温かい。

近くでお互いの鼓動を感じながら、他愛もない話に花を咲かせる。初めてここから出撃したときの話をすれば、胃が痛くなつたなんて言うけどそれは僕の台詞だし。

天龍達が来たときの話をすれば龍田と演習をする夕立の姿がかつこよかつたなんて言うから、張り合つて古鷹と演習したときの話を返してみた。

皆、ここに着任した艦娘は何かしらの問題を抱えていて。

今思えば六駆の皆も大淀も。金剛達も、艦学の皆も。

提督と会うために今まで生きてきたんじゃないかな？

なんて言えば大げさだなんて笑つて。

僕も少しロマンチストがすぎるかな、なんて苦笑いで返して。

でもね？

傷ついて、心を壊して。

救われたいと願いたいけど、先に光は見えなくて。

ずっとずっと雨に打ちひしがれていた僕達。

でも提督が傘になつてくれた。

雨が止むまで一緒にいようと言つてくれた。

傘から離れればまだ降る雨。

その寒さに震えちゃうけど、戻れば温かく迎えてくれて。

いつしか雨は止んでいた。

そんな陽だまりみたいなのこの場所を、皆で一生懸命守つて、大きくして。

いつか世界中に広げたいなんて思う。

「だから、ね？ 提督……」

「……すー」

……ふふ、寝ちやったか。

時計を見ればマルイチマルマル。随分と話し込んだんじやってたんだね。

「もう……そんなに安心した顔しないでよね」

やろうと思えば、このまま襲っちゃえるんだよ？

「思わない、けどね……」

こんなにあらいでいる姿を見せられたら、邪魔なんて出来ないよ。それにしても……。

「普段あんなにカツコイイのに……」

可愛い寝顔だなあ……。

好きな人の無防備な姿って、こんなにも……。

「はっ!？」

危ない危ない。

つい無意識に……。

というか、ね。

「……失敗した」

今更ながらに自分の失敗に気づいたよ……。

これ、あれだよな？

生殺しつてやつだよな？

うん、間違いない。

この気を抜いたらさすがにでも手を出しちゃえそうな距離、感じる提督の呼吸と匂い。

「んん……時雨……」

「ひゃうっ!？」

ああああああああ!?

み、耳元っ！ 耳元で僕の名前を呼ばないでっ!?

り、理性が！ 理性があ!?

ああ、もう、僕、ほく……。

「ゴールしても、いいよね……?？」

き、決めたっ！

小難しいことなんてどうでもいいよ！

好きな人が！ 隣りにいて！ 手を出さないなんてありえないよ

！

据え膳は食べて然るべきなんだよ！

「て、提督が悪いんだから、ね……僕、悪くないから……」

うんそうだ、その通り。

僕のお願だからこうなったんだとか、そんなこと知るもんか。

だから……。

「い、いただきま——ひゃん!!」

て、提督起きてるのっ!?

ほ、僕に覆いかぶさってどうするつもり!? ううん！ いいよ！

夜戦なら任せてよ!?

「ん……あんしん、しろ……だい、じょう、ぶ……」

「……提督」

……ただの寝返り、か。

その割にはとつてもラツキーって思うべきかな、さつきよりもずつとずつと近い。

鼻と鼻が触れ合う。

ほんの少し、ほんの少し顎を動かすだけで、唇が触れる。

触れ合わせることが、出来る。

ああ、なんだろう。

提督の唇から、目が離せない。

好き。

頭に浮かぶ言葉も、心にある気持ちも。

それで埋め尽くされる。

だから。

「ん……」

……。

大好き。

あなたのことが、誰よりも、何よりも大切。

ずっとずっと一緒にいたい。

「ごめんね提督……大好きだよ」

誰も選ばれなくても。

僕はきつとずっとあなたが一番。

だってそう、僕は。

「あなたの命だから」

大規模作戦編

大規模作戦発令のようです

爆煙がまだ僅かに立ち昇る海上。

提督が拉致された。

その言葉を残して大井は意識を手放し、天龍の腕の中に。大井の口から出た言葉を誰もが瞬時に理解できなかった。拉致とは？

何故提督が？

疑問が各艦娘の頭を駆け巡ると共に沈黙に支配される場。それでもやはり一番最初に我へと返ったのは天龍だった。

「——っ！ フラワーズっ！」

「はっ、はいっ!!」

「大井達を鎮守府へ！ 護衛に比叡、翔鶴、古鷹、加古、川内、朝潮！」

「りよ、了解っ！」

手早く指示を飛ばす天龍。

目は少し血走っている上に、一切の落ち着きを感じられない。

フラワーズは指示に従い、大井達を曳行。

その周囲を比叡達が囲み、周囲警戒しながら鎮守府へ向けて出発する。

「長門、陸奥、瑞鶴、鳥海、神通、霞は周囲の深海棲艦を蹴散らせっ!!」

「任せろっ!!」

周囲に見える深海棲艦。

ここに来るまでもに幾らか会敵しているが、まだまだ数が多い。

他の鎮守府からも保有戦力の出撃が指示されている。

そこに合流すべく長門達も改めて進軍。

「オレ達は提督を追うぞっ!! 遅れるなよ!?! 全速前進だっ!!」

「了解っ!!」

天龍の声に返事を示したのは龍田、夕立、時雨。

そして。

「お待ち下さいっ!!」

「なんだよっ!? 急がねえと!!」

鳳翔が発した静止の声。

隣では金剛が歯を食いしばり、腕を抱えている。

その様子を見て榛名と霧島、大淀は偵察機発艦による周囲の警戒を行いはじめた。

金剛や鳳翔と同じく、耐え難きを耐える表情を浮かべながら。

「提督の行方もわからないのに、何処へ向かうというのですか!」

「ああ!? んなもん知らねえよ! 進軍しながら偵察機で探しゃあいいじゃねえか!!」

冷静ではない天龍。

それは龍田や夕立、時雨も同じ。

龍田はこれ以上待てないと示すかのように肩を荒く上下させていて。

夕立も普段の様子からは思いつかないような凍った表情を浮かべ、遙か遠くの海をにらみつける。

時雨も……また、表情を凍らせ、邪魔をするなら許さないと目で訴えかけていた。

そしてそれを受けてなお、毅然と鳳翔は言う。

「落ち着いて下さい。現在の状況は混迷を極めています。まずは提督の行方を含めて状況を把握するべきでしょう」

「んだよっ! そんな悠長な事してられっか!! 急がねえと、提督がっ!!」

「無謀に進軍して帰ってこれなくなったらどうするのです!!」

鳳翔は、言う。

分かってくれと願うように。

そう、言うまでもなく現在の状況は混乱の極地にある。

慌ただしく出撃し、深海棲艦をまさに言葉通りなぎ払ってここまで一直線に来た。

それ故現在の戦況、被害状況などがはっきりしていない。

艦隊司令部にしてもまだ提督が拉致されたことすらまだ把握して

いないだろう。

急な深海棲艦による空襲、そして侵攻。

それに対応するだけで手一杯。

鳳翔とて、行きたい。

だがそれをしてしまえば再び鎮守府に帰ることが出来る保証はない。

よしんば提督の奪還に成功したとしても、誰かが犠牲になる可能性は極めて高い。

金剛もまた同じ。

腸は、煮えくり返っている。

提督を、大事な戦友を奪われて我慢するなんて苦痛でしかない、すぐにでも追いかけて。

そして二人は気づいている。

今ここは退くべき、状況の沈静を図った後全力で提督を捜索すべきだと。

混乱したまま無理をして、誰かが犠牲になることが一番提督を傷つけてしまうことだと。

「わかって下さい……っ！ 今は、こここの解決が先なんです……っ！

そのためにあなたの力が必要なんですっ！」

「はっ！ 随分情けないな!? 鳳翔さん、見損なったぜ!? あんたの

想いはその程——」

「天龍サンツ!!」

その先は決して口にしてはならない言葉だった。

だから金剛が無理やり遮った。艦装、砲塔の先を突きつけても。

「敵影、見当たりません。……天龍さん、落ち着いて下さい」

「あなたも、わかつているはずですよ。……墓場鎮守府艦娘筆頭は、本物でしょう?」

「……ぐっ」

わかっている。

天龍とて、理解している。

提督を拉致した敵戦力も不明、その詳細な敵データですらも。

今から全速で追いかけたとしても、追いつく保証は何処にもないし、少数で追いついたとて奪還できるほどの力が残っている可能性は低いだろうということも。

鳳翔が、金剛が。

榛名が、大淀が、霧島が正しいと、一旦戻るべきだとわかっている。龍田達も理解している。

だがそれでも我慢ならないのだ。

「ちくしょう……ちくしょう!!」

提督の、約束。

墓場鎮守府の、ルール。

「……一度戻るぞっ!!」

「天龍ちゃん……」

驚きの声をあげるのは龍田。時雨と夕立も信じられないと言った視線を天龍へと向ける。

そしてその顔を見て自身の気持ちを律した、律せざるを得なかったのは龍田。

涙は、流れていない。

龍田には天龍のその決断が泣き声のように感じられる。

あまりにも苦渋の決断、選択だということ。意に沿っていない、追いかけていとわかった。

「天龍には失望したよ」

「このまま黙って戻るなんて出来ないっぽい」

そして納得出来ないのは時雨と夕立。

驚きに染まった眼から光を消し去り、冷たく天龍に言い放つ。

「ああ、構わねえ……いくらでも失望してくれ。だけどよ——」

「僕達の帰る場所は提督がいる場所だよ？ だったら行かなきゃ」

「勝手に帰ればいいっぽい。夕立は……私は行くから」

俯き言葉に耐える天龍へと背を向け、あてもない行き先へと身を進めようとしたその先を。

「……だめだよー？ 今は、戻らなきゃ」

「……そこ、退いてよ」

「邪魔するなら……無理やりでも通るっぽい」

龍田が塞いだ。

その隣に金剛と鳳翔、大淀、榛名、霧島が並ぶ。

「お二人の気持ちは、わかります。私も同じですから」

「なら——！」

「その場で殺さずアタクシヨン……拉致デス。ならばしばらく、少しかも知れませんが命の保証はあるデシヨウ。今は一旦態勢を整え直すべきデス」

「そんなの知らないっぽい!!」

埒が明かないと苛立つように夕立は主砲を鳳翔へ向けた、その時。

「——あ」

「夕立っ!?!」

轟音。

背後からの砲撃。

慌てて振り向けばそこには主砲を構えた天龍。

「天龍っ!?! 何——」

「……ごめんね」

その振り向いた瞬間、同様に龍田が時雨を撃った。

夕立、時雨——大破。

至近距離からの砲撃が直撃。

狙い通り、というべきだろうか二人は気を失い海へと倒れかける所を。

「……榛名、霧島……二人を鎮守府へ」

「……了解です」

榛名と霧島が抱きとめ、鎮守府へと連れて行った。

「天龍ちゃん」

「……痛え……すっげえ痛えよ、龍田」

仕方がなかった、とは言えないし言いたくもない天龍。

今、天龍は提督の意思を守るために、提督が絶対行わないだろうことをした。

味方への砲撃。

誤射ではない、止められないとわかったからこそ力づくで止める必要があると判断し、自らの意思で狙って撃った。

判断は早かった、早くしなければならなかった。

もしかしたらちゃんと言伏せることが出来たのかも知れない、だがその言葉を時雨も夕立も待たなかっただろう。

故に、撃った。

「くそおおおおおお!!」

慟哭。

海が割れんばかりの嘆き。

ここまで脆くなるものか、提督がいまいということだけで。

混乱しているのは戦況だけではない、間違いなく彼女達も同じどころかそれ以上に混乱している。

冷静ではないと断言できた。

だからこそ、落ち着かなければならないという事実は正鵠を射ている。

天龍を止めた鳳翔とてそこまで考えていたわけではない、彼女とて混乱していた。

より提督を助けるために、悲しませないためにと考えただけの答えがそれだっただけ。

誰一人として、落ち着いていなかった。

「龍田！ 金剛！ 大淀！ 鳳翔！ オレ達は付近の深海棲艦を撃破するぞっ!!」

「了解っ!!」

その叫びを理解している。

天龍がやらなければきつとこの中の誰かが時雨と夕立を止めるために同じことをしただろう。

今の天龍と同じように、慟哭をあげながら。

「許さねえ……許さねえぞ……!! 全員……ぶっ殺してやるっ!!」

あがる水飛沫。

飛沫と共に殺意を舞わせ、至らなかつた自分に傷つきながら。

八つ当たりへと全速で駆けた。

天覧演習を観に来ていた一般人達の避難先。

戦闘はすぐに落ち着いた。

被害はゼロ、大破した艦娘は何人かいるも轟沈者なしという相手の
侵攻戦力から見れば最大の戦果。

敵深海棲艦自体、数こそそれなりに居たもののエリート、フラグ
シップ級は少なく、墓場鎮守府以外の戦力でも十分に対応出来た。

戦闘時間、二時間。

今までの作戦から考えれば改めて早い決着の上、最高の戦果。
そして。

「二人の提督……彼の犠牲によって、ここは守られました」

墓場鎮守府艦娘にとつてあまりにも悲しすぎる、耐え難き美談が一
般人の前によって語られていた。

空襲警報が鳴り響くと共に、真っ先に艦娘と共に出撃。

空襲へと対処し、そのまま艦娘の指揮を取り、行方不明となった。

そう語る長官の顔は沈痛。

だがこれはわかりやすく一般人への理解を促すもの。

それほど大きな戦いを僅かな犠牲によって凌いだと示すため。

英雄。

そう、提督は今、民衆を窮地から救った英雄としてその存在を確立
させられた。

「ちくしょう……」

天龍の口から小さく零れた言葉。

何が英雄か、何が僅かな犠牲か。

一番守りたい人を守れなかった自分たちのはずなのに、こうして守
られた存在がいる。

それが、どうしても納得できない。

天龍だけではない。

掃討作戦に出ている墓場鎮守府艦娘も、隣りにいる龍田達でさえ、
歯を食いしばり何かに耐えている。

語る長官も同じく。

後手に回されている手のひらからは血が滴り、誰にも見られず床を叩く。

なぜ、どうして。

悔しさを叩きつけるかのように、小さな血溜まりを作る。

民衆は、涙した。

一人の英雄、その犠牲に。

ありがとう、ありがとうと口にした。

同時に今が戦時中であるとはつきり自覚し、自分たちを守っている軍、艦娘に理解を示した。

図らずともこれ以上無いほどに、天覧演習の目的を達成した。

唐突なアクシデント、予期せぬそれ。

だとしても自分たちに犠牲はなく、戦いに生きる者がたつた一人いなくなっただけで済んだと。

残酷すぎる感動が国民の胸に宿った。

天龍達が耐えているものとは、それだろう。

何をするにしても絶対に犠牲にしたくないものを犠牲にした。

いや、犠牲と決まったわけではない。

そうしないため動きたいのにも関わらず動けない自分に耐えている。

時雨と夕立はドックへ。

大井達と他の損傷が酷かった艦娘を優先し、ドックは埋まっている。

今は空き次第すぐに入渠出来るように救護室で眠っているはずで、目を覚ましたという報告もない。

「ですが我々人類もやられているだけではありません」

提督への黙祷が終われば、長官に代わり大本営元帥が高らかに宣言した。

「反撃の狼煙を上げる時は今！我々はM I海域奪還への大規模作戦を発動します!!」

「んなっ——!?!」

悔しげに唇を歪める長官。驚きに目を丸くする墓場鎮守府艦娘。

——提督は？

そんな疑問が口から出る前に、朗々と一般人へと語られる作戦概要。

——我が国の武を示し、負けないことを誓います。この作戦成功の暁には皆さんの生活もきつと——。

その言葉に、民衆の瞳は輝く。

力強く宣言された作戦、それはたった今起こった窮地と同じく簡単に達成させると思わせるようで。

「それこそが先の海で散った提督への鎮魂になることでしょう！ 国民の皆様におかれましては後少しのご協力を願います！」

完璧。

完璧すぎるタイミング。

自分たちを守って消えた命のために発奮出来ないほど腐ってはいない。

上がる歓声はそう示している。

協力を、理解を取り付けるのも。

力を発揮せざるを得ない状況に追い込むのも。

あらゆる意味で完璧で、残酷なタイミングだった。

「頼んだよ！」

「提督さんの仇をつ！」

控えていた艦娘にすらかけられるそんな声。

目を見開いたまま、ただただその声へと機械的に返事をしてしまう

天龍達。

興奮の坩堝とっていい中で、ただひたすらに虚無感へと身を任せ続けていた。

無明と光明のようです

何度ここから出撃しただろうか。

出撃経験を豊富に持つ鳳翔からすれば、まだ一握りにすら至っていない数。

だと言うのにそれは今までの何よりも過酷で、大事と思える出撃だった。

今、何もかもを気にせずここから出撃できたのなら。

意味のないことだろう。

如何に鳳翔と言えど、軽空母が一人海に出たところで事態は何も変わらない。

それこそこの海に石を投げる行為、いや、波紋すら生むことすら無い無意味な行為だとわかっている。

「それでも……私は……」

何故あの時天龍達を止めてしまったのか。

正しいことだとわかっている、それでも自分が許せない。

僅かな、砂漠の砂から一粒の砂金を見つけ出すようなものだとしても、その可能性にかけることが出来なかった自分を。

可能性を信じて掴み取ることが墓場鎮守府艦娘の強さだということなら、今の自分はなんて弱いのだろうか。

だから、今。

鳳翔は無意識に艤装を展開し。

「そうスルのなら、今度は私があなたを撃たなくてはなりません」

「——っ!? ……金剛、さん」

海へと降り立とうとした鳳翔を止めたのは金剛。

顔にやめて下さいネと、何処か自嘲気味な苦笑いを浮かべながら近づく。

「わかって、ます」

「なら、良かったデース」

そうして並び立ち、水平線を眺める。

背後から聞こえるのは歓声。

湧き上がる国民の歓声にやるせなさを隠しきれず、肩を落としてしまふ。

二人を包む、沈黙。

ここに来てから、互いに感じることも無かった心地悪さ。誰と一緒にいても、常にあつた笑顔は何処にも無い。

「……他の、皆さんは？」

「フラワーズの皆さんは損傷した艦娘のお世話に奔走してイマス……見てもらえない、デスガ」

その姿はまるで考えることから逃げるかのように。

少しでも立ち止まってしまえば何かに押しつぶされてしまいそうで、必死にやることを探しては懸命に。

それがわかった金剛はそつとその場を後にした。

自分とて似たようなもの、ただ足を手を動かすよりも、頭を動かしてしまっただけの違い。

「妹たちと……古鷹さん達は、被害状況の確認と……すぐにでも出撃できるようにと準備を進めていましたネ」

一見冷静に見えるが、少しでも彼女たちと交流があれば鬼気迫ると言っつていい雰囲気を感じられただろう。

笑顔もある、怪我をした艦娘に対して優しさも見える。

ただ、それが終わったら、状況が整えば。

タガは外れるだろう。

一片の容赦もなく、立ちふさがるモノ全てをなぎ倒すだろう。

それがたとえ、どのような存在であっても。

「艦学の皆さんは、まだ幾らか冷静でシタ。……発言を躊躇しているだけかも知れませんが」

長門のリーダーシップ……というわけでは無い。

単純に、弁えざるを得なかった。

専任の墓場鎮守府艦娘、その姿に息を呑んだ。

何も言えない。

そう、何も言えなかったのだ。

何よりも、声をかけて何も知らないくせにと言われてしまうかもと

思えば……そんな恐怖心もあった。

「……時雨さんと、夕立さんは？」

「今は、まだ眠っていいマス。こんな事を言っではいけないとわかってマスが……入渠は、状況が整うまで控えたほうがいいかもしれませ
ン」

あの時、二人の目は敵に向けられるものになっていた。

邪魔をするなら……どうするかわからない、止められないと、瞳が語っていた。

そして二度とそんな二人を止められないとも感じている。

もう次は、無い。

あるとすればそれは――。

「……脆い、ですね」

「……ハイ」

艦娘達の心が、ではない。

自分たちの絆の脆さに気づいた。

無意識に考えることを避けていたと言ってもいい。

共に戦う戦友だという絆を疑うわけではない、それ以上に提督の元へ、あの提督だからこそという絆が、認識が強すぎた。

極端な言い方をすれば、提督の望みを叶えるために必要だから共にいる。

そんな、認識。

無論、その通りというわけではない。

確かな信頼があったし、仲間という感情は強くある。それ以上に、提督という存在が強いのだ。

そしてそれは、かつて金剛が少し形を変えて危惧していたものでもあった。

提督が大事にしている艦娘達と離別する。

どうせ沈む身だからと、それを避けるために自らが悪役になり恨みを背負う、そんな考え。

今の状況は、ただ形を変えただけで本質的には同じモノ。

提督がいるから、保たれていた絆。

提督がいるから、強固に結ばれていた絆。

言い方を変えるのであれば、絆を結ぶ強力な繋ぎとなっていたのが提督だった。

「……辛い、ですね」

「……ハイ」

眩きは、海へ。

生まれた波紋は、波にかき消され跡形も見えなくなった。

「どういうことだよ！」

「言ったとおりだ。我々はこれよりM I作戦達成に向けて動く」
作戦会議室。

集うのは大本営元帥、長官、中将と幾人かの将校。

そして、天龍等各鎮守府代表艦娘とその提督。

苛立ちを隠すこともせず天龍は元帥へと詰め寄る。

一つでも何かを間違ってしまうえば直ぐ様艤装が展開されかねない勢い。

「ちげえ!! 提督は……うちの提督はどうする! 搜索はどうなってやがんだ!!」

「天龍君……落ち着きなさい」

「うるせえ!! 勝手に人の提督を殺しやがって!! まだアイツは生きてんだよ!!」

嗜めようとした長官自身、その思いはある。

故に、その力は小さく形だけのもの。

提督搜索のために、偵察機、観測機は発艦されている。

ただそれ以上に、軍人として優先しなければならぬものがあった。

それが、あの深海棲艦は何処から来たのかというもの。

「調査の結果、幸か不幸かあの深海棲艦はM I海域からやってきたことがわかった。わざわざセンサーを設置した南西諸島防衛線を経由した理由は不明だが、ある程度当該海域の深海棲艦を撃滅した今こそ反撃の時だ……提督一人の奪還に力をかける余裕は無い」

「てめえ!？」

「天龍さん!!」

元帥のその言葉に天龍が拳を振り上げ……由良と羽黒が抑えた。

もし、そのタイミングが少しでも遅ければ確実に振り下ろされていただろう拳。

だと言うのに元帥の顔色は微塵も揺るがず。

「無論捜索は行う。現に少ないとは言えど拉致を企てた深海棲艦の足取りを探るべく偵察機の発艦は行っている。奪還作戦を行いたくば、M I作戦を早期に達成させることだ」

「人質ってか!?! ふざけんじゃねえ! オレはそんな作戦に参加しねえぞ! 提督の奪還が先だっ! これは譲れねえ!!」

吠える天龍。

たとえ大本営の協力が得られず僅かな戦力だとしても、奪還作戦を優先する。

素晴らしい切った天龍に元帥はため息を一つ。

元帥がもし、一個人だとするなら。

提督奪還作戦を優先したいという気持ちはある。

だが、人情で動いてはならないと軍人である自分が止めた。

改めて、最高のタイミングだったのだ。

予定では天覧演習で軍事力を誇り喧伝し国民の反感情を低下させる。

それは空襲がなくてもある程度の達成はあっただろう。だがそれ以上に、こうするほうが遥かに効果的であった。

国民は、喜んで協力してくれるだろうその確信を持てるほどに。

そのために提督を殺した。

いや、事実から見れば殺したという表現は少し違うだろう。

生きていればさらなる美談として展開できるだろうし、本当に死んでいても……また美談。

国民を艦娘と共にその生命を賭して守った英雄。

そんな国民的英雄という存在は極めて効果をあげる。

本意ではない等とは決して口にしない。

それでも提督以上にこの国を守るからこそが最大目的なのだ。

「良いのか？　このままだと命令に背いた者として処分を検討しなくてはならないが？　……それはあの提督がなんとしてでも回避しようとしたことではないのか？」

「ぐっ、ぐ、このっ……!!」

だから、何でもする。

墓場鎮守府の戦力は、M I 作戦達成に絶対必要不可欠。

その力を得るためになら何処まででも汚く、恨まれる存在となる。

それが、大本営最高権力者、元帥だった。

長官も、提督よりの人間となった今であっても、その意思はある。

なんとしてでも過去を乗り越える。

そうすることで海へ挑む意思を示す。

そのためのM I 作戦。

歯がゆい。

天龍達の想いは理解できる長官。

いや、真に理解は出来ていないだろう。それでも、たとえその一欠片であったとしても。こうして提督のために必死となる艦娘へと力になってやりたいと思う心を止めるのは並大抵のことではなかった。ずきりと手のひらに走る痛み。

それは心までのぼってきてじくじくと苛む。

見ていられなかった。

何か言おうと震える天龍も、それを涙しながら抑える由良と羽黒も。

そんな時だった。

「ふんっ！　良かろう！　ならばわし自ら貴様達を使ってやろうではないか！」

「……あ？」

天龍が振り向いた声の先には中将。

自信ありげに、胸を張り、天龍へと高らかに。

「光栄に思えっ！　あの小僧より遙かに効率よく力を発揮させ！　M I 作戦の早期決着を——」

「中将——!!」

禁句。

その言葉は、間違いなく天龍にとって……いや、墓場鎮守府の艦娘にとつて紛れもない禁句。

「きゃっ!?!」

「わっ!?!」

羽黒が、由良が、地面に尻もちをついた。

その腕を振り払った、痛みにはなく、その力に驚き。

「ひっ!?!」

「――」

酷く冷たい目で中将を見下ろす天龍。

手に持った主砲は明確な殺意と共にその喉元へ。

「よう。わりい、聞こえなかつたからよ……もう一回言ってくんねえか?」

今、中将は間違いなく死に向かった。

いや、長官がその身を挺して庇わなければ、たどり着いていただろうその場所。

艦装の剣は首のあった場所を寸分違わず空振ったし、今も突きつけられた砲口は火を吹きそう。

未だ轟音が鳴り響かないのは、この場所が提督の物でありそれを壊したくないという思いだけ。

だがそれもこの先どうなるかわからない。

「聞こえなかつたか……? もう一回だよ、中将……サマ?」

「ひっ、ひいっ!?!」

天龍の目が、砲口が。中将の命を捉えている。

次に、中将が口を開けば……それは散るだろう。

故に中将は口を開けない。

絶対的な死。それを目の当たりにして、開けない。

同時に実感した。

もし、もしも。

ここで自分の首に刃が通っていたのなら。

確実に自分たちは兵器だ道具だと思っていたものに排他されると。今この場で失うものが自分だけの命では済まないのかも知れない、そう空を切った刃が中将の心に刻んだ。

「よかろう、その引き金引くが良い」

「げ、元帥っ!？」

元帥の言葉へちらりと天龍の視線が向けられる。

そういうとは思ってなかった、直ぐ様取り押さえられるそう思っていた。

「中将の命と引き換えに、M I作戦へ参加する。そう誓えるのなら当然。」

そう、提督の命を使ったように、元帥にはあらゆるモノを引き換えにする覚悟がある。

それが中将と言えど、あるいは長官、自分の命であろうと。

それほどまでに、墓場鎮守府の戦力は必要不可欠だと元帥は理解している。

彼女たちの協力なくして、この作戦に成功は無い。

そう確信している。

「――」

だから追いつめられたのは天龍。

やってもいいと言われている。それは提督を一旦諦めろということとで。

だが提督を今すぐ搜索したい、それも捨てきれないもので。

選択肢はあった。

自分たちがM I作戦へと参加せず、強引に提督搜索を進めることだっただけ出来るだろう。

「ちく、しょう……!？」

しかしそれは軍というバックアップを放棄するということでもある。

補給や海域管制、そういった必要不可欠なものを捨てて初めて出来ること。

それは自分たちが見捨てているようで、自分たちが見捨てられると

いうことでもあった。

故に、選べない。

事ここに至り、天龍は前にも後ろにも進めない。

こんな時笑顔で先を示す提督はここにいない。

扉の向こうで待っている艦娘達の望みを、自分の望みを……提督の望みを。

どうすれば貫けるか、わからない。

そんな時、だった。

「失礼しますっ!!」

「……何事だ？」

息を切らせて入室してきたのは一人の軍人。

敬礼すら忘れ、その勢いのまま元帥の耳元へある報告を行った。

「……ほう。わかった、下がっていい」

「はっ！ 失礼しました！」

瞑目。

何かを考えるように元帥は、何事かと視線を向けられる中熟考する。

「史実……か。どうやっても、我々はそれから逃れられんらしい」

「元帥？」

長官の呼びかけに反応することなく、やがて目を開きそう呟いた後。

「AL／MI作戦と作戦名を変更する」

「AL……？」

元帥は頷き言葉を続ける。

「北方AL海域へと進出し、陽動を仕掛ける。背後を確保した後、MI作戦にて決戦を行う。……また、AL海域に墓場鎮守府提督がいると予想される、可能なら共に奪還せよ」

「!!」

先程の報告は提督の行方が知れたというもの。

提督を拉致したと思われる深海棲艦——北方棲姫。

偵察機はすぐに撃墜されてしまったものの、確かに提督の姿を確認

したとのこと。

天龍達だけならず長官ですら知らなかったことだが、MI作戦を計画する上で同時に北方海域に関しても調査は行っていた。

史実で行われた作戦は今元帥が言った通りの作戦、ただそこに提督の奪還は無だけのもの。

まるで、誰かからその通りに作戦を進めろと導かれているかのように元帥は感じた。

そしてその声なき声へ従う、従わなければならないとも。

故に。

「天龍」

「……わかってる、いや。わかってます」

突きつけていた砲口が降ろされる。

「中将、失礼しました。罰なら作戦終了後に」

「……」

やるべきことは決まった。

やらなくてはならないことが決まった。

「一時的に長官の下につけ。すぐに動きたい気持ちはわかるが……作戦とする以上、わかっているな？」

「……はい」

落とし所、だった。

これ以上の譲歩は出来ないと元帥の目が言っている。

「墓場鎮守府以外の鎮守府、戦力はMI作戦に備えろ」

「はっ!!」

各鎮守府提督達の敬礼。

それはつまり。

「必ず、AL作戦を成功させます」

「よろしい。調査はすぐに行い、作戦概要書も出来次第すぐに送ろう」

「ありがとうございますー!」

そうして。

大規模作戦は発令された。

作戦通達の様です

静まりかえった横須賀作戦会議室。

幕場鎮守府それぞれの旗艦である天龍、鳳翔、那珂、金剛に加えて長門。

各他の鎮守府より天覧演習を見にやってきていた由良、羽黒。

本来であれば大井の姿もあっただろうが、今はまだ入渠中のため不在。

それら艦娘の前、壇上に立つのは長官。

生唾を飲み込んでしまいたくなるのを必死で堪えている。

空気は、極めて重い。

幕場鎮守府艦娘達の視線は鋭く、それでいて早く終わらせろと無言の圧力を放っている。

こんなところに座る時間すら勿体無い、何も言わずとも必ず作戦を成功させてやる。

そう長官へと訴えていた。

由良、羽黒もまたその雰囲気飲み込まれそうになるのを堪え、身を縮める。

「じゃあ、作戦会議を始めるよ」

「はっ！」

敬礼、そのまま着席。

その行動を見納めた後、一つ大きく深呼吸をするのは長官。

軍部で考案された作戦内容は全て頭に入っている、後はそれをここにいる全員とすり合わせるだけ。

それだけのはずなのに、長官はまるで敵に今から挑むかのような覚悟を要した。

「まずは前段作戦であるAL作戦について話そう——」

AL海域。

日本より北方にある海域。提督がいるだろうその海域。

改めて海域事情を考えれば、日本列島その近海全ての制海権を得ている現状。

そこから南西諸島海域に対して睨みを利かせられていて、いつでも攻略に乗り出すことは出来る。

防衛ラインにしても、今回の空襲を察知出来たように機能しているし、各方面所属の艦娘達が常に警備していた。

だが北方海域に関しては未だ手付かず。

AL海域に辿り着くまでには激しい深海棲艦の抵抗が予想される。

「本作戦は二段階にわけている。まずAL海域までの突破作戦、そしてAL海域列島にあるだろう深海棲艦の港湾基地を叩く作戦」

手段としては二つあった。

電撃突破するか、じっくり制海権を得ながら進めていくか。

だが、今回の提督拉致。

そのことから時間の余裕はなく強行、電撃突破し、そのまま基地強襲に移るという無茶な作戦を執らざるを得ない。

何よりも、じっくり進めよう等と言えば間違いなく長官は捨て置かれてしまうだろう。

「……突破作戦については墓場鎮守府の第三艦隊にお願いしたい」

「私達、ですか？」

北方海域は極めて海流が特殊だった。

航海するだけならば問題ないが、戦闘行動をするには軽巡洋艦、駆逐艦でなければ厳しいほど、激しい海流。

「ああ、第一艦隊で進むことも考えたけど……港湾基地攻略まで力を温存すべきだろうし、ね。海流の関係から作戦の第一段階については水雷戦隊じゃないと難しい。そこで後一人駆逐艦を編成したいんだけど——」

「ならば霞が良いだろうよ……少ないとは言え、第三艦隊と作戦を共にしたことがあるからな」

「——わかった。なら、そうしよう……那珂君、大丈夫かい？」

「問題ありません」

短くそう答える那珂。

いつもの姿は全く感じられず、他の艦娘と同様に早く出撃をと早く自分を抑えている。

長官とてそれは理解している。

だが、そうすぐに動けないことも確かだ。それを説明しなくてはならないという後に控える仕事に少し怯えていた。

「……突破艦隊である第三艦隊の支援艦隊に関しては天龍君に一任しよう、支援艦隊は支援、搜索艦隊、そして作戦終了後の帰路確保艦隊でもあるからそれも加味してくれ」

「了解」

「第三艦隊が突破できればその後は港湾基地攻略に移る……予め言っておくけど、あくまでもこの作戦はM I作戦を支援するための陽動が主眼に置かれている、本格的な攻略ではないことに注意してくれ」

こくりと揃って頷く艦娘達。

だが、墓場鎮守府の艦娘は長官がそう言った言葉の意図を都合よく理解した。

無茶をするな、ではなく、必ず提督を奪還せよと。

「確認された北方棲姫は陸上型と思われる深海棲艦。そんなのがここまでやってきた事に疑問点はあるけど、それは置いておいて。攻略には陸攻型艦載機や三式弾が必要となるだろう、海流の事もあり戦艦の運用は厳しい、こちらには重巡洋艦と軽空母を中心とした編成が求められる」

「ならば第二艦隊である私達の出番ですね」

「うん。うちの観測機を撃墜、その事により艦載機発艦の姿も確認された。航空戦に厚みを持たせるためにも摩耶君が良いだろうか、それとあと一人」

「だったら神通が良いんじゃないか。鳳翔さん、古鷹、加古、摩耶、大淀、神通で組めばいい」

瞑目し、思考しながら天龍が言う。

同時に、支援艦隊を自分たち第一艦隊が担うとまで。

支援艦隊として動きながら提督の搜索を行える、そう考えた。

鳳翔としても、長官としてもその意見に否は無い。

長門も神通が適任であると認める所、川内よりも対空に関しては神通の方が上であると理解していたからだ。

組み上がっていく作戦。

ある程度の形が浮かび上がりそうになった時、再び長官は大きく深呼吸をし注目を集めた。

「MI作戦はAL作戦が第二段階へと移行すると同時に開始される。段階としてはまず太平洋の突破、MI諸島深海棲艦泊地への攻撃。そしてMI諸島沖での決戦の三段階。……天龍君」

「なん……ですか？」

嫌な予感がした。

長官の目には何かの覚悟が宿っていて。

「君を、MI作戦における、連合艦隊旗艦へ任命したい」

「……は？」

間の抜けた声が響いた。

普通なら、通常時なら。

荣誉だろう、連合艦隊旗艦という座。

それは自身が有能であるという証明とも言えるだろうし、艦娘にとって憧れでもある。

だが天龍は違った。

理解した、それはつまり。

「辞退するっ!!」

「すまない……本当にすまないが、君以外に適任が居ない……いや、君程最高の適任者がいない」

AL作戦に天龍は参加できないということ。

だから間の抜けた声はその身にそぐわぬと感じる荣誉に対して驚いたからじゃない。

単純に、何を言ってるんだコイツは。というものだった。

「何が悲しくて提督の下に走れねえんだっ!! オレは! 墓場鎮守府艦娘筆頭だぞ?! そんなのが何で提督に——!!」

「だから、だよ」

単なる適任者として考えれば多くの候補があった。

壊滅寸前だった鎮守府を立て直すきっかけこそ与えられたものの、実際に立て直したのは由良。

同じ理由として羽黒も挙げられるし、金剛とて歴戦の艦娘と言える存在で、多くの艦娘をまとめた経験だつてある。

そんな艦娘を差し置いての天龍。

旧式軽巡洋艦だ、カタログスペックがなんだと言うことを差し引いても、彼女の指揮能力やその実力に並ぶものがいなかった。

逆に言うのなら、天龍であれば、天龍がMI作戦における艦娘の代表、まとめ役とするならば勝てる。

過信と取れるかも知れない程の評価が向けられていた。

「天龍、さん……」

事実、連合艦隊旗艦が天龍と聞いた瞬間の由良、羽黒は言葉に出来ないほどの安心感を覚えた。

この人が共に戦ってくれるなら。

そんな思いさえ宿した。それほどまでに墓場鎮守の実績、功績。天龍の評価とは高いものだった。

「嫌だぞ！ オレは!! 絶対にAL作戦に、提督を助けるんだつ!!」

「……そう、か」

予想していた、覚悟していた。

だからもう一つ長官は覚悟を決めた。

それは。

「なら、キミは、君が居ないことで沈む艦娘を認めるということだね」「っ!？」

脅迫する覚悟。

「キミの想いは理解できる。だが、その想いによって……提督の想いを、意思を袖にするということだね」

「なん、だよ……どういふことだよ!!」

勇み立ち上がる天龍。

その目には戸惑いの色。

理解している、言われて理解した。

「羽黒君」

「は、はいー!」

「天龍君が旗艦だと聞いて……どう思った?」

「そ、それは……」

急に向けられた水に驚きながら、ちらりと横目で天龍を見る羽黒。わかつている。

正直に言えば、間違いなく天龍は追い込まれると。

天龍の思いは、理解できる。

そして、天龍がいないことで誰かが犠牲になるだろうことも理解できる。

見えない天秤が、羽黒の前に現れた。

平行に、されどもゆらゆらと上下していて。

その拮抗が、今か今かと羽黒の声を待つ。

「……安心、しました……っ！」

「っ!!」

仲間の命と、天龍の気持ちに乗せた天秤は、仲間へと傾いた。

わかる、わかつている。

天龍がどれほど提督を大事に想っているのか。

わかるだけに、羽黒もまたそれと同じように仲間のことを大事に想っているのだ。

「由良君」

「……天龍さんとなら、勝てる。そう、思いました……」

冷たいわけじゃない。

由良も、羽黒も目に涙を浮かべている、手をこれ以上無いほど力強く握りしめ震わせている。

言わされているという認識はあった。

だがそれ以上に天龍がいれば犠牲なく勝利出来ると感じてしまう。

第一艦隊出張作戦は、こうして活きた。

MI作戦を睨み、その連合艦隊旗艦への信頼感を培わせる作戦でもあったそれは、こうして最悪の形で発揮されてしまった。

「くそがっ!!」

机を、大きく叩く天龍。

由良を、羽黒を責める意図はない。

ただそれ以上に、今の気持ちをぶつけられるところがないのだ。

「天龍さん……」

鳳翔も、那珂も、金剛も長門でさえ、かける言葉が見つけれなかった。

必ず提督は救うから。なんて言葉をかけたところで何にもならない。

天龍の分も奮戦を誓う。そんな誓いすら無意味だろう今の天龍には。

「……天龍君」

「……」

「よく、考えてくれ」

重い空気は沈痛な空気へと変えて。

静かに、されども痛ましく部屋の中を漂った。

「……長官」

「聞こう」

経過した時間は長かったのか、短かったのか。

天龍の瞳は決断的。

長官の背中に寒気が走るほど。

「やっぱりオレは提督奪還作戦に従事しねえと駄目だ。提督の安全を確保してからじゃねえと、とても集中できねえ」

言い方は、少し柔らかい。

軽い笑みすら浮かんでいて、天龍は告げる。

「AI作戦終了後ならいくらでも望み通りやってやる。なんだったら提督奪還後そのままMI作戦に向かったっていい……もしも、それが叶わねえのなら——」

——オレは何をするかわからねえ。

今度こそ、長官だけではなくその場にいる全ての存在が息を呑んだ。

それほどまでに天龍の覚悟は重かった。

理解していた。

長官が言うように、自分がその座に就けば救われる命があることを。

でもどうしても駄目だった。

仮に今の状態で連合艦隊旗艦となったところで、気がかりに足を取られろくに動けないだろうと。

それは提督の意思、誰も沈めたくないという意味を越えて、初めて天龍は自分の意を主張した。

同時に長官も理解した。

どうあっても墓場鎮守府艦娘の手綱は、あの提督にしか握れないというこを。

そして艦娘、自分たちにブレーキをかける十二カ。それが外れそうになっている瞬間に直面していると理解した。

「……わかった、掛け合ってみよう」

「頼むぜ？ 長官サマ？」

それは長官とて理解した。

今までどれだけのことをしても、決して反旗を翻すことのなかった艦娘。

その決してが崩れる、そう直感した長官は静かにうなづくことしか出来なかった。

「——ままならない、ものだな長官」

「……はい」

執務室に集う軍人は三人。

元帥、長官、そして中将の姿。

イスに腰掛けた元帥は両肘を杖に顔を覆い。

悔しげな表情を浮かべる長官と、拳を震わせる中将。

「何故だ長官！ 何故そのまま引き返して来た！ もう時間はないと言っのにつ！！」

「わかっています……ですが、失敗すると分かっついて押し付けることは出来ませんよ」

爆発したように長官へと食って掛かる中将の言葉を、苦笑いで流そうとする長官。

結局の所先程の艦娘とのやり取りで得たものは、どうやっても当初

想定された形で進めることは不可能ということでは無かった。

「アイツは私に刃を振るい、砲を向けたのだぞ!? 軍規違反も甚だしい! それを盾に無理矢理にでも納得させれば良かったのだ!!」

「そんな事、出来るわけないじゃないですか。やったとしても、変わりませんよ」

もしそうしたとしても、決して天龍は素直に従わなかっただろう。むしろ、そう言われた瞬間に走り出し、提督を救うべく出撃していたかも知れない。

そんな長官には簡単にできる想像が、中将には出来なかった。

「何故だ!! お前は……つく! あなたはそうしてきたじゃないですか! そうして実績を……勝利を掴んできたではないですか!!」

「……中将」

かつて長官が手にした勝利、栄誉。

手にする様を、手段をずっと追いかけていた中将には、わからない。「今回も同じことっ!! かつてしたように今回も! 艦娘を使って勝てばいい!! それが、あなたになら出来るでしょう!! あの提督がない今ならっ!!」

中将は……いや、兵器派の想いはただ一つ。それだけだった。

華々しく戦果をあげる相容れぬ思想を持つ提督の上に立つことができれば。

そうすれば長官は今の自分が間違っていると気づく、かつてのようにまた、自分たちの先に立ち導いてくれると信じていた。

「どうして……っ!! どうしてそうなったんです!! 同じだっ! 同じなんですっ! 勝利という二文字に違いはない! たとえどれだけの犠牲を生んだとしても! 勝利さえすれば——」

「そうして次の戦争を生むのですか?」

その言葉に、中将は遮られた。

「中将を……いや。キミを責めるつもりはないし、間違っているとも言わない。言われたように、僕はそうして今の立場にいるからね」
「ならっ!!」

「でもそれじゃあ乗り越えられないんだよ」

MI作戦の目的、過去を乗り越える。

「僕達は過去を乗り越えなければならぬ。それは、これからは違ふんだと、新しい形でもって海へと挑むのだと……認められなければならない」

今までしてきたように、艦娘を戦いの道具として捉え勝利を敗北を刻んできたように。

同じことをして勝利を得ても、それは過去の焼き増しにしかならない。

今回の勝利は乗り越えること。

過去に、史実に、今までの軌跡に負けないこと。

それこそが、今回の勝利条件。

「そしてそれが、とても難しいことだと僕は今……痛感しているんだ。悔しくもあるよ、僕じや彼女たち本来の力、十分の一だって引き出せやしないって」

思い返すのは先の会議。

もしもあそこで作戦通達したのが提督だったら。

「……そう、思うか」

「……はい。きつと、彼ならば……もしかしたら明日にでもMI作戦を成功させていたかも知れません」

長官にはそうとすら思える。

今頃出撃の準備を意気揚々と行い、戦意は留まることを知らず海へ挑む意思を燃やしていただろう。

大きい力とは、やはり扱うに足る器を持つものでなければならぬ。

元帥はその発言を受け、自身の間違いに気づいた。

墓場鎮守府の艦娘が強いのではない、あの提督の艦娘が強いのだと。

「私は、いつも……気づくのが遅い、な」

「……元帥」

状況は、限りなく好条件の上で整っていたはずだった。

天覧演習で軍の、艦娘の力を示し、理解を得て。

国民との距離を縮め、離れる前により強固な関係を結ぶために予定されていた大規模作戦と紐づけて。

空襲は確かに想定外だった、だがそれも一つの演出として利用できた。

今や国民感情の多くはあの提督を救うために協力を惜しまないという一色となっただろうと。

そしてその代償とも言えるのが今だとようやく気づいた。

「わかった。ならばM I作戦連合艦隊旗艦は白紙に戻そう、舞鶴の由良、墓場鎮守府の長門、金剛あたりを候補に」

「了解しました」

大きく息を吐いて、元帥は想う。

今までの自分は一体何をしていったんだろうかと。

軍の想い、提督の想い、そして艦娘の想い。

一体自分の目に映っていたのは何だったのか。

あの老兵、大将が笑って退役した気持ちを理解した。

確かに彼は満足できたのだろう、後を託せることが出来たのだから。

「…………この作戦終了後、私は退こうと思う」

「げ、元帥!？」

長官が何故今までのように海へ挑まなくなったのか、止めた瞬間何故深海棲艦の戦力向上が緩やかになったのか。

何故あの提督があれだけの戦力から始まり、ここまで大きく力をつけることができたのか。

南一号作戦終了後から今に至り、ようやく元帥は理解した。

「中将」

「は、はっ!」

上げた元帥の顔は後悔に彩られている。

だがそれでも、そうだからこそと言葉を続けた。

「中将の思想は理解できる、その必要性もだ。だが、そうだな…………もう少し、艦娘を共に海へと挑むものとして認めてやれ。彼女たちは兵器であり、人でもなく…………一つの意思なのだろうから」

「……はっ」

「それをこの作戦で学べ……そして作戦終了後、その学びを大将として活かせ」

「……」

今も、今までも迷走に迷走を重ねた中將だからこそ見えるものがあると元帥は思っている。

この作戦が成功したのならこれから先、多くに支持されるのは提督が持つ思想だろう、今までの兵器派がそうであったように、今度は親艦娘派が力をつけるのは目に見えていた。

だがそれは過去の焼き増し、ただパワーバランスが変化しただけに過ぎない。

それじゃあ駄目だ、乗り越えるべき過去とは全てなのだ。

反発し合うのは良い、競争するのも必要だ、そして何よりも。

「共に認め合うこと、それこそが大きな力になるのだろうから」

今はまだその言葉を理解できないだろう中將。

ただ、今の言葉は上官ではなく、個人として言われた言葉だということも理解できた。

本来なら、今までの自分なら。

大将という言葉に笑みを浮かべていただろう間違いない。

それでも、何故かそうすることが出来ないのは、そんな言葉のせい。

「長官」

「はっ」

「この作戦が成功した後……君が元帥となれ」

それは軍部の頂。

長官が目を丸くするのは一瞬。

「……そして司令長官は彼、ですネ？」

「さて、な……それは長官が考えろ、中將と共に、な」

元帥の意図をしっかりと理解した長官。

彼が軍部の頂点として相応しい者になるまで面倒を見ろということ。

だがそれも。

「まずは作戦成功に……全力を尽くします」

「ああ……頼んだぞ。責任は全て、私が取る」

ようやくここにきて、軍は、海へと挑む意思を確立させたのかも知れない。

今はまだ、拙く誰かを傷つけるものだとしても。

拉致された提督のようです

「……いか、なきや」

「しゅつ、げき……」

空襲警報に驚いたよりもこっちのほうがびびった。

今までうんともすんとも言わなかった伊勢たちがむくりと急に起き上がったのだから。

「っ!? み、みんな!? まだ寝てないと駄目ですよ!」

「けい、ほう……」

「しんかい、せいかん、たおさなきや……」

大井が制そうとするけど何処にそんな力があるのか、それを振り払って。

ノロノロと、だけど力強く、立ち上がった。

俺も、当然止めた。

急な警報、予期せぬ事態。

そうだとは言え、幸いというべきか軍の上層部が集っている今、混乱しているとは言えすぐに収束して艦娘は出撃するだろう。

そこには当然うちの艦娘もいるわけで。

だからそう言った。

すぐになんとかなるから、なんとかするから今は身体を休めてくれと。

だけど返事は砲口で返された。

「じゃま、しないで……」

「なかま、まもらなきや」

伊勢が、鈴谷が、熊野が、蒼龍が、飛龍が。

まるで俺のことが目に入っていないかのように……いや、自身を阻む邪魔な何かだと認識していた。

様子がおかしい。

そんなの考えるまでもなくわかった。

だから、思えばその場で無理矢理にでも止めるべきだった。

でも手段がなかった。

大井に無理やり仲間を撃つてでも止めろなんて言えなかったし、そんな事させたくもなかった。

だから必死で、継るように。

やめてくれと頼んだ。

それでも結局歩みを止めることは出来なくて。

使命感なんかじゃない、これは一種の強迫観念とも言える何かだと理解した。

自分たちが戦わなければならないと、そうして仲間を、国を守らなければならないのだと。

言葉だけを考えればとても耳障りのよい言葉。

だけどその時は全くそんな風に思えなかった。

あまつさえ、似ていると思った。

そうしなくてはならないと、義務かのように身体が勝手に動く、動かす様は。

思い出したくもないかつての俺自身にも見えた。

大井がどうすればいいかと継るような視線を向けてきた。

そんな視線に応えたいと思った。

何よりも伊勢たちを支えなければならないと思った。

彼女たちを支える物は、決して力強くも、頼もしくもないものだと分かっていたから。

「もう、止めねえ……俺も、行く」

「はいっ!? 何を……!?!」

驚きの声をあげる大井。興味あるのかないのか、光のない瞳が複数と。

笑えた。

無性に笑いたくなった。

冷静な自分が言っている、培ってきた提督としての経験が言っている。

自分が行ってもどうにもならないと。

邪魔な存在にすらならない、ただ間違いなく無為に死ぬと。

そう理解して尚、俺はやっぱり自分を止められなかった。

今伊勢たちをどうやってでも止められないと理解していたから。
俺も止まれないと思つてしまったから。

「大井……俺からの指示する最初の命令は、俺の命を……こいつらの命を任せる」

「ばつ、バカですかあなたは!? そんなの……そんなのっ!!」

初めてにして重すぎる命令だとわかつていた。

ようやく、重い荷物を共に背負ってくれらると感じてくれていただろう大井。

その期待を、簡単に裏切つた俺だから。

「心配すんな。そう、うちのルールはな……誰も、沈めない、だからな」
沈んでいるなら引つ張り上げる。

これも、今も、これからもずっとそう。

そうして、泣きそうになっている大井を振り切り、海に出た。

警報とセンサーが示したのは南西諸島防衛ライン。

そこから本土、ここを目指してくるのなら通つてくるだろう海路。
そこに輪形陣で迎え撃つ。

「いいか、まずは空襲への対処だ。対空射撃は頼りないが、艦載機が豊富にあるこちらだ。被害をできるだけ軽微に抑えて後続してくる艦隊の頭を抑えるぞ!」

「りよう、かい」

もちろん敵艦載機が見えれば離れるが、いつもの船の上から皆の近くで指示を出した。

生憎羅針盤妖精が居なかつたから、少し難儀したものなんとかなるもんで。

演習での動きを見る限り、身体への負担は大きいだろう艦載機の発艦。

特に伊勢、鈴谷、熊野に関してはそれが顕著だろう、重巡洋艦から航空巡洋艦への艦種ごと変わったことを考えると当たり前前だと思つた。

かと言つて蒼龍、飛龍の負担は少ないのかといえそうでもない。

多すぎる艦載機の管理は確実に神経を摩耗させる。

「大井」

「……何でしょう」

だからはつきり言ってしまうえば大井に賭けるしかなかった。

嫌な言い方をしてしまえば、動けなくなつてさえしまえば保護できるから。

そしてそれを大井も当然のように自覚していた。

「すぐに応援部隊が来るはずだ。それまで、頼んだぞ」

「……了解です」

敵数は不明。

ただ空襲の艦載機数から見ればそこまで多くはないだろう。

強行偵察か、それとも本土強襲の前段作戦か。

いずれにせよ、その時はそう思っていた。

相手の足を遅らせて、徐々に本土へと退き艦娘の到着を待つ。

消耗戦に違いはないが、それ以外に執れる作戦が思いつかなかつた。

だが、その考えが甘すぎたことをすぐに理解した。

「敵艦載機見ゆ!! 皆、頼んだぞ!!」

その場を離れる。

想定通り、というべきか。

空襲への対応はほぼ完璧だった。

「各艦被害状況は!？」

「鈴谷、蒼龍が小破のみよ!」

敵艦載機は全て落とすきつた、後ろにいる俺が確認しているんだ間違いはない。

ひとまず、安心。

「よし! じゃあ陣形を——」

「てきかん、みゆ……そうすう、ふめい」

——無理だ。

一瞬でそう思わざるを得なかった。

水平線から覗く敵艦隊の数は、まさしく数え切れないほど多かつ

た。

「っ!! 撤退だっ! 数が違いすぎるっ!!」

だから当然の判断。

ここで誰も沈めるわけにはいかない。

そのためにもここは退かなくてはならないと、子供でも素人でもわかるくらいの判断。

「いせ、とつげきします」

「すずや、いくよ」

「なっ!」

そんな当たり前の判断に、伊勢たちは従わなかった。

当然かのように、当然だと言わんばかりに、前進した。

狼狽える俺、唇を噛みしめる大井。

「私達は……撤退を許されたことがありませんからっ……!」

「……くそがっ!!」

大井の言葉で全てを理解した。

多分、伊勢たちは意識を取り戻していない。

ただの条件反射、敵が来たから戦うと言うような、そんな単純な反応に突き動かされていただけに過ぎないと。

どれほど、使われれば。

どれほど、戦えばそうなるのだろう。

闘争本能なんて良いもんじゃない。

敵を撃破するためだけに存在していると、骨にまで染み付き過ぎて
いる。

改めて、反吐が出そうになる思いだった。

兵器派の運用に、この世界の艦娘たちに。

そして何より俺の迂闊さに。

故に、彼女たちを絶対にここで沈めてはならない。そう思った。
救われるのはこれからだ、笑顔を取り戻すのは、光を取り戻すのは
これからだ。

沈みきっているその心を、浮上させるためにも。

「大井っ! 行くぞっ! 絶対にここで沈めさせねえ!!」

「でも、どうやってですか!!」

わからない。そんなことはわからなかった。

頭で、胸の中でグルグルと渦巻く言葉に出来ない思い。

彼女たちを自分に重ねた俺は。

そんな俺が、どうやって救われたのか、わからない。

救われなかった俺は、どうするべきかわからない。

それでも失ってはならないという思いに突き動かされて舟のエンジンを鳴らす。

そうして何も出来ないまま、戦いとは言えない一方的な何かに突入した。

泣きたかった。

指示なんて、作戦なんて、何も意味をなさなかった。

ただただ損傷を与えることも出来ず、ずっと受け続けて。

傷ついていく艦娘の姿を目に焼き付けるしか出来ず。

何故俺はあそこで戦えないんだと。

何故俺が彼女たちの代わりに傷を受けることが出来ないんだと。

ひたすらに悔み続けた。

伊勢が大破し、熊野が膝をついた。

蒼龍の、飛龍の飛ばせる艦載機がなくなれば、無謀にも突撃衝突を

狙おうとする姿を必死で止めて。

気がつけば鈴谷が不意に動けなくなった。

そんな皆をなんとか庇おうと動く大井もまた、大破した。

圧倒的敗北。

為す術もなくただただ蹂躪された。

そんな中無事な自分に吐き気を催した。

だから。

「あぶっ……ねえ!!」

舟で庇った。

もう自暴自棄と言っても良かった。

トドメをさそうとした深海棲艦の砲撃と伊勢の身体に割り込ませ、舟が大破した。

投げ出される俺。冷たい海の感触。
すまねえと、誰かに向けて謝った時。

一斉に静まりかえった。

砲撃の音も、艦載機の音も。

全てが一斉に止まった。

そんな様で動ける艦娘も居らず。

ただひたすらに沈黙が海に漂った時。

「テイトク、オイテケ」

「っ!？」

画面越しによく見たことのある姿が現れた。

「ほっほ……っ?」

「ホッポ? ホクホウセイキダ」

北方棲姫。

AL/MI作戦のAL海域第二段階作戦にてボスとして登場した
深海棲艦。

そんな存在が何故ここにと戸惑った。

「エラベ。カナムス、シズムカ。テイトク、オイテクカ」

「なっ……なに、を……!？」

置いていく?

それはつまり、俺を欲しているのだろうかとより頭を抱える俺を置
いて、大井が言う。

「そんな事、出来るわけないっ!!」

「……ヤツテ」

その言葉に動いたのは傍に控えていた軽巡ツ級。

ツ級の砲塔が、大井に狙いを定め――

「やめろっ!!」

「ワカッタ。マツ」

砲弾は発射されず、そのままに。

大井へ撃つなど目配せをしてみれば、撃つどころか腕すら上がらな
い状態。

艀装から煙をあげていない艦娘は何処にもいなかった。

大井以外の全員、まるで電池でも切れたかのように動かない。それでも、沈んでいない。

「俺が行けば、彼女たちを見逃してくれるか？」

「提督っ!？」

「ウン」

何処まで信じて良いのやら。

だが、それ以外に手段はないように思えた。

「わかった。なら好きにしてくれ」

「……ヤツタ。テイトク、モラツタ」

「提督!!」

ぴよんつと俺を海から引き上げ、軽々と持ち上げられる。

傍から見ればなんとも言えない光景だろうが。

それでも。

「大井……ごめん、な」

「いや……いやですっ!! 私は、私達はようやく……っ!!」

「ウン……チョット、ゴメン」

北方棲姫がそういつた瞬間。

俺の視界は真っ暗になった。

「イイカゲン、オキル」

「ぐほっ!？」

いてえっす!？」

っっていうか……!？」

「北方棲姫っ!？」

「ウン? ソウダゾ?」

眼の前ドアップはびっくりするからやめて。

あと重くないけど腹から降りて、色々危ない。

なんて、余裕振りたいたいところだけど。

思い出した。はつきりした。

俺は、連れてこられた……いや、来たんだ。

皆を守るために。

なんて言えば……ちよつと違うか。
俺の独善的な気持ちを買った結果だ。
皆は、どうしてるだろうか。

大井達は、無事に鎮守府に戻れただろうか。
それを確かめる術は、きつとないだろうけど……無事であつて欲しい。

そして……天龍たち、墓場鎮守府の家族たちに、俺はなんて言ったら良いんだろう。

心配、どころじゃねえか。

きつと血眼になって俺を探してるだろうってわかる。

俺もそうするだろうし、そう思えば胸が張り裂けそうになる。

そんな思いをさせてしまったことに。

ただまあ勘弁してくれ。

約束を守ろうとした結果なんだ。

それに俺はまだ……沈んでいない。

「……一体何が目的だ？」

「モクテキ？」

腹から降りて首を傾げながら不思議そうに。

……くっ！　これが深海棲艦の力か!?　か、可愛いじゃねえか……

!

「俺をここに連れてきた理由だ。何か、あるんじゃないのか？」

「アル。ケド、マズハコレクエ」

……菱餅？

え、何で？　と言うか。

「さ、流石に生でそのままは……」

「……ソウダツタ……マツ」

深海棲艦は生で餅食べるの？　え、まじで？

そんな疑問をよそにトコトコとほっぽは部屋から出ていく。

……部屋？

「つてかそっだよ……ここ何処だよ」

なんとなく、鎮守府を思い出す。

自分の部屋と少し似ている。

本棚も机も無い、ただ布団が敷かれただけの部屋。

聞こえるのは波の音。

香るのは潮風。

思わず、ただ艦娘と深海棲艦が入れ替わっただけなんじゃないかなんて。

そんな錯覚をしまいそうなくらい。
ていうか。

「一応俺って捕虜？　なん、だよな？　部屋の鍵もかけずに不用心な……」

立ち上がってドアノブを回せば開くドア。

今なら、ここから脱出出来るんじゃないかとすら思う。

思わずそのままドアを押してしまいそうになるけど……出て、どうなる？

現在地もわからない、途中で深海棲艦に再び捕らわれる可能性は高い、よしんば脱出出来たとしても人のいる所にまでどうやって出る？
出たところでどうやって日本へ戻るんだ？　財布は……無い、身分を証明できるモンなんてこの軍服くらいしかねえ……つって、それが証明になるのかすらわからねえ。

「……だけどっ！」

行かないやならねえ。

俺が居ないことで悲しみに沈めてしまうなんて笑い話にすらならねえ。

大きく息を吸って――

「何処へ、行く？」

「っ!？」

すぐ前に現れたのは……。

「港湾棲姫……?？」

「ヨク、知ツテルノネ……?　ソレデ？　何処ニ行クツモリ？」

思わず、息を呑んだ。

穏やかな顔をしているが、その目が笑っていない。

何処にも行かせるつもりはないと、言っていて。

「……ほっぴちやんが遅いなって思ったただだよ」

「ソウ……サツキ、オモチ焼キニ行ツテタ。モウチヨット、マツテ。ソウ、ココデ、オトナシク」

ずっと部屋の中を指さされてしまった。

……失敗、か。

「アセラナイデホシイ。マズハ食ベテ、ソレカラオハナシシマシヨウ？ ソノタメニ……デハナイケド、連レテキタノダカラ」

「……わかった」

殺意は、感じない。

どうやら俺を殺すつもりはないようだ。今のところは、だろうけど。

そして、お話、か。

一体、何を話すことがあるって言うんだろう、な。

提督が決断するようです

リノリウム……ではないけど、足音は鳴るらしい。

耳と記憶にある音との違いはあれど、かつて大淀に大本営を案内された事を思い出す。

でも眼の前を歩いてるのは港湾棲姫。

姿勢良く、というよりは上品に。

だからやっぱりここは大本営じゃないんだろう。

深海棲艦の基地、そう実感できた。

隣にいるのは北方棲姫。何故か手を繋がれて。

「ニゲチャダメ」

「逃げないさ」

なんてどうやら俺を逃さないようにしているらしい。

菱餅は美味しかった。

正直怪しげな薬が入ってるんじゃないか、賞味期限的なモンは大丈夫かなんて疑った気持ちはあるけど。

あんまりにも無邪気に差し出してくるもんだから、つい。

普通に腹も減ってたしな、食欲には負けますよ。うん。

時折すれ違う深海棲艦に頭を下げられたりするのはいいんだけど、それにどうやって返したら良いかわからない。

敬礼は違うだろうし……あ、どうも。

ていうか人型に近いのならいざ知れず、どうやって歩いてんだなんて疑問もあつたりするけど深くは考えないようになろう。

軽く混乱しながらも頭を下げ返したのは何回目だろうか。

「混乱、シテルノネ」

「しないやつが居たら怖いよ」

一番の原因は誰も敵意を向けてこないこと、だろうな。

極めて、穏やか。

こいつらと人類は戦争をしている、なんてちよつと想像できないほど。

北方棲姫にしても、港湾棲姫にしても……今すれ違った空母ヲ級に

しても。

誰一人俺の姿を見て、攻撃してこようとしない。

実際、捕虜の扱いなんぞ知識にないからなんとも言えないけど、もうちよつと違うんじゃないかと思う。

たとえばこうやって自由じゃないけど部屋から出れて、誰にも変な目で見られず。

「ワカッタト思ウケド。私たちニ今ノトコロ、アナタヲ害スル意思ハナイ、デス」

「……それは、何故だ？」

俺は、艦娘を率いてこいつらを何度も撃沈させた人間だ。

もしも仮に、深海棲艦同士で仲間意識みたいなものがあるのなら……恨みやなんやらを向けられるのが当たり前前つてもんのはずだろう。

「ムシロ、歓待シタイトスラオモツテイル……アナタ次第、ダケド」

「俺次第……？」

「チャントハナス、イマハツイテクル」

理由のわからない笑みを浮かべる港湾棲姫と、背伸びして真面目っぽく胸を張る北方棲姫。

未だに頭の中ではクエスチョンマークしか浮かばないけど、何でだろうか。

背筋に冷や汗が流れるのは。

深海棲艦は、怖い。

そんなの当たり前だ、俺の大事な艦娘を沈めようとする存在で、人類の敵。

人としての根源的なんて言うのか、そういうもんに訴えてくる恐怖がある。

だけど、それ以上に。

人としてでもなく、戦いの相手としてではなく。

頭の中に鳴り響く警鐘。

それは多分、俺が俺として生きてきたからこそ鳴り響くモノだと、何かが言っている。

怖い。

呼吸が荒くなってきたり、張りがわかってきている事がわかる。

心臓がバクバクと張り裂けそうになっていた。

それでもその理由がわからない。

「ダイジョウブ」

「えあ……っ？」

伝わってきたのは手のひらをぎゅつとされる感覚。

あどけなく、だけど真剣に。

北方棲姫が見つめてきた。

「チャント、全部話シマス。ダカラ、ドウカ落ち着イテ」

「……ああ」

安心させるような、させたいような笑みは港湾棲姫。

だけどやっぱりそれは……。

今から俺は困難に向かうということなんだろう。

「ここは？」

「アナタ達ニ倣ウナラ、建造ドックトデモイイマスカ」

言われてみれば、確かにそうとも思える。

地下に降りていった先。ここはそんな場所にあった。

鎮守府と違うのは、最初からシリンドーの中に液体が注入されていることくらいだろうか。

注入、っていうのもまた違うか？ 床を突き抜けてるそれは、なん

となく何かを汲み上げているようにも見える。

そして言われた建造ドック。

ということはやっぱりここで。

「深海棲艦を造っている、のか」

「少シ、違イマス。ココデ、深海棲艦ハ生マレルノデス」

生まれる……？

いや、艦娘もそうと言えそうだろうか。

建造……造るのではなく、生まれる。

そうとも言えるのかも知れない。

燃料、弾薬……それら海で生まれる資材を集めて、海の意味と呼ばれる擬似的な海を作り、艦娘を生む。

人間に取っっちゃそれは単純に考えても人類を守る戦力が増えることで、俺個人にしてみりゃ艦娘の誕生なんて喜ばしいこと。

だけど、港湾棲姫がそのシリンダーに触れ、悲しい顔を浮かべる様は新たな生命の誕生を喜んでいるとは思えなくて。

「アナタ達が艦娘と呼ぶ海ノ意思ガソウデアアルヨウニ。私たち……深海棲艦トイウ存在モマタ、海ノ意思カラ生マレマス。人へノ、恨ミ、悲シミヲ糧トシテ」

「恨み、悲しみを糧に……?」

「……私たち、深海棲艦ハ、人類へノ試練。人ガ海へノ感謝ヲ忘れ、傲慢ニ生キテイルコトヲ咎メルタメ、母ナル海ガ造ツタ存在。……少ナクトモ、最初ハソウデシタ」

試練……か。

確かに、俺達人間は原初の罪だなんだ小難しい話があるが、何かを犠牲にして生きている。

人以外の命を奪い、己の命に変えて生きている。

それを咎めるための存在が、深海棲艦ということか？

「少なくとも、最初は……?」

「最初ニ生マレタ艦娘モ、深海棲艦モ……人類ノ行キ先ヲ定メル道具デシカナカツタ、ソノタメニ発生シタ。深海棲艦ガ人類ニ課ス試練ナラバ、艦娘ハ人類ヲ守ル存在、海ト共ニ共存出来ルコトヲ示ス道具。ソウ定メ、海ハ意思ヲフタツニ分ケマシタ」

発生した、か。

最初はそうして海が生んだ。人類からすればわけがわからないまま始まった戦争の引き金はこれか。

そして艦娘が人間の下に……いや、人の味方である理由、か。

「海カラ人ヲ守ル、守リタイトイウ意思ノ元生マレルノガ艦娘。ソノ艦娘ガ強イ負ノ感情ヲ持ツテ沈メバ、各地ノコウイウ場所デ深海棲艦トシテ生マレ変ワリマス。ソシテソノ数ハドンドン多クナル一方。艦娘トシテ生マレ変ワレナクナルクライ」

……共存は難しいと、海に示してしまった。いや、示しつつあったんだろう。

なるほど、それが。

「ソウシテ沈ンダ艦娘ガモツ情報ガ海ニ記憶サレマシタ。ドコノ、ダレハ……人間ハ。海ト共ニ生キルコトガデキナイト」

ドロップ艦娘や、建造ドックで被りが生まれなくなった原因、だろう。

海が、人類を見放しつつあるとも言えるか。

逆に見れば、元々の仕様は深海棲艦側が手にした、独占したとも言えるのかもしれない。

艦娘を討つことで、深海棲艦をドロップして、多くの深海棲艦を被らせてでも建造できて。

どんどん戦力の補充が難しくなる一方で深海棲艦はどんどん強くなって。

それをなんとか打破するため、より厳しいことを艦娘に望むなんていう負のスパイラル。

ああ、なんとなく思ってた人類が相当厳しいってのは間違いじゃなかったわけで。

そしてそれはある意味自業自得とも、当然とも言えて。

「試験トイウ名目ハ、モウホボ深海棲艦側ニハナイデシヨウ。アルノハタダ人間ヘノ恨ミ。滅ベ、沈メトイウ想イノホウガ多イ」

「……すまねえ。俺には謝ることしか出来ない、けど……じゃあどうして俺はここに居る皆から敵意を向けられずにいる？」

お前も、北方棲姫も。

あるいは廊下ですれ違ったヤツラだっていい。

何で俺は未だ何の被害も受けずに生きている？

「アナタガ、コノ海ノ存在^デハナイカラ」

「っ!？」

この海の存在じゃない……って。

そりゃ俺はここにどういいう訳か来た存在で……っていうか、何でそれを知っている？

「アナタハ違ウ海カラヤツテキタ異物。艦隊コレクシヨンナンテイウ、ゲーム、トイウノ? ……違ウトハイツテモ、同ジ海。海ハ、全テ繋ガツテイル」

「……じゃあ、なんだ。俺がこの世界に来た時から……ずっと、俺の存在を深海棲艦は知っていたのか」

コクリと頷く港湾棲姫。

……落ち着け。

理屈は、わかんねえけど。知っていたって話なら、それで良い。

それで何か不都合があつたわけじゃ、ない、はずだ。

俺自身、こうやってこの場にいることを疑問に思わなかつたわけじゃねえ。

ただ、そんな事を考えるよりも、あいつらと生きるのに精一杯だっただけで……。

「疑問ニ、思ワナカッタ?」

「何、をだ?」

「アナタハ艦娘ト共ニ海へ出タ。ノニモ関ワラズ、生キテイル。人間ヲ殺シタイ、沈メタイト強ク願ウ私タチ深海棲艦ヒシメク海ニデタノニモカカワラズ」

それは、あいつらが俺をしつかり守ってくれたから。

そう、そのはずで。

「モシモ、アナタ以外ノ人間ガ不用意ニ海へ出タラ……一瞬デ沈ンデマス。ソレホド、私タチハ甘クナイ。アナタガ攻撃サレナカッタノハ、アナタガコノ海カラ生マレタ存在ジャナク、沈メル対象ジャナイカラ。ソシテ捨テ置イテモ、何ラ世界ニ影響ガナイト判断サレタカラ」

「……そう、だったのか」

「モチロン、アナタノ指揮能力、艦娘ノ能力ガナカッタワケジャナイ。私達ニシテモ、タイミングハアナタノ鎮守府へ強行偵察ヲシタトキシカナカッタ……ソレモアナタノ存在ヲ確認スルタメ、デシタガ」

時雨と夕立が初めて出撃した時のことか。

もしも、港湾棲姫が言うような存在じゃなかったら、俺はそこで殺

されていたって話なんだろう。

……そうか。

俺は、この世界にいて、この世界に存在を認められていなかったのか。

だから、無視、されていた、ってだけの話、か。

でも。

「ならどうして俺をここに連れてきた？ そうだというのなら、放っておいてくれてもいいだろう？」

「ソウ、ソノトオリ。デモ、アナタハ深海棲艦ヲ救ツタカラ」

深海棲艦を、救った？

「南一号作戦、空母棲姫……ソシテ、金剛」

「それを、俺が？」

「ハイ。……アノ子ハ、救ワレタ。恨ミカラ、怒リカラ。金剛モ、間違イナクアノ時、深海棲艦トナツテイマシタ、ケド救ワレタ、マニアツタ。アナタト、アナタノ艦娘ニヨツテ」

空母棲姫が沈んだ……いや、消えた時の台詞。

確かに、あの時も、ゲームのときでさえも、ナニカから解き放たれたような演出、台詞はあった。

あれは……いや、あれこそが救われた事を示していたの、か。

そして、金剛。

もしもあの時、間に合っていなかったら……深海棲艦になっていたのか。

「アナタハ自ラノ手デ取ルニ足ラナイ存在デハナイト証明シタ。既ニ海カラ見放サレタ人類ノ運命ヲ変エル存在ダト認識サレマシタ……ダカラ」

何処に居たのか、北方棲姫が手に何か……瓶？ を持ってやってきた。

「センタクシ、フタツアル」

「二つの、選択肢？」

それを俺に手渡ししながら、何かを期待するような目を向けてくる二人。

「二ツハ、ソレヲ飲ムコト。ソレハ海ノ意思……イエ、審判トデモイウベキデシヨウ、アナタノ行キ先ヲサダメルタメノモノ」

「……これを飲んだら、どうなる?」

そう聞き返せば、港湾棲姫は首をゆるゆると横に振って。

何も言わない、いや、言うことを許されていないのか、それとも知らないのか、何も言わなかった。

許されていないというのは……海に、だろうか。

よくよく考えれば、海に沈んだ艦娘の記憶が、情報が蓄積されているというのならもつと効率的に、効果的に深海棲艦は攻める事が出来ただろう。

でも、そうじゃなかった。そうしなかった。

南一号作戦にしても、発令されてこつちの準備が整うまでに襲撃は行えたはずだ。

……だと、言うのなら。

「もう一つの選択肢は?」

「私たちノ提督ニナル選択肢。つまり、人類ヲ滅ボス側ニマワルトイウコト。海ガ今アナタノ存在ヲ認メルノハソノ道ダケ」

そういう存在が居なかった。

作戦指揮する存在を有していなかったということ。

つまり、指示はされるんだろう、俺を拉致したように。

だが、情報を活かして作戦を立案、統率する存在がいない。

それを、俺に求めたってことか。

……随分、買われていることか。

「正直ニ、イエバ」

「うん?」

港湾棲姫が、言いにくそうに……だけど、期待するような瞳を向けてきた。

その目は、やっぱり元艦娘、だからなんだろうか、何だか可愛らしくも思える。

「コツチニ、キテホシイ」

「……」

言葉の後を北方棲姫が継いだ。

俺の空いている手をぎゅつと握りしめて、心の底からそう思っているかのように。

「モシ、ソレヲノンデ……私タチノ眼ノ前ニモウ一度アラワレタナラ、撃タナケレバナラナイデスカラ」

「ソレハ、シタクナイ」

……なるほど。

要するにこの瓶に入っている海の意味、審判とやらは、深海棲艦との明確な敵対条件を整えるモノではあるらしい。

だけど。

「何で、そう思う？ 俺も、人間だ……謂わば今が特殊なだけで、敵ではあるんだぞ？」

「アナタト、ウミヲイキタイ。ソウオモワナイノハイナイ。モト、カムスナラナオサラ」

「私タチモ、救イハ求メテイルノデス。ソノ一ツノ形ガ……アナタ」
どういう、ことだろうか。

「モシモアナタガアノ時イタノナラ……ソナ想イハ、イマモナオコノ胸ニアリマス」

「ドウシテイナカツタノ？ ナンテセメナイ、ケド」
「……」

二人が、元誰だったのかはわからない。
けど、その想いはまっすぐに伝わってきた。

どうして、どうしてと。
何で私を救ってくれなかったのと。

それが、とても痛い。

「コンナ姿ニナツテモ、憎悪ニ胸ヲ焼キ尽クサレテモ……アナタガ、ワタシタチノ……ワタシノ提督ニナツテホシイト、願ツテイマス」

「……イヤ？」

……。

もしも、仮に。

俺が最初から深海棲艦側の人間として生まれていたのなら。

きつと、この二人の力になろうとしていただけろう。

間違いない、俺は、この手を、願いを取った。

そして……。

「お前たちは、救われたいのか」

「……ハイ。アノ空母棲姫ヲ、羨マシクモ、オモイマス。全テカラトキ
ハナレテ、海ヘトカエレタ彼女ヲ」

海へと、還る。

そう、それが彼女たちの願いであり救い。

あるいは、自分たちをこうした事に対する人類への復讐の完遂こそ
が救いなのかもしれないが。

どちらにしても、解き放たれることこそが救いなんだろう。

憎しみから、悲しみから。

そうすることが、俺なら出来ると信じていて、求められている。

なるほど、なるほどなあ……。

「そうか、そうだというのなら……」

救おう。

この子達を。

だから、俺は……手に持った瓶を――

AL作戦第一段階のようです

「霞ちゃんっ!!」

「わかってるっ……てのお!!」

霞が放った砲撃はしっかりと戦艦夕級エリートに吸い込まれ、その姿を海に沈める。

本来この海域手前に築き上げられるはずの司令部、他鎮守府による簡易艦隊司令部建設が行われ始めると同時に、第三艦隊は勢いよく出撃した。

通常なら完成を待つてからの出撃。

未完のまま出撃するということは第三艦隊、墓場鎮守府が作戦失敗してしまえばもろとも壊滅してしまうということ。

まさに突撃^{カミカゼ}。

一本の槍が北方海域を貫いていく光景は美しくすら感じられるが、極めて薄い氷の上で舞っていた。

道中に会敵した深海棲艦。

鎧袖一触とはまさにこのことなのだろう。

決して簡単に撃沈させられる相手ではないはずだった敵戦力。

戦艦ル級フラグシップ、重巡ネ級フラグシップ。

旗艦級の深海棲艦を物ともせず、突き進む。

だがその様に霞は大きく肩で呼吸すると共に心を震わされていた。

「休んでる暇はないよっ!! 全速前進! 戦速なんて知らないよっ!

全速だからねっ!!」

「了解!!」

本来なら、ここで間違いなく那珂は休憩を入れていただろう。

状況の把握と作戦の確認。それと共に一旦冷静になる時間を入れていたはずだ。

心の震え。

それはこの艦隊に対しての恐怖なのだろう。

ありえない進軍だった。

状況が整う前から突貫したこともそうだが。

何よりも進軍状況、戦闘光景。

海上護衛作戦で知ったフラワーズの本気は本気ではないとすら思った。

高速戦闘下で行われる砲雷撃戦に加えて、第三艦隊らしい互いを守り合う戦闘。

それにより損傷は極めて軽微でありながらも着々と敵は屠られていく。

ついていくことで精一杯。

いや、第一艦隊の支援がなければ間違いなくついていくことすら出来なかっただろうと霞は感じている。

自身達が出せる最高速度で行われる戦闘。

先程の砲撃とて、あてた自分に驚いても良かった。

奇跡とすら思った、そんな奇跡の上を走り続けていると実感している。

予め決まっていたかのように艦隊の一斉射が同じ対象に吸い込まれていく。

霞自身は何かをしたつもりは無い、自身に出来ることをしただけのつもり。

相手が勝手に自分の砲撃や雷撃に当たりに来ているのではないかとすら錯覚した。

駆逐艦の砲撃、雷撃で難なく、当たり前のように沈む深海棲艦。

それが戦艦であろうと、重巡洋艦であろうと正規空母であろうと。

鬼気迫る、なんて言葉ですら追いつけない。

早く、速く、疾く。

一秒でも、一瞬でも短く提督の下へ。

その想いを槍に纏い海域を貫く。

何か一つでも間違いがあれば、簡単に瓦解してしまう程脆いはずなのに、決して折れる想像がつかない。

だから、怖い。

その間違いが自分であれば、間違いになっってしまうえば。

「大丈夫っ!? ちゃあんと守ってあげるからっ! 安心して頑張っ

てっ！」

「私に借りを返したいならしつかりついてきてよね！」

「ふんっ！ 言われなくなつてそうするわっ！」

強気で返せることはなくなるだろう。

いや、もしかしたらミスを実感した瞬間に、自分で自分を殺してしまいかもしれない。

そう思うのは、かつて見た第三艦隊の戦い方と大きくかけ離れていることもあるだろう。

霞だけに限らず、自らが仕掛けて先の先で相手を圧倒する第三艦隊の姿など誰も見たことがない。

第三艦隊は、守る事を主眼に置いた艦隊。

故に基本は後の先を取る形での戦闘を得意としている。

フラワーズのエース、電にしても相手の砲撃を躲すと同時に砲撃後の隙を討つという形で撃沈を重ねていた。

本来の戦い方を捨ててでも、こうして深海棲艦を沈めていくことが出来るのは、やはり間違いなく提督奪還という意思のおかげだろう。

「霞のおかげで凄く助かってる。だけど無理したらダメだからね？」

「そうなのですっ！ 基本的に私達のフォローをお願いしたいのですっ！」

「……ええっ！ わかってるっ！」

今はこうして無茶ながらも気を遣ってくれる艦隊メンバー。

その優しくも心強い瞳が失望に、失意に塗れた時。

耐えきれぬ自信は霞に無かった。

ひどいプレッシャー。

霞自身提督を救いたいなんて、当たり前前に思っている。

初めて心から認めることが出来た人、これからずっとこの人の下で戦いたいと思えた人。

そんな人を奪われたなんて認めることが出来ないし、再び奪還することへ熱をあげた。

だが、それ以上に。

自身も宿して、理解したからこそ、失敗に恐怖した。

もしも誰かのせいで失敗したら、自分はその人を許すことができるのか。

次があるなんてことはない。

間違いなく、一発勝負。

「すー……はー……」

気付かれないように、大きく深呼吸をする霞。頭に浮かんだ問いをかき消すように。

——あのクズ……絶対、絶対救ってやるっ！

これほど心を痛めた八つ当たりをしてやると強く誓って、新たに出現した深海棲艦を睨みつけた。

「よしっ！」

第三艦隊の突破を支援。

それは主に霞のフォローと周囲警戒にあてられていたが、ここまでは順調。

そう、順調。

間違いなく第三艦隊は天龍の練度から想定される戦果を遥かに越えて進軍を続けられている。

危ない瞬間は確かに存在していたが、それも自分たちがしっかりと支援することでこのまま作戦第一段階は成功するだろう。

「……天龍」

「……なんだ？ 時雨」

問題は、自分が旗艦を務める艦隊。

冷たい目で天龍へと声をかける時雨、その隣には同じ瞳を浮かべた夕立。

「……もう、我慢しなくて良いんだよね？」

「夕立、そろそろ我慢の限界っぽい」

納得は、した。

あの場面、確かに自身達の想いに身を任せて行けば今の光景は無かっただろう。

時雨も夕立も、今第三艦隊が順調に進められているほどの戦果は出

せなかつたと認めている。

故に、納得は結果的。

天龍が作戦を伝えた時は半狂乱になっていたし、そんなの待ってられないと勝手に出撃しようとするらしい。

それを、より高い可能性で提督を奪還できると説き伏せた天龍は……間違いなく称賛されるべきだろう。

もしかしたら、この作戦達成よりも遥かに難しいことだったのかも知れないから。

二人にしても言いたいことはあった。

止めるために仲間を撃った天龍を、龍田を責めるという気持ちもあった。

自分たちがどれほど危険であったかを棚に上げて、それでも誰かを責めなければ自分を保っていられなかった。

だから、もう限界に近い。

ここまで来たのなら後は一人ででも。

そんな風に逸る時雨と夕立を押さえつけるのも。

「まだだ……もうすぐ、予定海域最深部だ。そこを突破すれば、提督が監禁されているだろう海域だから慌てるな」

「つぐ……天龍はっ!!」

「時雨ちゃん?」

「う……ぐ……わかった、よ……!!」

その場を離れ、周囲警戒へと戻る時雨と夕立。

背を見送った龍田の瞳は悲しげに。

「わりい……龍田」

「ううん、いいのよ天龍ちゃん。どっちの気持ちも……わかるから」

落ち着いているかのように見える龍田だが、その実我慢するのは時雨達同様に限界が近かった。

第三艦隊は、自分たちに出来る最大を越えてやっている。

その事実で辛うじて自分を押さえつけていた。

もしも、自分が突破艦隊なら。

そんな妄想が頭をよぎり、その度に振り払う。

第一艦隊は、間違いなく墓場鎮守府最大戦力。

どのような局面であつても、戦果を見ればどの艦隊よりも高いものをあげる。

それは墓場鎮守府艦娘全てが認める所。

だからMI作戦の準備へと向かった、AL作戦に参加していない艦娘達はなんとか我慢できた。

必ず提督を奪還してくれるという信頼があつた。

それでも金剛や長門達の手は震えていたが。

信頼することこそ、墓場鎮守府の強さだと知っているだけに任せた。

そうしてそんな事を理解しているからこそ、龍田は、天龍は必死で自分を保とうとしている。

「辛い、な」

「……うん」

今までのどの作戦よりも辛いと二人は感じている。

敵の戦力は、順調の影に隠れて今までより遥かに強いものだったし、これほどまで作戦外に必死となる戦場を経験したことがなかったから。

天龍とて、叶うのなら作戦を無視して当該海域に突撃したい。

提督を拉致した深海棲艦を痛めつけ、それを許した自身を痛めつけ

……最後に提督から叱られたい。

すまねえと謝りたい、笑って良かったと安心して。

「絶対……成功させるぞ！」

「もちろんよ」

それを叶える。

絶対に、再び幸せを取り戻す。

そうするためにも。

「天龍ちゃん!!」

「おうっ！ きなすったぜ……！ 第一艦隊！ 敵艦隊の背後を脅か

すぞ！ 第三艦隊へこの作戦、最後の支援だ!!」

「了解!!」

現れた戦艦棲姫率いる艦隊へと歩を向けた。

「いい？ 多分あれは戦艦……多分姫ってやつだと思う。遠距離が一番危ない……私達の射程距離に入るまでが勝負だよっ！」

「はいなのですっ！ 絶対……絶対倒すのですっ!!」
会敵。

戦闘距離に入る第三艦隊。

敵艦隊も那珂達を相手取る者として認識したかのように砲を向けると共に距離を詰めてきた。

敵艦構成は、戦艦棲姫を旗艦に、重巡ネ級エリートが二隻、軽巡ツ級二隻と駆逐口級後期型。

突破力を求めて主砲と魚雷、また敵潜水艦への備えとして響と暁は聴音機を装備していた第三艦隊。

そんな那珂達からすれば幸いというべきか空母は見当たらず、対空能力の低さに悩まされる心配はせずに済んだ。

那珂が考えるこの勝負どころ。
それが自身達の射程距離に相手を収めるまで。

速度は十分。

弾薬、燃料に関してもここで使い切っていいというのであれば十分。

射程距離に入るまで、全員が無傷であればまず、負けない、負けるつもりがない。

「ナンドデモ……シズメテ……アゲル」

距離があるはずなのに、聞こえる呪詛の如き声。

姫、鬼クラスの深海棲艦は戦艦棲姫しか見られない、だということにも関わらず。

——シズメ、シズメ。

そんな声が、誘いが大きく響いて聞こえる。

「っ!? 来るわよ！ 皆ー！」

「……不死鳥の名は伊達じゃない。大丈夫」

そんな空気へ負けないように、雷が皆へと声をあげ、響が大丈夫だ

と返す。

艦隊の士気に影響はない。

勝負どころを乗り越えられると確信出来る。

ただそれでも不安があるとすれば。

「敵砲撃っ！ 来るわよっ！」

「——っ!! 全艦防御態勢っ!!」

敵戦艦と重巡洋艦による一斉射。

砲撃音と暁の音が重なり、那珂の指示が通る。

そして。

「つくうううう!!」

弾着。

駆逐艦、軽巡洋艦の砲撃ではまず上がらない勢いの水飛沫。

共に上がったのは苦悶を噛み締めたような霞の声。

「霞ちゃんっ!!」

「だ、大丈夫よっ!! まだまだいけるわっ!!」

庇われそこない霞、中破。

砲塔が曲がっている、片腕が上がらない。

唯一無事なのは機関、速力に関しての艤装のみ。

第三艦隊の特性上、陣形を崩さず、絶えず切り替えての行動。

普段なら良かった、だがあまりにもその息が揃いすぎていた。

霞を、除いて。

「……わかった。足は、大丈夫だね？」

「もちろんっ！ こんなところじゃ終われないわっ！」

「よおっし！ なら、装填が終わる前に——突撃だよっ!!」

「了解っ!!」

第一艦隊が背後を脅かすため一時的に離れたが故生まれた綻びは、

こうして現れた。

それでもいかなければならない。

一つ目の不安。

それが霞が途中でついてこられなくなること。

そして。

「皆、行くよっ！ 全艦、一斉射!!」

「なのですっ!!」

不安要素の的中を塗りつぶす為に声を大きくあげる那珂。
お返しと言わんばかりに放つ砲撃。

敵旗艦、戦艦棲姫を狙ったそれは、狙い通りにまっすぐ飛んでいき。

「着弾確認っ!!」

砲を撃てなくなった霞が弾着を確認する。

同時に敵から放たれた軽巡、駆逐艦による砲撃は回避。

そして物足りない水飛沫から覗いた戦艦棲姫の姿は。

「フッフ……ソノテイド、ナノオ？」

「……くうっ!! まだだよ！ 皆！ 再装填を急いで!!」

二つ目の不安。

火力が足りるかどうか。

再び現れた姿から察する損傷はほぼ無傷に近い、小破にすら至っていないだろう。

捨て置いていた疑問。

何故随伴艦が底う素振りすら見せなかったその理由。

「固すぎる……っー」

「まだよっ！ 積み重ねて行けば……大丈夫っ！」

雷が言う通り、時間をかけて砲撃を集中して戦えばいつかは沈めることが出来るだろう。それは那珂が勝負どころを乗り越えさえすれば必ず勝てるかと判断していた理由でもある。

「……どうする？ 私……！」

焦る必要はない、とは思えない。

そんな時間があると思っていない。

霞は中破してしまった、それはつまり時間をかけて倒すという選択は厳しくなったということ。

本人は自覚がないが、この艦隊、現時点で一番火力が高い、火力を活かしているのは霞だと那珂は気づいている。

故にその霞を活かすように第三艦隊の動きを指揮していた。

その霞が攻撃不可。

加えて、霞を沈めないようにと意識するのであれば、ただでさえ足りない火力を更に削って、誰かを護衛につけなければならぬ。

——一刻も早く提督のもとへ。

その思いが那珂を急かす。

第一艦隊が背後に周り、攻撃可能位置につくまでの時間がどれくらい必要かはわからない。

だが少しでも敵艦隊の戦力を削がなければ効果的な挟撃は望めないだろう。

それに後方で控えている第二艦隊も、第一艦隊の本番もここを突破した後、消耗は可能な限り抑えたい。

故に、敵旗艦である戦艦棲姫から優先目標を変えて随伴艦を沈めるべき。

それは少しでも倒せるものを倒し、消耗を少なくするためにと考えた場合正しい選択。

どうする？ どうすると那珂の思考が混乱しつつあったその時。

「那珂」

「……霞ちゃん？」

決断的な表情を浮かべた霞によって思考を中断させられた。

「私が、あの戦艦棲姫の注意を引くわ」

「っ！ ダメだよっ！ それは絶対ダメ!!」

そう、随伴艦を沈めるための時間、その間誰が戦艦棲姫の攻撃を受け持つか。

もしも霞が中破しておらず、ギリギリとは言え共に行動することが出来たのなら、庇う行動による損傷は見込まれど火力の確保は行えていただろう。

だが、本来の戦い方を捨て、限界ギリギリで行動していたのは第三艦隊全員同じで。

そんな中、中破した霞を庇いながら戦艦棲姫率いる艦隊を相手にするのは、不可能に近い。

「沈まないっての。ウチのルールなんでしょ？ 破るわけ無いでしょに……それが一番なんとかなる可能性が高いだけよ」

ちらりと反応のない自分の主砲へ視線を飛ばしながら霞は言う。
現実的に、冷めた思考で考えて、攻撃に参加できない霞が囿として
は適任ではあった、それは那珂も理解していた。

元より練度を重ね、連携を深めたフラワーズのみで戦いに集中すれ
ば。

ただ、そんな考えが墓場鎮守府において許されるものではないとい
う事が身にしみている。

「未熟な私が言うことじゃ無いけど、良い？　ちよつと冷静になりな
さい」

「っ！」

海上に舞う水飛沫。

高速で動きながら、霞と那珂は並び話す。

「確かに私じゃアイツを一人でなんとか出来るなんて思えない……け
どね」

大きく息を吸う、霞。

恐怖は、あった。

予想通り、自分が穴になってしまった。

悔しいと思う。

自分がこの人達のように強ければなんて、どうしてもっと私は強く
なれていないのかなんて。

だが、こうなっても考えていた失望に塗れた瞳を向けられるという
ことは全く無くて。

「アンタ達が冷静になる時間位、稼いでみせるわ」

「かすみ、ちゃん」

霞の目に映る今の第三艦隊は、かつて憧れたそれじゃないことはわ
かる。

焦りに焦って、盲目的に救うことしか考えられていない。
だから。

「私はルールを守ってみせるわ。だから那珂……ううん、那珂ちゃん
も」

——あなた達らしく、さっさとなって下さい。

かつての鎮守府演習。

その時の、答え。

「霞っ！ 出るわっ!! 見てらんないったらっ!!」

「霞ちゃんっ!!」

静止しようとする那珂を振り切り、戦艦棲姫の前へと踊り進む。

「司令官……暁……皆……」

自由なもう片手を胸に。

「預けたままの借り……今、返してみせるからっ!!」

霞が突撃するようです

戦艦棲姫に向けて、勢いよく突撃する一隻の駆逐艦。

ニヤリと笑って迎えた戦艦棲姫は何かを合図するまでもなく、砲口をそれに向け、随伴艦もまたそれに倣う。

「来るならっ……来なさいっ!!」

動かない腕、反応しない主砲。

それでも出来ることはあると目をギラつかせ突貫する霞。

その姿は呆気もなく簡単に捉えられ。

砲撃音に、包まれる。

「やらせないったらっ!!」

至近弾。

唯一意のままに動く足はその魔弾から逃れることを許した。

損傷はある、大破と言える姿で霞の命を残す。

同時に。

「ナン、ダト……っ?」

戦艦棲姫の隣で沈む重巡ネ級。

慌ててその先を見れば。

「やらせない……っ!!」

別れた第三艦隊が主砲を構えていた。

そうして戦艦棲姫は察した。

霞を生贄に自分たちを倒すという意図を。

「フフ……アハハッ! ソウ、ソウネ! シズメナイトネツ!!」

笑えた理由はわからない。

必死とも取れる表情で向かってくる霞を滑稽に思ったのか。

それともそんな決断をしたことに対して嘲笑したのか。

「ノゾミドオリ……シズメテ、アゲルツ!!」

ただ、見るものが見れば、戦艦棲姫の目から流れる何かに気づいただろう。

雫の理由は本人にすら分かっていない。

今この場で想うは沈めるという救済。

そしてそうさせた人間への復讐。

故に向かつてくる霞を真に受け入れた。

視界の端に映る第三艦隊が随伴艦に向かつていく光景を流して。

まずは向かつてくる哀れな駆逐艦を私と同じにしてやろうと心に決めた。

「お生憎様っ！ 私は、こんなところで沈む気はないのよっ!!」

先程の至近弾で、魚雷すら発射は不能となった。

最早本当に霞は、動くことしか出来ない。すなわち、ただの的ではない。

沈むのは時間の問題。

既に命を刈り取る死神の鎌は霞の喉元に添えられていて、少しでも動き方を違えれば容易にその首を切り裂く。

戦艦棲姫の砲撃が放たれるごとに、一枚。

霞が苦悶の表情を浮かべること、一枚。

薄皮が弄ばれるように割かれていく。

それでもなお、霞の瞳に絶望はない。

何故ならようやく今この時、霞は理解したから。

「沈む気が、しないわっ!!」

海上護衛作戦で見た、第三艦隊の力、その姿。

苛烈な攻撃の中に居ても、絶対に沈まなまいと思わされたその理由。

「私は……心の底から、信じてるっ!!」

誰かの想いに応えようとすれば、誰かが自分に応えてくれる。

ならば自分は、仲間を信じて応えるのみ。

今、軽巡ツ級が一隻沈んだ。

随伴艦を一刻も早く撃沈し、霞を救えと必死になっている第三艦隊。

霞の突撃を見て、冷静になったとは言えない。

ただ、自分たちの本領発揮は守ること、活かすこと。

皮肉、というべきかもしれない。

霞がこうして単独行動をして、いつもの形に立ち戻り、そうしてようやく気づいた、取り戻した本来の形によって力を十全に発揮できた

のは。

だが霞はようやく実感出来た。

不幸中の幸いか、火中に栗を拾ったのか。

仲間は、必ず自分を守ってくれる。

そして自分が仲間を守っている。

天覧演習に選ばれなかった理由。

選ばれた朝潮との違い。

提督に直接聞いても教えてもらえなかったそれ。

依存じゃない、システムでもない。

ただあるのは生きる、生きたい、生かせたいという願い。

だから、その境地に辿り着いた。

——つたく、ひねくれ者もここまで来ると芸術よね。

「ええ、そう思うわ」

——それに、あの人達も、見てらんないわよね。

「全く、これじゃあ先輩だって素直に尊敬できないわよ」

——尊敬して行くせに。

「うるさいわね、尊敬したいのよ」

——それは、あのクズも？

「……違うわ」

——はあ、良いから本音を言いなさいな、そんな余裕、ないって知ってるでしょ？

「違うったら！　だってもう——」

——だったら、わかってるわよね？

「——もちろんっ!!」

「霞——改っ!!」

「……フッフ、ソウカ、ソウナノネツ!!」

一瞬放たれた眩い光。

その中から放たれた砲弾が戦艦棲姫に直撃する。

現れた霞の姿は無傷。

大破の時から瞳に宿していた光はそのままに。

「……みじめよねっ！」

再度放たれる霞の砲撃。

共に出た言葉は誰に向けてか。

「あのクズが居なきや……何も出来ないなんてっ!!」

難なく受け止めた戦艦棲姫は笑みを浮かべたまま霞に狙いをつける。

「——甘いったらっ!!」

「アハハ！ シズメ、シズメエ!!」

完璧な回避。

霞に損傷は見られない。

戦艦棲姫は、嬉しかった。

今相対している哀れな駆逐艦も、随伴艦の相手をしている艦娘達も。

あの提督によって救われた、力を発揮できるようになった。

そう理解できた、理解を深めた。

それすなわち、彼が自分たちのモノになれば、自分たちも救われるだろうということ。

幸せとすら思った。

万が一、艦娘に討たれることになったとしても。

彼が自分たちと共に歩んでくれることになっても、そのどちらにしても。

この言いようもない憎しみから、悲しみから解き放たれる。

胸に渦巻くどす黒い怨念めいた想い。

それが、この海に溶けてなくなるだろうと。

そんな、確信。

何処に向かうにしても、きつと、深海棲艦は、艦娘は。

幸せに海へと還ることが出来る。

「ダケド……!!」

「きゃっ!? 嘘でしょ……!!」

人類を、滅ぼす。

自身をこうさせた、人間を討つ。

それが、深海棲艦。

艦娘と深海棲艦はコインの裏表。

それだけに決して相容れない、交わらない。

もしも、深海棲艦が艦娘に出来ることがあるとするならば。

「シズメテ……アゲルツ!!」

沈めること。

そして絶望の中で、深海棲艦へと誘うこと。

そうすることしか出来ない。

今更、提督を除いた人類と肩を並べるなんて出来ない。

想いが、身体が、海の意味がそうさせない。

だから、戦う。

私怨はない、悲哀もないままに、艦娘へと矛を向ける。

ただただ、人類に終焉を、そのために。

復讐か、それともただ刷り込まれた命令に従っているだけなのか。

こうして霞と相対してから、戦艦棲姫はそれがわからなくなった。

砲撃が、飛び交う。

あやふやなまま絡み合う放物線。

何度も戦艦棲姫の身体を叩く霞の砲撃。

それでも一向に損傷は深められず、良くて小破程度。

対する霞は既に中破。

いよいよをもって脚部艤装に損傷をこしらえた。

「つく……!!」

「ヨク、ヤッタ」

戦艦棲姫、心からの称賛。

随伴艦は残り重巡ネ級と駆逐口級。

それだけの戦力を撃破する時間を霞は稼いだ。

フラワーズに対しても同等の称賛を送りたい気持ちはあれど、やはり

可能にしたのは霞。

「はっ……!」 嫌味にしか聞こえないわね」

「ザンネン、ネ」

足元から上がる黒煙が霞の目を掠める。

されど意識に捉える事なく、ゆつくりと腕をあげ、照準を合わせる。同じく戦艦棲姫も、全ての表情を消し、目の前の命を見送る決意を固めた。

まるで鏡写し。

姿形全てが違うのにも関わらず、照準をあわせ合う。

海には砲撃音が未だ響く中、この二人だけが切り離されたかのように。

どんっ。

切り取られた世界の中、二つの轟音が響いた。

「霞いいいいいいー！」

遅かった、間に合わなかった。

そんな言葉が頭を駆け巡る。

背後へと挟撃を仕掛けるため回り込んでいた第一艦隊。

その進路を防ぐ可能ように展開されていた敵艦隊を夕立と時雨に任せて、ようやく天龍と龍田が位置についた時。

天龍が見た光景は霞の身体に戦艦棲姫が放った砲弾が直撃した光景。

「オレは……オレは……っ!!」

守れなかった。

守れたはずだった。

フラワーズが、第一艦隊が、もしも普通通りなら。

間違はなく霞が一人突撃するなんて場面にはならなかったし、なつたとしても第一艦隊は間に合った。

戦艦の、戦艦棲姫の主砲。

それは駆逐艦一隻を葬るには十分すぎる一撃で。

跡形も無いだろう、霞の姿は。

粉々にならまだ良い。間違はなく、消し飛んだと思わせる威力。

「フッフ……アハ、アハハハハハ!!」

笑い声、嘲笑い声が響く。

これで霞という存在は消えた。

彼女は妖精となるのか、それとも深海棲艦か。

そんな事を、涙を流すとともに考える戦艦棲姫。

天龍自身、自分は提督にどんな顔をして会いに行けばいいかわからなくなってしまうた。

謝罪の言葉なんて思い浮かばない、ただただあるのは絶望のみ。
だから。

「天龍ちゃんっ!!」

「あ……え……!?!」

爆炎が晴れた時、そこに大破姿で両腕をだらりと下げながらも、未だ力強い瞳を戦艦棲姫に向け続ける霞の姿が信じられなかった。

「な、ん……?」

「何でもいいわっ!! 天龍ちゃん!! 行くわよっ!!」

龍田の声。

その言葉で、一気に意識が覚醒した。

——なんでもいい、まだ、沈んでいない。

「行くぞっ!!」

「ええっ!!」

守る、すなわち戦艦棲姫を撃破する。

考えられるのは、もう、それだけ。

「アリ……エナイ……」

霞の姿を見て呆然としているは戦艦棲姫。

完璧な手応えだった。

十分すぎる、確実に屠ったと思えるそれだった。

「ま、だ……やれ、る……わ」

一步。

おぼつかない足が海面を捉えた。

ボロボロの姿、間違いなく虫の息。

だと言うのに、霞の一步に対して戦艦棲姫は一步退いた。

戦意は少しも衰えていない。

ただただ、霞は仲間に応えたいという一心のみ。
心を踏み出す力に変えて。

ゆっくり、ゆっくりと確実に距離を縮める。

「シ、ズメ……」

震えながら、戦艦棲姫は腕を振り上げ――。

「シズメエエエエエエエエエエエエ!」

下ろすと共に、主砲を放つ。

向かった砲弾は、海面を強かに。水飛沫が霞の頬を叩く。

当たらない。

「は、は……まったく、クズの、くせに……」

そう呟いて、魚雷を一本。

手にとった。

「コ、コンナ――キヤツ!」

「てめえええええええええ!!」

震えていたのは腕だけじゃなく、身体も。

避けるに値しない攻撃であっても、そうじゃないとしても、この魚

雷は避けられなかっただろう。

だがその魚雷の衝撃とは違うモノが戦艦棲姫の身体を襲った。

「後悔……させてあげるっ!!」

「グウツ!」

天龍の二連砲撃に続いたのは龍田の魚雷。

その全てが一寸の乱れもなく戦艦棲姫に吸い込まれる。

「コ、コノオオオオオオ!!」

混乱。

戦艦棲姫はその渦の中にいた。

何故、霞は生きているのか。

何故、たかが軽巡洋艦の攻撃で手痛い損傷を受けているのか。

何故、何故、何故。

疑問が浮かび、生まれ、頭を埋め尽くす。

それでも、闘争本能に従い、天龍達へと勢いよく振り向こうとすれ
ば。

「……エ？」

今、この場にいる深海棲艦は、自分だけという事がわかった。

「——間に合った、よ」

流れそうになった光景には、沈みゆく戦艦棲姫の随伴艦。

そして、自身に向けられる砲口、魚雷、闘志。

動きを止めてしまったのは、きつと疑問という茨に絡め取られてしまったから。

「——主砲、一斉射!! 魚雷もありったけ食らわせてやれええええええ!!」

「了解っ!!」

天龍の号令と共に、轟音が、水をかき分ける音が重なる。

重なった音色は戦艦棲姫の挙げる苦痛の声をかき消して、次々と襲いかかる。

「コノ……!!」

振り払った姿は紛れもなく深刻な損傷を刻んていて。

あと、一撃。

誰のどんな攻撃があたったとしても、その身を海へと還すだろう。

「これで……とどめよっ!!」

だから、弱々しくも放たれた霞の魚雷。

まっすぐ、まっすぐ海を突き進み——

「ニドト……シズマナイトテ、キめた……のに……でも……」

戦艦棲姫の姿を光の粒と変えた。

AL作戦第二段階のようです

霞に駆け寄ったフラワーズと天龍に龍田。

紛れもなく轟沈一步手前の霞は那珂の腕へと崩れかかり、意識を失った。

「ごめんね……！……ごめんね……！」

口から出るのは謝罪の言葉、そして胸に溢れるのは何の気持ちだろうか。

霞の献身とも無謀とも言うべき行為は那珂率いる第三艦隊に理性的な心呼び戻した。

困む暁達六駆にしても、謝れば良いのか、それともありがとうと言わねば判断がつかず曖昧な表情を浮かべている。

ただそれでも一つ言えることが暁にはあった。

「借り、ちゃんと返してもらったわ……お釣りはあなたを無事に連れて帰るってことで許してね」

那珂へと目配せをして、暁が霞の身体を支える。

一人では少し身に余るその態勢を、ちよūdいんだからと強がりながら、絶対無事にと目には強い意思を浮かべて。

「天龍さん」

「ああ、よくやってくれたよ……第三艦隊は時期に来るだろう後詰の艦隊が来れば撤退、それまでオレ達が周囲警戒にあたる」

「うん、ごめんね？ 急ぎたいのに」

那珂の謝罪に首を振る天龍。

実際、戦艦棲姫を倒すために消費した弾薬は多く、この先を考えるのと心許ない。

後詰艦隊を待つて補給作業を終える必要があった。

「どのみちこの周辺の確保は必要だったんだ、この先は第二艦隊が先行して突破口を開けなきゃオレ達は動けねえしな」

「そっか……じゃあ、お願いするね？」

任せろと頷き、天龍と龍田はその場を離れる。

その姿を見送った那珂達の下へとやってきたのは鳳翔率いる第二

艦隊。

「……お疲れ様でした、無事のようで何よりです」

「鳳翔さん……うん、霞ちゃんが、がんばってくれたよ」

那珂の言葉に頷き、優しく暁に抱えられる霞の頭を撫でる鳳翔。

そんな光景を穏やかに……いや、穏やかすぎる位静かに優しく見つめるのは古鷹と加古に大淀。

「鳳翔さん」

「なんででしょう?」

「私……見失っちゃったんだ。その結果が霞ちゃんの轟沈一步手前って
いうこの惨状。だから、ね?」

ミスをした、過失だった。

そんな認識が那珂の心に、フラワーズの心にはある。

ただ、予め理解していてなおそうなった原因の気持ちを抑えられた
かはわからない。

それでも、今の状態が間違いなく防げたものでもっとよりよい結果
が生まれていただろうということだけは理解できる。

もしも、普段どおりの出撃なら。提督が執る指揮の下戦えていたの
なら。

苦戦はしただろう、危険もあっただろう。

だが間違いなく今よりもっと良い結果になっていたと那珂は思
う。

提督という存在。

海で戦う艦娘を指揮する人物。

その存在の大きさが想像以上に実感として理解できた。

「難しいけど、鳳翔さん達はいつもどおり戦って? 第一艦隊の皆に
は……ちよつと、言えないから。鳳翔さん達は、絶対」

指揮の内容が具体的にどう違うのかなんて言葉にできない。

いつもどおり戦えなかったことでいつもどおりとは違う結果が出
た、出るだろうという想像だけが容易に出来る。

そんな那珂が口にした言葉。

「はい……ありがとうございます。出来るなら、そう……したいと思

います」

「……うん」

鳳翔は少し困ったように笑って頷いた。

那珂の言わんとしていることを理解できた、だがそれでなお抑えられるかどうか自問して、わからないと答えを出した。

第二艦隊は泊地強襲という役割。

強襲し、第一艦隊が提督搜索中敵の相手をし、奪還後そのまま泊地壊滅を目的としている。

それはつまり、十中八九提督拉致の主犯格と相対するということ
で。

その相手を前にして、冷静でいられるかどうかの確約は無かった。

よしんば鳳翔が冷静であれたとしても。

古鷹と加古。

二人は出撃してから一言も声を出していない。

ただひたすら暴れそうになる心を抑えることに集中しているのか、時折胸を抑えて深呼吸をするその姿は今にも破裂しそうな風船にも思えて。

そんな二人を見ているだけで摩耶と神通の頬に汗が伝う。

第三艦隊とはまた違った雰囲気の中、AL作戦第二段階開始が近づいていた。

第三艦隊と第二艦隊のやり取りを背に、深海棲艦……戦艦棲姫の援軍としてやってきた艦隊を前にしているのは時雨と夕立。

深海棲艦は動かない、いや、動けないでいた。

「……」

静かに、自分たちへと視線を投げかける時雨の姿に。

「……」

もう来ないのかと挑発的にも関わらず、冷えた視線で睨みつけ続ける夕立に。

二人が放つ、あまりにも濃密すぎる殺意を前に、動けない。

四つの目が言っている。

射程距離に入れば沈めると。

故に、こうして駆逐艦の射程距離に入らない位置から散発的に砲撃をするだけ。

それも、しなければならぬという深海棲艦の本能に辛うじてしがみつくように。

そして当然そんな砲撃はかすりすらしなかった。

合流を防ぐように立つ二隻の駆逐艦。

当然ではあるが、会敵した瞬間は攻撃しようと試みた。

正確には、試みる意思はあった。

会敵した瞬間、旗艦である重巡り級フラグシップは前に進もうとする意思とは裏腹に足を止めた。

普通じゃあないと、危険を感じて。

もしも深海棲艦達が言葉を交わしながら艦隊行動をしているのであれば、足を止めたり級に対して何らかの罵声を浴びせていただろう。随伴艦の駆逐イ級と軽巡ホ級。

もしも。そう、もしも、その言葉に対して慎重に行こうと声をかけられていたのならば。

時雨と夕立の射程距離に入った瞬間轟沈などしなかつただろう。

駆逐艦。

そのはず。

そのはずの二人は、ありえない火力……いや、理解できない何かでイ級とホ級を撃沈した。

辛うじてり級が理解できたのは、時雨と夕立がそれぞれ別の対象に向かつて魚雷を撃った、ということだけ。

気づけば、二人の砲撃が直撃していて、決まっていたかのように魚雷が吸い込まれた。

故に、り級達の足を止めているのは恐怖。

深海棲艦の本能に隠れて気づけない恐怖そのものに足を絡め取られている。

——ニゲタイ。

それはり級だけじゃないだろう随伴艦も。

一刻も早くこの場から立ち去りたい、生きたい。海はずつと続いているはずなのに、一步先にあるのは断崖絶壁、死への崩落口。

そんな錯覚すら覚えた。

だから戦艦棲姫が沈んだ時、助かったと思った。

これで戦わないで済む、そうとすら思った。

あの提督を奪われてはならない。

そう思っていたはずなのに。

あの提督の下で力を振るいたい。

そう思っていたはずなのに。

その思いは時雨と夕立が放つ殺意のカーテンによって容易く覆い被さられ感じられなくなってしまった。

「——もつたないよ」

「……うん」

踵を返した艦隊に対して踏み出そうとした夕立に時雨が一言、それで身体のを抜いた夕立。

それでも視線を外さない夕立に時雨はため息を一つ。

ちらりと横目で第三艦隊の方を伺えば、別鎮守府の後詰艦隊と入れ替わるように海域から離脱していく姿が見えた。

安心は、している。

誰も沈まなくて良かった、提督を悲しませずに済んだ。

当然、時雨も夕立もそう思っている。

ただそれ以上に一刻も早く提督を助きたい。

その思いが強すぎてそう思っているようには見えなくなっているだけ。

「ふたりともー？ 補給物資が届いたよー、補給しましょう？」

「龍田……」

「……」

だから実際の所第一艦隊内に確執は生まれてはいない。

ただ、それをそうと示すことが出来ないだけ。

正しくお互いのことが見えなくなっているだけに過ぎない。

そして。

「龍田さん」

「何かなー？ 夕立ちちゃん」

「夕立、もう我慢しなくていいっぽい？」

古鷹と加古が強い感情を詰め込んだ風船なら、夕立は危険を詰め込んだ爆弾。

いつもの明るく無邪気な夕立から想像もできない位に静かで鋭い。そんな様を見ているからこそ、余計に互いの理解が及ばなくなっていた。

「……補給が終わって、作戦開始したら、ね？」

「……わかったっぽい」

それでも龍田が天龍のよき理解者であるように、時雨もまた夕立のよき理解者で。

危うすぎる夕立の状態をはつきり理解しているとすれば時雨のみに他ならない。

普段なら危ない夕立を嗜めるとすれば提督か時雨で。

その片方は今居ない、そして。

「僕も……そろそろ、限界、かな？」

夕立以上に静かに、密かにその導火線を縮めている時雨にそんな言葉は浮かばなかった。

補給をしている第一艦隊に先立ち、第二艦隊が出撃した。

今回の主眼は港湾基地強襲、すなわち泊地攻略。

対陸に重きを据えるため、大淀は二基陸軍より接收したWG42――ロケットランチャーを装備した。

また、古鷹が三式弾、加古に徹甲弾と余念もない。

「す、げえ……」

「はい……」

また、鳳翔が改に至ったことにより今まで二種の艦載機しか搭載できなかったが、三種目。艦戦機を搭載することが可能になり、制空権の維持、確保が可能となった。

それにより古鷹、加古は大淀の偵察機に頼ることなく自前の偵察機により弾着観測射撃を行えるようになり、大淀もまた相手の砲弾撃墜に集中することが出来る。

初めてその戦いを同じ艦隊として体験した摩耶と神通。

二人は驚きに目を見開いていた。

翔鶴、瑞鶴の艦載機運用は何度も近くで見してきた二人だが、全くもってそれとは別種。

美しいとすら思える鳳翔の射出、艦載機を指揮する力。

摩耶の対空射撃等必要なかと思ってしまう位、相手の艦載機を艦戦機が撃墜し、後に控える攻撃機、爆撃機が正確に敵艦隊へと襲いかかる。

その攻撃から逃れられたと思えば古鷹と加古の弾着観測射撃。

無慈悲に、逃れたことを許さず確実に撃沈へ追い込む。

挙げ句遮二無二撃ち返したところでその砲撃を落とす大淀の存在。完璧。

摩耶と神通がこの場にいる必要性を見失ってしまうほどに、第二艦隊の艦隊行動は完璧すぎた。

一切の被害を、損傷を出さずに進軍し続けるこの姿。

かつて夢物語として思い浮かべた自分たちの姿そのもので。

決して届き得ない姿ではないと心を震わせながら。

恐怖で身体を震わせた。

「摩耶さん、神通さん」

「お、おう！」

「はい！」

冷たく、冷静に。

機械のように正確に、言葉も必要とせず、ただただ敵を撃沈せしめる。

「お二人の役目は敵本丸に辿り着いてからです……気を引き締めて、集中力を切らすことのないように注意してくださいね」

「わ、わかったぜ！ 摩耶様にまっかせとけ！」

「は、はい！ 了解しました！」

夢で描いた自分の姿はこうだっただろうか。
憧れた墓場鎮守府とはこうだっただろうか。

二つの疑問。

その二つ、両方に首を振ることが出来た。

理解できてはいない。

それでもこうじゃない、こうじゃないはずだという思いが胸でしこりとなる。

確かに那珂の言った通り、いつもどおりの戦い方。

艦隊運用をシステムの極めた形こそが第二艦隊の武器。

第一艦隊のように奇抜な行動でもなく、第三艦隊のように守り合い戦う形でもない。

華々しくなくとも確実に、それでいて大きな戦果を上げる戦い方。

それに、違いはない。

摩耶と神通に不安はない。

確実に港湾基地強襲は成功するだろう。

相手をかawaiiそうにすら思える。

この艦隊を相手にして、誰がその身を海で浮かべ続けることが出来るのだろうか。

先程まで相手をしていた敵艦隊とて弱い等とても言えない。

それすらも無傷で勝利した艦隊だから。

そう、不安はない。

だが、それ以上に胸のしこりは恐怖を訴えかける。

霞のように自身の失敗に怯えるわけでもない、仮に失敗したとて成果に変わりはないだろう。

「ああ、そうか……そういうことか」

「摩耶さん……？」

自身が失敗したところで結果に変わりはない。

そこまで考えた時、摩耶は胸に宿る恐怖の正体に気づいた。

「わかったよ、神通。あたしが怖いって思ってる理由が」

「……摩耶さんも、怖いと書いていましたか」

神通の言葉に頷く摩耶。

神通も感じていた恐怖の種、だから続きを促した。

「あたしが居ても居なくても同じだから怖いんだ。あたしが何もしなくともこの作戦は成功する、そう思えることが怖い」

「……居ても、居なくても？」

万が一にもありえないとわかっている。

自分が危機に陥っても気づかれないなんて。

だから見殺しにされると言った恐怖じゃない。

「意味がないんだよ、ここに居るって言うのに」

鳳翔が言った本番は後にあるといった言葉。

その言葉に摩耶が言うような意図は無い。

真実そこで力を発揮してもらうことでより確実な勝利への道筋が

鳳翔の頭には浮かんでいる。

ただ、それを伝える、理解し合うという余裕とも言うべきものが無い。

「ちくしょう……っ！ このままじゃ……終われねえぞっ……」

同じように。

第三艦隊と、同じように。

提督が居ないという弊害は、こうして現れたまま。

「っ!! 目標発見！ 皆さん！ 戦闘準備っ!!」

「了解っ！」

港湾棲姫待ち受ける泊地へと辿り着いた。

提督奪還のようです

目と鼻の先。

墓場鎮守府第二艦隊をその位置にして、港湾棲姫は瞑目している。

「ヤハリ、我々ト共ニ征クトイウノハ……」

「……ワカリマセン」

そんな彼女に向かって残念そうに声をかけるのは防空棲姫。

言葉を話すことが出来る深海棲艦はこの場に二人。

そしてあの提督が海の審判に臨んだという事実は各鬼、姫級の深海棲艦には周知されている。

深海棲艦とともに人類へと終焉を刻む。

確かに提督は人間。

だから自分たち深海棲艦とは相容れない存在。

ならばこの結末は当然とも言える。

だが、それでも惜しいのだ。諦めきれないのだ。

港湾棲姫が、北方棲姫が言ったように、何故あの時あなたは居なかったんだ。

その思いは鬼、姫級の心にしかとある。もしかしたら言葉を話せない深海棲艦達すらそういった想いを抱えているかもしれない。

こんな姿になっても、目的が百八十度変わったとしても。

彼と共に海を征く。

そんな夢物語を夢と割り切れないほどに。

「ワカラナイ、トハ？」

「アノ人ハ……イエ、アノ人モマタ、捨テキレナイノデシヨウ」

飲む間際に言われた言葉、約束。

——俺は、皆を救うよ。

あてもない、確証もない。

ただ希望しかない約束。

提督は、そう言つて瓶の液体を飲み干し、倒れた。

今は部屋で眠っている彼を想い、港湾棲姫は心を温める。

審判に挑んだ。

それはつまり、このまま再び目を開ける可能性は限りなく低い。それはつまり、再び目を覚まして今度も敵として相まみえる。そうと分かっているのに、分かっているはずなのに。

何故、心が温かいのだろうか。

深海棲艦となつてから初めて如来した温もり。

それがどうかこの胸から離れていきませんかようにと、手を当てる。

「ドチラニシテモ」

「エエ、彼ヲ渡スワケニハイキマセン」

このまま彼が死の道を進んだのなら、責任を自分たちが持ちたいし、再び動くというのなら自分たちが始末をしたい。

そう。

どういう形になつたとしても、提督を再び人類へ返すつもりは欠片もなかった。

正面を港湾棲姫率いる、防空棲姫、戦艦夕級フラグシップ、重巡ネ級フラグシップ、駆逐ハ級フラグシップ二隻で守り。

提督奪還艦隊が来るだろう裏には北方棲姫率いる、浮遊要塞、魚雷艇、沿岸砲台に駆逐ハ級。

盤石と言つていい構え。

奪い返せるものならやってみろと言わんばかり。

瞑目された目から蒼い光がうつすらと奔り。

「サア……オヤスミノジカンヨ」

戦意と共に、港湾棲姫は艦載機を発艦させた。

「摩耶さんっ!!」

「おうっ! まっかせとけえ!!」

発艦された艦載機と思わしき物体。

その群れに摩耶は高射砲を斉射する。

「神通さんっ!」

「はいっ!」

それでも取り逃した艦載機を相手にするのは神通。

第二艦隊の主力を守るように精密な射撃により驚異を減らしてい

く。

鳳翔はまだ艦載機を発艦していない。

リスクは承知で指揮を取り、この相手の先制航空攻撃を躲した後。

「風……よし、角度……よし……!! 全艦載機!! 行ってください!!」

「鎧袖一触よ」

「艦載機の皆さん、用意は良い?」

鳳翔の言葉に従い、雄々しく飛び立つ赤城、加賀妖精。

「古鷹さん、加古さんは続いて下さい!! 相手の攻撃は私なんか
しますっ!!」

「はいっ! お願いしますっ!!」

「任せたよっ!! ……さあて、いっくぞおおお!!」

艦載機に続き加古と古鷹が突撃する。

制空権は、五分……いや、辛うじてやや優勢か。

加賀が乗る戦闘機の動きは本来数の上で負けているにも関わらず
冴え渡っている。

そうして開いた航空路を赤城が乗る爆撃機が疾走り。

「直上!! 急降下!!」

狙いは、護衛艦。

重巡ネ級へ定め、爆弾を落とし、攻撃機の魚雷が駆逐艦へと発射さ
れる。

「逃さないって!!」

「よおく狙って!!」

回避運動は——間に合わない。

よしんば出来たとしても古鷹と加古の砲撃により沈められる。

そう確信出来るほど逃げ道が無かった。

重巡ネ級中破、駆逐八級一隻大破、一隻撃沈。

「よしっ!!」

ファーストコンタクトとしては最高の出来。

こちらの損傷はないのにも関わらず、一気に相手戦力を削ることが
出来た。

戦果確認とともに鳳翔の下へと戻っていく艦載機。

「このまま……っ!?!」

「古鷹っ!!」

その場に残り、再突撃の構えを見せた古鷹へと発射される魚雷、それは。

「攻撃機……っ!?!」

「ウフフ……ナニモ、ワカッテナイノネ」

港湾棲姫は、空母に非ず。

大量の艦載機を抱えた飛行場。

だというのにも関わらず、制空権を得ることができたその理由とは。

「つくー！ 分割して……!?!」

「古鷹！ 一旦戻ろうっ!?!」

古鷹、小破。

再発艦ではない、続けて発艦された攻撃機により小破させられた古鷹を守りながら加古は隊へと戻る。

振り返ってみれば妖しく笑う港湾棲姫と、新たに隊へと合流したらしい無傷の重巡ネ級と駆逐八級。

港湾基地。

それは深海棲艦の鎮守府とも言える。

ならば控えている存在がいるのも当たり前だし、艦載機にしてもそうだろう。

「大丈夫ですか？ 古鷹さん」

「うん、傷は大したこと無いよ。だけど……」

下がっていく古鷹達へと戦艦夕級の砲撃が向けられたがそれを撃墜しながら大淀は古鷹を気遣う。

悔しげに顔を歪ませながらも応える余裕は失われていない古鷹。

そんな光景を見て、鳳翔は一つ息を呑んだ。

「……厳しい、ですな」

厳しい。

港湾棲姫以外だけなら撃沈することに対して難しさは感じない。

事実、基地の戦闘機全てを発艦させられたのならば話は別だろう

が、先程の規模程度なら渡り合えるだろう。

相手に防空棲姫がいるとはいえ、損傷を与えられてはいる。だが、撃沈したところですのですぐに戦力が補充されるのなら、間違いなくジリ貧になることが見えている。

どれほどの戦力を抱えているか想像はつかないが、こちらの弾薬や燃料が尽きる方が早いのは目に見えていた。

つまり。

「護衛艦を無視して港湾棲姫に突撃しよう」

加古の言う通り、その手段しか取れる方法が無かった。

「それは……！」

反対しなければならぬ。

鳳翔とてそれしか手段が今の所思いつかない。

いや、あるとすれば第一艦隊が提督奪還成功するまでの時間稼ぎを目的とした耐久戦へと臨むというものもあるだろう。

しかし。

「そうだね、摩耶さん、神通さん。私達と一緒に突撃して艦載機の相手をお願いできるかな？」

「ああ！ 任せろ！」

「はい！ 神通、全力を尽くします！」

今ここで港湾棲姫を打倒する。

その意識に囚われている古鷹達にそれを説明したところで、理解を得られるだろうか。

何よりも。

「そうですね……なら、大淀さんと私は突撃の援護にまわりますよう」「了解です！」

旗艦である鳳翔自身、その思考を打倒に染めていたから。

そんな選択肢を思い浮かべられたとしても、却下してしまっていただろう。

そこに提督がいる。

それを前にして。

やはり、冷静でいられなかったから。

「カエレッ！」

冷静ではいられなかったのは第一艦隊とて同じ。

「邪魔っぽい!!」

「邪魔だよ」

いや、少し違う。

冷静であろうとすらしなかった。

第二艦隊が会敵したのを見送り、別箇所から攻め上がった第一艦隊。

敵影が見えた瞬間、いとも簡単に胸の内を爆発させた。

二隻の駆逐艦は目の色を変えて突撃したし、二隻の軽巡洋艦は胸を殺意に染めた。

「提督を……返してっ!!」

「てめえら……二度と海を征けるなんて思うなあ!!」

荒れ狂う嵐のようだった。

浮遊要塞はその嵐に巻き込まれすぐに墜ち、魚雷艇、砲塔から放たれる攻撃の一切が誰も居ない海を進んだ。

新たに基地より出撃する敵駆逐艦は海の感触と沈む感触を同時に味わい続けた。

そんな中、北方棲姫だけが唯一戦闘と言える行動を取っていた。

「グ……!・ソソナノ、キカナイ!!」

「どくっぽい!! どけ! どけえええええ!!」

「さっさと沈んでよね!! 提督が……提督が待ってるんだからっ!!」

艦載機を飛ばしては天龍と龍田に撃墜される。

砲台小鬼は相手が対陸地装備ではないという理由だけで辛うじて生き残っている有様。

それでも、戦うことをやめない北方棲姫。

「ズルイ……! テイトク、オイテケッ!!」

「知らないっ!! 早く提督を……返しなさい!!」

渡さない、返さないと。

基地にある艦載機の消耗は激しい。

あまりにも苛烈すぎる第一艦隊の攻撃。
誰もが一切の損傷をせず、強く強く敵を圧倒する。
ただただひたすらに提督の理想を描く艦隊行動。
極まった第一艦隊。

もしも。

もしもこの戦いを何も知らない者が見たとするならば、どちらが悪役なのか理解できなかつただろう。

容赦のない攻撃に必死で対抗しようとする北方棲姫。

歯を食いしばってなんとかしようかと奮戦する姿を沈めようと攻撃し続ける天龍達。

事実、北方棲姫は相対した瞬間に敗北を悟った。

勝てない。

それは揺るぎない結果だと理解した。

それでも。

「ワタシダツテ……！ テイトクト……！！」

かつては叶わなかつたその想い。

過去、自分がどのような扱いをされたのかは覚えていない。

それでも、提督と一緒に頑張った、何かを成し遂げたという想いは無い。

それどころか今こうして深海棲艦として生きている。

生まれた瞬間から憎悪に身を焦がしている。

ならば結局そういうことなのだろう。

今、こうして熱望している提督との軌跡。

それを手に入れるために、北方棲姫は敵わない相手へと牙を剥く。
ただただ提督と海を征く。

その夢を手に入れるために。

「オラー！ もう終わりかあ?! だったら早くそこをどけえ!!」

「グ、ウ……!」

それでも現実には残酷で。

かつての覚えていない自分をなぞるようで。

一つ一つの砲弾が、魚雷が、その夢を削り取っていくようで。

「ワタシ……ワタシハ……テイトク、ト……」

「これで終わりっばい!!」

夕立の主砲が、北方棲姫を捉えた。

ボロボロの身体越しに見たその砲口は、確かに自分を沈めると理解した時。

「夕立っ!!」

「っ!」

夕立に向けて攻撃機が飛んできた。

正確に、主砲の狙いをつけたままでは回避出来ない攻撃がやってきた。

「……北方棲姫」

「……オモテ、ハ?」

現れたのは港湾棲姫。

その姿は北方棲姫と同じくボロボロで。

ゆるゆると首を悲しげに横へと振る姿は切ない。

「退キマシヨウ……マタ、ツギ、タタカウタメニ」

「……ワカツ……タ」

素直に、ではないが、悔しげに頷き基地へと戻る北方棲姫。

「……てめーは」

天龍が港湾棲姫に向けて言葉を向けようとするが、それを黙って手で制して。

「ココハ、退キマス」

「逃がすとも思っているのかい? ——っ!」

身体に力を入れて時雨が足を踏み出そうと瞬間、敵艦載機が時雨を囲む。

「オボエテイテ。私達ハアキラメタワケデハナイト」

そう言つて、基地航空部隊を全て、発艦させた。

「ま、待てっ!! ……くそっ! 総員っ!! 対空防御態勢っ!!」

天龍の号令に全員が動く。

おびただしい数の艦載機を前に天龍達は必死で回避、対空射撃を行う光景を背に、港湾棲姫はその姿を消した。

「天龍さんっ!!」

「鳳翔さんっ!!」

中破姿の二人。

深海棲艦基地内で合流できた二人はお互いの無事を確認しあう。

「他の皆はっ!？」

「……とりあえず、無事……です、詳しい話は後で。今は」

「……わかった。じゃあ行くぜっ!!」

頷く鳳翔。

二人で基地内を走る。

基地の中に深海棲艦の姿が無いことを確認してから第一艦隊はそれぞれ手分けして提督を捜索していた。

敵が退いた理由はわからない、だがそれよりも先に優先すべきは提督の安否。

いまいち後味の悪い気持ちを抱えてはいるものの、それ以上に優先されるものがあると振り切って走る。

そうして走っている中で、天龍の無線が響いた。

「……時雨かっ!？」

『うん……提督、見つかったよ……生きてる、生きてるよ……!!』

「すぐに行く!! 場所は!？」

無線越しに聞こえるのは泣いている時雨の声。

一瞬ドキリとしたものの後ろに続いた言葉に思わず大きくガッツポーズをする天龍と、両手で口を抑えて涙を浮かべる鳳翔。

時雨の涙声で示された場所へと向かう。

「つたく!! 心配かけやがって!! なあ! 鳳翔さん!」

「ええ、まったくです。これは何かお仕置きを考えなければ、ですね」
再び走る。

悲壮感も、必死さもなく。

これで、いつもどおりの自分たち、日々に戻れる。

その喜びが胸から溢れて、顔には笑顔が浮かぶ。

提督に会えば、言いたいことは山ほどあった。

なんでこんなことになったのか、どれだけ悲しい思いをしたのか。全部、全部ぶつけてやろう。

そして思いっきり褒めてもらおう。

もしかしたら怒られるかもしれないけど、それもまた嬉しいと。

「時雨っ!!」

「天龍!」

だからその部屋に入った時。

ベッドの上で安らかな顔をして眠っているのか提督の姿が目映った時。

「良かった……良かったよ……」

涙が堪えられなかった。

部屋についたのは天龍達が最後のようで、夕立は提督に抱きついて泣いてるし、龍田も床にへたり込んで両手で目を覆っている。

「つたく、こんなにオレ達を泣かせやがって……いい御身分だなあ提督! さっさと起きろよっ!」

涙を流しながら、笑顔を浮かべながら。

提督に近づき、肩に触れて。

「おい! 聞いているのか提督! 早く起きろって!!」

「……」

起きない提督。

目を開けない提督。

「お、おい。なあ? 早く起きてくれよ?」

何故か。

理解できない悪寒。

その悪寒に耐えて、気づかないように。

「提督さん! 起きるっぽい!」

「提督? 早く、起きてよ?」

戸惑いを、振り払うように。

「提督! 早く起きないと……私……」

嫌な予感を、追い払うように。

「……お待ち下さい。もしかしたら深海棲艦に何かされた可能性があ

ります。後続を待つて、まずは鎮守府で診てもらいましょう」

「あ、ああ……そうだな。ちよつと、安静に、しとかねえとな？」

全員で、努めて冷静に。

ただただ提督の無事を確認できたことだけを、喜ぶことにした。

各人が抱える思いのようです

龍田と天龍の肩に抱えられた提督の姿を見た瞬間、フラワーズの全員が目を輝かせた。

戦闘時に浮かべていた色はどこにもなく、喜び一色で染められた瞳から全員が涙を浮かべる。

そしてそれは第二段階作戦の実行艦隊全員にも言えることだった。深い損傷により気を失っている摩耶と神通を除いてだが、身体を支えている大淀、古鷹の顔にも安堵と喜びが混ざった表情が浮かんでいる。

「皆っ！ やったねっ!!」

「ああ、これでようやく一安心……なんだが、提督が目を覚まさなくては。深海棲艦に何かされた可能性があるっつーことで——」

「任せてっ！」

天龍へと近寄ったのは那珂。

話し始めた言葉を最後まで聞かずとも理解できた。

帰投するまでの間、護送船の護衛を頼む。

那珂はすぐに暁達の下に走り、その旨を全員に伝え全員が天龍の方へ向かって笑顔で敬礼をした。

任せて。

絶対に無事で鎮守府へ帰すから。

頼もしさを感じるその姿。

だが、第三艦隊全員の心にある気持ちはもう一つ、今度こそという想い。

霞の姿が瞼の裏にこびりついて離れない、あの時感じた想いが忘れられない。

故に、今度こそ。

自分たちは守るための艦隊。

提督の無事が確認できた今、そうしなければならぬと強く考える事が出来た。

「作戦、お疲れさまでした！ お見事です！」

「うん、ありがとう」

第三艦隊が護送船の周りに展開するなか、第一、第二艦隊は護送船に乗り込む。

そんな墓場鎮守府艦娘達を迎えたのは大本営の軍人達。

目には何処かありえないという驚きが見え隠れする中、敬意を持って艦娘へと敬礼をしている。

実際、ありえないと思って良い作戦完了スピードだった。

作戦決定から三日。

たったの三日、それだけで大規模作戦と銘打たれた作戦の一部を完遂させた事実。

提督への想いは理解の及ぶ所。

だが、それでも、これほどまでとは思ってもよらなかったと浮かべた表情が語っている。

「すまねえけど、医者……軍医はいるか？」

「今はおりません。途中簡易司令部に詰めています」

「わかった。なら、途中で拾うことは出来るか？」

「可能です、ならその航路を取ります」

未だ担がれたままの提督を見て頷く操舵官。

特に時間的なロスが少ないことも当然だが、この作戦をこうも見事に完遂した艦娘の願いを叶える事に抵抗は無かった。

短いやり取りではあったが、改めて艦娘の力、その可能性を目の当たりにして大事にしなければならぬものが一体何なのか。

そんなことに思いを馳せるには十分だったから。

軍人と別れた後、簡易ではあるがベッドに提督を寝かせた天龍。

提督の身体に素早く近づいて手を握るのは時雨と夕立。

二人にやれやれとようやくいつもに近い笑顔を浮かべられた時。

「……ごめん、ね」

「あん？」

時雨が口を開いた。

謝罪の意図、それを掴めずに天龍は少し間拔けな返事をしてしま

「えっと、その、変な空気にしちゃったっぽい」

「……ううん、いいのよー。多分、時雨ちゃんと夕立ちちゃんがそうくなってなかったら……私と天龍ちゃんがそうなっていただろうし」

思い至ったのは龍田が先。

そしてその口から出た言葉もまた真実。

時雨が、夕立が我を失いかけていなければ、きっと龍田が、天龍が我を失いかけていただろう。

それは、間違いない。

「ありがとう」

「いいんだよ、まあでも皆で怒られようぜ？　提督に、よ」

「うんっ！」

天龍の言葉に弾ける笑顔を浮かべたのは夕立、いつもの夕立に戻った。そう言える笑顔。

提督が、生きていたから。無事だったから。

目を覚まさない理由はまだわからない。だが、こうして提督は息を休めていて。

だとするなら普段どおりに戻らない理由にはならない。

それも、間違いないのだから。

「天龍さん」

「ああ」

鳳翔と天龍。

二人の視線に収まっているのはベッドに横たわった霞、摩耶、神通の姿。

三人ともまだ目を覚まさない。

「……あん時、何があった？」

「……私達は強引な作戦を執りました。今、思えば、ですが、無謀と言って良いような作戦を」

結果的に功を奏した。

だが、鳳翔は提督なら絶対に執らないだろう作戦を執行してしまったことに深い罪責感を覚えている。

あの時。

古鷹と加古に随伴した摩耶と神通は結果につながる最高の働きをした。

古鷹を守るために摩耶が艦載機を撃ち落とし、加古を守るためにその身を囮に神通は舞った。

苛烈な攻撃、どれだけ撃ち落としても際限ないように発艦される艦載機。

その全てから摩耶と神通は古鷹と加古を守った。

「そんな古鷹さんと加古さんの砲撃は……見事に、ケチのつけようもないほど効果的に、港湾棲姫を穿ちました」

「その代償が、摩耶と神通。ってことか？」

弱々しく首を横にふる鳳翔。

ある意味正しく、そしてやっぱり違うと鳳翔は答える。

「港湾棲姫へ攻撃が通った時、お二人共ボロボロに近かったのは間違いないです。問題はその後、防空棲姫の奮戦」

考えておくべき、気づくべきだったと続けて鳳翔は言う。

「どうして港湾棲姫さえ倒してしまえば相手は機能不全、行動不全に陥るなんて錯覚していたのか……私達は港湾棲姫を退けた後、防空棲姫の指揮に従った敵艦隊の攻撃に晒されました」

そう、完璧だった。

港湾棲姫を退けるといふ一点のみにおいては、だが。

どうして姫クラスが二隻いたのか、その理由。

それは基地の指揮を港湾棲姫が、艦隊の指揮を防空棲姫が執っていたからに他ならない。

確かに港湾棲姫を退けたことで、基地からの航空部隊発艦は収まった。増援自体も収まった。

ただ、それだけ。

残った敵艦隊の士気は衰えることなく、むしろ増して鳳翔達第二艦隊へと襲いかかった。

ある意味深海棲艦らしいとも言えるべきか、最初から港湾棲姫を退けさせた後を狙っていたのかとも思えるほどに。

「……結果から言えば、私達は摩耶さんと神通さんがあの土壇場で改に至り囀役を買って出てくれたことで助かりました」

「改、か」

改めて摩耶と神通へと視線を向ける天龍。

自分たちと同じように、あるいは霞と同じように。

改に至った瞬間、それまでに受けていたダメージ、疲労は消え去る。理解できない現象ではあったが、そういうものなんだと捨て置いていた理解。

「それでも……言葉を選ばないのであれば、沈んで当然と言える攻撃に晒されたお二人。ですけど……」

「こうして生きて帰ってきてくれた、か」

「はい……そうして笑っていうんです。どうだ、あたしは役に立っただろうって。無意味なんかではいられませんからって」

二人はそう言っただけで意識を手放した。

自身を誇るように、力を示したと胸を張って。

声に涙が混じりだした鳳翔。

作戦の危うさを理解したのは敵艦隊の攻撃に晒されてから、どれほどの間違いを犯したのかと実感したのはそんな二人の台詞を聞いてから。

顔を覆う鳳翔の声には後悔の色も含まれていて。

あれほど提督の役に立ちたいと、自分ならと思ってくれたならと願っていたはずなのにと。

そう懺悔をするように天龍へと告白する。

「……やっぱり、オレ達は提督がいねえとダメだなあ？ 鳳翔さん」

「本当に、その通りです、ね」

この場に、それを咎められるのは提督しか居ない。

しかし提督は未だに目を覚まさない。

もどかしくも思う。

早く叱りたい、そんな考えすら改めて思い浮かぶ。

「だが、よ。そんな風に鳳翔さんが思うくらい苛烈な攻撃だったのにも関わらず……いや、沈んで欲しかったって意味じゃなくてよ……」

「どうして生きていることが出来たのか、ですよ？　大丈夫です、わかります」

霞にしてもそうだ。

駆逐艦が戦艦級……それも姫級の砲撃が直撃して沈まないわけがない。

「ですけど……わからず、ないんです」

「わからない、か」

それは一体どんな理由か。

未だ目を覚まさないことに関係があるのか。

そんな疑問が頭を駆け巡る。

「だけど……」

「はい」

無事で良かった。

その想いで今は十分で、思いに身を浸しながら、ベッドで眠る三人の身を案じ続けた。

「それは、本当デスカ!?!」

MI作戦、連合艦隊旗艦、金剛。

手に持った無線機から伝えられた報告に今まで一切浮かべていなかった表情を浮かべて喜び驚く。

「ハイッ！　ハイ！　そう、デスカ……！　わかりませタ！　ありが

とうございマス、委細、了解ませタ」

提督奪還の知らせ。

待ち望んでいた報告。

続いて伝えられたまだ目を覚ましてはいないという部分はあれど、間違いなく吉報。

「成功、したのかい?」

無線を切つて、大きく深呼吸をした金剛へと声をかけるのは長官。

「まさか……こんなに早く……!?!」

MI作戦が実行に移って半日。

時間差で動き出したMI作戦、あまりにも早いAL作戦完遂に目を

丸くするのは中将。

「イエース！ 流石天龍達デスネ！ 一抹の不安はありましたガ……良かったデス！」

「そうか……そうか！」

金剛の言葉に手を力強く握る長官と、未だ驚きに身を震わせ続ける中将。

「何かの間違い……では、ない、か」

想いの強さ、意思の強さに対して思考をようやく及ばせはじめた中将。

信じられない気持ちは大きい。

だがそれでも覆せないほどの事実、思い知らなければならぬ事実。

「じゃあ早速皆に伝えようか！」

「……イエ、お待ち下サイ」

表情を切り替え、先程までと同じ険しい表情に戻すのは金剛。

築き上げられた簡易司令部から見える海、そこで行われている戦闘、戦況は五分。

「今、伝えるのは得策じゃあナイ……かもしれません」

「……報復の意思、か」

金剛の言葉に理解を示したのは中将。

戦況が五分でいられている理由。

それは墓場鎮守府所属艦娘の戦力が高い、各鎮守府の代表、エース格とも言える艦娘がいるからという理由だけではなかった。

よくも、提督を。

そういった負に近い感情が胸のうちにあるからこそ、奮戦出来ている面があった。

第一、第二、第三艦隊のように我を失いかねる程の激情ではなく、それが上手く作用する程度に。

「ハイ。ワタシ達金剛型戦艦が出撃していなくてもこの状態を保っていられるのはソレが理由デショウ。ここで提督の無事を伝えればそれは緩みになってしまうカモ知れません……」

「違うない、な」

心当たりが多すぎる中將は胸を抑えながらも同調する。

金剛自身はそう言われるまではいまいち判断がつかなかった考えではあるが、中將の様子を見て確信した。

「M I作戦は始まったばかりデス。逆に言えば、始まったばかりで五分……状況はまだまだ変化するデシヨウ。墓場鎮守府から提督とともに援軍が来る、というのがベストですが、それまでに悪化することも考えられマス」

「……そう、だね。戦っている彼女たちのモチベーションを今変化させることは……より状況を不鮮明なものにしかねない、か」

続いた長官の言葉に頷く金剛。

全員に伝えたい。

その気持ちは強くある。

それでも、無事に帰ってきてくれたからこそ、この作戦を全員無事に完遂させる必要性が増した。

故に非情とも捉えかねない選択をする。

「少なくとも……M I諸島までの道を確保するまでワタシを含めた金剛型戦艦の投入は控えたい所デスネ」

「否は無い。最初から全力で行けば確実にここは突破出来るだろうが……先の保証は薄くなる」

「だね。ならさつきまでと同じように戦況へと目を光らせる事にしようか」

揃って全員が頷く。

M I作戦参加艦娘の中で一番練度が高いのは間違いなく金剛四姉妹。

次いで墓場鎮守府、艦学のメンバーと由良、羽黒が並ぶ。

由良、羽黒が率いる艦娘は他鎮守府から作戦に参加した艦娘よりは練度が高いが、大きな差はない。その中で突出しているとすれば山城だろう。

連合艦隊として控えるのは金剛を旗艦とした金剛型姉妹に加えて、

山城、翔鶴、瑞鶴、鳥海、羽黒、由良、川内、朝潮。

現在進められているM I作戦第一段階は実質的に長門、陸奥の艦隊を筆頭に攻略している途中。

慣れないだろう他鎮守府の指揮を長門は持ち前のカリスマ性もあって上手く執れている、時間をかければ攻略することは可能だろう。

よしんば危険を感じることもあってもその時は連合艦隊を分割して、あるいはそのまま援護に出撃すればいい。

敵戦力は姫級の深海棲艦は未だ見られないものの強大に違いはない。

だが、少なくともM I諸島に至ることは出来る、それが司令部の見解であり、現場の長門も思っている事。

「提督……」

小さく、呟いた友人を指す言葉。

不安は、ある。

もしも目を覚まさなかつたら、そんな風にも思う。

だが。

「最高の勝利を、アナタに」

今やるべきことはそれ。

帰った時、再び会えた時、笑顔の報告を。

それだけを胸に、金剛は再び水平線へと目を向けた。

提督が目覚めたようです

偽物を消し去っていけば、最後には本物が残ると思っていた。

友情も、親愛も。

友人も、家族も。

普通なんてあやふやな言葉。

そこから外れたと定められて、一気に世界は変わった。

信じる友情は憐れみに思えた。

信じる親愛は義理感に思えた。

向けられる感情を悪意で返した。

向けられる温もりに冷たさを返した。

だってそうだろう？

どうやっても普通じゃない俺だから。

普通に返してしまえば、偽物の中に埋没してしまう。

当時の俺は、それがとても怖かった。

偽物の中で生き続けて、可哀想だからを理由に友情を親愛を向けられ続けて。

それを本物だと認めてしまえば、俺がいた世界が偽物だと認めてしまふことになるから。

だから全力で排他した。

勝手に決められた普通の外という世界。

そこは酷く気持ちの悪い場所。

そうして気づけば手のつけられない悪童になって、周りには誰も居なくなつて。

残ったのは孤独という世界だった。

もうそれで良かった。

偽物を排除し続けて残ったのが孤独だというのが本物。

人は生まれながらにして孤独ということが証明されたのなら、孤独と共に生きよう。

そう思った。

思ったときだった。

差し伸ばされた手があった。

手の持ち主は笑っていた。

どうしようもない俺に、笑顔を向けていた。

わからない、わからなかった。

今更だとも思った。

排除して、排除して。

そうやって生きていた俺に、それが本物なのか偽物なのか判断がつかなかった。

それは、今も。

だからやつぱり突き返した。

そんなものはいらぬ。

偽物を与えようとするなど。

孤独という俺の世界に異物があつてはならないと。

それでも結局連れて行かれた。

問答無用だった。

子供じゃどうあがいても解けない腕に無理やり抱えられて。

ジタバタともがく俺に優しい瞳を向ける人も居て。

抵抗を許されぬまま、世界に変化が訪れた。

変化を受け入れられない俺はやつぱり抵抗した。

温かい食事、風呂、布団。

二段ベッドじゃなくて、下にも上にも誰も居なくて、当たり前のように自分以外の寝息は聞こえない。

自分のいる場所が自分の部屋だと認識できたのはいつだっただろうか？

誰かが急に泣き叫んだり、暴れだすこともない。

静かで、穏やか。

だって言うのに、俺は受け入れず何度もそこから飛び出そうとして、毎回見事に捕まった、見つけられた。

困ったような、だけど笑顔を絶やさない。

そんな顔で、何度も何度も受け入れられ直した。

ある日のことだった。

——貴様をわしの道具にする。

いつもの笑顔じゃ無かった。言っている意味はわからなかった。ただ二回目の変化だった。

毎日。

そう、その言葉から毎日。

俺は道場で叩きのめされた。

学校に行つてはいなかったから、実質食事や風呂、睡眠以外るときはずつと道場の床を舐めていた。

負け犬。

役立たず。

罵声と共に竹刀でボロボロにされる毎日。

ずつと後で考えれば、それも当然だったのかも知れない。

何度も何度も、恩を仇で返し続けた報いだ。

こうして叩きのめされて尚、仇を返そうとし続ける俺を諦めたのだと。

新しい世界の主は、有名な剣道家であり剣術家だった。

日本で数少ない達人と呼ばれる人間で。

陽のあたる道をずつと歩き続けてきた人間だった。

ただ陰があるとするのなら、子供がいなかったという一点のみ。

だから俺が必要とされた。

後継者。

その座に座る人間として、主の道具として。

やっぱり偽物だったと思つた。

でもそれで良かった。それが良かった。

ずつとずつと困惑していたから、温かさに。

そう言つてもらえたほうがわかりやすかつたんだ、自分の気持ち
が。

小学生、高学年。

その歳からずつと。俺は毎日竹刀を握つた。

いつものように、かつてのように。

偽物を倒すために。

主にとつては幸いと言うべきだろう、俺には才能が無かった。だから言われるがまま、その通りに技術をゆつくりと床を舐めるたびに吸収した。

そうだから都合が良い、幸いなんだ。

要するに自分のコピーを生むためには。

体中に巻かれた包帯が少なくなり始めたのは中学生になった頃。

ようやく学校に行き始めた俺。

小学生の頃に作った友達なんていない。

だけど不安も恐怖も無かった。

当時の俺はどうやったたらあの人を倒せるかしか考えていなかったから。

新しい世界に新しい学校と言う舞台が加わっても、結局何も変わらなかった。

授業なんて聞いていない、ノートに書かれている文字は黒板の内容にかすりもしていない。

そしてやっぱりそんな俺は奇異の視線で捉えられていた。

誰とも会話せず、ただ学校に来て何かをぶつくさと呟きながら、身体に生傷を作り続けている生徒。

そりやどう考えても好意的な視線で見られることなんてないわけ。

だけど、物好きなのやつはいる。

俗に言う不良と呼ばれるヤツらは近づいてきた。

意味がわからなかった。

いつものように遠ざけようとしても、何故かひつついてこようとしてきて。

何度も、何度も。

俺が引き離そうとするのを諦めるまで、ずっと。

そうやって気づけば、周りに誰かがいる生活が始まった。

世間的には決して褒められたもんじやないとわかっていた。

喧嘩もしたし、誰かを傷つけた。

当然主だつて、主の嫁さんだつて学校に呼び出される。それでも、何故か。

ただの一度も怒られることはなかった。

いや、正確に言うならばそれが理由で距離を置かれたりはしなかった。

悪友とどれだけ夜遅くまで外に出ようと、帰れば必ず温かい食事が用意されていて、必ず道場で叩きのめされた。

その時は気づくことも無かったけど。

あの時ようやく俺は、本物の友情つてやつを手に入れたんだと思う。

そうして、再び世界は変わる。

高校生になった。

未だにろくすっぽ勉強をしなかったにも関わらず高校に入学できたことはびっくりしている。

悪友はこぞつて目を丸くしてたし、先輩なんかには大声で笑われた。

学校なんか行かないで俺達と遊ぼう。

そんな事も言われた。

けど、忘れていなかったのは主を打ち倒すこと。

やりたいこと、やらなくちゃいけないことがある。

そういった時、皆の顔は初めて見るものになって。

がんばれよ。

そう言ってくれた。

何故か浮かんだ涙の理由がわからないまま、最後に皆で遊んだのは未だに、これからも一生忘れないだろう。

そうして高校生になって、剣道部に入部した。

その頃には生傷は身体に出来ることはなかった、ただどうやっても勝てなかっただけ。

だから俺は外に知識を求めた。

そうして、新人歓迎の部内対抗戦。

部内で先輩達を簡単に退けてしまった。

強い。

今まで敗北し続けていた俺は、決して弱くなかった。

バカ学校の弱小剣道部。

そんな小さな庭ではあつたけど、その庭を軽々と越えられる程度には。

そう自分への認識が改まって、恐怖した。

普通じゃない。

自分のことをそう思ったから。

怯えた目をしていたと思う。

そんな瞳越しに見た先輩や同級生たちの表情は。

ただただ驚いただけのもので。

一拍の間を超えれば大きな歓声が上がった。

すごい、と。

強い、と。

たった今倒してしまつた先輩ですら、ここまで見事に倒されちや悔しくもないって苦笑いを浮かべていて。

そんな空気の中。

俺はただただ泣いた。

涙の理由はやっぱりわからない。

だけど、なんとなく。

渴いた心の一部が潤つたつて実感だけがあつた。

優しい、日々だった。

学校を楽しいと思つたのも初めてなら、誰かと何かに向かって努力することも初めてで。

毎日学校に行くのが楽しみだった、今日はどうしようなんて考えている自分に思わず笑つてしまうほど。

部活ではどうすれば強くなれるかって積極的に俺を中心として話し合い、実践が生まれた。

笑つて、悔しがって、時には涙して。

言つてしまえば青春していたと思う。

弱小と言われていた剣道部は俺が一年生の時に県大会で準優勝。世間を賑わす学校となった。だから二年目。

世間の予想や期待通り、俺達はインターハイへ出場が決まった。俺の行き先を決定付ける。インターハイ。

「ほう……そうか」

「ああ、行って……良いよな？ 爺さん」

相変わらず床から見上げる構図は変わらない。

もうこの頃には一種の儀式みたいなものだった。

まずはやりあう。

それから会話が始まる。

構図は変わらなくても変わるものはあつて。

剣の腕は全然衰えていないのにも関わらず、主——爺さんの身体からは確実に老いを感じた。

それは爺さんの嫁、タエさんにしてもそうだった。

記憶にある姿から白髪は増えだし、シワも増えた。

それでもずっと温かい食事と床の味は変わらなかつたけど。

この頃俺は、ようやく変化というものを認められるようになっていた。

排除できない存在とも実感できた。

それはつまり本物だつて言うことで。

ただそれを表立って伝えられないだけ。

そんな状態だった。

「良かろう。ただし……」

「優勝以外は認めない、だろ？ わかつてるよ」

爺さんがどう思っているのかはわからない。

それもやっぱり、俺が叩きのめされる度に負け犬と道具と言われ続けているから……なんて言い訳をしていた。

だから優勝したら。

優勝したら言おう、ありがとう。

俺はただの道具なのかも知れないけど、道具にしてくれたおかげで手に入れられたものがあつたから。

だから、お礼は言わないといけないし、その恩は返すべきだ。

この人の望みを叶える、叶えられる自分で居続ける程度で良いのなら。

もう、十分すぎるものを得ることが出来たから。

そう決意して、インターハイに臨んだんだ。

インターハイは怖いほど順調だった。

同時に自分の力がどれほどのものなのか、爺さんがどれほど強いのかということも理解できた。

何気に僅かではあつたがマスコミも注目していた。

俺が、あの達人の養子だと。

何処からそんな情報が手に入るんだなんて苦笑いしていたけど、悪い気はしなかった。

養子。

血の繋がりはないけど、確かな親子。

つまり、家族。

俺が剣を振るう度に、流石達人の息子だと褒められる。

そんな言葉が嬉しかった。

認められている。

周りが爺さんの息子だと、認めている。

俺が、剣を振るえば、振るい続ければ。

全てが順調で、優勝すれば、きつと言える、言おう。

その決意は高まるばかりだった。

だから。

優勝が決まった時、緊急の連絡が入ったその電話に、絶望した。

「嘘、だろ……う。」

伝えたかった言葉がある。

伝えたかった気持ちがある。

だがそれは。

「嘘だ、嘘だあああああ!!」

病室で眠る、爺さんだったモノに被せられた白い布によって遮られた。

「あああああああ!?!」

目を覚ました。

「あ……あ、あ……?」

あの時の事を夢見るのは久しぶりで。

背中だけじゃなくじっとりとした嫌な汗に身体が包まれている感触が気持ち悪い。

「……、は……?」

混乱している。

そうわかる頭を働かせようと回りを見れば。

「俺の、部屋……?」

散乱しているカップラーメンのゴミ。

ひきっぱなしの布団。

そして。

「艦、これ……?」

パソコンのモニタに映る、メンテナンス中という文字と妖精に吊るされた猫の画像。

……はい?

「いや、え? 俺、俺は確か……深海棲艦に……」

海の審判に臨むと決めて、瓶に入っていた液体を飲み干して……目の前が真っ暗になって。

気づけば、これ。

「どう、なって……?」

わけも分からないまま、マウスを握る。

更新する。

何度やっても吊るし猫。

「……っ!!」

部屋から出る。

ワンルームの一人暮らしだ、出てしまえばそこは外。

何で外に出ようと思ったのかわからない。
だけど。

「確かめ、なきや!!」

慌てる身体と思考。

きつと久しぶりに履くだろうスニーカーが履きにくくてイライラ
する。

それでも置きっぱなしだったサイフを持って。

自分の姿を確認することすらしなくて。

無我夢中で走った。

身体を突き動かす何かに従って、ひたすらに走って。

かつて見慣れていた場所を駆けて、見慣れるはずだった場所を目指
す。

「すいません!! 大本営は何処ですか!」

「は、はあ? ダイホンエイ? なんだそれ?」

道行く人にきつと血走った目で問いかけて、首を傾げられて。

それでも走る。

きつと、ここにはありもしない場所を。

不思議な艦このようです

意味はあったのかも知れないけどあてはなく。

走り続けて探し続けた世界。

だけどそれは欠片も無かった。

横須賀鎮守府という存在の後ろには跡という言葉がついていて。

慣れ親しみつつあった墓場鎮守府って存在は影も形もなかった。

横須賀鎮守府跡についた時、そこにいた人間へと艦娘の存在について聞いてみれば。

——現実、見ような？

なんて。

二次元と三次元をゴっちゃにしてしまった可哀想なヤツを見るような目で見られてしまつて。

そうしてようやく、ここがついさつきまでいた世界とは違うということを確認られた。

ここが、何処なのか。

もしかしたら、元々俺がいた、俺が生まれた世界なのかも知れないし、そうじゃない艦これの世界じゃないだけの場所なのかも知れない。

だけどそんなことはどうでも良くて。

「どういう、ことなんだよ……」

家に入って頂垂れてしまう。

これが海の審判とかいうヤツなんだろうか？　だとしたら一体何を下されるというのか。

審判の途中なのか、下った後なのか。

それすらもわからない。

喪失感。

こんな気持を抱いたのは何回目だろうか。

捨て子の意味を知った時、孤独を知った時……爺さんが、死んだ時。

何回感じても、慣れることはない。

それが、今回得た教訓であつたり、審判の結果なんだろうか。

「そうだ、こんな時は……」

そう、ただそうやって失って得たものの中に一つだけ光明がある。

艦これ。

艦隊これくしょん。

こうやって俺が生きていられる理由。

ここを出る時に画面はメンテナンスを記していたけど、それは確かに艦これというブラウザゲームが存在している証明だから。

感触がない地面を歩いてパソコンデスクへ向かって、開けたくない
瞼を持ち上げて。

「……え？」

映っている画面にそれ以外の言葉が出なかった。

「時雨……夕立……？」

母港画面に本来一人しかいないはずの艦娘。

それが、二人。時雨と夕立が居て。

「いや……持っていた時雨と夕立に改二じゃないのは……っつか、え
？ 資材……三百？」

カンストさせていたはずの資材量。

白露型で未改造の艦娘なんて居ないはずで。

というか、なんだこれ。

出撃以外のアイコンが反応しない。

「待て……いや、待てよ……俺の、俺の艦これは……？ 大和は？
ビ
スマルクは？」

躍起になって編成アイコンをクリック連打しても、なんの反応もな
い。

補給も、入渠アイコンも。

それどころじゃない、戦績表示やアイテムすら開けない。

じゃあ出撃アイコンをクリックすれば、未開放の文字で埋め尽くさ
れている海域選択画面。

演習も、遠征も選べない。

ただ、鎮守府正面海域、近海警備……1―1だけが選べる。

「は、はは……冗談、だろ……？」

あれだけ。

あれだけの時間、熱意……全てを込めた俺の艦これ。見る陰もない。

尻に感じる衝撃。続いて顎を何処かで打った。

痛いとすら感じない。

どれだけ。

どれだけの喪失感を重ねられれば、こんな気持ちになるのだろう。目を開けているはずなのに、広がるのは黒い黒い世界。

「っ!？」

そんな時にスピーカーから響いたのは、いつか聞いたことのある音。

警報音。

——深海棲艦見ゆ、直ちに迎撃して下さい。

画面が赤く点滅しながら、そんな文字が流れてきた。

「は……はい?」

こんな演出、見たことがない。

改めて、母港画面に艦娘が二人いることだつてない。

強調される出撃アイコン。

震える指でクリックしてみれば。

——そんなのダメっぽい!

——僕を犠牲にするんだ、三割じゃなくて十割にしてよね。

聞こえてくる、いつか聞いた言葉。

「っ!!」

あの時。

俺は、どうやって勝利した?

沈みゆく夕立を、どうやって助けた?

画面は進行する。

そして。

——沈むよ?!

これはきつと妖精の声。

そうしてようやく開くことが出来たアイテムの欄。

俺があの時したことは、きっと艦これで言うのであれば。

応急修理要員。

新たに強調されたのは改装アイコン。

さつきまで選べなかったアイコンが選べるようになっていて。

出撃中という札がかけられた夕立に、装備を変えられないはずの夕立に。

「っ!？」

そうしてみれば画面は見慣れた出撃中画面。

敵艦隊見ゆの文字。

戦闘画面に入れば、確かに俺が指示した通り時雨しか居なくて。

戦艦は居ない、一巡で終わるはずの攻撃は時雨が一発も攻撃しないままひたすらに回避し続けて五巡。

「時雨っ!？」

回避し続けていた時雨が被弾した。

時雨のアイコンが右にずれた瞬間被弾して中破。

1―1では見られないはずの敵艦隊構成。

その全てのアイコンが左へと一斉にずれた瞬間。

「ゆう、だち……」

時雨の下に夕立のアイコンが加わった。

夕立のアイコンはずっと右にずれたまま。

攻撃して、被弾して。

次々と敵艦隊に撃沈の文字が刻まれていく。

大破。

同じく夕立にそんな文字が刻まれたと同時に。

敵艦隊の全滅を確認。

そして、応急修理要員が発動したことを示す演出。

「機能、した……」

装備出来ないはずだったそれ。

装備欄には主砲と魚雷が装備されていたはずで、応急修理要員を積める場所なんてないはずだったのにも関わらず。

切り替わった母港画面には相変わらず二人の艦娘。

そのどちらも服が破けていて。

強調されたアイコンは入渠。

まるで、ここまでがチュートリアルかのように。

母港に映っていた二人が入居すれば画面から居なくなつて、先に時雨だけが再び現れて。

——ありがとう。

そんな言葉を紡いでくれた。

海は、繋がっている。

深海棲艦……いや、港湾棲姫が言った言葉。

それがまさしく言葉通りだとするのなら。

艦これは、一つの海。

空想から生まれたゲーム、妄想から生まれた海。

ゲームという形を通して、繋がっている。

今俺は、あの世界で紡いだ軌跡を辿っている。

新たに現れた、着任したのはやっぱり天龍と龍田。

編成画面で龍田を入れることが出来たのはやっぱり資材がギリギリになつて、にっちもさっちもいかなかった時。

遠征には行けず、資材も自動回復しない。

ああ、確かに。

出撃してその先へと望みを繋ぐことしか出来ないだろう。

崖っぷちとも言えるこの状況。

間違いない今やっている艦これにはゲームオーバーが存在していると確信できた。

思い返しながら、海へと形を変えて挑む。

天龍達が出撃して、応急修理要員ではなく、応急修理女神が何故か装備欄に現れていて。

応急修理要員と同じように何故か機能して。

1—1を突破した。

ボスマスではドロップ確定のはずなのに、誰も着任してくれなかったのは予想通り。

だけど1―1を攻略したことで遠征を選べるようになって。
ゲームは進行する。

大淀と六駆が着任して、何故か演習以外選べなくなつて、時雨と古鷹の一騎討ち演習が始まつて。

那珂ちやんが着任して。

製油所地帯を開放して。

「ああ……そうだ、そうだった」

そんな時間は経っていないはずなのに、懐かしさを覚えたり。

それでもやっぱり時間が経っていないことを示すかのように鮮明に思い出せて。

六駆にカランコエを育ててもらつたこと。

その六駆が那珂ちやんと一緒に出撃してくれたこと。

金剛達がやってきたこと、早速の演習が行われたこと。

一丸となつて、1―4……南一号作戦へと臨んだこと。

全てが、目の前で繰り広げられていた。

だから当然。

「AL／MI作戦……」

大規模作戦が発令された。

確認できるようになつた戦力。

改二になれるはずの練度に至つたのにも関わらず、反応しない改造アイコンが気にはなつたが、改に至つた時の事を考えるとそれもそうなのかも知れない。

艦学のメンバーは改にすら至っていないが、それもきつと実戦や何かの気づきで至ることだろう。

改二になるための条件。

それが何かはわからない。

ただ、それを探すためあれこれしている……。

「!?」

急に、操作を受け付けなくなった。

急に、画面が勝手に動き出した。

「ま、待て!? いや! なんぞ!」

マウスカーソルすら動かない。
勝手に編成される様、出撃する様。

何でAI作戦に第一艦隊や第二、第三艦隊を連れて行くのか、何故第三艦隊に霞が、第二艦隊に摩耶と神通が編成されているのか。

俺ならこうはしない。

実際の情報がどうかはわからないが、艦これイベントの事を考えればきっとこうはならない。

理解できない編成。

それでも進んでいく画面。

練度が一際低い霞、摩耶、神通。

間違いなく危ない。

今動いている画面があの世界だとすれば、尚更。

ありえない敵艦編成が出てくるあの世界なら、間違いなく。

「沈む……っ！」

認められない。

絶対に認められないそれだけは。

どうすればいい？

これは歩んだ軌跡じゃない、未だ見ぬ未来の軌跡。

そうか。

「俺が……いないから……っ！」

このタイミング、俺は深海棲艦の基地に居た。

そりや当然、俺は指示出来ないのも当然で。

つまり。

「出来ることは……俺が出来ることは、何もない」

指を咥えて見ているしかない、おそらく沈むだろう誰かを。

……見ているしかない、本当に？

認められないものを、認めろと？

「そんなの……っ!!」

断じて許せない。

こいつらは、俺の家族だ。

ずっとずっと欲しかった、望んでいた本物だ。

我が子我が嫁を仕方ないを理由に見放すなんてあつてはならない。
「止まれっ……いー 止まれっ!!」

必死に願う、考える。

どうすればいい、どうしたらいい。

どうすれば、こいつらは沈まずに済む。

もしかしたら大丈夫かもしれないなんて都合のいいものになんて
縋れない、縋るつもりもない。

あそこで学んだ、実感したのは途方も無いリアル。

そんなリアルに都合のいい夢物語は存在しない。

「っ?! 戦艦棲姫っ?! てか霞っ?!」

第三艦隊と一緒に動いていたはずの霞が一人、戦艦棲姫と相対す
る。

霞のアイコンが動き砲撃をしても、表記されるダメージは雀の涙。
対する戦艦棲姫の攻撃は。

「霞いいいい!!」

表示されている体力を大幅に上回るモノ。

つまり。

「……っ?!」

沈んだ。

そう確信できたところから見えた未来はご都合良く体力満タンの
霞。

「まさか、改……?」

確認は出来ない。

それでも察した、霞は天龍達と同じように、土壇場で改に至ったと
いうことを。

それは、つまり。

「装備スロットっ!!」

それが一つ空いているということ。

霞も、摩耶も、神通も。

改へと至れば装備できるスロットが一つ増える。

なら……!!

「くそっ！ これくらい!! させるよ！ やらせるよ!! 俺は……俺はただの傍観者じゃねえぞ!!」

動け、動け俺の思い通りに！

出来るだろう？ やれるだろう？

これが俺の歩みの先だというのなら、何も出来ないなんて嘘だ。

言われるがままの道を歩んできた俺だけど。

反発しているようで結局諦める理由に飢えていた俺だけど。

もう二度と、失いたくない、諦めたくないことだってあるんだから。

味わいたくないだもう。

大事なものをそうと気づく前に失うのは。

理由もわからない、棚ぼただったのかも知れないけど、もう間違え

たくないんだ。

だから……! !

「っ! !」

一瞬見えた気がする装備変更画面。

それと同時に鳴り響いたチャイムの音。

高まっていた熱が一気に冷たくなったのがわかった。

いつの間にかドアを力強く睨んでいたんだろう目をモニターに戻

せばそこには通信エラーの文字。

「なん、だよ……」

更新し直しても、ログインし直してみても、変わらない通信エラー

表記。

「くそっ! !」

苛つく。

思い通りどころか何の選択も出来なかったことも、今尚なり続ける

チャイムの音も。

そんな場合じゃないのに、分かっているのに。

苛立ちを抑えつけて玄関ドアへと向かった。

「書留です。サインお願いします」

「……はい」

一通の手紙。

ごく丁寧に書留で届いたこれ。

「……そっか」

記されている住所は見覚えがありすぎるけど最後まで見慣れなかったモノ。

そんな文字を見て、現実感に近い何かが頭と心を埋め尽くした。

「そんな時期、だったのか」

こうして一人暮らしをするにあたって唯一出された条件。

年に一度、あそこへと顔を出さなければならぬという日を知らせるもので。

最後にもう一度パソコンを見ればやっぱり通信エラー。

それがまるで行ってこいと言っているよう。

「行かなきゃ、な」

とある一本勝負のようです

心を、凍らせる。

弓が引かれて矢が放たれる音。

その光景を、そうやって見る。

久しぶりに見る俺の姿へと張り切ってくれているのは伝わってきた。

嬉しいと思う。

本当に名ばかりの立場だと言うのにそうだと認め続けてくれることは。

ただ正確に言うのならば。

心は勝手に凍ってしまっただ。

そうでもしなきゃ、ここに座っていられないから。

「名代さんっ！ 見ててくれましたか！ 上手になりましたよね！

褒めて下さい！」

「あ！ くら！ 抜け駆けはなしだって言ったじゃないか！ ……

で、でも、僕もその……上達したと、思います。思ってくれますか？」

「……ああ、一年前とは比べ物にもならないな。よく頑張ったね」

何も感じない、受け取らない。

そうやっていないと、皆の顔が眩しすぎて。

まるで黒塗りの絵。

誰が、誰かわからないように、理解しないように。

それでも俺の言葉にはしやぎながら喜んでくれる子達。

本当に、心が痛い。

より一層張り切って弓を番え始めた二人。

それに負けられないようにという意識を持っただろう他の人達。

辛い。

本当に。

そして申し訳ない。

「ほう？ 何処にいるのかと思えばこんな所にいるとはな？ さすが名代様ともなれば余裕が違いますな？」

「……ご無沙汰しています」

黒塗りの人が一人増えた。

明らかに場違い。

いや、着ている高級スーツにしてもそうだけど、武道の精神を持ってここに入ってきていない。

でも、腹は立たない。その資格がない。

だから頭を下げる。

「……ちつ、眼中にすらないというのか……?」

「……申し訳ありません。すぐに、そちらへ参りますので」

立ち上がり、目を合わさないようにして、立ち去ろうとすれば呼び止めたわけじゃないだろうが聞こえる声。

「その余裕、今日こそ打ち破らせてもらう。おい！」

「なんですか、もう……おや、そちらにいらっしやるのはかの有名なやくたた……失礼、名代様ではありませんか」

何も、感じない、はずなのに。

養子。

その言葉に、どうしても反応してしまい顔をあげてみれば。

「……クソ提督?」

「ていとく? 何を仰っているのですか? 何か見えてはいけないものでも? ははっ、これはやはりご休息が必要と見える」

かつて鳳翔達がいた鎮守府の提督そっくりな顔。

一瞬で苛立ちを感じる、忘れたようで忘れられなかったその雰囲気。

「ククク、そうだな? ならば休んでいただかなければなあ?」

ようやく、黒塗りの顔は形を作った。

中将。

兵器派の、代表とも言える男。

その人にそっくりで。

「……なるほど、今日は違う。ということですか」

「無能を頭に据え続ける等……あつてはならないだろう?」

ああ、何処までも。

何処までも似ている。

嫌な印象だけ、それしか持ち合わせていないかのよう。絶対俺とは反りが合わないと確信できるように。

去っていく後ろ姿からですら、そう思ってしまう。

「名代さん」

「名代」

声に振り向けばさっきの二人。

「夕立、時雨……」

「え？」

「ゆうだ……しぐれ？」

気づけば何処と無く似ている二人。

頭がおかしくなりそう。

本当にこの二人はあの二人に似ているのか？ それとも俺の頭がもうすでにおかしくなっていてそう見えるのか。

だけ。

「絶対、勝ってくださいね！」

「うん、僕、名代が名代じゃないと、嫌だよ」

「……そっか、うん。ありがとうな」

この笑顔に込められた想いだけは、変わりないんだろう。だから。

「勝つ……か」

これから挑むは師範を決める戦い。

ずっとずっと空席、空札だった場所の取り合い。

勝利することの、意味。

それを考えながら、弓道場主タエさんの道場から出た。

「制限時間は十分。勝負の方法は……」

「よろしいですか？」

厳しい顔をしたタエさんの口からいつもの説明が流れようとして、それをあの男が止めた。

普通、黙って聞き終わってから口を出すもんだが。そういうことす

ら学んでいないらしい。

「……何か？」

片眉が動いた。

ブチギレを抑えた証拠。

「例年その悉く十分以内に一本すら決まらず引き分けになったとか」
毎年行われたこれ。

俺はその全てを引き分けに持ち込んでいた。

故に、師範の座はいつまでも決まらなのまま。

俺が師範代、名代として目の上のたんこぶで居続けた。

「その通りですが……改めて、何か？」

「いやだなあ、怖い顔をしないで下さいよ。……もうそれ、やめませんか？　いつまでも師範の座を空位にしておくわけにはいきません。そのせいで、弓道とは違い剣道場は閑古鳥が鳴いている始末です」

かつて門下生に溢れた爺さんの剣道場。

主の姿が見えなくなり、その愛弟子とも息子とも言われた俺すら姿を現さない剣道場。

そりゃ、そうなるってもんで。

この家が、道場が今でも成り立っているのはタエさんの功績が大き
いんだろう。

「あの方もきつと泣いている。かつて賑わった道場に戻してほしいと
思っているでしょう。だからこそ、今日、この場ではつきりしましよ
うよ」

「……あなたなら、それが出来るか？」

「いやいやそんな思い上がりは……ですが、ねえ？」

ちらりと向けられるいやらしい視線、慣れきった視線。

合わせて、タエさんからも視線を向けられる。

含まれているものは、一体なんだろうか。

いい加減白黒決めるべきだと、タエさんだっわわかってるだろう。
ならば。

「良いでしょう。では時間無制限の一本勝負とします」

「ありがとうございます！　必ずや勝利を！」

そうなる、か。

大げさに喜ぶクソ提督似の男と、後ろに控えていやらしく笑う中將似の男。

あたりを囲むタエさんの門下生が生唾を飲み込む音が聞こえた気がした。

……。

なるほど。

これはつまり、岐路、なんだろう。

そして、決着、帰結とも言える。

ずっと。

ずっと艦これで自分の欠けた何かを埋めようと必死になっていたツケを払う時が来た。

爺さんが死んで、すぐに艦これが始まって。

今の今まで、ずっと支払わなかった、ツケ。

無様に、負けるべき……なんだろう。十年近く続いた未払い。

タエさんも、きつと、いい加減俺を見放したいはずだ。

壊れた道具は、捨てられるべきなんだから。

「……防具は？」

「いりませんよ」

俺の意思を確認しに来たのだろうか近寄ってきたタエさんはそんな事を言う。

防具なんて要らない。

さつさと打ち込まれて、倒れて終わり。

痛いのは一瞬だけ。

仮に大きな傷を受けようとも、それは俺への罰だろう、受けるべきだ。

「……あなたの、好きになさい」

「え……？」

そう腹を決めつつあった俺の耳に届いたのはそんな台詞。

負けるとも、勝てとも。

「俺は……」

「待っていますから」

見間違い、だろうか。

そう言って離れていったタエさんの顔に、笑顔が浮かんでいたのは。

その、笑顔の、意味は？

「両者っ！ 礼っ!!」

考える間もなく、礼を促され従う。

あいつの防具越しに見えた瞳は自身の勝利を疑っていないようで。

「はじめっ!!」

「めええええええん!!」

開始の合図と一緒に突っ込んできたあいつ。

この一刀で終わる。

そんな気持ちに乗っている。

俺も、これで、終わることができる。

だから、その一撃を……。

「っ!？」

「……なん、で……」

乾いた音が響いた。

わけがわからない、何で俺は……。

「ク、クク……い、少し甘かったようだ！ ならばっ!!」

防いでいるんだ。

どうして竹刀を交えているんだ。

「はあっ!!」

「……どうして……い！」

続いて来る竹刀を防いでいる？

わかる、わかるさ。

こいつはそれなりに強い。

わざと負けても違和感がないくらいには、強い。

それでも、わかる。

次に来る竹刀が、攻撃の呼吸が。

全て、わかる。

「おいっ！ 何を遊んでいるっ!!」

「っ!! わかってますっ!!」

「おっさんの声が響く。」

「遊んでいる？ そう見えるのか？」

「言わせてもらえれば、てめえこそお遊び。」

「これが、爺さんの、代わり？」

「ふざけんな……」

「っ!？」

「ふざけるな、ふざけんな。」

「ふざけんじゃねええええええ!!」

「こんなもんじゃねえ！ 爺さんの剣はこんなままごとみてえなお遊戯じゃねえ!!」

「っつてえ!!」

「見ろ!! これが爺さんの剣だ！」

「そんなもんじゃねえ！ 俺が勝てなかった！ ずっと叩きのめされていた剣は！」

「な、な、なっ!？」

「うおおおおおお!!」

「舐めた床の味を覚えている！ 身体に走った剣を覚えている！」

「無くなつてなんかかない！ 忘れられるわけがない!!」

「てめえは知ってるのか？ そんな味を！」

「悔しくて、悔しくて一層勝つために努力して!!」

「それでも尚届かなかった剣を!!」

「教えてやる……!!」

「は、は……っ?」

「これがっ!!」

「爺^俺さんの、剣だっ!!」

「霞、打ち……っ?」

「一本っ!!」

無我夢中に放った剣は逆胴。

払われる事を見越した、逆胴の先。

爺さんが俺にトドメと言わんばかりに引っ掛けてきた、技。

あの世界で、乗り越えた、剣。

呆気にとられながらも、信じられないような視線を向けて震えているおっさんとクソ野郎。

勝負がついたことを示すタエさんの声に少し涙が混ざっているよ
うな気がしたのは、気の所為じゃないだろう。

霞打ち。

どうやらこの技はそんな名前らしい。

一回も聞いたことないけど、ずっとやられてきたこの技。

——す、すごい。

誰かがそんな言葉を零した後、空気が割れるような歓声が聞こえて。
て。

それでも俺は何故か残心から戻ることが出来なくて。

「き、貴様っ！ 何故その技を……い、いや！ そんなことよりも！

こ、こ、このやくたたずがつ!!」

「な、なあ!？」

「どうしてくれる! これで計画が全て御破算だ! 貴様が、貴様が
これほどまでに弱いとは……っ!!」

そんな俺の前で練り広げられる、見たくないやり取り。

あつちの世界でも、こんなやりとりがあつたんだろうか。

あつてほしくはないと思いつつも、計画という言葉に引っかかり
を感じる。

「これで、彼が師範と決まりました。そして、この道場の存続も……も
う、ここに用はないでしょう? どうぞ、お引取りを」

「こ、この……!! クソババアがつ!!」

俺の残心を解いたのは、タエさんに向かって振り上げられた拳。

「ひ、ひいっ!？」

「……」

その拳を、竹刀で打ち払い、顔に突きつける。

「計画が、何なのかなんて興味ねえ……だがよ、それをしてら……俺は止まらねえぞ? どうぞ、お引取りを」

「く、く、クソっ!! 帰るぞっ!!」

「ひ、ひい!」

無様。

そんな言葉が、似合いすぎる去り姿。

その姿が見えなくなるまで睨みつけていた俺を。

「……おかえりなさい」

「……ただいま、タエさん」

見慣れた、そしてずっと見られなかったタエさんの優しい顔が迎えてくれた。

MI作戦は極めて順調なようです

「どういうことだっ!!」

墓場鎮守府、提督の私室。

ベッドの上で眠る提督と、当てていた聴診器を話しながら首を振る医者らしき男に詰め寄る天龍。

「言ったとおりです。医学的には、生きています。ですが、目を覚まさない理由がわからない……俗に言う、植物状態に近い」

「植物状態……って何？ え？ 提督、眠っているだけだよ？ そうだよ？」

改めて口から出た言葉を受け入れられず、瞳を揺らしながら話す時雨。

夕立と龍田は何を思っているのか微動だにせず立ち尽くしている。

「そう、眠っているだけです。目を覚ます確証のない眠りについているだけ。ですが、点滴といった外部からの栄養補給も何故か出来ず……このままではいずれ死ぬという保証しか出来ない眠りと言え——ひっ!？」

「起こすっぽい」

「夕立っ!!」

いずれ死ぬ。

その言葉が出た瞬間、夕立は艤装を展開し医者という言葉が終わる前に主砲を突きつけた。

「あなたは、医者っぽい。軍医っぽい。人間を治療する人っぽい……なら、提督さんを起こして」

「ひ……あ……」

「離れろっ！ 夕立っ!!」

青い顔をして地面に座り込む時雨、全ての表情を消したまま立ち尽くす龍田。

そんな中、驚きの行く先を決められず、手放せなかった理性が天龍を動かす、夕立を押しさえつける。

「離して！ 離すっぽい!! 起こして！ 起こしてよ!! 提督さんを

……起こし——くあ……」

錯乱、そういつていい状態だった夕立は天龍の手によってその勢いを殺される。

提督は、確かに生きていた。

医者が言ったように、医学的には。

だが、どうやっても目を覚まさない、その気配すら感じない。

刺激に反応がない、瞳孔すら反応を示さない。

ある意味、植物状態の者の方が状態は良いとも言える。

このままでは衰弱死の可能性があると点滴を施行しようとするも
どういう訳か針が肌を通らない。

まるで目に見えないくせに頑丈なボールに包まれているかのよう
に。

従つて、いずれ死ぬ。

「……提督が、死ぬ？」

「は、はい。点滴等による栄養補給が出来ない以上、このままでは
……」

静かに、龍田が確かめるように口を動かし返答を得る。

起きなければ、目を覚まさなければ死ぬ。

改めて理解した時。

「提督……お願い、起きてー？」

「……」

いつものように、努めていつものように。

龍田は優しく、提督へと声をかけた。

「私、いやよー？ 提督がもう私の名前を呼んでくれないのも、笑顔を
見せてくれないのも」

「……」

提督の反応は、ない。

それでも。

「まだまだ一緒にやりたいこと、いっぱいあるんだよー？ また、デー
トだつて行きたいし、あなたと笑い合いたいんだー……だから、提
督ー？」

言葉が続けられる。

望みを、願いを提督にぶつけ続ける。

今まで、何も言わずとも自分の願いを全て叶えてくれた提督だから。

こうしてらしくなくも言ってしまうえば、起きて、叶えてくれると思っただから。

「いや……いやよ？　提督。目を覚まさない、なんて……死ぬ、なんて……死……」

「龍田っ!!」

言葉が続く度に、願いを一つ言う度に龍田の理性が溶けていった。危うさを増していった。

だから天龍は龍田の名を呼び。

「悪いっ!!」

「あ……」

龍田の意識を奪った。

気を失った龍田を抱えて、同じように意識を飛ばした夕立の隣に横たえて。

「時雨……もうこれ以上、オレに何かさせないでくれよ……?」
「……」

涙の混じった声に、時雨は何の返事もしない。

だが代わりに時雨は提督の手を握った。

まだ、生きている。

それを感じることで、辛うじて理性を繋ぎ止めることが出来たから。

「……目を覚ます、手段は?」

理性という舞台にしがみつきながら、極めて冷静に天龍は問う。

僅かな、それこそ蜘蛛の糸をたぐるような頼りない可能性でもあればと。

だが。

「……わかりません。こんな症例は初めてだ……ただただ眠っている。刺激に何の反応も示さないことから過眠症といった病気の線も

考えられませんし」

可能性がない、のではない。

検討もつかない、と答えられた。

自分より、艦娘より遥かに人体へと知識を持っている人間がそう答えた。

ならば、あと聞けることがあるとするならば。

「……提督は、あとどれくらい生きていられる？」

「……っ」

天龍の問いに、時雨の身体が震えた。

こんな事を、聞きたいわけではなかった。

自分で自分を追い込むような、希望を打ち消してしまうかのような問いを、したいなんて思っていない。

だけど聞かなければならないと思った。

墓場鎮守府筆頭艦娘。

それがどういう意味を持つのか。

図り知れてはいないその言葉。

ただこの時、天龍はその立場から聞かなければならないと、知る義務があると考えた。

「……医者は、正確な死期なんてわかりません。ただいずれ死ぬ。それだけは確かです」

「……そう、か」

「手は、尽くします。何をすれば良いのか検討もつきませんが、まずは病院に——」

「ダメだよ」

搬送する。

遮ったのは時雨。

「で、ですが何をするにも設備が——」

「……わりい、けど。面倒だとは、わかってるんだけどよ……ここで、診てくんねえか？　もう……耐えられないんだよ……提督が、ここにいねえことに」

頭では、理解している。

ここに居てもろくな治療は受けられないと。病院に入院して、ちゃんとした設備、人間に治療を受けた方が良いと。

だが、ダメだった。

先程まで自分たちを突き動かしていた想い。

提督が居ないから、我を失った。

我を失ったから、やらないことをして、失敗しそうになった。

それも全ては提督がいないから。

医者に向けられる、二人分の懇願に近い視線。

却下するべきだと医者としての頭が言っている。

術がなくとも、見つけられずとも、病院へ行くべきだと。

「わかりました……手配を、進めます」

「ありがとうよ……」

だが折れた。

言い訳として、どうすることも出来ないからなんて弱々しいものもあつたが、何よりも強い想いを感じたから。

ならばそれを全力で叶えようと。

今まで自分たちを救ってきてくれた艦娘、そしてそれをまとめる提督。

全力を尽くす。

それは一人の護られている自分という人間が出来る敬意の払い方であり恩返し。

その想いを胸に、退室した。

「時雨……」

「うん、わかってる……ありがとう。だけど……」

瞳の揺れを大きくする時雨。

提督の命であると定めた時雨。

考えていることは、わからない。ただ。

「……皆に説明してくる。その間、提督を頼むな？」

「……うん、任せて、よ」

もしも、提督が死に至ったのなら。
時雨だけじゃなく、天龍も……墓場鎮守府全員がどうするのか。
それだけは分かっていた。

「ソレコソ、マンシンネ……!」

「シャラップ!! 沈むならお一人で!! 榛名っ!!」

「はいっ! 榛名は大丈夫ですっ!!」

墓場鎮守府に漂う暗い空気とは真逆に、M I作戦は第二段階へと進んだ。

長門達の奮戦あつて、作戦第一段階は見事に金剛型戦艦を温存。

——後は、任せた。

ただ一言を信頼の名の下に金剛へと託し、司令部近海警護に従事。
そして今。

「全砲門っ! 開けっ!!」

「気合、入れてっ!! ばーにんぐ……らああああぶっ!! ですっ!!」

長門達に倣った、金剛型戦艦四姉妹の一斉射が作戦第二段階海域最深部で待ち構えていた中間棲姫を穿つ。

「ソナ……ワタシガ……オチルト……いうの……?」

「……ハイ、あなたは落ちます。海に……イエ、希望に落ちるのデス」

金剛は、理解した。

空母棲姫の言った *she is me* という言葉。

彼女たちは、自分達艦娘の行く末、その可能性の一部で、可能性に至った存在だと。

同時にどうすれば救えるのかも、理解出来た。

深海棲艦が絶望に沈んだ存在だと言うのなら、艦娘は希望の上に立つ存在。

艦娘が、深海棲艦を撃つ。

それは、それこそが彼女たちを救う唯一の方法なのだ。

「ところで、比叡?」

「はいっ! 何でしようお姉様っ!!」

だから、希望を持って、その化身として深海棲艦を撃つ。
絶望に彩られた彼女たちに希望の光を差すために。

「ソレ、私のセリフネー？ 真似したら、ノーなんだからねっ！」
「えへへっ！ ぐめんなさい、つい！」

そんな想いを象徴するかのように、光の粒となって消えていく中間
棲姫を背に彼女たちは笑い合う。

もしも、叶うのなら。

深海棲艦となつてなお、希望を求めるのなら。

一緒においでよ、希望の道を進もうよと誘う。

ここは温かい場所、仲間がいて、きつと心を満たせることが出来る
からと。

「金剛さん」

「……由良さん、それに羽黒さん」

戦場に似つかわしくない、いや。

不自然ながらもあつていて欲しいと思える笑顔振りまく金剛
へと、近寄つていったのは由良と羽黒。

「ようやく、わかりました」

「あなたは……ううん、あの提督さんは、ずっとそうやって戦ってきた
んですね」

金剛へと少し呆れたように、困つたように笑いかける二人。

そんな顔へと金剛は笑顔を一層深めて声をはずませる。

「イエースッ！ 提督は、私達の……イエー！ 海の希望デスからっ！」
改めて。

金剛はあの時、深海棲艦に限りなく近い存在であつたことを思い出
す。

もしも、提督と触れ合うことなく空母棲姫と相対していたなら。

きつと提督が来ても来なくても、金剛はそのまま深海棲艦となつて
いただろう。

提督という希望に触れることが出来たから、ほんの少しでも、その
光を浴びることが出来ていたから。

その光に導かれて、光の糸を手繰り寄せることが出来た。

そう金剛は確信している。

「ふふっ、少しだけしかお話出来ませんでしたけど」

「ほんとにそう、信じてしまえそうね」

金剛の戦う姿に、提督の姿を見た二人。

同じく僅かにしか触れられなかった光ではあるが、もしもその光の下戦えるのならどれほど幸せなのだろうと思える。

「何言ってるのデスカー？ 今、こうして肩を触れ合って共に戦ってイマス！ ならあなた達だって、提督の艦娘デース！」

ニコニコとそんな事を言う金剛。

ぽかんと呆気にとられながら思わず金剛へと目を丸くする二人は、一拍の間を置いた後。

「そう、そうね！ 私達だって、そうなんだよね、ね！」

「はいっ！ 私、とっても嬉しいです!!」

大きな笑顔を浮かべて笑った。

連合艦隊。

この作戦中だけなのかも知れない。

だが、それでも今、あの提督と共に戦っている、そう信じられる。

そう、金剛は言っている。

「ハイッ！ お二人トモー？ この次も、頼りにしていますからネー！」

「了解です！」

「お任せ下さいっ！」

そのまま笑顔で次の準備をするために離れていく二人。

やっぱり笑顔でその姿を見送って。

「提督……見ていてくれてマスか？ この場にあなたいないこと、とても残念デスが」

目を瞑ってそう零す金剛。

思い浮かべた提督は一体誰だろうか。

「私は今……とても、幸せデス!!」

苛烈で過酷な海に立ってなお、薄れない気持ちがある。

貫き通したい想いがある。

「最高の勝利……提督、これが、そうデスよね？ 待っていて、下さい
ネ!!」

故に戦う。

全ての存在を幸せにするために。

終わらない戦いのようです

「我々は……いや、私は一体何故存在するのだろうか」

「……急にどうしました?」

MI作戦司令部。

作戦は第三段階へ移行し、現在進行中。

そんな中、不意に中將が口を開く。

「艦娘は……いや、少なくともこの作戦に参加している艦娘は、私がいなくともこの成果をあげていただろう」

作戦第二段階は理想どころか最高の状態で突破できたと言える。

損傷は軽微とは言えないものの、大破により進軍不可能へ陥った艦娘はおらず。

第一段階で活躍した長門、陸奥にしても中破状態で帰ってきて、今も尚司令部付近の警備を続けている。

平たく言えば、損害ゼロ。

「……それは、私にしてもそうですよ」
「……」

長官も、中將と同じ感想は抱いていた。

主に墓場鎮守府の艦娘は間違いなく、勝手に進軍したとしてもこの作戦を完遂させていただろう。

そう、確信している。

「ならば尚の事。……なあ長官? 私がやってきたこととは、何だったのだろうか」

だからこそ、そんな言葉が出た。

中將の、今まで、歩んだ軌跡。

長官が長官という座に辿り着くまでの軌跡に憧れ、己の範とし歩み続けた。

艦娘を兵器として、いや、己の道具、駒として捉え扱い歩んできた。

提督養成学校でも己の考えを正しいものとして、役立つものとして広めた。

成功者である長官。

その軌跡を必死に学んだ結果が中将という地位。故に己は間違っていないと盲信することが出来た。

そしてそんな自分が、今この場において、何の役にも立っていない。悔しいと感じることすらない。悔しいと思う資格がない。

何故彼女たちがここまで戦果をあげることが出来ているのか。

人によつては、あるいは艦娘にとつてはひどく簡単な答えがわからない中将。

「間違いではない。そう思っていますよ、私は」

「違ふだろう!? 間違いだったのだ! 正しかったというのなら!

何故私は今! 何の役にも立っていないというのだ!!」

長官は理解している。

いや、理解しか出来ていない。

今海で戦っている艦娘は何のために戦つて、勝ち続けているのか。

それは紛れもなくあの提督のため。

提督の意思を海に示すため。

そうだと理解だけしている。

「わかりませんよ、中将」

「わからない、だと!? ならば——」

「私も、今……目下勉強中ですので」

ただ中将と違ふ部分。

それがこの戦いから自分たちの役目を探し出すことと定めている。

「結果論ではありますが、やはり私はこの作戦が失敗するとは思っていないかったのでしょうか。彼の艦娘が敗北する光景を思い浮かべられない。そう思ってしまった」

提督が拉致される。それにより艦娘の動揺が生まれる。

そんなハプニングがあつて尚、敗北はありえないと無意識に感じていた長官。

「彼が、存在している。それだけで彼の下に帰ろうと、勝利して無事に帰ろうと言う気持ちは……きっと誰にも、深海棲艦にも負けることはない」

「それが……それが何だというのだ! それはただ私達の必要性がな

いと示しているだけではないか！」

「だから今ここに居るのですよ、中将」

「っ!？」

必要とされるために。

そのためにここに居ると長官は言う。

「彼女たちは一つの成功例です。そう、あくまでも一つの。成功の形は一つだけじゃないはずです、私がかつて成功者と言われたように」
「……」

「元帥も言っていたように、我々は学ばなければならない。彼の成功を真似るだけじゃない、私だけの……いや、我々だけの成功の形を探すために」

それこそがこの場にいる意味。

長官は、そう、理解していた。

新たな成功者として提督が姿を現し、かつて思った仮の理想を顕現された。

故にその成功をさらなる高みへと押し上げることに注力しようとした。

「今回のように、予期せぬアクシデントがあつて、それが悪い方向にしか進まないことだつてこれからあるでしょう。その時、私達は無力なままではいけない」

だがそれだけじゃ駄目だと。

人類という大きな大きな守護対象。

その運命を一人だけに背負わせてはならないと。

「でなくば、一生……我々は海に見放されたまま、終わらない戦いを続けることになる」

「海に、見放される……?？」

長官が言うのは、今のままでは深海棲艦を生み続けてしまうといった考えからのものだが、それは正しい。

例えば提督が認められても、それは人を認めただけではなく提督だけで。

人類を背負った一人の英雄だけが認められるというだけのこと。

「私にしか、我々にしか出来ないことがあるはずです。それを見つけて、海へと示さなければならぬ」

「私にしか、出来ないこと……」

人として、人類という大きな括りとして。

海に認められる。そのために出来ることとは？

「やってきたことは失敗だったのかも知れませんが、間違いだったわけではない。彼が一つの答えを示したのなら、それを基により良い答えを探せるはずです」

「失敗してきた、私……いや、私だからこそ、か」

自惚れなのかも知れない。

だが、自惚れなければならぬとも長官は思った。

失敗して終わりじゃない、成功したから戦争が終わるわけでもない。

ならば歩みを進めるための自惚れならば。

「馬鹿にされましよう、蔑まれましよう。そして、新たなる一步を踏み出しましよう。私達は、そうして良いのです」

「……ああ」

戦況に目を戻せば、決戦が始まる間際。

「頼んだぞ……」

中将は初めて、艦娘に勝利を願った。

「空母、棲姫……」

何度目の衝突だろうか。

不敵な笑顔を見るのは何回目か。

それでも今はかつて抱いていた感情とはまったく違うものを心に宿すことが出来ている金剛。

「金剛さんっ！ 敵の編成わかりましたっ!!」

「サンキューー!」

声を上げる翔鶴。

その口から伝えられたのは空母棲姫を旗艦とする連合艦隊。

空母棲姫以下、戦艦棲姫、防空棲姫一隻、軽巡棲姫と軽巡棲鬼が一

隻ずつに駆逐棲姫が一隻。

「連合されている艦隊は鬼、姫級こそ確認されないものの、戦艦、空母、重巡等のフラグシップ級が揃っていた。」

「ねえ、金剛さん……あれって、さ」

「アナタノ……カエリミチハ……ナイノ……。モウ……ナイノヨオ……！」

「ニドトフジョウデキナイ……シンカイへ……シズメツ！」

「……ええ、言いたいことはわかりマス」

川内が認めたくないように、だが認めなくてはならないと金剛へ口を寄せる。

知っている艦娘に極めて酷似している軽巡棲姫と軽巡棲鬼の姿。

自身の妹に、似すぎているが故に、気づいた。

それは川内だけじゃない。

「まさか、あれって……！」

「う、ううん……そんな、だって……！」

艦隊にいる艦娘、それぞれが気づく。

中間棲姫と戦った時、薄らぼんやりと感じた感触。

それは、間違いでは無かったんじゃないかと。

「そうデス!! 彼女たちは！ 私達が沈めばなるかも知れない姿デス!!」

「!？」

落ち着いても、気にするなども金剛は言わなかった。

ただその想像が正しいと告げた。

「彼女たちは深い悲しみ、怒りを抱えて沈んだ私達デス!!」
艦隊に奔る動揺。

その一切を気にせず金剛は口を開き続ける。

「皆さんはっ!! そんな気持ちで戦いたいデスカ!？」
「っ」

「私は！ そう思いません!! 笑って！ 称え合って！ 勝利して！
帰って提督に誇りたいデス!! そして彼女たちは！ それが出来
なかった！ 出来なくなつた艦娘デス!!」

金剛の言葉で動揺に新たな色が宿る。

悲しみ、哀れみとも言うべき感情。

「可哀想だと思いきマスカ!? 哀れだと感じマスカ!? 私は! そうとも思いマセン!! だって私達には!! 彼女たちをそんな悲しみから救う事が出来る力があるカラ!!」

救われた金剛。

そして金剛が、提督が救ったあの空母棲姫。

だからこそ、言える。

「私は! 撃つ!! 撃ちマス!! 一切の躊躇いなく! 哀れみもなく! 次に会う時笑うために!!」

死後の世界か、それとも別の世界か。

何かを考えて出た言葉じゃない。

それでも妙な確信があった。

「私は……私はっ!! 戦うっ! そして勝ちますっ!! だから——!!」

同じ、艦娘として。

同じ、戦友として。

また、会える。

また、会うために。

「金剛、改——っ!!」

「おねえ、様……?」

新たな姿。

形を変えた金剛。

それでも眩いた比叡は間違いなく彼女が金剛であると理解している。

「提督は、無事に鎮守府へと帰ってきまシタ」

「えっ!?!」

明かさなかった情報。提督の無事。

「なら何の心配もありません、私達は、彼女たちの無念を、勝利の喜び

と共に、語ることが出来マス!!」

モチベーションの変化を恐れたその情報。

それを今、勝利の意思を確たる物にさせるため、明かした。

「だから皆さん……」 着いて来て、下さいネー!!」

続く言葉に、この場にいる全ての艦娘が。

「——了解っ!!」

理解できない何かを理解して、返事を高らかに吠えあげた。

言葉にせずつとも、提督に伝えなければならぬと何かを理解して。

新たな力を身にまとった金剛の背中に続きながら。

「改……二、だど?」

「……」

驚きの表情で顔を固める中将と長官。

改二だけではない、その驚きは戦闘の光景、展開に対しても。

——負ける気が、全くしない。

艦娘がそう思うならわかる。

戦場に、戦闘の最中にいる存在がそう感じるならわかる。

だが、それすら越えて、思わされた。

「改の先が……? 待て、あの改造ですら限界目一杯だったはずだぞ

!?! あれの先など……!!」

驚きを動揺に変えたのは中将。

人為的な改造計画。

それに携わっていたからこそ、ありえないと誰よりも感じた。

出来ることは、思いつくことは全て行っただけだった。

その結果が不完全かも知れないが、あれだった。

「これが……艦娘の可能性……」

驚きのまま、艦娘の戦う姿に目を釘付けにされているのは長官。

金剛が、改二に至った事がきっかけなのか。

比叡が、榛名が、霧島が。

次々に改二へと至る。

改二だけではない。

翔鶴が、瑞鶴が、艦学の面々だけじゃなく、由良、羽黒ですら改へと至る。

「馬鹿な……一体、何が……」

中將の声は司令部に溶けて消える。

流れる映像は苛烈の一言。

あれほど強力だと実感すらしていた空母棲姫の艦載機。

それは次々と瑞鶴、翔鶴の戦闘機により撃ち落とされ効果を失う。防空棲姫が襲い来る艦載機を撃ち落とそうとすれば、それを邪魔するかのようには鳥海や羽黒の砲撃が向けられる。

軽巡棲鬼、姫にしてもその行動の悉くを躲され、反撃に晒される。

敵側の連合艦隊、姫、鬼級に至っていない深海棲艦など、相手にすらならない。

「……勝ちましたね」

「……ああ」

軽々しく言っただけの良い言葉ではないと重々に承知している。

それでも、そう、それでも口から出てしまい、更には頷いてしまった。

「これが……ヤツの艦娘」

「ええ、そして彼の力、でしょう」

勝利を決定づけたのはやはり金剛。

狙いすまされた一撃が、最後まで抵抗しようとしていた空母棲姫に吸い込まれる。

光の粒が、画面に溢れ、その光越しに勝利へと喜びの声をあげている艦娘の姿が見えた。

「MI作戦……達成、成功。いや、大成功、だな」

「結局、我々はまた、何も出来ませんでしたね」

苦笑いを浮かべる長官へと、何に負けたと思ったのか同じような笑顔を返す中將。

「ああ……だが、このままでは終われんな。ここまでの成果を見せられて……心を燃やせない軍人などいない」

「はは、仰る通りで……ん？」

そんな二人の間を裂くように、無線の音が鳴り響き。

「こちらMI作戦司令部……何っ!？」

「どうしたっ!？」

「わかりましたっ！ すぐに!!」

慌てて無線を切る長官へと声をかける中将。

そして慌てたまま、長官は聞いた言葉そのままを返す。

「深海棲艦による本土強襲です!! すぐに戻りましょう!!」

AL／MI作戦。

最後の戦いが始まろうとしていた。

家族を知るようです

結局のところ。

「お疲れ様でしたね」

「いえ……」

あっちの爺さんによって完成されたんだろう。後継者。その道具たる俺は。

差し出されたお茶を一口飲めば懐かしい苦味。

このお茶を口にしたのはいつぶりだろうか？

いつも……毎年行われたさつきまでの行事。

終わればさつきと帰っていたから、こうやってタエさんと二人顔を突き合わせるなんて久しぶりって言葉じゃ足りないと思えない。

爺さんが死んでから。

部屋から出ることが無くなった俺だから。

ドラマだなんだであるシーンよろしく、誰が何を言おうとドアを開けなかった。

食事もドアの前に置かれているものを空腹の限界が来たら食べていた。

タエさんだつて辛いだろうに、悲しみに沈みたいだろうに必ずドアを開ければ置かれていた食事。

冷たくなったそれを、どう思つて食べたっけ。

目の前のタエさんは、不思議とにこやかで。

「こうしてお話するのは、いつ以来でしょう」

「……すみません」

思わず肩を震わせてしまう。

申し訳ない、申し訳ないと頭の中で言葉が駆け巡ってる。

まるつきり責めたような色は含まれていないのに、責められていると感じてしまう。

「いえ、私は嬉しいのですよ、本当に。こうしてあなたの声を聞けて」

「……すみません」

気遣うような、俺を元気づけるかのような声色が、鋭い針のように

胸へと突き刺さって。

そんなつもりはないと少し慌てたタエさんだけど、やっぱりその痛みは拭えなくて。

こうしていても埒が明かない。

俺も、タエさんもきつとそう思った。

「あなたは……どうしますか？」

「どうする、とは？」

だからだろう話の矛先が変わったのは。

とぼけたような返事をしてしまったけど、わかってる。

要するに。

「後継者として認められたあなたです。これから、この道場をどうするか……いえ、どうしたいのでしょうか」

そういう事。

あの試合が終わった後、呆然とするままにそう認められた。

皆、喜んでいた。

喜びを表すその理由はわからないけど、きっとあのおっさんがあれこれしていたんだろかなんて、適当に悪意をぶつけて納得している。

「俺は……」

どうしたい、のだろう。

いや、もしも……もしもあの時、爺さんとやった最後のやり取りを思い出すのであれば。

恩を返すために後継者として振る舞い、道場再建に精を出すべきだろう。

何よりも俺はそのために育てられたのだから。

「好きにしている……あの時言った言葉は嘘じゃないのですよ？」

「っ!？」

……はい？

「後継者として認められはしましたが、そうなれと言っているわけはありません」

「何でっ!？ 俺は……俺はっ！ そのためにっ!!」

「だったらもうとっくにそうしていますよ」

ニコニコと笑いながら言うタエさん、その笑顔の理由がわからない。

今も、さつきも。

何でこの人はそんな笑顔を浮かべて言えるんだ？

「あなたをあのだ場で見た時……本当に嬉しかった。いつも能面のよ
うな顔をしていたあなたが、何かに迷っている、戸惑っているような
表情を浮かべていて」

「わ、わけがわかりませんよ!? な、何で俺が迷っていたら嬉しいんですか!? 戸惑っていたら嬉しいんですか!? 俺が苦しんでいるのが
嬉しいと言うんですか!?」

待たせた、俺だから。

答えを出すことすら放棄した、俺だから。

そうだったとしても、怒る権利はないってわかっている。

だからそう言って欲しかった。

憎んでいる、もつと苦しんで欲しいと思っている。

そうだと突きつけて欲しかった。

「悩む事、それすなわち生きようとする……ようやく、前を向いて
くれた。そう思えましたから」

「!?」

答えは、何処までも優しくして。

「ありえないっ！ 俺は……俺はっ！ ずっと！ ずっと待たせた！

苦勞をかけた！ 全て投げ出して一人になって！ 挙げ句何の責
務を果たすこともなく！ これまでずっと!!」

「……きつと、あの人も、喜んでる。そう確信しています」

「違うっ!! 嘘だっ!! 俺は道具ですっ！ それも壊れた道具！ そ
れが今更少し役に立ったからと言って喜ぶような人じゃないでしょ
う!？」

待っていた。

それは嘘じゃないだろう。

でも待っていたのは道具としての俺のはず、そうだ、そうであるべ

きだ。

俺は、ようやくほんの少しだけ、返せない程多くの恩を返せただけに過ぎないのだから。

「…………ごめんなさい」

「どうしてっ!? どうして謝るんですか!? それは俺の台詞です!

俺だけの台詞であるべきですっ! 俺には返しきれないほどの恩が

――」

「私達は、どうしようもなく、下手でした」

…………下手?

「普通の……何処にでも居て、何処にでもあるような家族を、あなたに教えることができませんでした」

「普通の、家族……?」

普通。

ずっと偽物だと排他して排除して。

追い求めて、探し求めた、普通。

「子供の居ない私達は愛情の伝え方が拙くて。与えるものを与えようとするもの、全てが届かなくて、届けられなくて」

受け取り方がわからなくて、信じられなくて。

「だから目的を明確にしようとして私達は考えました。あなたを迎えたのは家族になるためじゃない、別の理由だと、わかりやすく」

「うそ、だ……」

だったらそれは、最初から、俺は。

「そうしてようやく向き合えました。家族を望むのは、私達が親にふさわしくなってからでいいと」

「おねがい、します……嘘だと、うそ、だと……」

言ってくれ。言って下さい。

「あなたは成長した。二人でそれに目を細めました。家族にはなれていないのかも知れないけど、幸せは、幸せとはこういったことなんだと確信しました」

だったらなんで。

だったらなんで爺さんは。

「インターハイ出場が決まった時。あの人は涙していました、私も涙が勝手に流れました。嬉しかった、私達は間違いばかりを繰り返していたけれど、遅しく育ってくれた、多くのものを手に入れてくれたと……だから」

——あの日、あの人はインターハイを観に行こうと乗り込んだバスで、帰らぬ人になりました。

「あ……あ……」

「私は……行けなかった。同じく門下生の大事な試合がありましたから……その分わしがヤツの勇姿を見届けてやると、笑って出て行ったのです、あの人は」

ずっと、疑問だった。

だけど考えないようにしていた。

なんで、事故にあったバスに爺さんが居たのか。

あの日感じた本物へのきっかけは、悲しみによって塗りつぶされてしまったから。

伝えられなかった想い、願いだけが。

届かなかったという事実、結果だけが。

ひたすらに俺を貫いて。

爺さんの死を葬式で、テレビで知る度に、聞く度に。

耳なんてなければ、目なんてなければと強く塞いで、うつむいて。

もう二度と、手に入れられることはないんだってことだけが理解できて。

代替を見つけるのが先か、生命を断つのが先かずっと悩んでいるうちに、艦これを知って。

戦って、勝てば手に入れられる。

造れば、確実に、手に入れることが心地よくて。

ずっと勝手に頭で作った陳腐な夢物語ストーリー。

それに艦娘を当てはめて、悦に浸って。

勝手に俺を慕う嫁家族だと誤認させ続けて、逃げていた。

逃げて、現実を見ないようにのめり込んで。

気づけば不動のランキング一位なんて、自分の自己満足に浸り続けて。

誰よりも艦娘と上手く戦えるなんて自惚れにも似た自信をつけて、それを守るため更にのめり込んで。

一人暮らしをする条件が、一年に一度の戦いだけで。

それを終わらせてしまえば艦これが終わるような気がしたからずっと引き分け続けて。

悲劇のヒロイン、主人公だとずっと自分を定義していた。

かつて反発していたのはそう思いたくなかったはずなのに。

弱い。

俺は、弱い。

そうして明かされた事実には、こんなにも動揺して。

そうだ。

そうなんだ。

もしも、もしもタエさんの言ったことが全て真実なら。

いや、真実なんだろう。

そう思える以上、真摯に俺へと言葉を紡いでくれているから。

自分の傷、治りかけているのかすら定かじやないその痛みを堪えて言ってくれていると理解できたから。

だから、真実は。

「俺の、せいだ……」

「……」

俺が、突っぱねたから。

俺が、排他しようとしたからそんな風にしかできなかつた。

すなわち。

「俺が、殺した」

爺さんを、タエさんの心を。

こんな話なんてない。

そうだ、結局の所、全部俺が悪い。

ずっと子供のまま。

棚ぼたで手に入れて。手に入れたいものはずっと目の前にあったのに、それだけには目を向けず。

ずっとずっとホンモノはそこにあつたのに。

「俺が、俺が……俺を——」

コロシテホシイ。

そんな言葉が口から出そうになった時。

「つつ……」

「ふふ、ありがとうございます。一度これはやってみたかったのよ」

やってやった。

そんな笑顔と頬に衝撃がやってきた。

「タエ……さん？」

「良いですか？ 勘違いしないで下さい。私は今、恨み言を言っているわけではありません。感謝しているのです」

かん、しゃ？

「回り道をしました。失ったものもありました。ですが、あなたはこうしてここに居て、何かを乗り越えて私と言葉を交わしている……だから、ようやく、言えるのです」

——私の、息子になって下さい。

「……え？」

その言葉と差し伸べられた手。

俺の目をしっかりと、それでいて柔らかく見つめる優しい瞳。

「これが私の答えです。ずっとずっと、あなたと家族になるためにどうすればいいかという答え。最初からこうしておけばよかったと、後悔し続けた結果です」

後悔？ 俺と、同じように、最初の一步を、後悔？

「インターハイの結果も、さっきの試合も……あの人が、私がこの台詞を言いたいがための過程に過ぎません。道場もなんでも、あなた以上に大切なものはないのですから」

それが、好きにしていって言葉の、本当に意味？

昔からも今も。

きつと俺は怯えたような目をしているんだろう。

「俺を、許すって……言うんですか？」

「親とは、そういうものでしょう？ ……いえ、許すも何も。最初から、怒っていません。さっきのビンタは、あまりにも悲しいことを言われそうだったからという理由と、やってみたかっただけです」

くすりと悪戯っぽく笑うタエさん。

それはいつか見た……いや、ずっと変わらなかっただろう俺に向ける笑顔。

罪悪感や、後悔。

そんな暗い感情は、胸に確かとして存在している。

これだけの事をしでかした俺だ。

許されるわけなんてない。

だけどタエさんは赦す罪すらないって言う。

「わかりま、せん……」

「……」

わからない。

もう何がなんだかわからない。

この手を、取って良いのだろうか。

この手に、縫って良いのだろうか。

泣きたい、悲しみたい。

この人と一緒にやり直したい。

そして、家族になりたい。

そんな気持ちと、未だに差し伸べられている手の温かさだけは疑いようのない本物で。

「なら、私と一緒に探して下さい。幸せな家族になる方法を」

「あ——」

その言葉に理解した、理解を得た。

だってそれは。

ずっとずっと俺が探していた方法でもあったから。

だから、俺は、その手を——

決着の時はもうすぐのようです

「くそっ！ どうして急にっ!? 電気ショック準備っ!! 急げっ!!」
「は、はいっ!!」

騒然とする提督の私室。

ベッドの上で眠る提督に繋がれた機器。

モニタに映る血圧、脈拍。

その全てが間もなく訪れるだろう結末を予期させる。

「提督……提督……っ!!」

その手を必死に握る時雨。

「嘘だろ……提督。うそ、だよな……っ?」

ようやく。

ここに至りようやく天龍の顔がわかりやすく動揺を示した。

「提督……っ?」

理解できていない。

今、目の前で何がどうなっているのかわからない龍田。

「……」

呆然と、声にならないまま提督さんと口が動く夕立。

「準備できましたっ!」

「よしっ! 艦娘の皆さんっ!! 離れてっ!!」

突き飛ばされるようにその場所から離れる時雨。

手が、解けた。

それと同時に、提督の身体が不気味にベッド上で跳ねる。

「どうだっ!」

「っ……駄目ですっ! 変わりません!!」

電気ショック機材を放り投げ、医者は心臓マッサージに切り替える。
ここで死んではだめだ。

ここで殺してはだめだ。

提督は、間違いなくこの海に、世界に艦娘を通して光を差し込ませた人間で。

それにより自分たちの未来は少し明るくなった。
そしてその景色はこれから。

これから明るく彩られていくはずで。

艦娘と人間。

力を合わせて未来を共に切り拓く、その先駆けとなる存在。

「戻って来て下さい……!!」

失ってはいけない。

小難しい想いはある。

だがそれ以上に。

「提督っ！ ていとくっ!!」

この子達を悲しませるわけにはいかない。

打算でもなんでもなく、ここにいる存在を救いたい。

それでも、やはり。

「……くそっ!!」

逃れられない運命というものは存在した。

事実を示す変化のない電子音。

「どけっ!!」

認められない。

医者突き飛ばして、見様見真似に心臓マッサージをする天龍。

確かに。

確かに電子音は揺れる。

その行為による衝撃で。

「……残念、ですが」

「嘘だっ!! うそだうそだうそだ!! 認めねえ!! オレは！ 提督が

死んだなんて!! 認めねえ!!」

聞こえない。聞きたくない。

そんな風にマッサージを続ける天龍。

その場を譲った、奪われた医者の合間を縫うように。

時雨が、龍田が、夕立が入り込み。

「あ……あ……」

ゆっくりと。

ゆっくり、だけど確実に失われていく温もりを手に取り実感した。提督が、もう、動かないということ。

「ああああああああああ!!」
慟哭。

一斉に上がった悲鳴。

悼むなんて出来ない、そうだとことを信じられない。

そんな中、深海棲艦襲撃を示す警報が鳴り響いたが。

それは部屋に充満した悲しみの声によって、かき消されてしまった。

「深海、棲艦……っ」

鳴り続けている警報にようやく気づいたのか。

それともこの状況を引き起こした原因への恨みの発露か。

第一艦隊は一斉に崩れ落ちた身体を起こし、部屋から勢いよく出た。

廊下で崩れ落ち、瞳から光をかつてのように消した六駆と初めてだろう絶望に身を落とした那珂。

そんな第三艦隊が目に入っただろう第一艦隊は走り去る。

「……勝利を、提督に」

俯き立ち竦んでいた第二艦隊。

よろよろと入室してきた第三艦隊と入れ替わるよう、静かに。

だが足取りは力強く、怒りを目に宿し前を見つめて退室した。

「提督……」

「しれい、かん」

第三艦隊の面々が、提督の身体に触れる。

温かいと感じた。

幸せと感じた。

かつての居場所そのもの。

「しれい、かん……っ!」

涙を流していると気づけない。

滲む視界は自分がこの光景を認められないんだと思って。

それでも伝わってくるのは変えられない死、そのもの。

「うそ、なのです……こんなの、うそなのです」

自分が何をしようとしているのか。

それすらも理解できないまま、電は艤装を展開して。

「やめてっ!!」

「はなっ、離すのですっ! 私、私もっ……!!」

主砲を自分に添えようとした電を雷が必死に止めた。

暁、響は動けない。

動こうという意思がまるで持てない。

抱いたこの人とならという想い、いくらでも身体を後押ししてくれる優しい絆が今、ただただ重くのしかかってその身体を地面に縫い付ける。

「やめて」

「っ!? なか、ちゃん……」

それは聞いたことのない声だった。

短く、冷たく。

いつもの元気で温かい声からは想像もできないほど鋭く。

「提督を、これ以上、悲しませたくない」

「……うっ、う……うあ、うあああ……」

提督が嫌だろう、許せないだろうそんな行為を認めるわけにはいかない。

その思いが、那珂の口を動かした。

そうしてやっぱり崩れ落ちる電。

大粒の雫を床に伝わせ続ける。

「那珂ちゃん……私、私……」

「うん、良いんだよ……泣いて、いいんだよ」

これ以上我慢できない。

そう顔に書いている雷。

そんな雷を優しく、包み込むように、許すように那珂は言う。

「でもっ! それじゃあ那珂ちゃんがっ!!」

「いいの……だって……」

——私まで泣いたら、本当に提督が死んじゃったって認めちゃうことになるもん。

「天龍」

「……なんだ？」

「もう、我慢しなくていいっばい？　我慢する気ないっばい」

波止場。

並び立つ、墓場鎮守府艦娘。

嵐の前と世界が理解していた。

故に、奇妙な程の静けさが漂っている。

その中で時雨が問い、夕立が断定した。

「天龍ちゃん……もう、私も……」

「天龍さん、私も、きつと……」

全てが、全てと言えるものを失った。

残ったのは力の残滓。

世界で一番大切で、愛しい人が遺してくれた、絞りカス。

「ああ……オレも、もう、無理だわ」

ならばやはり捧げるのも返すのもその人に。

もう、止められる意思も絆もない。

故に。

「——目標は本土強襲が目的と思われる全深海棲艦の撃沈っ!!　もう

何も言わねえ!　もう絶対に止めねえ!　止められねえ!!　思う存

分沈め尽くせっ!!」

心のままに征け。

そういった。

墓場鎮守府。

艦娘の、墓場。

それが本当にそうだとするのなら。

「総員……抜錨っ!!」

「了解っ!!」

提督からもらったものを全て仕舞って。

彼が好きだと言った自分という艦娘、それは全て提督の側に置いて。

駆け出した。

「……」

砲撃、雷撃の音が響く度に、深海棲艦が声を失い海に沈む。

「今沈んだのは駆逐艦か、軽巡洋艦か。」

なんでもいい。

声もなく、ただ黙々と深海棲艦を沈め続ける作業。

時雨は、自身を提督の命と定めた。

ならば何故今自分のみが生きているのか。

今の状態に、不快感しか覚えられない。

気持ち悪い、キモチワルイ。

蒼い瞳を煌めかせ、念仏を唱えているかのように不快感を頭に巡らせる。

その姿を、心底不気味だと深海棲艦は思った。

どう見ても、どう感じても、時雨という船は沈むことを望んでいて、

早く殺されたいと願っていると分かっているのに。

沈められない。

そう思った今も、随伴艦の駆逐艦が沈んだ。

単艦。

周りには誰もいない。

「どう考えても、自殺志願者。」

だと、言うのに――。

「早く……コロシテヨ」

その言葉と共に続きの思考を止められた。

「アア……テイトク、ボクハ……」

時雨は、揺らめく。

不快感と青白い光を身にまといながら彷徨い求める。

己の死に場所を。

「沈めっ！ 沈めっ！ さっさと沈むっぽい！！」
響く音は多い。

声、砲撃音、雷撃音。

激しく動く夕立の傍で舞う水飛沫の音。

見敵必殺。

深海棲艦からすれば、見つけたと思ったときには損傷していて、
損傷を実感すれば沈んでいた。

「後悔するっぽい！！ 提督さんの力に！ 成すすべもなく沈んでっ！！

後悔！ し続けるっぽい！！」

夕立は、自身を提督の力と定めた。

ならばそれを示し続けよう。

己が動けなくなるその一瞬まで。

緑の瞳はただただ苛烈に舞い続け、定めた敵を後悔の海に沈め続ける。
る。

その姿に、ひたすら恐怖した。

単艦。

一人ぼつちに舞う夕立は駆逐艦。

そうだと言うのに。

戦艦、いやそれ以上に強力な船だと思ってしまう。

「沈めっ！ 沈メ……シズメエエエエエエエ！！」

それ以上に。

絶対に沈めるといふ強い意思。

「アハ……アハハ、ユウダチ、トツテモ、ツヨイツポイ！！」

夕立は、舞う。

不快感と青白い光を身にまといながら踊り狂う。

力という舞台の上を。

「返して……返してよっ！！」

流れる声は悲しみの色。

苛烈、激烈な戦場でただただ酷く頼りなく。

簡単に折れてしまいそうな姿だと言うのに。

倒れられない。

培った力は倒れる事を許してくれない。

無意識に相手の視線から外れてしまう龍田。

「どうやっても沈むことは出来ない」と悟った彼女は、失った事実を変えようともがく。

「あなた達がっ！ 奪った！ 私の、私達の幸せをつ！！ だから、返してっ！！」

守るべき、守りたいと思い願った幸せ。

誰かが笑って提督も笑う。そんな光景。

「守りたいと思ったそれがなければ、自分の生きる意味はなんなのか。」

構えた槍は、不気味な色を放つ。

色が、虚線を描く度、何かが沈んだ。

単艦。

後ろにはなにもないはずなのに。

「返してっ！！ 返セッ！！ カエセエエエエエエエ！！」

これ以上前には進ませない。

その場に沈め、沈んでしまえ。

「タイトクラ、シアワセヲ！！ カエシテッ！！」

龍田は、慟哭する。

理性を色で引き裂き、喪失感を認めないように固執する。

幸せだった過去に想いを馳せながら。

「オラオラア！！ 恐いか！？ 死にたくねえか！？ そうだよなあ！！」

吠え上げられた声は怒りの遠吠え。

持ち主を失って尚、刃は戦場を、深海棲艦を切り裂いた。

意思は止められて。

意志は失われて。

それでもなお、身体に、心に宿ったモノが世界を切り裂いた。

勝手に敵を倒してしまう、沈めてしまう。

それはまるで機械のように。

こうすることが当然かのように。

「オレも……そうだったぜ!? 死にたくねえって思ってたよ!! だけどなあ!!」

帰るべき場所、還りたい場所。

何処までも輝かしい笑顔と意思の宿る場所。

それが、もう、失われた。

貫くはずだった提督の思い。

それを宿していたはずの天龍が持つ剣。

単艦。

天龍が持つ装備以外、何も無いはずなのに。

「ぜってえー! 死んでモッ! テメエラハユルサネエ!!」

もうこれから新たな意思は宿せない。

ならば消えろ、消えてしまえ何もかも。

「シズメ! シズメツ!! フッフ、コワイカ!? ナラ、キョウフライダ

イテ! シズンジマエツ!!

天龍は、至る。

失われた意思を、新たに生まれた意思で塗りつぶして。

誰のものでも無くなった、自分を振るいながら。

「……コワイ」

「エエ、ホントニ。ドッチガ深海棲艦ナノカ、ワカラナイワ」

戦場を眺める、北方棲姫と港湾棲姫。

口から出た言葉通り、何処か少し怯えている様子なのは北方棲姫。

そして港湾棲姫が言った通り。

墓場鎮守府の戦いぶりは、まさに呪いのようだった。

第一艦隊は、それぞれ単艦で思うがままに。

第二艦隊は、艦隊を維持したまま戦場を蹂躪した。

その誰もが、何かで狂ったように。

「フフ、理由ナンテ……ワカツテイルノニネ」

「……テイトク」

自嘲した港湾棲姫。

こうなったのは自分たちのせいだとわかっている。
分かっていないふりをしたわけではない、認めたくないわけでもない。

ただ、やっぱり彼がいること、いないことの意味を思い知った。
そしてこの戦場に存在するのは両者とも、提督という存在がいないモノ。

「決着ヲ、ツケマシヨウ」

「……ウン」

果たして海は提督という存在を必要としているのか。

いや、海は、世界は人類と共に生きることが出来るのか。

顔を上げれば、まるで港湾棲姫達がそこにいると分かっているのか
向かってくる第一艦隊と第二艦隊。

決着の時は、すぐそこまで迫ってきていた。

提督が選択したようです

取れなかった。

後一押し、薄皮一枚。

それがタエさんと俺の手を遮るもの。

「タエさん……俺、大事なもんが出来たよ」

「大事な、ものですか？」

手を少し伸ばす度に、聞こえてくる声。

——提督。

俺を呼ぶ、艦娘の声。

幻聴なんだろう、きつとそうなんだろう。

だけど、耳にこびりついて離れない声。

理解した。

家族ってやつを、愛ってやつを。

それは言葉にできない、何か。

ようやく、俺は。

「うん。嫁が出来た」

「えっ？　そ、それはほんとですかっ!?　わ、私に義理の娘がつ!?」

さつきまでの雰囲気は何処へやら。

色めき立って喜んでくれるタエさん。

「でもさ、ここには居ないんだ」

「……はい？」

ひでえやつだよな。

自分では、嫁だ、家族だ、戦友だと言っておいて。

その実俺自身がそう認めていないだなんて。

「ずっと、ずっと……行ってしまえば二度と帰ってこれないほど遠く

……そんな場所に、いるんだ」

「……」

あいつらは、そうなりたいと願っていてくれた。

何よりも、誰よりも、俺を愛そうとしてくれていた。

今なら、わかる。

肝心な一步を、俺は踏み出していなかった。

愛し方がわからなかったから。

家族になるためにはどうしたら良いか、わからなかったから。

何よりも。

愛して尚、居なくなつた時、耐えられないって知っていたから。

求めれば、手に入れられるって、何処かで気づいていた。

だから、求めなかった。

都合の良い存在を求めていた。

タエさんが……きつと爺さんも。

俺と同じじゃないだろうけど、愛し方を模索して、答えを今、俺に教えてくれたから。

「悩んでいたのは、それですか？」

「多分……いや、きつとそうだと思う」

何が何だかわからないまままで向こうの世界へ行つて、帰ってきて。

いや、ここはもしかしたら酷く俺にとつて都合が良い世界なのかも知れない、もしかしたら本当の世界では、こうならなかったのかも知れない。

だけど。

「愛し方、教えてもらえたから」

それだけは、間違いない本物。

「家族になる方法、教えてもらえたから」

ああ、目頭が熱い。

そうだ、俺は今、決めたんだ。

「だから、家族の下に、行こうと思う」

ずっと求めていたものが手に入る。

そうだと、言うのに。

タエさんの気持ちをも、裏切ることだって、分かっているのに。

俺はあいつらが大好きだ。

それだけは裏切れない気持ち。

それを上つ面で偽物のまま放つて置くことは、出来ない。
理解できたから、分かったから。

実感、出来たから。

「……本当に、子供が大きくなるのは、一瞬なのですな」

困ったように言うタエさん。

申し訳ない。

なんて、もう、思わない。

「タエさんの、おかげだよ」

「そうでしょうか？ そうなら嬉しいのですが……できればもっと近くで、小さな成長から感じたかったなんて……いえ、それはわがままと言うべきでしょう。わかりました」

そう言って立ち上がって、棚の上に置かれていたケースをおもむろに手に取り。

「えい」

「えちよ!?!」

なんでいきなり器物破損!?

いやいやいや!? えっ!? 俺何か悪いこと……しまくってるっ!!

自覚あるよ! ありまくるけどさ!?

「あらやだ、はしたなかったですね。ともあれ、これを」

「……刀」

一瞬で落ち着いた。

爺さんの、刀。

向こうの世界でも譲り受けた、意思貫く決意の刃。

「どんな結果であれ、インターハイが終われば渡すつもりでした」

「……」

そしてこの世界では、この道場の後継者としての証であり。

爺^父さんの息子であるという、絆。

「顔を上げなさい」

「はい」

促され、刀に落としていた視線をあげる。

そこには今まで見たこともない程、真剣で……爺さんを彷彿とさせるような顔をしたタエさんが。

「負けるな」

「はい」

「怖がるな」

「はい」

「生きる。大切を胸に宿して」

「はいっ！」

きつと、それは爺さんの言葉。

「そしてこれは私から」

「……」

そこで表情は戻って。

「いってらっしゃい。気をつけて」

「……行ってきます、母さん！」

絆に包まれて、家を出た。

「っ!!」

戻ってきてみれば、進んでいる画面。

今一体何が進行しているのか、それはわからない。

ただ。

「改造……可能？」

改装画面を開くと、金剛の改造アイコンが押せる。

練度は十分に足りていても何故か押せなかったアイコン。

「何で……いや、それはいい」

そうして無事に改造出来て。

何故かそのまま改二に出来る艦娘、榛名が、比叡が、霧島が。

未改造だった艦娘も改へ。

何故かは良い、今はきつと戦っているだろうあいつらの力を高めるため、それだけでいい。

そうしてみれば、画面は暗転。

スピーカーから響く、ドラマや映画で聞いたことのある、心拍停止を示す電子音と共に、天龍が龍田が夕立が時雨が……墓場鎮守府の皆が泣き叫ぶ声が聞こえた。

驚くべき事なのに、動揺して良いはずなのに。

何でか、心は酷く穏やかで。

「来ちやっただ」

「……ああ、久しぶりだな？　羅針盤妖精」

真つ暗な画面に浮かぶのは羅針盤。

声が聞こえる前からこれはアイツだと理解できた。

「……ほんとは、ね」

「おう」

「アンタにはその世界にいて欲しかった。そして幸せになつて欲しかった」

「へえ？　そりや随分と優しいこつて」

ああ、それは優しさだろう。

全てを忘れて、ゲームだと捨て置いてこのままここにいられたら。きっとそれでも俺は幸せを掴むことが出来るだろう。

「アンタは私達妖精によって、あの世界に建造された人間だから」

「建造された人間？」

羅針盤は欠片も動いていないのに、悲しげな……いや、悔いるような表情をして頷いたように見えた。

「妖精は沈んで尚、人間と……提督と共に戦いたいと願つた艦娘が至る姿」

「ああ、そうらしいな」

長官と大淀にそんな話はしてもらつた。

それが艦これのシステムかどうかは知らないけど、少なくともあの世界ではそうなんだろうと納得したことでもある。

「提督適正值。あれは、私達妖精が願つた提督に至る可能性を示唆する値……そりや、そうよね。私達が生んだ、建造した人間だもの、故障を疑うような値が出てきてもおかしくない」

……なるほど。

その確認が、受け入れが、あの最終イベントカッコカリなんだろう。

確かに、新しい水平線に勝利を刻みますかと聞かれ……いや、今思えば救いを求めていたんだろう、その手を取つた。

提督が、艦娘を求めるように。

妖精が、提督を求めて。

そうして俺はあの世界に建造されたんだな。

艦これでもっと遊びたい、艦娘と一緒に海を征きたいなんて思っていたから。

「妖精が願った理想がアンタ、それは間違いない。でも私は違った」

「……そりや残念って言うべきだな」

まあ、確かに。

他の妖精と違って叢雲……羅針盤妖精だけは違った。

妖精が俺の意思に沿おうとする中、一人だけ、俺を動かそうとしていた。

「私は、長官。長官と共に再び海を征きたかった。だから、アンタを利用した」

「へえ？」

「長官も……アンタと同じように、海の審判へ挑み、二周目を選んだ。そうして長官があの世界を生んだ。義理の父を、己の愚かさで殺してしまったから、無かったことに、そんな悲劇を生まないように、再びやり直したいと……そうして今に至った。不思議なもんよね、なよなよしてるやつってどうしてお尻を蹴っ飛ばしたくなるのか、未だにわからないわ」

長官も、俺と同じように……。

そうか、あの人も別の世界からあの世界へ至った人間だったのか。

いや、海に願ってあの世界を造った人間と言うべきか。

そしてまあそれは叢雲だからとしか言いようがないんじゃないかねえかな。

「はつきり言って。あの世界はもう、なんとかなるわ。アンタが居なくても、きつと戦い抜くことができる」

「そうかもな」

俺がいなくても、AL／MI作戦がなんとかなっているように。

きつと、長官はこれから誰もが認める道を歩くだらう。

それは、なんとなく……いや、確信できる。

「あの人が戦える舞台は整った。そのためにあんたを利用したことは

謝る。ごめんなさい。だから……」

「いや、謝られる理由がわかんねえよ。むしろ俺は感謝してるんだから」

「……え？」

なあにを言ってるのかね。

確かに、確かに面白くないと思う部分はある。

例えば俺の艦娘^{妖精}だーなんて思ってた叢雲が実は長官と深い絆を築いていたりとか？

例えばわけのわからん自責の念に囚われているとか？

だけどそんなことまるつきり関係ない。

「俺に、家族をつくるチャンスをくれた。それだけで十分だ」

「……」

わかったんだよ。

愛情ってやつは、与えるもんでも与えられるもんでもねえ。

そこに在るもんだって。

「ならばは繋ぐだけ、チャンスをしつかり掴むだけなんだ」

だから急にはしごを離してくれるなよ羅針盤。

「お前は言ったな？ 行く先を示すもんだって」

「……ええ」

だったらよ。

悪いなんて思ってるんなら示してくれ。

「……行かせてくれ、あの世界へ。俺にはあいつらが必要だし、あいつらには俺が必要だ」

そう信じる事が出来る。

裏切られるとか、なくなるとか。

そりゃあ恐いさ、今でも。

震えるさ、想像したら。

でも、それでもいい。

伝えられないまま訪れる別れほど、どうしようもないものはないんだから。

「で、でも……私は……」

「あああああもうっ!! クソつまんねえムーブかましてんじやねえよ! 羅針盤っ!! てめえは結婚を認めないガンコ親父にでもなりてえのか!!」

「な、なんですって!?」

「うるせえ! なってやるさ! 提督に!! 棚ボタでもわけわからずでもなんでもねえ!! これが俺の選択だっ!!」

「こ、この……大馬鹿者!! ほんとにいいのね!? 後悔しても知らないんだからっ!!」

「知るかつ! 後悔ならもう散々してきたんだよ!!」

「回してみなさいっ!」

「おうよっ!!」

マウスを手に。

カーソルを、羅針盤に。

だけど、その指が、動かない。

「……良いのね? 本当に」

審判が、下される。

このワンクリックで、行く先が……行く道が、決まる。

「カッコ悪いと思うかも知れないけど……今なら、戻れるのよ? 今でも私は、アンタは幸せになって欲しいと思っている。罪悪感からも、責任感からも、色んな気持ちからそう、本気で思ってる」

それは本当だろう。

長官に活躍させる機会をだとか、そんな気持ちからじゃねえってことは十分に伝わってくる。

単純に、俺にも幸せになってほしくて、この世界ならそれが掴めると本気で思っているって。

「……」

目を、瞑る。

手に伝わってくるのは刀の感触。

耳に残っているのはタエさんの送り出してくれた声と……あいつらの悲しみの声。

……。

負けるな。

怖がるな。

生きろ。大切を胸に宿して。

——行ってこい。

「ああ、行ってくるよ……父さんっ!!」

クリック。

からからと回りだす羅針盤。

ぐにやりと世界が歪む感触。

「やっぱり……あんたは理想の……提督ね」

嬉しいこと言ってくれるな、なんて口に出そうとしたその時。

飽きるほど、いや、飽きることなく聞き続けたメツセージ。

——提督が、鎮守府に着任しました。

二周日提督がハードモード鎮守府に着任しました

鎮守府に漂う空気は重い。

未だに入渠状態で眠っている大井達。

高速修復材を使用して無傷、完全に回復したというのに目を覚まさない霞、摩耶、神通。

そして葬儀についてどうするかと相談されて尚、死を認めないと耳を塞いでいる那珂とそれに付き従う人形のような六駆。

「また、改めます……ですが、このまま放っておくわけにはいかない事は理解してして下さい」

「わかっています」

話をしていたのは作戦会議室。

看護師による処置があると部屋を追い出された後、少しでも近い場所にと選ばれた相談場所。

「……提督」

胸を押さえて想いが溢れないように。

那珂とて、理解している。

死んだことを認めなければならない。

そんなことは。

ただ、それでも想うのだ。

あの人がこんな結末で終わらせるわけがないと。

自分が憧れた、尊敬したアイドルは、誰かの顔を曇らせたままであるわけがないと。

いつか感じた、この世界に生まれた時の感触。

誰かに手を引かれたような、導かれたような。

もしも。

もしも、提督がそれを求めているんだったら。

「私、待ってる……待ってるから、いくらでも、手を伸ばすから……」
そうなるう、皆が絶望に沈んで何も出来なくなっても、私だけは手を伸ばそう。

そうするために、那珂は耳を塞ぐ。

「でも……辛い、辛いよ、提督……！」

振り向けば光を失った六駆。

海を思えば、死に向かった第一艦隊と第二艦隊。

自分が強いとは思っていない那珂だから。

吹けばすぐに折れる心だと、理解している那珂だから。

支えである提督を失ったと、認めないことで精一杯。

「……そうだ」

だから縋ろうと考えた。

提督の残滓に希望を求めた。

六駆と共に向かったのは花壇。

覚えている。

一緒に花を育てたことを。

六駆という蕾と一緒に咲かせたことを。

「しれいかん……」

不意に、暁が口にした。

そして、それをきっかけに六駆が無表情で涙を流した。

かつて幸せの象徴だったカランコエ。

それだけではなく、多くの花が咲き誇る花壇。

全てが、事情など知らぬ存ぜぬと言わんばかりに美しく咲き誇っている。

「……失敗だった、かな？」

あまりにも幸せだったからこそ、ただただ辛い。

幸という漢字から、提督という一本の線を抜けば、やはりこうなってしまうということだろうか。

「それでも……」

カランコエに手を伸ばす那珂。

消えた線なら、引けばいい。

また、書き直したらいい。

そう、信じ続ける。

信じ続けた。

その結果。

「——!!」

「えっ……っ？」

暗い雰囲気、誰も口を開かない、まるで那珂の独白だけが響く鎮守府。

そんな鎮守府が、少し、ざわついた。

「な、何が……っ？」

「……まったく、遅いのよ」

「ああ、その通りだな」

目覚めた霞、摩耶。

何かを悟っている。

そして悟っているからこそ、少しむくれている。

「いいえ、だからこそ、ですよ」

続いて目を覚まし身体を起こしたのは神通。

だからこそ、自分たちは必死になるのだろう。

そう微笑む。

「はあ……クズを上にとつと大変ね」

「ははっ！ 言うじゃねえか！ あたしはそこまで言えねえけど……でもさ」

——待ってた。

そう一言呟いて、立ち上がる。

「身体は？」

「問題ありません。艦装は？」

「ぜんぜんっ！ バツチリだぜ？ 摩耶様に任せとけっ！」

お互いの身体を想い合う。

そして。

「じゃ、行きましようか」

「了解」

笑って部屋から出ていった。

「……動けますの？」

「ここで動けなきや……鈴谷、駄目な子じゃん？」

「飛龍？ どう？」

「このままじゃ、多聞丸に怒られちゃうって」

「あはは、皆元気だねー？」

「無理しなくてもいいんですよ？ 伊勢さん？ まあ、私は、無理でも無理しますけど」

ドツグで目を覚ました大井達。

何かに呼ばれるように、起こされたように。

未だに少し軋む身体を動かして。

行かなければならないという何かに心が持ち上げられる。

「私も行くって。だってさ私達、新人だよ？ そのくせ無茶してこの様だよ？ ……ちよつとはいいところ、見せとかないと」

「そうですか」

困ったように言う伊勢から顔を背け、誰にもわからないように笑みを零す大井。

その通り。伊勢の言う通り。

着任早々、大失敗。

そんなずっこけ艦隊だと思ったまままでいられるなんて、プライドも、きつと北上だつて許さない。

そんな風に思つてしまう。

「身体、痛いけど……なんだろ、すつごくスッキリしてる」

「ええ、私もそう感じます……まるで、ようやく自分の身体だつて思えるかのような」

無理やりの改造。

それが無理じゃなくなった理由。

それはきつと。

「あの人……きつと、提督のおかげなんだろうね」

蒼龍が言う。

その言葉に全員が頷いた。

どんなことがあったのかなんてわからない。

だけど何故か、その通りだと思つた。

だから。

「じゃあ、行きましようか」

「了解っ！ 汚名返上ってね！」

勢いよく、身体に伝う修復剤を振り払った。

「はあっ！ はあっ！」

走った。

何故かはわからない。

ありえないことが起きている。

そうだと信じていたことが起こっている。

そんな矛盾している確信。

「行かなきゃっ……掴まなきゃ……っ!!」

想いに、願いに突き動かされて動く足。

早く早くと誘われる心。

何処かで。

遠くない、何処かで、何かが聞こえた。

それを早く確かめたくて、手に入れたくて。

「早く……っ！」

ひたすらに駆ける那珂。

それに続く六駆。

あてはない。

慣れ親しんだ鎮守府なのに、ここが何処かわからない。

それでも、何かに導かれるように。

「あっ——」

邪魔するように、そんな那珂を遮るように足がもつれ転げそうになる身体。

前に伸びた手を、腕を。

「——!!」

何かが掴んだ、その身体を支えられた。

後ろにいる六駆が叫んでいる。

転げそうになった那珂を心配する声ではない。

驚きに、喜びに染まった声。

「大丈夫か？」

頭上から聞こえる声。

そして、掴んだこの温もり。

「大丈夫じゃない……」

まるつきり大丈夫じゃなかった。

涙が溢れた、瞬時にこぼれ落ちた。

声は震えて、これじゃあろくに歌も歌えない。

「ぜんっぜんっ！ 大丈夫じゃないよっ!!」

「そっか」

顔をあげず、そのまま。

見せられない。

今の顔は、見せられない。

「そんな大丈夫じゃないとこわりいんだけどさ……那珂ちゃん」

「……うん」

決めていることがあった。

今顔を見せたらそれを破ってしまうから。

「行くぞ、出撃だ」

「……」

だから、無理やり。

返事をするために、無理やり心に従って。

「了解っ!!」

大きな涙を振り払い、輝く笑顔で敬礼をした。

「シズメツ！ シズメエエエエエ!!」

最早同士討ち。

そうとすら思える光景。

方や艦娘、方や深海棲艦そのはずなのに。

「カエセツ！ カエセツ!!」

戦場に流れる音色は呪いの声一色。

己の心そのままに、ぶつけ合う。

奇しくも両者、連合艦隊。

第一艦隊は変わらさず思うがままに、そんな第一艦隊をサポートしながらも攻撃を行う第二艦隊。

港湾棲姫を旗艦とした艦隊に、北方棲姫が率いる艦隊が支える。

激しい、戦い。

そうとしか言えない戦場。

ここにいる全ての艦娘、深海棲艦は既にあと一步で撃沈する。

天龍達は揃って中破以上の損傷をしていたし、港湾棲姫達も既に同じく。

秩序がない、規律もない。

この結果を招いた深海棲艦を許せない。

提督という存在に恵まれた艦娘が許せない。

憎悪、嫉妬、失意、絶望。

あらゆる負の感情だけが渦巻いている。

同時に理解した。

墓場鎮守府の面々は、理解した。

深海棲艦と艦娘は同じ存在だと。

そして今自分たちが沈めば、間違いなく深海棲艦になると。

だがそれで良かった。それでも良かった。

提督を、一番大事な存在すら守れなかった自分が憎い。

すぐに提督を救助するために動けなかった人間が憎い。

そんな存在は要らないと、思ってしまったから。

だからこれは八つ当たり。

いずれ至る自分への、最後の八つ当たり。

そう理解した。

深海棲艦もまた、理解した。

今まさに同類、同種の存在へと至りつつある相手。

それはあまりにも怖かった。

こんな強い感情を抱いて、自分たちは沈んだのだろうか。

こんな強い想いを抱けた事があつたのだろうか。

もしかしたら、提督という存在を求めておいて、何よりも遠ざけた

かっただけなんじゃないか。

理解したからこそ、疑問を覚えた。

辛い、苦しい負の感情を理由にして。

海の意味に求められるがまま従って。

そこに自分の意思があつたのだろうか。

「チガウツ!!」

疑問が過つた頭を振り、天龍達を睨みつける港湾棲姫。

「ワタシハッ！　ワタシダツテツ!!」

想像したくないことを想像したと、振り切るように艦載機を発艦する北方棲姫。

「全機発艦ツ!!　押シ潰セエエエエエ!!」

ありえない数。

空を埋め尽くすかのような艦載機が二人の姫から発艦された。

「ウオオオオオオオ!!」

立ち向かうは天龍。

飛ばされるのは鳳翔の艦載機。

同時に、察した。

——さよなら、提督。

拗ききれない。

ここが己の死地だと、認めた。

最後の最後に、穏やかな表情を浮かべることが出来た。

それはやっぱり幸せな思い出によって。

もう、二度と味わえることは無いけれど。

それでも確かに幸せの中にいることは出来たと。

だから。

「フラワーズっ!!　やべえやつから護衛!!　大井、鈴谷、熊野もだっ!!

伊勢、蒼龍、飛龍は艦載機ぶつとばせっ!!」

「了解っ!!」

戦場に響いた、希望の声。

「テイ、と、く……」

「待たせたっ！　わりい！」

いつものように。

何処から手に入れたのか、新しくもボロボロの漁船に乗って。

高速修復材が入ったバケツを抱えて。

「腑抜けた顔してんなよ！ まだ約束破りにはなっちゃいねえだろう！? 俺のために生きてみろっ!!」

提督のために。

きつと、今までなら言わなかっただろう台詞を、いつもの調子で叫んだ提督。

提督の、ために。

提督の何かじゃない、力でも意思でも、命でも幸せでもなく。そう、提督自身、そのために力を振るえる、使っている。

だから。

——改、二。

「!?!」

港湾棲姫、北方棲姫の驚きは何に対してか。

改二となって姿を変えた艦娘に対してか。

先ほどとは比べ物にならないほどの動きで艦載機を落とす、随伴艦を沈めていく艦娘の力に対してか。

提督が、目を覚まして、再びこの海に姿を現したことに對してか。

驚きの中、状況は進む。

「提督……提督っ!! 見てて！ 僕……僕はっ!!」

絶望に沈み流す涙じゃない。

後悔に溺れた顔じゃない。

「夕立……！ 提督さんがいたらっ！ なんでも……何でも出来るっ
ぽい!!」

喜び、希望。

再び手にした、手にすることが出来た、光。

「……ごめんなさい。もう……もう今度こそっ！ 情けない姿は見せないからっ!!」

恥じた。

最後まで、信じる事が出来なかった自分を。

「つたく……い！ 硝煙の匂いが目に染みるなあ!! 天龍っ!! 推して……推して征くぜええええ!!」

——提督。

——提督。

——提督。

それでもやっぱり、提督がいれば。

「キャアッ！」

「北方棲——ツク!!」

艦娘は、輝きを取り戻す。

「……コレガ、アナタノ、答エ……ダトイウノデスネ」

提督の選択。

それが、この世界で、艦娘と共に生きること。

「ワタシタチヲ……ステテ……!!」

それはつまり、深海棲艦と敵対するということ。

「認め……ナイッ!!」

認められなかった。

あの提督が海へと歯向かうと決めたなんて、信じたくなかった。

撃沈一步手前の北方棲姫を庇い、前に立つ。

「シズメ……シズメエエエエ!!」

「……ようやく、わかったよ」

力を振り絞り、攻撃をしようとした瞬間。

「アンタも、オレだ」

「っ!？」

天龍の砲口が、その動きを遮った。

動けなくなつた港湾棲姫に、時雨の、龍田の夕立の……墓場鎮守府
全ての牙が向けられる。

「でも悪い、オレはアンタを乗り越える。この先にある幸せに向かう
ために」

「……」

項垂れる港湾棲姫。

敗北。

もう、行く道は海の底しか無いと、理解した。

それを見て、ぐっと引き金に力が込められた時。

「待ってくれ」

「っ!?! 提督……?」

船に乗った提督が、積んでいた小型ボートに乗り換えて港湾棲姫と北方棲姫の下へ近寄ろうとした。

「し、司令官?! わ、私も!」

「いや、ここで待っててくれ」

慌てて暁、フラワーズが近寄るが、それを制して。

静かに、二人の姫を見据えて、歩みを進めた。

「よう、久しぶり」

「……テイトク」

「……馬鹿、デスカ? コンナ状態デモ、アナタヲ殺スコトナンテ造作モ——」

「そりゃ困るからやめてくれ?」

本当に勘弁してくれと困ったように笑う提督。

海は、海は提督を沈めろと言っているのに、何故かそんな笑顔に、攻撃する意思を奪われた。

「介錯デモ、シテクレルトイウノデスカ?」

「いや? 約束守りに来た。言っただろ? 救うって」

目の前で至極真面目に言う提督。

そんな提督に、怒りが沸き立つ。

「救ウ!? ダツタラアノ時、何故審判ニ挑ンダノデスカ!? 私ヲ……私達ヲ救ウトイウナラ! アノ時!!」

「ちげーって。こうじゃないと、お前らはずっと、怒りとか悲しみに沈んだまんまなんだろ? 俺はそこから掬い上げたいんだ」

提督の言う、救い。

掬い上げること、怒りにも悲しみにも沈めないこと。

それこそが、自分に出来ることだと、伝える提督。

「俺は、救いたい……艦娘を、じやない。悲しみに、怒りに沈んだ海を、救いたい。俺を救ってくれた海だから、今度は俺が」

「ワケ、ワカラナイ」

言葉の意味が理解できない北方棲姫は首をかしげる。

それは港湾棲姫も同じく。

「実はな？　俺、艦娘全員嫁にしようと思ってる」

「ハ、ハア？」

悪戯を打ち明けるように、近くで見守っている天龍達に聞こえないようにこつそりと。

提督は港湾棲姫と北方棲姫だけに聞こえるようそう囁いた。

「んでき、お前らも嫁にしたいんだよな、これが」

「ワ、ワタシヲ嫁ニツ!？」

「……ヨメ」

驚きは深まるばかり。

戸惑いが大きくなるばかり。

そんな二人に、だからとつけて言葉を続ける提督。

「だからさ、還って……帰ってこい、俺の下へ。そうして諦めて嫁になれ。いくらでも……際限なく、限界なく、幸せにするから」

「……」

言い切った提督は、静かに腰から下げた刀を鞘から抜き放つ。

その刃の煌きを、黙って見ている二人の姫。

「……ソレガ、イイ」

「エエ……ソウネ。ジャア、提督？」

——不束者ですが、未永く、よろしくおねがいします。

「ああ、こちらこそ」

目を閉じた二人。

安らかに、穏やかに。

その姿を見届けて。

提督は刀を振り下ろした。

「提督っー」

「まあまっしてくれ」

光の粒へと姿を変えた二人。

それを見て、提督へと駆け寄ろうとした墓場鎮守府艦娘を制して。

「こ……これはっ!？」

「……………おかえり」

光の粒が集まり、一人、二人……………。

艦娘の姿へと変えた。

ハーレムはじまるよ

ドロップ。

そう、ドロップした二人の艦娘を天龍と一緒に漁船に乗せて。穏やかな表情で眠っているらしい顔に頬が緩んで。

「な、なあ、ていと——」

「ていとくさー！ー！ーん!!」

「んなっ!?! ぐほうっ!?!」

夕立のダイブが腹に突き刺さった。

「提督さんっ! 提督さんっ! 提督さんっ!!」

「おおお、おち、おちつつっつけっ!?!」

うつひよう改二はやっぱり最高だぜ! 感触的な意味で!!
ていうかどうしたどうした、提督さんって連呼しすぎい!

「提督、提督! 生きて、生きてるんだよね? 死んだり、してないよね?」

「……ああ時雨、生きてるぞ。約束、まだちゃんと守れてるだろ?」

「……うんっ!」

夕立にぐいぐいされながら、時雨の頭をぐりぐり。

「提督……私、私……!」

「龍田……ごめんな、遅刻しちゃったよ」

静かに涙を溜めていた龍田へと笑ってみれば、涙を拭うことなく。

「ううん……来てくれて、帰ってきてくれて……ありがとう」

そのまま笑って雫を零した。

綺麗な、本当に綺麗な笑顔で。

「んで? 天龍ちゃんは何むくれてんだよ?」

「べっ! 別にむかれてなんかねえよっ! い、色々タイミング逃したなんて思ってたねえぞっ!!」

はいはい、そうですかそうですか。

まったくかわいいこって。

「んなっ!?!」

「なんだよつれないなあ天龍ちゆわあん? ちよつとくらい、何か

あってもいいんじゃないやねえつかねえ?」

時雨の頭を撫でてる手とは別の腕。

がしつと天龍の肩に回して引き寄せてみれば。

「……バカヤロウ……」

「あはは、お褒めの言葉どうも」

腕の中で顔を隠すようにひつついてきた。

……なんとなく、体温と別の温かさを感じるの、まあ気にしないようにしよう。

「提督……」

「ああ、ただいま。鳳翔」

ひとしきり安心してくれたのか、天龍達は他のやつにもと漁船から降りた。

そして直様乗り込んだのは第二艦隊。

「申し訳、ありません……」

「謝られる理由がわからないな、鳳翔。それはきつと俺の台詞でもあるぞ?」

先頭に立っていた鳳翔は、俺の姿をじつと見つめた後勢いよく頭を下げ、古鷹達全員が続く。

いや、ほんとなんでだよって話。

「私、私達は……間違いを……」

「なんだ? 他に好きな男でも出来たか?」

「んなっ!?!」

提督シヨック!!

自分で言っただけ自分を傷つけた!! うぐぐ……!!

「そ! そんな事あるわけがありません! ありえません!」

「そ、そうです提督! 私は提督さんのことが、ことだけが大好きですっ!」

「……あー、うん。冷静になったよあたし……」

「これは流石に恥ずかしいですね?」

慌てて顔を上げた鳳翔と古鷹はまあマジすぎる表情を向けてきて、

救われたり？

あーでも、加古と大淀さんや？　ここはお二人に倣うところじゃねえっすかね？

「や、やめてよ。あ、あたしはそんな墓穴掘ったりしないって！」

「あ、あの！　で、ですが提督がお望みとあれば……！」

じとっと二人に目を向けてみればどうしてこうなったと慌ててる。うむ、これでよし。

「んじやあ間違いなんでねえよ。俺も、お前たちの心を……もう、離さねえ。離すつもりはねえからさ。そんだけ覚悟してくれ」

「はうっ!？」

有言実行っ！

イケメンムーブ、あつてますかねこれで。

顔を真っ赤にして固まった皆を見てたら合ってるような気がするけど……うん。

あとは俺が慣れるだけだね、そうだねうぐぐ。

「提督っ！」

「おう改めてただいま那珂ちゃん」

そう言ってみればやっぱり元気いっぱいアイドルスマイル。

那珂ちゃんのファンで良かったぜ。

「司令官っ！」

「ま、待てっ！　流石に四人いっぺんは……あああああ!？」

後ろからわっと一斉に出てきた六駆。

いやあ、津波つて人でも起こせるんだね……幸せに押しつぶされてばないです。

しかもめっちゃぎゅっとしがみついてくるし。

頭に響、右腕に電、左腕に雷、んでもって胸の中には暁。

事前に打ち合わせでもしてた？

「くすくす……那珂ちゃん、甘んじて受け入れるべきだと思うなっ！」

「バッカ俺の身体はいつだってウエルカムだったの」

幸せがんじがらめの出来上がり。

そんな俺の姿に那珂ちゃんは笑う。

ああ、やつぱいいいな。

心配……ってどころじゃねえのかもだったけど。

こうやって帰ってきて、帰ってこれて。

本当に良かったと思う。

「なあ、那珂ちゃん」

「うん？ 何かな？ 解く手伝いはしないよー？」

いやいや、それはノーサンキュー。

この状態まあじ最高です。

って、そうじゃなくて。

「俺のためにアイドル辞めてくれって言ったら、辞めてくれるか？」

「えっ……」

驚く那珂。

聞こえた言葉の意味がよくわからないのか、目を丸くしてるけどそれとも一瞬で。

「無理だねっ！」

「ぐほうつ!! ま、まじですか……」

っ、辛い……ここにきてこれですか。

いや、はい、俺が悪うございました、反省するから海より深く。

「だって、私！ 提督のためにアイドルしてるんだもんっ！」

「テートクローラー!!」

「んお？」

霞に女たらしで最低のクズ呼ばわりされたり、大井に冷たい視線を送られたり。

そしてやつぱりありがとうございますと云ってしまったり。

そんなこんなで海の上でいちやこらと。

ハッピータイムだわっしょいわっしょいのお祭りはまだまだ終わらないように。

物凄いスピードでこっちに来たのは、**金剛**。

「提と……戦友っ！」

「いや、もう提督言ってるし」

漁船上の俺、海の上で肩を上下させる金剛。

突っ込んでみれば恥ずかしげに頬を掻く改二の姿。

あん時押しした改造アイコンのおかげか、それとも別の何か、あるいは自分で至ったのかはわからない。

無事。

MI作戦は鬼畜なイベント。

そんな戦場から無事に帰ってきてくれたことがただ嬉し。

続いてやってきた比叡も、榛名も霧島も改二の姿で皆無事。

もう少し後ろに見えるのは護送船、きつと長官達が乗っているんだろ。

「金剛、比叡、榛名、霧島」

「はいっ！」

目の前で一斉に気をつけの姿勢を取って。

四人分の瞳からは褒められることを期待されているってわかって。

ニコニコと、心なしかどうだと胸を誇らしげに。

「ありがとう、お疲れ様……大好きだ」

そんな四人に応える言葉が思いつかないから、気持ちだけをそのままに伝える。

遠慮は、あつたのかも知れない。

まだまだ戦友としての俺だろうからと。

だからいずれ。

そんな遠慮。

だけど。

「」

「金剛？」

俯いてぷるぷるしてどうしたの？

あ、あんまりにもキモかったとか!? そうなのか!? 金剛っ!

「気合い、入れて……!」

「はいっ! 榛名の準備も大丈夫ですっ!」

「チェック、ワン、ツー……それじゃあ皆さんぐ一緒に」

え？ え？ え？

ま、まさか……！

「ばーにんぐつ！ らああああぶっ!!」

「ふぬおっ!」

一斉に飛び上がって乗り込んできて抱きつかれた。

……はい、完敗のようですね。

勝利の水平線を背に鎮守府へと戻ってきてみれば大きな歓声が迎えてくれた。

出発した時は、静かすぎた鎮守府だったのに。

多くの人が、俺たちを出迎えてくれた。

凱旋。

まさにその言葉通りの今。

「ひえっ!」

そんな中、俺の姿を見て腰を抜かしたお医者様。

人差し指を唇に。そうして笑って目配せをしてみれば。

「……」

驚きから抜けられない顔をしていたけど、なんとか頷いてくれた。

光の粒へと変わっていった、俺。

あの医者が、俺が見たのはそんな光景。

そして、その光が再び俺という形を作った行程。

まあ、流石に混乱するし驚きもするだろう。

建造された俺が沈んで、ドロップしたんだろう俺はこの世界に。

俺のことながらあやふやで、あんまりこうだと言える確信はない。

それでも俺はこの世界に再び辿り着いた。

それだけで、その事実だけでよかったから。

「……嬉しいですね」

「ああ……」

護送船。

乗り換えたそこから見える人の波に顔を綻ばせるのは長官と中将。

悪いと思うんだけど、長官はともかく中将に対しては不気味だと

しか思えなくて。

それでも。

「……いいな」

見える光景を嬉しいと感じることは偽れない。

護送船周りにいる艦娘達もそれは同じよう。

驚いているヤツ、嬉しそうなヤツ、笑顔を返すヤツ。

それぞれが心のままに、この光景を享受している。

ありがとう。

歓声と共に聞こえるのはそんな声。

混じりつけなし、純度百パーセントの感謝。

「提督、皆に、何か言葉を」

「は？ ……えちよ!? そ、そういうのは……ていうか今度こそ長官がするべきでしょう!」

「うるさい黙れさっさとしろ。国民が求めているのは軍人の声じゃないことくらい理解しろ。皆、英雄の言葉を求めているのだ」

うつせクソ野郎がつ! てか英雄ってなんだよ何があつたのさ!?

え? いや、まじで?

「提督っ!」

「お、おう? ってオイこのマイク!」

天龍が何処から取ってきたのか投げてきたのはマイク。

周りを見れば、何でかスピーカーをよっこいせと船上に設置した時雨と夕立。

機材のチェックをしていたのか龍田は、俺にオツケーサインを送ってきた。

「……信じてたのに……」

「さ、どうぞ? 英雄君?」

トドメをさしてきた愛しき艦娘に被せるように、恭しく場所を開けた長官と、面白くないと顔に書いていても何処か納得している風味の中将。

……万事休すつてこのことネー。

ええいつ! ままよっ!

「皆さん、こんにちは」

「――」

……あれ？ 間違えた？

いやいや！ 俺が前に出た瞬間の歓声が一瞬で止むとか軽く恐怖だよっ!! 助けてっ!!

「提督ー、なんか違うよー?」

「もうちよつとかっこよく頼むよー?」

「……川内は夜戦一ヶ月禁止、そして加古は一年間俺の晩酌担当」

「そ、そんなっ!!」

「やった!」

あれ? 川内はともかくご褒美じゃん。

ま、ま、ま、ええわ。

ほら、国民の皆さんもちよつと笑ってるし?

「失礼しました、身内ネタはどうかお気になさらず……」

「て、提督っ!! わ、私が! この長門がっ! 晩酌させて頂いてもいいのだぞっ!!」

「長門は引っ込んで! 提督ー? 晩酌と一緒に、火遊びは如何?」

「台無しだよっ!!」

君たちなあ!?

ていうかこんなやり取りに近いことした気がするぞ!?

あーやっぱり無茶苦茶だよ……。

「あーもうっ! 長門も陸奥も覚えとけっ! 潰れるまで付き合ってもらってからなっ!!」

「任せろっ!」

「待ってるわ!」

はい、大爆笑かつこわらい。

はあ……これで頭がすつきりする俺も大概だけどさー……あ、神通さん? 鳥海さん? 朝潮さん? あんまりソワソワしないで?

瑞鶴も翔鶴も……キヨロキヨロタイミングを伺わないで?

ああ! 摩耶様!! 霞様!! その動きはなんですか!? シャドーボクシング!? アップ、アップなの!? 何をやる気なの!?

あかんこれ。

さつさとしゃべろ、そうしましょ。

「私は……いえ、俺は……軍人じゃ、ありません。皆さんが思い描かれた、英雄でもありません」

――

話し始めてみれば、やっぱり一瞬で静かになって。

人が、艦娘が……そして、海が。

俺の言葉に耳を済ませる。

「何処にでもいると思っていた、何処にでもいると信じていた、ただの一般人でした」

疑わなかった。

当然艦これを、艦娘を知らない人だっている。

だけど、知っている人もたくさんいて、その人の多くは艦娘が、艦これが好きだって思ってた。

「多くの皆さんと違うのは、普通じゃなかったのは……ただただ孤独が怖くて、逃げたくて、その先を艦娘に求めたということ」

艦娘に、家族を求めた。

そのために、家族になるために……自分を孤独にしないためだけに必死になった。

艦娘が大好きだという気持ちでごまかして。

「皆さん。皆さんには大切な家族がいますか？ いえ、きつといるでしょう。もしくはそれに準じる大切な何かがあることでしょう。俺の場合は、それが艦娘でした」

ある意味。

この世界は俺に都合が良すぎた世界なんだろう。

きつと、時雨も夕立も。

墓場鎮守府にいる全ての艦娘は俺じゃなかったとしても、救ってくれる者を慕っていたことだろう。

「必死でした。ただただ、必死でした。手にした温かいものを手放さないために……この勝利はその結果、あるいは過程でしかない。……もう一度いいいます。俺は、皆さんが思い浮かべたかも知れない、滅私

を貴び、国を、人を救うなんて高潔で格好いい英雄なんかじゃありません」

そう思った。

思っていた、心の何処かで。

だから俺は自分を軽く扱った、扱えた。

艦娘を、繋ぎ止めるためだけに。

「何処までも利己的で、自愛のためへと必死になる矮小な人間です。そう、今でも言える。俺はきつと艦娘を失わないためなら、戦場から逃げ出して、世界の何処か片隅でひっそり艦娘と共に生きることを選ぶでしょう」

だから。

全ての人を守るなんて、口が裂けても言えない。

そんな俺、だから。

「だから皆さん、艦娘と共に生きて下さい」

俺はどうあがいても艦娘と、自分だけで精一杯だから。

「艦娘と一緒に、生き抜いて、戦い抜いて下さい、あなたの幸せを貫くために」

どんな形でもいい。

艦娘の燃料を精錬する職人になってもいい、自分たちが必要とする糧を一人分多く用意するだけでもいい。

なんなら、提督を目指したっていい。

そしてそれを笑ってやって欲しい。

義務でもなく、強制でもなく。喜んで。

ともに生きることが、生きられることを喜んで欲しい。

「負けないで下さい、怖がらないで下さい。あなたの大切の片隅に、海ってやつを住まわせてやって下さい。その想いが集えば、きつと何よりも大きな力になるでしょうから」

綺麗事なんだろう。

どうやったってそう思えない人間だっているだろう。

でも。

「俺は……俺達は、そんな温かい絆、幸せと共にならきつと……何処ま

でも征ける。まだ見ぬ水平線に、勝利を刻むことが出来る。だから皆さん——」

——これからも一緒に、戦って下さい。

静かな拍手。

それはだんだん大きくなって、この場所を包む。わからない。

俺の言葉がどう作用したかなんて。

救われたから、恩人だから。

お義理で、お情けでそうしてくれるのかも知れない。

……。

ん？

待てよ、待ってくれ。

別にそれでいいじゃん。

何で俺いいかつこしようとしてんの？ 英雄ぶろうとしてんの？

馬鹿なの？ 死ぬの？

「ちっぽけな俺が、もし出来ることがあるとするならば。一つの道を指し示すことだけ」

ククク……。

そうだよ、そうなんだよなあ!!

俺、艦娘大好き。

それ以外、特になし。

「俺はっ!! ここに宣誓しますっ!!」

あーうっせうっせ!!

拍手とか注目とか要らねえんだよ!! 艦娘よこせ! 艦娘オイテ

ケツ!!

「健やかなるときも! 病めるときも! 喜びのときも! 悲しみのときも! 富めるときも! 貧しいときも! 艦娘を愛し! 艦娘を敬い! 艦娘を慰め! 艦娘を助け! 俺の命ある限り!!」

「艦娘全員っ!! 俺の嫁っ!! 等しく平等につ! 愛情の限りを振り

絞りっ！ 幸せにして幸せになることを誓いますっ！！ それが俺の道っ！ 幸せハッピーマイロード！！ 誰にも邪魔させねえっ！ 文句あるやつはかかってこい！ 以上っ！！」

……。

やつちまったなあ……？ 俺、やらかしたなあ？

ほら、国民の皆さん、目が点になっておられる。

あ、長官何で腹抱えてんすか？ あ、中将なんすか？ 何震えてんすか？

ていとくう、わかんなあい。

だけど。

「提督っ！！」

「おうっ！」

俺の艦娘^嫁達は一斉に船へと乗ってきて。

「ぬおっ！ 貴様らっ！ 何をっ……ぬわー!?」

「ちゆ、ちゆうじょっ!? って！ 僕もなのかー!?」

邪魔と言わんばかりに長官と中将を船外へと押しつけて。

我先にと慌ただしく俺の目の前に整列して。

——不束者ですが!! どうか末永くお側に置いて下さいっ!!

ようやく、俺の艦^{ハイレム計画}これが始まった。

エピソード

あなただけの艦隊これくしょん

——艦娘解体法、ならびにケツコンカツコカリ法。

艦娘が望めば艦装を解体されることが出来る。

艦娘のためだけの法律。

そんな、海へと挑む意思のためだけに生まれた法律が少ないながらも誕生した。

とある将校主導で進められた艦娘解体計画。

悲劇を生まないために、傷を深める前に。

提督が望めば通常業務より遙かに膨大な手続きを進めなければならぬ。これは、艦娘が望めば簡単な調査、聞き取りのみで受理される。

解体された艦娘の記憶は無くなり、普通の人間として第二の人生を歩むことに。

また、解体を望んだ理由によっては、厳しい処罰が提督には待ち受けていたし、全うなものであつたとしても提督は現司令長官による厳しい指導から逃れられない。

曰く。

「僕が間違っていました、艦娘最高です」

「クズ？ はいっ！ ご褒美です！」

等と教育を受けたものは口を揃えて発言し、上層部の頭を抱えさせたとか。

閑話休題。

解体され、記憶を失った元艦娘はとある場所にて同じ境遇の者との共同生活を送りながら社会復帰に向けた教育を施される。

年齢の割に溢れすぎている元気の下、竹刀を振り回す人間と、いつでも癒やかな笑顔を携えた人間によつて。

今では既に僅かではあるが、元艦娘が働いている一般企業、あるいは元気に学校へと通う姿が見受けられるが、それぞれのプライバシー保護という視点から詳しく語られる術はない。

ただ言えることは、色々な人間としての問題に、人間らしくぶつかり、立ち向かって、幸せな毎日を過ごしているということだけだろう。そんな解体法にも例外があった。

ケツコンカツコカリ。

提督と艦娘の間に築かれた強い絆。

それが認められた場合、数に限りなくその儀式が認められる。

現状、その絆を示すための方法として、現司令長官の艦隊と演習を行いそれに勝利することが挙げられているが。

「お父さんそんな男認めねえぞっ!!」

という言葉と驚くべき力を誇る艦娘によって、ケツコンカツコカリを認められる提督は少ない。

とはいえ演習後に対象艦娘による泣き落とし作戦という裏技もあつたりするが、それは語るべきことじゃあないだろう。

きっと今も尚軍部が何か新しい方法を生み出すために頭を抱えているのだろうから。

認められた艦娘の左手薬指輪は軍支給の物ではあるが、中には個人で給料三ヶ月分を叩く提督もいるらしい。

また、ケツコンカツコカリを迎えた艦娘は一つの権利を手にするこ
とが出来ると。

それが、解体法の例外。

指輪を嵌めた艦娘は、解体することにより記憶を保持したまま人間になることができる。

それはつまり、カツコカリの先を目指すことが出来るというもので。

とある提督はその事実が判明してから大変な思いをしたとかかなんとか。

解体法。

そしてケツコンカツコカリ法。

まだ、二つ。

整備された法律はただそれだけ。

それでも、多くのことが変わった。

人間を見てみれば、やはり目覚ましい変化は提督養成校。

軍人だけではなく一般人からも提督を志したいという人間を受け入れ始めた。

学校に蔓延していた思想は取り払われ、教導を行う人間もあらゆる思想を持ち、生徒を導く。

生徒は基本的な鎮守府運営や艦隊運用、艦娘の特徴を学びながらもそれに触れ、自由の発想、思想を持って提督を目指す。

中には、効率を求めてかつての誰かがやったような運用を目指す者もいる。

それを咎める人間はいなかった。

だが、そうじゃないと議論が生まれた。

「それじゃあ満潮ちゃんとかちゅちゅ出来ねえだろうがっ!!」

「はあ!? 駆逐艦より大人の魅力っ! 高雄様に踏まれてえと思つてこそだろうっ!」

そんな、議論。

……駄目だこの国早くなんとかしない。

そう思える場面も確かにあるが、それだけではなく、あらゆる議論の下、それは磨かれ現場へと新たな風を吹き込ませている。

艦娘を見れば、同じく艦娘養成学校だろう。

ドロップ艦娘。

ゆっくりと、少しずつ。

確率で言えば本当に僅かなものでしかないが、海で邂逅するという光景が色々な場所で散見された。

そして鎮守府で建造された艦娘とは違い、ドロップ艦娘は誰が出会おうと養成学校へと入学する。

学校で自身を知り、磨き、知識を蓄え、力を手にする。

そうして、自身で着任したい鎮守府を選ぶ。

選んだ鎮守府に着任できるとは限らない。

双方の希望が食い違い、別の何処かを再度選ぶことだってある。

それはまるで求職活動にも似た何か。

だが、多くの経験を積んだ艦娘、元艦娘が教員として存在する養成

校。

一人一人、親身に相談に乗って、満足出来る結果につながっている。そして、今。

「お、おつきい……」

とある鎮守府へと面接にやってきた、一人の艦娘が。門前にて、呆然と建物を見上げている。

別名として英雄のハーレムだとか、艦娘結婚支援所だとか色々な名前がついているが、一番通りある名称は墓場鎮守府。

その場所から募集の張り紙が出ればすぐに埋まるどころか溢れてしまう人気企業。

「な、何でここにいるんだろ……私……」

未だに信じられない思いで胸を詰まらせているのは駆逐艦、吹雪。養成校での成績はドンケツ、ビリもビリ。

周りの艦娘や教官は笑ったり蔑んだりこそしないものの、ずっと困った表情を吹雪に向け続けていた。

そんな艦娘。

墓場鎮守府は所謂求人を行わなくなった。

理由としてはやはり、あまりにも多すぎる応募のせいと言えるだろう。

艦娘側としても、有名な鎮守府だから、英雄と呼ばれている提督がいるからといった理由から、とりあえず応募しとけと言った意味合いが多く含まれているものもあって。

提督が想う居場所でいられなくなるという危惧があったから。

だから墓場鎮守府は自ら指名することにした。

いわばドラフトみたいなもの。

うちに来ませんかと声をかけて、艦娘が了承すれば着任できるという形になった。

「那珂ちゃん！早く来るのですっ!!」

「ま、まってー！電ちゃん、早いよう!!」

門前で固まっている吹雪の横を、今では誰でも知っている国民的艦

娘、艦隊が通り過ぎていく。

「ふ、フラワーズ!？」

「ん……? ああ、そう言えば新しい子が来るって朝言ってたっけ……こんにちは」

テレビ越しに何度も観た、国民的アイドルフラワーズ。

主に漁を生業とする人間を護衛し、その後地域でライブを行っているその姿。

驚く吹雪の声に足を止めたのは響。

「こっ、こんにちはっ! お、お会いできて光栄ですっ!!」

「あ、ああ……いや、そういう堅苦しいのは……」

「ちよつと響っ! 何やってるの! どうせその子もすぐあのクズに染まつちやうんだからっ! さっさと行くわよっ!」

「霞みたいに?」

「つ~~~~!?! うっさい! 行くわよっ!」

「はいはい」

足を止めているうちにフラワーズ、響以外は既にバスへと乗り込んでいたらしい。

やれやれと肩をすくめた後。

「うん、これからよろしく。一緒に戦う仲間としても、ライバルとしても」

「ラ、ライバルっ!」

驚きが止まらない吹雪にそんな事を告げてバスへと乗り込む響。

その姿を固まったまま見送った吹雪へと。

「遅くなって申し訳ありません。吹雪、さんですね?」

「ぴゃいっ!!」

背後から聞こえた声にようやく動き始める事が出来た。

振り返ってみればそこには。

「はじめまして。墓場鎮守府、秘書艦の大淀です。申し訳ありませんが、提督は只今軍部との会議中ですので……その間、先に鎮守府の案内を申し付けられています。どうぞ、よろしくおねがいますね」

「ひゃ、ひゃいっ! と、とく、と……特型駆逐艦の一番艦、吹雪ですっ

！ど、どうかよろしくおねがいます!!」

なんとかと言った様子で、穏やかな笑顔を浮かべる大淀へと敬礼を向けた。

「いっくよお!!」

「甘いですわっ!!」

真っ先に案内されたのは、ちょうどやっているからと演習場。

海上で演習を行っている艦娘はいずれも改二の姿。

「……」

一瞬で釘付けになった吹雪。

演習は、確かに学校で何度もやった。

まだまだ練度が低いと自認してもいるが、それでも演習の内容と、言葉の意味は知っている。

「吹雪さん?」

「……はい」

それでも目の前で行われているものが何かわからなかった。

あまりにも次元が違いすぎる。

確かに改二という至高の頂に昇った故の力でもあるだろう。

実戦経験の差が、知識の差が大きく離れていることもあるだろう。

軽空母へと至った熊野が艦載機を発艦、それに合わせて航空巡洋艦

鈴谷が瑞雲を。

迎え撃つのは蒼龍と飛龍。

正規空母の艦載機数に飲まれて一方的な航空攻撃になるかと思われた時。

「はんっ! まっかせとけえ!!」

「くうっ! 伊勢さんっ! 摩耶さんを抑えて!!」

「任せてっ!」

冴え渡る摩耶の対空砲撃、それにより制空権は拮抗。

対空砲撃の驚異を減らそうと、伊勢が摩耶を狙うが。

「九三式酸素魚雷やっちゃってよ!」

「しまっ——!!」

大井の放っていた魚雷に邪魔をされる。

「ふう……ご安心をつ！ お任せ下さいっ！」

「ありがと朝潮っ！ よおし、砲雷撃戦だよっ!!」

魚雷が伊勢の姿を捉える刹那、朝潮がその窮地を救った。

一瞬。

一瞬で終わった開幕。

その一瞬でどれだけのやり取りがあったのか。

両艦隊、無傷。

どうすれば、あの苛烈すぎる開幕のやり取りから無傷でいられるのか。

「す……ごい……」

吹雪には想像もつかなかった。

何よりも。

「これが駆逐艦の本分です！ 艦隊、増速！ 突入します！ 勝利を、

置いていけっ!!」

「ふっつ、浜風さん……油断、しましたね？ 次発装填済みですっ!!」

戦っている艦娘、全てが真剣で、真剣な笑顔を浮かべていた。

楽しい。

真剣に演習へと打ち込んで、自身の力を高めようとしているはずなのに。

そうだと言うのに、何故かあそこで戦っている艦娘全員がそう思っているように感じられる吹雪。

「皆さん、真面目ですから」

「そう、なんですね」

吹雪には理解できない。

大淀が言った真面目の意味。

提督のために力をつけようと真面目であるという意図。

演習中の全員が、それを深く想っていて、それが嬉しくて楽しいと感じてしまっていることを。

「私……あんな風に……なれるの、かな？」

俯く吹雪。

努力はしていたし、している。

それでも置いていかれていた学校時代。

「私、ほんとにここに着任しても、いいのかな？」
もしもここに着任して。

それが、変わらないままだったら？

ただただ足を引つ張るだけの存在にしか、なれないのじゃないか？

「吹雪さん、お腹すきませんか？」

「は、はえ？」

唐突に大淀は言う。

そんな切り替えに意識がついていかず、変な返事をした吹雪だが、緊張か他の何かでまだ何も食べていないことに気づく。

「え、ええと……」

何か返事をしなくては。

そう考えた瞬間。

「……行きましょうか」

「は、はい……」

身体が先に返事をして。

その返事の音に顔を赤く、先とは違う意味で俯いてしまった。

——ここには食堂がない。

道すがら説明された言葉の意味はすぐに理解できた。

食事処、龍鳳。

おそらく食堂を改装したのだろう、入り口にかかっていたそんな看板。

そして暖簾をくぐればどうしてなかなか雰囲気のある、食事処。

「ごちそうさまっぽいー！」

「ごちそうさんっ！ 相変わらず美味かったぜ!!」

勢いよく皿をテーブルに置いて立ち上がったのは天龍と夕立。

「あ、あれって！ 天眼さんと赤鬼さんじゃっ!」

「あ、あはは……そ、そんな風に呼ばれてもいますね？」

まさかこんなに早く会えるとは思わなかったと目を輝かせる吹雪。

全てを見通して最高の結果を手にし続ける天龍。

紅い眼を踊らせて戦場を鬼神のように駆ける夕立。

そんな姿から誰が呼び始めたかそんな呼称。

テレビに映り始めたのは何もフラワーズのような活動だけではない。
い。

各鎮守府で行われている演習や艦娘の紹介と言った内容もお茶の間に届けられている。

その中でも一際人気があるのがケツコンカッコカリ許可戦。

法に則り、墓場鎮守府の艦娘と対決する演習が予定されればさすがにテレビで特集が組まれるほど。

そしてその相手はいつだって天龍か夕立で。

その姿は幅広く世間に認知されていた。

ということを知ったのはつい最近。

無邪気に喜ぶ夕立とは対象的に顔を赤らめて小さくなっていた天龍の姿は必見と言えただろう。

「……頼むからその名前で呼ぶな」

「えー夕立、天眼もかつこいと思うっばい！」

項垂れながら吹雪に近づく天龍と、きやつきやと笑いながら夕立も
続いて。

「えと、あの、すいません！ 以後、気をつけます!!」

「あ？ あー……いや、まあ……おう、よろしく頼むわ」

「ふふっ、天龍にも見えないもの、あるっばい！ 私は夕立っ！ 赤鬼
さんでもいいっばい！ よろしくねっ！」

吹雪の手をブンブンと握って振る夕立と、苦笑いのまま挨拶をする
天龍。

手を離せばまじまじと繋いでいた手を眺める吹雪。

「出撃でしたか？」

「ああ、珍しく古鷹から救援要請だ。金剛さん達もいるのにな？ フ
フフ、楽しみだぜ」

「夕立も楽しみっばい！」

好戦的な笑顔を浮かべる二人に、吹雪はふと思う。

「救援要請……って、早く行かなきゃ駄目なんじゃっ!？」

「ん？ そうだな。んじゃ、さつきと行くか、夕立」

「りょーかいっぱい！ じゃ、またね！」

言葉とは裏腹に、のんびりと歩みを進める二人。

そんな姿をハラハラしながら、大丈夫なのかと心配そうに見送る吹雪。

「ご安心を。当鎮守府では絶対に破れない、破りたくないルールの下、色々な決まりがありますから」

「破りたくない、ルール、ですか？」

「それは是非提督から。あの様子を見るに救援要請も段階一……念の為程度のものでしよう、段階三程でしたらもつと素早いですから、さつきの姿からは想像もつかない程」

段階一は出撃した艦隊、誰か一人でも危険と感じたらいつでも救援できるように海で備えるもの。

鎮守府から最低二名の艦娘がそれに備える。

三人以上が危険と言えば二となり、一つの艦隊が備える。

段階三は戦闘前に全員の危険という感覚が一致したとき、すぐに一つの艦隊が合流に向かい連合艦隊となり対応する。

そして段階四は極めて緊急、鎮守府のその時持てる戦力全てで該当海域へ出撃する事になっている。

このシステムが考案されてから、元々少なかった被害は更に見られなくなり、また定めた第四段階は一度も発令されていない。

「そう、なんですすね」

「ましてやあのお二人……うちの鎮守府の最大最強と言っている戦力、問題ありません。さあ、それじゃあ食事にしましょうか」

「は、はい」

吹雪にしてみれば、それは慢心なのではとすら思える余裕ではあつた。

だが、龍鳳から出た瞬間、夕立と天龍は歩みを走りへと変え、慣れた手付きをより素早く、準備を整えた。

単純に、新人へと余計な心配をかけないようという配慮。

その時間を取り返すかのように、全力で出撃した。
二人の自分は新人を慮ることなどではない。
提督の意思と力。

それらを海に刻み、示し続けることなのだから。
それが二人の選んだ道。

提督に捧げる愛の形。

いずれ、その様を吹雪は見て、理解するだろう。

「ふふっ」

「え？ どうしましたか？」

その時、吹雪は何を思うのだろうか。

「いえ、楽しみだなと思ひまして」

「はい？」

吹雪の成長が、今から楽しみだと本人にわからないよう笑みを零した。

「いらつしやいー」

「すいません、緊急でもないのに」

「大丈夫よー？ それにもうちよつとしたら演習組が帰ってくるだろうし、逆にタイミング良かったわー」

「え……う？」

席に着けば水を運んできてくれた、一人の女性。

ひと目で分かる妊娠しているであろう大きなお腹を何処か庇うかのように。

「だ、大丈夫ですか!? に、妊婦さんがこんなことしてて!」

「あらー？ あなたが噂の新人さんねー？ 優しいのね、ありがとう。
でも大丈夫、安定期に入ったらちよつとは動かないと駄目だからー」

ふんわりと笑いながら言う女性。

そうは言われてもとまだ慌ててしまう吹雪を余所に、大淀は優しくな瞳をお腹へ移す。

「どうですか？ 最近の調子は」

「一時のつわりを考えたらねえ……動きにくいけど、随分マシよー。」

それに……」

そう言いながら、女性は、表情を変えてお腹を撫でる。

「最近、お腹をよく蹴られちゃうの。とん、つて。それがとっても幸せなのよ」

「ふふ、それは羨ましいことです。また、後学のためにも是非お伺いしたいですね」

二人して笑い合っている光景を吹雪は不思議に思う。

艦娘と一般人の距離が近くなったと言われて久しいが、これほどまでに親しげでいることがあるだろうか。

「あ、もしかして、あなたは……」

「うん？ ああ、そう、そうだよー。元、艦娘だよ」

正確に言えば、世界で初めて艦娘から人間となった存在。

人間になることが出来る。

それは特に波紋を生まなかった。

平たく言ってしまうえば人間になってどうするんだという思い。

人間になれば海で戦うことは出来なくなる。

それはアイデンティティとも言えることで、その先どうするのかなんて全く想像がつかなかったからだ。

確かに、今も尚、提督とのすれ違いで心を傷つけて解体という道を選ぶ艦娘は存在する。

そういった後ろ向きな思いに囚われて、解体を考えたことがある艦娘だって存在している。

だからこうして人間になった艦娘は極めて少ない。

だが。

「さ、触っていいですか？」

「お腹？ うん、いいよー」

吹雪も、想像でしかないが、解体を選ぶとすれば辛い思いからの選択だろうと考えていた。

現に、未だ一度も実戦を経験してないのにも関わらず、教官に解体をと相談した経験だってある。

やくたたず。

誰に言われたわけでもない、ただただ自分で自分の事をそう思っていた、いるから。

恐る恐る手を伸ばす吹雪に女性は笑う。

自分も、人間になってから初めて気づくことは多かった。

「あ……」

「うふふ、赤ちゃんも、こんにちはだつて」

触れた手のひらに伝わった小さな衝撃。

衝撃が伝えた幸せという確かな力。

幸せを守りたいといつかの彼女は言った。

そしてそれは戦うことだけで守られるものではないと思ひ立った。

だから、彼女は人間になった。

「さて、それじゃあそろそろご注文をどうぞ？」

「あ、じゃあ私は日替わりで」

「……私も、それをお願いします」

はあいと返事をして女性は伝票をカウンターに持っていく。

「日替わりだどっ!? ふふふ、ついにこの磯風の腕を……」

「はいはい、磯風さんは盛り付けだけお願いしますね」

「んなっ!?! 何故だっ!?!」

厨房から聞こえる賑やかな声。

今も尚、押し返した手のひらを眺める吹雪。

「私も、あんな風に笑えるのでしょうか。あんな幸せそうに笑っている人を、守れるのでしょうか」

初めて感じた、守らなければ、守りたいという想い。

形作られてはいるが、まだ世界へ出てきていない小さな小さな命。

誰かが守らなければ、簡単に消え去ってしまうだろうそれ。

「守りたい、な……」

理屈じゃなく、考えたことでもなく。

吹雪はそう思った。

「だから何で君はそう無茶をするのかな！ 司令長官が海に出るなんて——」

「はいはい、すいませんでしたー」

「ああもうっ！ 聞いているのかい!？」

「反省してまーす。あ、それだけ？ じゃ、どうぞ？ おーい」

「あ、ちよっ!? あーもうっ！ また来るからね!!」

廊下に聞こえてきた声。

そして部屋から追い出されるように出てきたのは。

「げ、元帥閣下っ!？」

「全く……ん？ ああ、そっか、それでか……」

慌てて敬礼をする吹雪と、微笑みながら敬礼をする大淀。

二人の姿を認めて咳払いを一つした後、答礼を返す元帥。

「お疲れさまです、元帥」

「君にそう呼ばれるのは未だに慣れないね。だけど、久しぶり、大淀」

二人の間柄がいまいちよくわからず困惑する吹雪を余所に会話は弾む。

「君からも彼に言ってくれないか？ 父さんと母さんも心配してるし、いい加減無茶はやめろって」

「私がどちらの味方をするかなんて聞くまでもないでしょう？ それでこそ提督ですから。それに、兄としてと言えばきつと言うことを聞いてくれるって分かってるのでは？」

「うぐっ……」

大淀の言葉に鋭いと胸を抑える元帥は苦笑い。

現司令長官……提督は、名実ともに大きな権力を手に入れた。

元高名な海軍大将の息子、そして現元帥の弟。

血の繋がった絆ではないが、それは確かに強力で。

「そ、それにしても悪かったね吹雪君。会議を長引かせてしまった」

「い、いえっ！ とんでもありませんー!」

兄の言うことを聞かない弟ではない。

仕事だから、私事を持ち込まないようになっているだけの話。

家族にだけは弱い提督だからということとは元帥、艦娘共に周知のこと。とで。

それを利用しないのは新しく出来た家族に戸惑っているのか、それ

ともやっぱりそうだからこそあの提督だと認めているのか。

旗色が悪いと感じた元帥は吹雪へと水を向ける。

そんな元帥へと小さく笑う大淀を気にしないように。

「彼は……僕が知る限りでは、最高の提督だ。ちよつと向こう見ずでお調子者だけど……それでも」

「は、はい……」

「きつと今感じている据わりが悪い……それすら解消してくれるって、僕は確信している。これから、頑張つてね」

そう言つて吹雪の肩を一度叩き、元帥はその場を後にした。

「大淀さん……」

「はい、どうされましたか？」

最高の提督。

その言葉が吹雪の頭を駆け巡る。

「私、本当にここへ着任していいのでしょうか」

最高の提督の下で働く最低の艦娘。

それでいいのだろうか。

「私より優秀な人は、いっぱいいました。それこそ同期から、長門教官や、陸奥教官がずっと褒めちぎり続けるような艦娘、最高の提督にふさわしいと思える艦娘なんて、山程」

吹雪は、思う。

提督の歩みを、自分如きで煩わせてはいけないと。

自信。

そんなもの欠片も存在しない。

そんな吹雪だから。

「提督、よろしいですか？」

「おう、大丈夫だ」

「ええええええええ!!」

そんな吹雪をさくつと無視して大淀は執務室のドアをノックした。

「ちよ、ちよつと大淀さんっ!!」

「吹雪さん」

——提督の前で、そう言えるなら言ってみてください。

そう笑って、大淀はドアを指す。

「此処から先の案内は、秘書官へと変わります。……私は、吹雪さんと共に海で戦えること、楽しみにしていますよ」

「ひしょ、かんって……え？　ちよつと、置いていかないで下さい!？」

去っていく大淀は一度も振り返らず。

去り際に見せた笑顔だけを吹雪の心に残して。

「い、いか、なきや……」

ここで逃げるなんて失礼は出来ない。

「そ、そうよ、挨拶だけしてごめんなさいって言えば……」

あくまでも着任するかどうかは艦娘に委ねられている部分が大きい。

鎮守府側が、その提督がどれほど望んでも、最終的な決定は艦娘が出来る。

「な、なら、大丈夫……い、行こう、行くのよ、吹雪」

簡単な話だ。

こんにちは、ごめんなさい。

それだけでいい。

だから。

「よく来てくれたな、吹雪」

「」

一歩踏み出しドアを開けた。

そして考えていた言葉を全て失った。

椅子に座りながら優しい顔を覗かせる提督らしき人間。

その隣で柔らかい笑顔を向けてくる人間。

その左手薬指に鎮座した輝きは、ここで出会った人、艦娘、全てが所持している。

——ああ、この提督と……海を征きたい。

理由なんてない。

あえて言うなら、目の前にいる二人。

二人の間には深い、深い絆を感じた。

きつと、この二人だけに限らず、この提督はここにいる全ての存在と、強い絆を育んでいるんだろう。

その絆を自分も、目の前の人と結びたい。

そう思った、そう出来ると根拠なく理解できた。

だから。

「特型駆逐艦の一番艦、吹雪ですっ！ よろしくおねがいますっ！」

二周日提督がハードモード鎮守府に着任しました 了